都市計画道錦町国分寺綾南線改良事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

松並・中所遺跡

2000.12

香川県教育委員会

財団法人　香川県埋蔵文化財調査センター

序　　文

香川県教育委員会では，四国横断自動車道や高松東道路の建設，高松空港跡地の整備など，大規模開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査と出土文化財の整理研究・報告書刊行の業務を，財団法人香川県埋蔵文化財調査センターに委託して実施いたしております。

このたび，「都市計画道路錦町国分寺綾南線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」として刊行いたしますのは，平成９・10年度に調査を実施しました高松市松並町ほかに所在する松並・中所遺跡についてであります。

この遺跡の調査では，弥生時代の竪穴住居跡・溝，鎌倉時代の掘立柱建物跡・屋敷地を区画する溝などを検出しております。なかでも，竪穴住居跡の床面に形や用途の異なる炉跡が確認でき，本県での新しい知見となりました。

本報告書が本県の歴史研究の資料として広く活用されますとともに，埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが，発掘調査から出土文化財の整理・報告にいたるまでの間，香川県土木部高松土木事務所及び関係諸機関並びに地元関係各位に多大の御協力と御指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに，今後ともよろしく御支援賜りますようお願い申し上げます。

平成12年12月

香川県教育委員会

教育長　折　原　　守

例　　言

1．本報告書は，都市計画道錦町国分寺綾南線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告で，香川県高松市松並町・西ハゼ町に所在する松並・中所遺跡（まつなみ・なかしょいせき）の報告を収録した。

2．発掘調査は，香川県教育委員会から委託され，香川県教育委員会が調査主体，財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。

3．発掘調査は，平成９年10月１日～平成10年３月31日と平成10年８月１日～平成11年１月31日の２カ年に渡り実施した。発掘調査の担当は以下のとおりである。

平成９年度

期間　平成９年10月１日～平成10年３月31日

担当　佐々木正之　松本和彦　滝井理加

平成10年度

期間　平成10年８月１日～平成11年１月31日

担当　長元茂樹　松本和彦　陶山仁美

4．調査にあたって，下記の関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同，敬称略）

香川県土木部都市計画課，香川県高松土木事務所都市整備課，高松市教育委員会，高松市都市開発部都市計画課，各地元自治会，各地元水利組合

5．本書の作成は，財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。

本報告書の執筆，編集は松本和彦が担当した。

6．報告書の作成にあたっては，下記の方々のご教示を得た。記して謝意を表したい。（順不同，敬称略）

大久保徹也，大嶋和則，山崎敏昭，山下史郎

7．本報告書で用いる方位の北は，国土座標系第Ⅳ系の北であり，標高はＴ．Ｐ．を基準としている。また，遺構は下記の略号により表示している。

ＳＡ　柵列	ＳＢ　掘立柱建物跡	ＳＤ　溝状遺構
ＳＨ　竪穴住居跡	ＳＫ　土坑	ＳＰ　柱穴
ＳＲ　自然河川	ＳＸ　不明遺構	

8．挿図の一部に建設省国土地理院作成の１／25，000地形図「高松南部」・「高松北部」，１／5,000国土基本図「Ⅳ－ＦＦ－01・02・11・12」，高松都市計画図１／２,500「峰山」「西春日」を用いた。

9．石器実測図中の網目は摩滅痕を，輪郭線の周りの点線は潰れ痕，実線は摩滅痕及び研磨痕，多数の点による表現は自然面を，黒塗りは現代の破片をそれぞれ表す。

10．土器観察表の色調の表現は，農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖　1994年度版』に準拠した。

本 文 目 次

序文

例言

第１章　調査の経緯と経過 …… 1

第１節　調査に至る経緯 …… 1

第２節　調査の経過 …… 1

１．調査の経過 …… 1

２．発掘調査及び整理作業の体制 …… 2

第２章　遺跡の立地と環境 …… 4

第１節　地理的環境 …… 4

第２節　歴史的環境 …… 8

第３章　調査の成果 …… 14

第１節　調 査 区 …… 14

第２節　層　　序 …… 15

第３節　遺構，遺物 …… 23

１．弥生時代前期～中期 …… 23

２．中世前半 …… 56

３．近　　世 …… 98

第４章　自然科学的調査の結果 …… 102

第１節　松並中所遺跡花粉分析及びプラントオパール分析 …… 102

第５章　ま と め …… 110

第１節　Ⅳ区ＤＳＤ02について …… 110

第２節　遺構の変遷 …… 112

第３節　松並中所遺跡竪穴住居について …… 118

第４節　Ⅲ区Ｂ・ＣＳＤ01出土遺物組成について …… 134

柱穴一覧表 …… 141

土器観察表 …… 147

石器観察表 …… 165

写真図版

報告書抄録

付図　４枚

挿 図 目 次

第１図　遺跡位置図１（Ｓ＝１／50,000）
第２図　遺跡位置図２（Ｓ＝１／2,500）
第３図　高松平野地形分類図（高橋1992より抜粋，一部加筆）
第４図　周辺の遺跡地図（Ｓ＝１／25,000）
第５図　松並・中所遺跡調査区割及びグリット図
第６図　松並・中所遺跡基本層序模式図
第７図　土層断面図１
第８図　土層断面図２
第９図　松並・中所遺跡弥生時代遺構分布図
第10図　Ⅳ区ＤＳＨ01平・断面図
第11図　Ⅳ区ＤＳＨ01床面遺物出土状況図
第12図　Ⅳ区ＤＳＨ01出土遺物１
第13図　Ⅳ区ＤＳＨ01出土遺物２
第14図　Ⅳ区ＣＳＸ05・06平・断面図
第15図　Ⅳ区ＤＳＸ01平・断面図
第16図　Ⅳ区ＤＳＸ01出土遺物
第17図　Ⅳ区ＤＳＸ02平・断面図，出土遺物
第18図　Ⅳ区ＤＳＸ03平・断面図，出土遺物
第19図　Ⅴ区ＳＨ01，ＳＫ06平・断面図，出土遺物
第20図　Ⅴ区ＳＸ01平・断面図
第21図　Ⅴ区ＳＸ01出土遺物
第22図　Ⅴ区ＳＸ02平・断面図
第23図　Ⅴ区ＳＫ07平・断面図，出土遺物
第24図　Ⅴ区ＳＫ10平・断面図，出土遺物
第25図　柱穴出土遺物１
第26図　Ⅳ区ＤＳＸ05平・断面図，出土遺物
第27図　Ⅳ区ＤＳＤ02断面図，遺物出土状況図，上層出土石材エレベーション図
第28図　Ⅳ区ＤＳＤ02出土遺物
第29図　松並・中所遺跡周辺河川想定図
第30図　Ⅳ区ＣＳＲ01断面図，Ⅳ区Ｃ西壁面図
第31図　Ⅳ区ＣＳＲ01出土遺物１（上・中層）
第32図　Ⅳ区ＣＳＲ01出土遺物２（下層）
第33図　Ⅳ区ＣＳＲ01出土遺物３（層位不明）
第34図　Ⅳ区Ａ南壁面図
第35図　Ⅶ区ＡＳＲ01断面図
第36図　Ⅶ区ＡＳＲ01出土遺物
第37図　Ⅶ区ＢＳＲ03断面図
第38図　Ⅶ区ＢＳＲ03出土遺物
第39図　包含層他出土遺物
第40図　Ⅲ区ＣＳＺ01断面図
第41図　Ⅱ区ＡＳＢ01平・断面図，出土遺物
第42図　Ⅱ区ＢＳＢ01平・断面図
第43図　Ⅱ区ＢＳＢ02平・断面図
第44図　Ⅲ区ＡＳＢ01平・断面図，出土遺物
第45図　Ⅶ区ＡＳＢ01・02平断面図，Ⅶ区ＡＳＰ26遺物出土状況図
第46図　Ⅶ区ＡＳＢ01出土遺物
第47図　Ⅱ区ＡＳＫ04平・断面図，出土遺物
第48図　Ⅱ区ＡＳＫ07平・断面図，出土遺物
第49図　Ⅱ区ＡＳＫ08平・断面図，出土遺物
第50図　Ⅱ区ＡＳＫ09平・断面図，出土遺物
第51図　Ⅱ区ＡＳＫ11平・断面図，出土遺物
第52図　Ⅱ区ＡＳＫ12平・断面図，出土遺物
第53図　Ⅱ区ＢＳＫ01平・断面図，出土遺物
第54図　Ⅱ区ＢＳＫ03平・断面図，出土遺物
第55図　Ⅱ区ＢＳＫ05平・断面図，出土遺物
第56図　Ⅱ区ＢＳＫ06平・断面図，出土遺物
第57図　Ⅱ区ＣＳＫ01平・断面図，出土遺物
第58図　Ⅲ区Ｃ第１面ＳＫ01平・断面図，出土遺物
第59図　Ⅲ区Ｃ第１面ＳＫ02・04平・断面図，出土遺物
第60図　Ⅲ区Ｃ第１面ＳＫ05平・断面図，出土遺物
第61図　Ⅲ区Ｃ第１面ＳＫ08平・断面図，出土遺物
第62図　Ⅲ区Ｃ第１面ＳＫ09平・断面図，出土遺物
第63図　Ⅲ区Ｃ第１面ＳＫ11平・断面図，出土遺物
第64図　Ⅶ区ＡＳＫ02平・断面図，出土遺物
第65図　Ⅶ区ＡＳＫ08平・断面図，出土遺物
第66図　Ⅱ区ＡＳＤ01断面図，出土遺物
第67図　Ⅱ区ＡＳＤ02断面図，出土遺物
第68図　Ⅱ区ＡＳＤ03断面図，出土遺物
第69図　Ⅱ区ＡＳＤ05断面図，出土遺物
第70図　Ⅱ区ＢＳＤ01断面図，出土遺物

第71図　Ⅱ区ＣＳＤ03断面図，出土遺物
第72図　Ⅲ区ＢＳＤ02断面図，出土遺物
第73図　Ⅲ区Ｂ・Ｃ第１面ＳＤ01断面図
第74図　Ⅲ区Ｂ・Ｃ第１面ＳＤ01出土遺物１
第75図　Ⅲ区Ｂ・Ｃ第１面ＳＤ01出土遺物２
第76図　Ⅲ区Ｃ第１面ＳＤ04断面図
第77図　Ⅲ区Ｃ第１面ＳＤ04出土遺物
第78図　Ⅲ区Ｃ第２面ＳＤ08断面図，出土遺物
第79図　Ⅳ区ＢＳＤ05平・断面図，出土遺物
第80図　Ⅱ区ＡＳＸ01平・断面図，出土遺物
第81図　Ⅱ区ＢＳＸ01平・断面図，出土遺物
第82図　Ⅱ区ＢＳＸ04平・断面図，出土状況図，出土遺物
第83図　Ⅲ区Ｃ第２面ＳＸ03平・断面図，出土遺物
第84図　Ⅲ区ＣＳＲ02断面図，出土遺物
第85図　柱穴出土遺物２
第86図　柱穴出土遺物３
第87図　遺構面直上包含層出土遺物
第88図　Ⅲ区Ｂ・Ｃ第１面整地土出土遺物１
第89図　Ⅲ区Ｂ・Ｃ第１面整地土出土遺物２
第90図　精査中遺物
第91図　側溝出土遺物
第92図　Ⅱ区ＢＳＫ02平・断面図，出土遺物
第93図　Ⅱ区ＢＳＫ09平・断面図，出土遺物
第94図　Ⅳ区ＡＳＤ01～03，Ⅳ区ＣＳＤ01断面図
第95図　Ⅳ区ＡＳＤ01・02，Ⅳ区ＢＳＤ01～03，Ⅳ区Ｃ・Ｄ・Ⅴ区ＳＤ01出土遺物
第96図　松並・中所遺跡におけるプラント・オパール分析結果
第97図　松並・中所遺跡弥生Ⅰ期遺構配置図
第98図　松並・中所遺跡遺構変遷図１
第99図　松並・中所遺跡遺構変遷図２
第100図　床面積変遷図
第101図　床面積と主柱穴本数の相関図
第102図　讃岐地方弥生時代中期竪穴住居分類図１
第103図　讃岐地方弥生時代中期竪穴住居分類図２
第104図　讃岐地方弥生時代中期竪穴住居分類図３
第105図　讃岐地方弥生時代中期竪穴住居分類図４
第106図　中央土坑分類模式図
第107図　中央土坑分類図

表　目　次

第１表　発掘調査及び整理作業の体制
第２表　周辺の遺跡一覧表
第３表　松並・中所遺跡ピット類型表
第４表　松並・中所遺跡における花粉分析結果
第５表　香川県，松並・中所遺跡のプラント・オパール分析結果
第６表　弥生時代中期中葉における竪穴住居平面形態分類と主柱穴配置の相関表１
第７表　弥生時代中期後葉における竪穴住居平面形態分類と主柱穴配置に相関表２
第８表　讃岐地方における２基の中央土坑(炉跡)を有する竪穴住居一覧
第９表　讃岐地方弥生時代中期竪穴住居一覧１
第10表　讃岐地方弥生時代中期竪穴住居一覧２
第11表　松並・中所遺跡Ⅲ区Ｂ・ＣＳＤ01出土遺物組成表１
第12表　松並・中所遺跡Ⅲ区Ｂ・ＣＳＤ01出土遺物組成表２
第13表　柱穴一覧１
第14表　柱穴一覧２
第15表　柱穴一覧３
第16表　柱穴一覧４
第17表　柱穴一覧５
土器観察表
石器観察表

図 版 目 次

写真１　松並・中所遺跡の花粉・胞子

図版１　松並・中所遺跡遠景

（南より，背後に石清尾山山塊を望む）

松並・中所遺跡遠景（東より）

図版２　Ⅱ区Ａ全景（北より）

Ⅱ区Ｂ全景（北より）

図版３　Ⅲ区Ｂ全景（北より，ＳＤ01屈曲部分）

Ⅲ区Ｃ第１面全景（南より）

図版４　Ⅲ区Ｃ第１面全景（西より）

Ⅲ区Ｃ全景（南より，ＳＺ01の北遺構面）

図版５　Ⅳ区Ａ全景（北より）

Ⅳ区Ｃ・Ｄ全景（南より，手前ＳＲ01）

図版６　Ⅳ区Ｄと鶴尾神社４号墳（南東より）

Ⅳ区Ｄ全景（南より）

図版７　Ⅴ区全景（北より）

Ⅵ区Ａ全景（北西より）

図版８　Ⅶ区Ａ・ＳＲ01全景（北東より）

Ⅶ区Ｂ・ＳＲ03全景（北西より）

図版９　Ⅳ区ＤＳＨ01完掘全景（東より）

Ⅳ区ＤＳＨ01貼床除去後（東より）

図版10　Ⅳ区ＤＳＨ01遺物出土状況（北東より，報文番号15）

Ⅳ区ＤＳＨ01－ＳＫ01断面（南西より）

図版11　Ⅳ区ＤＳＸ01完掘全景（南西より）

Ⅳ区ＤＳＸ02・03完掘全景（南より）

図版12　Ⅳ区ＤＳＸ05完掘全景（西より）

Ⅳ区ＤＳＤ02完掘全景（東より）

図版13　Ⅳ区ＤＳＤ02上層遺物出土状況（西より）

Ⅳ区ＤＳＤ02Ｂ－Ｂ'断面（西より）

図版14　Ⅴ区ＳＸ01完掘全景（東より）

Ⅶ区ＳＲ01完掘全景（北東より）

図版15　Ⅳ区ＣＳＲ01完掘全景

（東より，手前Ⅳ区ＣＳＸ05・06）

Ⅳ区ＣＳＲ01断面（南より）

図版16　Ⅲ区ＡＳＢ01全景（北より）

Ⅲ区ＡＳＢ01－ＳＰ15断面（西より）

図版17　Ⅶ区ＡＳＢ01・02完掘全景（北より）

Ⅶ区ＡＳＢ01－ＳＰ26遺物出土状況（北東より）

図版18　Ⅱ区ＢＳＫ01断面（東より）

Ⅲ区Ｃ第１面ＳＫ08断面（東より）

図版19　Ⅲ区ＢＳＤ01Ａ－Ａ'断面（東より）

Ⅳ区ＢＳＤ05全景（南西より）

図版20　Ⅱ区ＢＳＸ04全景（南東より）

Ⅱ区ＢＳＸ04遺物出土状況（南東より）

図版21　Ⅲ区ＣＳＺ01全景（南西より）

Ⅳ区Ｄ液状化現象（東より，手前Ⅳ区ＤＳＸ01）

図版22　Ⅳ区ＤＳＨ01上層出土土器

図版23　Ⅳ区ＤＳＨ01下層・床面直上出土土器

図版24　Ⅳ区ＤＳＨ01出土土器・石器

図版25　Ⅳ区ＤＳＸ01出土遺物（37・40）

Ⅳ区ＤＳＸ02出土土器（41・42）

Ⅴ区ＳＨ01－ＳＫ06出土土器（47）

Ⅳ区ＤＳＸ05出土土器（63）

図版26　Ⅴ区ＳＸ01出土土器（48～55）

Ⅳ区ＤＳＤ02出土土器（壷，66～71）

図版27　Ⅳ区ＤＳＤ02出土土器（甕，73～77）

Ⅳ区ＤＳＤ02出土遺物

図版28　Ⅳ区ＣＳＲ01上層出土土器

Ⅳ区ＣＳＲ01中層出土土器１

図版29　Ⅳ区ＣＳＲ01上層出土土器（87～89）

Ⅳ区ＣＳＲ01中層出土土器（100・106）

Ⅳ区ＣＳＲ01中層出土土器２

図版30　Ⅳ区ＣＳＲ01下層出土土器

図版31　Ⅳ区ＣＳＲ01下層出土石器

Ⅳ区ＣＳＲ01出土層位不明土器（129）

Ⅶ区ＡＳＲ01出土石器（145）

Ⅳ区ＣＳＲ01出土層位不明石器（135）

Ⅴ区遺構面精査中石器（154）

図版32　Ⅶ区ＢＳＢ01・ＳＰ26出土土器（160・161）

Ⅱ区ＡＳＫ07出土土器（168）

Ⅱ区ＢＳＫ01出土土器（176・177・180～181）

Ⅱ区ＢＳＫ06出土土器１（187）

Ⅱ区ＢＳＫ01出土土器２（189）

図版33　Ⅲ区B・CSD01出土土器1(小皿)
Ⅲ区B・CSD01出土土器2(小皿底部)
図版34　Ⅲ区B・CSD01出土土器3(土師質土器椀)
Ⅲ区B・CSD01出土土器4(土師質土器・底部)
図版35　Ⅲ区B・CSD01出土土器5(257)
Ⅲ区B・CSD01出土土器6(259)
Ⅲ区B・CSD01出土土器7(261)
Ⅲ区B・CSD01出土土器8(267)
Ⅲ区B・CSD01出土土器9(268)
Ⅲ区B・CSD01出土土器10(磁器類,276～279)
図版36　Ⅲ区B・CSD01出土土器11
(須恵器鉢,280・282・284)
Ⅲ区B・CSD01出土土器12(285)
Ⅲ区B・CSD01出土土器13(272)
Ⅲ区B・CSD01出土土器14(東播系捏鉢,296・297)
Ⅲ区B・CSD01出土土器15(295)
Ⅲ区B・CSD01出土土器16(301)
Ⅲ区C第2面SD08出土土器(317)
図版37　Ⅳ区BSD05出土土器1(319)
Ⅳ区BSD05出土土器2(320)
Ⅱ区BSX04出土土器1(330)
Ⅱ区BSX04出土土器2(332)
図版38　Ⅲ区C第2面SX03出土土器1(334・338)
Ⅲ区C第2面SX03出土土器2(342)
Ⅱ区ASP45出土土器(351)
Ⅲ区B・CSD01出土土器(230)
Ⅱ区BSP25出土土器(356)
Ⅱ区BSP31出土土器(357)
Ⅱ区BSP132出土土器(362)
図版39　Ⅲ区BSP14出土土器(364)
Ⅲ区C第1面SP02出土土器(369)
Ⅲ区C第1面SP06出土土器(371)
Ⅲ区C第1面SP09出土土器1(380)
Ⅲ区C第1面SP09出土土器2(382)
Ⅲ区C第1面SP65出土土器(403)
Ⅲ区C第1面SP79出土土器(405)
図版40　Ⅲ区C第1面SP09出土土器(406)
Ⅶ区ASP45出土土器(417)
遺構面上層包含層出土遺物(434・435・455)
Ⅲ区C第1面整地土出土遺物(480・496)
図版41　Ⅲ区C第1面整地土出土遺物(495・505)
遺構面精査中出土遺物(509・518・540・541)

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

香川県土木部都市計画課は，国道11号から栗林トンネルを抜け，高松市内に向かう幹線道路である都市計画道路錦町国分寺綾南線の渋滞緩和策として，同路線の改良工事を計画した。平成７年10月，都市計画課よりその改良工事に係わる埋蔵文化財包蔵に関する事業照会があり，香川県教育委員会は，同年11月に試掘調査，平成８年に同事業に伴う官民境界水路設置に伴う工事立会を行い，新たな遺跡の所在を確認し，周辺の小字から「松並・中所遺跡」と命名した。遺跡の広がりにつては，試掘結果に加え，高松市教育委員会が実施した市道木太鬼無線の試掘調査データを基にして，保護措置の必要な範囲を確定した。

以上の結果に基づき，香川県教育委員会は財団法人香川県埋蔵文化財調査センターとの間で協議し，平成９年４月１日付けで「埋蔵文化財委託契約」を締結し，平成９年10月より，財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として調査を実施した。さらにその翌年，残地部分に関して，平成10年４月１日付けで「埋蔵文化財委託契約」を締結し，平成10年８月～平成11年１月まで，同センターが調査担当として調査を実施した。

松並・中所遺跡関連既存報告

大嶋和則1999「西ハゼ土居遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報　平成９年度』　香川県教育委員会

大嶋和則2000「西ハゼ土居遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報　平成10年度』　香川県教育委員会

佐々木正之・松本和彦1998『都市計画道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成９年度　松並・中所遺跡』香川県教育委員会他

塩崎誠司1995「川東高松線（都市計画道路錦町国分寺線）」『埋蔵文化財試掘調査報告Ⅸ』

塩崎誠司1996「松並・中所遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報　平成７年度』香川県教育委員会

長元茂樹・松本和彦1999『都市計画道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成10年度　松並・中所遺跡』香川県教育委員会他

山元敏裕1997「西ハゼ土居遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報　平成８年度』香川県教育委員会

第２節　調査の経過

１．調査の経過

発掘調査は，平成９・10年度の２ヶ年に渡り実施し，総面積は4,050㎡を測る。

平成９年度はⅠ区～Ⅳ区Ｂまでの調査を行った。

発掘調査は10月より着工し，全体を三工程に分け，第一工程でⅡ区Ｂ・Ⅲ区Ｂ・Ⅳ区Ａ，第二工程でⅡ区Ｃ・Ⅲ区Ａ・Ⅲ区Ｃ，最終工程でⅠ区・Ⅱ区Ａ・Ⅳ区Ｂの調査をそれぞれ実施し，平成10年３月に終了した。調査面積は2,300㎡を測る。平成10年度も昨年度同様の調査方法を採り，Ⅳ区Ｃ～Ⅶ区Ｂまで，面積にして1,740㎡の調査を行った。調査は平成10年８月から開始し，全体を三工程に分けて実施した。第一工程ではⅤ区・Ⅶ区Ｂ，第二工程ではⅣ区Ｄ・Ⅵ区，最終工程ではⅣ区Ｃ・Ⅶ区Ａの調査をそれぞれ行い，平成11年１月に終了した。

整理調査は，平成12年４月１日に開始し，７月31日に終了した。

2．発掘調査及び整理作業の体制

発掘調査および整理調査の体制は，第１表のとおりである。

香川県教育委員会文化行政課			
	平成９年度	平成10年度	平成12年度
総括	課長　菅原良弘	課長　小原克己	課長　小原克己
	課長補佐　北原和利	課長補佐　北原和利	課長補佐　小国史郎
	副主幹　渡部明夫	副主幹　渡部明夫	副主幹　廣瀬常雄
総務	係長　山崎　隆	係長　山崎　隆(～5.31)	係長　中村禎伸
	主査　星加宏明(～5.31)	係長　中村禎伸(6.1～)	主査　三宅陽子
	主査　松村崇史(6.1～)	主査　三宅陽子(6.1～)	主事　亀田幸一
	主事　打越和美	主査　松村崇史	
		主事　打越和美(～5.31)	
埋蔵文化財	文化財専門員　木下晴一	係長　西村尋文	係長　西岡達哉
	技師　塩崎誠司	文化財専門員　森　格也	文化財専門員　森格也
		主任技師　塩崎誠司	文化財専門員　宮崎哲治
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター			
総括	所長　大森忠彦	所長　菅原良弘	所長　菅原良弘
	次長　小野善範	次長　小野善範	次長　川原裕章
総務	参事　別枝義昭	参事　別枝義昭	副主幹　六車正憲
	副主幹　田中秀文(6.1～)	副主幹兼係長　田中秀文	副主幹　大西誠治
	係長　前田和也(～5.31)	係長　新　一郎	係長　新　一郎
	主事　細川信哉	主事　細川信哉	主査　山本和代
			主任主事　高木康晴
調査	参事　近藤和史	参事　長尾重盛	主任文化財専門員　大山眞充
	主任文化財専門員　大山眞充	主任文化財専門員　廣瀬常雄	文化財専門員　木下晴一
	主任文化財専門員　藤好史郎	主任文化財専門員　長元茂樹	主任技師　松本和彦
	文化財専門員　西村尋文	技師　松本和彦	
	主任技師　佐々木正之	調査技術員　陶山仁美	
	技師　松本和彦		
	調査技術員　滝井理加		

第１表　発掘調査および整理調査の体制

平成９年度調査に携わった方々は以下のとおりである。

現場整理作業員　小笠原千恵子

普通作業員　松本康弘，景山弘，竹井康弘，杉山周二，長町志朗，柏原法雄

軽作業員　伊賀悦子，西村和代，町川充子，西崎文子，真鍋恵子，田中由美，大西トク子，大林美和子，松本悦子，井下美佐子，井下ミチ子，中原トヨ子，岡シズエ，穴吹

みどり

平成10年度調査に携わった方々は以下のとおりである。

現場整理作業員　山本明美

普通作業員　黒田修，森澤明義，川野清，川原武夫，上枝貞義

軽作業員　櫛田英子，川野弘子，村川充子，遠藤トミ子，古川静子，鎌田敏子，酒井俊子，村尾マサエ，中山美智子，川田安子，十河美枝子

整理調査（平成12年度）の調査に携わった方々は以下のとおりである。

整理員　山地真理子

整理補助員　長谷川郁子，前田好美

整理作業員　真鍋穂，溝渕さや香，坂川弘実

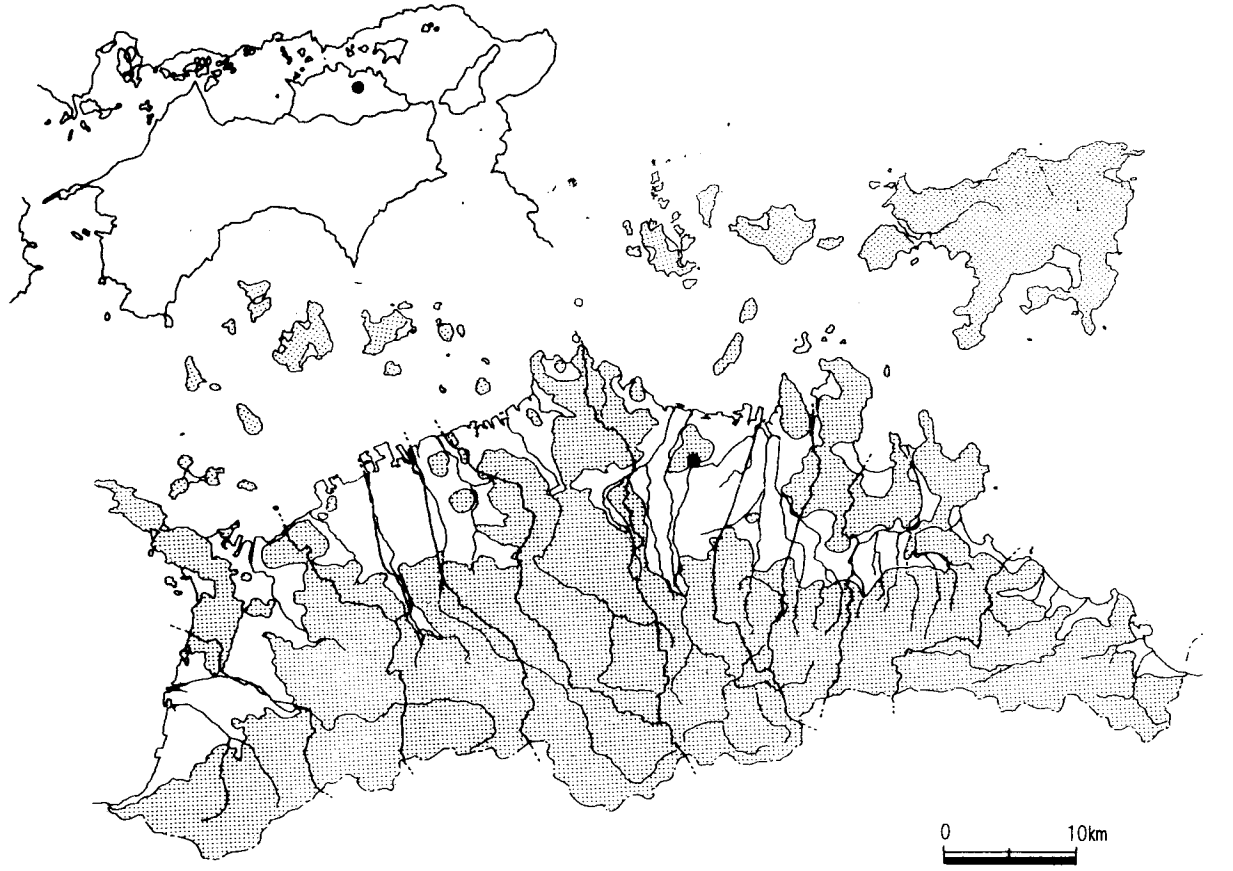
第２章　遺跡の立地と環境

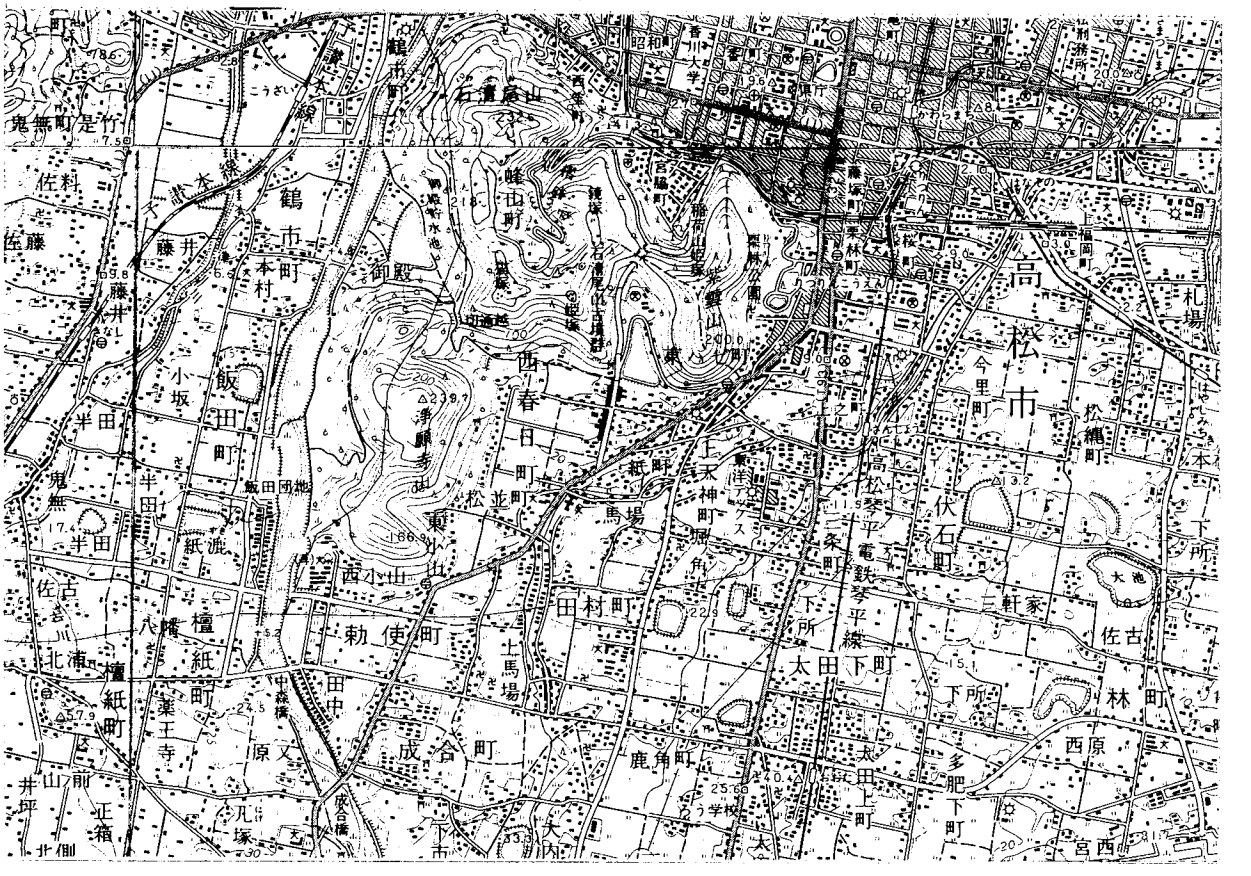
第１節　地理的環境

松並・中所遺跡は高松平野の北部に位置し，北方および西方には標高200m前後の室山・峰山・浄願寺山等からなる石清尾山塊が取り巻くように所在する。紫雲山北方ないし西方は標高３m前後を測る大規模な人工改変地であり，弥生時代前後には三角州帯であったと思われる。南方には香東川を中心とした各河川の堆積作用により形成された高松平野が広く展開する。香東川は17世紀初頭（生駒期）に現流路に固定される以前は，平野中央部では北流するが，浄願寺山南方において北東方向へ湾曲し御坊川，詰田川を中心とした流路と現香東川へ至る流路に分岐していた。前者がその主流路をなし，香東川の主流路痕跡ないし氾濫原が，条里型地割の乱れとなり明瞭に識別できる。高橋学氏によると（第３図），弥生時代中期前半以前には旧河道Ａが香東川の主流路であったが，後期以降はその機能をほぼ停止しており，旧河道Ｂに主流路が変化したと想定されている（高橋1992）。一方，佐藤氏は香東川旧河道の主流路の変化は大局的には支持されるが，周辺調査の成果からその変化は極めて漸移的であり，旧河道Ｂの機能停止，平準化を13世紀と想定している。加えて香東川旧河道として，現御坊川とほぼ一致する流路（旧河道Ｃ）についても言及し，現御坊川と同じ流路と紫雲山山裾を取り巻くように流れる現摺鉢谷川流路の２者に大きく分かれ，上天神遺跡，当遺跡における旧河道Ｃの最東端流路，最西端流路の確認例から，東の流路が次第に固定化に向かったと推測している（佐藤2000）。

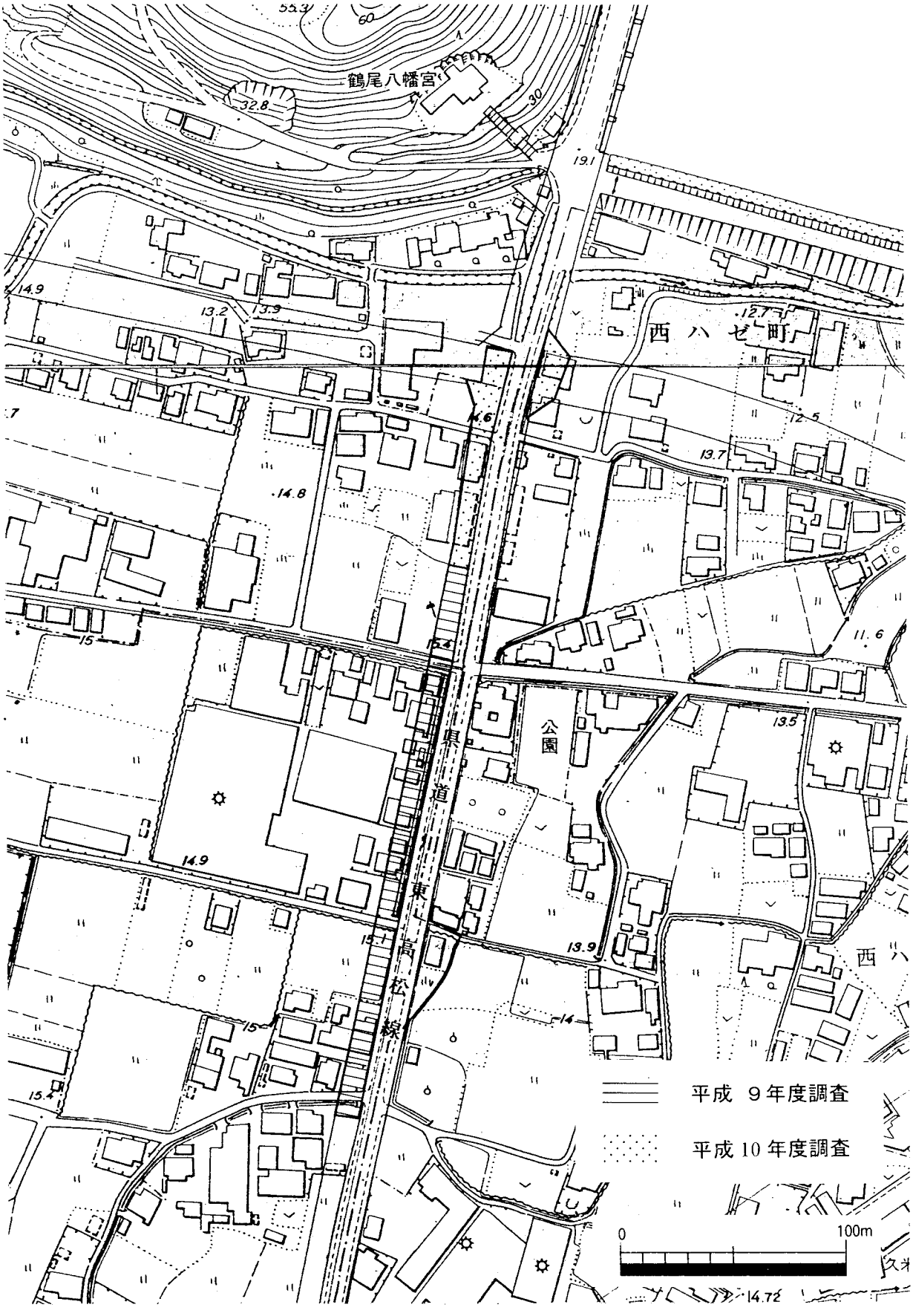
これらのデータに今回の調査成果を重ね合わすと，松並・中所遺跡は弥生時代には旧香東川（旧河道Ｃ）のうち最も西側の流路に隣接し，この流路は弥生時代前期～中期にかけて埋積が進み，機能を停止している。その後，古代末に生じた段丘化による地下水位の低下等の影響で，旧河道Ｃは規模を縮小し，古代～中世前半段階には安定した土地条件であったと考えられる。しかし，近世には再び流水を開始し，現地表面に残る条里型地割の乱れ等の痕跡が示す大規模な氾濫原が広がっている。その開始時期は，西ハゼ土居遺跡で旧河道Ｃの三角州帯上に営まれた16世紀末～17世紀初頭の屋敷地の確認例があり，少なくとも17世紀初頭以降になる。当遺跡では最南端の調査区であるＩ区がこの旧河道氾濫原に一部含まれ，12世紀後半～13世紀前半の遺構検出面，包含層を削り取る状況でその痕跡を検出している。また，北端の調査区であるⅥ区の北方約50mには峰山山裾が迫っており，その山裾を，元来は切通峠に端を発するであろう清水川という小規模な水路が走っている。

なお，現地表面の標高はⅢ区Ｃでは約14.5mを測るが，近現代の顕著な造成土を除くと，その標高は約13.7m前後である。

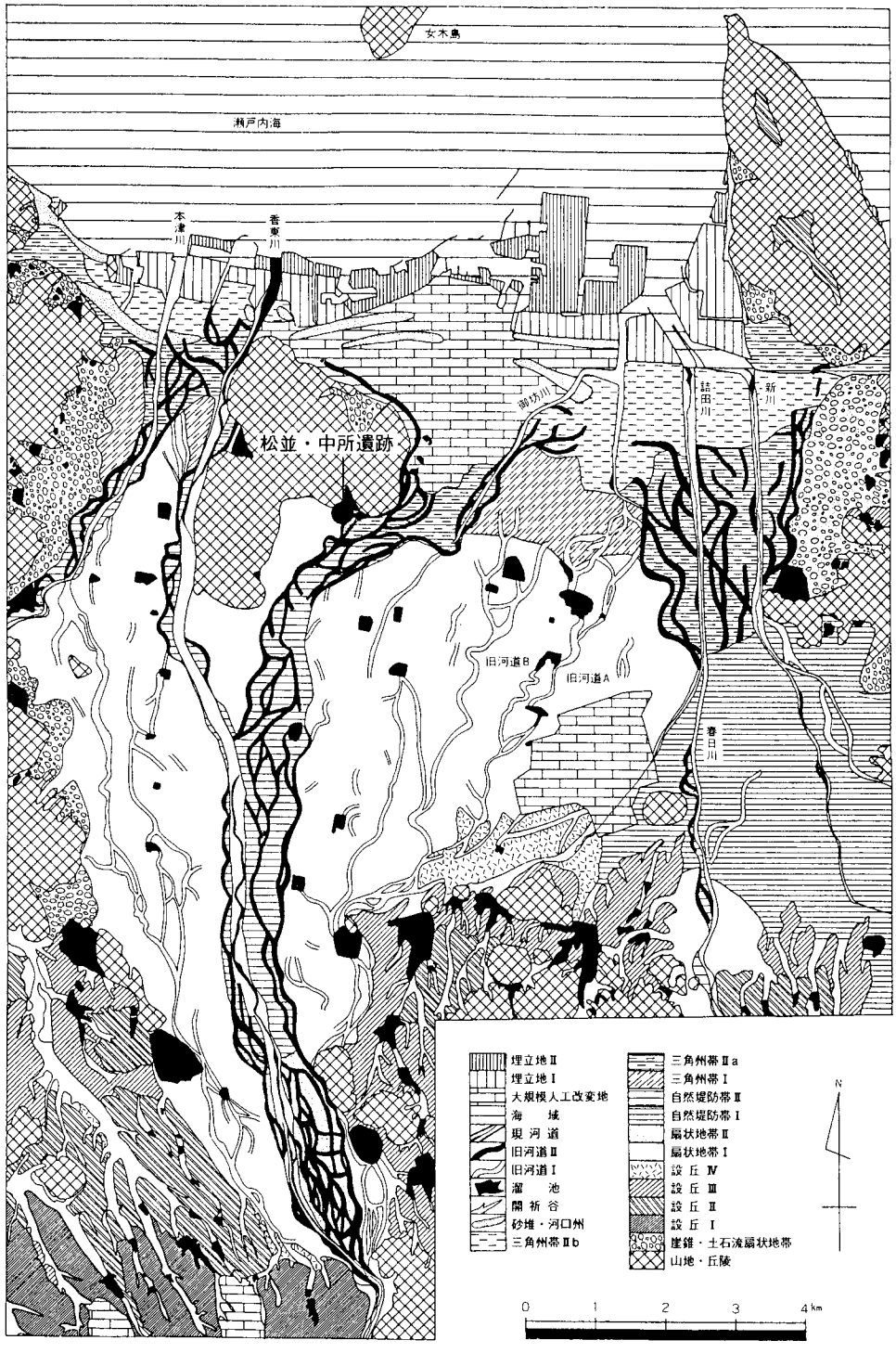




第１図　遺跡位置図１（Ｓ＝１／50,000）



第2図　遺跡位置図2（S＝1／2,500）



第３図　高松平野地形分類図（高橋1992より抜粋，一部加筆）

第２節　歴史的環境

１．旧石器時代

中森遺跡において，原位置を留めた石器ブロックの存在が４箇所で確認されている（ＡＴ火山灰の純層と一部アカホヤ火山灰を含む包含層)。ナイフ形石器，横長剥片石核，ハリ質安山岩素材の石核を含む100点を越える石器が出土している。

２．縄文時代

上天神遺跡，浴・長池遺跡，林・坊城遺跡等において晩期（突帯文段階）の遺物が確認されている。林・坊城遺跡では，晩期後葉段階の流路から諸手鍬や手鋤が出土している。それを遡る遺跡はやや離れた居石遺跡や前田東・中村遺跡，正箱遺跡，西打遺跡が挙げられるに過ぎない。

３．弥生時代

高松東道路建設等に伴い多数の遺跡が確認されている。

前期の遺跡としては，手鋤の出土や大規模な不定形小区画水田を検出した浴・長池Ⅱ遺跡（前期初頭，末)，林・坊城遺跡，凹原遺跡，空港跡地遺跡，多肥遺跡群等がある。環濠集落では，天満宮西遺跡(前期中頃，径65ｍに復元可能)，汲仏遺跡（前期後半，２重環濠)，鬼無藤井遺跡（前期後半初頭）が確認され，その開削時期は前期前半末と前期後半初頭の２時期に分かれる。

中期の遺跡として,周溝を有する(平地式？)竪穴住居や掘立柱建物跡からなる多肥松林遺跡(中葉),18棟の掘立柱建物跡から構成される日暮・松林遺跡，多肥宮尻遺跡，松林遺跡等が数条の流路により区切られた微高地上にそれぞれ展開している。浴・長池遺跡でも竪穴住居，掘立柱建物跡が確認されている。中期の集落は，多肥・日暮遺跡群や善通寺市旧練兵場遺跡群が示すように，区画施設やその内部への集中的居住はみられず，広大な範囲を占有面積に，一定の間隔を保ちながら複数の単位が併存する状態がその特徴といえる（森下1999ａ)。

また，高所に存在する遺跡として摺鉢谷遺跡がある。当遺跡の背後に所在する峰山の頂部から緩斜面地に位置し（標高140～160ｍ以上？，当遺跡から直線距離にして約１㎞弱)，中期後半～末頃を中心とした時期の土器，石鏃，石庖丁，磨製石斧等が出土している。讃岐地方において，中期後半～末段階には紫雲出山遺跡，青ノ山山頂，烏帽子山遺跡といった山頂，山腹に立地する集落が数多く認められる。同様の高地性集落は瀬戸内海沿岸地域でも確認でき，その背景には広域的な集落間の緊張関係が存在すると思われる。なお，浄願寺山東麓の緩斜面（標高25～45ｍ）に位置する南山浦古墳群の盛土中からも，中期後半に属する遺物が出土しており，集落が存在した可能性が高い。

後期には集落数は増加し，高松東道路や空港跡地周辺では包含層や流路を含めるとほぼ全域で確認されている。旧香東川（旧河道Ｃ）を挟み当遺跡対岸約1.5㎞に位置する上天神遺跡は後期前半を中心とした時期の集落で，流路ないし低地に区切られた微高地上に複数単位で集落が展開している。竪穴住居より掘立柱建物跡の比率が高く，他地域土器の搬入が多く認められ，遠隔地（軟質韓式系土器も含まれる）との結びつきが強いなど，特異な集落である。上天神遺跡や隣接する太田下・須川遺跡では複数回の改修を経て長期間機能していた灌漑用大形水路が検出されており，前期段階から個別集落単位を越えた灌漑単位（水系単位）での強固な紐帯が存在したものと理解される。また，各集落単位での水路網の整備例としては，太田下・須川遺跡，居石遺跡（古墳時代初頭）において木樋が確認されている。

当遺跡（Ⅶ区）から東に連結する都市計画道路木太鬼無線の建設に伴い，確認された西ハゼ土居遺跡

では，前期～後期にかけての自然河道が検出され，その埋没過程の後期前半頃に小区画水田が営まれている。竪穴住居は存在しないが，後期～終末期の土坑，掘立柱建物跡，柱穴等も確認されている。松並・中所遺跡とは行政的な区分けにすぎず，灌漑用水網や集落構成において，その関係は重要である。

4．古墳時代

その前期段階における集落の確認例は極めて少ない。空港跡地遺跡や中間西井坪遺跡において，古墳時代前期後半期に在地系土器とは異なる布留式土器が出土しており，在地色の払拭と畿内勢力の介入が想定されている（蔵本1999A）。

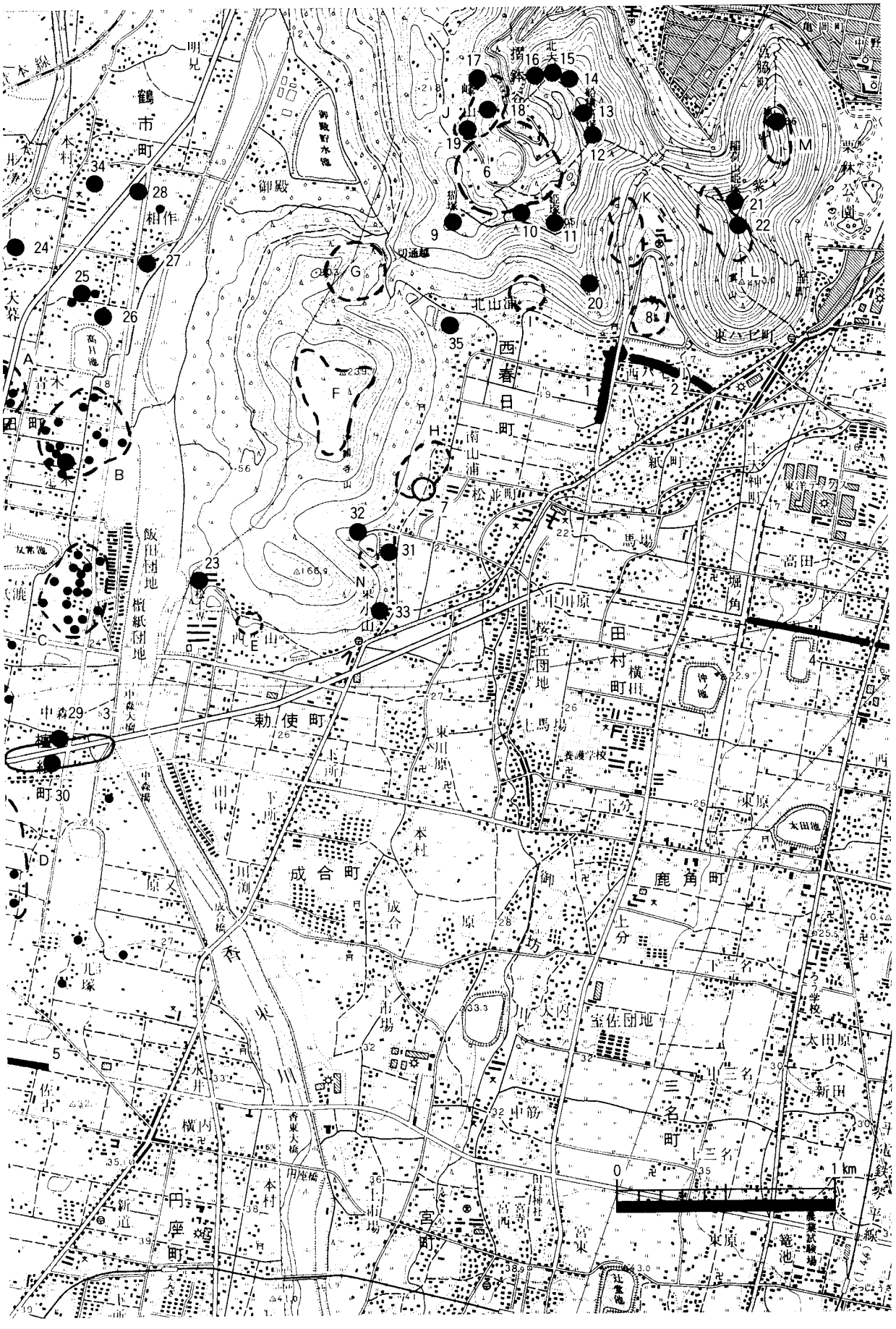
中・後期の確認例も少ないが，太田下・須川遺跡では中期～後期にかけて営まれた集落で竪穴住居や掘立柱建物跡が検出されている。この居住域の東を走る溝より，陶邑産の樽形甕が出土している。前田東・中村遺跡では流路から木製農具の他，木樋や櫂等が出土している。六条・上所遺跡では中期（須恵器が共伴しない段階）の竪穴住居が2棟検出され，韓式系土器が出土している。

また，居石遺跡では流路から分岐する水路の取水口で，前期の小型仿製鏡（珠文鏡・重圏鏡・素文鏡）が出土しており，水辺祭祀として注目される。

集落確認例の稀少性に比して，古墳の築造は顕著なものである。前方後円墳出現期以降の築造か，それに先行するかは不確定であるが，鶴尾神社4号墳が松並・中所遺跡の背後に存在する。高所立地，墳丘規模，積石による墳丘築造，竪穴式石槨，粘土床といった点で弥生時代の墓制からの飛躍が認められる。問題は多岐におよぶが，その築造法に着目すると，前方部くびれ部の板石数段積列石が後円部に潜り込み，後円部にも一部確認できる板石数段積列石が前者の上部に置かれている点を指摘し得る。その石材は竪穴式石槨構築石材と酷似しており，板石積列石の設置段階と竪穴式石槨の構築段階が近い築造工程にあったと考えられ，遺体埋葬に伴う通路を具現化した施設という理解が可能である。こうした在り方は，徳島県萩原1号墳や兵庫県養久山1号墳とは異なる。こうした観点から分析すると，前方後円墳という墳丘形態を採用しているようにみえるが，最古の前方後円墳とされる箸墓古墳とは本質的に異なる構築法であるといえる。ほぼ同時期の所産とされる摺鉢谷9号墳は後円部基底部列石が先行し，前方部列石がそれに取り付いており，鶴尾神社4号墳に比して後出的な要素を備えている。

これらに後続する前期段階の古墳として，石清尾山山塊（山頂）に築造された双方中円（方）墳2基，前方後円墳8基以上を含む著名な石清尾山古墳群がある。その築造時期や配置関係から，香東川下流域を中心とした複数系列の首長層による築造を想定できるが，前期末の石船塚古墳をもってその築造を終える。その後，中間西井坪遺跡と関連の強い被葬者像が想定される今岡古墳が中期初頭に築造される。畿内勢力ないし地域内での緊張関係のなかで相対的独自性を誇示した石清尾山古墳群に代表される積石墓が前期段階で築造を終了し，大和北部にみられる多様な形象埴輪の組成を有する今岡古墳の築造の背景には，大和北部を中心とした畿内勢力による首長層の再編成が想定でき，確認例は少ないが集落の在り方とパラレルな状況を示す。

今岡古墳に続く中期古墳は皆無に等しく，古墳（前方後円墳）築造階層に強い規制を窺わせる。香東川下流域では，津田川周辺における富田茶臼山古墳やそれに後続する短甲を所有する川上古墳等の小古墳群，綾川上流の古式群集墳や善通寺周辺首長層の安定した造墓活動，さらには中期後半の周溝を備えた大形円墳（高野丸山古墳，青龍古墳）の在り方とは異なる状況を呈している。内容の判然としない浄願寺山南西に位置する亀塚や御厩天神社古墳は存在するが，中期段階には，前方後円墳の築造を許容されることはなかったと考えられる。中期の古墳のこうした在り方の背後には，河内（古市・百舌鳥古墳



第４図　周辺の遺跡地図（Ｓ＝１／25,000）

番号	遺　跡　名	時　　代	番号	遺　跡　名	時　　代
1	**松並・中所遺跡**	**弥生，中世**	26	相作馬塚古墳	古墳後期
2	西ハゼ土居遺跡	弥生，中世，近世	27	中所地神社前塚古墳	古墳後期
3	中森遺跡	旧石器	28	あきやま塚古墳	古墳後期？
4	上天神遺跡	弥生	29	中森１号墳	古墳中期
5	兀塚遺跡	古墳，中世	30	中森２号墳	古墳中期
6	摺鉢谷遺跡	弥生	31	坂田廃寺	古代
7	南山浦遺跡	弥生	32	片山池１号窯跡	中世
8	奥の池遺跡	弥生，古代，中・近世	33	南山浦１号窯跡	中世
9	猫塚古墳	古墳前期	34	筑城城跡	中世，近世
10	小塚古墳	古墳前期	35	片山城跡	中世
11	姫塚古墳	古墳前期			
12	鏡塚古墳	古墳前期	A	飯田古墳群	古墳後期
13	石船塚古墳	古墳前期	B	青木古墳群	古墳後期
14	北大塚東古墳	古墳前期	C	紙漉古墳群	古墳後期？
15	北大塚古墳	古墳前期	D	檀紙南部塚群	古墳後期？
16	北大塚西古墳	古墳前期	E	亀塚古墳群	古墳後期？
17	摺鉢谷９号墳	古墳前期	F	浄願寺山古墳群	古墳後期
18	摺鉢谷５号墳	古墳後期	G	野山古墳群	古墳後期
19	摺鉢谷２号墳	古墳後期	H	南山浦古墳群	古墳後期
20	鶴尾神社４号墳	弥生終末～古墳初頭	I	北山浦古墳群	古墳後期
	(鶴尾神社古墳群)		J	摺鉢谷古墳群	古墳後期
21	稲荷山姫塚古墳	古墳前期	K	奥の池古墳群	古墳後期
22	稲荷山１号墳	古墳前期	L	稲荷山古墳群	古墳前期
23	亀塚古墳	古墳後期初頭？	M	稲荷山北古墳群	古墳前期
24	王墓古墳	古墳後期	N	片山池南古墳群	古墳後期
25	相作牛塚古墳	古墳後期			

＊時代は各遺跡の主たる時期を示す

第２表　周辺の遺跡一覧表

群）を中心とした畿内勢力による地方への強い介入が想定できる。そこには，石清尾山古墳群築造首長層等の伝統的首長層の排除・解体と甲冑の分布が示すように畿内勢力と個別地域の個別首長とのダイレクトな政治的関係が読み取れる。

後期には，鶴市町に相作牛塚古墳が築造される。径14m以上の円墳で，東西主軸の竪穴式石槨を内部主体にとると伝えられるが，既に消失している。馬具，挂甲小札，太刀といった副葬品に加え，円筒埴輪，形象埴輪（人物形埴輪，家形埴輪）の存在は香東川下流域首長層に対する古墳造営の再許容の結果と考えられる。周辺には円筒埴輪の出土が確認される塚が多く存在する（飯田古墳群，青木古墳群，紙漉古墳群）。中森遺跡で確認された推定中森１号墳の周囲を巡る周溝状溝状遺構の存在が示すように，これら塚群の半数近くは古墳である可能性が高い。６世紀前半段階において平地への群集といった現象には注意を要する。

また，６世紀後半以降，石清尾山山塊には多くの群集墳が確認されている。その分布状況が示すように，限られた墓域に径10m以下の小円墳が高密度で築造されており，広瀬和雄氏の提唱する墓域贈与論との関連を彷彿させる配置状況である。これらの古墳群はすべて横穴式石室を埋葬施設にとり，墳丘・玄室規模，副葬品等の等質的内容が指摘されている。しかし，畿内系石室や畿内産土師器の存在から，畿内政権との結びつきが想定されている南山浦古墳群はこの在り方とは異なる（高松市教育委員会1985，蔵本1994）。南山浦11号墳は長軸12m，短軸８mの楕円形の墳丘規模で，両袖式横穴式石室を埋葬施設にとる。玄室床面面積が約8.5㎡を測る大型石室である。袖部は羨道部から内側に突出せず，長大な羨道部を有する点から，畿内型横穴式石室と考えられる。その副葬品を見ると，須恵器・土師器・銀環・金銅製飾り金具・鉄鏃・鉄鎌・鉄製刀子等に加え，馬具（二点一対の鐙や２個体かそれ以上の轡）が出土しており，当該期の横穴式石室墳の副葬品としては群を抜いている。出土須恵器の年代観・石室規模や副葬品から，南山浦古墳群築造の契機になる古墳と考えられる。また，畿内産（系）土師器の存在も興味深い。同様にミガキを施す土師器坏は，築造時期が11号墳より後出する９・10・13号墳からも出土しており，その副葬ないしこれを用いた埋葬行為は同古墳群の特徴といえる。仔細に見ると，11号墳を除く３基の古墳から出土した土師器は胎土に砂粒を多く含む等畿内産土師器とは呼べず，近年川津一ノ又遺跡で確認された畿内系土師器とも言い難いものである。おそらく在地において畿内産ないし畿内系土師器を模倣して製作した可能性が高く，後期群集墳の被葬者像を知る上で興味深い事例である(1)。

５．古代，中世

峰山，浄願寺山の山塊と御坊川に挟まれた西春日町，松並町，峰山町，西ハゼ町を含む一帯は，『和名抄』の香川郡坂田（佐加多）郷の郷名を継ぐ中世郷に比定されている。古代坂田郷は郡衙関連遺跡の確認もなく実体は不明であるが，奈良時代に遡る瓦が出土する坂田廃寺やそれに隣接するロストル式構造の片山池１号窯はその存在を首肯するものであろう。坂田廃寺は浄願寺山と小山の谷部出口に位置し，瓦の散布や堂床の地名，礎石の存在から古代寺院として古くから知られていた。昭和42年に発掘調査が行われ，基壇や礎石が検出されている。出土瓦には白鳳期に遡るものも含まれる。その背後の片山池北岸に位置する片山池瓦窯は６基以上の瓦窯が並列すると報告されている。平成６年度に調査された１号窯は平安時代中期の半地下式有床式平窯で，５条のロストルが作り付けられている。坂田廃寺への瓦の供給が考えられるが，平安時代末には操業を停止している。片山池窯跡出土瓦には，開法寺跡や鴨廃寺の出土瓦と同文である点に加え，「日本霊異記」の記載から，坂田廃寺の造営には綾氏が関係しているとも考えられている。

一方，坂田荘は九条道家が立荘し，後堀河天皇中宮藻璧門院の法華堂に寄進されたものである。坂田郷は平安時代末期から鎌倉前期に白河上皇の勅旨田が設けられ，その一部は立庄されて野原庄となり，次いで坂田庄が成立したが，これ以外の部分は公領として存続したと考えられる（坂田勅旨）。なお，室町時代に現れる坂田郷はその後身にあたる。文献資料等では中世坂田郷（荘）はこのような内容であるが，その実体は不明と言わざるを得ない。

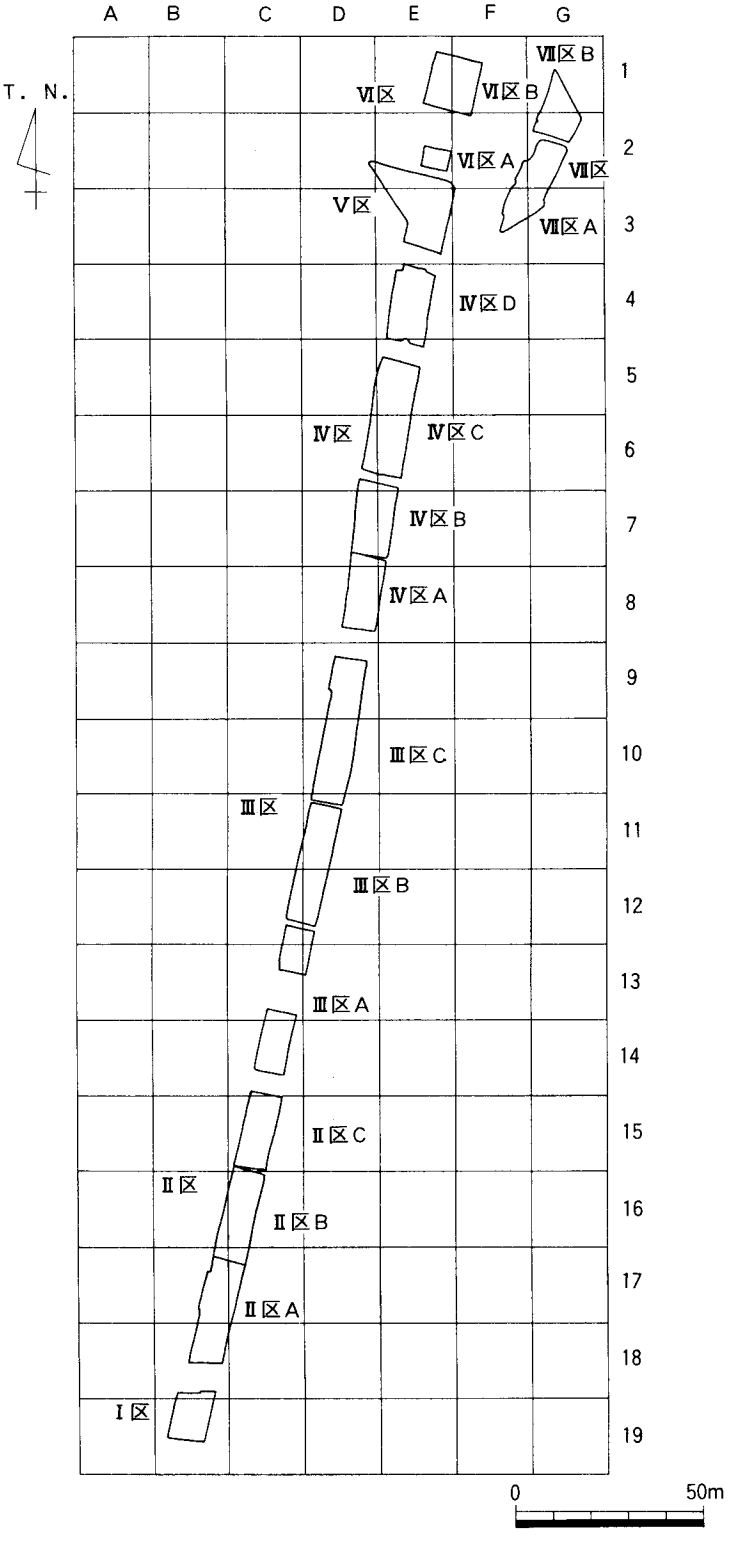
なお，隣接する西ハゼ土居遺跡では，平安時代末～鎌倉時代には周辺の方格地割に合致した主軸方位を呈する掘立柱建物跡が確認されている。同遺跡では16世紀後半～17世紀初頭にかけて，一坪内に規模を違えた3基の区画溝が検出されている。堀や塀を巡らした防御的機能や「土居」の地名から，太田氏が城主とされる坂田城，室山城と関連した山城と平時の館との関係が注目されている。

第３章　調査の成果

第１節　調 査 区

調査を実施した範囲は総延長約360m，総面積約4,050㎡を測る。現道路の拡幅工事であるため，幅は８～10m前後である。調査区は対象地を東西に横断する道路を基準に南よりⅠ～Ⅶ区まで設定し，隣接家屋，工場への進入路，作業ヤード等の関係から，各工区をさらに区分した小分けした調査区はそれぞれアルファベットで示し，大調査区のローマ数字の後に繋げている。調査の都合上Ⅴ・Ⅵ区に関しては，東西道路に関係なく工区を設定した。

なお，各調査区は総じて小規模であるが，遺構名の混乱を防ぐため，調査時の地区名を踏襲した。



第５図　松並・中所遺跡調査区割図及びグリット図（Ｓ＝1/2,000）

第2節　層　　序

旧香東川を中心とした河川の複雑な堆積作用による地形形成に起因して，基本層序は一様でなく，調査時には遺構検出面の把握に多くの労力を費やした。ここでは各層位の連続関係を復元し，当遺跡の地形形成過程について述べたい。

第6図に基本層序模式図を示した。1m前後を測る造成土下に近代と考えられる耕作土・床土が堆積し，中世後半～近世に属するであろう連続する水田層を経て，遺構検出面にいたる基本層序が復元できる。断面観察では水田層上面に畦畔等は確認できない。検出面直上には弥生時代と中世の2時期の包含層を検出したが，後世の土地利用の相違や水田の低位化により，各調査区によりその検出状況は異なる。前者に関しては，Ⅳ区Dのみの確認である。

遺構検出面以下の堆積状況をみると，砂礫層，シルト質土層，砂質土層の複雑な相互堆積により地形が形成されている。以下，それぞれを細分してその内容を記す。

砂礫層　4箇所で確認でき，それぞれ砂礫層Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳとした。砂礫層ⅠはⅡ区Cで遺構検出面付近まで隆起するが，南北にそれぞれ下降し，Ⅳ区Cで再度上昇して検出面となる。その上面の凹凸にはシルト質土層Ⅰが堆積し，Ⅳ区C～Ⅴ区では遺構検出面となる。砂礫層ⅡはⅢ区Bで確認した。その堆積状況は不明確であるが，砂質土層Ⅰを明瞭に切り込み出現し，北へ下降する。シルト質土層Ⅲ・Ⅳとの関係からⅢ区Cのなかで消失すると考えられる。砂礫層ⅢはⅡ区A・Bにおいて遺構検出面となり，砂質土層Ⅰの上部に被るように堆積している。砂礫層Ⅰに比して，砂質土の混入度合いがやや高く，軟弱である。砂礫層ⅣはⅣ区CSR01の立ち上がり付近に堆積したもので，確認した限りでは無遺物層である。Ⅳ区Cにおいて砂礫層Ⅰとの関係を捉えることはできなかったが，それに後出して堆積したものと考えられる。

シルト質土層　堆積状況や層序関係から4区分した。シルト質土層ⅠはⅣ区D・Ⅴ区において，砂礫層Ⅰの窪みに堆積したもので，上面が遺構検出面となる。シルト質土層ⅡはⅣ区C・SR01肩部底面で検出した。シルト質土層Ⅲは砂礫層Ⅱの上層に堆積しており，それを介在させることにより，シルト質土層Ⅳと細分できる。

なお，シルト質土層Ⅱ・Ⅲと砂礫層ⅡはⅢ区C～Ⅳ区Cで検出したSR01の下層になる可能性も払拭できないが，調査の限りでは無遺物層であった。

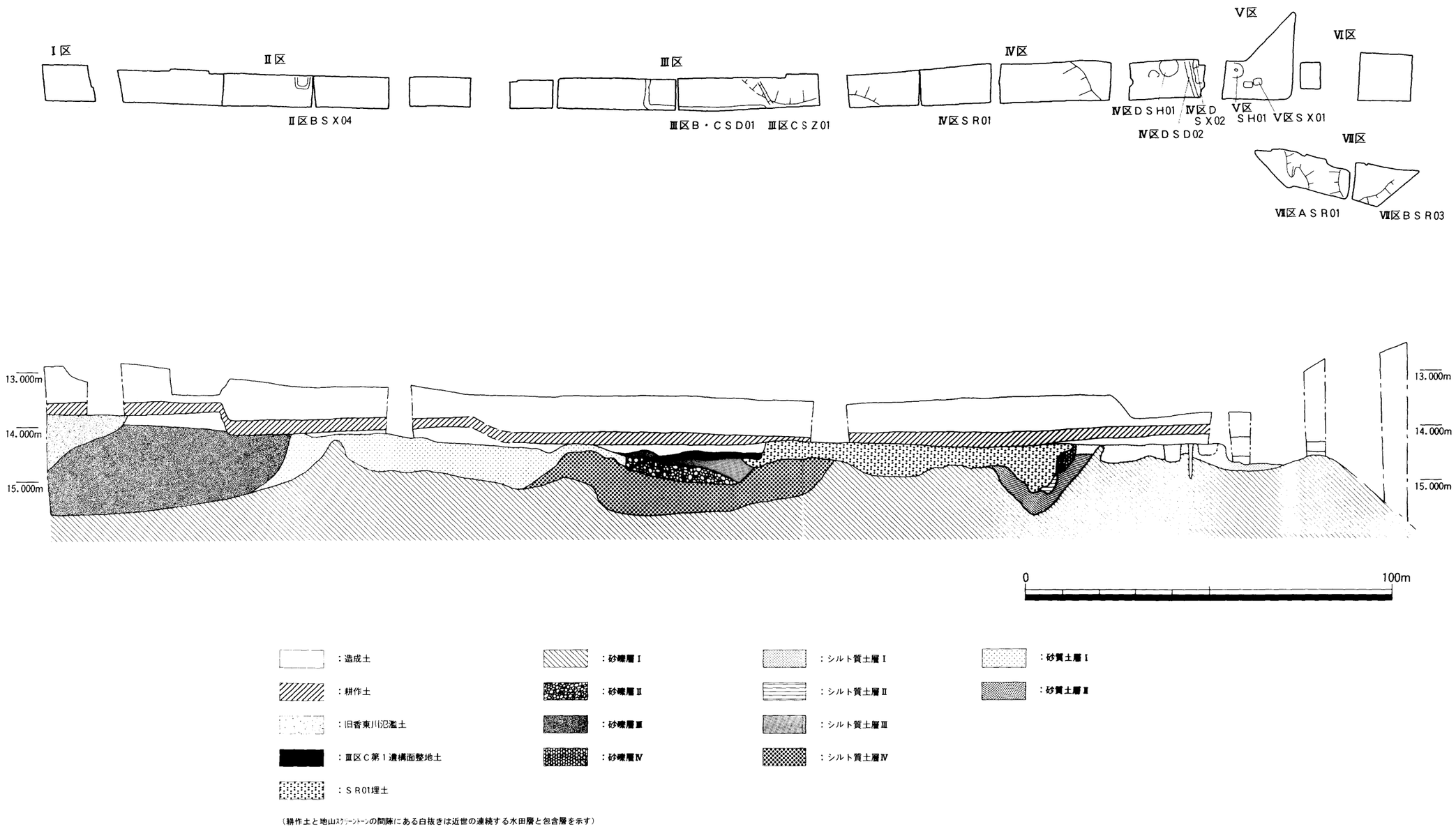
砂質土層　Ⅱ区B～Ⅲ区CとⅣ区CのSR01底面の2箇所で確認した。砂質土層ⅠはⅡ区B～Ⅲ区Cの遺構検出面として確認した。シルト質土層Ⅳの上層に堆積し，砂礫層Ⅱ・Ⅲに対して先行する。砂礫層Ⅲと近似するが，礫はごく少量しか含まれない。砂質土層Ⅱは無遺物層で，砂礫層Ⅳとシルト質土層Ⅰに潜り込む層位関係を呈し，Ⅲ区C～Ⅳ区CSR01の下層埋土とすることは困難であり，砂礫層Ⅰの窪みにSR01に先行して堆積した土層と考えられる。

以上各層位の個別説明を行ったが，次にそれぞれの土層の解釈について検討する。高橋氏の高松平野の地形環境に従えば（高橋1992），砂礫層Ⅰは（埋没）旧中洲，砂礫層Ⅱ・Ⅲ，シルト質土層Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ，砂質土層は旧中洲を被覆するように堆積した河川の溢流氾濫に起因した堆積土（自然堤防）に該当すると思われる。また，SR01は自然堤防のうち相対的低地な部分に位置し，ここに砂質土層Ⅱと砂礫層Ⅳが弥生時代前期以前に堆積したものである。

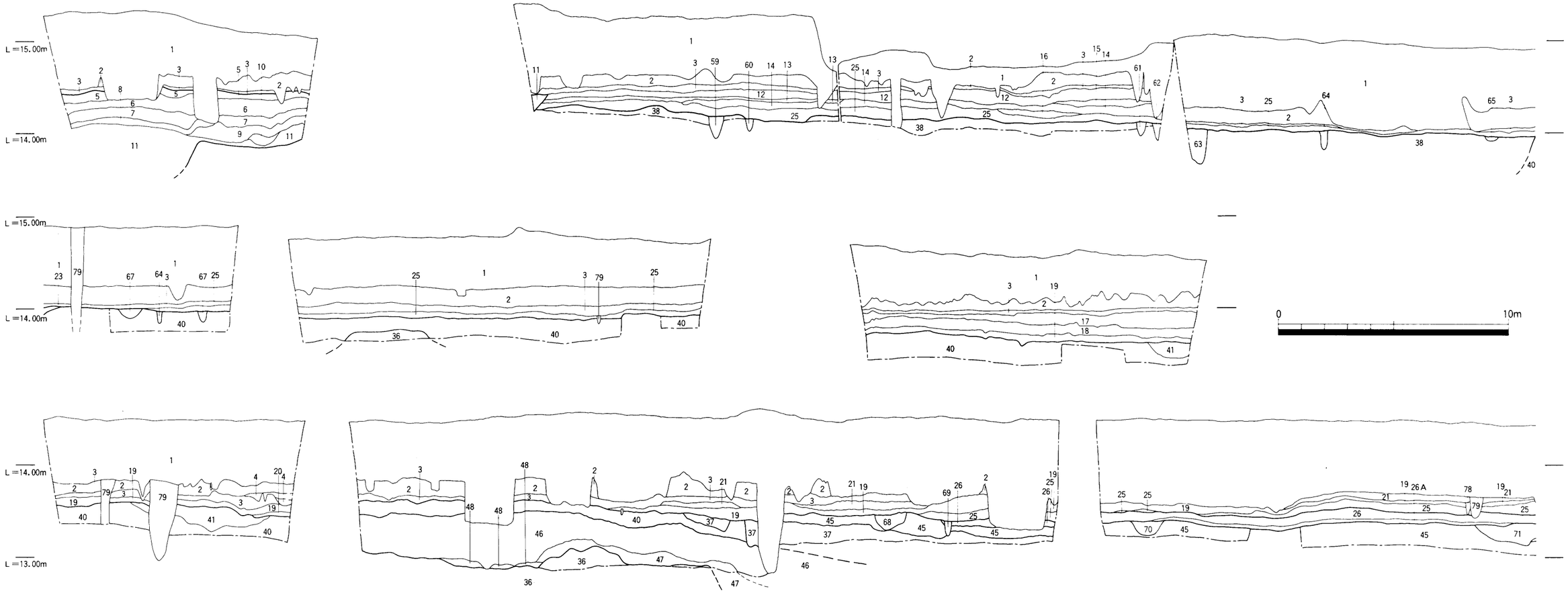
層序関係から見ると，砂礫層Ⅰ→シルト質土層Ⅳ→砂質土層Ⅰ→砂礫層Ⅱ→砂質土層Ⅱ→シルト質土

層Ⅱ・Ⅲ→砂礫層Ⅳという堆積順序が復元でき，シルト質土層Ⅰは層序関係からその他の土層との前後関係は詳らかではないが，シルト質土層Ⅱ・Ⅲと近い関係にあると思われる。それぞれの堆積時期は，シルト質土層Ⅰを検出面として，弥生時代前期前半末の遺構が確認できる点から，少なくともシルト質土層Ⅰの堆積時期の下限は判明している。また，後述するＳＲ01はⅢ区Ｃ～Ⅳ区Ｃ，Ⅶ区Ａにかけて検出しており，出土遺物から弥生時代前期前半末に埋没が始まっており，層序関係に照らし合わすと，シルト質土層Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ，砂礫層Ⅱ，砂質土層Ⅱの堆積下限時期もその頃であろう。また，砂礫層Ⅲは12世紀後半頃の遺構を上面で確認し，下限時期の根拠にはなるが，上限がどこまで遡るかは不明である。

なお，遺構の個別報告に用いた断面図のスクリーントーンは，第６図の層序模式図のそれに対応したものである。但し，右上がり斜線のそれに関しては，その遺構の開削段階における地山を表現したものであり，層位に対応したものではない。

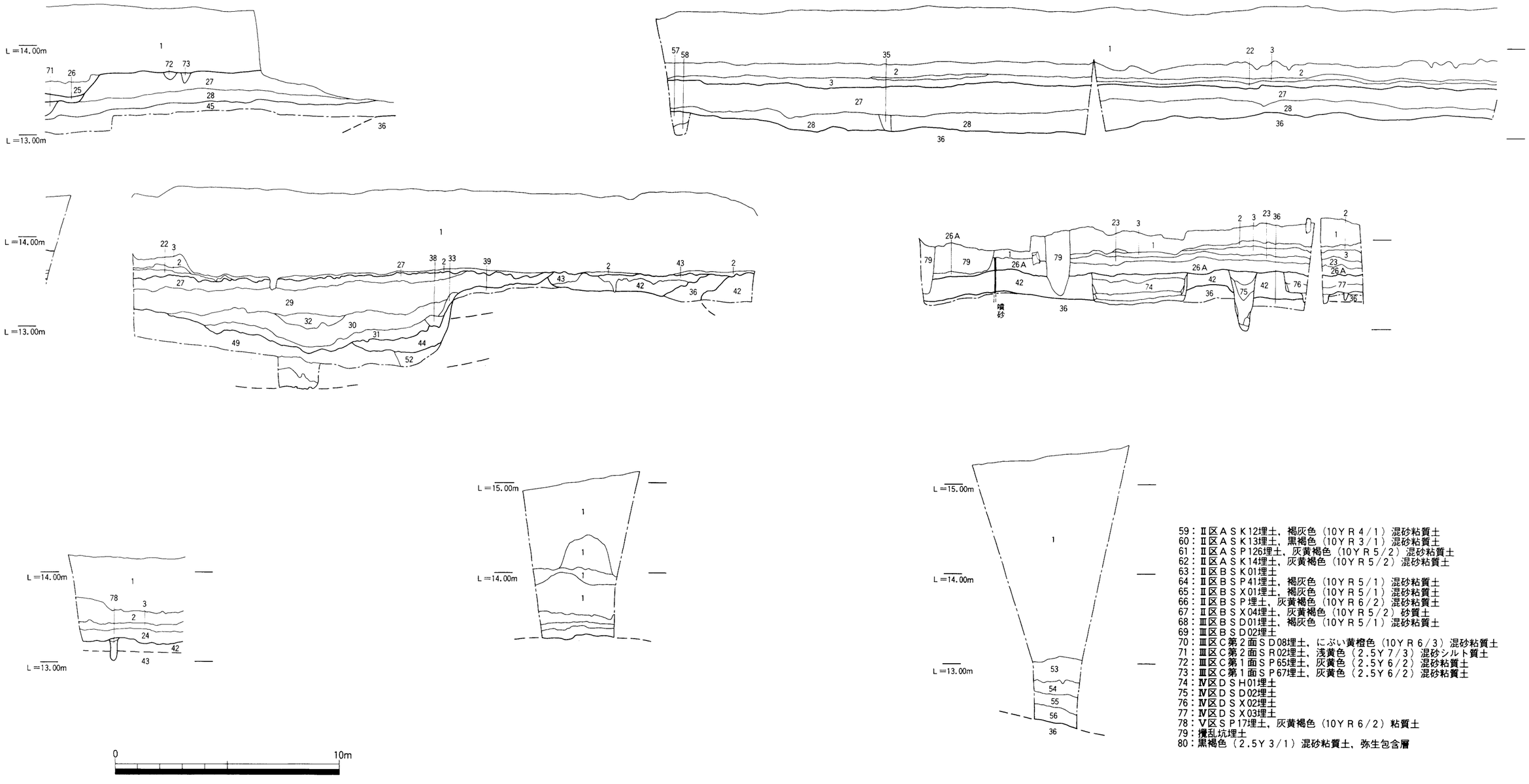


第６図　松並・中所遺跡基本層序模式図



1：造成土
2：黒褐色（2.5Y 3/1）粘質土，近・現代耕作土
3：明黄褐色（10Y R 6/6）粘質土，床土
4：灰オリーブ色（5 Y 6/2）粘質土，床土の変色土
5：灰黄色（2.5Y 6/2）粘質土，上面でFeの沈着が多量にみられる
6：にぶい黄色（2.5Y 6/4）粘質土
7：暗灰黄色（2.5Y 5/2）混砂粘質土
8：灰オリーブ色（5 Y 5/2）混砂粘質土，7より砂質度が高い
9：褐灰色（10Y R 6/1）シルト質土，Fe・Mnを多く含む
10：にぶい黄色（2.5Y 6/3）砂礫層
11：灰黄色（2.5Y 6/2）細砂層，5～11；旧香東川氾濫土
12：灰黄褐色（10Y R 5/2）混砂粘質土
13：にぶい黄褐色（10Y R 5/4）混砂粘質土，床土
14：黄褐色（2.5Y 5/3）混砂粘質土，床土？
15：にぶい黄褐色（10Y R 5/3）混砂シルト質土
16：黄灰色（2.5Y 5/1）混砂シルト質土
17：明黄褐色（10Y R 6/6）混砂粘質土
18：灰黄褐色（10Y R 5/2）粘質土，Fe・Mnを比較的多く含む
19：黄褐色（10Y R 5/6）混砂粘質土，床土
20：明黄褐色（10Y R 6/6）混砂粘質土，床土
21：灰黄褐色（10Y R 5/2）粘質土，Fe・Mnを多く含む
22：にぶい黄色（2.5Y 6/3）粘質土，床土？，Fe・Mnを多く含む
23：灰黄色（10Y R 6/2）混砂シルト質土
24：灰黄褐色（10Y R 5/2）混砂シルト質土，12～24；近世耕作土
25：褐灰色（10Y R 4/1）粘質土，中世包含層
26：にぶい灰色（7.5Y R 5/3）混砂粘質土，Fe・Mnを多く含む
26A：明黄褐色（7.5Y R 7/6）混砂粘質土，26・27；Ⅲ区C第1面整地土
27：灰黄褐色（10Y R 4/2）粘質土
28：明褐灰色（7.5Y R 7/1）砂質土
29：黒褐色（10Y R 3/2）混砂粘質土，Fe・Mnを多く含む
30：黒褐色（2.5Y 3/1）粘質土，Fe・Mnを多く含む，炭化物をブロック状に含む
31：黄灰色（2.5Y 5/1）混砂シルト質土
32：黒色（2.5Y 3/1）混砂粘質土，Feの沈着が多量に認められる
33：灰黄褐色（10Y R 6/2）シルト質土
34：明黄褐色（10Y R 6/6）シルト質土
35：褐灰色（10Y R 5/1）混砂粘質土，27～35；S R01埋土
36：褐灰色（10Y R 5/1）砂礫層，砂礫層Ⅰ
37：褐灰色（10Y R 5/1）砂礫層，36より軟弱，砂礫層Ⅱ
38：灰黄褐色（10Y R 6/2）砂礫層，砂質土の割合が高い，砂礫層Ⅲ
39：褐灰色（10Y R 6/1）砂礫層，砂礫層Ⅳ
40：にぶい黄褐色（10Y R 5/3）砂質土，1cm前後の小礫を多く含む
41：褐灰色（10Y R 6/1）砂質土，40より小礫が多く混じる，40・41；砂質土層Ⅰ
42：明黄褐色（10Y R 6/6）混砂シルト質土
43：オリーブ灰色（2.5G Y 5/4）シルト質土，42・43；シルト質土層Ⅰ
44：灰色（5 Y 5/1）混砂シルト質土，シルト質土層Ⅱ
45：にぶい黄橙色（10Y R 6/4）シルト質土，部分的に37の礫が混じる，シルト質土層Ⅲ
46：にぶい黄褐色（10Y R 5/4）シルト質土，粒子が細かい
47：褐灰色（10Y R 5/1）シルト質土
48：褐灰色（10Y R 5/1）シルト質土，46～48；シルト質土層Ⅳ
49：灰色（5 Y 5/1）砂層
50：灰色（10Y 6/1）砂層
51：にぶい黄褐色（10Y R 5/4）砂層
52：灰色（7.5Y 4/1）混砂シルト質土，49～52；砂質土層Ⅱ
53：灰オリーブ（5 Y 5/2）粘質土，黒褐色（10Y R 3/2）粘質土ブロックを含む
54：オリーブ黒色（5 Y 3/1）粘質土
55：黄灰色（2.5Y 4/1）粘質土
56：黒褐色（2.5Y 3/1）粘質土，53～56；攪乱土
57：小礫充填層，2cm前後の小礫から構成
58：砂礫層，拳大～人頭大の礫から構成，57・58；砂礫層Ⅰ

第7図　土層断面図1（天地1／40，左右1／160）



59：Ⅱ区ＡＳＫ12埋土，褐灰色（10Ｙ Ｒ 4／1）混砂粘質土
60：Ⅱ区ＡＳＫ13埋土，黒褐色（10Ｙ Ｒ 3／1）混砂粘質土
61：Ⅱ区ＡＳＰ126埋土，灰黄褐色（10Ｙ Ｒ 5／2）混砂粘質土
62：Ⅱ区ＡＳＫ14埋土，灰黄褐色（10Ｙ Ｒ 5／2）混砂粘質土
63：Ⅱ区ＢＳＫ01埋土
64：Ⅱ区ＢＳＰ41埋土，褐灰色（10Ｙ Ｒ 5／1）混砂粘質土
65：Ⅱ区ＢＳＸ01埋土，褐灰色（10Ｙ Ｒ 5／1）混砂粘質土
66：Ⅱ区ＢＳＰ埋土，灰黄褐色（10Ｙ Ｒ 6／2）混砂粘質土
67：Ⅱ区ＢＳＸ04埋土，灰黄褐色（10Ｙ Ｒ 5／2）砂質土
68：Ⅲ区ＢＳＤ01埋土，褐灰色（10Ｙ Ｒ 5／1）混砂粘質土
69：Ⅲ区ＢＳＤ02埋土
70：Ⅲ区Ｃ第２面ＳＤ08埋土，にぶい黄橙色（10Ｙ Ｒ 6／3）混砂粘質土
71：Ⅲ区Ｃ第２面ＳＲ02埋土，浅黄色（2.5Ｙ 7／3）混砂シルト質土
72：Ⅲ区Ｃ第１面ＳＰ65埋土，灰黄色（2.5Ｙ 6／2）混砂粘質土
73：Ⅲ区Ｃ第１面ＳＰ67埋土，灰黄色（2.5Ｙ 6／2）混砂粘質土
74：Ⅳ区ＤＳＨ01埋土
75：Ⅳ区ＤＳＤ02埋土
76：Ⅳ区ＤＳＸ02埋土
77：Ⅳ区ＤＳＸ03埋土
78：Ⅴ区ＳＰ17埋土，灰黄褐色（10Ｙ Ｒ 6／2）粘質土
79：攪乱坑埋土
80：黒褐色（2.5Ｙ 3／1）混砂粘質土，弥生包含層

第８図　土層断面図２（天地１／40，左右１／160）

第３節　遺構，遺物

１．弥生時代前期～中期

弥生時代の遺構は前期前半末と中期後葉の２時期に大きく分かれ，中期中葉前半に位置付けられる可能性がある遺構も確認している。その分布状況を見ると，当該期の遺構はすべて，Ⅲ区Ｃ～Ⅳ区Ｃにかけて検出したＳＲ01の北方に位置する。ＳＲ01は前期前半末から埋没が進行し，中期後葉には埋没していたと想定でき，各時期の集落の南限に位置する。なお，Ⅶ区ＳＲ01は調査段階では，Ⅲ区Ｃ～Ⅳ区ＣＳＲ01と連続する自然河川と想定していた。しかし，西ハゼ土居遺跡の調査成果と対応させると，連続するとは言い難く，そこから派生する小規模な自然河川であることが判明している。

前期前半末に属する主な遺構として，Ⅲ区Ｃ～Ⅳ区ＣＳＲ01下層，Ⅳ区ＤＳＤ02，Ⅴ区ＳＫ07・10を検出しているが，その遺構密度は散漫である。Ⅳ区ＤＳＤ02はＶないしＵ字形の断面形状やその埋没状況，開削時期から環濠という性格を付与することができるかもしれない。

中期中葉前半はⅤ区ＳＨ01の確認に留まる。櫛描波状文が描かれた壷胴部細々片による時期決定のため，多いに問題を残すが，平地式住居か削平により掘方が失われた竪穴住居である。その中央土坑の両脇には柱穴を有し，「松菊里型住居」の可能性が指摘できる。

中期後葉には遺構数は大幅に増加し，Ⅳ区ＳＨ01・ＳＸ01～03・05，Ⅴ区ＳＸ01・02を検出している。Ⅳ区ＤＳＨ01は径5.0mの円形平面プランで，貼床・ベット状遺構を有する竪穴住居である。床面中央には円形の深い土坑と細長い浅い土坑がセットになった中央土坑があり，「10型中央土坑」との関連が指摘できる。一方，Ⅳ区ＤＳＸ01・Ⅴ区ＳＸ01・02は長方形の平面プランで（２×2.5m前後），底面には主柱穴が確認できない遺構である。中央には土坑を検出したが，炭化物・焼土の包含は少ないか，まったくなく，竪穴住居の中央土坑とは趣を異にする。こうした状況から竪穴住居とは一線を画するが，居住施設かそれに類する施設と考えられる。

以下，各遺構について記す。

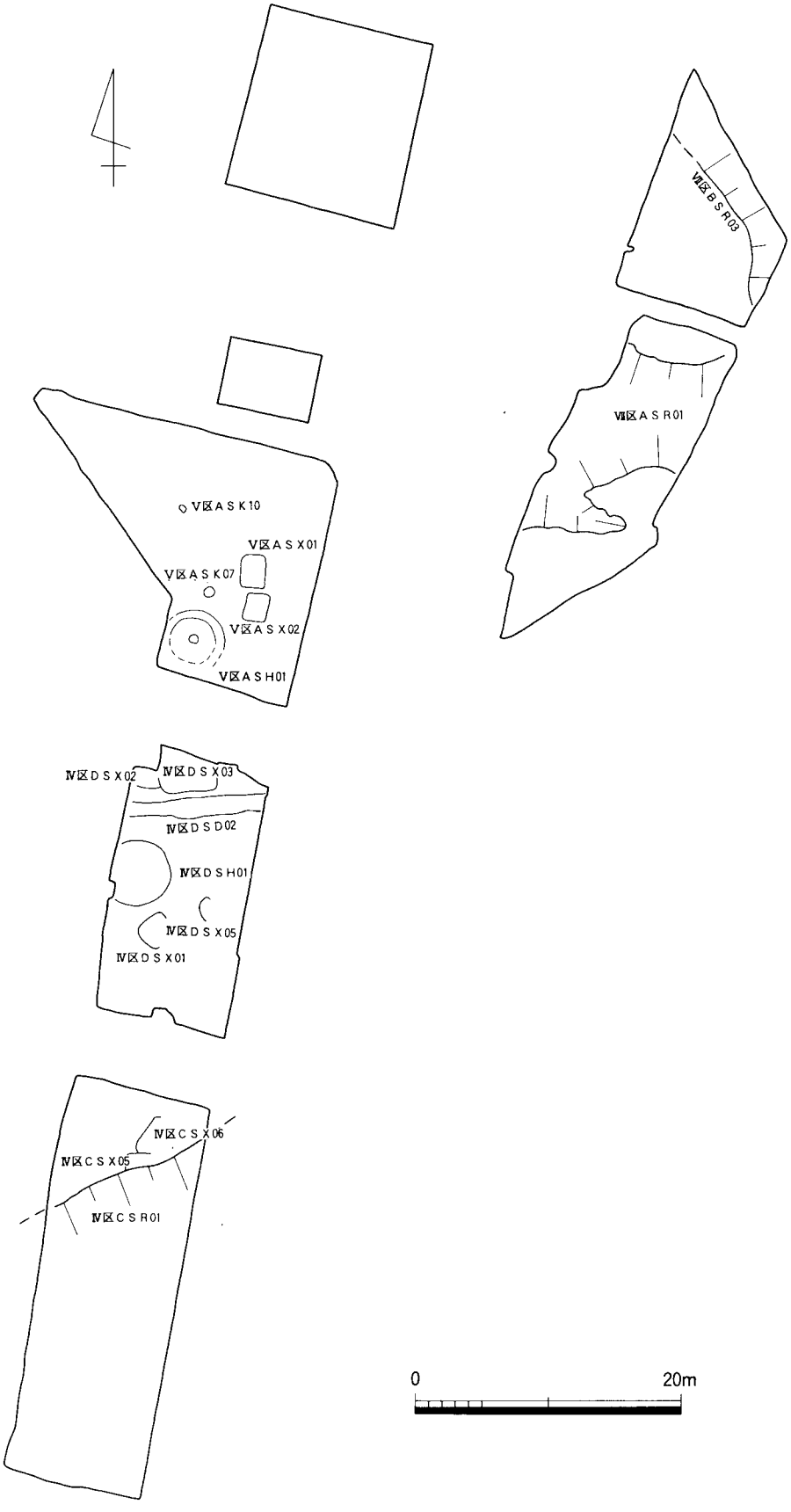
竪穴住居ないし居住施設に類する施設

Ⅳ区ＤＳＨ01

Ⅳ区Ｄ中央部西側，Ｅ４グリットで検出した竪穴住居である。一部調査区外に延びるため全容は不明であるが，検出した限りでは，直径約５ｍの正円形を呈する。床面積は20.41㎡を測り，小型～中型の規模になる。検出面から床面までの深度は約0.2mを測り，床面には貼床が施される。Ⅳ区Ｄの遺構検出面は厚さ0.2m前後を測るシルト質土層Ｉで，その下層には砂礫層Ｉが存在する。ＳＨ01構築時にこのシルト質土層Ｉを開削し，砂礫層に至ったため貼床を施したと考えられる。同様に置土によるベット状遺構を東側を中心に検出したが，その高さは0.1mにも満たない低いものである。周壁からの幅は約0.8m前後を測る。

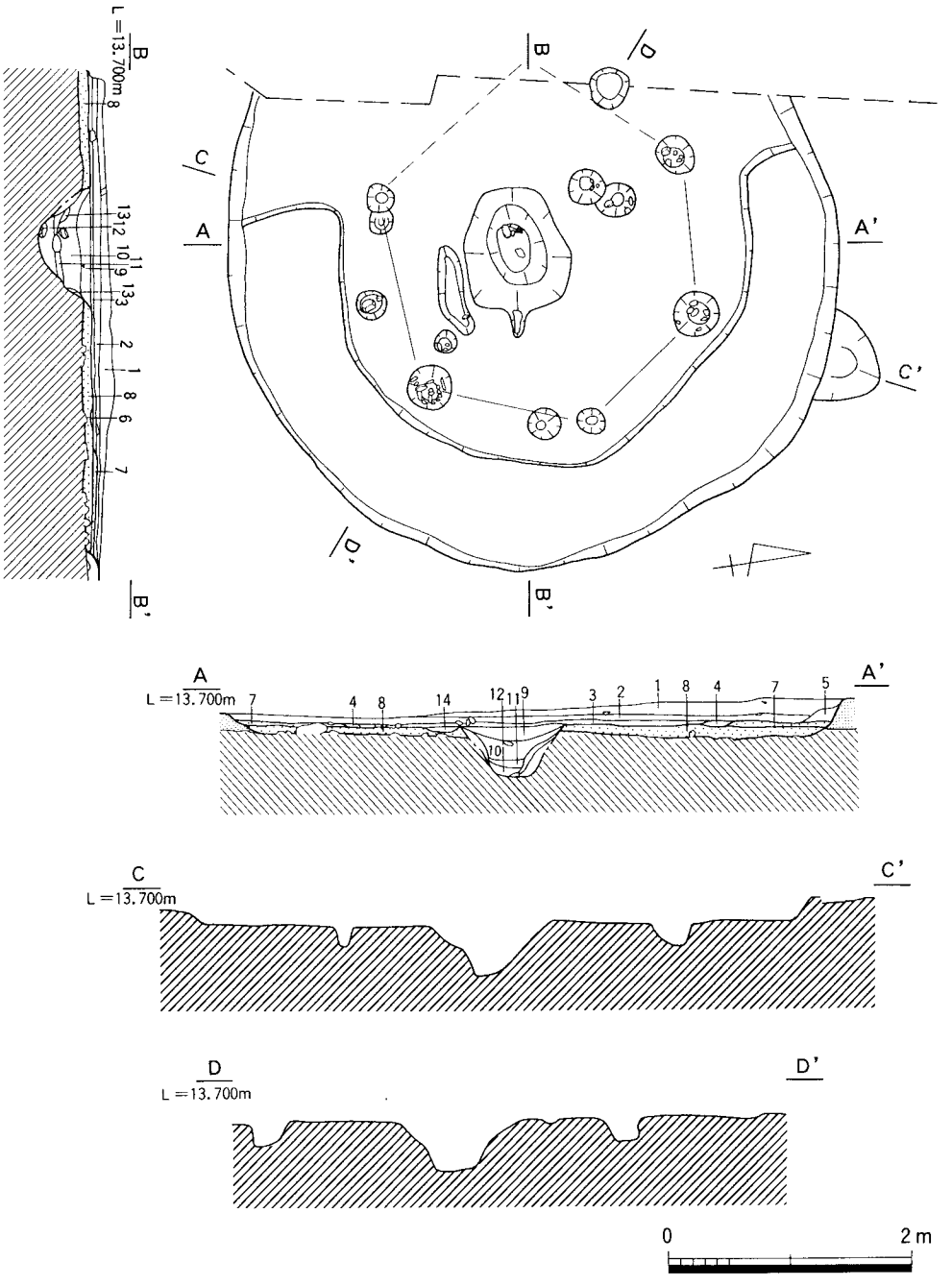
埋土は３層に細別でき，ベット状遺構上端レベルから床面直上までを下層（土層注記番号３，以下番号のみ記載），黒褐色混砂粘質土（１）を上層とし，その間を中層（２）とした。床面ないしベット状遺構は明黄褐色混砂粘質土の置土で，シルト質土層Ｉと近似することから，ＳＨ01掘削時に生じた土量を用いたと考えられる。

床面で確認した12基のピットのうち，半径1.35mの円周上に並ぶピットが主柱穴にあたり，６本の柱



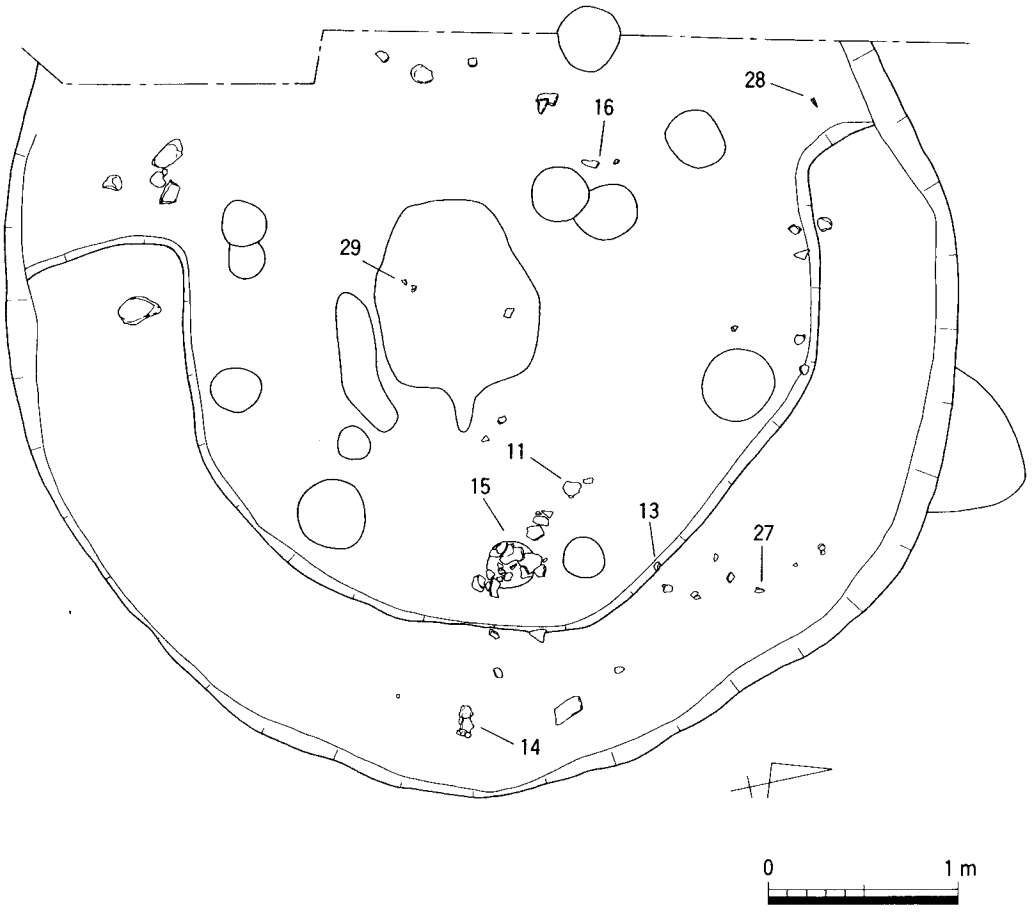
第９図　松並・中所遺跡弥生時代遺構分布図（Ｓ＝１／500）

構造であったと考えられる。その中央部には隅丸方形の中央土坑（ＳＫ01）がある。長軸長約１ｍ，短軸長約0.8m，深度約0.4mを測る。埋土は３層に細分でき，下層にオリーブ黒色砂質土(12)，中層に灰黄褐色混砂粘質土(10)，上層に褐色混砂粘質土(９)が堆積している。各層には炭化物を含み，上層にのみ焼土が含まれる。ＳＫ01に隣接する不整形土坑（ＳＸ01）は，長さ0.8m，幅0.2m前後を測り，深さは0.05mと極めて浅いが，炭化物を多量に包含する埋土を有する。



1：黒褐色（10ＹＲ３/２）混砂粘質土，上層埋土
2：暗灰黄色（2.5Ｙ４/２）混砂粘質土，中層埋土
3：灰黄褐色（10ＹＲ４/２）混砂粘質土，下層埋土
4：褐灰色（10ＹＲ４/１）混砂粘質土
5：灰黄褐色（10ＹＲ６/２）混砂粘質土
6：褐灰色（7.5ＹＲ４/１）混砂粘質土，ＳＰ07埋土
7：明黄褐色（10ＹＲ６/６）混砂粘質土，ペット状遺構置土
8：７と同じ，貼床置土
9：褐色（7.5ＹＲ４/４）混砂粘質土，炭化物・焼土をごく少量含む，９～13ＳＫ01埋土
10：灰黄褐色（10ＹＲ４/２）混砂粘質土，炭化物を少量含む
11：黒褐色（10ＹＲ３/１）混砂粘質土
12：オリーブ黒色（５Ｙ３/１）砂質土，炭化物をごく少量含む
13：褐灰色（7.5ＹＲ４/１）混砂粘質土
14：黒褐色（2.5Ｙ３/１）混砂粘質土，炭化物を多く含む，ＳＸ01埋土

第10図　Ⅳ区ＤＳＨ01平・断面図（Ｓ＝１／60）



第11図　Ⅳ区ＤＳＨ01床面遺物出土状況図（Ｓ＝１／40）

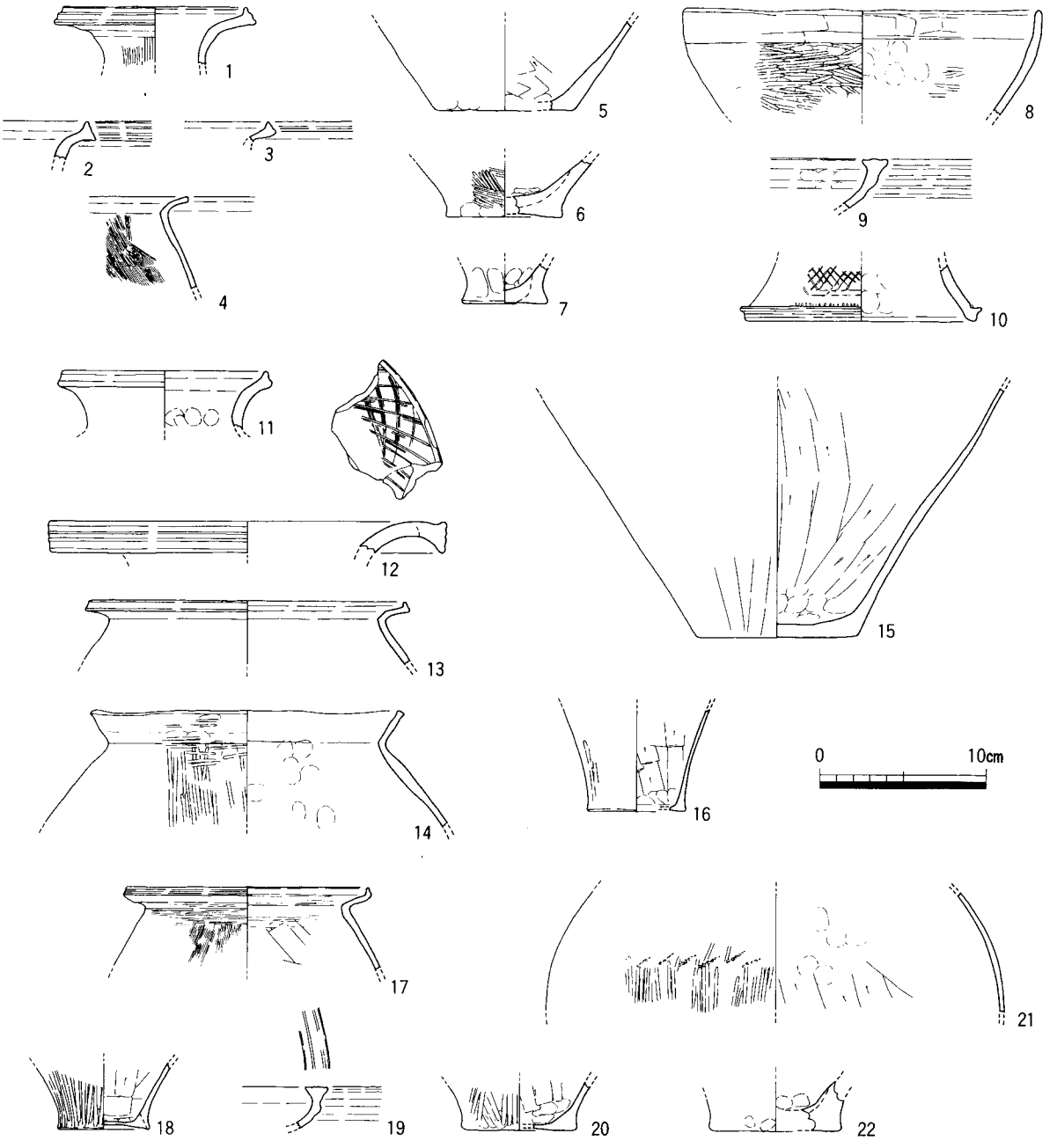
遺物は細片であるが，各層から一定量出土し，20Ｌコンテナで１箱弱を数える。取り上げ時には第10図土層番号１を上層，２を中層，３を下層・床面直上とし，床面直上出土遺物のみ，個別に取り上げている。出土遺物は層位別にレイアウトした。報文番号１～10，23～26が上・中層，11～16，27～33が下層・床面直上，17～20，34・35が床面で検出した柱穴および土坑，21・22，36は貼床中から出土した遺物である。

１は壷口縁部から頸部片である。頸部は直線的に外傾し，口縁部は大きく開く。端部は上下に拡張し，２条の凹線文を施す。２・３は壷口縁部片である。口縁端部は２は上下に拡張し，端面に３条の凹線文，３は上方へ摘み上げ，１条の凹線文をそれぞれ施す。４は甕口縁部片である。口縁部は「く」字形に外反し，端部は丸く収める。５は壷ないし甕底部片である。内面は指押さえ後，ケズリ調整が施される。外面は二次焼成により，橙色に変色する。６は壷ないし甕底部片である。底径は７cmを測る。

７は甕ないし鉢底部である。底径は4.8cmと小さく，平底である。底部外縁に強い指押さえを施し，体部との境を明瞭にする。底部内面は円盤充填法を行う。８はボール状を呈する鉢である。体部は内湾気味に立ち上がり，端部手前２cmの位置でほぼ直立し，端部は丸く収める。体部外面には横方向のミガキ，口縁部外面にはヨコナデ調整ないし板ナデ調整が施される。９は鉢ないし高坏である。坏部は内湾気味に立ち上がり，端部は内外へ拡張する。端部上面には２条の沈線状の凹線文，口縁部外面には幅広で起伏のある凹線文が施される。10は高坏脚部である。脚端部に突出度の高い凸帯を貼付し，外面下端には刺突文，下位には平行沈線文，中位には斜格子文をヘラ状工具で施文する。少量の角閃石に加え，黒色石粒を胎土中に含む。

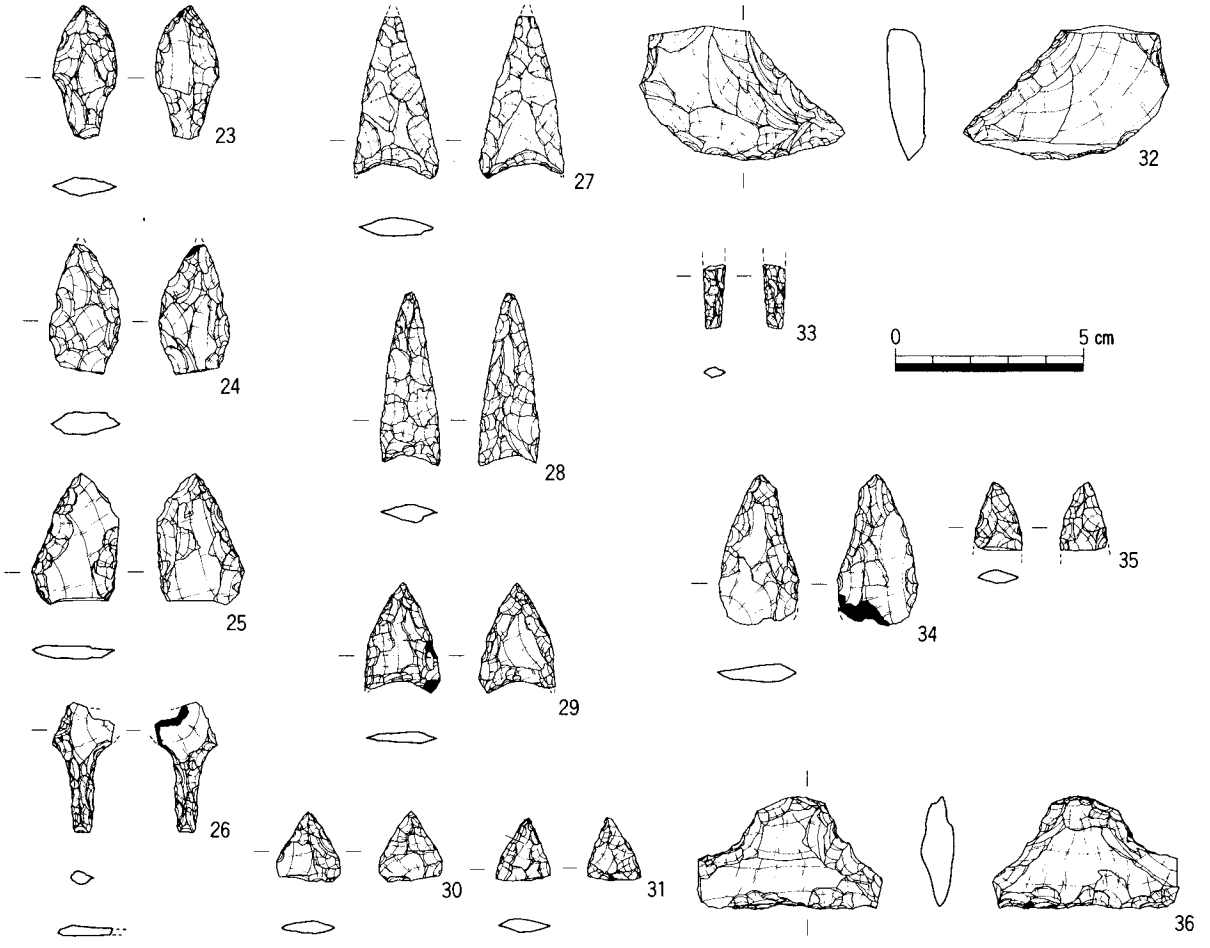
11は壷口縁部片である。口縁部は大きく外反し，端部上方を摘み上げて端面を創出し，１条の凹線文を施している。12は壷口縁部である。口縁部は大きく外反し，端部をわずかに摘み上げ，下方を激しく垂下させ，広い端面を作り出す。端面には３条の凹線文を施し，口縁部内面には２条平行沈線で斜格子文を描く。13・14は甕口縁部である。13を口縁部は強く屈曲させ，端部を上方に摘み出す。14は口縁部を「く」字形に屈曲させ，直線的に延び，端部は四角く収める。体部径は口径を大きく上回り，その最大径が中位より上に位置する器形になる。体部外面には縦方向のヘラミガキが施される。口縁部形態に特徴があり，松並・中所遺跡では同様の形態を有する器形は出土していない。15は甕底部片である。底径が9.7cmと比較的大きい。体部内面にはケズリ調整，底体部境には顕著な指押さえが施される。

16は甕底部片である。器壁厚が薄く，内面には丁寧なケズリ調整が施される。17は甕口縁部片である。



第12図　Ⅳ区ＤＳＨ01出土遺物１（Ｓ＝１／４）

口縁部は「く」字形に外反し，端部を上方に摘み出す。端面には１条の凹線文が施される。18・20は甕底部片である。底部はわずかに上底を呈し，体部外面に入念なヘラミガキ調整，内面にケズリ調整を施す。内面底体部境には顕著な指押さえがケズリ調整前に施されている。19は鉢ないし高坏片である。坏部は口縁部手前で短く強く屈曲し，端部を内外方に拡張する。端部上面には沈線状の細い凹線文を２条施し，口縁部外面にも起伏のある凹線文がみられる。21は甕体部片である。外面はヘラミガキ，内面はケズリ調整が施され，胴部最大径やや上方に右上がりの列点文がみられる。22は壷ないし甕底部片である。底部厚が1.3cm前後と分厚い。



第13図　Ⅳ区ＤＳＨ01出土遺物２（Ｓ＝１／２）

23～25はサヌカイト製石鏃である。23・24は凸基式，25は平基式ないし凹基式製作途上の未製品である。26は石錐である。27～31はサヌカイト製石鏃である。27・28は鏃身長が４cm強と細長い凹基式石鏃である。重量はそれぞれ3.29ｇ，2.92ｇを測る。32はスクレイパーである。33は石錐先端部である。34は凸基式打製石鏃である。35は打製石鏃先端部である。36は形状は有肩扇状石器に似るが，石匙と考えられる。

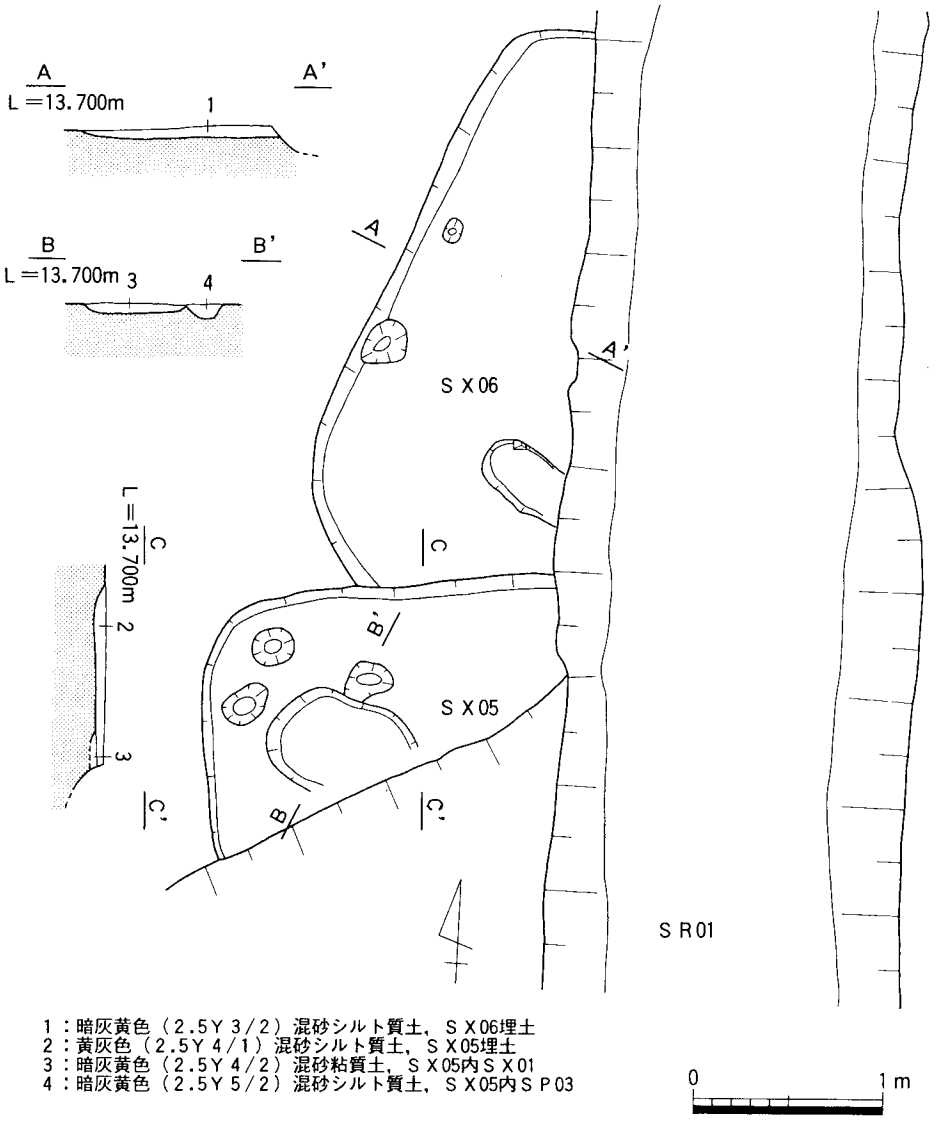
出土遺物から，弥生時代中期後葉を中心とした時期に位置付けられる。

その中央土坑の構造は，円形の深い土坑と葉巻形の細長い土坑がセットになっており，播磨周辺で確認できる「10型中央土坑」との関連が指摘できる。なお，これに関しては後述したい。また，当該期にベット状遺構を有する竪穴住居は稀薄で，弘田川西岸遺跡ＳＨ27のみである。しかし，出土遺物より，後期後半にまで下る可能性を残している。

Ⅳ区ＣＳＸ05

Ⅳ区Ｃ北寄りＥ５グリットで検出した不明遺構である。ＳＲ01，ＳＤ01とそれぞれ重複関係にあり，両者に先行する切り合い関係にある。全容を窺い知ることはできないが，平面形は検出した限りでは隅丸方形プランを呈する。1.3×1.7m以上の規模を有し，検出面から底面までの深度は0.05mと極めて浅く，埋土は黄灰色混砂シルト質土の単層である。底面にはピット３，不明土坑１（ＳＸ01）を検出した。ピットの配置に計画性は認められず，深度も極めて浅い。主柱穴，中央土坑，壁溝といった居住施設を構成する要素を持たない点から，竪穴住居と断定するには困難な状況であるが，居住施設かそれに類する遺構と考えられる。

出土遺物は弥生土器（中期後葉？）と思われる細々片を確認したが，図化可能な遺物はない。遺構の重複関係ではＳＲ01に先行するが，検出面からの深度が極めて浅く，ＳＲ01上面でその埋土を見落とした可能性が高く，ＳＲ01埋没過程との関連や出土遺物の所属時期から，弥生時代中期後葉前後の所産と考えたい。



1：暗灰黄色（2.5Y 3/2）混砂シルト質土，ＳＸ06埋土
2：黄灰色（2.5Y 4/1）混砂シルト質土，ＳＸ05埋土
3：暗灰黄色（2.5Y 4/2）混砂粘質土，ＳＸ05内ＳＸ01
4：暗灰黄色（2.5Y 5/2）混砂シルト質土，ＳＸ05内ＳＰ03

第14図　Ⅳ区ＣＳＸ05・06平・断面図（Ｓ＝１／40）

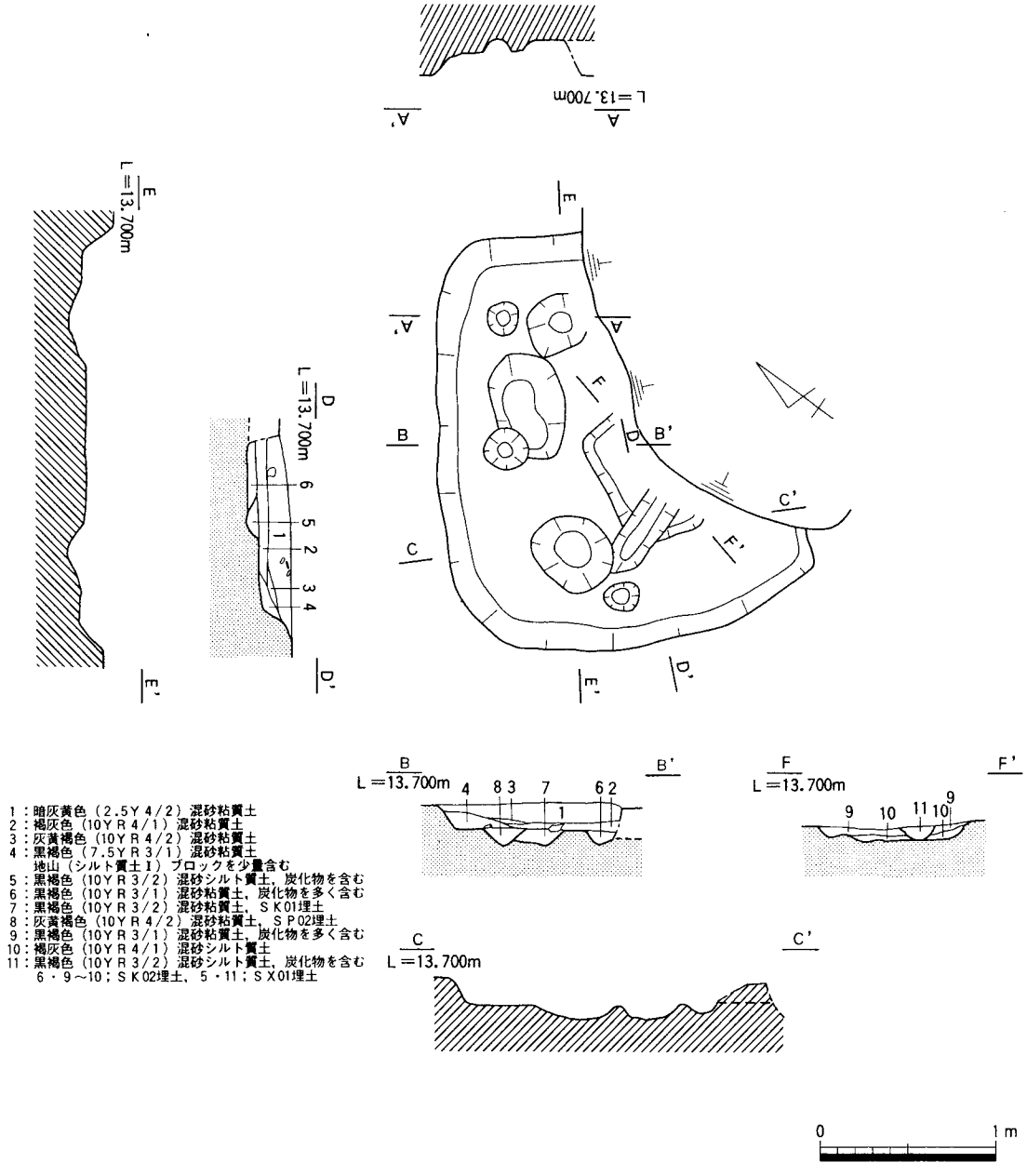
Ⅳ区ＣＳＸ06

Ⅳ区ＣＳＸ05と重複する位置関係で検出した不明遺構である。平面形は不明であるが，検出した限りでは隅丸方形を呈すると思われ，長軸ないし短軸長は約2.8m前後を測る。埋土は暗灰黄色混砂シルト質土の単層で，検出面から底面までの深度は0.06mである。底面には３基のピットを検出したが，規則的な配置ではなく，深度も0.1mと浅いため，柱穴と判断できるものではない。

出土遺物は皆無に等しく，弥生土器と思われる細々片が出土しているに過ぎない。

Ⅳ区ＤＳＸ01

Ⅳ区ＤＥ４グリットで検出した不明遺構である。攪乱坑により西側１／４程度が失われているため，正確な平面形は不明であるが，隅丸長方形プランと考えられる。長軸長約2.4m，短軸長約2.0mを測り，



第15図　Ⅳ区ＤＳＸ01平・断面図（Ｓ＝１／40）

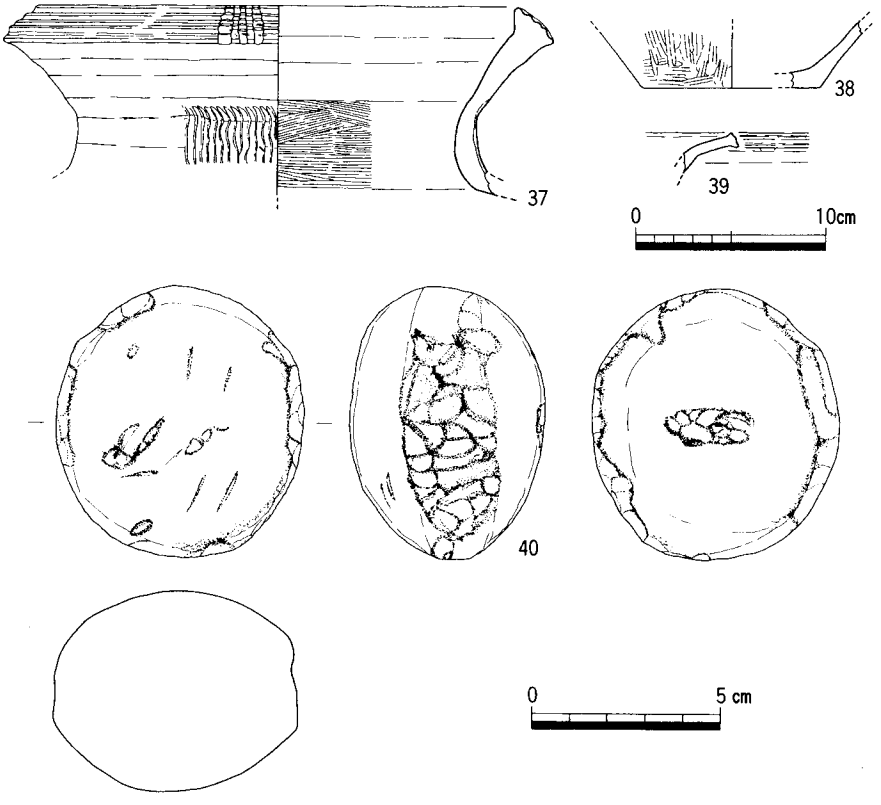
検出面から底面までの深度は0.15m前後である。埋土は2層に大別でき，下層に褐灰色混砂粘質土，上層に暗灰黄色混砂粘質土が堆積している。

底面にはピット5基，土坑2基，不明土坑1基を検出した。ピット深度はいずれも浅く，検出した範囲で見る限り配置状況に計画性は認められない。底面中央東寄りで検出したＳＫ02は0.8×0.25m以上の長方形プランの土坑で，0.1mの深度をもつ。埋土は炭化物を含む黒褐色混砂シルト質土である。同様に炭化物はＳＫ02埋没後に開削されたＳＸ01からも確認できる。

規模やピットの規則的な配置関係から，居住施設として首肯することは難しいが，ＳＫ02・ＳＸ01からの炭化物の検出を重視すると，小型の居住施設かそれに類する遺構と考えられる。

出土遺物は床面直上を中心に小袋で，2袋出土している。

37は壷口縁部から頸部片である。口縁部は直線気味に外反し，端部は上下，特に上方に強く拡張する。端面には4条の凹線文が施され，さらに棒状浮文を貼付し刻目を加えている。頸部は幅広で薄い粘土帯を貼付し，長めの刻目を施した後，中央に横ナデ調整を加えている。Ⅳ区ＤＳＸ05出土の63と接合関係はないが同一個体と考えられ，埋没状況の同時性が認められる。38は壷底部片である。体部外面にはヘラミガキが入念に施される。39は壷口縁部片である。口縁部は大きく開き，端部は上下に拡張し，端面に2条の凹線文を施す。40は拳大より一回り小さい砂岩円礫を利用した叩石である。両側縁にあばた状の敲打痕が認められ，表面に線状痕が確認できる。



第16図　Ⅳ区ＤＳＸ01出土遺物（Ｓ＝１／４，１／２）

出土遺物から弥生時代中期後葉の年代が与えられる。

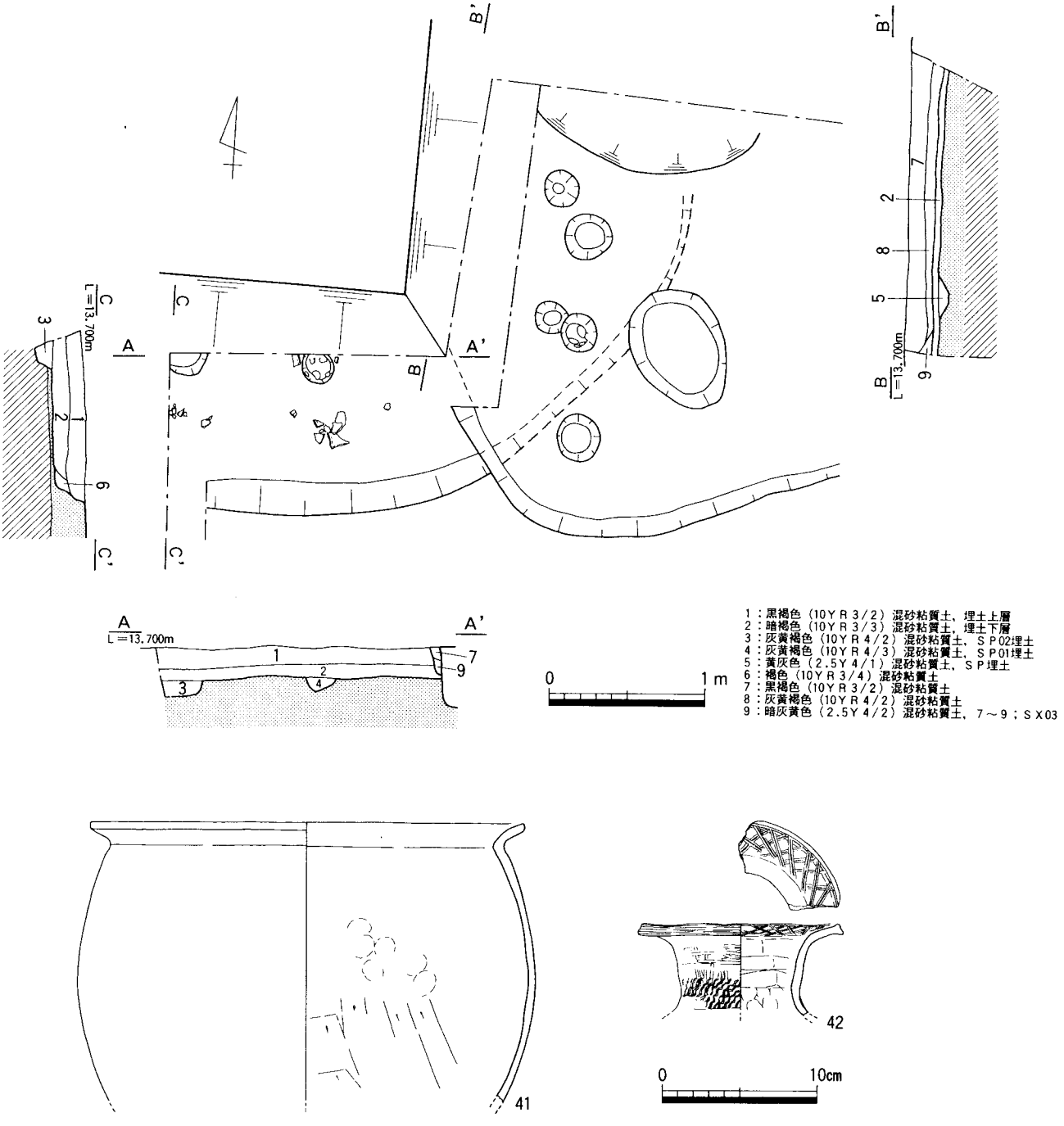
Ⅳ区ＤＳＸ02

Ⅳ区Ｄ北端部グリットＥ４で検出した竪穴住居の可能性が高い不明遺構である。Ⅳ区ＤＳＸ03と重複関係をもち，それに先行する。対象地外へ延長するのに加え，調査区内に残る障害物により全容は不明であるが，径5m前後を測る円形を呈するであろう。検出面から床面までの深度は0.2m前後を測る。埋土は2層に細別でき，下層に暗褐色混砂粘質土，上層に黒褐色混砂粘質土が堆積している。床面には9基のピットを確認したが，主柱穴の認定は困難である。

遺物は下層ないし床面直上から小袋で2袋程度出土し，南側にやや集中する傾向がある。

41は甕である。口縁部は「く」字形に折れ，外反する。体部は最大径が中位より上に位置し，底部にかけてスマートにすぼまる器形である。内外面ともに激しい二次焼成を受け，赤色に変色している。調整は不明瞭であるが，体部内面にはケズリ調整が施される。42は壷の口縁部から頸部である。頸部はほぼ直立し，口縁部は大きく外反する。端部は上下に拡張し，端面に1条の凹線文を施す。口縁部内面には2条沈線で斜格子文を描き，頸部下半にはアサリと思われる貝の腹縁を利用した刻目文がみられる。

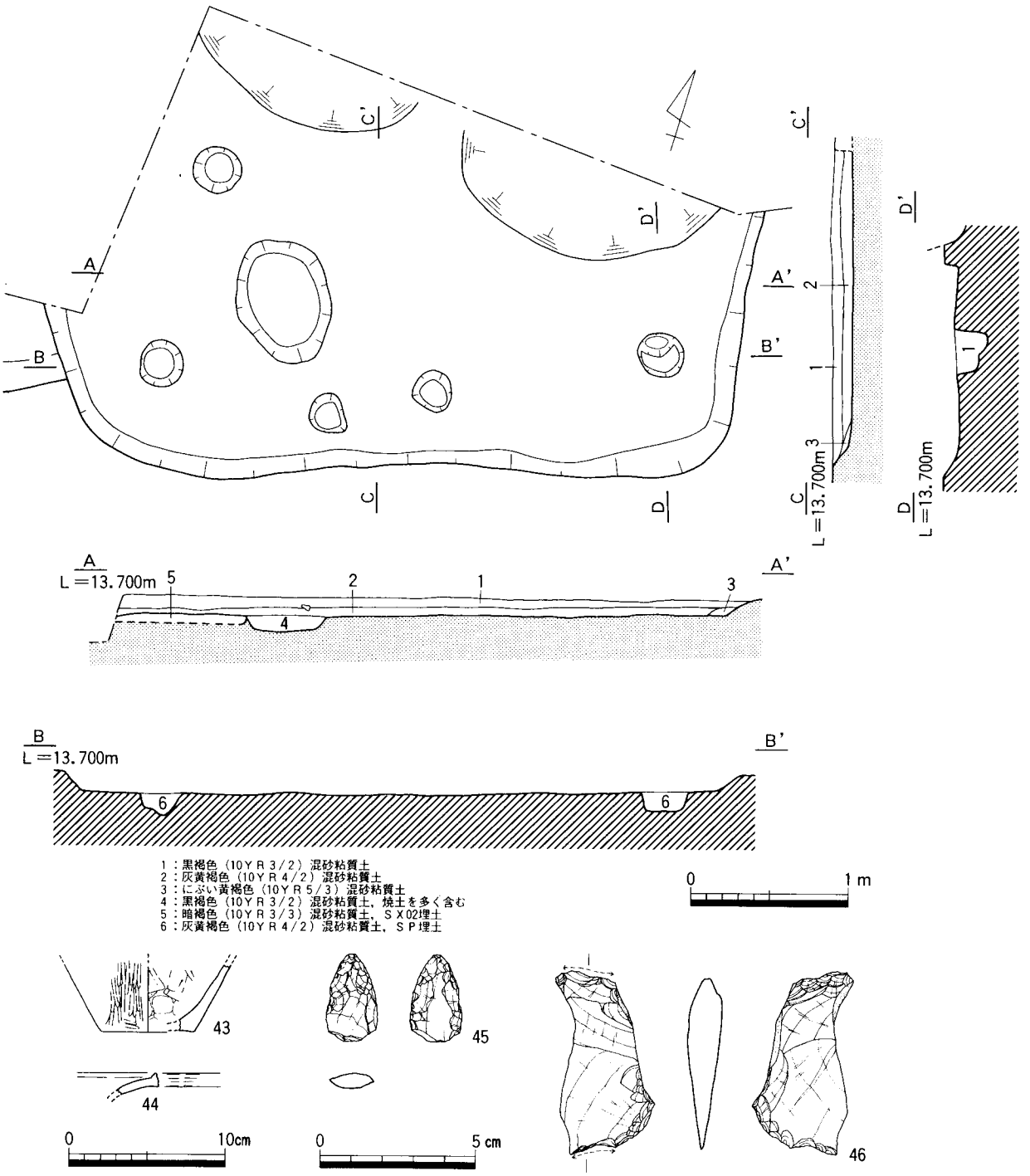
出土遺物から弥生時代中期後葉を中心とした時期に位置付けられる。



第17図　Ⅳ区ＤＳＸ02平・断面図（Ｓ＝１／40），出土遺物（Ｓ＝１／４）

Ⅳ区ＤＳＸ03

Ⅳ区Ｄ北端部グリットＥ４で検出した不明遺構である。重複関係から，Ⅳ区ＤＳＸ02に後出する。調査区外へ延長するため全容は不明であるが，平面形は方形を呈する。検出面から底面までの深度は0.2ｍ前後を測り，下層に灰黄褐色混砂粘質土，上層に黒褐色混砂粘質土が堆積している。底面においてピット５基，土坑１基を検出した。隅角付近のピットは検出した限りにおいてシンメトリーな状況を呈するため，竪穴住居の柱穴となる可能性も考えられるが，壁に近すぎる等問題が残る。土坑（ＳＫ01）は



第18図　Ⅳ区ＤＳＸ03平・断面図（Ｓ＝１／40），出土遺物（Ｓ＝１／４，１／２）

埋土に炭化物を包含しないため，中央土坑と判断できる材料に乏しい。

遺物の出土は数点に留まる

43は甕底部片である。外面にはヘラミガキ，内面にはケズリ調整が施される。44は壷口縁端部片である。端部は上方へ拡張され，２条の凹線文を施す。45はサヌカイト製の石鏃である。基部は不明瞭ながら，凸基式である。46は上下縁に敲打による潰れが認められ，楔形石器と考えられる。

出土遺物や周辺遺構との関係から，弥生時代中期後葉を中心とした時期に位置付けられる。

Ｖ区ＳＨ01

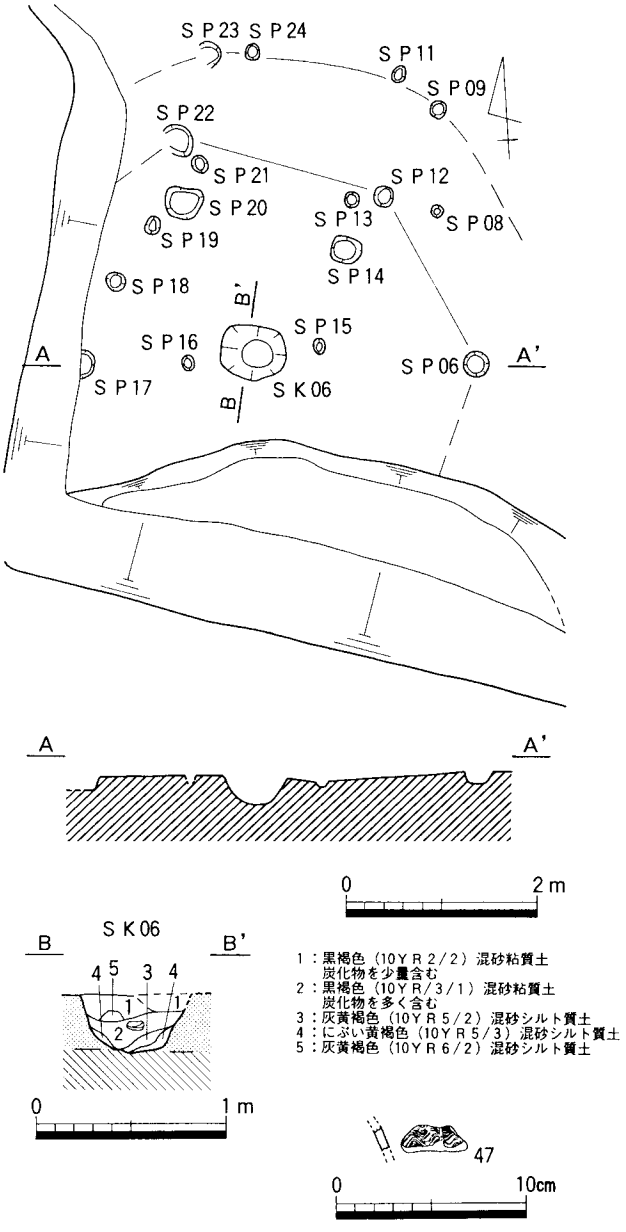
Ｖ区南端部グリットＥ３で検出した竪穴住居である。調査段階では確認できなかったため全容は不明であるが，Ｖ区ＳＫ06を中心に半径2.2m，1.8m前後の周縁上に柱穴が並び，径1.8m前後の柱穴群が主柱穴と考えられ，７主柱穴による多角形配置の構造に復元できる。

ＳＫ06は長軸長0.7m，短軸長0.58mのやや歪な隅丸方形を呈する。深度は0.3mを測り，断面形状は逆台形状を呈する。埋土は３層に大別でき，下層に灰黄褐色系混砂シルト質土（第19図土層注記番号３・４），上・中層に炭化物を包含する黒褐色粘質土（１・２）が堆積している。

また，ＳＫ06の両脇0.3mの位置に２基のピットを検出している。深度は0.1m前後と浅いが，ＳＫ06を挟みシンメトリーな配置をとる。

出土遺物は極めて少なく，図化可能なものはＳＫ06から出土した１点のみである。47は弥生土器壷体部細々片である。外面には櫛描波状文が施される。

１点のみの細々片ではあるが，出土遺物から弥生時代中期中葉前後の時期が与えられる。しかしⅣ区Ｄ～Ｖ区にかけて弥生時代前期前半末の遺構も少数ながら確認でき，土坑の両端で検出した二柱穴の存在もあり，詳細な時期決定には問題が残る。なお，竪穴住居の掘方は元来存在し，削平により失われたと考えられる。



第19図　Ｖ区ＳＨ01平・断面図（Ｓ＝１／80），ＳＫ06断面図（Ｓ＝１／40），出土遺物（Ｓ＝１／４）

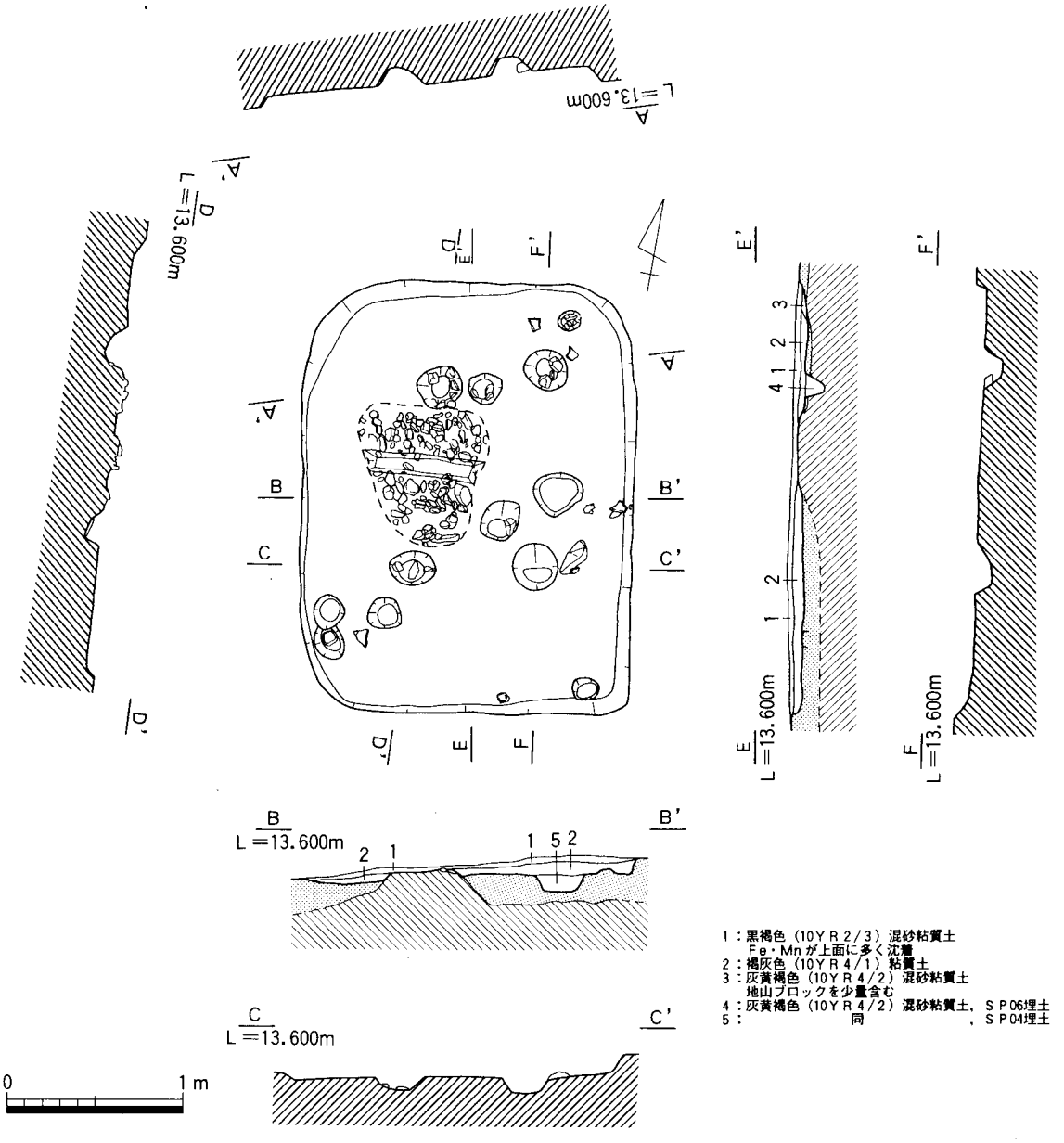
Ｖ区ＳＸ01

Ｖ区中央部グリットＥ３で検出した不明遺構である。後述するＶ区ＳＸ02と南北にほぼ並列しており，セット関係で，同時併存していた可能性が想定できる。平面形は長方形を呈し，長軸長2.5m，短軸長

2.0mを測る。検出面から底面までの深度は0.1m前後と浅く，削平が著しい。埋土は２層に細別でき，下層に褐灰色粘質土，上層に黒褐色混砂粘質土が堆積している。底面に貼床の設置は認められず，砂礫層Ｉとシルト質土層Ｉが底面となる。そこにはシミ状のものも含め12基のピットを検出したが，その配置に計画性は窺えない。シルト質土層Ｉを掘り抜き，砂礫層Ｉに到達するものもあり，柱穴として機能したピットも含まれるが，竪穴住居と仮定すれば無柱穴構造であったと考えられる。平・断面図では，四柱穴構造で復元しているが，ピット深度は安定せず，その配置も中心に位置しない。

なお，底面中央北西寄りにおいて，拳大～それ以下の砂岩礫が充填された不整形の土坑を確認したが，断割調査の結果，隆起した砂礫層Ｉの上面が底面に露出していることが判明している。

主柱穴や壁溝，中央土坑といった要素を欠き，竪穴住居の条件を満たすものではないが，居住施設かそれに類する遺構と思われる。

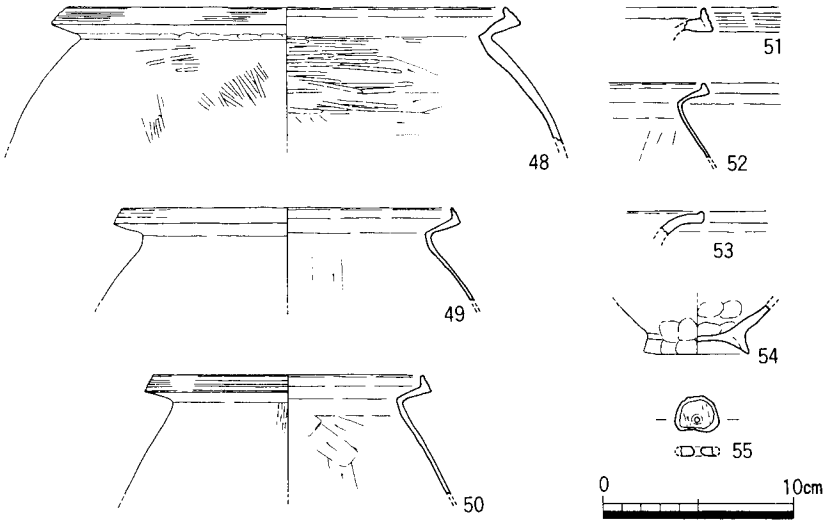


第20図　Ｖ区ＳＸ01平・断面図（Ｓ＝１／40）

出土遺物は稀薄で，弥生土器が小袋に2袋出土している。

48～53は甕である。48は口縁部から体部片である。口縁部は「く」字形に短く折れ，端部を上方に摘み出し，下方をわずかに挽き出す。端部の摩滅が激しいが，3条の凹線文が施される。体部内面はケズリ調整後，ヘラミガキが施され，口縁部との境に明瞭な稜を持つ。49は口縁部片である。破片からの口径復元による差異はあるが，50と同一個体である。50は口縁部である。口縁部は「く」字形に外反し，端部は上方へ強く挽き出す。端面には3条の凹線文，体部内面はケズリ調整が施される。口縁部と体部内面境には明瞭な稜をもつ。51は口縁端部片である。端部は上方へ強く挽き出し，広くシャープな端面には3条の凹線文が施される。52は口縁部片である。口縁部は「く」字形に外反し，端部は上方へ摘み出す。全体に器壁が薄い。53は甕口縁部小片である。端部は上方へ弱く摘み出す。54は台付き鉢底部とした。底部は明瞭に上げ底を呈し，脚端部を挽き出す。松並・中所遺跡では唯一の出土である。55は円形を呈する土器片のほぼ中央を穿孔したものである。

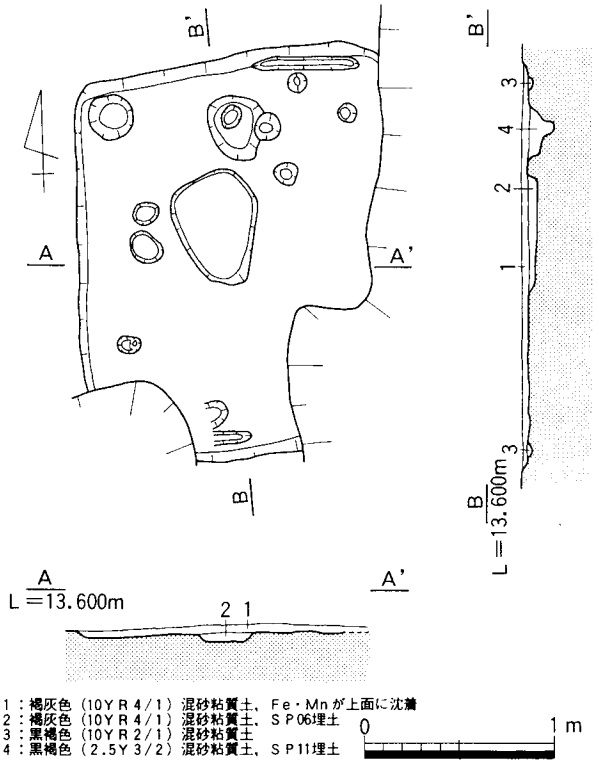
出土遺物や周辺遺構との関係から，弥生時代中期後葉を中心とした時期に位置付けられる。



第21図　V区ＳＸ01出土遺物（Ｓ＝１／４）

V区ＳＸ02

V区中央部グリットＥ３で検出した不明遺構である。V区ＳＸ01とは重複関係を持たずに，ほぼ並列した位置関係にある。ＳＤ01により東半が失われているため正確な平面形を把握することはできないが方形プランを呈する可能性が高い。規模は長軸長2.1m，短軸長は北東の隅角がやや丸味を有しており，復元すると1.7m前後になり，V区ＳＸ01に比してやや小型である。埋土は褐灰色混砂粘質土の単層で，検出面から底面までの深度が0.05mと浅い。底面には不規則な配置をとる10基のピットと土坑，溝状遺構を検出した。短軸側の立ち上がりに沿って幅0.06m前後，深さ0.05m以下の溝状遺構を検出しており居住施設であれば，壁溝ないし側板を立てた貫溝の可能性が考えられる。底面中央部に位置する土坑は深度が浅く，比熱痕，炭化物の包含が認められるも



第22図　V区ＳＸ02平・断面図（Ｓ＝１／40）

のではなく，中央土坑と冠することは困難である。

居住遺構の可能性は想定しづらいが，それに類する施設と思われる。また，出土遺物は極めて稀薄で，数点出土しているに過ぎない。Ｖ区ＳＸ01との位置関係や平面形等から，同時併存していた可能性が高く，弥生時代中期後葉を中心とした時期に位置付けられる。

土坑

Ｖ区ＳＫ07

Ｖ区中央やや南寄りグリットＥ３で検出した土坑である。平面形は径0.8m前後の円形を呈する。断面形状は浅い皿形を呈し，検出面から底面までの深度は0.03mと極めて浅い。埋土は黒褐色混砂粘質土の単層で，シルト質土層Ｉをブロック状に包含する。出土遺物は弥生土器細片が数点出土している。

56は壷ないし甕底部片である。外面はヘラミガキが施される。底部はかすかな上げ底を呈する。

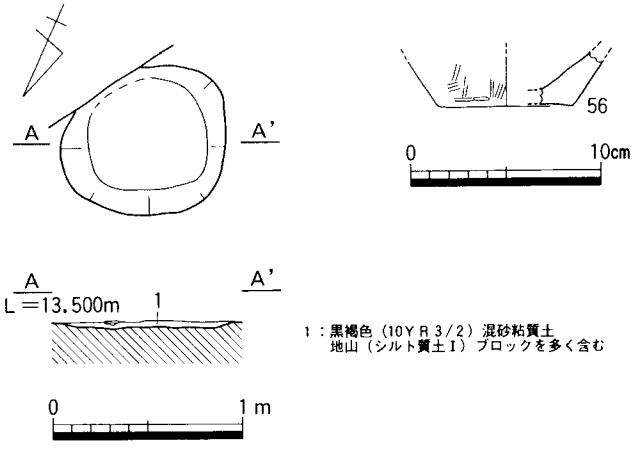
出土遺物や周辺遺構の状況から，弥生時代前期前半末を中心とした時期に位置付けられる。

Ｖ区ＳＫ10

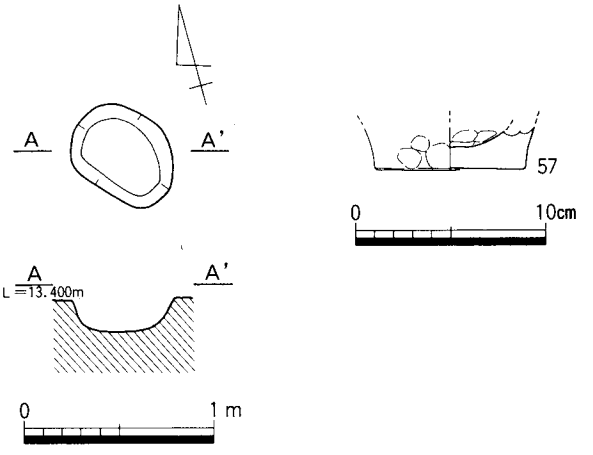
Ｖ区中央グリットＥ３で検出した土坑である。平面形は長軸長0.6m，短軸長0.45mの楕円形で，浅いＵ字形の断面形状を呈する。上面埋土は黒褐色混砂粘質土である。

出土遺物は弥生土器が数点出土している。57は壷もしくは甕底部片である。

出土遺物や周辺遺構の状況から，弥生時代前期前半末を中心とした時期に位置付けられる。



第23図　Ｖ区ＳＫ07平・断面図(Ｓ＝1/40),出土遺物(Ｓ＝1/4)

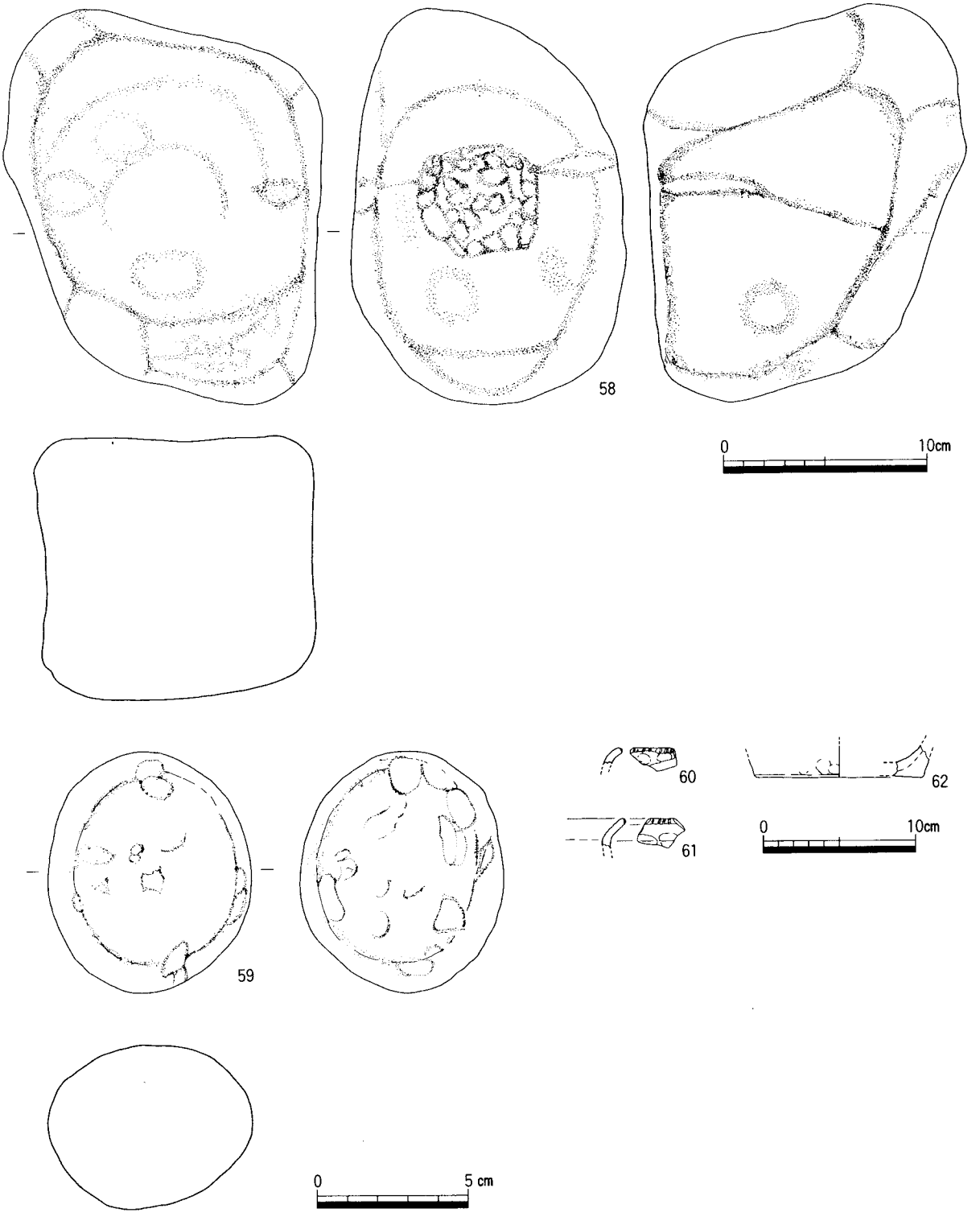


第24図　Ｖ区ＳＫ10平・断面図(Ｓ＝1/40),出土遺物(Ｓ＝1/4)

ピット出土遺物

58～62は柱穴出土遺物である。当該期に属する柱穴の埋土・所属時期の個別説明は，表13～17の一覧表で取り上げている。

58はⅣ区ＤＳＰ50出土の出土遺物である。角のとれた砂岩を利用した台石である。側縁の一部に敲打痕がみられ，広面にわずかな窪みがある。59はⅣ区ＤＳＰ49出土遺物である。拳大より一回り小さい砂岩円礫を利用した叩石である。側縁にかすかな敲打痕が認められる。60はⅣ区ＤＳＰ16，61はⅣ区ＤＳＰ26出土遺物である。弥生土器甕口縁部小片で，如意状口縁の端部には刻目が施される。62はⅣ区ＤＳＰ44から出土した弥生土器甕底部である。底部外縁には指押さえ，内面底体部境には粘土補填後，指押さえが施されている。



第25図　柱穴出土遺物（S＝1／3，1／2，1／4）

Ⅳ区ＤＳＸ05

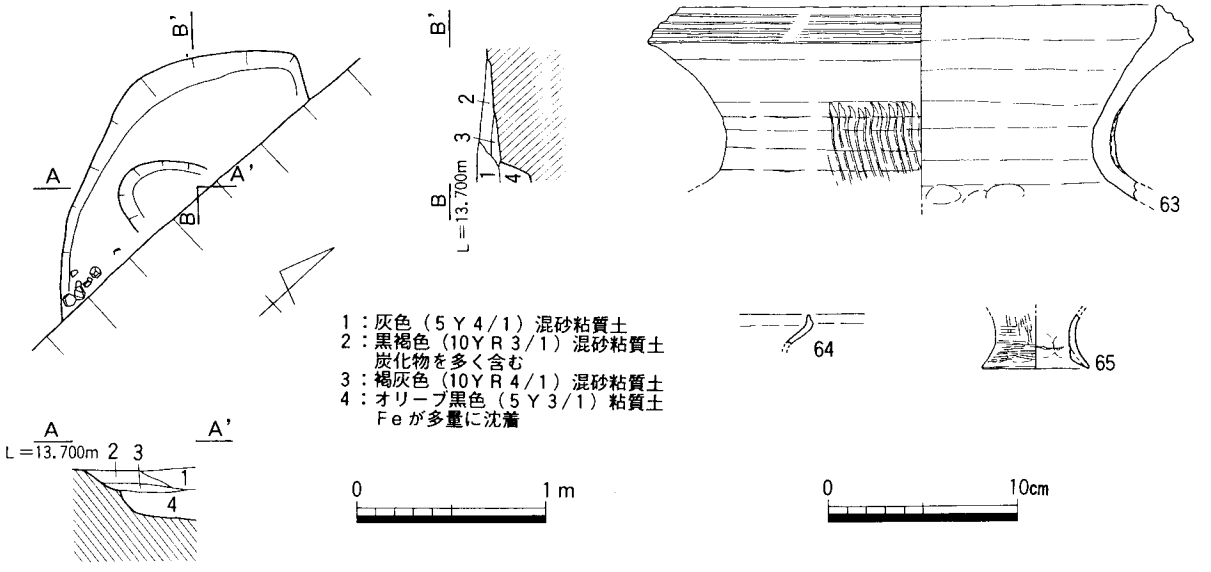
Ⅳ区Ｄ中央部グリットＥ４で検出した不明遺構である。ＳＤ01との重複関係により，東半が失われており全容は不明であるが，平面形は長軸長1.5m以上，短軸長1.3m前後を測る不整形を呈する。検出面から底面までの深度は0.15m前後を測り，断面形状は浅い皿形を呈する。埋土は２層に大別でき，下層

に褐灰色混砂粘質土，上層に炭化物を多く含む黒褐色混砂粘質土が堆積している。底面ほぼ中央には，楕円形を呈するであろう土坑が確認できる。埋土はオリーブ黒色粘質土の単層で，逆台形ないし皿形の断面形状である。

遺物は上層を中心に弥生土器が小袋で１袋出土している。

63は壷口縁部から頸部である。短く直立気味の頸部から大きく外反する口縁部が連続する。端部は上下，特に上方に強く拡張し，端面に４条の凹線文を施す。頸部は薄い粘土板貼付後，幅広の刻目を付けた後，横ナデ調整を加えている。Ⅳ区ＤＳＸ01出土37と同一個体である。64は甕口縁部片である。口縁部は「く」字形に外反し，端部は上方に強く摘み上げる。65は高坏ないし台付鉢の脚部片であろう。外面は丁寧なヘラミガキ，内面は指押さえが施される。

出土遺物や周辺遺構との関係から，弥生時代中期後葉を中心とした時期の所産と考えられる。



第26図　Ⅳ区ＤＳＸ05平・断面図（Ｓ＝１／40），出土遺物（Ｓ＝１／４）

溝状遺構

Ⅳ区ＤＳＤ02

Ⅳ区Ｄ北寄りグリットＥ４で検出した溝状遺構である。調査区に直交し，両端ともに調査区外へ延長する。主軸方位は東西を指向し，検出した限りでは直線状を呈する。検出長約9.9m，検出最大幅1.6m，平均幅1.2mを測る。断面形状はＶないしＵ字形で，平均深度は0.58mを測る。調査区内において溝底の勾配差は認められない。埋土は４層に細別でき，最下層に黄灰色砂質土，下層に褐色混砂粘質土，中層に灰黄褐色混砂粘質土，上層に暗黄灰色混砂粘質土がそれぞれ堆積している。第27図に上層の遺物出土状況を提示した。少量の土器細片に混じり，多量の礫が包含されている。礫種は花崗岩・安山岩がごく少量含まれるが，圧倒的多数を砂礫層Ｉを構成する砂岩で占めている。同様に中層にも比較的多量の砂岩を中心とした礫の包含が認められる。下層には礫の顕著な包含はなく，上・中層に比してやや砂質の割合が高い。

溝内より，弥生土器，石器が出土しており，小袋で３袋を数える。66～82，86は上層（一部，中層遺物の混入が考えられる），83～85が最下層遺物である。

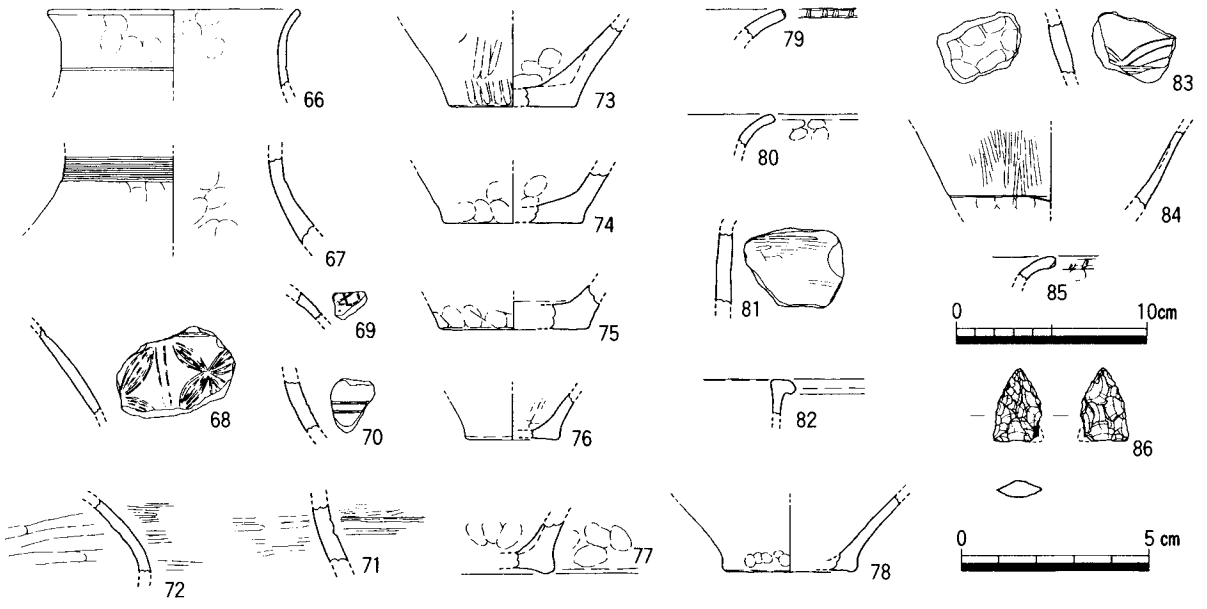
66～71は壷である。66は口縁部がやや間延び気味に緩やかに外反し，頸部に１条の沈線を有する。67は

頸部に櫛描直線文が施される。櫛原体は6条1単位である。68は口頸部境に1条以上の沈線を施し，頸部を2条の縦区画線で区切り，有軸の木葉文が描かれている。69は胴径部境に2条の沈線を施し，頸部に斜格子文が描かれる。70・71は頸部片で，2条の沈線が施される。72は壷胴部ないし肩部と考えられ，外面に横方向のヘラミガキ，内面にナデ調整が施される。73～78は壷ないし甕底部片である。73・77は内面底体部境付近に粘土が補充され，顕著な指押さえが施される。76は内面にケズリ調整がみられる。79～82は甕である。79・80は如意状口縁で，79は端部に刻目が施される。81はやや器壁が厚く，屈曲部に沈線を有する。82は逆L字形口縁の甕で，当遺跡では唯一の出土である。

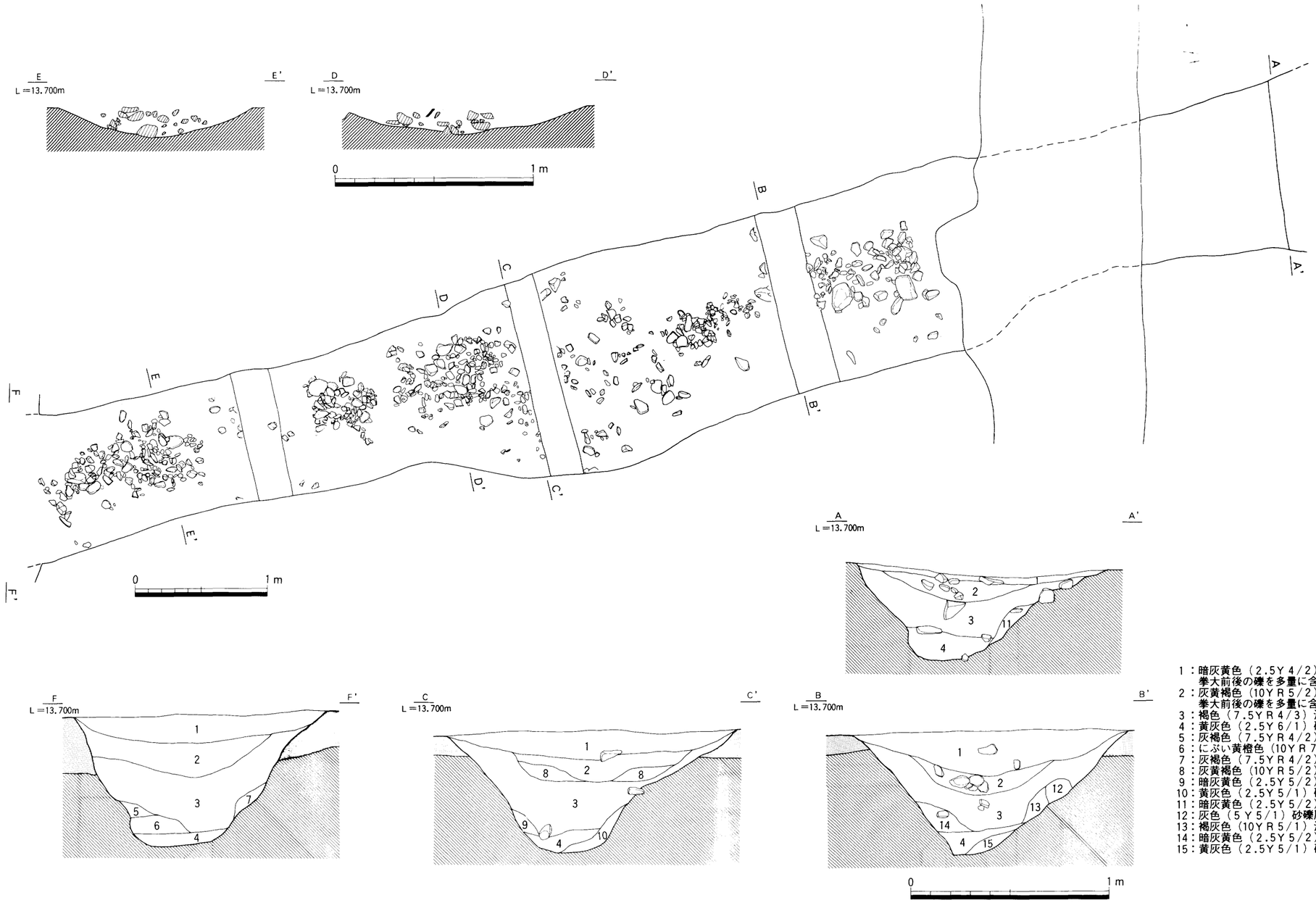
83は壷である。頸胴部境に1条以上の沈線を施し，頸部に3条1単位の極めて細い沈線により，上向きの重弧文が描かれる。

84は甕底部である。底部外縁やや上方に細い1条沈線が施され，それより上部には縦方向のヘラミガキが認められる。85は甕口縁部片である。如意状口縁で，端部に刻目が施される。86は平基式の打製石鏃である。全長1.95cmと小型である。

出土遺物の年代観から，下層は弥生時代前期前半末（森下ＩＣ期）の埋没が考えられ，上層（中層含む）の出土遺物の大半もおおむねこの時期に該当する（森下英1998）。しかし，67・72・76・82は明らかにその時期より後出した時期の遺物である。67・82は櫛描文の施文，逆L字形甕という点から前期末～中期初頭の年代が与えられる。76は内面ケズリ調整から中期中葉後半以降の所産である。72は不明であるが，おおむね76と同時期の所産と考えたい。この4点の出土遺物に周辺遺構の状況を踏まえると，最下層の埋没は弥生時代前期前半末に位置付けられ，中・上層の埋没が弥生時代前期末～中期初頭にかけて進行し，上層の最終埋没は弥生時代中期後葉であったと考えられる。



第28図　Ⅳ区ＤＳＤ02出土遺物（Ｓ＝１／４，１／２）



1：暗灰黄色（2.5Y 4/2）混砂粘質土，上層
　拳大前後の礫を多量に含む
2：灰黄褐色（10YR 5/2）混砂粘質土，中層
　拳大前後の礫を多量に含む
3：褐色（7.5YR 4/3）混砂粘質土，下層
4：黄灰色（2.5Y 6/1）砂質土，最下層
5：灰褐色（7.5YR 4/2）混砂粘質土
6：にぶい黄橙色（10YR 7/2）砂質土
7：灰褐色（7.5YR 4/2）混砂粘質土
8：灰黄褐色（10YR 5/2）混砂粘質土
9：暗灰黄色（2.5Y 5/2）混砂粘質土
10：黄灰色（2.5Y 5/1）砂質土
11：暗灰黄色（2.5Y 5/2）混砂粘質土
12：灰色（5Y 5/1）砂礫層ブロック
13：褐灰色（10YR 5/1）混砂粘質土
14：暗灰黄色（2.5Y 5/2）混砂粘質土
15：黄灰色（2.5Y 5/1）砂質土

第27図　Ⅳ区ＤＳＤ02断面図（Ｓ＝１／20），遺物出土状況（Ｓ＝１／30）
上層出土石材エレベーション図（Ｓ＝１／20）

自然河川

松並・中所遺跡では，３条の自然河川を検出し，その想定復元図を第29図に示した。調査段階ではⅢ区Ｃ～Ⅳ区ＣＳＲ01（河川Ａ）はⅦ区ＡＳＲ01（河川Ｂ）に連続すると考えていた。しかし，西ハゼ土居遺跡との遺構の連続関係では対応せず，河川Ｂは河川Ａから派生し，再度合流する小規模な河川である可能性が高いと考えられる。しかし，その堆積状況や埋没時期はほぼ合致しており，機能・埋没段階に共通性が認められる。弥生時代前期前半末に埋没が開始され，最終埋没は弥生時代中期後葉であり，遺構の在り方とおおむねパラレルな状況を示す。また，土壌分析の結果，Ⅳ区ＣＳＲ01最上層から高密度のイネのプラント・オパールを検出しており，稲作が行われていたことが証明されている。

一方，Ⅶ区ＢＳＲ03（河川Ｃ）は，河川Ａ・Ｂの最終埋没に前後する時期になって機能している。当遺跡では弥生時代中期末を中心とした時期の遺物を検出したが，西ハゼ土居遺跡では弥生時代終末～古墳時代初頭の遺物が出土しており，最終埋没はその段階まで下る可能性が高い。

Ⅲ区Ｃ～Ⅳ区ＣＳＲ01

Ⅳ区を中心に検出した自然流路である。Ⅲ区Ｃ，Ⅳ区Ａ，Ⅳ区Ｃでの川岸検出状況に加え，周辺地形，西ハゼ土居遺跡との連続関係を考慮すると，Ⅲ区Ｃをかすめ，Ⅳ区Ａ・Ｃを両川岸とし北北東への走行する。埋土観察では，流水を示す砂質土の存在が確認できず，粘性の高い粘質土を埋土にもつ点から，湿地化したよどんだ流路であったと考えられ，その検出位置は遺構検出面下位の堆積状況から見ると，自然堤防の形成後における相対的低地部分であったと考えられる。

遺物は弥生時代前期前半末，弥生時代中期後葉の土器が出土しているが，出土点数は少なく20リットルコンテナで３箱程度出土している。

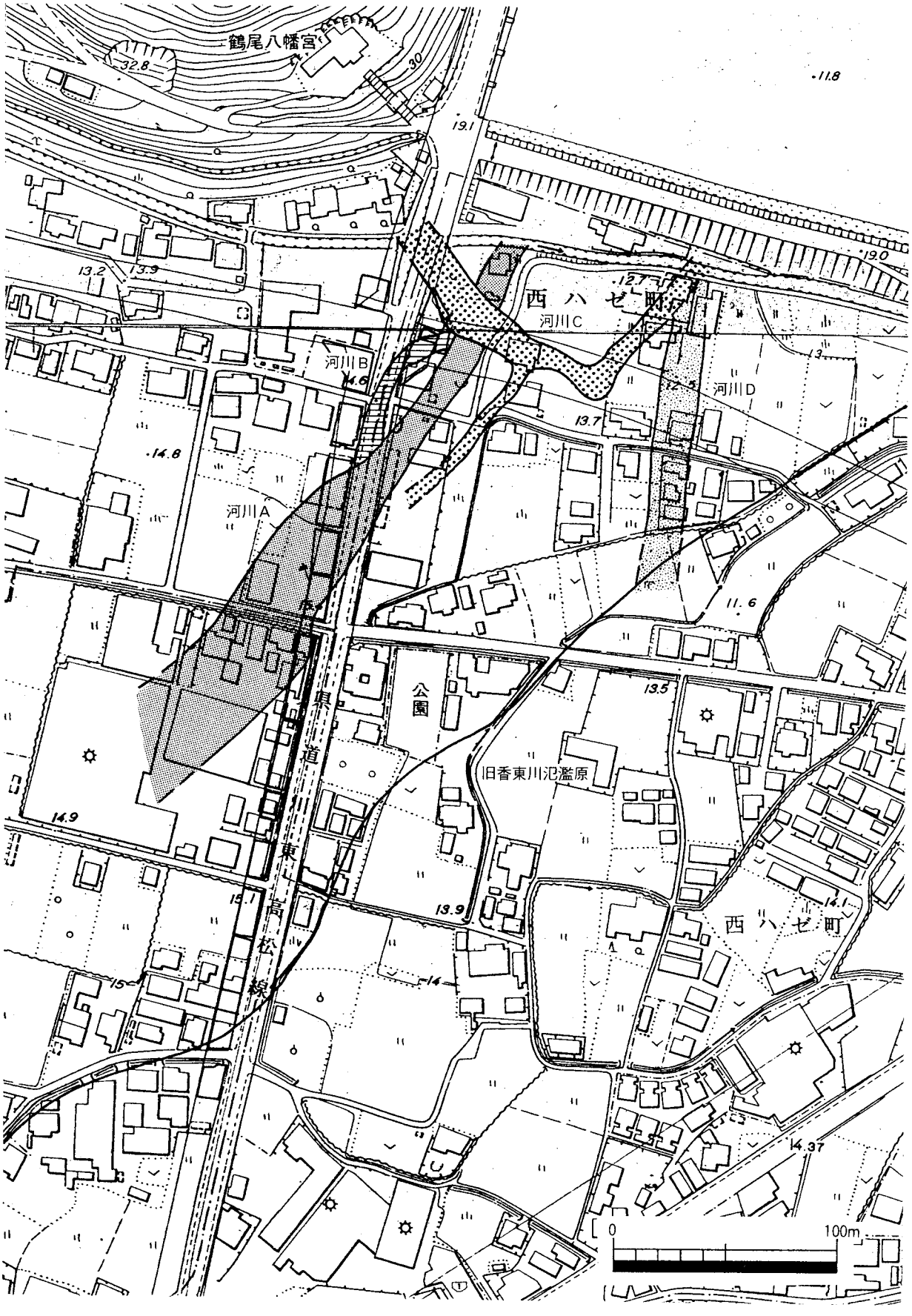
以下，各調査区ごとに層序関係や遺物（出土状況）を報告する。

Ⅳ区ＣＳＲ01

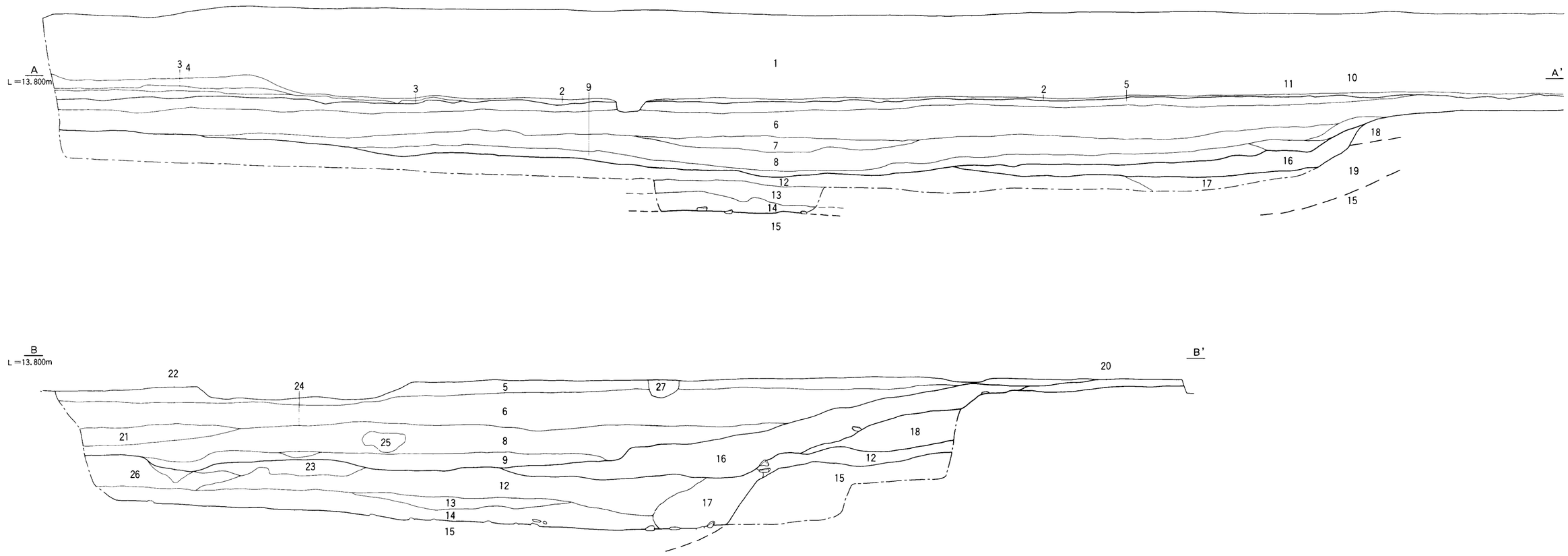
Ⅳ区Ｃ北部グリットＥ５で北西側の川岸を検出している。立ち上がりは緩やかで，流水による抉れは確認できない。埋土はおおむね３層に大別でき，下層に黄灰色混砂シルト質土（第30図土層注記番号９，以下番号のみ記載），中層に黒褐色粘質土（８），上層に黒褐色粘質土（６），最上層に灰黄褐色混砂粘質土（５）がそれぞれ堆積している。下層，中層の最深部付近は底面に沿ったレンズ状堆積を呈するが，全体的には上層，最上層と同様に水平堆積層といえる。溝底に流水を示す砂質土層やラミナーは認められず，後背湿地化した穏やかな環境下にあった状況が復元できる。なお，各埋土の花粉分析を実施したが，花粉はほとんど検出されないか，まったく検出できず，有機質遺体の分解される乾燥あるいは乾湿を繰り返す堆積環境であると推測されている。

また，埋土の断面観察では畦畔は確認できないが，土壌分析では最上層・上層・中層からイネのプラント・オパールを検出し，その密度から最上層に関してのみ稲作が行われていたことが判明している。最上層埋土上面は削平により失われており，畦畔は検出できなかったと考えられる。

一方，下層下位の地山堆積状況であるが，第２節で示したように砂礫層Ｉを除き明瞭な基盤層は存在しない。埋土観察では，シルト質土層Ⅱ・Ⅲが，弥生時代の遺構検出面であるシルト質土層Ｉや砂礫層Ｉの上層に堆積しているが，確認した限りでは同層位からの遺物の出土はなく，ＳＲ01出土遺物の最も古い段階である弥生時代前期前半末以前に，相対的低地に堆積したものといえる。



第29図　松並・中所遺跡周辺河川想定図（S＝1／2,500）



1：花崗岩造成土
2：褐灰色（10Ｙ Ｒ 5／1）混砂粘質土，耕作土
3：にぶい黄褐色（10Ｙ Ｒ 5／4）粘質土，床土，褐灰色（10Ｙ Ｒ 5／1）混砂粘質土ブロックを含む
4：にぶい黄褐色（10Ｙ Ｒ 5／4）粘質土，床土，（土壌分析Ⅵ層）
5：灰黄褐色（10Ｙ Ｒ 5／2）混砂粘質土，最上層（土壌分析Ⅰ層）
6：黒褐色（10Ｙ Ｒ 3／2）混砂粘質土，Ｆｅの沈着が多量に認められる，上層（土壌分析Ⅱ層）
7：黒色（2.5Ｙ 3／1）混砂粘質土，Ｆｅの沈着が多量に認められる，中層（土壌分析Ⅲ層）
8：黒褐色（2.5Ｙ 3／1）粘質土，Ｆｅの沈着が多量に認められる，炭化物を多く含む，中層（土壌分析Ⅳ層）
9：黄灰色（2.5Ｙ 5／1）混砂シルト質土，粘性が極めて高い，下層（土壌分析Ⅴ層）
10：灰黄褐色（10Ｙ Ｒ 6／2）シルト質土
11：黄灰色（2.5Ｙ 5／1）混砂シルト質土，Ｆｅを多く含む明黄褐色（10Ｙ Ｒ 6／6）シルト質土がブロック状に混じる
12：灰色（5 Ｙ 5／1）砂層，（土壌分析Ⅶ層）
13：灰色（5 Ｙ 6／1）砂層
14：にぶい黄褐色（10Ｙ Ｒ 5／4）砂層，12～14；砂質土層Ⅱ
15：灰色（10Ｙ 5／1）砂礫層，砂礫層Ⅰ
16：灰色（5 Ｙ 5／1）混砂シルト質土，シルト質土層Ⅱ
17：灰色（7.5Ｙ 4／1）シルト質土，土層注記番号12をブロック状に含む
18：暗灰黄色（2.5Ｙ 5／2）砂礫層，砂質土の割合が高い，砂礫層Ⅳ
19：砂質土層Ⅱ
20：にぶい黄褐色（10Ｙ Ｒ 5／4）混砂シルト質土，シルト質土層Ⅰ
21：暗褐色（10Ｙ Ｒ 3／3）混砂粘質土，土層注記番号６と同質であるが，Ｆｅの沈着が少ない
22：黄灰色（2.5Ｙ 5／1）砂質土，土層注記番号26層が変色，砂質土層Ⅱ
23：黄灰色（2.5Ｙ 5／1）砂質土，土層注記番号12層が変色，砂質土層Ⅱ
24：褐灰色（10Ｙ Ｒ 5／1）混砂シルト質土
25：黄灰色（2.5Ｙ 4／1）砂質土
26：灰黄色（5 Ｙ 5／1）砂層，砂質土層Ⅱ
27：黒褐色（2.5Ｙ 3／1）粘質土，攪乱ピット埋土

第30図　Ⅳ区ＣＳＲ01断面図，Ⅳ区Ｃ西壁面図（Ｓ＝１／40）

遺物は下層・中層の川岸近くのグリットＥ５付近で比較的多く出土している。上層の遺物出土状況は散漫な分布を示し，出土位置における偏在性は認められない。最上層には灰黄褐色混砂粘質土が堆積しているが，上層と一括して出土遺物の取り上げは行っている。各層の出土遺物は，87～99は上層，100～115は中層，116～127は下層出土遺物である。128～135は出土層位不明遺物である。

87～90は壷である。87は口縁部片で，端部を上下に拡張し，２条の凹線文を施す。口縁部内面にはヘラ状工具により斜線文が描かれる。88は口縁部片である。端面上端は摘み出し，下端は口縁部外面と一連のナデ調整により，拡張している。摩滅により，凹線文の有無は確認できない。口縁部には径２㎜の孔穴がみられる。89の頸部はやや外反しながら外上方に延び，頸胴部境に２条のヘラ描き沈線を有する。口縁端部は内上方に僅かに拡張させ，口唇部内上端に刻目を施す。同様の器形は中期中葉前半に確認できるが，刻目は口唇部外面に施され，胴頸部境には押捺凸帯を貼付する個体が讃岐地方では一般的である。ヘラ描き沈線や胎土，色調から前期に遡る可能性も否定できず，刻目や沈線はみられないが，器形的には鴨部・川田遺跡Ｉの第１分冊報文番号59の壷に類例が求められる（森1997）。90は頸胴部片である。頸部はやや内傾し，胴部上半に多条化した櫛描直線文が描かれる。91～94は甕である。91～93は「く」字形に屈曲する口縁部を有し，端部を上方に摘み出す。91の端面には１条の凹線文を施すが，その他は不明である。91は口縁部内面，93は胴部上半内面にヘラミガキが施される。94は甕口縁部片である。如意状の口縁部で，端部下端に刻目を持つ。95は壷ないし甕底部片である。内面は指押さえ後，ケズリ調整が施される。96は甕底部片である。外面はヘラミガキ，内面は底体部境に指押さえが施されるが，体部のケズリ調整の有無は不明である。底部はわずかに上げ底を呈する。97は高坏もしくは鉢の口縁部片である。口縁端部は内外へ拡張し，上端面に３条の凹線文を施す。口縁部外面にも凹線文がみられる。98は高坏もしくは鉢である。坏部は内湾気味に立ち上がり，端部手前で大きく折れる。口縁部外面には凹線文が施される。

99は上下縁に敲打による潰れが認められ，楔形石器と考えられるが，先端部に細部調整が施され，三角形状を呈する点から，楔形石器を利用した石鏃未製品の可能性もある。

上層出土遺物は弥生時代中期後葉を中心とした時期の所産であるが，90は弥生時代中期初頭，94は弥生時代前期に位置付けられる。

100・101は壷である。100は頸部片で，下半が２条，上半が１条以上の平行沈線に区切られた頸部文様帯に３条単位の複線山形文が描かれる。101は口縁部である。「く」字形の短い口縁部をもち，端部は上下に拡張し広い端面を創出し，３条の凹線文を施す。頸部には刻目凸帯を巡らす。102～106は甕である。102・103は「く」字形に屈曲する口縁部を有し，端部は102が上方，103が上下に拡張し，端面に２条の凹線文を施す。104は「く」字形に外反する口縁部を有し，端部は丸く収める。外面頸部には強い横ナデ調整が加えられる。105は口縁部片である。如意状口縁で，緩やかに外反する。106は凸帯文系の甕口縁部片である。端部は丸く収め，断面三角形の凸帯を端部下１㎝の位置に貼付している。摩滅により刻目凸帯になるか否かは不明である。当遺跡では唯一の出土である。107～109は高坏ないし鉢の口縁部である。坏部は口縁部手前で大きく内湾し，口縁端部を内外に拡張し，口縁部外面には比較的幅の広い凹線文Ｃ種が施される。110・111は高坏脚部片である。110は直線的に内傾するが，脚端部に断面三角形状の粘土帯を貼付しているため，裾が広がり，明瞭な段を有する。外面には下から刺突文，山形文，平行線文，斜格子文がヘラ状工具で描かれ，内面は横方位のケズリ調整が施される。111はスカート状に広がり，脚端部に段をもつ。外面脚端部に刺突文を有し，下位には横方位のミガキ，軸部には縦方位

のミガキが施され，内面にはケズリ調整がみられる。112は底部の可能性も残るが，蓋と判断した。天井部は窪み，端部は外上方に突出し，沈線を１条施す。113は蓋である。天井部は窪み，外面に指押さえ調整を施すことにより端部を突出させる。

114は打製石鏃とした。有茎式と凸基式の中間形態の基部を持ち，鏃身は長い。先端を欠くが，重量は4.18ｇを測る。115は上下縁に敲打による潰れが認められ，楔形石器と考えられる。

以上，中層出土遺物は弥生時代前期前半末と中期後葉の時期の遺物が混在している。

116～118は壷口縁部から頸部である。器形，調整（施文），胎土，色調において共通し，接合関係はないが，同一個体であり，116に関しては図上での復元を行った。口径15.4cmを測る小形壷で，体部は算盤玉状を呈し，口縁部は外面に指押さえを施すことにより比較的強く外反させ，口頸部境に段を有する。頸部は強く内傾し，頸胴部境に沈線を１条施している。頸部には浅く細い４条沈線で縦区画線を施している。森下編年における位置付けを見ると，段系壷②（「段の中程で強いナデあるいは指押さえで器形が屈曲し段下端が内傾面を留めながら口縁部の外反が大きくなり，・・・」）に該当し，基準資料として提示する「龍川五条遺跡Ｉの854」と酷似する（森下1998）。119～121は甕である。119は口縁部片で，口縁部は強く屈曲し，端部を上方に挽き出す。端面には凹線文はみられず，口縁部内外面には横ナデ調整が施される。体部外面にはミガキ状の縦ハケ，内面にはケズリ調整が施される。120と121は器形，色調，焼成等から同一個体と考えたが，図上での復元は行っていない。口縁部は如意状に緩やかに外反し，端部に刻目を施す。頸部外面には半裁竹管文，体部にはヘラミガキ，底部外面には丁寧なヘラミガキ，内面底体部境には顕著な指押さえがそれぞれ施される。底面は平底である。122は壷もしくは甕底部片である。底部は粘土板を充填させることにより成形され，底部外面には，その接合痕および接合時の指押さえが顕著に施される。123は甕底部片である。

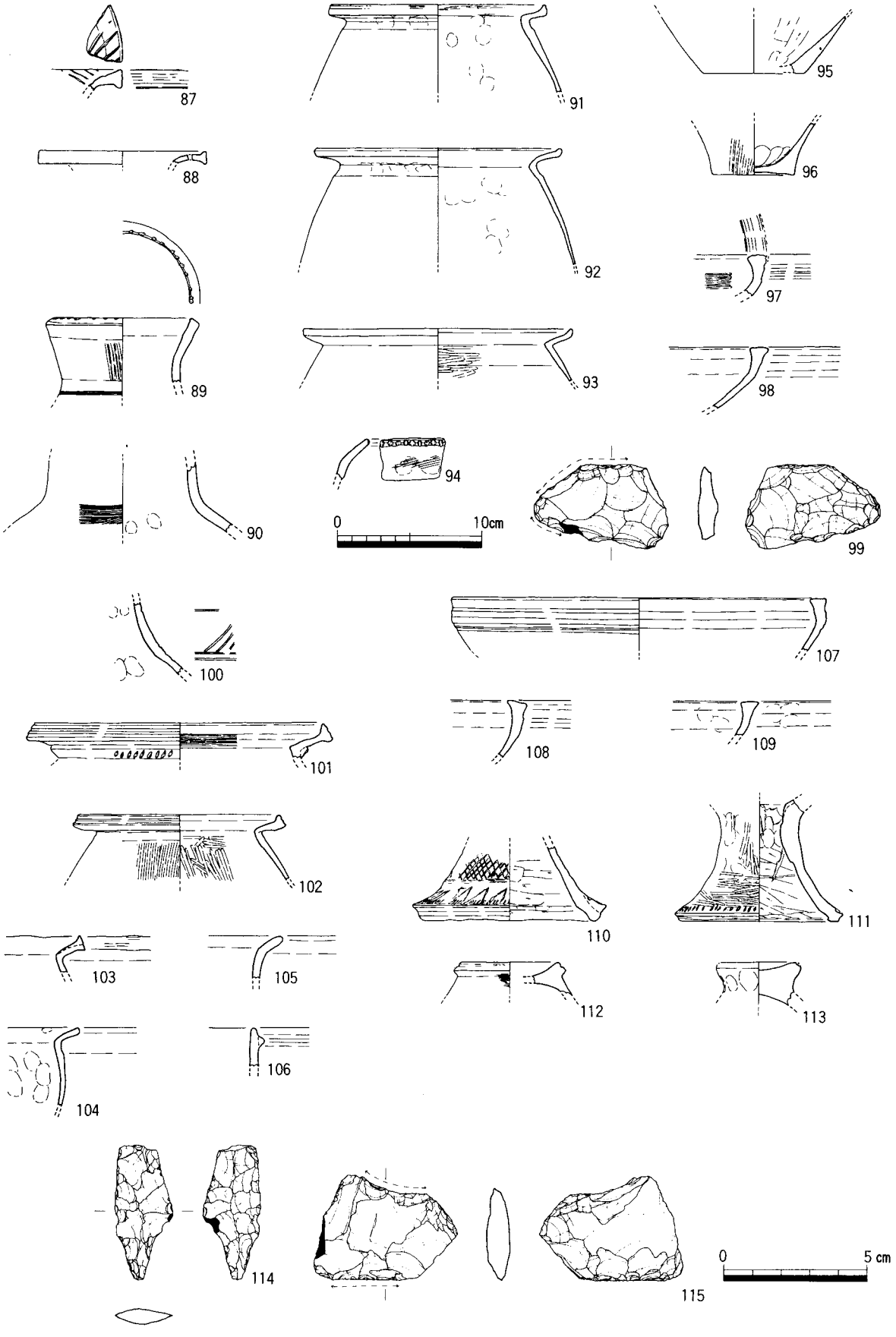
124はサヌカイト製石錐である。125はスクレイパーである。126は上下縁に敲打による潰れが認められ，楔形石器と考えられる。127は素材剥片である。形状はスクレイパーと似るが，刃部調整は確認できない。

下層出土遺物は119が弥生時代中期後葉の所産であるが，その他は弥生時代前期前半末に属するものである。石器も後者の時期に属すると考えられる。

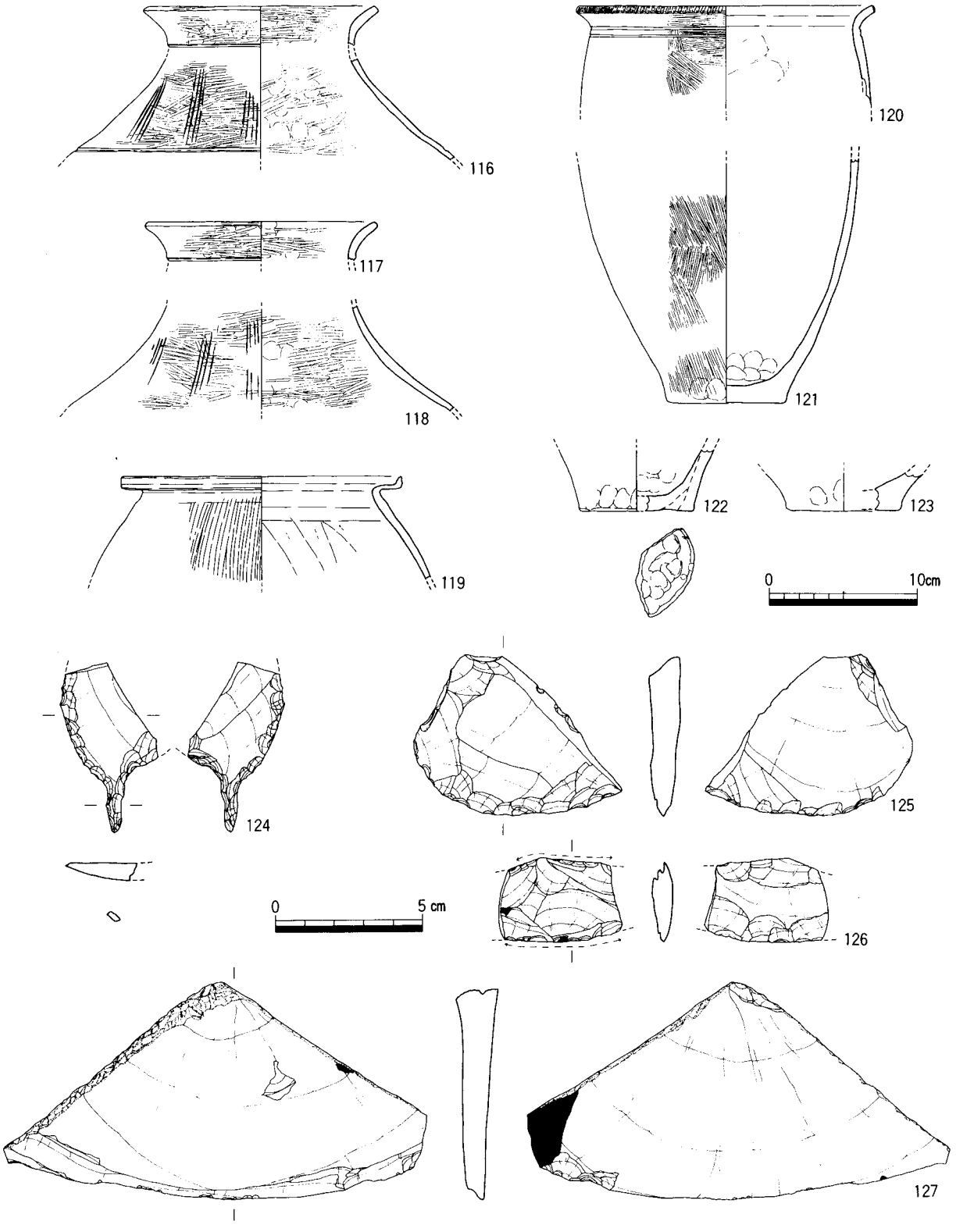
128は壷口縁部小片である。端部は上に軽く，下方に大きく拡張し，刻目文を施す。129は壷ないし甕口縁部片である。口縁部は直立し，水平な端面を持つ。頸部には突帯を１条巡らす。同様の器形は松並・中所遺跡では出土していない。130は甕口縁部片である。口縁部は内湾気味に外反し，端部を上方に強く拡張し，２条の凹線文を施す。131は甕口縁部片である。口縁部は如意状に外反し，端部に刻目を施す。鉢になる可能性も否定しきれない。132・133は甕底部片である。133は甕底部片である。底部はわずかに上げ底を呈し，内面底体部境に指押さえが施される。134は鉢ないし高坏口縁部片である。体（坏）部は内湾気味に立ち上がり，端部に水平面を有する。口唇部外面には刻目が施される。

135は太形蛤刃石斧の側縁と思われる。結晶片岩製で，外面には顕著な研磨痕が認められる。

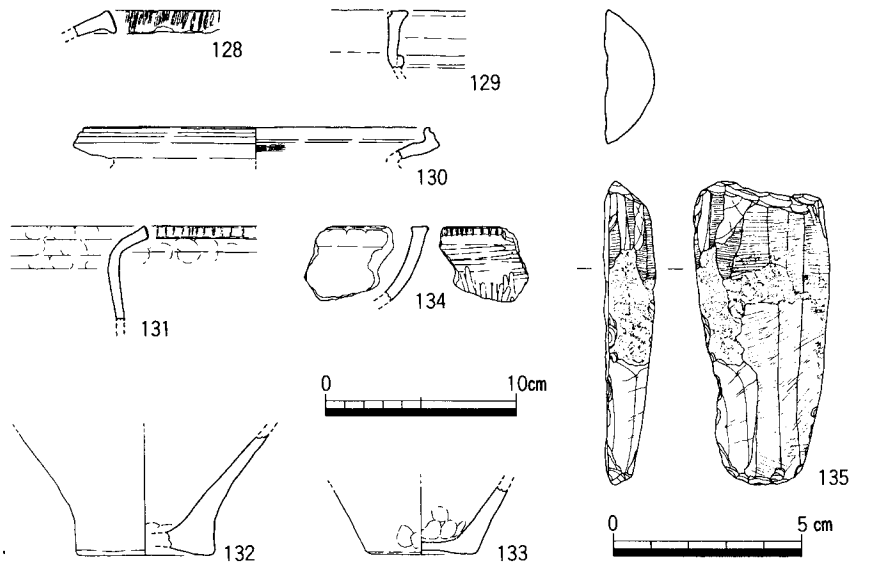
以上Ⅳ区ＣＳＲ01出土遺物からその埋没時期を想定すると，下層が弥生時代前期前半末，中層が弥生時代前期前半末と弥生時代中期後葉，上層が弥生時代中期後葉と考えられ，稲作が立証された最上層は中期後葉～末に位置付けられる。



第31図　Ⅳ区ＣＳＲ01出土遺物１（上・中層，Ｓ＝１／４，１／２）



第32図　Ⅳ区ＣＳＲ01出土遺物２（下層，Ｓ＝１／４，１／２）



第33図　Ⅳ区ＣＳＲ01出土遺物３（層位不明，Ｓ＝１／４，１／２）

Ⅳ区Ａ・ＢＳＲ01

Ⅳ区Ａ南東部グリットＤ８で緩やかに立ち上がる南東側の川岸を検出している。Ⅳ区Ａ・Ｂは最深部で0.5mと極めて浅く，埋土はⅣ区Ｃの上層，最上層に対応する層位が確認できる。遺物は弥生土器細々片が小袋で１袋を数える程度である。

Ⅲ区ＣＳＲ01

Ⅳ区Ａで検出した川岸の延長部に位置するが，削平や遺構の重複関係により明瞭な川岸は検出できない。埋土はⅣ区Ａ・Ｂと同様である。

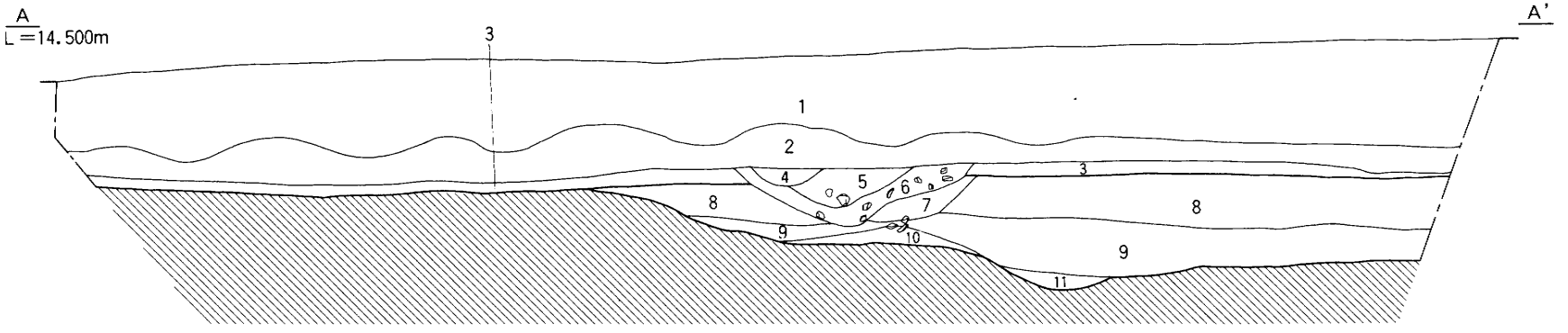
Ⅶ区ＡＳＲ01

調査区をＳＲ01が南西から北東方向に横断し，両岸を検出している。流路幅は８ｍを測り，浅い舟底状の断面形状を呈する。深度は最深部で0.5mを測り，埋土は３層に細別できる。下層に暗灰黄色砂質土(第35図土層注記番号３)，中層ににぶい黄橙色混砂シルト質土(２)，上層に暗黄褐色混砂粘質土(１)がそれぞれ堆積している。

遺物はすべて上層から出土し，小袋に２袋を数える。出土位置に偏在性は認められず，Ⅳ区Ａ・Ｂ同様散漫な出土状況である。

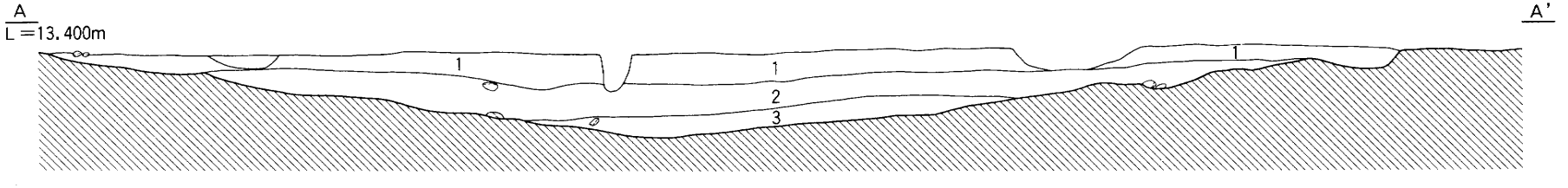
136～139は甕ないし壷底部片である。136・138は円盤充填により底部が成形され，それを覆うように粘土板が貼付される。140・141は壷口縁部片である。端部は上方に強く突出し，不明瞭ながら凹線文が施される。142は高坏もしくは鉢である。坏部は内湾し，端部は内傾する面を有する。外面にはヘラミガキが施される。143は高坏脚部片である。脚部下方外面に粘土帯を貼付し，裾広がりの器形を創出し，脚端部にアクセントを加えている。外面脚端付近には刺突文，下～中位には縦方向の直線文を施している。内面には横方向のケズリ調整がみられる。

144は上下縁に敲打による潰れが認められ，楔形石器と考えられる。145は打製石庖丁片である。抉りを有し，刃部は両刃である。抉りは中央部を中心に摩滅が認められる。146はスクレイパーである。刃



1：造成土
2：黄灰色（2.5Y 5/1）粘質土，近現代耕作土
3：にぶい黄橙色（10YR 6/3）粘質土，近現代床土
4：黒褐色（10YR 5/1）混砂粘質土，SD01埋土（4～6）
5：褐灰色（10YR 4/1）混砂粘質土
6：灰黄褐色（10YR 5/2）混砂粘質土，5cm以下の小礫を多く含む
7：褐灰色（10YR 6/1）粘質土，SD02埋土
8：灰黄褐色（10YR 4/2）粘質土，SR01埋土上層
9：明褐灰色（7.5YR 7/1）砂質土，SR01埋土下層
10：褐灰色（10YR 6/1）混砂粘質土，2cm以下の小礫を含む
11：褐灰色（10YR 5/1）粘質土

第34図　Ⅳ区A南壁面図（S＝1／40）

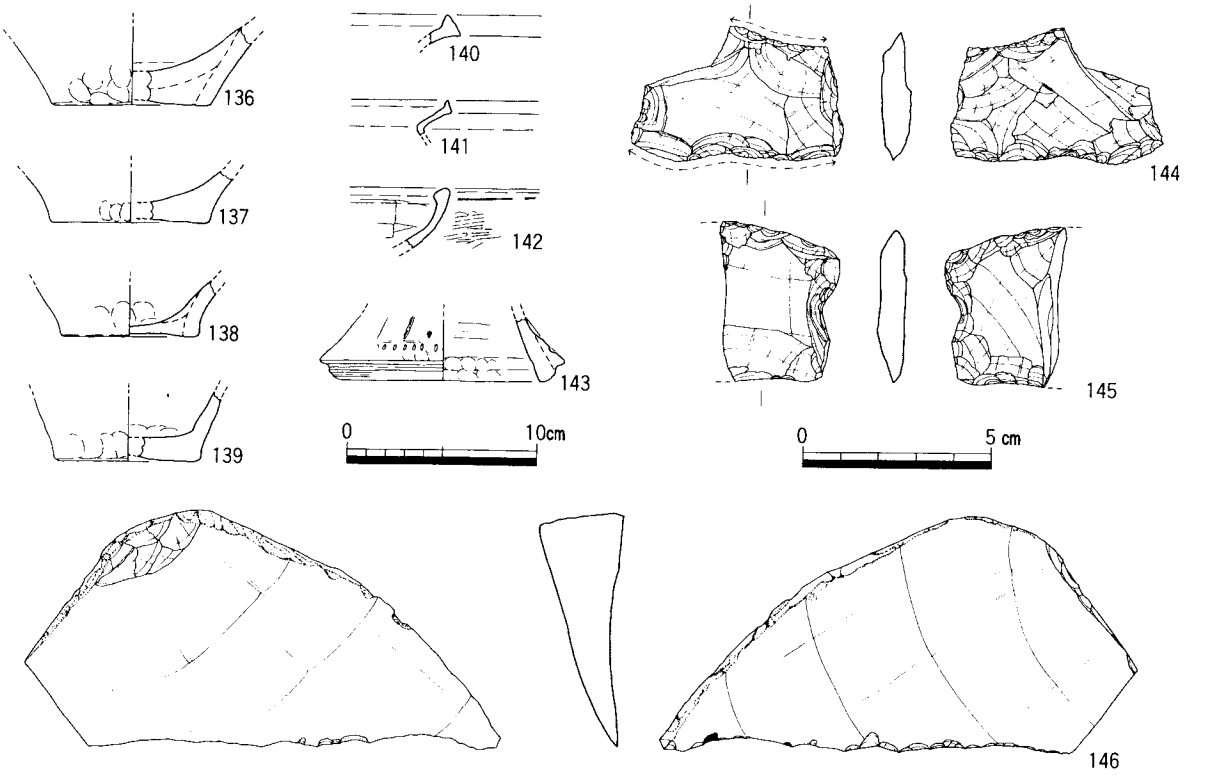


1：灰黄褐色（10YR 4/2）混砂粘質土，SR01埋土上層，Feの沈着が多くみられる
2：にぶい黄橙色（10YR 5/3）混砂シルト質土，SR01埋土下層，Feの沈着が多量にみられる
3：暗灰黄色（2.5Y 5/2）砂質土，SR01埋土最下層，粗い砂利を多く含む

第35図　Ⅶ区ASR01断面図（S＝1／40）

部は直線的で，片面調整加工を施す。背部には自然礫面を残す。

出土遺物は弥生時代前期と弥生時代中期後葉の２時期を中心とした位置付けが可能で，前者はⅣ区Ｃ出土土器の対比から，前期前半末と考えられる。

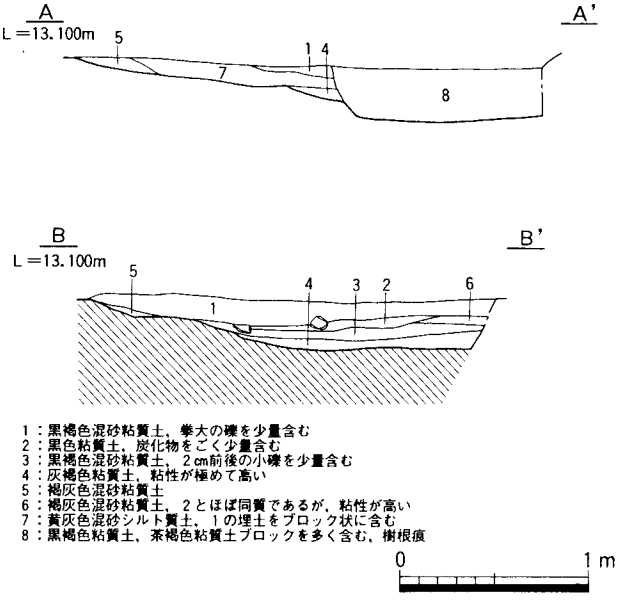


第36図　Ⅶ区ＡＳＲ01出土遺物（Ｓ＝１／４，１／２）

Ⅶ区ＢＳＲ03

Ⅶ区Ｂで検出した自然流路である。南東から北西方向へ流下する。両端は調査区外へ延長するが，東はその延長部分が西ハゼ土居遺跡でも確認されている。検出最大幅は2.5m，深度は0.25m前後を測るが一部の検出に留まり全容は不明である。埋土は黒褐色粘質土で，流水を確認できる堆積状況ではない。周辺地形とやや直交する流路方向をとるため，滞水した状況が推測でき，現摺鉢谷川へ流れ込む小規模な自然流路であったと考えられる。

遺物の出土は極めて少なく，小袋で２袋出土したのみである。各層単位での遺物取り上げを行っていないが，大多数は第37図土層注記番号１からの出土である。

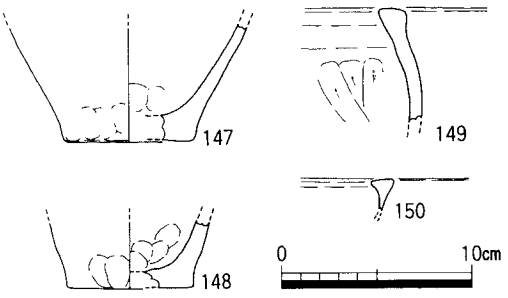


第37図　Ⅶ区ＢＳＲ03断面図（Ｓ＝１／40）

147は甕ないし壷底部片である。外面は顕著な二次焼成を受け，明赤褐色に変色している。148は甕底部片である。149は鉢である。口縁部は内湾し，端部付近への強い横ナデ調整により端部を拡張している。

150は高坏ないし鉢口縁部片である。端部は内外に拡張し，端面は水平面を有する。

出土遺物より，弥生時代中期末の埋没が想定できる。西ハゼ土居遺跡で検出したＳＲ03に連続する流路からはは弥生時代終末～古墳時代初頭の土器が出土しており，当遺跡とは齟齬が生じるが，削平により上層埋土が消失していることに起因すると考えられる。



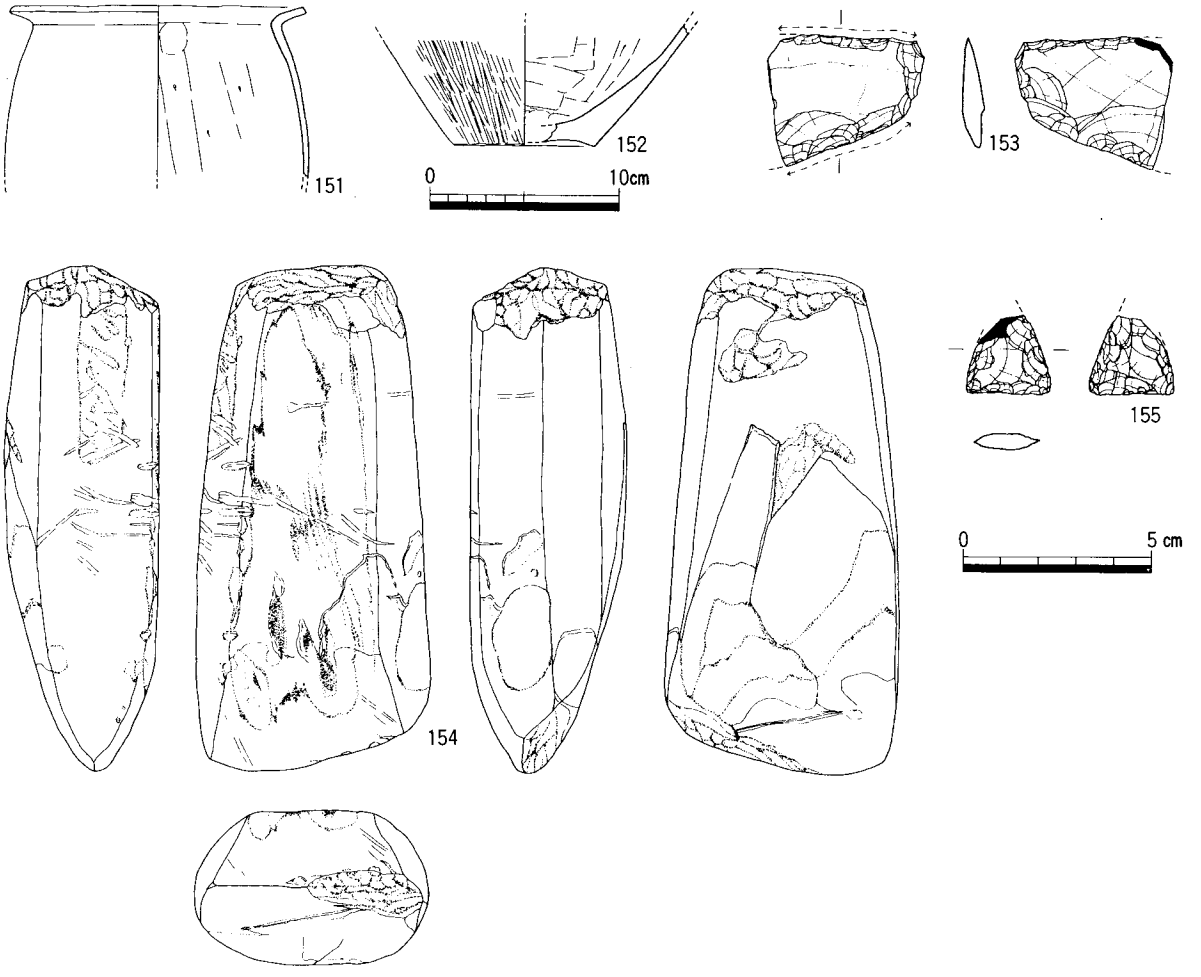
第38図　Ⅶ区ＢＳＲ03出土遺物（Ｓ＝１／４）

包含層・精査中他

151～153はⅣ区Ｄにおいてのみ確認した遺構面直上包含層出土遺物である。151は甕口縁部である。口縁部は「く」字形に外反し，端部は四角く収める。胎土中に角閃石を少量ながら含む。152は壷底部である。底部は上げ底を呈し，体部下半は大きく外傾する。外面はヘラミガキ，内面は丁寧なケズリ調整が施される。153は上下縁に敲打による潰れが認められ，楔形石器と考えられる。

154はグリットＥ３のＶ区ＳＸ01東の遺構面直上から出土した結晶片岩製の太形蛤刃石斧である。長さ13.3cm，最大幅6.2cm，重量573ｇを測る。基端は平基で，刃部側が広くなる長台形状の平面形をとるが，側縁はやや丸味を帯びる。断面は厚みがあり，楕円形状の形状である。基端には敲打痕，後側縁には柄に装着して使用した際に生じた使用痕が顕著に認められる。また右主面中央から刃部にかけての範囲に使用時の剥離痕があり，再度研ぎ直しが行われている。出土遺物の形態や周辺遺構の状況を考慮すると，弥生時代前期前半末段階に位置付けられる可能性が高い。

155はⅢ区Ｃ第１遺構面精査中に検出したサヌカイト製の打製石鏃である。先端を欠くが，基部は平基式である。



第39図　包含層他出土遺物（Ｓ＝１／４，１／２）

2．中世前半

当該期に属する遺構はⅡ区A～V区，Ⅶ区において確認した。その遺構密度は各調査区によってばらつきが認められ，土地利用の在り方が異なると考えられる。以下，調査区別にその概要を記す。

Ⅰ区　旧香東川氾濫原により，遺構面や遺構面直上包含層は消失している。

Ⅱ区A・B　松並・中所遺跡では最も遺構密度が高く，居住空間であったことが如実に窺え，Ⅱ区Bにおいて13世紀中葉に位置付けられる2棟の掘立柱建物を復元している。土坑では土師質土器小皿において，回転ヘラ切りと糸切りの底部が共伴するⅡ区SK01が特筆される。松並・中所遺跡出土土師質土器小皿の底部切り離しはこれを除きすべて回転ヘラ切りであり，その共伴関係は極めて特異な例といえる。

また，Ⅱ区BSX01は一辺3.0mを測る溝状遺構が「コ」字形ないし「□」字形に巡り，その南東隅よりハケメ調整を一切用いない土師質土器鍋が出土している。

Ⅱ区C　遺構密度が極端に低く，隣接するⅡ区Bとは対照的である。検出したピットからの遺物の出土もなく，耕作域であった可能性が高い。水田を想定することは困難であり，畑として利用された空間であったと考えたい。但し，その証左は得られていない。

Ⅲ区A　南側において，単独で庇を伴う掘立柱建物（3間×1間以上）を復元している。出土遺物より，12世紀末～13世紀初頭に位置付けられる。一方，北側は素掘り小溝群が確認でき，当該箇所は耕作域であった可能性が高く，Ⅲ区B南端部も同様の状況を呈する。こうした場合，北側で検出した掘立柱建物は単独で存在することになる。

Ⅲ区B・C　屋敷地を区画する溝（SD01）を検出し，12世紀末～13世紀前葉の土器が20リットルコンテナに1箱程度出土している。溝幅1.2m，一辺35mを測り，周辺方格地割に合致した主軸方位を呈する。この区画溝内においてのみ遺構面が2面存在し，第1面は12世紀末～13世紀中葉，第2面は12世紀後半～末の遺構を確認している。また，区画溝北には段状遺構（Ⅲ区）を検出し，区画の北端を区切っている。

なお，区画溝北側では，SR01埋土上面において，区画溝内とは異なる埋土である明黄褐色系粘質土を中心とした柱穴群を確認している。

Ⅳ区A～C　当該期の遺構は東壁沿いに幅0.3m前後を測る2条の溝状遺構を確認している。Ⅳ区BSD05では13世紀第1四半期の西村型須恵器椀が2点伏せた状態で出土している。

Ⅳ区D　遺構面直上に弥生包含層が厚く堆積しており，上面精査を実施したが遺構は確認できなかった。しかし，弥生包含層下の遺構面では，13世紀中葉前後に位置付けられるピットを3基確認しており，遺構密度は極めて低いものの，当該期の遺構のわずかな広がりが認められる。

V区　当該期に属する遺物は数点の出土に留まり，Ⅳ区D同様遺構の広がりは稀薄である。

Ⅶ区A　13世紀前葉を中心とした時期の掘立柱建物跡を2棟検出している。その主軸方位は周辺地割に合致し，それぞれの主軸方位を直交させた位置関係を呈する。V区とは坪を違えて隣接するが，遺構密度は大きく異なり，削平を考慮してもその空間利用の在り方に差異が見出せる。

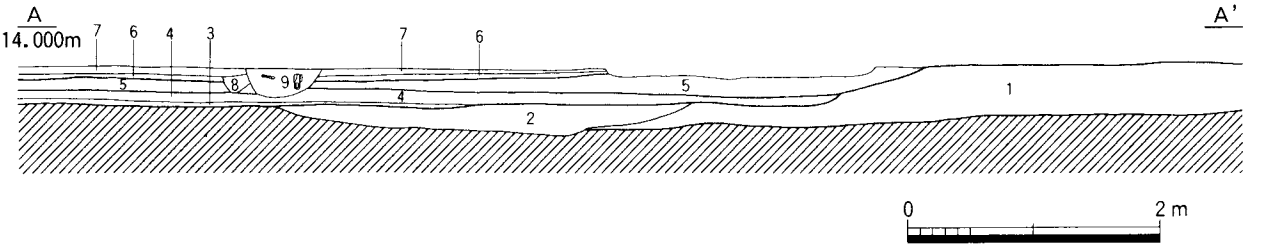
Ⅶ区B　当該期の遺物は数点出土しているが，その密度は低い。

以下，各遺構の説明を記す。

Ⅲ区ＣＳＺ01

区画溝であるⅢ区Ｂ・ＣＳＤ01の北端，グリットＤ９で検出した段状遺構である。第40図にその断面図を提示した。土層注記番号１は弥生時代中期後葉に最終埋没したＳＲ01埋土である。これを削り出し，第２遺構面（４の下端）が形成され，12世紀後半～末の遺構が展開している。その後，12世紀末～13世紀初頭の土器を多量に含む４が堆積し，その上面が第１遺構面となる。４層は区画溝内に限り確認しており，遺構面を創出するための整地土と考えられる。さらに，その上面にはⅡ区で確認した遺構面直上中世包含層（５）が堆積している。

なお，ＳＲ01埋土上面にも遺構は展開しており，12世紀末～13世紀前葉と13世紀中葉のピットを検出している。後者の割合が高く，区画溝内とは異なる時期の遺構が認められる。



1：灰黄褐色（10ＹＲ４/２）粘質土，ＳＲ10埋土
2：浅黄色（2.5Ｙ７/３）混砂シルト質土，ＳＲ02埋土
3：明黄褐色（7.5ＹＲ７/６）混砂粘質土
4：にぶい灰色（7.5ＹＲ５/３）混砂粘質土，３・４；第１遺構面ベース土（整地層）
5：褐灰色（10ＹＲ５/２）混砂粘質土，中世包含層
6：にぶい黄橙色（10ＹＲ６/４）混砂粘質土，床土
7：褐灰色（10ＹＲ５/１）混砂粘質土，耕作土
8：にぶい黄褐色（10ＹＲ５/３）混砂粘質土
9：褐灰色（10ＹＲ６/１）混砂粘質土

第40図　Ⅲ区ＣＳＺ01断面図（Ｓ＝１／60）

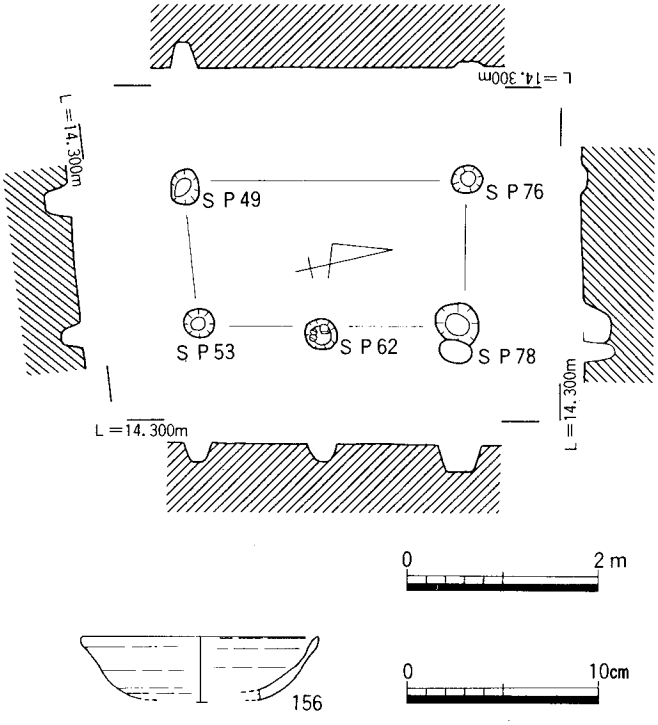
掘立柱建物跡

Ⅱ区ＡＳＢ01

Ⅱ区ＡグリットＢ18で検出した掘立柱建物跡である。桁行２間，梁間１間(2.8m×1.5m，床面積4.2㎡）を測る側柱建物である。主軸方位はＮ13°Ｅである。柱穴間隔がやや不揃いで，異なる組み合わせも考えられるが，埋土の比較から第41図のような側柱建物に復元した。柱穴は円形を呈し，上面埋土は褐灰色混砂粘質土で，後述する埋土Ⅰ類に該当する。

出土遺物は土師質土器小皿・坏・鍋，須恵器椀，瓦器椀が出土している。

156は土師質土器坏である。口径12.6㎝を測り，内湾気味に開く口縁部を有する出土遺物が稀薄で時期決定に問題を残すが，図示し得なかった須恵器椀・瓦器椀の外面にヘラミガキが確認でき，周辺遺構との関連を考慮すると，12世紀末～13世紀初頭を中心とした時期に位置付けることが可能である。

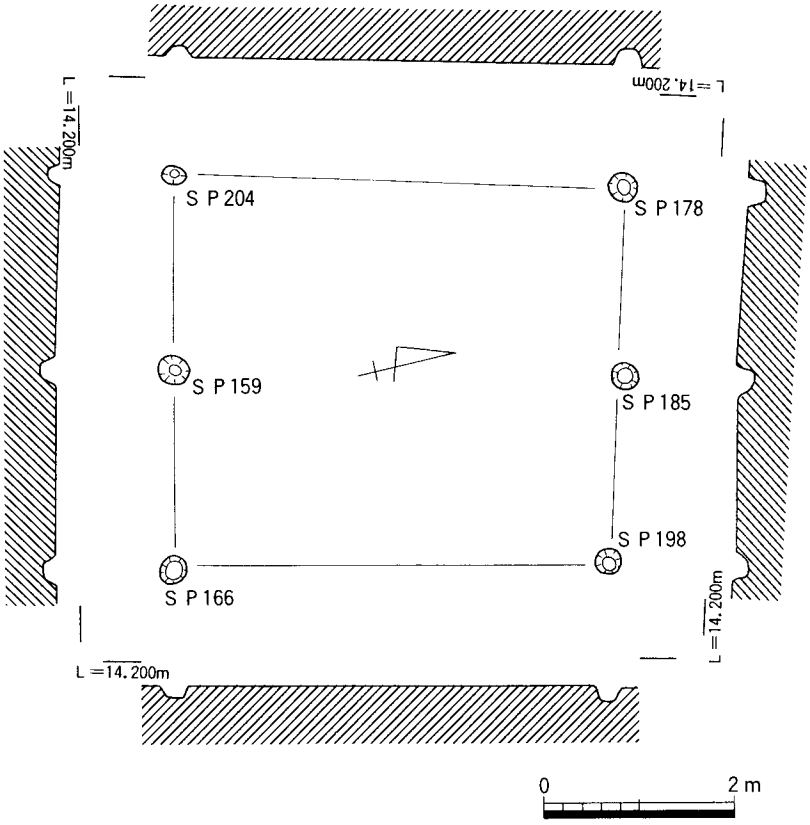


第41図　Ⅱ区ＡＳＢ01平・断面図(Ｓ＝1/80)，出土遺物(Ｓ＝1/4)

Ⅱ区ＢＳＢ01

Ⅱ区ＢグリットＣ16で検出した掘立柱建物跡である。桁行２間以上（4.4m以上）梁間１間（4.6m）の側柱建物で，床面積は20.2㎡を測る。主軸方位をN74°Wにとり，周辺方格地割に合致した方位を呈する。上面埋土は灰黄褐色混砂粘質土で，埋土ⅡＡ類に該当する。梁間が4.6mと長いが，元来の梁間は２間で，削平による消失を想定したい。

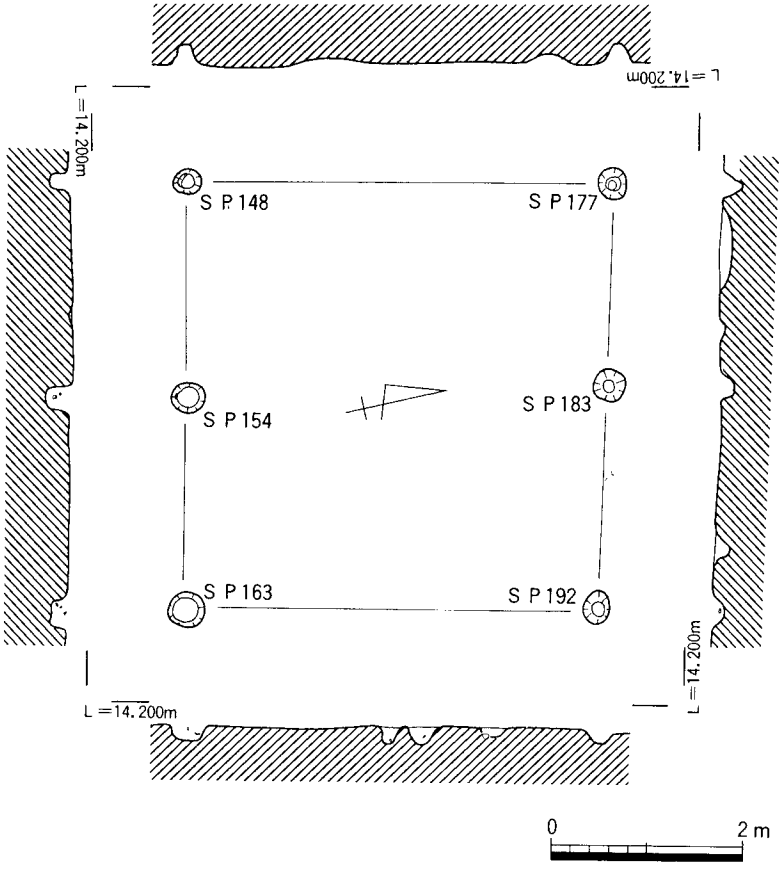
出土遺物は土師質土器小皿・鍋が数点出土しているが，時期比定は困難である。周辺遺構との関連や埋土類型から，13世紀中葉を中心とした時期に位置付けられる可能性が高い。



第42図　Ⅱ区ＢＳＢ01平・断面図（Ｓ＝１／80）

Ⅱ区ＢＳＢ02

Ⅱ区ＢグリットＣ16で検出した掘立柱建物跡である。桁行２間以上（4.6m以上），梁間１間（4.3m）の側柱建物で，床面積は19.8㎡を測る。埋土は灰黄褐色混砂粘質土で，埋土ⅡＡ類に該当する。梁間は長いが，Ⅱ区ＢＳＢ01同様に２間であったと考えられる。底面深度は一様に揃っているが，根石や礎板等は確認できない。なお，Ⅱ区ＢＳＢ01とは検出位置が重なり，主軸方位・梁間間隔もほぼ等しい点から，同一位置において，同規模の掘立柱建物跡の立て替



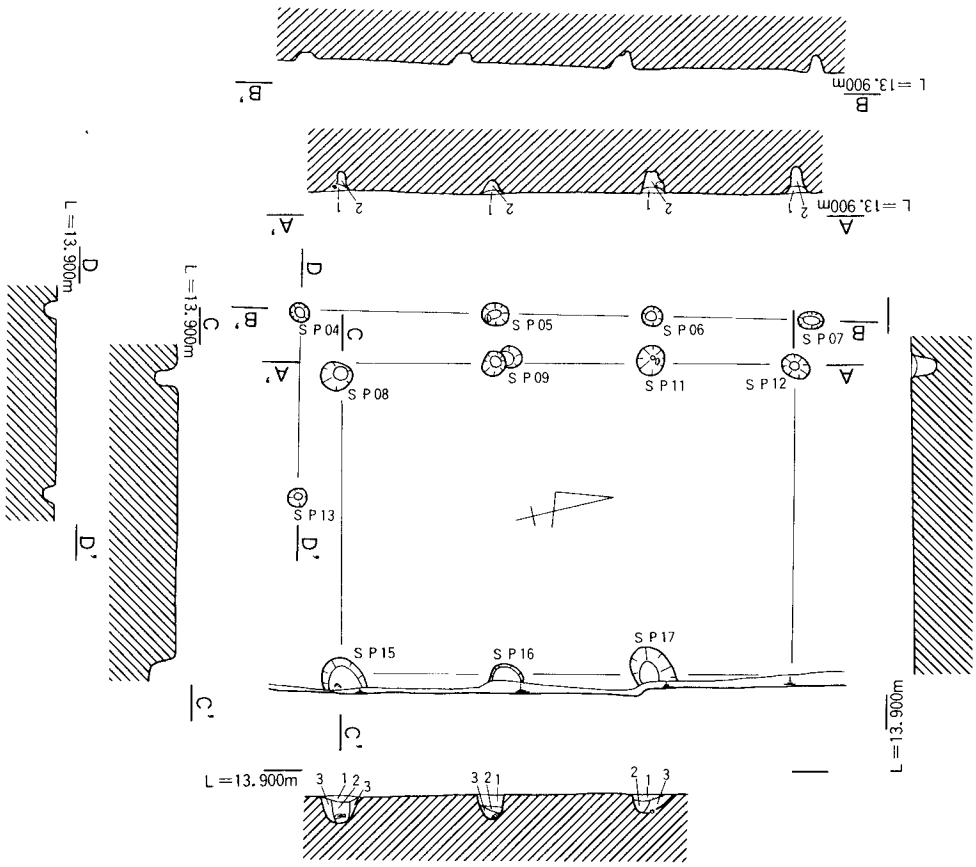
第43図　Ⅱ区ＢＳＢ02平・断面図（Ｓ＝１／80）

えが行われたと考えられる。

出土遺物は土師質土器小Ⅲ・鍋が数点出土しているのみで，時期決定に問題が残る。埋土類型や周辺遺構との関係から，13世紀中葉を中心とした時期に位置付けたい。

Ⅲ区ＡＳＢ01

Ⅲ区ＡグリットＣ14で検出した掘立柱建物跡である。東側は調査区外へ延長するため全容は不明であるが，検出した限りでは桁行３間，梁間１間以上（4.8m×3.2m以上，床面積15.4㎡）で，西辺と南辺には庇が付く。主軸方位はＮ15°Ｅで，周辺地割に合致する。柱穴掘方は径0.2～0.4mの円形ないし楕



SP08
1：褐灰色（10YR4/1）砂質土
2：灰黄褐色（10YR5/2）砂質土

SP12
1：褐灰色（10YR4/1）砂質土
2：灰黄褐色（10YR5/2）砂質土

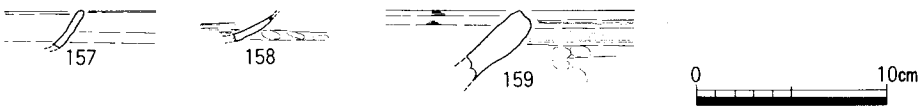
SP09
1：褐灰色（10YR4/1）砂質土
2：にぶい黄褐色（10YR5/3）混砂粘質土

SP11
1：褐灰色（10YR4/1）砂質土
2：にぶい黄褐色（10YR5/3）混砂粘質土

SP15
1：褐灰色（10YR4/1）砂質土
2：灰黄褐色（10YR5/2）砂質土
3：にぶい黄橙色（10YR6/4）砂質土
埋め土

SP16
1：褐灰色（10YR4/1）砂質土
2：明黄褐色（10YR6/6）砂質土
3：褐灰色（10YR5/1）混砂粘質土

SP17
1：褐灰色（10YR4/1）砂質土
2：灰黄褐色（10YR5/2）砂質土
3：にぶい黄褐色（10YR5/3）混砂粘質度



第44図　Ⅲ区ＡＳＢ01平・断面図（Ｓ＝１／80），出土遺物（Ｓ＝１／４）

円形で，底掘方は径0.2mの円形である。埋土観察では，ＳＰ15において抜き取り痕が確認でき，その幅は0.16mを測る。他の柱穴には柱痕は確認できず，廃絶時に抜き取られたと考えられる。

出土遺物は土師質土器小皿・鍋，黒色土器（Ａ類）椀，瓦器椀がある。

157は土師質土器坏である。158は黒色土器（Ａ類）椀である。内面には回転ヘラミガキが施される。159は土師質土器甕である。器厚が１cmを越える厚手のものである。

出土遺物から，12世紀末～13世紀初頭を中心とした時期に位置付けられる。

Ⅶ区ＡＳＢ01・02

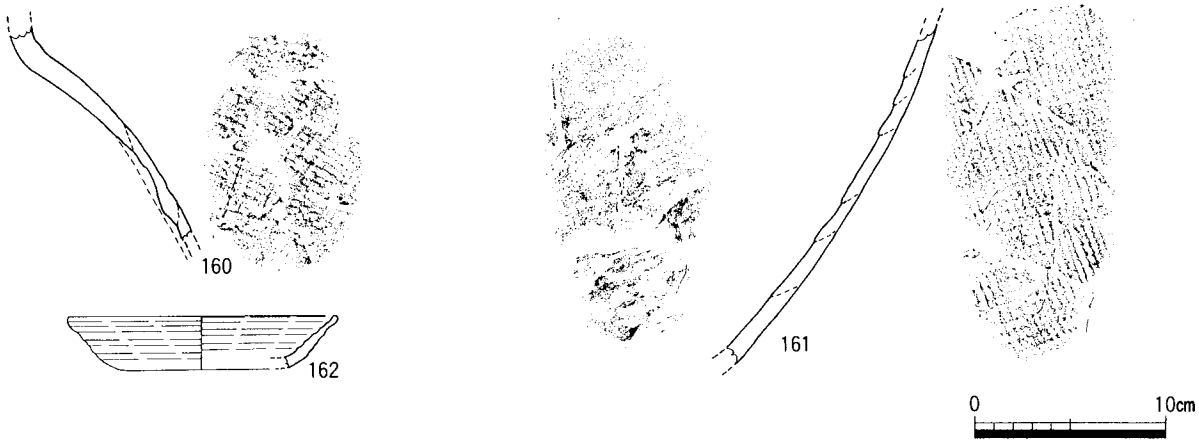
Ⅶ区ＡグリットＧ２で検出した掘立柱建物跡である。Ⅶ区ＡＳＢ01は検出した限りでは，桁行２間(4.8m，桁行間は2.4m)，梁間１間以上（3.8m以上)，床面積18.2㎡を測り，主軸方位はN15°Ｅにとる。ここでは南北主軸として復元したが，西側は調査区外に延長する。柱穴平面形は円形で，掘方断面形状はＵ字形を呈する。埋土は下層に灰黄褐色シルト質土，上層ににぶい黄橙色混砂シルト質土が堆積している。

桁行の中心に位置するＳＰ27・30の両脇に柱穴が確認でき（ＳＰ26・28・29・31)，それぞれシンメトリーな配置をとる。第45図に示したＳＰ26の遺物出土状況図によると，根石設置後，柱を立てて，須恵器片による根固めが行われたことが窺える。配置プランの類似性から他の柱穴にも柱を立てた可能性が高いと考えられる。ＳＰ26を含めた主柱穴とは異なるこれら柱穴群は，桁行を1.5m前後で梁方向に３分割した間取りに伴う柱穴である可能性が高いと思われる。

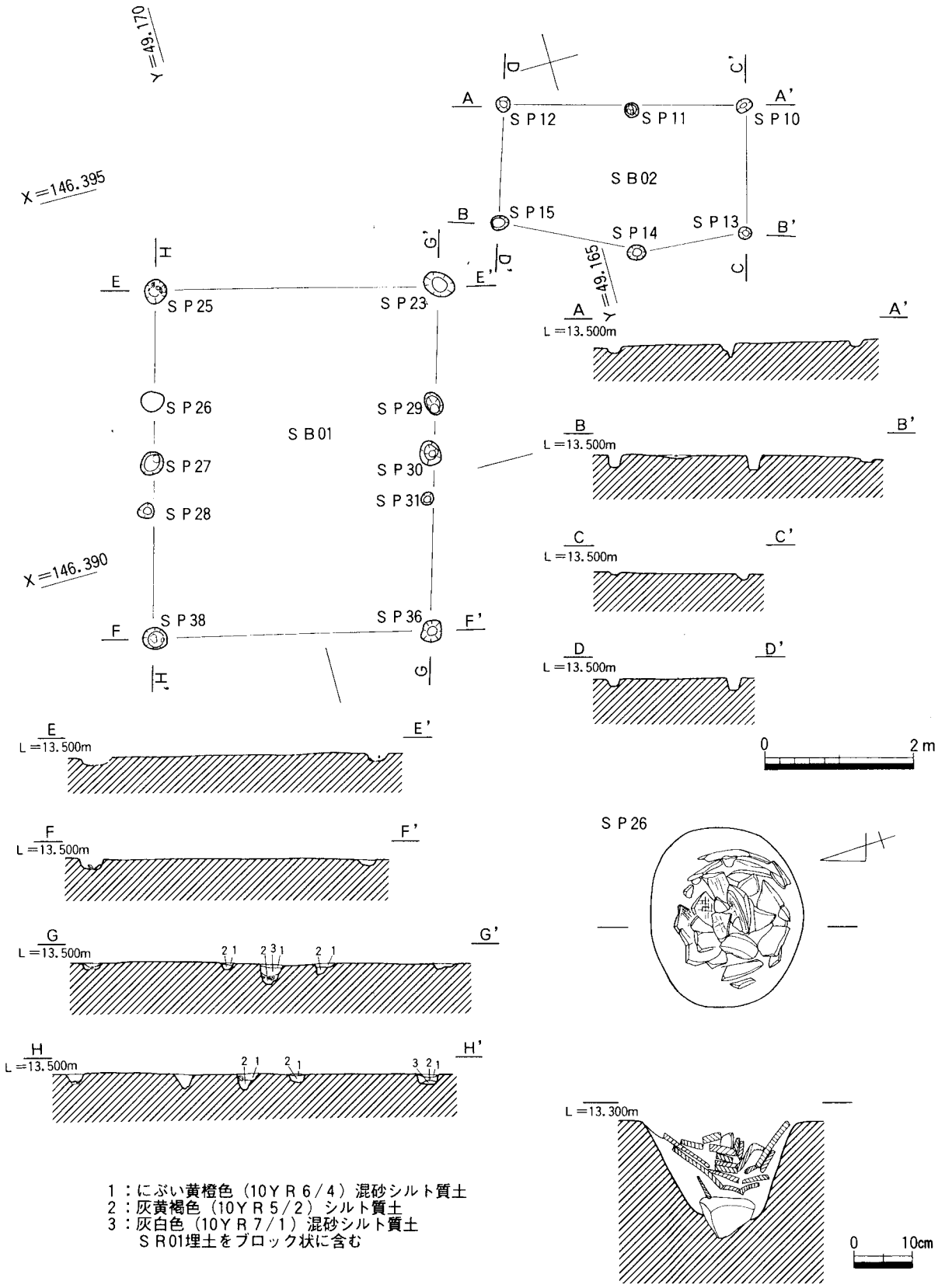
Ⅶ区ＡＳＢ02はＳＢ01主軸方位にほぼ直交した主軸方位をとり（N105°Ｅ)，桁行２間（3.3m)，梁間１間（1.6～1.78m)，床面積5.6㎡を測る。

ＳＢ01からは土師質土器小皿・鍋，黒色土器（Ａ類）椀，須恵器甕，ＳＢ02からは須恵器椀がそれぞれ出土している。160・161はＳＰ26で根固めに用いられた須恵器甕を接合したものである。焼成・色調・調整等から同一個体と考えられ，建築時に意図的に須恵器甕を現地で破壊し，根固めに利用したと考えられる。十瓶山窯産と考えられ，外面には左上がりの格子叩きが施される。162はⅢ区ＡＳＰ36から出土した土師器坏である。口径14.4cmを測り，口縁部は外反して開き，顕著な回転ナデ調整が施される。

ＳＢ01・02はその配置状況から同時併存していた可能性が高く，出土遺物や周辺遺構との関連により，13世紀前葉を中心とした時期に位置付けられる。



第46図　Ⅶ区ＡＳＢ01出土遺物（Ｓ＝１／４）



第45図　Ⅶ区ＡＳＢ01・02平・断面図（Ｓ＝１／80），Ⅶ区ＡＳＰ26遺物出土状況（Ｓ＝１／10）

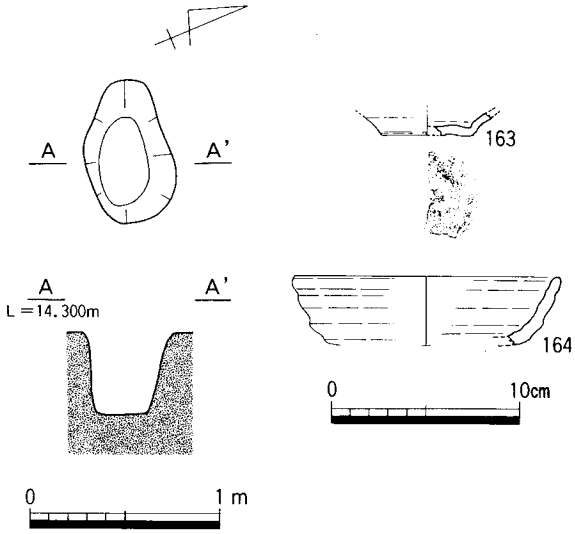
土坑

Ⅱ区ＡＳＫ04

Ⅱ区ＡグリットＢ17で検出した土坑である。平面形は歪な楕円形を呈し，長軸長0.75m，短軸長0.45mを測る。断面形状は逆台形で，深度は0.42mと深い。埋土は上面観察では褐灰色混砂粘質土である。

遺物は土師質土器小皿・坏が数点出土している。

163は土師質土器小皿である。底径は５cmと小さく，口縁部は大きく外反する。底部は回転ヘラ切り（Ｒ）で，内面底体部境には強い回転ナデ調整が施される。164は土師質土器坏である。口径14cmを測り，口縁部の外反度は弱いが，底部から１cm程上部で強い屈曲点がある。



第47図　Ⅱ区ＡＳＫ04平・断面図（Ｓ＝１／40），出土遺物（Ｓ＝１／４）

出土遺物から，13世紀前葉を中心とした時期に位置付けたい。

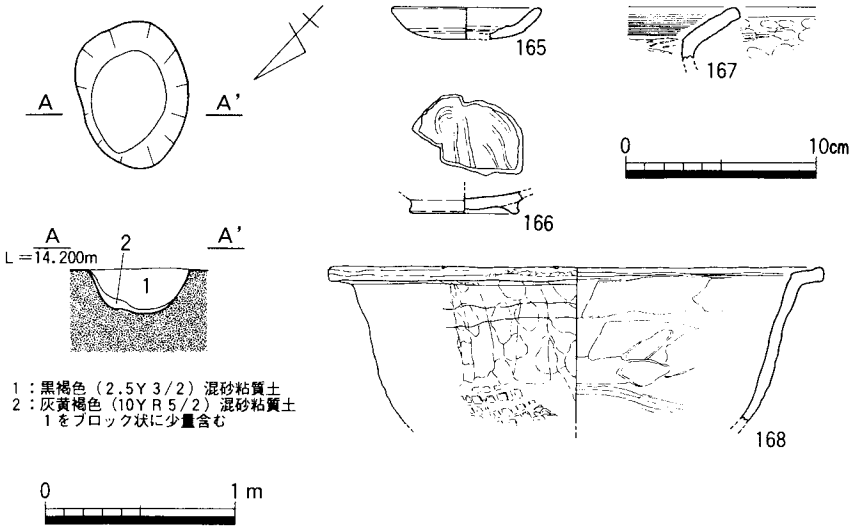
Ⅱ区ＡＳＫ07

Ⅱ区ＡグリットＢ18で検出した土坑である。平面形は直径0.5mの円形を呈し，断面形状は半円形で，深度は0.2mを測る。埋土は黒褐色混砂粘質土が主体を占め，底面付近に掘方形状に沿って灰黄褐色混砂粘質土が堆積し，開削から土層番号１の埋没までの時間差を想定できる。

遺物は土師質土器小皿・坏・椀・鍋，黒色土器（Ａ類）椀，瓦器椀が小袋で１袋出土している。

165は土師質土器小皿である。口径８cmを測り，底部は回転ヘラ切り（Ｌ）である。内外面ともに二次焼成を受けており，にぶい黄橙色に変色している。166は黒色土器椀（Ａ類）である。見込みにはヘラミガキが施され，外方へ踏ん張る高台が付く。167・168は土師質土器鍋である。167は口縁部内面にハケ目調整が施され，168は口径26cmを測り，ボール状の体部から短く折れる口縁部を持つ。体部外面下半には格子目叩きが，上半には板ナデ調整，体部内面下半にはヨコハケ調整，上半には板ナデ調整がそれぞれ施される。口縁部は内外面ともに横ナデ調整である。

出土遺物より，13世紀前葉に位置付けられる。



第48図　Ⅱ区ＡＳＫ07平・断面図（Ｓ＝１／40），出土遺物（Ｓ＝１／４）

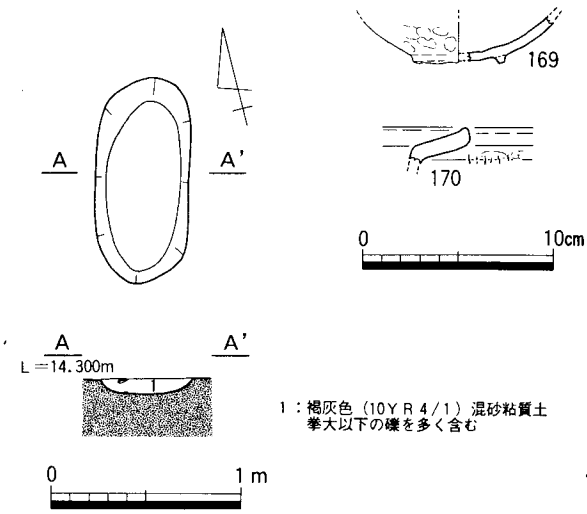
Ⅱ区ＡＳＫ08

Ⅱ区ＡグリットＢ18で検出した土坑である。平面形は長楕円形で，長軸長1.1m，短軸長0.5mを測る。断面形状は浅い皿形を呈し，深度は0.08mと浅い。埋土は褐灰色混砂粘質土の単一層である。

遺物は土師質土器小皿・甕・鍋，須恵器椀・甕，瓦器椀が数点出土している。

169は瓦器椀である。外面には顕著な指押さえが施され，潰れた四角形の高台が付く。170は土師質土器甕である。口縁端部は丸く収め，端部上端を上方に軽く摘み上げる。

出土遺物や周辺遺構との関係から，13世紀前葉を中心とした時期に比定できる。



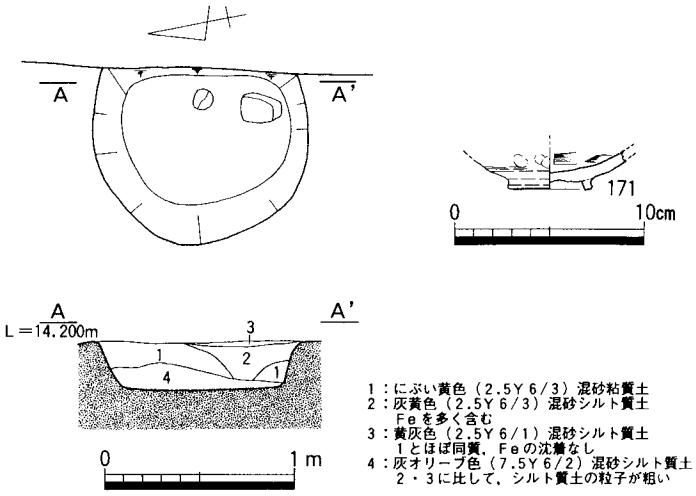
第49図　Ⅱ区ＡＳＫ08平・断面図（Ｓ＝１／40），出土遺物（Ｓ＝１／４）

Ⅱ区ＡＳＫ09

Ⅱ区ＡグリットＢ18で検出した土坑である。西側が調査区外へ延長するため全容は不明であるが，検出した限りでは，直径約1.1mの円形を呈する。断面形状は逆台形を呈し，埋土は下層に灰オリーブ色混砂シルト質土，中層に灰黄色混砂シルト質土，上層ににぶい黄色混砂粘質土がそれぞれ堆積している。

遺物は土師質土器小皿・椀，須恵器椀，瓦器椀が数点出土している。171は須恵器椀である。体部内面には板ナデ，体部外面にはヘラミガキが施される。

出土遺物より，13世紀前葉を中心とした時期に位置付けられる。



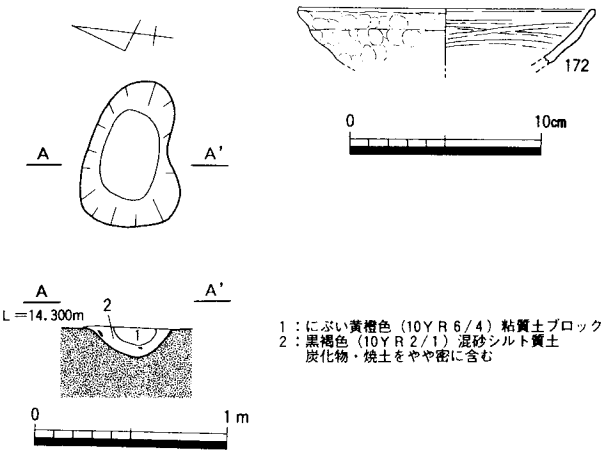
第50図　Ⅱ区ＡＳＫ09平・断面図（Ｓ＝１／40），出土遺物（Ｓ＝１／４）

Ⅱ区ＡＳＫ11

Ⅱ区ＡグリットＢ18で検出した土坑である。平面形は不整形で，長軸長0.8m，短軸長0.5mを測る。断面形状は半円形を呈し，埋土は炭化物・焼土を含む黒褐色混砂シルト質土ににぶい黄橙色粘質土ブロックを含む。但し，底面に被熱痕は確認できない。

遺物は須恵器椀・瓦器椀が数点出土している。

172は和泉型瓦器椀である。外面には顕著な



第51図　Ⅱ区ＳＫ11平・断面図（Ｓ＝１／40），出土遺物（Ｓ＝１／４）

指押さえ，内面には回転ヘラミガキが施される。尾上編年Ⅲ－３期の所産と考えられる（尾上1983，以下瓦器椀の分類はこれに依拠する）。

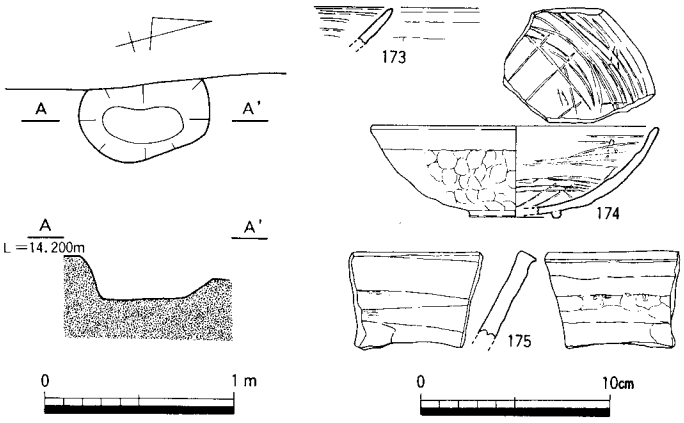
出土遺物は稀薄で詳細な時期決定に問題を残すが，出土遺物の年代観や周辺遺構との関連から，13世紀前葉を中心とした時期に位置付けられる。

Ⅱ区ＡＳＫ12

Ⅱ区ＡグリットＢ18で検出した土坑である。西端が調査区外へ延長するため全容は不明であるが，検出した限りでは，平面形は多角形を呈し，南北長0.7m，東西長0.4m以上を測る。断面形状は逆台形状を呈する。

遺物は土師質土器坏，須恵器椀，瓦器椀，十瓶山窯産須恵器鉢が数点出土している。

173は須恵器椀である。内面には回転ヘラミガキが施される。174は和泉型瓦器椀である。口縁部は内湾して立ち上がり，器高は4.8cmと高い。体部内面には回転ヘラミガキ，見込みには平行線状ヘラミガキが施され，外面にはみられない。器形はやや古い要素を残すが，外面ヘラミガキの消失，矮小化した高台から，尾上編年Ⅲ－２期の所産と考えられる。175は須恵器鉢である。口縁端部は下方にやや垂れ下がり，端面は微妙に窪む。内外面ともに板ナデ調整が施される。十瓶山窯産と思われる。

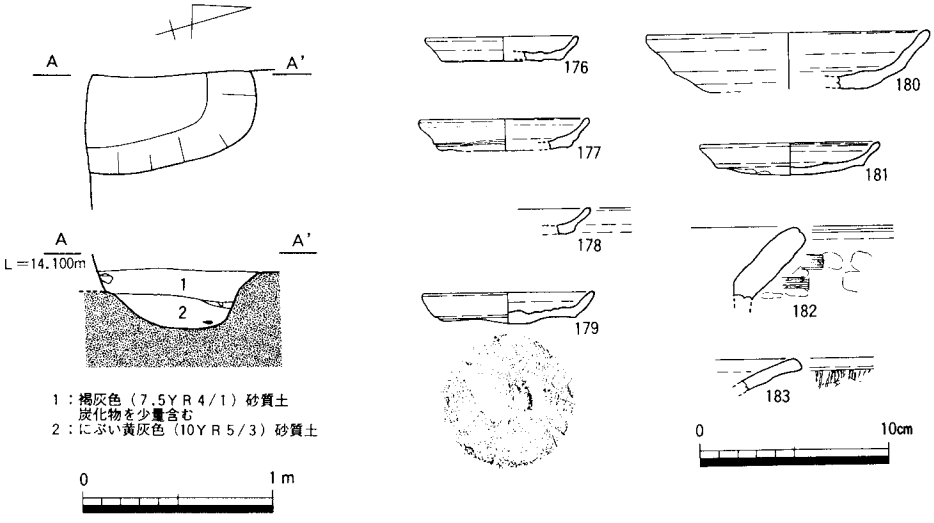


第52図　Ⅱ区ＡＳＫ12平・断面図（Ｓ＝１／40），出土遺物（Ｓ＝１／４）

出土遺物より，13世紀前葉の年代が与えられる。

Ⅱ区ＢＳＫ01

Ⅱ区Ｂ南西隅グリットＢ17で検出した土坑である。南・西側ともに調査区外へ延長し，全体の１／４程度を検出したに過ぎない。埋土は２層に細分でき，下層ににぶい黄灰色砂質土，上層に褐灰色砂質土が堆積している。



第53図　Ⅱ区ＢＳＫ01平・断面図（Ｓ＝１／40），出土遺物（Ｓ＝１／４）

遺物は土師質土器小皿・坏・鍋・甕，瓦器椀・皿が小袋で１袋出土している。

176～179は土師質土器小皿である。176～178は直線的に開く口縁部を有し，底部切り離しは回転ヘラ切り（Ｒ）である。口径は８～９cmとややばらつきがある。177は底部外縁には回転ヘラ切り痕がみられる。179は内湾気味に開き，口径９cmを測る。底部切り離しは回転糸切りである。180は土師質土器坏

である。口縁部は中位で強く開き，端部は丸く収める。底部は回転ヘラ切りである。181は瓦器皿である。見込みにヘラミガキは施されない。182は土師質土器甕である。端部は四角く収める。183は土師質土器鍋である。口縁端部は外方へ摘み出し，外面には指押さえ後，タテハケを施す。角閃石を多く含む特徴的な胎土である。

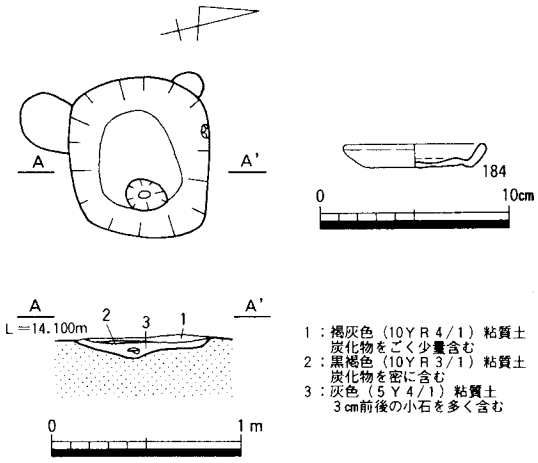
出土遺物より，12世紀末～13世紀初頭の年代が与えられる。

Ⅱ区ＢＳＫ03

Ⅱ区ＢグリットＣ16で検出した土坑である。隅丸長方形の平面形を呈し，長軸長0.8m，短軸長0.7mを測る。断面形状は浅い舟底状を呈し，中層に薄い炭化物層を挟み，下層に灰色粘質土，上層に褐灰色粘質土がそれぞれ堆積している。

遺物は土師質土器小皿・坏が小袋に１袋出土している。二次焼成を受けた土器の割合が高く，被熱痕は確認できないが，埋土中層の炭化物包含と呼応している。

184は土師質土器小皿である。口縁部は短くて太い。底部は回転ヘラ切り（Ｌ？）である。



第54図　Ⅱ区ＢＳＫ03平・断面図（Ｓ＝1/40），出土遺物（Ｓ＝1/4）

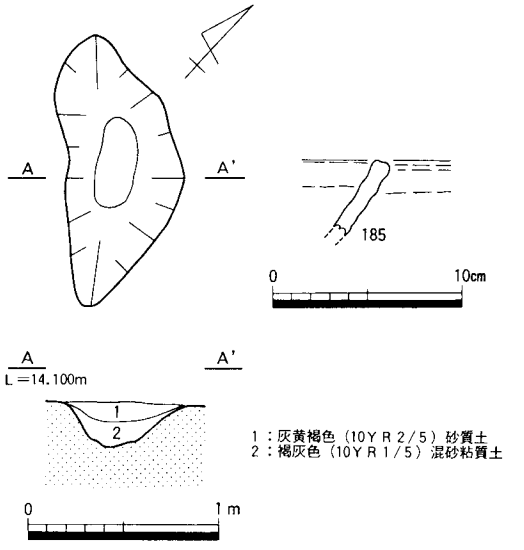
出土遺物や周辺遺構との関係から，12世紀末～13世紀前葉を中心とした時期に位置付けられる。

Ⅱ区ＢＳＫ05

Ⅱ区ＢグリットＣ16で検出した土坑である。平面形は不整形を呈し，長軸長0.9m，短軸長0.6mを測る。断面形状は舟底状を呈し，埋土は下層に褐灰色混砂粘質土，上層に灰黄褐色砂質土が堆積している。

遺物は土師質土器小皿・鍋，瓦器椀，須恵器鉢が数点出土している。185は須恵器鉢である。口縁端部は四角く収められ，端部外面に強い横ナデ調整が加わる。

出土遺物や周辺遺構との関係から，13世紀前葉を中心とした時期に位置付けられる。



第55図　Ⅱ区ＢＳＫ05平・断面図（Ｓ＝1/40），出土遺物（Ｓ＝1/4）

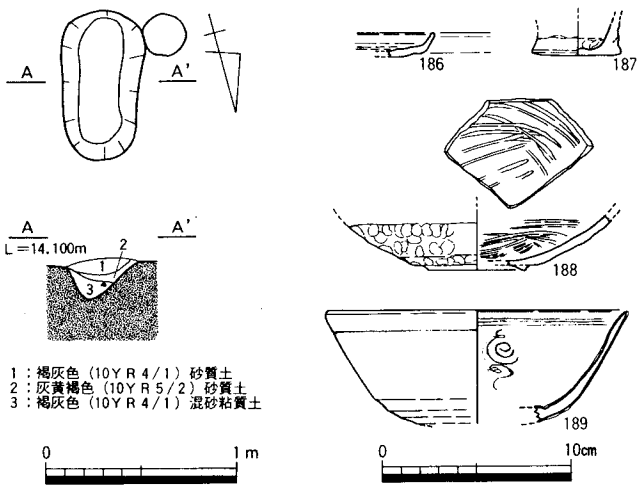
Ⅱ区ＢＳＫ06

Ⅱ区ＢグリットＣ16で検出した土坑である。楕円形の平面形で，長軸長0.8m，短軸長0.4mを測る。断面形状は東側に最深部が寄る逆三角形を呈し，埋土は下層に褐灰色混砂粘質土，中層に灰黄褐色砂質土，上層に褐灰色砂質土がそれぞれ堆積している。

遺物は土師質土器小皿・椀，瓦器椀，青磁碗が数点出土している。

186・187は土師質土器小皿である。186は短く外反する口縁部を有し，底部は回転ヘラ切り（Ｌ）である。187は平高台状の底部で，口縁部は大きく開く。188は和泉型瓦器椀である。口縁部内面には回転ヘラミガキ，見込みには平行線状ヘラミガキ，外面には顕著な指押さえが施される。高台は極めて矮小

化した断面三角形を呈する。尾上編年Ⅲ－3期の所産と考えられる。189は青磁碗である。口縁端部外面に1条，内面に3条の沈線，見込みに沈線状の段をそれぞれ有する。体部内面には飛雲文を片彫りしている。内面を区画する2条の沈線はこの個体では確認できないが，横田・森田分類龍泉系青磁碗Ⅰ－4b類に該当する（横田・森田1978，以下輸入陶磁器の分類はこれに依拠する）。　出土遺物より，13世紀前葉を中心とした時期に位置付けられる。

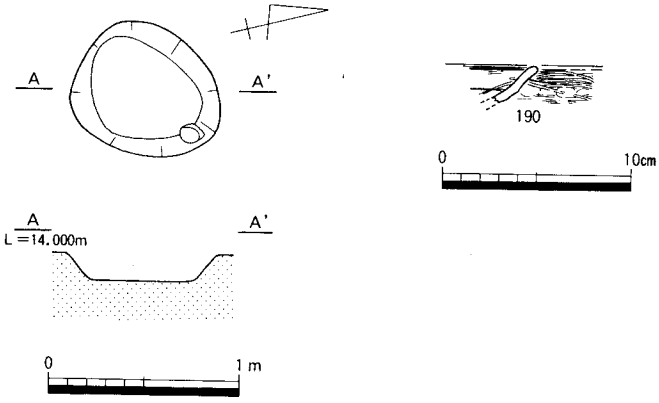


第56図　Ⅱ区ＢＳＫ06平・断面図（Ｓ＝１／40），出土遺物（Ｓ＝１／４）

Ⅱ区ＣＳＫ01

Ⅱ区ＣグリットＣ15で検出した土坑である。平面形は径0.8m前後の円形で，浅い皿形の断面形態を呈する。遺物は土師質土器鍋，瓦器椀が数点出土している。190は和泉型瓦器椀である。内外面ともに回転ヘラミガキが認められる。

出土遺物より，12世紀後半を中心とした時期が与えられる。



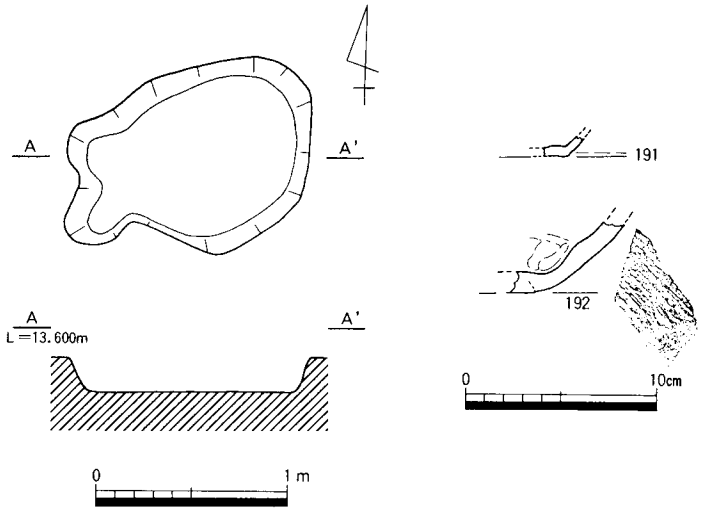
第57図　Ⅱ区ＣＳＫ01平・断面図（Ｓ＝１／40），出土遺物（Ｓ＝１／４）

Ⅲ区Ｃ第１面ＳＫ01

Ⅲ区ＣグリットＤ10，第１面で検出した土坑である。平面形は不整形で，長軸長1.4m，短軸長1.0mを測る。断面形状は皿形を呈し，深度は0.2mを測る。

遺物は土師質土器小皿・鍋，須恵器椀，瓦器椀，須恵器甕が数点出土している。

191は須恵器小皿底体部片で，底部は回転ヘラ切りである。192は十瓶山窯産甕底部である。外面は長格子叩きが施され，底部外縁のみケズリ状の強いナデが加えられる。内面は凹凸の激しい指押さえ後，ナデ調整が施される。



第58図　Ⅲ区Ｃ第１面ＳＫ01平・断面図（Ｓ＝１／40），出土遺物（Ｓ＝１／４）

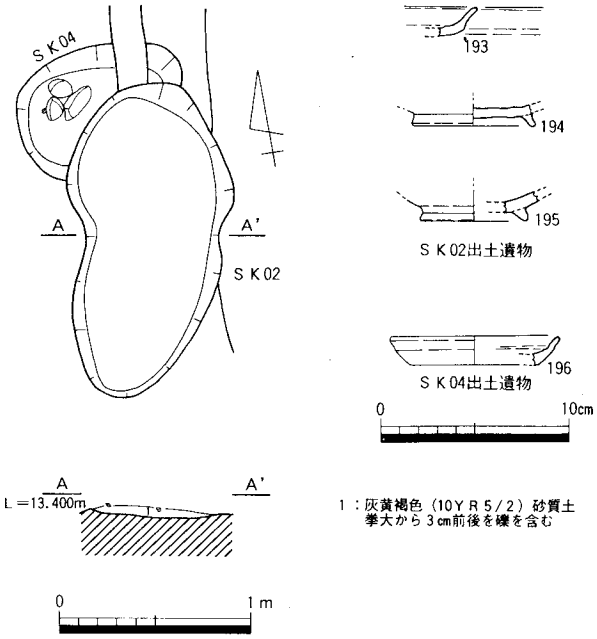
出土遺物や周辺遺構との関係から，12世紀末～13世紀前葉を中心とした時期に位置付けられる。

Ⅲ区C第1面SK02・04

SK02はⅢ区CグリットD10，第1面で検出した土坑である。平面形は中央がやや抉れる長楕円形を呈し，長軸長1.7m，中央抉れ部分長0.7mを測る。断面形状は浅い皿形を呈し，埋土は拳大から3cm前後の小礫を比較的多く含む灰黄褐色砂質土の単一層である。

遺物は土師質土器小皿・坏・鍋・甕，須恵器椀・甕，黒色土器（A類）椀，瓦器椀，平瓦が小袋に1袋出土している。193は土師質土器小皿である。口縁部は長く延び，外反する。底部は回転ヘラ切りである。194・195は黒色土器（A類）椀である。

SK04はⅢ区C第1面グリットD10で検出した土坑である。SK02と重複関係を有し，それに先行する。平面形は隅丸方形を呈し，皿形の断面形状を呈する。遺物は土師質土器小皿，黒色土器（A類）椀が数点出土している。196は土師質土器小皿である。口縁部は内湾気味に立ち上がる。



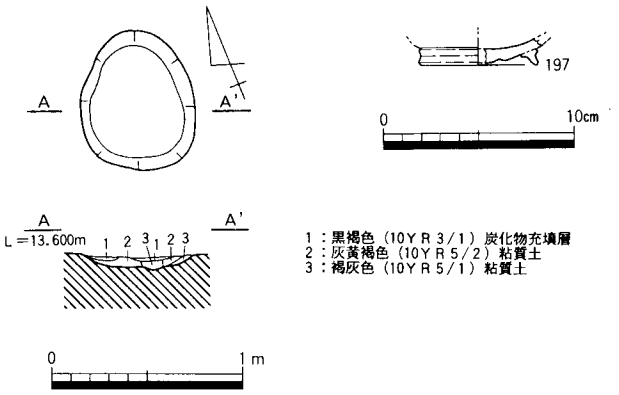
第59図　Ⅲ区C第1面SK02・04平・断面図（S=1/40），出土遺物（S=1/4）

出土遺物や周辺遺構との関係から，SK02は12世紀末～13世紀前葉に位置付けられ，SK04は13世紀前葉を中心とした時期に位置付けられるであろう。

Ⅲ区C第1面SK05

Ⅲ区CグリットD10，第1面で検出した土坑である。平面形は楕円形で，長軸長0.75m，短軸長0.6mを測る。断面形状は浅い皿形で，下層に灰黄褐色粘質土，上層に炭化物充填層が疎らに堆積している。遺物の出土は稀薄で，土師質土器小皿・椀・鍋，黒色土器（A類）椀が数点出土している。197は土師質土器椀である。高台は長く，シャープであるが，胎土がやや粗い。

出土遺物や周辺遺構との関連から，12世紀末～13世紀前葉を中心とした時期に位置付けられる。



第60図　Ⅲ区C第1面SK05平・断面図（S=1/40），出土遺物（S=1/4）

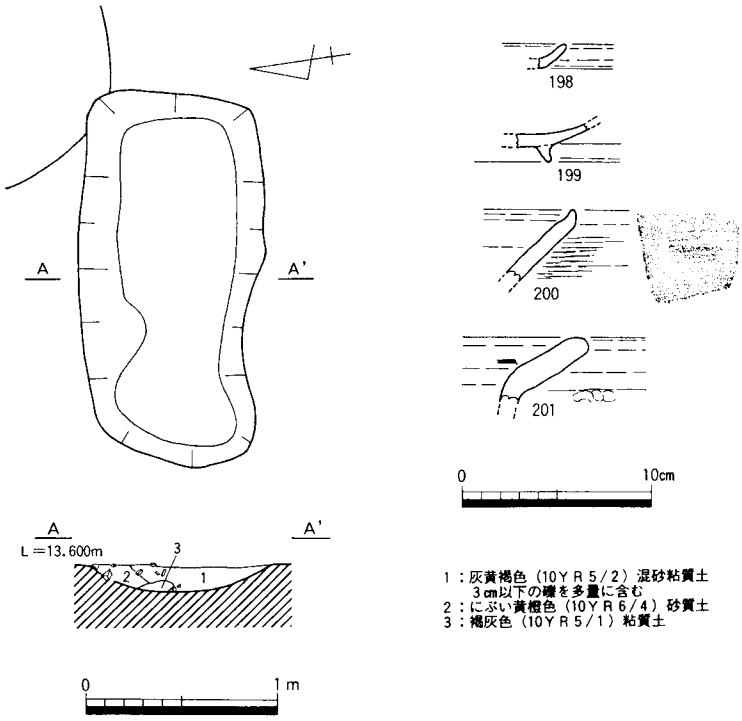
Ⅲ区C第1面SK08

Ⅲ区CグリットD10，第1面で検出した土坑である。平面形は隅丸長方形を呈し，長辺長2m，短辺長1m前後を測る。断面形状は舟底状を呈し，埋土は2層に細別したが，灰黄褐色～にぶい黄橙色粘質土の単層と考えられる。埋土中に3cm前後の小礫を多く含み，土層注記番号2は検出面である整地土と酷似している。開削後，短期間に人為的な埋め戻しを行った可能性が高いと考えられる。平面形状・埋土等から土壙墓という性格を付与することができるが，出土遺物からそれを肯定することはできない。

遺物は小袋で２袋出土しており，土師質土器小皿・坏・鍋・甕，須恵器椀・鉢，黒色土器（Ａ類）椀が出土している。

198は土師質土器小皿である。口縁部は外反気味に開く。199は土師質土器椀である。高台は高く，灰白色の色調を呈し，胎土も精良であり，吉備系土師椀と考えられる。内面見込みには二次焼成痕がみられる。200は須恵器鉢である。口縁部は直線的に延びるが，端部手前で内側へ軽く摘み上げる。外面は強い板ナデ後，横ナデ調整が施される。201は土師質土器甕である。内面口縁部と体部境は不明瞭である。

出土遺物や周辺遺構との関連から，13世紀前葉を中心とした時期に位置付けられる。

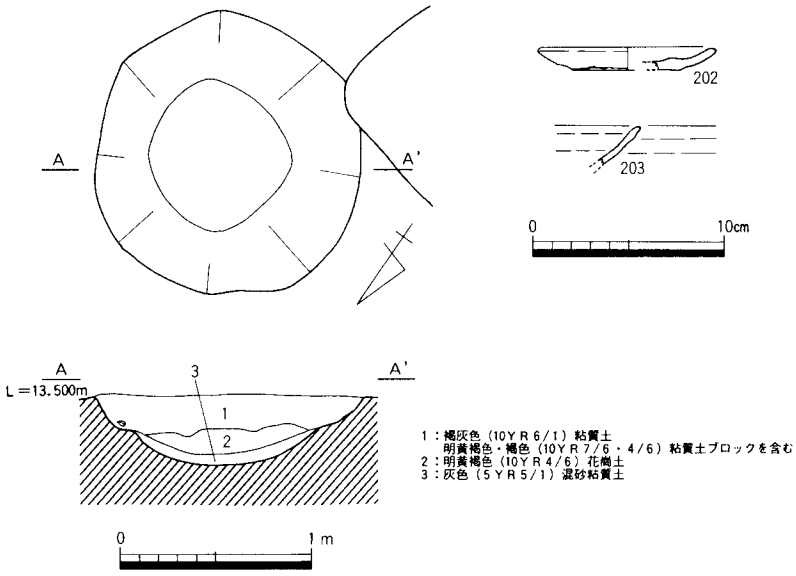


第61図　Ⅲ区Ｃ第１面ＳＫ08平・断面図（Ｓ＝１／40），出土遺物（Ｓ＝１／４）

Ⅲ区Ｃ第１面ＳＫ09

Ⅲ区ＣグリットＤ10，第１面で検出した土坑である。平面形は径1.5ｍ前後の正円形で，断面形状は舟底状を呈し，途中にテラス面を有する。埋土は３層に細別でき，下層に灰色混砂粘質土，中層に明黄褐色花崗土，上層に褐灰色粘質土がそれぞれ堆積している。上層下面ラインはテラス面とほぼ一致する。

遺物は土師質土器小皿・椀・鍋・甕，須恵器椀，黒色土器（Ａ類）椀，瓦器椀が小袋で２袋出土している。



第62図　Ⅲ区Ｃ第１面ＳＫ09平・断面図(Ｓ＝1/40),出土遺物(Ｓ＝1/4)

202は土師質土器小皿である。口径は9.6cmと大きく，それに比して器高は1.2cmと極めて低い特徴的な器形である。口縁部は外反し，底体部に段を有する。底部は回転ヘラ切りであろう。203は和泉型瓦器椀である。摩滅により調整は不明である。

出土遺物より，13世紀前葉を中心とした時期の所産と考えられる。

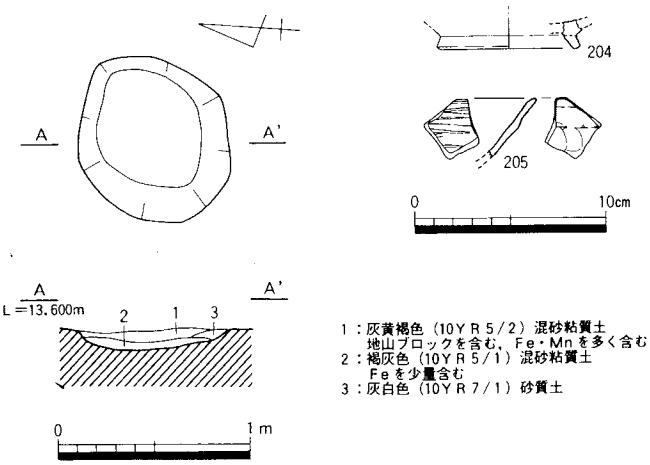
Ⅲ区Ｃ第１面ＳＫ11

Ⅲ区ＣグリットＤ10，第１面で検出した土坑である。平面形は多角形を指向しており，断面形状は浅いⅢ形を呈する。埋土は２層に大別でき，下層に褐灰色混砂粘質土，上層に灰黄褐色混砂粘質土が堆積している。上層埋土には地山ブロックを多く包含し，人為的な埋め戻しが想定できる。

遺物は土師質土器小Ⅲ・鍋・甕，須恵器椀，黒色土器（Ａ類）椀，瓦器椀が小袋で１袋出土している。

204は黒色土器（Ａ類）椀である。強く踏ん張る高台が付く。205は和泉型瓦器椀である。内面にはヘラミガキ，外面には指押さえ後，口縁部にヨコナデ調整が施される。

出土遺物より，13世紀前葉を中心とした時期に位置付けられる。



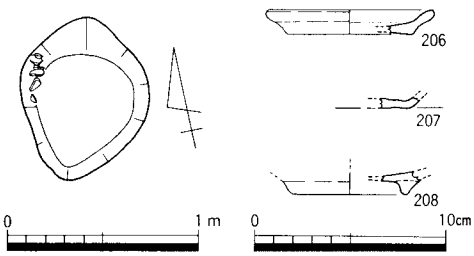
第63図　Ⅲ区Ｃ第１面ＳＫ11平・断面図（Ｓ＝1/40），出土遺物（Ｓ＝1/4）

Ⅶ区ＡＳＫ02

Ⅶ区ＡグリットＧ２で検出した土坑である。平面形は歪な方形を呈し，上面埋土は灰黄褐色混砂粘質土である。

遺物は土師質土器小Ⅲ・椀・鍋が小袋で１袋出土している206・207は土師質土器小Ⅲである。206は口径8.8cmを測り，外反して開く口縁部を有する。底部は回転ヘラ切りである。208は土師質土器椀である。断面三角形の高台が貼付される。

出土遺物や周辺遺構との関連から，13世紀前葉を中心とした時期に位置付けられる。



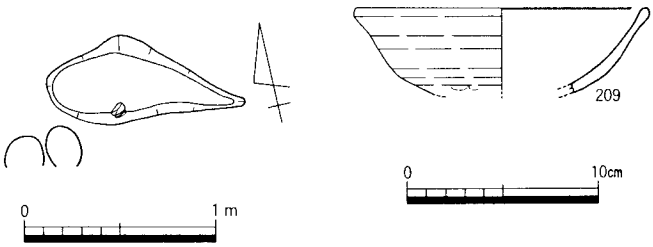
第64図　Ⅶ区ＡＳＫ02平・断面図（Ｓ＝1/40），出土遺物（Ｓ＝1/4）

Ⅶ区ＡＳＫ08

Ⅶ区ＡグリットＦ２で検出した土坑である。平面形は西側が不規則に延びる不整形を呈し，上面埋土は灰黄褐色混砂粘質土である。

遺物は土師質土器小Ⅲ，須恵器椀が数点出土している。209は須恵器椀である。口径15.6cmを測り，口縁部は直線的に開く。

出土遺物や周辺遺構との関連から，13世紀前葉～中葉を中心とした時期に位置付けられる。

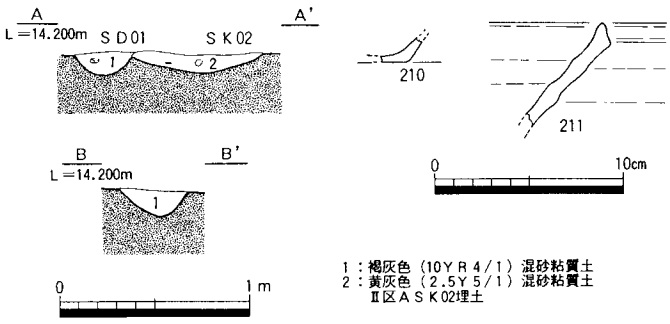


第65図　Ⅶ区ＡＳＫ08平・断面図（Ｓ＝１／40），出土遺物（Ｓ＝１／４）

溝状遺構

Ⅱ区ＡＳＤ01

Ⅱ区ＡグリットＣ17で検出した溝状遺構である。Ⅱ区ＡＳＤ01との重複関係から，それに先行する。主軸方位はN80°Wにとり，周辺方格地割にほぼ合致した方位で走行している。検出長5.6m，平均溝幅0.4m前後（検出最大幅0.5m）を測る。断面形状はU字形を呈し，深度は0.15m前後を測り，底面における顕著な勾配は確認できない。埋土は褐灰色混砂粘質土で，流水を肯定する埋土は確認できない。



第66図　Ⅱ区ＡＳＤ01断面図（Ｓ＝1/40），出土遺物（Ｓ＝1/4）

遺物は土師質土器小皿，坏・鍋・甕，須恵器小皿・鉢，瓦器椀が小袋で１袋出土している。

210は須恵器小皿である。口縁部内外面は回転ナデ調整，底部外面は回転ヘラ切りである。211は東播系捏鉢である。端面が直立気味で，上方に摘み上げる点から山仲編年のＣ２類にあたる（山仲1986，以下東播系須恵器に関してはこれに依拠する）。

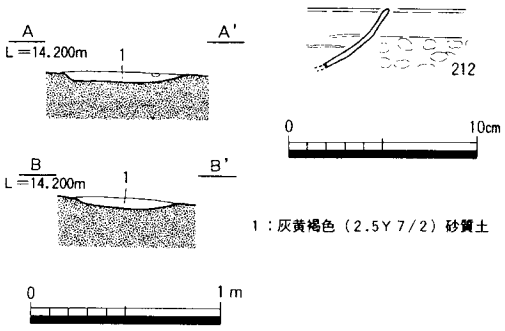
出土遺物より，13世紀初頭を中心とした時期に位置付けられる。

Ⅱ区ＡＳＤ02

Ⅱ区ＡグリットＣ17で検出した溝状遺構である。主軸方位は周辺方格地割に合致したN10°Eにとる。検出長8.8m，平均溝幅0.8m（検出最大幅1.1m）を測る。断面形状は浅いⅢ形を呈し，埋土は灰黄褐色砂質土の単一層である。

遺物は土師質土器坏・椀・鍋，須恵器鉢，瓦器椀が小袋で１袋出土している。212は表面に吸着した炭素は既に消失しているが，口縁部外面に横ナデ調整，体部外面に顕著な指押さえ，内面に回転ヘラミガキ調整が施される点から，和泉型瓦器椀と判断した。体部外面のヘラミガキが認められない点から，尾上編年Ⅲ－２期の所産と思われる。

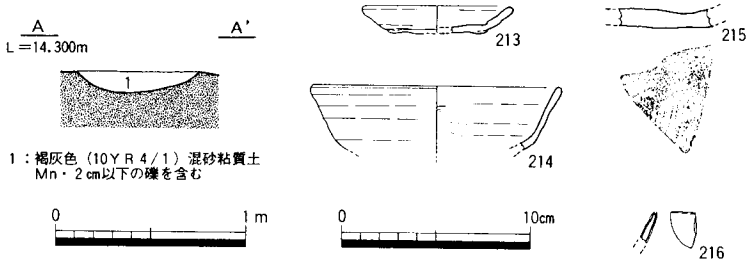
以上の出土遺物から，12世紀末～13世紀初頭の年代が与えられる。



第67図　Ⅱ区ＡＳＤ02断面図（Ｓ＝1/40），出土遺物（Ｓ＝1/4）

Ⅱ区ＡＳＤ03

Ⅱ区ＡグリットＢ18で検出した溝状遺構である。主軸方位は周辺方格地割に合致し，Ⅱ区ＡＳＤ01と17mの間隔で平行した位置関係にあり，その途切れる箇所も等しい。検出長５m，平均溝幅0.55m（検出最大幅0.7m）を測る。断面形状は浅い舟底状を呈し，埋土は褐灰色混砂粘質土である。位置関係や埋土において，Ⅱ区ＡＳＤ01と類似点が多く，同時併存し関連し合ったものと考えたい。



第68図　Ⅱ区ＡＳＤ03断面図（Ｓ＝１/40），出土遺物（Ｓ＝１/４）

遺物は土師質土器小皿・坏・椀，須恵器椀・鉢，瓦器椀，青磁碗が小袋で１袋出土している。

213は土師質土器小皿である。口径８cmを測り，底部は回転ヘラ切り（L）である。214は土師質土器坏である。口径は10.3cmを測る。215は底部外面には回転糸切りが認められる点から東播系捏鉢と考えられる。216は青磁椀である。外面には鎬のない蓮弁文が施され，横田・森田分類Ｉ－５ａ類である。

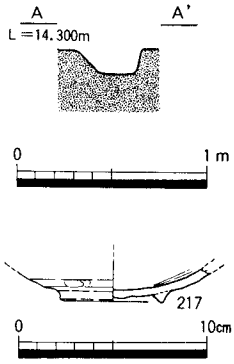
出土遺物に加え，Ⅱ区ＡＳＤ01との関連から，13世紀初頭を中心とした時期を想定したい。

Ⅱ区ＡＳＤ05

Ⅱ区ＡグリットＢ18で検出した溝状遺構としたが，土坑とした方が適切であろう。平面形は長楕円形を呈し，長軸長0.8m，短軸長0.4mを測る。断面形状は深い皿形を呈する。

遺物は土師質土器小皿，須恵器甕が数点出土している。217は須恵器椀である。体部内面に板ナデ，外面に指押さえ後，回転ナデ調整が施されており，西村型須恵器椀と思われる(廣瀬1982，片桐1994，佐藤2000)。高台は断面三角形を呈し，径5.1cmを測る。

出土遺物から，13世紀前葉を中心とした時期に位置付けられる。



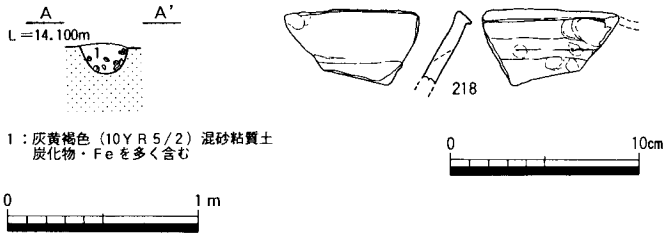
第69図　Ⅱ区ＡＳＤ04断面図(Ｓ=1/40)，出土遺物(Ｓ=1/4)

Ⅱ区ＢＳＤ01

Ⅱ区ＢグリットＣ16で検出した溝状遺構である。主軸方位はＮ103°Ｗで，ほぼ東西を指向する。検出長1.6m，平均溝幅0.25mを測る。断面形状はＵ字形を呈し，埋土は炭化物・鉄分が少量含む灰黄褐色混砂粘質土の単一層である。

遺物は土師質土器小皿・坏・鍋，須恵器鉢，瓦器椀が数点出土している。218は十瓶山窯産須恵器鉢の片口部である。口縁端部は内側にやや弱く，外方へ強く挽き出し，端面には軽い凹面を持つ。

出土遺物より，13世紀を中心とした時期に位置付けられる。



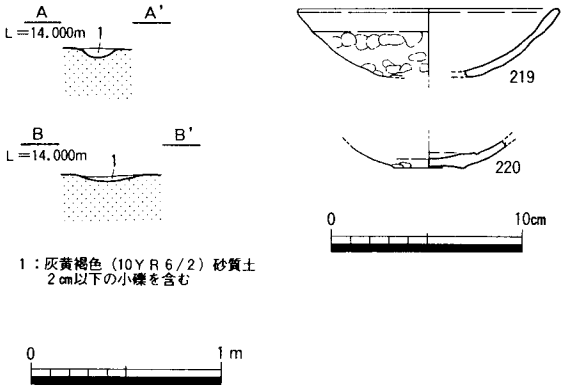
第70図　Ⅱ区ＢＳＤ01断面図(Ｓ=1/40)，出土遺物(Ｓ=1/4)

Ⅱ区ＣＳＤ03

Ⅱ区Ｃ東端部，グリットＣ15で検出した溝状遺構である。主軸方位は周辺地割にほぼ合致し，Ｎ10～20°Ｅにとる。検出長は9.5m，平均溝幅0.3mを測り，北端は調査区外へ延長する。断面形状は浅い舟底状を呈し，0.05m前後と極めて浅い。

遺物は土師質土器鍋，瓦器椀，白磁皿が数点出土している。

219は和泉型瓦器椀である。外面には顕著な指押さえが施され，ヘラミガキが識別できない点から尾上編



第71図　Ⅱ区ＣＳＤ03断面図（Ｓ＝１／40），出土遺物（Ｓ＝１／４）

年Ⅲ－２～３期の所産と思われる。220は白磁Ⅲである。見込みに段を有し，底部は上げ底を呈する。釉調は灰白色を呈し，外面体部下半には施釉されない。横田・森田分類白磁ⅢⅣ－１ｂ類に該当する。

出土遺物より，13世紀前葉を中心とした時期に位置付けられる。

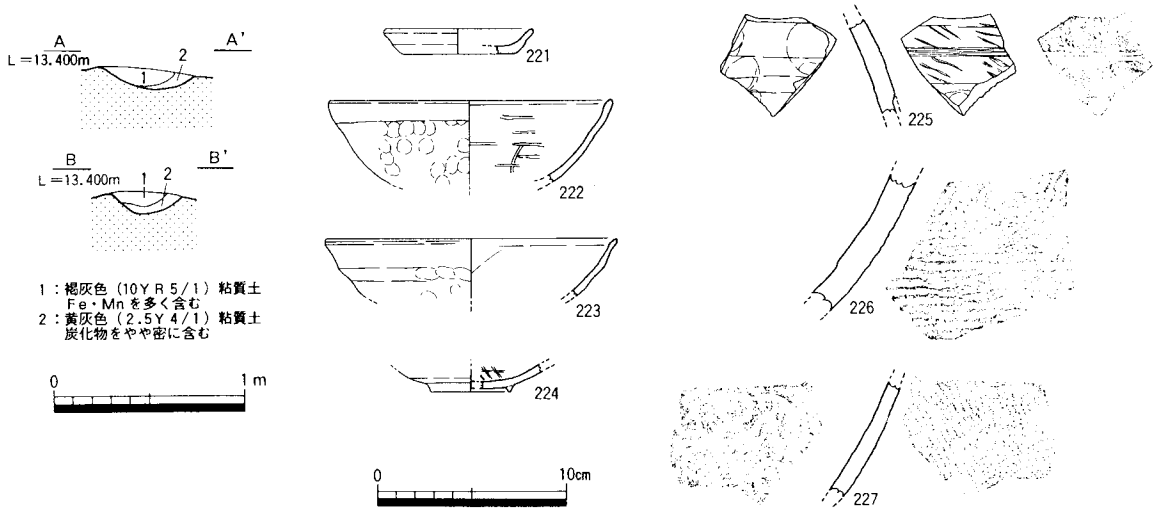
Ⅲ区ＢＳＤ02

Ⅲ区ＢグリットＤ11で検出した溝状遺構である。主軸方位をＮ85°Ｗにとり，周辺方格地割に合致する。後述するⅢ区Ｂ・ＣＳＤ01と重複関係を有し，それに先行する。検出長6.3m，平均溝幅0.4mを測り，両端とも調査区外へ延長する。断面形状は舟底状を呈し，埋土は下層に炭化物をごく少量含む黄灰色粘質土，上層に褐灰色粘質土が堆積している。

遺物は土師質土器小皿・坏・椀・鍋・甕，須恵器椀・壷・甕，瓦器椀，亀山産須恵器甕が小袋で２袋出土している。

221は土師質土器小皿である。口縁部は外反気味に開き，底部は回転ヘラ切り（Ｒ）である。222～224は和泉型瓦器椀である。222は破片からの復元であるためか，やや深椀気味の形態であるが，元来は開き気味の器形であったと類推できる。外面のヘラミガキがない点等から，尾上編年Ⅲ－２期～Ⅲ－３期の所産と考えられる。223は器表面の炭素が消失している。内面のヘラミガキは不明であるが，外面には確認できない。224は矮小化した断面三角形の高台が付き，見込みに平行線状ヘラミガキが施される。225は須恵器壷と考えられる。外面は左上がりの平行叩き→板ナデないし横ナデ調整→２条の沈線，内面は当て具痕→そのナデ消し→横ナデ調整の順序でそれぞれ施される。226は十瓶山窯産須恵器甕と思われる。底部～胴部にかけての部位で，大型品であるためか，底部と胴部下半の叩き方向が変化している。227は須恵器甕ないし壷である。内面には粗い同心円文当て具痕，外面には細かい正格子叩きが施される。断面の色調が青灰色を呈し，特徴的である。内面当て具痕の残存から十瓶山窯産とは考えられず，亀山産須恵器と思われる（岡田ほか1988）。亀山産須恵器は当遺跡では，Ⅱ区ＢＳＰ31で１例確認したのみで，その出土数は極めて少ない。

出土遺物による限り，13世紀前葉を中心とした時期に位置付けられる。



第72図　Ⅲ区ＢＳＤ02断面図（Ｓ＝１／40），出土遺物（Ｓ＝１／４）

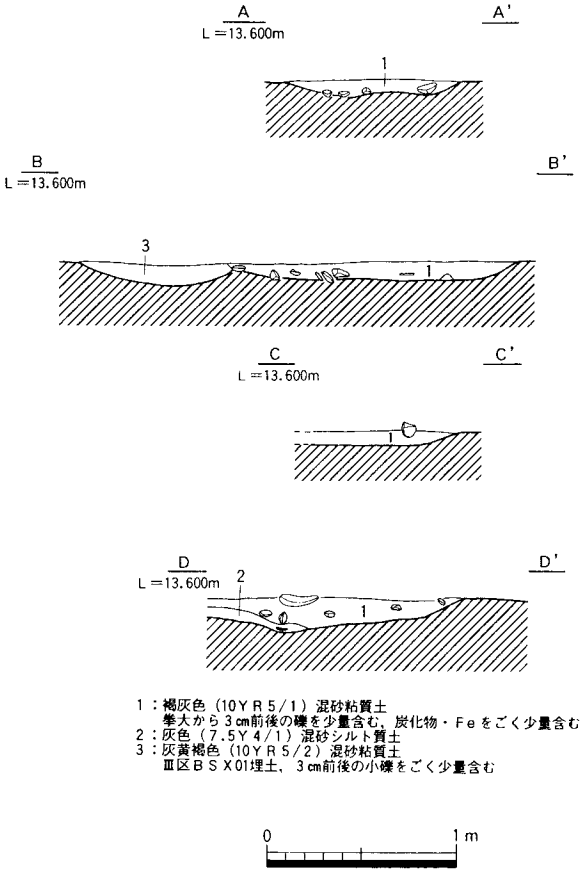
Ⅲ区Ｂ・Ｃ第１面ＳＤ01

Ⅲ区Ｂ・Ｃ第１面グリットＤ10を中心に検出した溝状遺構である。Ⅲ区Ｂにおいて直角に屈曲し，東西主軸がＮ74°Ｗ，南北主軸がＮ14°Ｅにとり，周辺方格地割にほぼ合致した主軸方位を有する。南北主軸を呈する溝の東端，東西主軸西端は共に調査区外へ延長するため全容は不明であるが，検出した限りでは，東西検出長7.5m，南北検出長35m，東西平均溝幅1.2m(検出最大幅1.5m)，南北検出最大幅1.2mを測る。断面形状は浅い皿形を呈し，埋土はおおむね褐灰色混砂粘質土の単一層である。南北主軸溝の北端は，前述したⅢ区ＣＳＺ01（段状遺構）に接する位置で収束しており，Ⅲ区ＣＳＺ01とセットになって機能する区画溝（区画施設）と考えられる。仮に南北主軸の溝長で正方形の区画を想定すると，一辺35mとなり，区画した占有面積は１,225㎡を測る。東西溝は坪界線に相当するⅢ区ＣとⅣ区間を走る現道路の南端から約50mに位置し，一辺109mの坪内のほぼ中央に開削されており，その計画性が窺える。なお，対象地の幅が８m前後と狭いことに起因するためか，この区画された範囲において，掘立柱建物跡を復元することはできなかった。

また，この区画溝の範囲において，遺構面を２面確認している。第２面ではＳＤ01に先行する区画施設は確認できないが，シルト質土層Ⅲの上面において，柱穴を中心としたやや散漫な遺構を検出している。第１面は12世紀末～13世紀初頭の土器を比較的多く包含するにぶい灰色混砂粘質土の上面で検出しており，確証に乏しいが，この層を整地層と評価することが可能である。Ⅲ区ＣＳＺ01も整地後，再度削り出しており，Ⅲ区Ｂ・ＣＳＤ01と共に区画施設を構成している。

遺物の出土量は当該期の遺構のなかでは最も多く，20リットル入りコンテナ１箱程度出土している。遺物は土師質土器小皿・坏・椀・鍋・甕，吉備系土師器椀，須恵器椀・鉢・甕・壷，黒色土器（Ａ類）椀，瓦器椀・皿，白磁碗，青磁碗・合子，東播系捏鉢，平瓦，火打ち石が出土している。

228～244は土師質土器小皿である。口縁部の立ち上がりの形態差による分類が可能である。228～233は長細く外反する口縁部を有する。口径は８cm前後でまとまる。底部は回転ヘラ切り（Ｒ）が大半であるが，231のみ回転ヘラ切り（Ｌ）の可能性が残る。229・230は底部が相対的に盛り上がり，上げ底を呈する。232は内外面に顕著な二次焼成を受ける。234～237は短く肉厚で，直線的に開く口縁部を持つ。底部は回転ヘラ切りで，方向が確認できた235は右回転であった。口径は7.6cm前後とやや小さい。235は内外面ともに顕著な二次焼成を受け，にぶい赤褐色に変色している。238～241は底体部境に丸味を有し，口縁部は内湾気味に立ち上がる。口径は8.5cm前後とやや大きい。底部は回転ヘラ切りであるが，方向は不明である。239は縁部および見込みに煤が付着してい



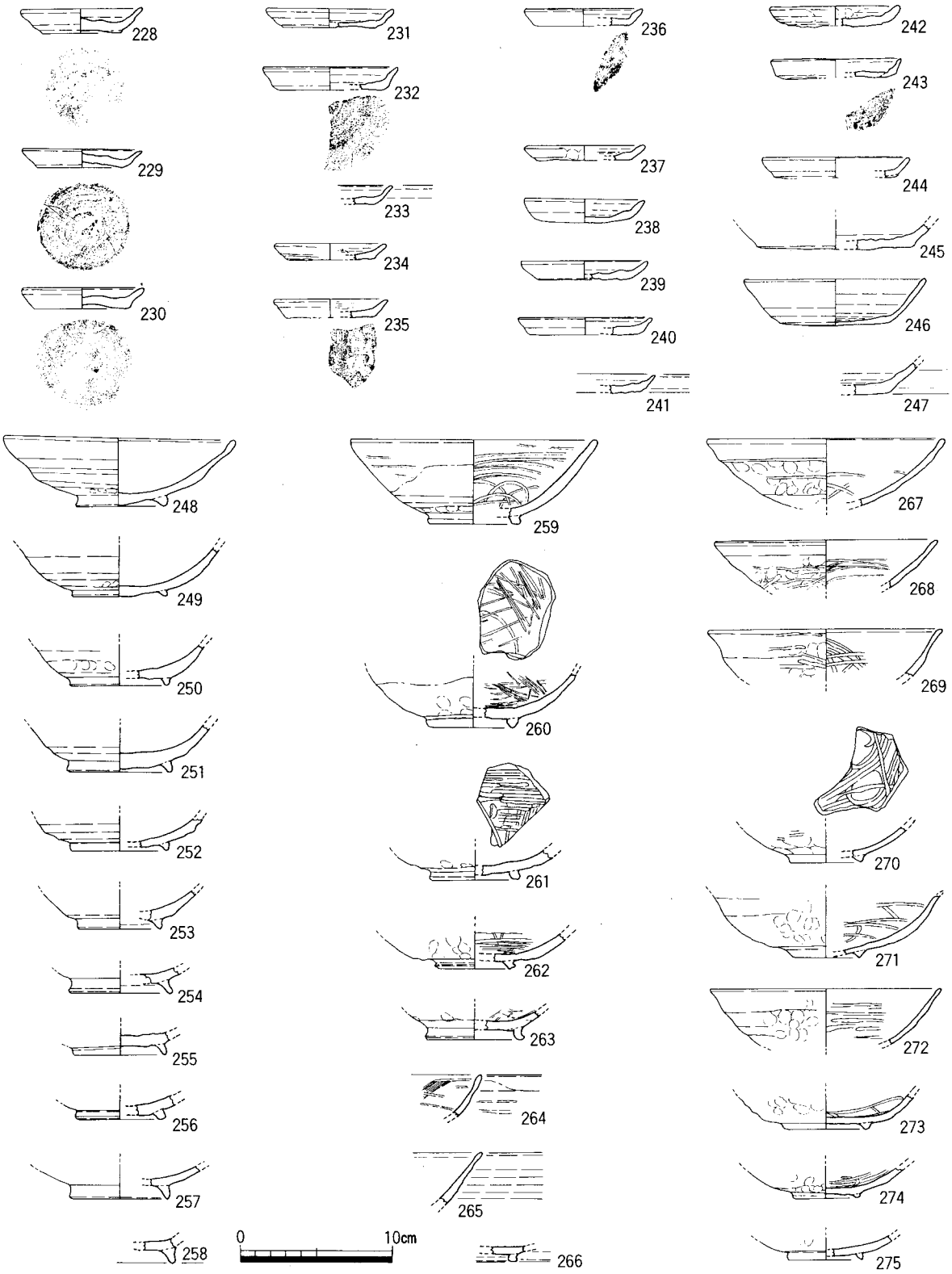
第73図　Ⅲ区Ｂ・Ｃ第１面ＳＤ01断面図（Ｓ＝1/40）

る。242は内湾気味に立ち上がる肉厚の口縁部を有し，器厚・器形がやや異質である。底部は回転ヘラ切り（L）で，底体部境に回転ヘラ切りに連続する沈線が認められる。内外面ともに二次焼成が認められる。243は底部から直線的に立ち上がり，強い回転ナデ調整により，先細りの断面を呈する口縁部を持つ。底部は回転ヘラ切り後，静止糸切り状の板状圧痕が施される。このような器形は松並・中所遺跡では他に確認できない。244は須恵器小皿で，表面の摩耗が著しい。245～247は土師質土器坏である。245の底部は回転ヘラ切りで，底部外縁に強い回転ナデ調整が加えられる。246は口径12cmを測り，口縁部は直線的に開く。底部は回転ヘラ切り（L）で，全体的に極めて薄作りである。249は西村型須恵器椀である。高台は細く外方へ幾分踏ん張る。内外面ともに顕著な二次焼成を受けているため，ヘラミガキの有無は確認できない。251は須恵器椀である。底体部境が明瞭に屈曲し，坏の器形を想起させる。底部厚が0.9cmと極めて厚く，外面には板状圧痕が認められる。須恵器椀と判断したが，土師質土器椀になる可能性も払拭できない。256は須恵器椀である。高台は潰れた方形を呈する。248・250・252・253は土師質土器椀である。248は口径15.3cm，器高4.5cm，高台径5.8cmを測る。口縁部が端部手前から内湾する特徴を有し，底体部境がやや肉厚になる。高台は比較的丁寧に貼付され，底部は押し出しにより接地面に近づいている。内外面には煤が付着しているが，二次焼成によるものか否かは不明である。250は焼成不良の須恵器椀の可能性を想定したが，同時期の須恵器椀の高台径が6.4cmを測るものはなく，ややシャープな高台断面等から，土師質土器椀と判断した。高台は断面三角形を呈し，体部外面には指押さえ→回転ナデ調整が施されている。内外面ともに二次焼成による変色が認められる。252・253は底体部の屈曲が明瞭で，底部は回転ヘラ切り，体部は回転ナデ調整が施される。高台は断面三角形を呈する。西村型須恵器椀とは形態的に異なり，片桐氏が指摘する坏D＋高台＝椀Aという製作技法を採用していることが窺える（片桐1992）。しかし，破片であるため同時期の坏との法量比較は困難である。254・255・257・258は吉備系土師椀である。いずれも高台は細長く，胎土がきめ細かい。255は内外面ともに二次焼成を受け，にぶい黄橙色に変色してる。259～266は黒色土器（A類）椀である。259は口径16cm，器高5.5cm，高台径5.8cmを測る。口縁部は直線的に開き，高台は外方に軽く踏ん張る。全体的に肉厚で，底体部境が最も肥厚する。口縁部内面には回転ヘラミガキ，見込みには螺旋状ヘラミガキが施され，外面にも回転ナデ調整により生じた稜を消すように，ヘラミガキが認められる。外面上部に炭素の吸着がみられる。260の体部内面には分割ヘラミガキ，見込みには平行線状ヘラミガキがそれぞれ施され，外面のミガキの有無は確認できないが，古い様相を持つ。261は見込みには入念なヘラミガキが施され，体部には分割と思われるヘラミガキが一部確認できる。260同様古い様相を呈する。262は体部内面に回転ヘラミガキ，見込みには平行線状ヘラミガキが施される。底体部境が肉厚で，やや粗雑な作りである。外面には二次焼成によると思われる変色が認められる。263は見込みに平行線状ヘラミガキが施され，底部高台内には板状圧痕が認められる。267～271は和泉型瓦器椀である。267～270は内外面にヘラミガキが施され，尾上編年Ⅲ－2期の所産と考えられる。271～275は体部外面にヘラミガキは確認できず，高台は矮小化した断面三角形を呈する。尾上編年Ⅲ－2～3期の所産である。276・277は白磁碗である。276は玉縁状の口縁部を有し，胎土中に黒色細粒を含む。横田・森田分類白磁碗Ⅳ－2類である。277は幅広で，削り出しが極めて浅い高台を持つ。横田・森田分類白磁碗Ⅳ－1a類である。278は白磁皿である。横田・森田分類白磁皿Ⅵ－1b類に該当するであろう。

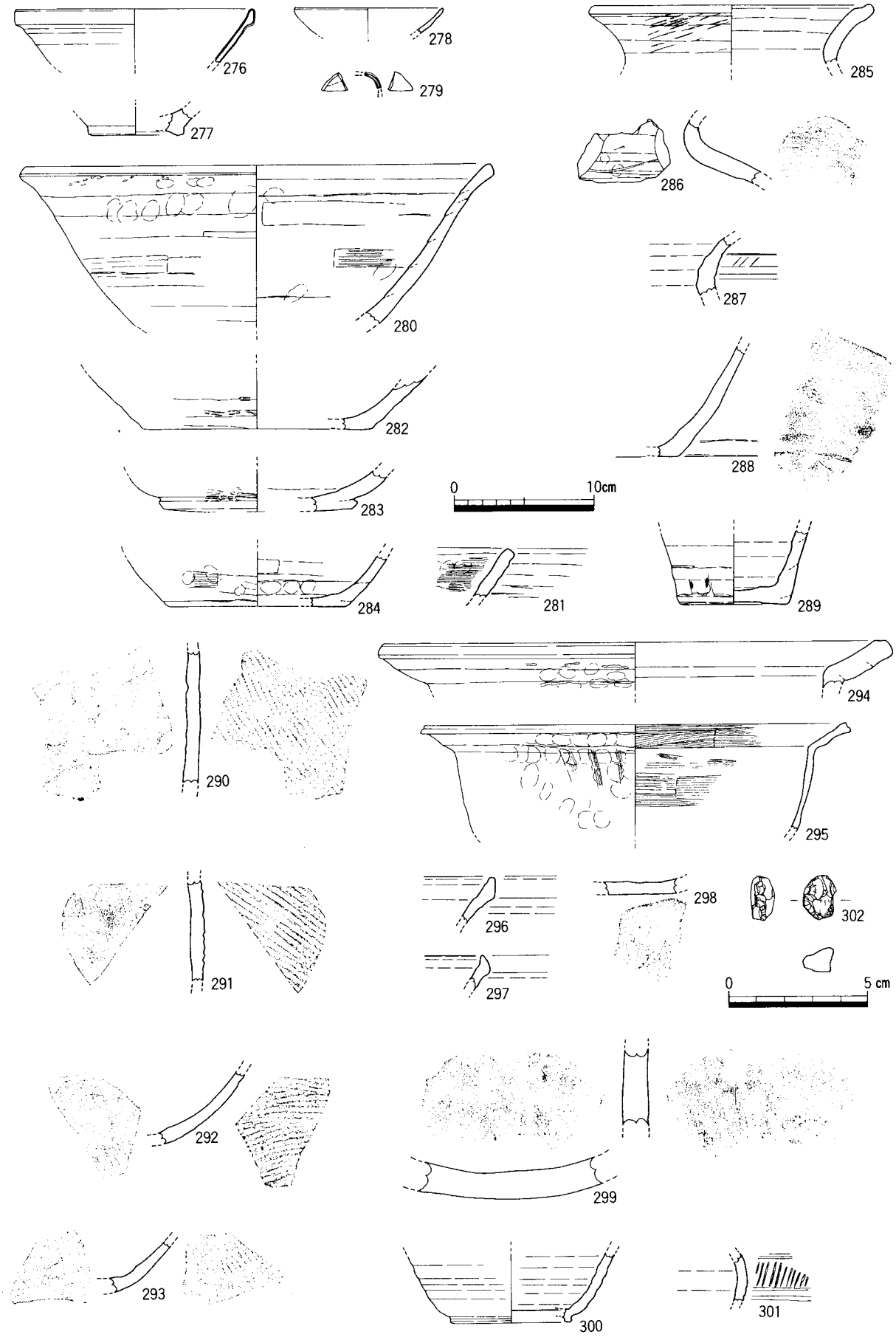
279は青磁合子である。

280～284は須恵器鉢である。280は十瓶山窯産須恵器鉢である。口縁部は内湾気味に立ち上がり，端

部手前で外方へ屈曲する。端部は四角く収め，端面にわずかな凹面を持つ。内外面ともに板ナデ調整が施される。器形，胎土，色調，出土位置から282と同一個体の可能性が高い。佐藤分類鉢Ｅ－１に近い特徴を示す（佐藤2000）。281は須恵器鉢である。口縁部内外面は横ナデ，体部内外面は板ナデがそれぞれ施される。端部は外方に引き出し，端面は平坦である。282～284・288は十瓶山窯産須恵器鉢底部で



第74図　Ⅲ区Ｂ・Ｃ第１面ＳＤ01出土遺物１（Ｓ＝１／４）



第75図　Ⅲ区B・C第1面SD01出土遺物2（S＝1／4，1／2）

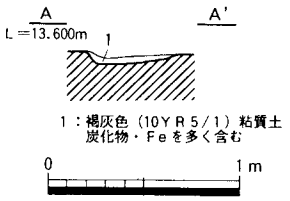
ある。282の外面には平行叩き後，横ナデないし板ナデ調整が施され，底部縁部のみ強いナデ調整が加わる。283の底部外面には平行叩き→板ナデ調整後に，底部外縁に強いナデ調整が施され，明瞭な段が生じている。285は十瓶山窯産須恵器甕である。焼き歪みにより計測値に問題が残るが，口径は20cm前後を測る。口縁部は緩やかに外反し，端部は丸く収める。口縁部外面は右上がりの叩き成形後，横ナデ調整を施す。286は須恵器甕である。肩部外面は平行から左上がりの長格子叩き後，横ナデ調整が施される。287は十瓶山窯産須恵器の大型壷頸部である。1.5cmの間隔を保ち，２条の沈線が施される。沈線間にはヨコナデ調整に消され残った右上がりの叩き痕が確認できる。289は須恵器小壷である。底径7.8cmを測り，内外面に二次焼成の痕跡が認められる。290・291は須恵器甕体部片である。外面は正格子叩き，内面は指押さえ後，横ナデ調整が施される。292・293は須恵器甕底体部境付近である。293は外面に施される長格子叩きの方向が変わり，切り合い関係の観察では底部→体部へと叩き成形が行われている。294は土師質土器甕である。口径36cmを測り，口縁端部に面を持つ。295は土師質土器鍋である。口縁部は「く」字形を呈し，端部は下方に強く引き出す。内面は丁寧なヨコハケ調整が施される。外面調整は煤の付着により判然としないが，顕著な指押さえ後，板ナデか横ナデ調整が施されている。胎土中に多量の角閃石を含む特徴的な胎土である。296～298は東播系捏鉢である。296は端部が肥厚し，端面は垂直であり，山仲編年Ｃ１類に該当するであろう。298は底部に回転糸切り痕がみられる。

299は平瓦である。凹面に布目がみられ，凸面には縄目叩きが施されていると思われる。Ⅲ区Ｂ・ＣＳＤ01からの瓦の出土は数点に留まり，瓦葺き建物の存否を議論できる出土量ではない。300は須恵器壷である。内外面ともに入念な回転ナデ調整が施され，外へ踏ん張る高台がつく。混入と思われる。301は須恵器甑であろう。平行沈線により区画された文様帯に刻目文を連続的に施す。混入品であるが，同じくⅢ区Ｃの出土である541の瑪瑙製勾玉の存在もあり，削平された古墳が隣接している可能性を示唆し得る資料である。302はチャート製火打ち石である。火打ちが石英製からチャート製へと転換するのは，17世紀前後と想定されており，出土遺構の年代観と齟齬をきたす（北野1999)。Ⅲ区Ｂ・ＣＳＤ01埋没段階に用いられていた可能性を否定することはできないが，現時点では混入と考えたい。

以上の出土遺物から，12世紀末～13世紀前葉を中心とした時期への位置付けが可能である。

Ⅲ区Ｃ第１面ＳＤ04

Ⅲ区ＣグリットＤ10，第１面で検出した溝状遺構である。主軸方位はＮ66°Ｗにとり，周辺地割とは異なる。Ⅲ区Ｂ・ＣＳＤ01との重複関係からそれに後出する。検出長4.5m，平均溝幅0.5mを測り，東端は調査区外へ延長する。断面形状は浅い皿形を呈し，埋土は炭化物を含む褐灰色粘質土の単層である。



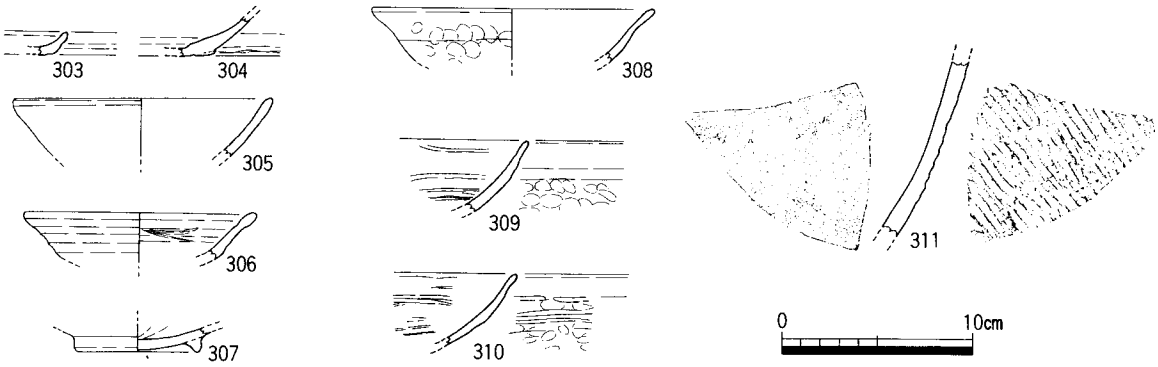
第76図　Ⅲ区Ｃ第１面ＳＤ04 断面図（Ｓ＝1/40）

遺物は土師質土器小皿・坏・椀・鍋・甕，須恵器甕，黒色土器（Ａ類）椀，瓦器椀が小袋で１袋出土している。

303は土師質土器小皿である。口縁部は短く，内湾気味に立ち上がり，外面口縁部下半に段を持つ。304は土師質土器坏である。外面底体部境に段を持つ。305は土師質土器椀である。306は土師質土器坏ないし椀である。小片であるが，径復元では12.4cmと小型で，外反気味に立ち上がる口縁部を有する特徴的な器形である。口縁部内外面には幅の狭い回転ナデ調整が加えられる。307は黒色土器（Ａ類）椀である。高台は断面三角形を呈する。308～310は和泉型瓦器椀である。309は内面に回転ヘラミガキ，

体部外面に顕著な指押さえ，口縁部に横ナデ調整がそれぞれ施され，尾上編年Ⅲ－３期の所産である。310は内外面にヘラミガキが施され，尾上編年Ⅲ—２期の所産と考えられる。311は十瓶山窯産甕である。外面は長格子叩き，内面は当て具痕→ナデ→ヨコナデ→タテナデの順序で施される。

出土遺物や周辺遺構との関係から，13世紀前葉を中心とした時期に位置付けたい。



第77図　Ⅲ区Ｃ第１面ＳＤ04出土遺物（Ｓ＝１／４）

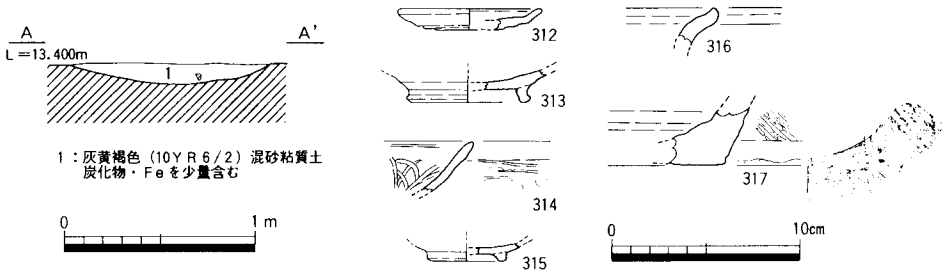
Ⅲ区Ｃ第２面ＳＤ08

Ⅲ区ＣグリットＤ10で検出した溝状遺構である。主軸方位は周辺方格地割に合致したＮ70°Ｗにとる。検出長4.5m，平均溝幅１ｍ（検出最大幅1.2m）を測り，西端は調査区外へ延長し，東端はⅢ区Ｃ第２面ＳＸ03との重複関係を有する。断面形状は浅い舟底状を呈し，埋土は炭化物を包含する灰黄褐色混砂粘質土の単一層である。

遺物は土師質土器小皿・椀・鍋，須恵器鉢・甕，黒色土器（Ａ類）椀，瓦器椀，白磁碗が小袋で１袋出土している。

312は土師質土器小皿である。口径7.8cmを測り，器高は1.1cmと著しく低い。口縁部は明瞭な立ち上がりを持たず，大きく開く形態である。底部は回転ヘラ切り（Ｒ）である。313は土師質土器椀である。高台高は0.7cmと高く，断面四角形を呈する。高台径は6.6cmを測る。314・315は和泉型瓦器椀である。314は口縁部内面に回転ヘラミガキ，見込みから口縁部下半に連結輪状ヘラミガキ，口縁部外面にヨコナデ調整，ヘラミガキがそれぞれ施される。尾上編年Ⅲ－２期の所産であろう。315の高台は断面四角形を呈する。316は須恵器鉢である。口縁部は端部付近で緩やかな「Ｓ」字状を呈する。317は十瓶山窯産甕ないし壷である。残存部位で見る限り，器厚が非常に厚い。体部外面は左上がりの正格子叩き，底部外縁にのみ強いナデ調整が施される。

出土遺物より，12世紀後半ないし末を中心とした時期に位置付けられる。



第78図　Ⅲ区Ｃ第２面ＳＤ08断面図（Ｓ＝１／40），出土遺物（Ｓ＝１／４）

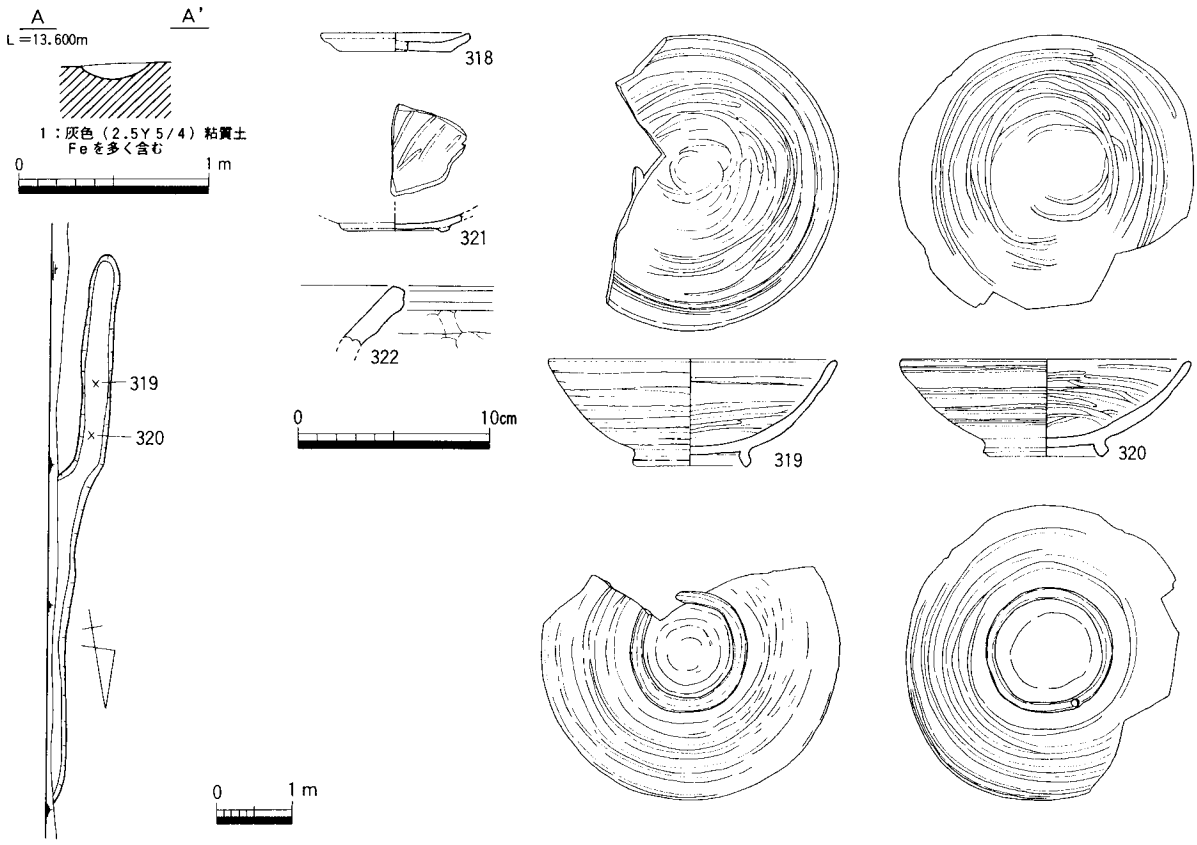
Ⅳ区ＢＳＤ05

Ⅳ区ＢグリットＥ７で検出した溝状遺構である。検出位置から，Ⅳ区ＡＳＤ03と連続する可能性が高く，同様に連続する溝状遺構であるⅣ区ＢＳＤ04，Ⅳ区ＣＳＤ02・03と0.4mの間隔で平行に走行する。主軸方位はＮ13°Ｅを呈し，周辺方格地割とは合致しない。断面形状は浅い舟底状を呈し，埋土は灰色粘質土の単一層である。

遺物の出土は数点に留まるが，完形に近い須恵器椀(319・320)が出土している。その出土状況は，0.3mの間隔で，溝中央部から出土し，その検出レベルもほぼ同一であった。椀内の土に関しては，フローリングを行ったが，何も検出することはできなかった。また，須恵器椀はいずれも口縁部の一部が欠損しており，溝内から残りの部位は出土していない。使用段階での破損を想定すべきであろうが，溝内に廃棄（ないし埋納）する際に，意図的に口縁部の一部を打ち欠いた可能性も考慮する必要がある。

318は土師質土器小皿である。口径7.8cmを測り，口縁部は直線的に短く開く。319・320は西村型須恵器椀である。口縁部は内湾気味に立ち上がるが，320は開きが強く，器高が低い。高台は外方へ踏ん張り，断面四角形を呈する。調整は指押さえ・板ナデ調整→回転横ナデ調整後，内外面に回転ヘラミガキが比較的入念に施される。外面の回転ヘラミガキはヨコナデ凸部と重なる位置に施される。佐藤分類椀ＡⅡ－６に該当するであろう（佐藤2000）。321は瓦器椀底部である。高台は潰れた四角形を呈し，内面見込みには平行線状ヘラミガキが施される。322は土師質土器甕である。端面には稜がみられ，端面上部は丸味を有し，下部は凹む。

出土遺物から，13世紀第１四半期を中心とした時期に位置付けられる。



第79図　Ⅳ区ＢＳＤ05平・断面図（Ｓ＝１／100，１／40），出土遺物（Ｓ＝１／４）

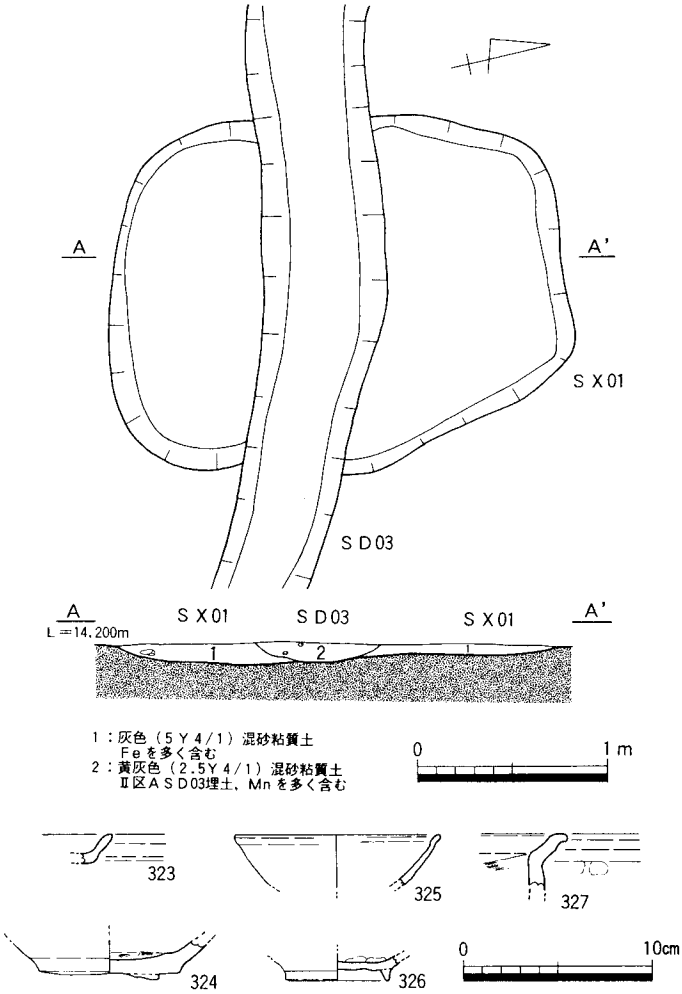
不明遺構

Ⅱ区ＡＳＸ01

Ⅱ区ＡグリットＢ18で検出した不明遺構である。Ⅱ区ＡＳＤ03と重複関係を有し，それに先行する。平面形は不整形で，長軸長2.4m，短軸長1.7mを測る。断面形状は浅い皿形を呈し，埋土は灰色混砂粘質土の単一層である。

遺物は土師質土器小皿・坏・鍋・甕，吉備系土師器椀，須恵器椀，瓦器椀が小袋で２袋出土している。323は土師質土器小皿である。

324は土師質土器坏である。底部は回転ヘラ切り（Ｌ？）後に板状圧痕が施される。底径7.4cmを測る。325は土師質土器椀であるが，反転復元による口径計測では10.8cmという値を示し，小型の椀になる。326は比較的高い高台部と白色系の色調から吉備系土師器椀と思われる。327は土師質土器甕である。口縁部は「く」字形に屈曲し，端部は横ナデ調整により横方向に引き延ばしている。外面にのみ煤が付着している。



第80図　Ⅱ区ＡＳＸ01平・断面図（Ｓ＝１／40），出土遺物（Ｓ＝１／４）

出土遺物や周辺遺構との関係から，13世紀初頭を中心とした時期に位置付けられる。

Ⅱ区ＢＳＸ01

Ⅱ区ＢグリットＣ16で検出した不明遺構である。平面形は不整形を呈し，西側へ溝状に延び，調査区外へ至る。溝状を呈する部分を除くと，東西長3.8m，南北長1.2mを測る。断面形状は浅い皿形を呈し，埋土は褐灰色混砂粘質土の単一層である。

遺物は土師質土器小皿・坏・鍋・甕，須恵器鉢・甕，瓦器椀，青磁碗が小袋で２袋弱出土している。

328は表面のカーボンは消失しているが，口縁部外面に幅広の横ナデ調整，体部外面の指押さえが施されており，和泉型瓦器椀と判断した。329は須恵器鉢である。瓦質焼成を呈し，表面の摩滅が著しい。

出土遺物や周辺遺構との関連から，13世紀前葉を中心とした時期に位置付けられる。

Ⅱ区ＢＳＸ04

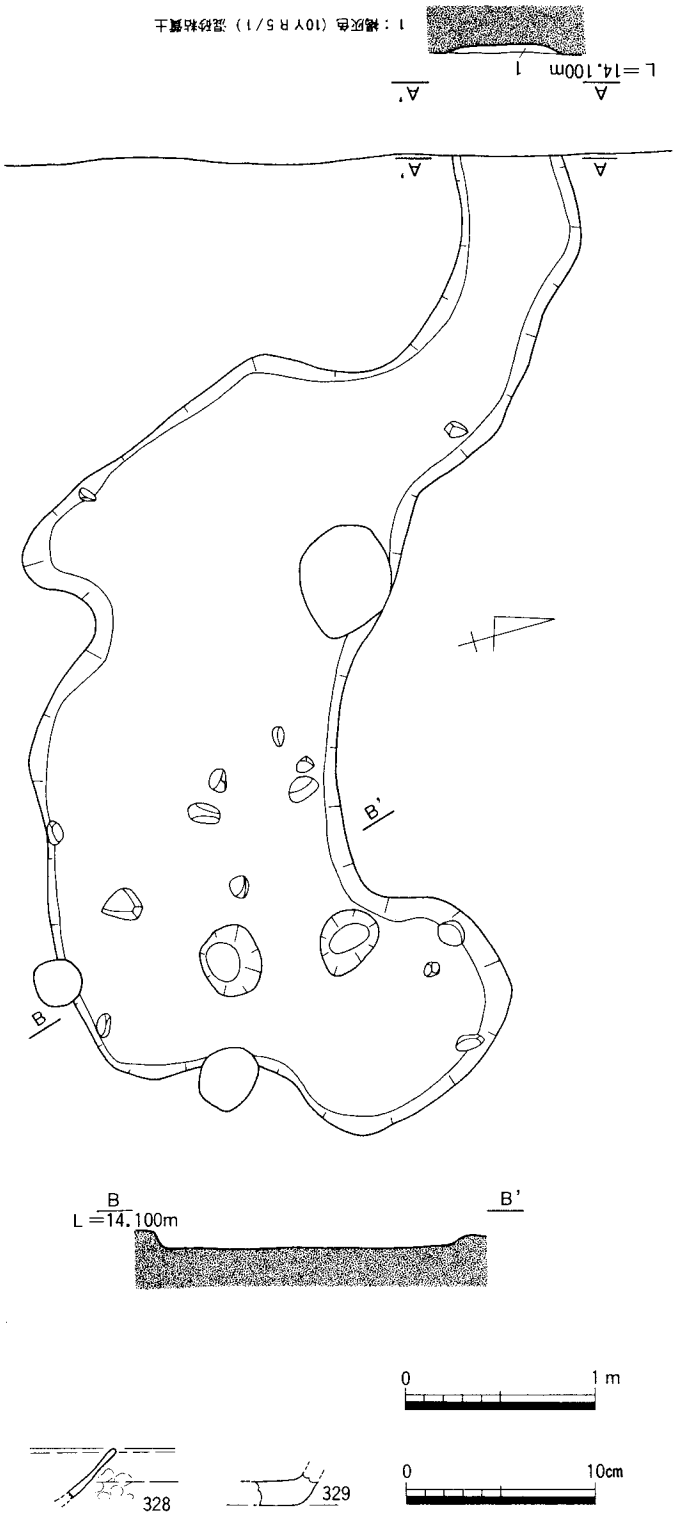
Ⅱ区ＢグリットＣ16で検出した不明遺構である。平面形は溝状遺構が「コ」字状に巡り，その両西端は調査区外へ延長するため，「□」字形に囲繞するか否かは不明である。南東隅と北東隅が直角に屈曲し，南北長は3.1m前後を測る。溝平均幅は0.6m（検出最大幅1.0m，最小幅0.3m）を測り，断面形状

は浅い舟底状を呈する。埋土は炭化物が少量含まれる灰黄褐色砂質土の単一層である。

遺物は土師質土器小皿・坏・鍋・甕・足釜，須恵器甕，瓦器椀が小袋で4袋程度出土している。その出土状況は，南東隅に330～332が集中して出土し，他からの出土は極めて少ない。330は底部片は一切確認できず，口縁部と体部片で全体の1／3程度まで接合可能で，それ以外に同一個体と考えられる破片が数点あり，全体の1／2程度まで復元できる出土量がある。

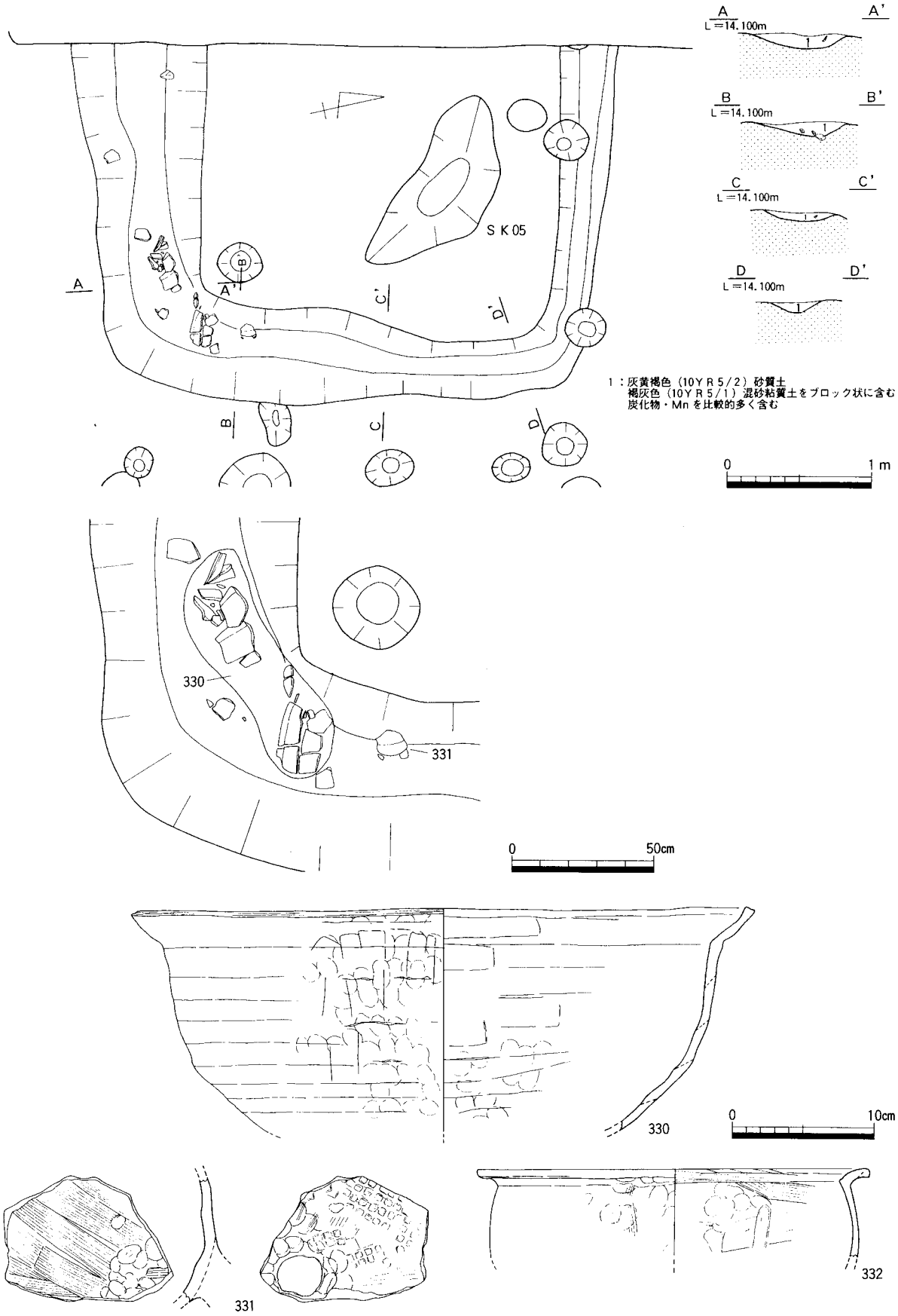
方形に巡る溝状遺構という性質から，方形周溝墓を想定できるが，区画内に埋葬施設と考えられる遺構は存在しない。前述したⅡ区ＢＳＫ05は不整形な平面プランや断面形状，埋土からは埋葬施設と評価できるものではない。

330は土師質土器鍋である。丸味のある底部からやや直線的に立ち上がる体部に内湾して立ち上がる口縁部が鈍角に取り付く。端部は口縁部に対し，浅い凹面を有する。体部調整には内外面を問わず，叩き調整やハケメは一切確認できず，体部外面と内面下半は指押さえ後横ナデ調整，内面上半は板ナデ調整が施されている。331は足釜であろう。外面は正格子叩き後，板ナデ調整，内面は板ナデ調整を施し，最終工程で脚部を取り付け時の指押さえが内外面に認められる。外面には煤が激しく付着している。332は土師質土器甕である。口縁部は体部に対し直交して屈曲し，外反する。端部は丸く収め，わずかに端面を有する。口縁部外面には顕著な指押さえが確認でき，それにより口縁端部はやや歪になる。体部は丸味を有する。口縁部内面には数次に渡るヨコハケが施され，体部内外面は板ナデ調整で仕上げられる。



第81図　Ⅱ区ＢＳＸ01平・断面図（Ｓ＝1/40），出土遺物（Ｓ＝1/4）

出土遺物や周辺遺構との関係から，13世紀前葉を中心とした時期に位置付けられる。



第82図　Ⅱ区ＢＳＸ04平・断面図（Ｓ＝１／40），出土状況図（Ｓ＝１／20），出土遺物（Ｓ＝１／４）

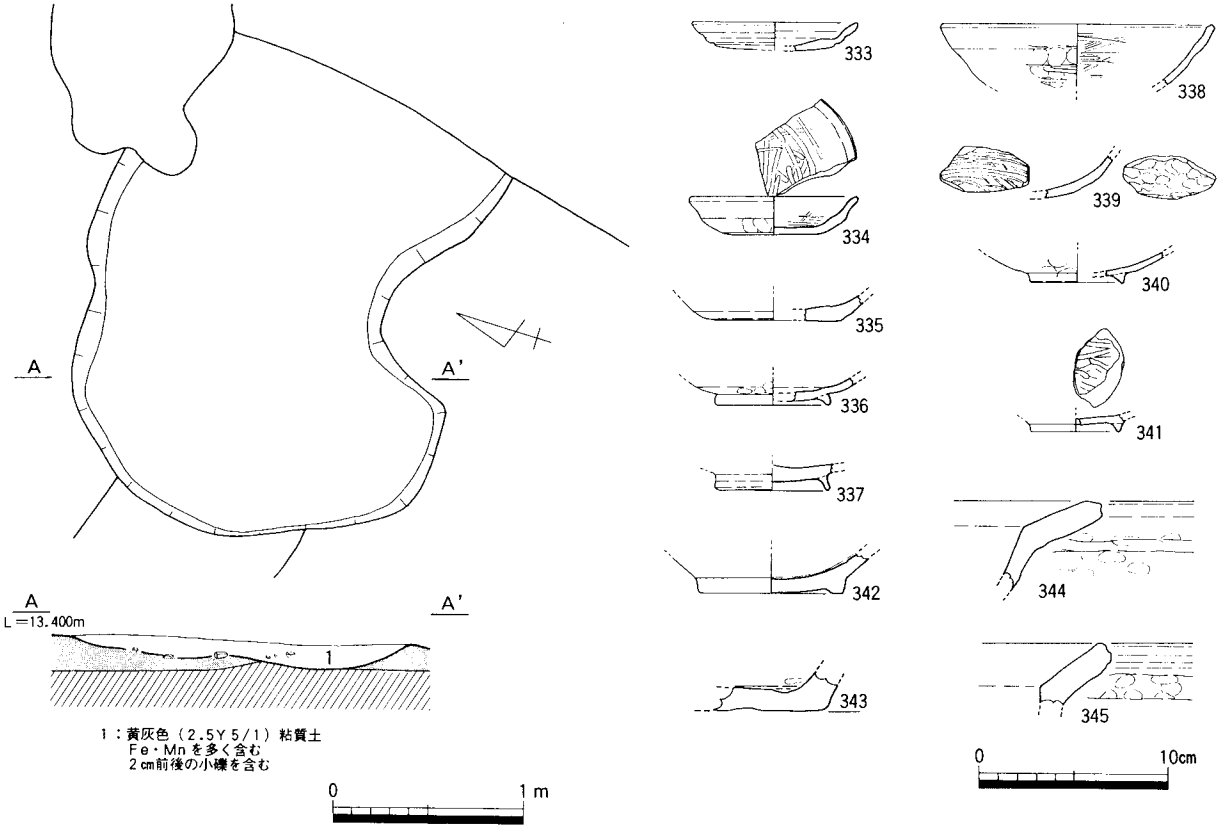
Ⅲ区C第2面ＳＸ03

Ⅲ区CグリットD11，第2面で検出した不明遺構である。Ⅲ区C第2面ＳD08と重複関係を有し，それに後出する。平面形は不整形を呈し，南北長1.6m，東西長2.6m以上を測る。断面形状は浅いⅢ形を呈し，埋土は炭化物を比較的多く含む黄灰色粘質土の単層である。

遺物は土師質土器小皿・坏・椀・鍋・甕，吉備系土師器椀，須恵器椀・鉢・甕，黒色土器（A類）椀，瓦器椀・皿，白磁碗が小袋で3袋弱出土している。

333は土師質土器小皿である。底部外面は回転ヘラ切り（L？）である。端部に煤が付着しており，灯明皿に用いられている。334は瓦器皿である。口径9.0cm，器高2.0cmを測る。口縁部内面には回転ヘラミガキ，見込みには平行線状ヘラミガキが施される。335は土師質土器坏である。336は土師質土器椀である。高台は断面三角形を呈し，外方にやや踏ん張る。337は吉備系土師椀である。高台は細長くシャープで，胎土は精良である。338～341は瓦器椀である。338は和泉型瓦器椀で，内外面にヘラミガキが施される。尾上編年Ⅲ－2期の所産と考えられる。339は内面見込みに平行線状ヘラミガキ，体部内面に回転ヘラミガキが施される。340・341には断面三角形の高台を有する。342は白磁碗である。高台は厚く，内面の削り出しはわずかである。見込み底体部境には沈線を持つ。外面体部下半には施釉されない。横田・森田分類白磁碗Ⅳ－1ａ類である。343は須恵器鉢である。底体部境は明瞭であるが，底部外縁のナデ調整の有無は確認できない。344・345は土師質土器甕である。口縁部は「く」字形にやや弱く屈曲し，内面体部境に明瞭な稜を有する。

出土遺物や周辺遺構との関係から，12世紀末～13世紀初頭を中心とした時期に位置付けられる。



第83図　Ⅲ区C第2面ＳＸ03平・断面図（S＝1／40），出土遺物（S＝1／4）

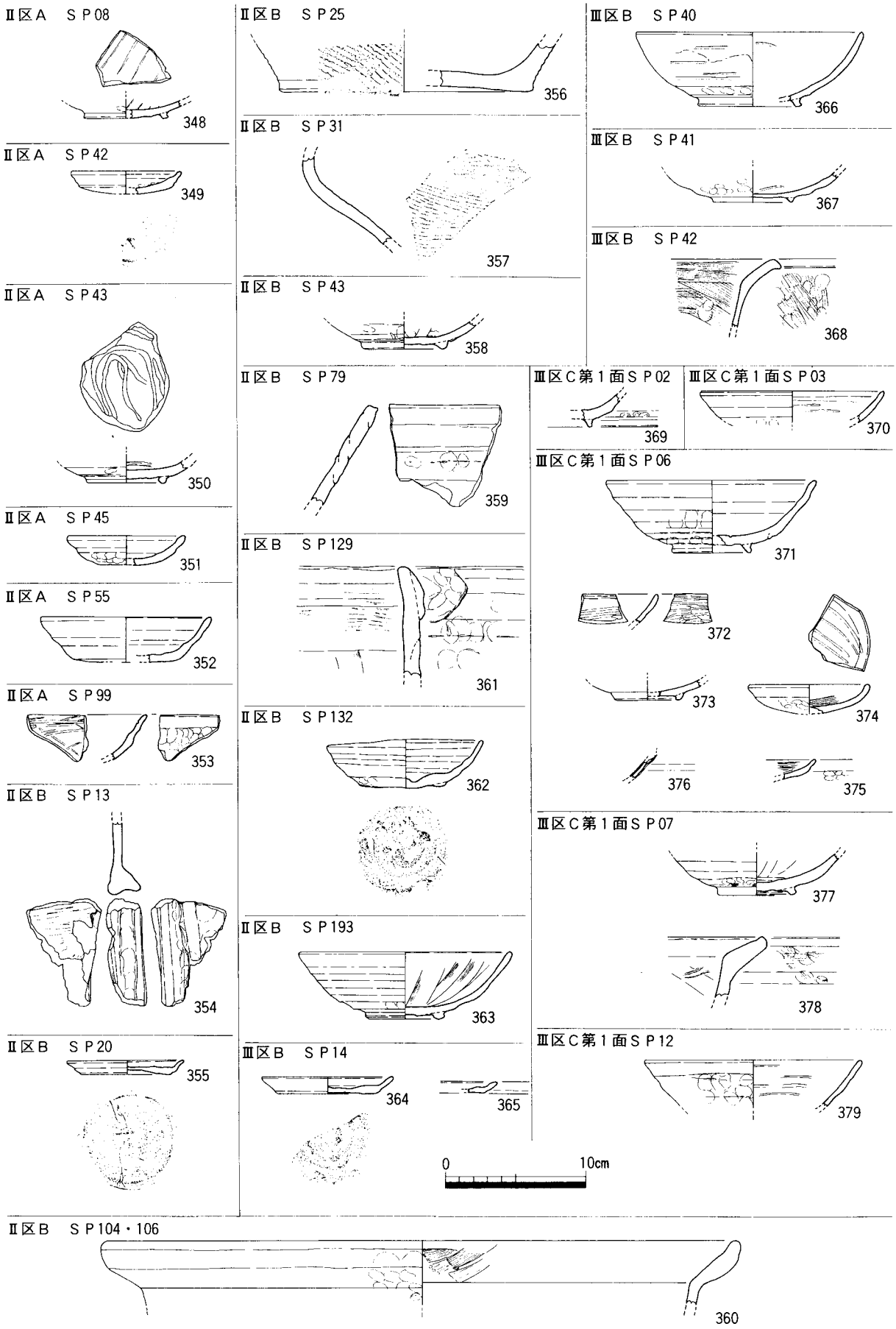
348はⅡ区ＡＳＰ08出土遺物である。瓦器椀底部である。見込みには平行線状のヘラミガキが施される。高台は平行四辺形の断面で，外方へやや踏ん張る。和泉型であれば，尾上編年Ⅲ－２期の所産であろう。349はⅡ区ＡＳＰ42出土遺物である。土師質土器小皿である。口径８cm前後を測り，口縁部は太く短く，底部は回転ヘラ切り（Ｒ）である。350はⅡ区ＡＳＰ43出土遺物である。須恵器椀である。高台断面は押し潰されたような丸味を持ち，径は5.6cmを測る。体部内面には３mm前後を測るやや太めの回転ヘラミガキが施される。西村型須恵器椀の可能性が高い。351はⅡ区ＡＳＰ45出土遺物である。土師質土器小皿である。口縁部外面は横ナデ調整，底部外面は顕著な指押さえを施し，瓦器皿と似た器形であるが，胎土中の角閃石，赤色粒の存在から瓦器皿を模倣した土師質土器小皿と考えた。352はⅡ区ＡＳＰ55出土遺物である。土師質土器坏である。口径12.4cm，器高3.2cmを測り，口縁部は直線的に開く。353はⅡ区ＡＳＰ99出土遺物である。和泉型瓦器椀である。内面には回転ヘラミガキが施され，体部外面の指押さえが顕著である。外面にヘラミガキを持たない点から，尾上編年Ⅲ－２～３期の所産と考えられる。354はⅡ区ＢＳＰ13出土遺物である。土師質竈である。内面には板ナデ調整が施される。鍔部前面には接合時の指押さえ，ナデ調整による窪みが生じる。355はⅡ区ＢＳＰ20出土遺物である。土師質土器小皿である。口径8.4cmを測り，口縁部は短く外反する。底部は回転ヘラ切り（Ｒ）で，上げ底を呈する。内外面ともに煤が付着し，内面のそれは火襷状を呈する。356はⅡ区ＢＳＰ25出土遺物である。十瓶山窯産須恵器甕である。体部外面は左上がりの格子目叩き後に底部外縁部，体部内面に横ナデ調整，底部外面に仕上げ段階の不定方向のナデ調整が認められる。357はⅡ区ＢＳＰ31出土遺物である。亀山産須恵器甕である。体部の平行叩き整形の前段階に頸部の叩きが施され，横ナデ調整が行われいる。体部内面には当て具痕がわずかに認められる。358はⅡ区ＢＳＰ43出土遺物である。須恵器椀である。高台は丸味を有し，厚手である。内外面ともに二次焼成を受けている。359はⅡ区ＢＳＰ79出土遺物である。十瓶山窯産須恵器鉢である。端部は四角くおさまる。内外面には板ナデ調整が施される。360はⅡ区ＢＳＰ104・106出土遺物である。土師質土器鍋である。口縁部は「く」字形に屈曲し，内湾気味に立ち上がる。361はⅡ区ＢＳＰ129出土遺物である。土師質竈とした。内面には煤が付着する。胎土中に多量の雲母を含む。362はⅡ区ＢＳＰ132出土遺物である。口径が11.6cmを測る小型の土師質土器坏である。底部は回転ヘラ切り（Ｌ）で，口縁部との境は明瞭に屈曲する。口縁端部に煤が付着している。363はⅡ区ＢＳＰ193出土遺物である。西村型須恵器椀である。内面は板ナデ調整，外面は指押さえ後，回転ナデ調整が施される。高台は丸味を有し，粗雑に貼付されている。口縁部外面には重ね焼きにより生じた煤が帯状に付着している。

364・365はⅢ区ＢＳＰ14出土遺物である。364は土師質土器小皿である。口径が9.6cmと松並・中所遺跡出土小皿のなかでは大型に属する。口縁部は直線的に開き，底部は回転ヘラ切り（Ｒ）である。内外面に顕著な二次焼成が認められる。365は土師質土器小皿である。口縁部は短く，強く外反する。366はⅢ区ＢＳＰ40出土遺物である。黒色土器（Ａ類）椀である。高台は比較的細く，体部内外面に回転ヘラミガキが施される。口縁部外面には炭素の吸着が波状に認められる。367はⅢ区ＢＳＰ41出土遺物である。瓦器椀である。高台は矮小化し，潰れた方形から三角形を呈する。体部外面には顕著な指押さえ，見込みには螺旋状ヘラミガキが施される。外面のミガキの有無は確認できない。368はⅢ区ＢＳＰ42出土遺物である。土師質土器鍋である。口縁部は緩やかな「く」字形に屈曲し，端部は下方に挽き出す。内面はヨコハケないしタテハケ，外面はタテハケが施され，口縁部のみ横ナデ調整を加え，端部を整形している。角閃石を比較的多く含む特徴的な胎土である。369はⅢ区Ｃ第１面ＳＰ02出土遺物である。

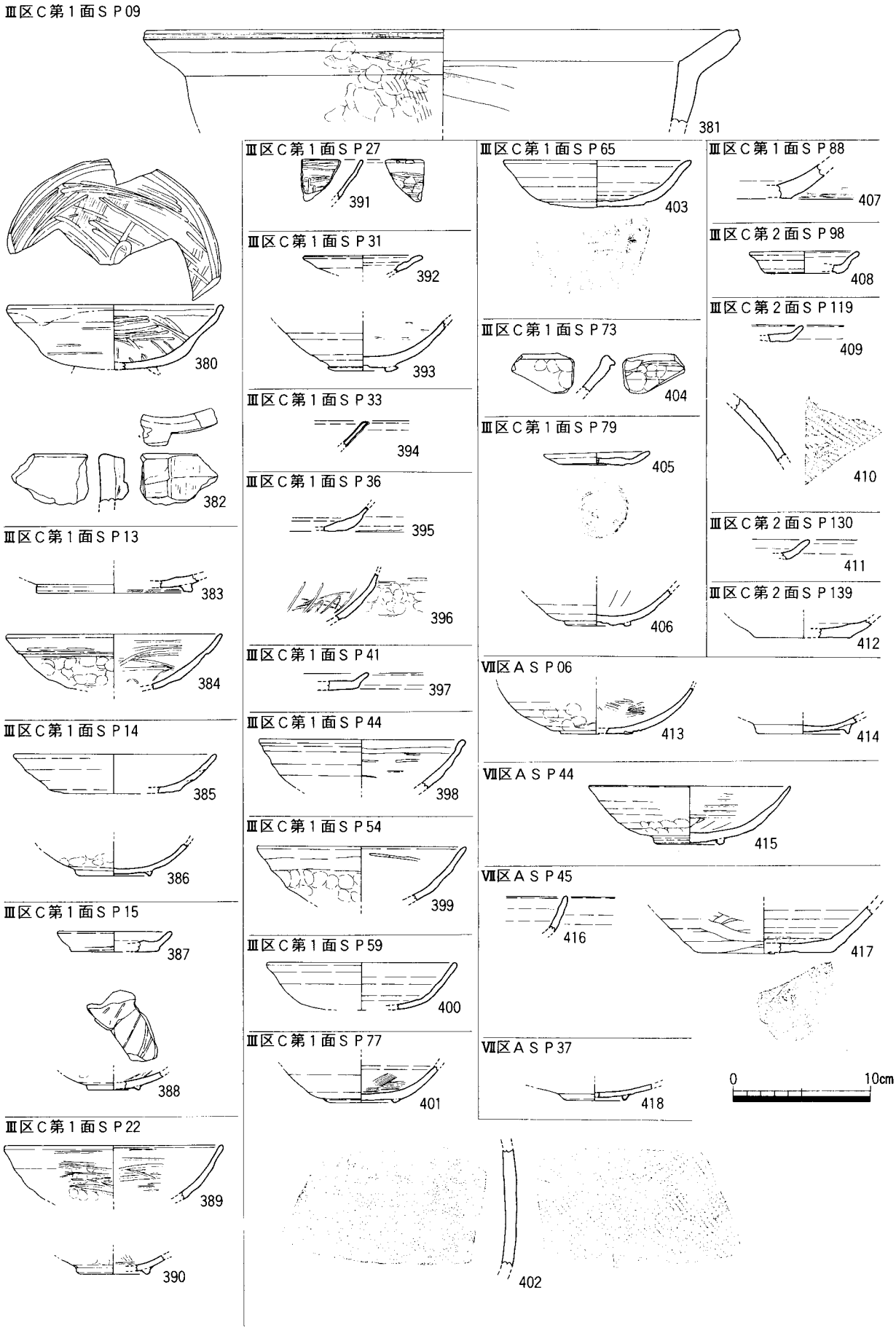
土師質土器椀である。底体部境に明瞭な屈曲点を有し，外面底部に高台貼付時の横ナデ調整にナデ残されて，管状のスタンプが確認できる。高台はややシャープな断面三角形を呈する。内外面に煤が付着する。370はⅢ区C第1面SP03出土遺物である。瓦器椀である。体部外面に指押さえは確認できず，口縁部とともに横ナデ調整が施される。371～376はⅢ区C第1面SP06出土遺物である。371は土師質土器椀である。口径15.1cm，器高5.2cm，高台径5.6cm（径高指数は29）を測り，口径に比して，高さが低い器形となる。口縁部は直線的に開き，底体部は不明瞭であるが，底部回転ヘラ切りの痕跡がかすかに認められる。372は和泉型瓦器椀である。口縁部内外面にヘラミガキが入念に施される。373は瓦器椀である。高台は矮小化した四角形を呈する。374は瓦器皿である。口径8.8cm，器高2cmを測る。口縁部外面は横ナデ調整，底部は指押さえ，内面見込みには平行線状ヘラミガキが施される。375は瓦器皿である。口縁部外面には横ナデ調整，底部には指押さえが施され，内面にヘラミガキがみられる。376は白磁碗である。口縁部は玉縁状を呈し，下部に沈線を有する。横田・森田分類白磁碗Ⅳ類である。377・378はⅢ区C第1面SP07出土遺物である。377は須恵器椀である。底体部は丸味を持って立ち上がり，断面四角形の高台が粗雑に貼付される。外面は二次焼成を受け，灰褐色に変色し，内面には煤が付着している。378は土師質土器甕である。口縁端部は丸味を有し，内外面ともに板ナデ調整が施される。379はⅢ区C第1面SP12出土遺物である。和泉型瓦器椀である。内外面にヘラミガキが施され，尾上編年Ⅲ—2期の所産であろう。380～382はⅢ区C第1面SP09出土遺物である。380は黒色土器（A類）椀である。底体部境にわずかな屈曲点があり，口縁部中位は明瞭に窪みながら，大きく開く。内面は板ナデ成形後，4分割のヘラミガキが施され，古い様相を示す。外面にも不明瞭ながらヘラミガキがみられる。高台は剥落し，その圧痕を留めるに過ぎない。高台を図のように復元した径高指数は31.4となり，ヘラミガキの内容と器形，法量に新古混在した状況が窺える。381は土師質土器甕である。口縁部は「く」字形に屈曲し，内面体部境に鋭い稜を持つ。口径は43cmと大きく，体部は長胴になる。382は滑石製石鍋である。口縁部はやや内湾し，端面から連続する把手は幅2.2cm，長さ3cmを測る。把手は断面長方形の瘤状を呈する。木戸分類Ⅱ類－a－1類に該当し，12世紀初頭に位置付けられている（木戸1993）。共伴遺物との年代観に約1世紀の齟齬が生じ，その耐久性に起因する使用期間が問題となる。ここでは周辺遺構の状況から，長期使用後の廃棄を想定したい。383・384はⅢ区C第1面SP13出土遺物である。383は須恵器坏Bである。高台は外方へ踏ん張り，内外面に凹面を有する。混入品である。384は和泉型瓦器椀である。内外面にヘラミガキが施され，尾上編年Ⅲ－2期の所産と考えられる。385・386はⅢ区C第1面SP14出土遺物である。385は土師質土器坏である。口径14.8cm，器高2.8cmを測り，口縁部は直線的に開く。386は瓦器椀である。高台は潰れた台形を呈し，径5.2cmを測る。見込みが比較的広く，高台も小さいが形状が整っており，尾上編年Ⅲ－1期まで上がる可能性が高い。387・388はⅢ区C第1面SP15出土遺物である。387は土師質土器小皿である。分厚い底部から明瞭に屈曲して，内湾気味に立ち上がる口縁部をもつ。388は瓦器椀である。見込みに平行線状ヘラミガキが施され，高台は矮小化の進んだ断面三角形を呈する。和泉型瓦器椀であれば，尾上編年Ⅲ－2期の所産である。389・390はⅢ区C第1面SP22出土遺物である。和泉型瓦器椀である。内外面にヘラミガキ，見込みに平行線状ヘラミガキが認められ，底部は四角形を呈する。尾上編年Ⅲ－1～2期の所産である。391はⅢ区C第1面SP27出土遺物である。和泉型瓦器椀である。内外面に入念なヘラミガキが施される。392・393はⅢ区C第1面SP31出土遺物である。392は土師質土器小皿である。口縁部は大きく開き，中位に回転ナデ調整による明瞭な稜を有する。393は黒色土器（A類）椀である。体部は直線的に開き，潰れた高台を

持つ。内面に回転ヘラミガキが施されるが，外面の有無は確認できない。394はⅢ区C第1面SP33出土遺物である。白磁碗である。口縁端部を強く屈曲させ，横田・森田分類白磁碗V類と思われる。395・396はⅢ区C第1面SP36出土遺物である。395は土師質土器坏である。底体部境にかすかな屈曲点がみられる。396は瓦器椀である。見込みにはジグザグ状ヘラミガキ，外面にもヘラミガキが施される。ヘラミガキは松並・中所遺跡出土の瓦器椀に比して細く，見込みのヘラミガキがジグザグ状を呈しており，楠葉型瓦器椀になる可能性がある（橋本1980）。397はⅢ区C第1面SP41出土遺物である。土師質土器小皿である。口縁部は短く外反し，底体部境に明瞭な屈曲点を見い出せる。底部外面は回転ヘラ切り（R）である。398はⅢ区C第1面SP44出土遺物である。黒色土器（A類）椀である。口縁部はやや内湾気味に立ち上がり，口縁部下内面に凹線状の窪みを持つ。外面のヘラミガキの有無は確認できないが，内面には回転ヘラミガキが施される。399はⅢ区C第1面SP54出土遺物である。和泉型瓦器椀である。外面にはヘラミガキは確認できず，尾上編年Ⅲ－3期の所産である。400はⅢ区C第1面SP59出土遺物である。土師質土器坏である。口径13.8cm，器高3.9cmを測り，口縁部は直線的に外反する。底部外面は回転ヘラ切り（R？）である。灰白色の色調を呈し，含有鉱物の少ない精良な胎土である。401・402はⅢ区C第1面SP77出土遺物である。401は土師質土器椀とした。高台は矮小化し，潰れた四角形状の断面を呈する。内面には板ナデ調整が施される。402は須恵器甕である。外面は正格子叩き，内面は当て具痕，ナデ，ヨコナデ調整がそれぞれ施される。403はⅢ区C第1面SP65出土遺物である。土師質土器坏である。口径13.6cm，器高3.4cmを測り，口縁部は直線的に外反するが，端部手前で強く屈曲する。底部外面は回転ヘラ切り（L？）後，板状圧痕が施される。404はⅢ区C第1面SP73出土遺物である。須恵器鉢片口部である。端部は外方へ挽き出し，内側は丸く収める。口縁部内外面はヨコナデ調整後，片口部を成形した際に生じた指頭圧痕がみられる。405・406はⅢ区C第1面SP79出土遺物である。405は土師質土器小皿である。口径7.8cm，器高0.8を測る。口縁部は強く直線的に開き，底体部境には稜を有する。底部外面は回転ヘラ切り（R）後，板状圧痕が施される。406は西村型須恵器椀である。高台は径4.8cmと矮小で，粗雑に貼付されている。内面には板ナデ調整が施されるが，ヘラミガキの有無は確認できない。407はⅢ区C第1面SP88出土遺物である。須恵器鉢である。底部外縁には強い板ナデ調整が施されるが，ナデの有無は確認できない。408はⅢ区C第2面SP98出土遺物である。土師質土器小皿である。口縁部は強く外反し，長く延びる。底部外面は回転ヘラ切り（R？）である。409・419はⅢ区C第2面SP119出土遺物である。409は土師質土器小皿である。410は須恵器甕である。外面は長格子叩きが施される。411はⅢ区C第2面SP130出土遺物である。土師質土器小皿である。内外面に顕著な二次焼成を受ける。412はⅢ区C第2面SP139出土遺物である。土師質土器坏である。灰色の色調を呈し，石英・長石を比較的多く含むが，胎土の素地は非常に精良である。

413・414はⅦ区ASP06出土遺物である。413は黒色土器（A類）椀である。高台は剥落しているが，貼付位置にはカキ目状の擦痕が施される。体部内面にはヘラミガキ，外面には指押さえ後，横ナデ調整が加えられる。414は黒色土器（A類）椀である。高台は断面三角形を呈し，幅広に貼付されている。415はⅦ区ASP44出土遺物である。西村型須恵器椀である。口径14.6cm，器高4.2cm，高台径5.0cmを測る。口縁部はほぼ直線的に立ち上がる。高台は潰れた方形の断面形状を呈する。体部内面は板ナデ調整後，回転ヘラミガキ，外面は指押さえ後横ナデ調整が施される。416・417はⅦ区ASP45出土遺物である。416は土師質土器坏である。417は東播系捏鉢底部片である。底部は回転糸切り後，周縁部のみナデ調整が施される。418はⅦ区ASP37出土遺物である。瓦器椀である。高台は断面三角形を呈する。



第85図　柱穴出土遺物2（S＝1／4）



第86図　柱穴出土遺物3（S＝1／4）

包含層

遺構面直上包含層

Ⅱ区，Ⅲ区Ｃで確認した遺構面直上中世包含層である。削平の度合いに呼応して，堆積状況は一様でなく，確認できない調査区にも元来存在していたと考えられる。グリットでの取り上げは実施していないため，遺構との対応は不明である。また，遺構検出面の把握が困難であったため，遺構埋土の遺物が混入している可能性が残る。

出土遺物は土師質土器小皿・坏・椀・甕，須恵器椀・鉢・甕，黒色土器椀，瓦器椀・皿，白磁碗，青磁碗・合子がある。

419～426は土師質土器小皿である。419～423は外反して開く口縁部を有し，底部は確認できた個体はすべて回転ヘラ切り（R）である。口径は6.8～9.0cmとばらつきがある。421は土師質土器小皿である。口縁部は中位から強く外反させ，「く」字形を呈する。423は底体部に回転ヘラ切りに連続する沈線が認められる。424～426は内湾気味に開く口縁部で，底部は回転ヘラ切り（R）である。口径は8.3cm前後に収まる。424は内外面に二次焼成が顕著にみられる。427～431は土師質土器坏である。法量にまとまりはないが，底部が確認できた個体はすべて回転ヘラ切りである。口縁部は直線的に立ち上がるもの（427），内湾気味のもの（428），大きく開くもの（429）とバラエティーがある。429は器厚が薄く，椀になる可能性も残る。432～436は土師質土器椀である。432は底体部境が丸味を有し，細長い高台が付く。高台径は4.7cmを測る。433は底体部境に不明瞭ながら屈曲点を有し，この付近が最も器壁が厚い。高台断面は潰れた三角形を呈する。434・435は底体部境が明瞭に屈曲し，この屈曲部分における器壁厚が最も厚い。底径は434が10cm，435が8.5cmを測る。「坏Ｄ」＋「高台」＝椀という製作技法が明瞭に読み取れるが，427～431の土師質土器坏と比較すると，435は合致するが，434の底径とは差異がみられ，少ない個体資料であるが単純に坏として製作した土器を椀製作に用いたとは言えないようである（片桐1992，佐藤2000）。なお，底部は434に回転ヘラ切り調整が確認できる。436は丸味を持つ底体部で，外面は指押さえ後横ナデ調整が施される。高台端部は欠損しているが，母体となる板状の粘土盤を貼付し，その端部を折り曲げることにより高台を形成している。437は黒色土器（Ａ類）椀である。高台は比較的シャープで長い。外面にはヘラミガキは確認できない。438は須恵器椀である。高台断面は三角形を呈する。439は吉備系土師器椀である。高台は細長く，胎土は精良である。山本編年のⅢ－１期の所産であろう（山本1993，吉備系土師器椀に関してはこれに依拠する）。440～442は瓦器椀である。440は和泉型瓦器椀で，内外面にヘラミガキが認められる。尾上編年Ⅲ―２期の所産である。441・442は矮小化した断面三角形の高台が付く。443瓦器皿である。444～453は白磁碗である。444～447は口縁端部が玉縁状を呈し，横田・森田分類Ⅳ類に該当する。448は口縁部を外反させ，外面口縁部下に２条の凹線状沈線を施す。横田・森田分類Ⅴ－２ａ類であろう。449は見込みに段を有する。450は見込みの釉を輪状にカキ取っており，横田・森田分類Ⅷ類になる。451・452は幅広で，削り出しの比較的浅い高台を有し，底部器肉は厚い。見込みと体部境には沈線状の段を持つ。横田・森田分類Ⅳ－１類に該当する。453は幅広で，削り出しの浅い高台を持ち，見込みに沈線状の段を有する。外面の施釉は高台の手前まで及んでいる。454は青磁碗である。口縁部は端部のみ外反させる。越州窯系の青磁碗であろう。455は青磁合子蓋である。底径は5.6cm前後を測り，外面には型押しの蓮弁文が施される。内面天井部には釉が確認できる。

456～460は須恵器鉢である。456は口縁端部を四角く，457は四角く収め，下端を垂下させる。458は

端部付近で外方へ緩やかに屈曲し，端部を上方へ摘み出し，口縁部に斜行する端面を有する。456・458は十瓶山窯産と思われる。459は底部外縁に強い横ナデ調整が加わり，十瓶山窯産と考えられる。460は外面に板ナデ調整が施され，底部外縁のナデ調整は認められない。胎土中に片岩系の石粒を含む等，十瓶山窯産須恵器とは異なる。亀山産であろうか。461・462は十瓶山窯産須恵器甕口縁部である。461は口縁部が外反し，端部を上方に軽く摘み上げる。口縁部外面は右上がりの長格子叩き後，横ナデ調整が施されている。462は内外面とも横ナデ調整が施され，わずかに端面を作り出す。463は須恵器壷ないし甕底部である。高台径10cmを測り，高台は外方へわずかに踏ん張る。464・465は土師質土器甕である。口縁部は内湾気味に立ち上がり，内面は板ナデ，外面は指押さえ後，ナデ調整が施される。466は土師質竈である。内面は指押さえ後，板ナデ調整が施される。

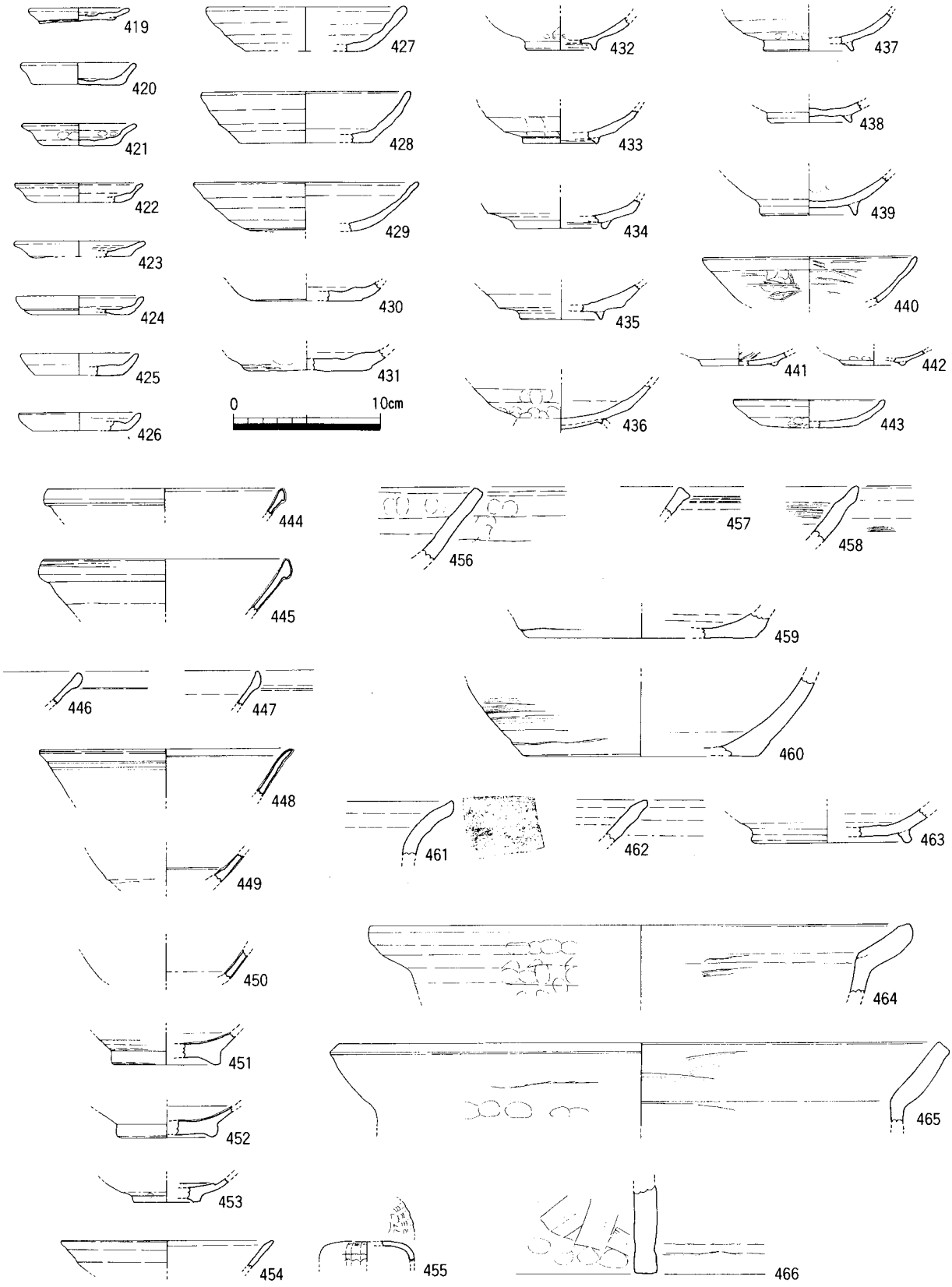
出土遺物の年代観にばらつきがあるが，包含層形成年代としては，13世紀中葉前後と考えられる。

Ⅲ区B・C第1面整地土

Ⅲ区B・Cにおいて第1遺構検出面のベース土として確認した。第40図の土層注記番号3・4に該当する。遺物は土師質土器小皿，須恵器椀・鉢・甕，白磁碗・皿，青磁皿が小袋で3袋程度出土している。

467～472は土師質土器小皿である。467～469は外反する口縁部を有し，底部は回転ヘラ切り（R）である。口径は8.4～9.0cmを測る。470は内湾気味の口縁部で，底部は回転ヘラ切り（R）である。471・472は直線的に立ち上がる口縁部を有し，底部は回転ヘラ切り（R）である。473は端部を欠くが，外反する口縁部を有する。底部は回転ヘラ切り（L）である。474・475は土師質土器椀である。474の高台は矮小化し，断面多角形を呈する。475は器壁がやや厚く，高台は四角形を呈する。476・477は黒色土器（A類）椀である。外面のヘラミガキは確認できず，内面には板ナデ調整後ヘラミガキが施される。高台形状は著しく異なり，476は円盤状粘土を貼付し，その端部を整形したもので，477は外方へわずかに踏ん張る。478～480は須恵器椀である。478は平坦面の広い見込みを有し，断面三角形の矮小化した高台が付く。内面は板ナデ調整後ヘラミガキ，外面は指押さえ後横ナデ調整が施される。瓦器椀の可能性も残る。479は断面三角形の比較的大きい高台を有し，器壁も分厚い。灰釉陶器椀ないし鉢と考えられる。480は東播系須恵器椀と考えられ，体部には入念な回転ナデ調整が施され，，底部には回転糸切り痕が確認できる。山仲分類A1類に該当する。481～484は和泉型瓦器椀である。481は口径17cm，器高4.8cmを測り，断面四角形の高台が付く。外面は顕著な指押さえ後，回転ヘラミガキ，内面は連結輪状文ヘラミガキが施される。尾上編年Ⅲ－1～2期の所産と考えられる。482の外面にはヘラミガキは施されず，尾上編年Ⅲ－3期の所産である。483は481に似るが，高台の断面形状は三角形を呈する。484は内外面にヘラミガキが確認できる。485・486は瓦器皿である。485の見込みには平行線状ヘラミガキ，内面には回転ヘラミガキが施される。487～490は白磁碗である。487は玉縁状の口縁部，488は幅広で，削りの浅い高台を有し，見込みに指押さえによる窪みと体部境に深い段を持ち，横田・森田分類Ⅳ類に該当する。489・490は端部付近で外反する口縁部で，内面口縁部下に1条の沈線を有する。489は外面に2条の凹線状の沈線を持つ。横田・森田分類白磁碗V類と思われる。491は白磁皿である。口縁部は外反させ，見込み底体部境に沈線を持つ。横田・森田分類白磁皿Ⅳ類に該当する。492は青磁皿である。龍泉窯系青磁皿Ⅰ類と考えられる。

493・494は十瓶山窯産須恵器鉢である。493は口縁部は端部手前で屈曲し，内湾気味に立ち上がり，端部は上端面と側端面を有する。体部外面は左上がりの長格子叩き後，横ナデ調整，内面は横ナデ調整

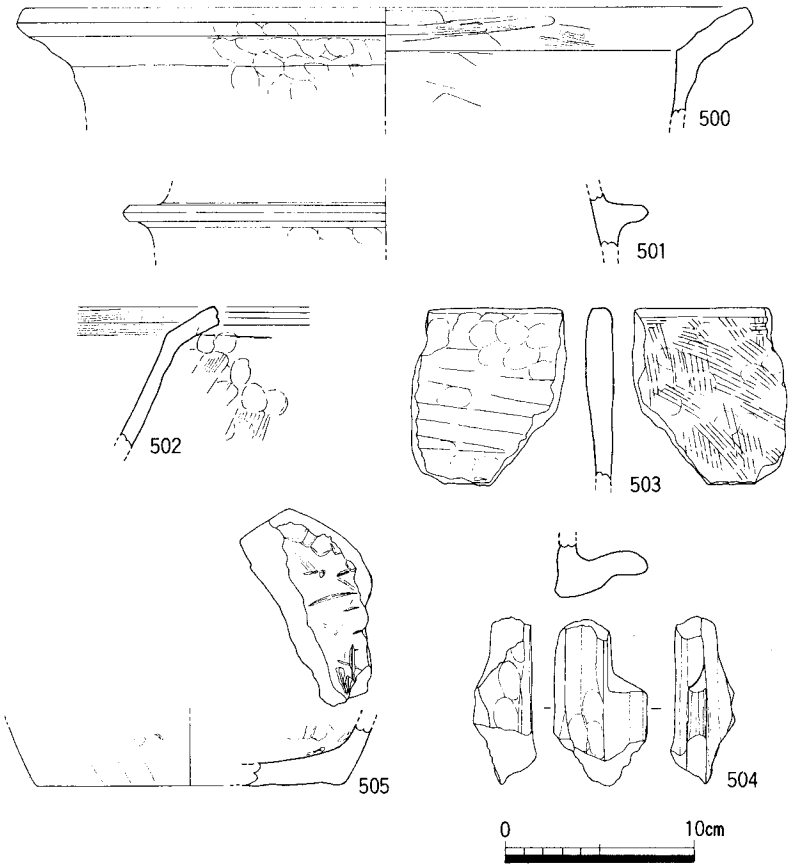


第87図　遺構面直上包含層出土遺物（S＝1／4）

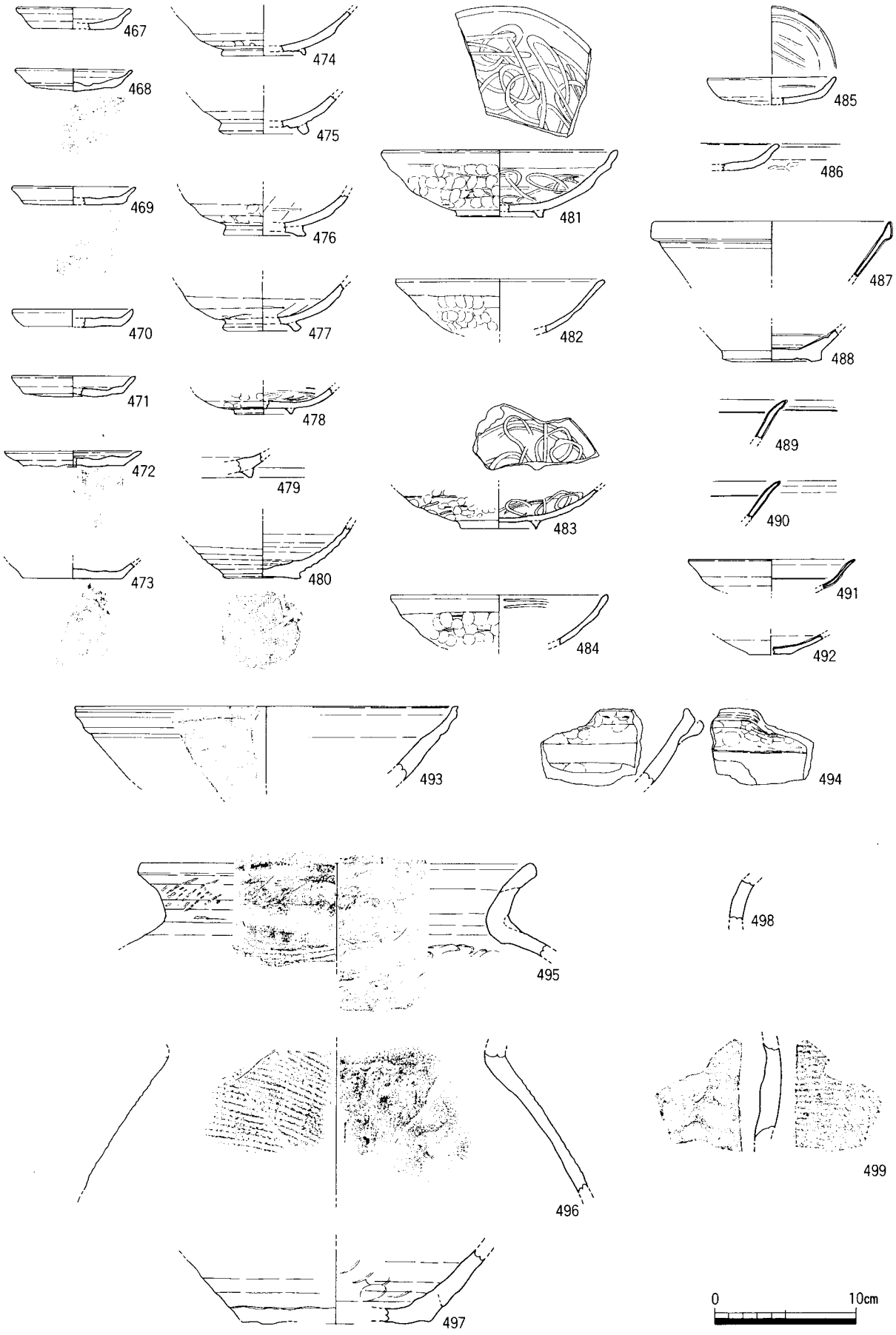
が加えられる。494は直線的に開く口縁部で，端部内側を上方へ摘み出す。片口部も確認できる。495～497は十瓶山窯産須恵器甕である。495は口縁部から頸部片で，「く」字形に屈曲する頸部中程で，再度開く口縁部を有し，端部は不明瞭ながら面を持つ。口縁部外面は右上がりの格子叩き後横ナデ調整，内面は横ナデ調整，体部外面は横方向の格子叩きが施され，体部内面は当て具痕をナデ消している。496は495と同一個体と考えられ体部に左上がりから横方向の長格子叩きが施され，内面は当て具痕をナデ消し，横ナデ調整が加えられる。497は甕の底部で底部外縁に強い横ナデ調整が施される。498は須恵器頸部付近と考えられる。自然釉が外面には明瞭に，内面にはうっすらと降灰する。調整は内外面とも横ナデ調整である。499は須恵器甕体部片である。外面は長格子叩きが施され，内面は当て具痕をナデ消し，横ナデ調整が加えられる。500は土師質土器甕である。口縁部は「く」字形に外反し，端部は四角く収める。外面は顕著な指押さえ，内面は指押さえ後ナデが施され，さらに板ナデ調整が加わる。501は土師質土器羽釜である。鍔部は太く，短い。502は土師質土器鍋である。ボール状の体部から「く」字形に屈曲して直線的に延びる口縁部が付く。端部には口縁部に斜行する端面を有し，沈線が１条施される。体部内面は板ナデ調整，外面は指押さえ後タテハケが施される。

503・504は土師質竈である。505は石鍋底部である。底径16.4cmを測り，内外面に煤痕が付着している。内外面と底面には顕著なノミ状工具痕と擦痕が施される。

出土遺物には12世紀末～13世紀前葉の時間幅があるが，層序関係や下層の遺構との関係から，12世紀末～13世紀初頭前後の形成年代を想定したい。



第89図　Ⅲ区Ｂ・Ｃ第１面整地土出土遺物２（Ｓ＝１／４）

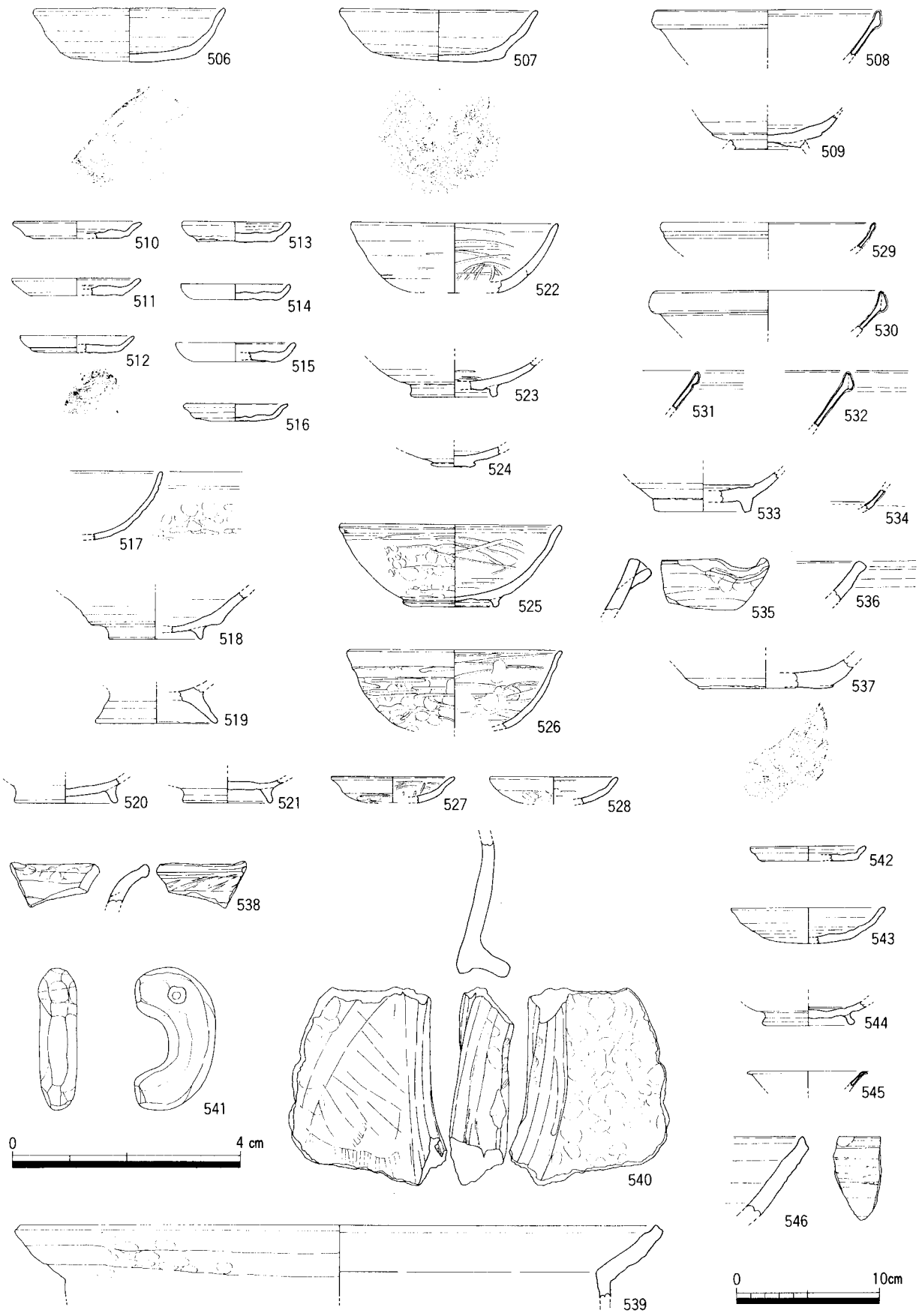


第88図　Ⅲ区Ｃ第１面整地土出土遺物１（Ｓ＝１／４）

その他

506はⅡ区A，507～509はⅡ区C，510～541はⅢ区C第1面，542～546はⅢ区C第2面の遺構面精査中出土遺物である。当該箇所における遺構の遺物出土量から，Ⅲ区C第1面精査中遺物の大多数はⅢ区CSD01ないしⅢ区C第1面整地土出土と思われる。

506・507は土師質土器坏である。口縁部は直線的に立ち上がり，底部は回転ヘラ切り後，板状圧痕が施される。507は底部外縁に強い横ナデ調整が加えられ，底体部境が明瞭である。508は白磁碗である。口縁部は玉縁状を呈し，横田・森田分類Ⅳ類である。509は土師質土器椀である。底体部境に明瞭な屈曲点が残り，坏部のみを見れば，坏Dと大差はない。高台はドーナツ状の粘土を貼付し，その端部を折り曲げている。510～516は土師質土器小皿である。510は口縁部が外反し，底部は回転ヘラ切り（R）である。口径は9.2cmと大きい。511・512は直線的に延びる口縁部を有し，底部は回転ヘラ切り（R）である。513～515は内湾気味に立ち上がる口縁部で，底部は回転ヘラ切り（R）である。516は口縁部を端部手前で大きく屈曲させる特徴的な器形を呈し，当遺跡では唯一の出土である。口径は7.4cmを測り，底部は回転ヘラ切り（R）後，板状圧痕が施される。517～521は土師質土器椀である。517は外面に顕著な指押さえが施される。518は底体部境に明瞭な屈曲点が認められる。底径は9.4cmを測り，断面三角形のやや細長い高台が付く。519は長脚の高台を有し，高台高は2cm前後と極めて長い。高台径は8.6cmを測る。520・521は高台が細長く，胎土も極め細かい点から，吉備系土師器椀と考えられる。522は黒色土器（A類）椀である。口縁部は内湾気味に立ち上がり，内外面にはヘラミガキが確認できる。外面のヘラミガキは横ナデ調整の凸部を消すように施される。523・524は須恵器椀である。523は四角形の高台を有し，内面にのみヘラミガキが確認できる。524は径2.2cmの円盤状高台を有する須恵器椀である。8世紀代の須恵器蓋になる可能性も高い確率で残る。525・526は和泉型瓦器椀である。525・526は器高が高く，内湾度合いが強い深椀器形を呈する。内外面にヘラミガキが施され，高台は潰れた四角形を呈する。尾上編年Ⅱ－3期まで下る時期の所産であり，松並・中所遺跡出土遺物のなかでは，古い様相を示すものである。527・528は瓦器皿である。527は内外面，528は内面にヘラミガキが施される。529～533は白磁碗である。529は小さな玉縁状の口縁部を有し，横田・森田分類のⅡないしⅢ類に該当する。530～532は玉縁状の口縁部を有し，横田・森田分類のⅣ類である。533は比較的細く，低い高台を有し，外面の施釉は認められず，見込みの釉を輪状にカキ取っている。横田・森田分類Ⅷ類に該当する。534は青磁碗である。見込みと体部境に段を有し，外面下半は施釉されない。535～537は須恵器鉢である。535は片口部にあたり，口縁部は直線的に延び，端部は四角く収める。537は東播系捏鉢底部で，底部に回転糸切り痕が認められる。538は十瓶山窯産須恵器甕である。口縁部は緩やかに外反し，端部は丸味を有する。外面は右上がりの叩き後横ナデ調整，内面は指押さえ後横ナデ調整がそれぞれ施される。539は土師質土器甕である。口縁部は内湾気味に立ち上がり，端面は四角く収める。540は土師質竈である。通常鍔部を貼付するが，この個体は体部端を鍔部相当部に対応させ，その内側に粘土帯を貼付している。内面は顕著な指押さえ，外面は丁寧なナデ調整が施される。541は瑪瑙製勾玉である。全長2.5cm，最大幅1.3cm，重量3.05gを測る。片側穿孔である。542は土師質土器小皿である。短く，直線的に立ち上がる口縁部を有し，底部は回転ヘラ切り(R)である。543は土師質土器坏である。口縁部は内湾気味に立ち上がり，底部は回転ヘラ切り(R？)である。544は須恵器椀である。高台は細長く，外方へわずかに踏ん張る。545は白磁皿である。口縁端部は鋭く外反する。横田・森田分類Ⅸ－1類と考えられる。546は十瓶山窯産須恵器鉢である。口縁部は直線的に開き，上方へわずかに摘み上げ，端面を有する。

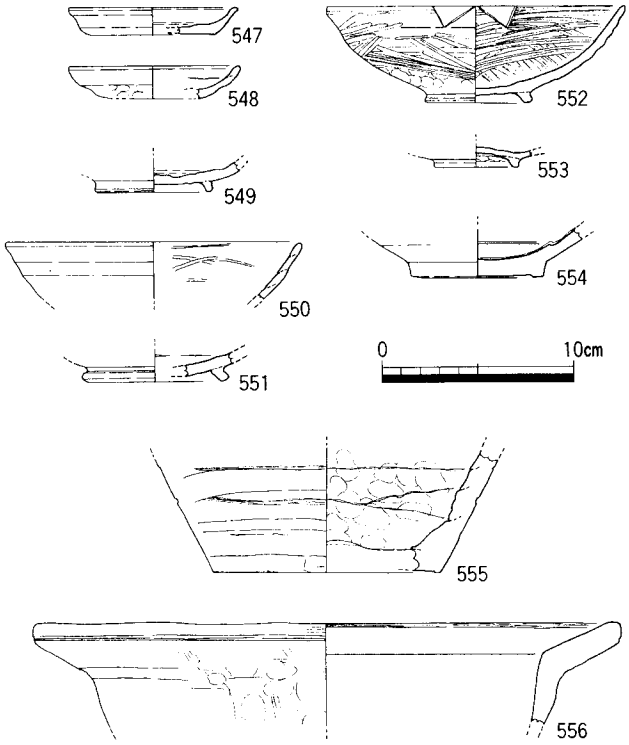


第90図　精査中出土遺物（S＝1／4，1／1）

側溝出土遺物

547～554はⅢ区C，555・556はⅢ区Bの側溝掘削土から出土している。Ⅲ区B・Cの東端部にはSD01が位置しており，Ⅲ区B・CSD01に属する可能性が高い。

547は土師質土器小皿である。口縁部はやや外反し，底部は回転ヘラ切り（R？）である。548は瓦器皿である。549は土師質土器椀である。高台断面は潰れた方形を呈する。550・551は黒色土器（A類）椀である。552・553は和泉型瓦器椀である。552は内外面に分割ヘラミガキが施され，高台形状も安定している。尾上編年Ⅰ期まで遡るものであり，松並・中所遺跡出土中世前半遺物のなかで最も古いものである。553は方形の高台を有し，底部を下から押し出し，見込みが盛り上がっている。554は白磁碗である。高台は幅広で，浅く削り出し，見込みに深い段を有する。横田・森田分類Ⅳ類である。



第91図　側溝出土遺物（S＝1／4）

555は十瓶山窯産須恵器壺底部である。外面は板ナデ調整，内面は指押さえ後，横ナデ調整が施され，底部外縁のみ強い回転ナデ調整が加えられる。底部には下駄印と思われる印刻が確認できる。556は土師質土器甕である。長胴の体部から「く」字形に屈曲する口縁部を有する。

3．近　　世

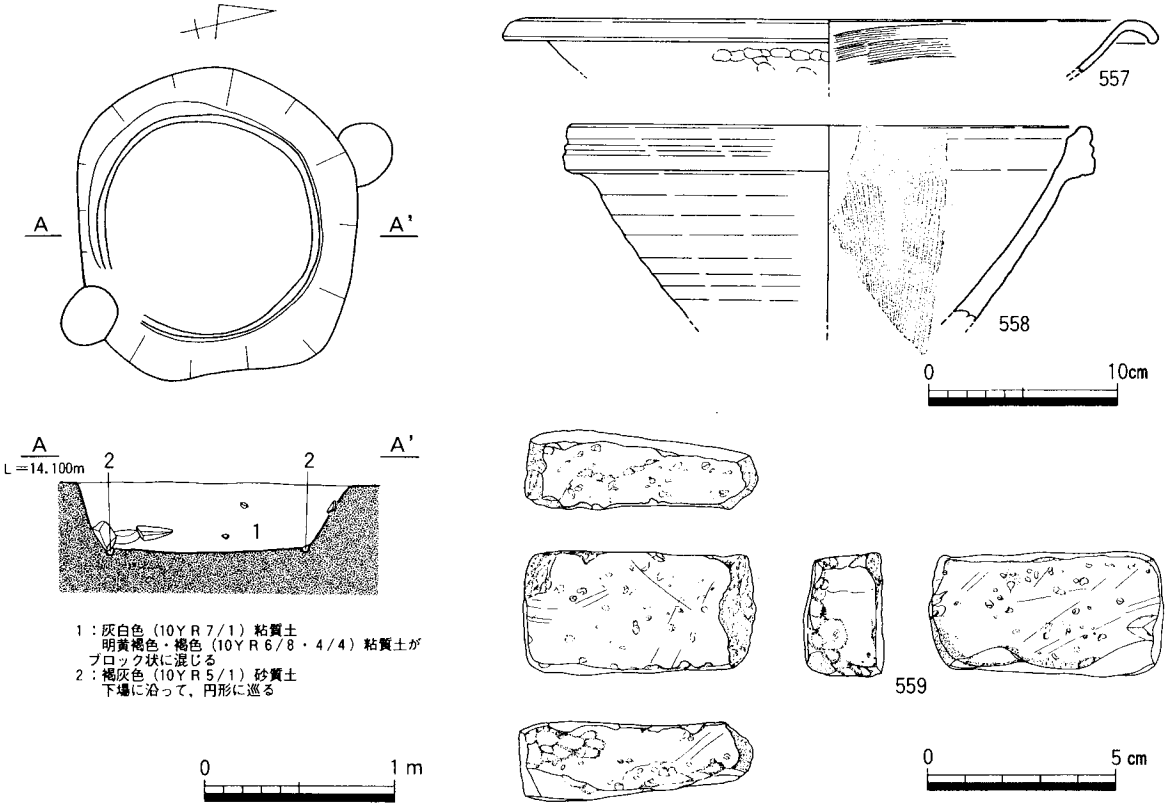
当該期の遺構はⅡ区Ｂを中心に確認している。その遺構密度は散漫で，大規模な集落の存在を首肯できるものではない。また，Ⅳ～Ⅴ区にかけて検出した溝群は，聞き取り調査では，ごく最近まで機能しており，出土遺物の上限である18世紀中葉から現代までは確実に機能していたと考えられる。同じく聞き取り調査では，この溝群の東側は「大八車が通れる程度の道で，栗林トンネルの上を走る峠道とつながっていた」という話やⅢ・Ⅳ区間の坪境付近で屈曲し，Ⅰ～Ⅲ区部分では現道の下がこれから連続する道であったという話を得ており，旧地割と関係の深い溝状遺構であったと考えられる。

土坑

Ⅱ区ＢＳＫ02

Ⅱ区ＢグリットＣ16で検出した土坑である。径1.6m前後の円形で，逆台形の断面形状を呈する。埋土は灰白色粘質土の単一層で，明黄褐色粘質土や褐灰色粘質土ブロックが多く含み，人為的な埋戻しが想定できる。底面は平らで，掘方の下場に沿って，幅２cm前後，深さ３cm以下の溝が円形に巡る。溝内の埋土は褐灰色砂質土で，木材の腐朽痕と考えられる。湧水層まで達していないため，井戸を想定することは困難である。短期間に埋め戻された単一層埋土や腐朽痕から，桶材を用いた埋葬施設の可能性が高い。

遺物は土師質土器小皿・坏・焙烙・足釜，備前擂鉢が小袋で２袋出土している。



第92図　Ⅱ区ＢＳＫ02平・断面図（Ｓ＝１／40），出土遺物（Ｓ＝１／４，１／２）

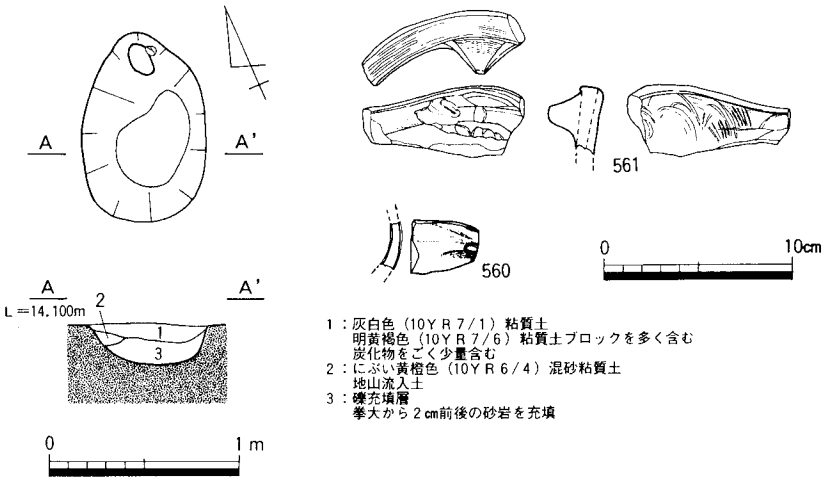
557は土師質土器焙烙である。口縁部は滑らかに屈曲し，垂下する。端部はやや肉厚になる。体部外面は指押さえ，内面は板ナデ調整が施される。森下分類の焙烙１型式に該当する（森下友1998)。558は備前擂鉢である。口縁端部は重厚で，顎部の張り出しが顕著である。外面は回転ナデ調整が施される。摺目の間隔はわずかにみられ，摺目端はナデ消されない。乗岡編年近世２期後半の所産であろう（乗岡1999，以下備前擂鉢の分類はこれに依拠する)。559は砥石である。

出土遺物より，18世紀前半を中心とした時期に位置付けられ，558は長期使用後の廃棄と考えたい。

Ⅱ区ＢＳＫ09

Ⅱ区ＢグリットＣ16で検出した土坑である。平面形は卵形を呈し，長軸長1.0m，短軸長0.7mを測る。断面形状は浅いＵ字形を呈し，埋土は下層に拳大前後の小礫充填層，中層に上方から流れ込むにぶい黄橙色混砂粘質土，上層に灰白色粘質土が堆積している。遺構の性格は不明であるが，下層の礫充填層形成後，上層埋没まで一定期間の時間幅が想定でき，こうした在り方が遺構の性格を反映していると思われる。遺物は土師質土器小皿・土鍋・焙烙，須恵器甕，瓦器椀，陶胎染付椀，平瓦，瓦質土器が小袋で２袋出土している。560は肥前系陶胎染付椀である。561は瓦質浅鉢である。口縁部は直線的に開き，端部は内側にやや挽き出し，外側は丸味を帯びる。口縁部には未穿孔の内耳が付く。

出土遺物より，18世紀後葉を中心とした時期に位置付けられる可能性が高いが，掲載遺物からその年代観を導き出すのは困難である。



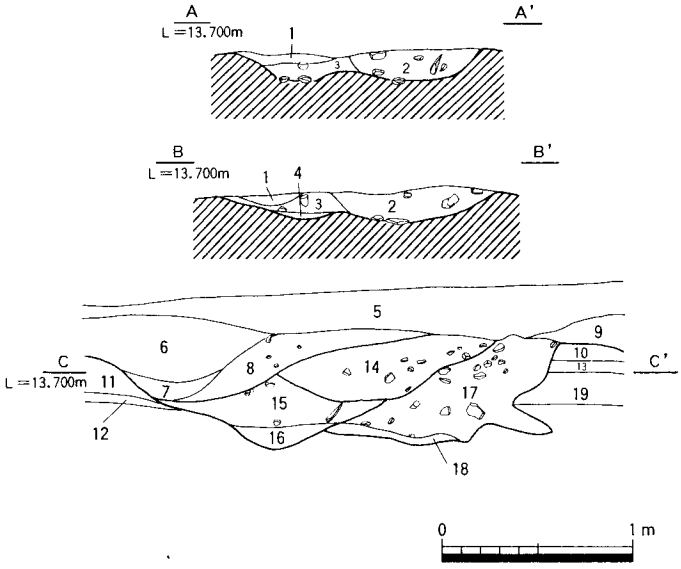
第93図　Ⅱ区ＢＳＫ09平・断面図（Ｓ＝１／40)，出土遺物（Ｓ＝１／４）

溝状遺構

Ⅳ区ＡＳＤ01・02，Ⅳ区ＢＳＤ01～03，Ⅳ区Ｃ・ＤＳＤ01，Ⅴ区ＳＤ01

Ⅳ区～Ⅴ区にかけて検出した溝状遺構である。Ⅲ区ではその延長は確認できず，Ⅲ・Ⅳ区間でクランク状に屈曲し，Ⅲ区以南では現道の下を走行していると想定できる。その埋没状況は，Ⅳ区Ａ・Ｄで確認している。Ⅳ区Ａでは，少なくとも３条の溝が重複関係を有する。第94図によると，土層番号１；ＳＤ01，２；ＳＤ02，３・４；ＳＤ03という想定が可能であり，ＳＤ03→02→01という埋没・掘削過程が考えられる。前述したごく最近まであったという溝埋土がＳＤ01であり，ビー玉や肥料袋等を確認している。各層位別取り上げを実施していないが，出土遺物はすべてⅣ区ＡにおけるＳＤ02・03からの出土である。一方，Ⅳ区Ｄは第94図によると，土層番号15・16；ＳＤ01，17；ＳＤ02となり，18はＳＤ02下層ないしＳＤ03と想定することができる。埋没・掘削過程はⅣ区Ａと同様であり，出土遺物もおおむね17・18層出土遺物である。

なお，付図の遺構配置図ではＳＤ01～03を一括して表現している。



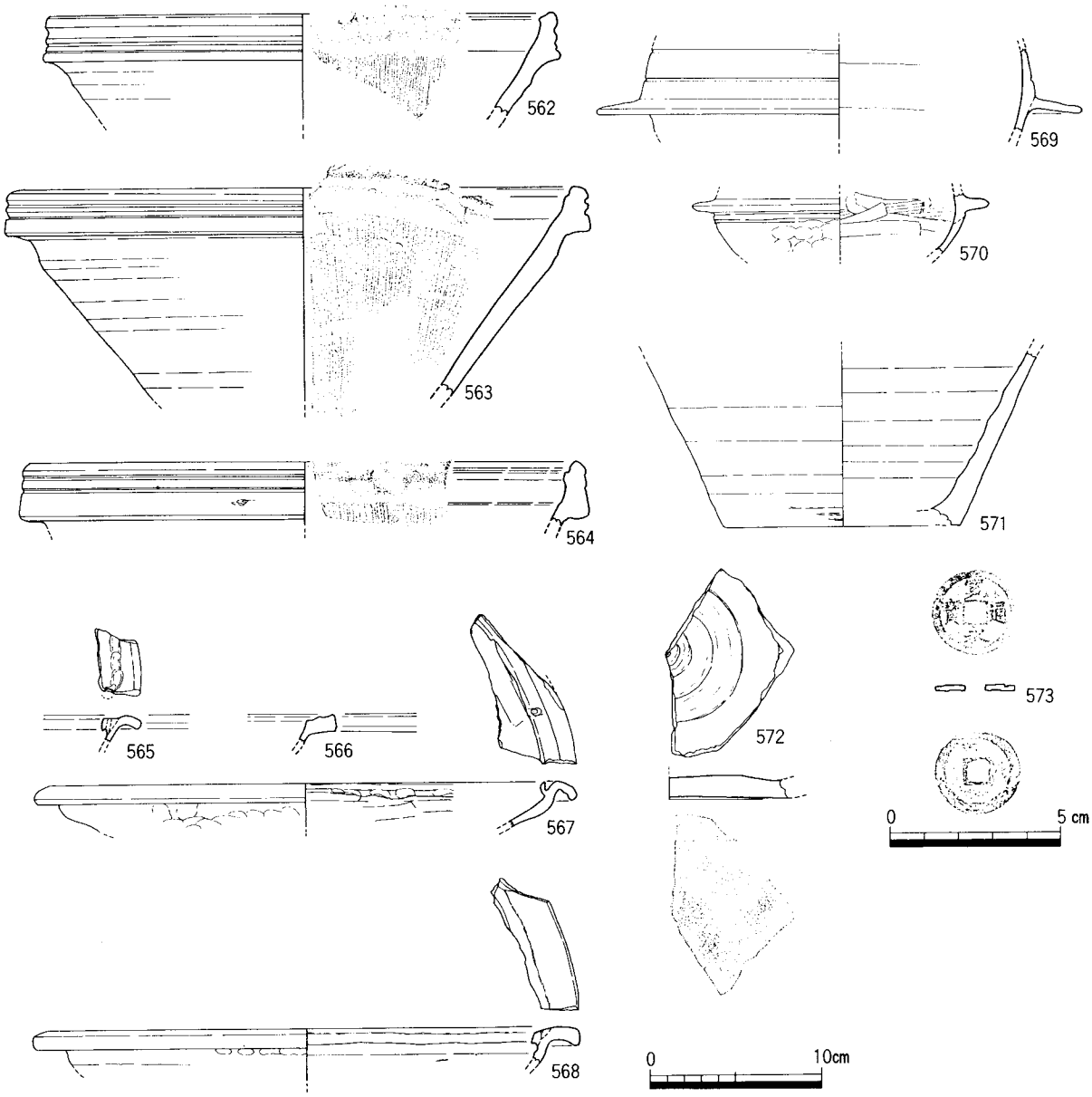
1：褐灰色（10YR4/1）砂質土，SD01埋土
2：灰白色（10YR7/1）粘質土，SD02埋土，拳大前後の礫を多く含む
3：褐灰色（10YR6/1）混砂粘質土，SD03埋土，拳大以下の礫を多く含む
4：灰黄褐色（10YR4/2）粘質土，SD03埋土下層
5：造成土
6：オリーブ黒色（7.5Y3/1）混砂粘質土，現代掘り込み埋土（6～8）
7：黄灰色（2.5Y4/1）混砂粘質土
8：黒褐色（2.5Y/3/1）混砂粘質土，2cm前後の小礫を多く含む
9：黒色（2.5Y2/1）粘質土，攪乱坑埋土
10：浅黄橙色（10YR8/3）粘質土
11：灰色（5Y4/1）混砂シルト質土，耕作土
12：明黄褐色（10YR6/6）粘質土，床土
13：にぶい黄橙色（10YR6/4）粘質土，床土
14：灰黄褐色（10YR4/2）混砂粘質土，2cm以下の小礫を多く含む
15：褐灰色（10YR5/1）混砂粘質土，3cm以下の小礫を多く含む，1に対応
16：褐灰色（10YR4/1）シルト質土
17：褐灰色（10YR6/1）混砂粘質土，3cm前後の小礫を多量に含む，2に対応
18：にぶい黄褐色（10YR6/4）混砂シルト質土，Feが多量に沈着
19：黒褐色（2.5Y3/1）混砂粘質土，遺構面上層弥生包含層

第94図　Ⅳ区ＡＳＤ01～03，Ⅳ区ＣＳＤ01断面図（Ｓ＝１／40）

562は備前擂鉢である。口縁部は重厚で，顎部が断面三角形を呈する。体部外面には回転ナデ調整が施され，内面摺目は密で，間隔を持たない。乗岡編年近世４期の所産であろう。563・564は堺産擂鉢である。563は口縁部内面に段を有し，顎部の張りも大きい。体部外面には回転ヘラケズリ調整が施される。摺目は密に入れ，端を丁寧にナデ消している。白神編年Ⅱ型式の所産である（白神1992，以下堺産擂鉢の分類はこれに依拠する）。564は口縁部内面に沈線状の段を有し，顎部は三角形状を呈する。摺目は密に入れるが，わずかに間隔が空く。摺目端はナデ消されるが，かすかにその痕跡を留める。白神編年Ⅲ型式まで下るものであろう。

565は土師質土器焙烙である。口縁部は鈍角に折れ，垂下することなく，端部に至る。内耳には穿孔が認められる。森下分類焙烙１型式の所産である。566は瓦質焙烙である。口縁部は鈍角に屈曲し，内側に稜を残す。567は土師質土器焙烙である。体部上半は緩やかに屈曲して立ち上がり，口縁部をほぼ直角に折り曲げる。内耳を有し，貫通しない穿孔を持つ。森下分類焙烙２型式に該当する。568は体部から鈍角に開く肉厚の口縁部で，端面を有する。内耳には貫通しない穿孔がみられ，森下分類焙烙２型式と思われる。569・570は瓦質土器羽釜である。569の鍔部は３cmを測り，口縁部には確認できる範囲では２条の沈線を有する。570は鍔径17.5cmと著しく小さく，日常品として機能を果たしていた可能性は低い。571・572は同一個体と考えられる陶器甕である。底面は回転ヘラケズリ，底部内面は回転ナデ調整，体部内外面は横ナデ調整がそれぞれ施される。外面は暗赤褐色，内面は灰オリーブ色の色調を呈し，内面のみ施釉される。573は銅銭（寛永通宝）である。

出土遺物より，18世紀中葉～19世紀の幅広の年代が与えられる。現代まで機能したＳＤ01を除くと，ＳＤ02・03は上記の年代幅に収まることになり，出土遺物のなかで最も古相に位置付けられる18世紀中葉～後葉のある段階にＳＤ03の埋没が開始したと考えたい。



第95図　Ⅳ区ＡＳＤ01・02，Ⅳ区ＢＳＤ01～03，Ⅳ区Ｃ・Ｄ・Ⅴ区ＳＤ01出土遺物（Ｓ＝１／４，１／２）

第４章　自然科学的調査の結果

第１節　松並・中所遺跡の花粉分析及びプラント・オパール分析

株式会社　古環境研究所

１．はじめに

花粉分析は，一般に低湿地堆積物を対象として比較的広域な地域の植生や古環境の復原に応用されており，遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。なお，乾燥的な環境下の堆積物では，花粉などの植物遺体が分解されて残存しないこともある。一方，植物珪酸体は，ガラスの主成分である珪酸（SiO_2）が植物の細胞内に蓄積したものであり，植物が枯死した後も微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。プラント・オパール（植物珪酸体）分析は，この微化石を遺跡土壌などから検出し，その組成や量を明らかにする方法であり，イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている。

松並・中所遺跡は，高松平野の北西部，香東川の扇状地上に立地する。本遺跡の周辺には，縄文時代から近世に至る時代の遺跡が確認されている。

ここでは，松並・中所遺跡Ⅳ区Ｃで検出された河川跡（ＳＲ01）の堆積層について花粉分析とプラント・オパール分析を行い，農耕ならびに植生・環境について検討を行う。

２．試　　料

試料は，西壁より採取された６点である。上位より灰黄褐色砂混じり粘質土（試料５，Ⅰ層），黒褐色砂混じり粘質土（試料６，Ⅱ層），黒褐色粘質土（試料10，Ⅲ層），黄灰色砂混じりシルト（試料７，Ⅳ層），灰色砂（試料８，Ⅴ層），灰色砂（試料９，Ⅵ層）である。このうち，上層のⅠ層とⅡ層，中層のⅢ層とⅣ層は弥生時代中期後葉，下層のⅤ層は弥生時代前期前半末，地山のⅥ層は弥生時代前期前半末以前の堆積とされている。

３．方　　法

(1) 花粉分析

花粉粒の分離抽出は基本的には中村(1973)を参考にして，試料に以下の物理化学処理を施して行った。

１）５％水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。

２）水洗した後，0.5㎜の篩で礫などの大きな粒子を取り除き，沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。

３）25％フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。

４）水洗した後，氷酢酸によって脱水し，アセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１のエルドマン氏液を加え１分間湯煎）を施す。

５）再び氷酢酸を加えた後，水洗を行う。

６）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い，グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は，遠心分離（1500rpm，２分間）の後，上澄みを捨てるという操作を３回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は，島倉

(1973) および中村 (1980) をアトラスとして，所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって，科，亜科，属，亜属，節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。なお，科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては，中村 (1974, 1977) を参考にして，現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類しているが，個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

(2) プラント・オパール分析

プラント・オパールの抽出と定量は，「プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）」をもとに，次の手順で行った。

1）試料土を絶乾（105℃・24時間）する。

2）試料土約１ｇを秤量後，ガラスビーズ（直径約40μm，約0.02ｇ）を添加する。

※電子分析天秤により１万分の１ｇの精度で秤量

3）電気炉灰化法により有機物を処理する。

4）超音波（300W・42ＫＨｚ・10分間）により試料を分散する。

5）沈底法により微粒子（20μm以下）を除去後乾燥する。

6）封入剤（オイキット）中に分散しプレパラートを作成する。

検鏡は，おもにイネ科植物の機動細胞（葉身にのみ形成される）に由来するプラント・オパール（以下，プラント・オパールと略す）を同定の対象とし，400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は，ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。

検鏡結果は，計数値を試料１ｇ中のプラント・オパール個数（試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に，計数されたプラント・オパールとガラスビーズの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また，おもな分類群については，この値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重，単位：10－５ｇ）を乗じて，単位面積で層厚１ｃｍあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は，イネ（赤米）は2.94，ヨシ属（ヨシ）は6.31，ススキ属型（ススキ）は1.24，ネザサ節型は0.48，クマザサ属型（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75である。

4．分析結果

(1) 花粉分析

1）分類群

出現した分類群は，樹木花粉９，草本花粉７，シダ植物胞子１形態の計17である。これらの学名と和名および粒数を表１に示し，主要な分類群を写真に示す。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

ツガ属，マツ属複維管束亜属，コウヤマキ，イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科，サワグルミ，クリ，シイ属，コナラ属コナラ亜属，コナラ属アカガシ亜属

〔草本花粉〕

イネ科，イネ属型，カヤツリグサ科，アブラナ科，タンポポ亜科，キク亜科，ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子

2）花粉群集の特徴

花粉はいずれの試料からもほとんど検出されないか，検出されなかった。試料Ⅰではイネ科を主に，カヤツリグサ科，ヨモギ属，タンポポ亜科などが極めて少量であるが出現する。

(2) プラント・オパール分析

Ⅰ層～Ⅵ層について分析を行った結果，イネ，ヨシ属，ウシクサ族（ススキ属型），シバ属，タケ亜科（ネザサ節型，その他）および未分類のプラント・オパールが検出された。このうち，Ⅰ層ではこれらすべての分類群が，Ⅱ層とⅣ層ではシバ属を除く各分類が，Ⅲ層とⅥ層ではウシクサ族(ススキ属型)，タケ亜科（ネザサ節型，その他）および未分類が，そしてⅤ層ではタケ亜科（ネザサ節型，その他）と未分類がそれぞれ検出された。これらについて定量を行い，その結果を表4，図96に示した。主要な分類群については顕微鏡写真を付す。

5．花粉分析・プラント・オパール分析から推定される農耕ならびに植生と環境の変遷

分析の結果，Ⅰ層とⅡ層およびⅣ層よりイネのプラント・オパールが検出された。このうち，Ⅰ層ではプラント・オパール密度が5,800個／gと稲作跡を推定する際の基準値である5,000個／gを上まわっている。したがって，Ⅰ層については本地点もしくはごく近傍において稲作が行われていたと考えられる。Ⅱ層とⅣ層ではいずれもプラント・オパール密度が500個／gと非常に低い値であることから，上層あるいは近傍の水田層よりイネのプラント・オパールが混入したものとみられる。

なおⅠ層では，イネ以外に少量ながらススキ属型やネザサ節型，ヨシ属およびシバ属のプラント・オパールが検出され，花粉ではイネ科を主に，カヤツリグサ科，ヨモギ属，タンポポ亜科などが少量検出されている。こうしたことから，草本類の生育する植生で花粉などの植物遺体の分解される乾湿を繰り返すような環境が示唆される。Ⅱ層からⅥ層では，花粉などの植物遺体の分解される比較的乾燥した環境が推定される。

6．まとめ

松並・中所遺跡Ⅳ区Cの河川跡（SR01）の堆積層について花粉分析とプラント・オパール分析を行い，農耕および植生と環境について検討した。その結果，Ⅰ層においてイネのプラント・オパールが高い密度で検出され，調査地あるいは近傍で稲作が行われていた可能性が示唆された。なお，いずいれの試料からも花粉がほとんど検出されないか，あるいはまったく検出されないことから，堆積地は花粉などの有機質遺体の分解される乾燥あるいは乾湿を繰り返す堆積環境であったと推定された。

参考文献

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248－262.

杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体．富士竹類植物園報告，第31号，p.70－83.

中村純（1973）花粉分析．古今書院，p.82－110.

中村純(1974)イネ科花粉について，とくにイネ(Oryza sativa)を中心として．第四紀研究，13，p.187－193.

中村純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第10号．p.21－30.
中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91p.
藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法―，考古学と自然科学，9，p.15－29.
藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査―，考古学と自然科学，17，P.73－85.

分類群		Ⅳ区C・SR01					
学名	和名	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ
Arboreal pollen	樹木花粉						
Tsuga	ツガ属				1		
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複雑管束亜属			1			
Sciadopitys verticillata	コウヤマキ				1		
Taxaceae-Cephalotaxaxeae-Cupressaceae	イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	1	1				
Pterocarya rhoifolia	サワグルミ	1					
Castanea crenata	クリ		1				
Castanopsis	シイ属	1					
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	1					
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属	2					
Nonarboreal pollen	草本花粉						
Gramineae	イネ科	10	1		1		1
Oryza type	イネ属型			1			
Cyperaceae	カヤツリグサ科	3					
Cruciferae	アブラナ科	2					
Lactucoideae	タンポポ亜科	3					
Asteroideae	キク亜科	1					
Artemisia	ヨモギ属	3	1	2			
Fem spore	シダ植物胞子						
Monolate type spore	単条溝胞子	1		1			
Arboreal pollen	樹木花粉	6	2	1	2	0	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	22	2	3	1	0	1
Total pollen	花粉総数	28	4	4	3	0	1
Unknown pollen	未同定花粉	1	0	1	0	0	0
Fem spore	シダ植物胞子	1	0	1	0	0	0
Helminth eggs	寄生虫卵	(－)	(－)	(－)	(－)	(－)	(－)
	明らかな消火残渣	(－)	(－)	(－)	(－)	(－)	(－)

第4表　松並・中所遺跡における花粉分析結果

検出密度（単位：×100個／g）

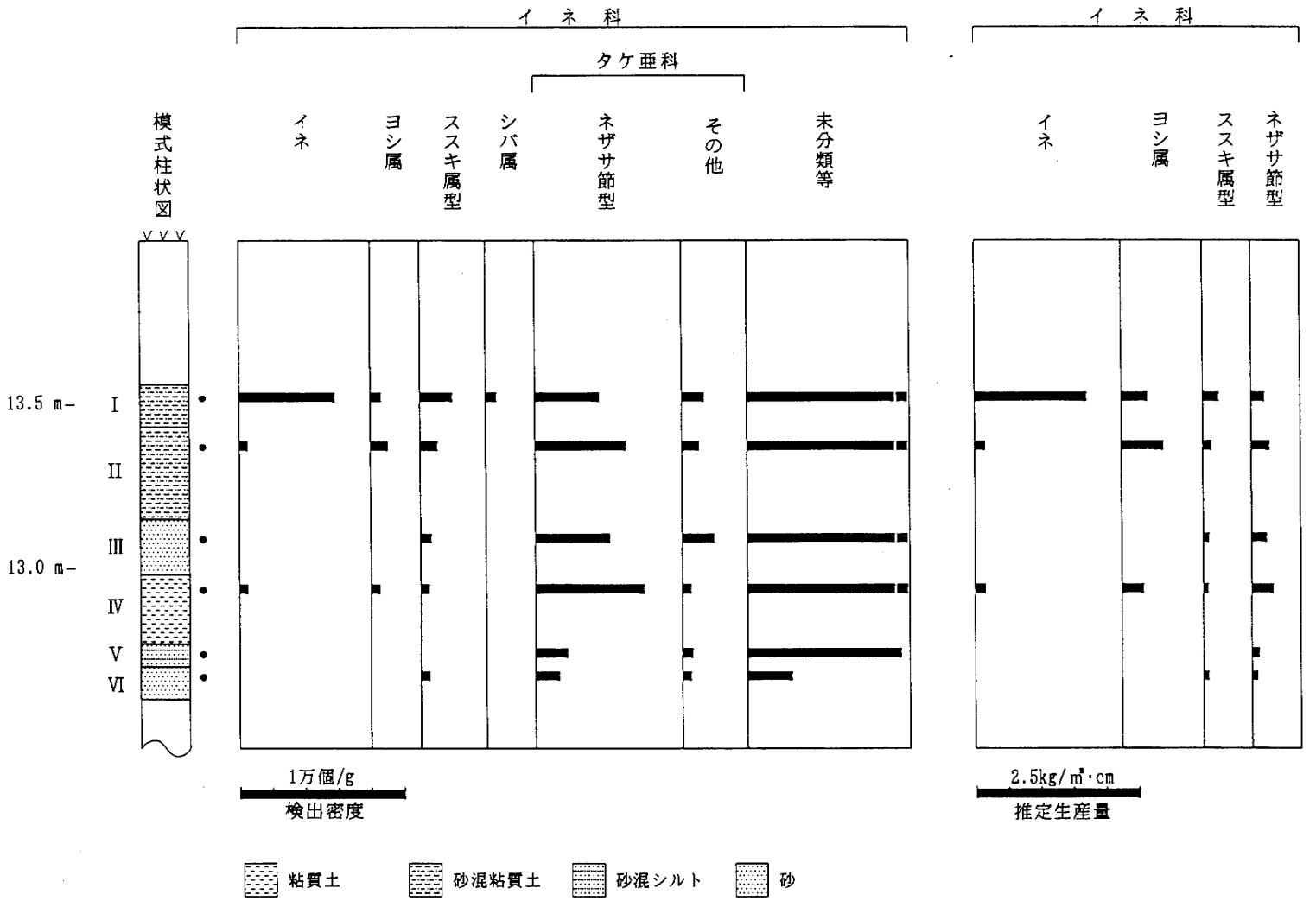
分類群（和名・学名）	土　層	SR01					
		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ
イネ科	Gramineae (Grasses)						
イ　ネ	Oryza sativa (domestic rice)	58	5		5		
ヨシ属	Phragmites	6	10		5		
ススキ属型	Miscanthus type	19	10	6	5		5
シバ属	Zoisia	6					
タケ亜属	Bambusoideae (Bamboo)						
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa type	39	55	45	66	19	14
その他	Others	13	10	19	5	6	5
未分類等	Unknown	207	120	147	143	94	27
プラント・オパール総数		291	205	217	225	119	50

おもな分類群の推定生産量（単位：kg／㎡・cm）

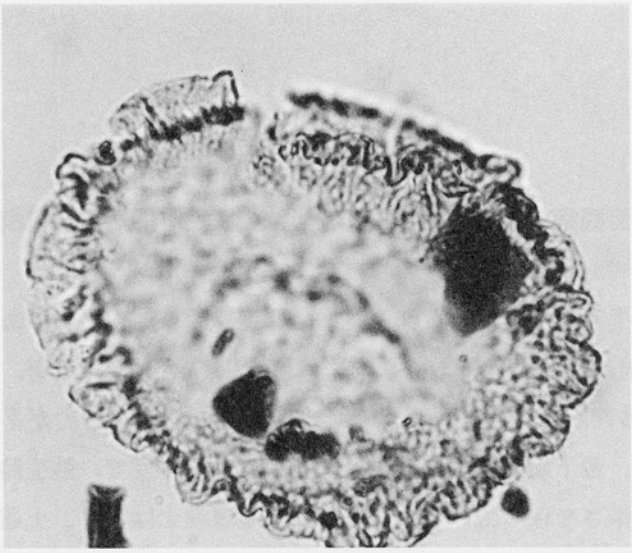
イ　ネ	Oryza sativa (domestic rice)	1.71	0.15		0.16		
ヨシ属	Phragmites	0.41	0.63		0.35		
ススキ属型	Miscanthus type	0.24	0.12	0.08	0.07		0.06
ネザサ節属	Pleioblastus sect. Nezasa type	0.19	0.26	0.21	0.32	0.09	0.06

※試料の仮比量を1.0と仮定して産出。

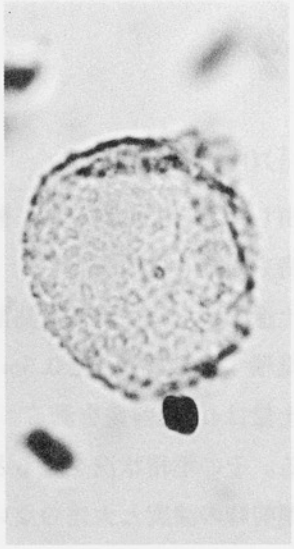
第5表　香川県，松並・中所遺跡のプラント・オパール分析結果



第96図　松並・中所遺跡におけるプラント・オパール分析結果

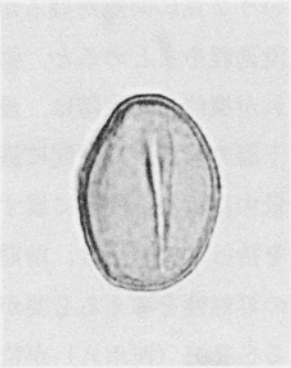


1　ツガ属

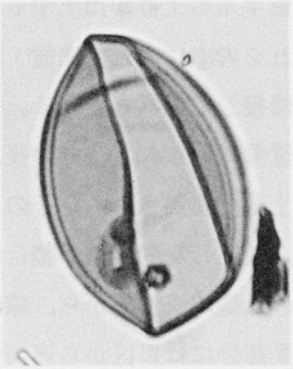


2　コウヤマキ

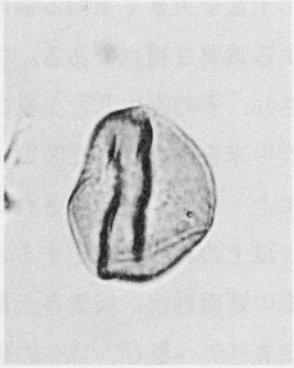
3　コナラ属コナラ亜属



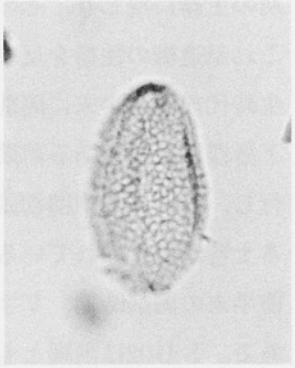
4　コナラ属アカガシ亜属



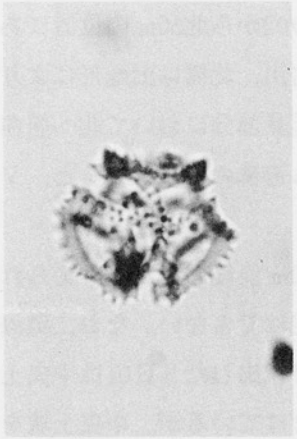
5　イネ属型



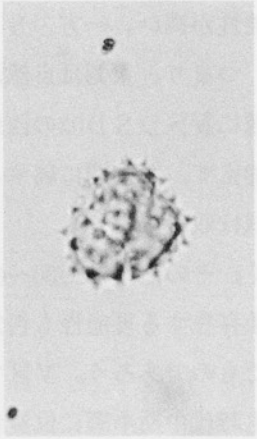
6　カヤツリグサ科



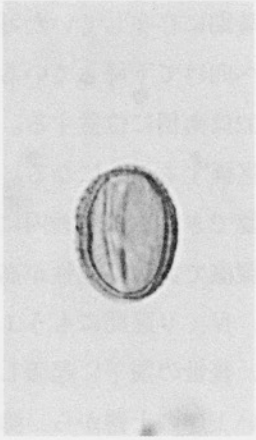
7　アブラナ科



8　タンポポ亜科



9 キク亜科



10　ヨモギ属

11　シダ植物単条溝胞子

10μm

写真１　松並・中所遺跡の花粉・胞子

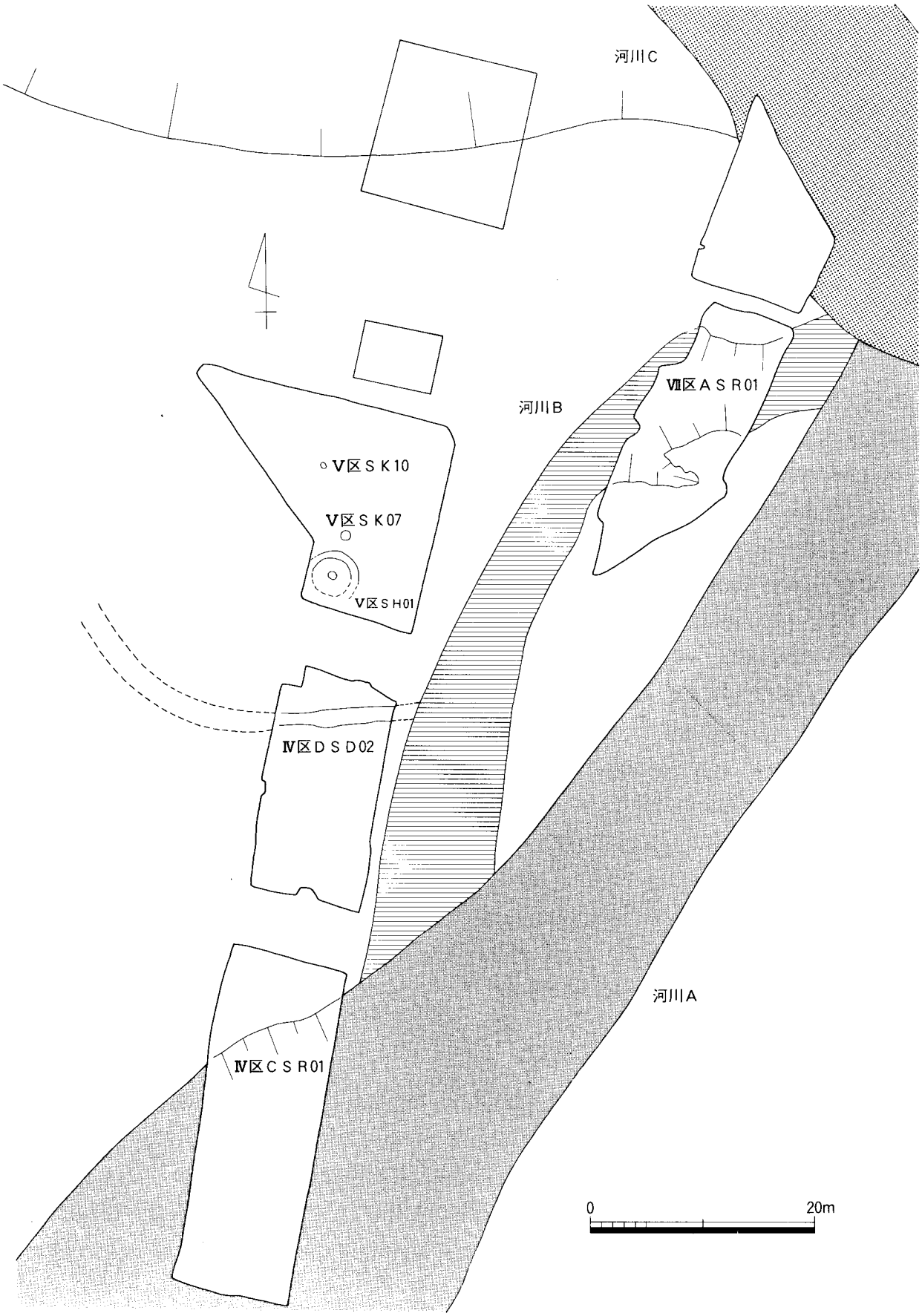
第5章　まとめ

第1節　Ⅳ区ＤＳＤ02について

ここではⅣ区Ｄで検出したＳＤ02に関して，断面観察や遺物出土状況，各層位の埋没時期から，埋没過程を復元し，その性格を類推したい。

開削時期は最下層出土遺物から弥生時代前期前半末に位置付けられる。掘削深度は深く，検出面であるシルト質土層Ｉ下に堆積する砂礫層Ｉを0.5m前後掘り下げており，削平の度合いは不明であるが，検出した限りでの掘削土量は4.6㎥前後を測る。砂礫層の掘削という点を考慮すると，相当な労力が必要であったと考えられる。その堆積状況を見ると，最下層の埋没はわずかに認められる程度で，弥生時代前期前半末段階には掘削時の深度と大差のない深さを保っているのに対し，下層埋没土は厚く，土器の出土量も皆無に近いことから，短期間の埋没ないし埋戻しが想定できる。一方，上・中層は拳大前後の砂岩を多量に含む埋土で，前期末～中期初頭の埋没が考えられる。同層位は砂岩の多量包含と埋没時期の土器に混じり，その出土量を大きく上回る前期前半末の土器が出土するという２点に問題が残るが，これが遺構の性格を反映する重要な視点である。これを考慮に入れて開削・埋没過程をまとめると，弥生時代前期前半末に開削され，その際生じた土量は隣接して仮置きされる。それが機能した段階は，最下層埋没時期である前期前半末を中心とした時期に位置付けられる。その後，下層の埋没が短期間に進行し，前期末～中期初頭に上・中層が仮置きされた土量で埋戻される。その土量中には機能段階に属する土器が包含されている。以上のように想定すると，前述した問題点が整合性を持って整理でき，前期前半末の開削時期，Ｖ字形の断面形状，仮置き土量の土塁的な性格から，環濠の可能性を考える必要がある。ＳＤ02は両端とも調査区外へ延び，東への延長部分にはⅣ区から連続するＳＲ01（河川Ａ）が位置し，さらにⅣ区ＤＳＤ02とⅣ区ＳＲ01の間にはⅦ区ＡＳＲ01（河川Ｂ）が位置する可能性が高い。Ⅳ区ＳＲ01下層の埋没時期は弥生時代前期前半末に位置付けられ，Ⅶ区ＡＳＲ01も前期前半末の遺物を包含しており，Ⅳ区ＤＳＤ02と同時期に存在していた可能性が高い。一方，ＳＤ02から北50mの位置にあるⅥ区Ｂでは旧地形が現清水川へ向けて下降している。つまり，東側は自然河川，北側は旧地形によりそれぞれ区切られ，Ⅳ区ＤＳＤ02は南側に位置する。仮にⅣ区ＤＳＤ02の西延長部分において北へ屈曲すればⅤ区を中心とした範囲を区画することになる。加えて，同時期に属する遺構の分布を見ると，Ⅴ区ＳＫ07・10がⅤ区において確認でき，この区画内にほぼ収まる。

現時点ではⅣ区ＤＳＤ02は，環濠である可能性が高く，その直径は約50～60m前後を測ると考えられる。現状では１重環濠であるが，Ⅳ・Ⅴ区間にもう１条存在する可能性も否定はできない。なお，環濠内における遺構密度が低い点は，後世の削平に起因したものであろう。Ⅴ区で検出したＳＨ01は中央土坑から検出した５cmにも満たない１片の土器から，弥生時代中期中葉に位置付けているが，中央土坑を取り巻く柱穴列は弥生時代前期に属する可能性が高い土器が出土しており（Ⅴ区ＳＰ23・24），その位置付けに問題が残る。中央土坑の両脇にある２柱穴の存在から，「松菊里型住居」の可能性が高く，前期前半末段階に位置付けられる可能性も残る。



第97図　松並・中所遺跡弥生Ⅰ期遺構配置図（Ｓ＝１／500）

第２節　遺構の変遷

松並・中所遺跡では弥生時代，中世前半，近世の遺構を検出した。以下，各遺構の所属時期を出土遺物を中心に細分し，説明する。

弥生Ⅰ期（弥生時代前期前半末，第98図①）

弥生Ⅰ期は弥生時代前期前半末で，森下編年Ⅰｃ期に位置付けられる（森下1998）。当該期に属する遺構はⅤ区ＳＫ07・10，Ⅳ区ＤＳＤ02，Ⅳ区ＳＲ01，Ⅶ区ＡＳＲ01を確認している。Ⅳ区ＤＳＤ02は前節で示したように，環濠である可能性が高く，前期前半末に開削され，前期末～中期初頭に廃絶している。Ⅴ区ＳＫ07・10の他，当該期の遺物が出土するピットもⅤ区とⅣ区Ｄにのみ認められ，中期中葉前半としたⅤ区ＳＨ01も当該期まで遡る可能性も高い。

県内の環濠集落の出現時期は，弥生時代前期前半末と前期後半初頭に位置付けられ，松並・中所遺跡は前者に該当する。同時期の環濠集落としては，龍川五条遺跡，汲仏遺跡があり，やや遅れて，中の池遺跡，五条遺跡，鬼無・藤井遺跡，天満・宮西遺跡，鴨部・川田遺跡で環濠が開削される。こうした背景には各地域内における集落間の緊張関係が発生したものと考えられ，松並・中所遺跡Ⅳ区ＤＳＤ02もこうした情勢のなかで開削されたものであろう。

弥生Ⅱ期（弥生時代中期中葉前半，第98図②）

弥生Ⅱ期は弥生時代中期中葉前半で，畿内第Ⅲ様式古段階に併行する。検出した遺構はⅤ区ＳＨ01のみであるが，前期段階まで遡る可能性も否定できない。なお，Ⅳ区ＳＲ01からも当該期の土器を検出しているが，その点数は２・３点と極めて少ない。

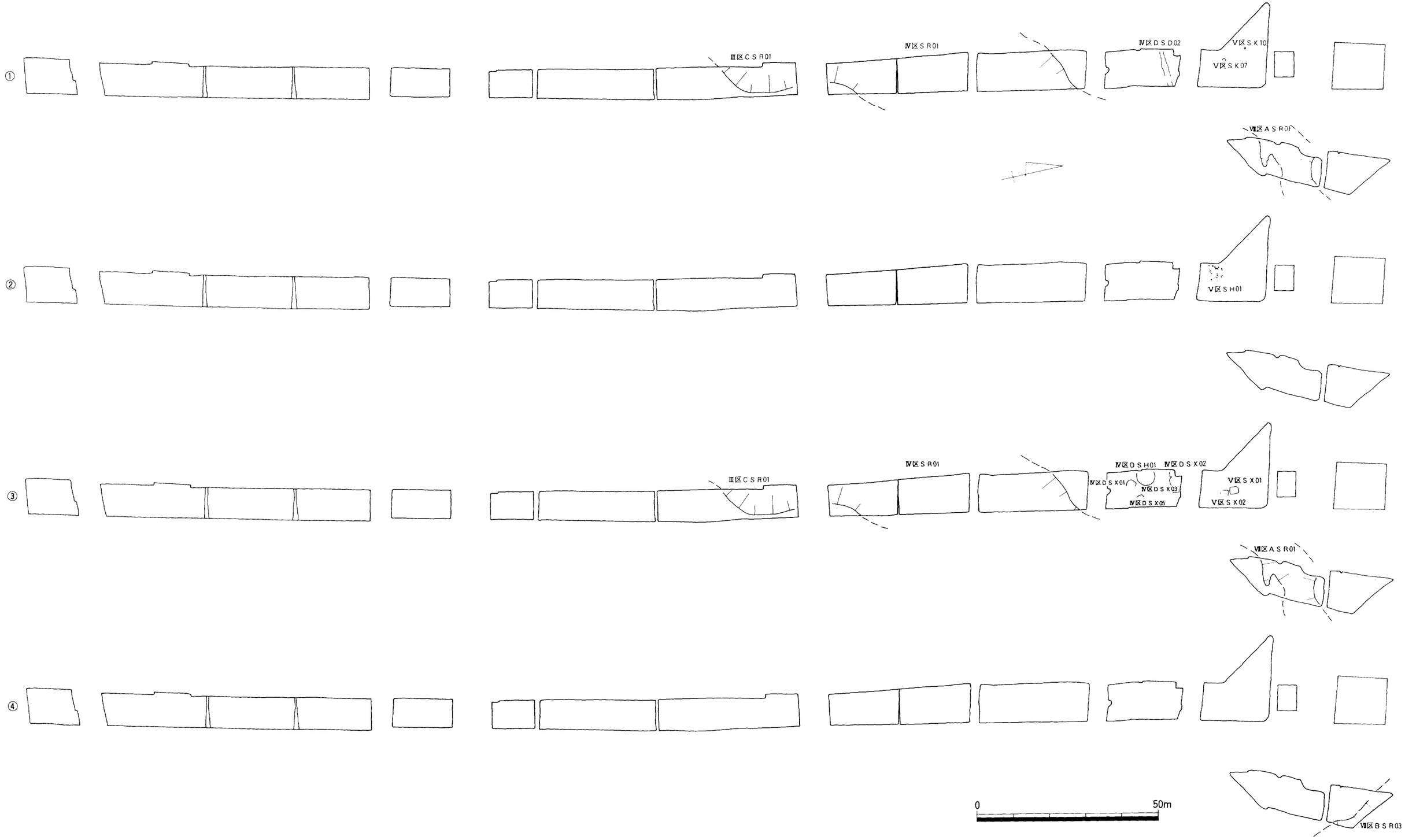
弥生Ⅲ期（弥生時代中期後葉，第98図③）

弥生Ⅲ期は弥生時代中期後葉で，畿内第Ⅳ様式前半に併行する。Ⅳ区ＤＳＨ01，Ⅳ区ＤＳＸ01～03・05，Ⅴ区ＳＸ01・02，Ⅲ区Ｃ～Ⅳ区ＳＲ01，Ⅶ区ＡＳＲ01等を検出している。弥生Ⅱ期に比して，その遺構数は増大する。遺構分布を見ると，いずれもⅢ区Ｃ～Ⅳ区ＣＳＲ01の北側に位置しており，調査区の西側に大きく広がる緩やかな微高地上に当該期の集落が展開する可能性が高く，松並・中所遺跡Ⅳ区Ｃ～Ⅴ区は，集落の縁辺部に位置するものと理解できる。

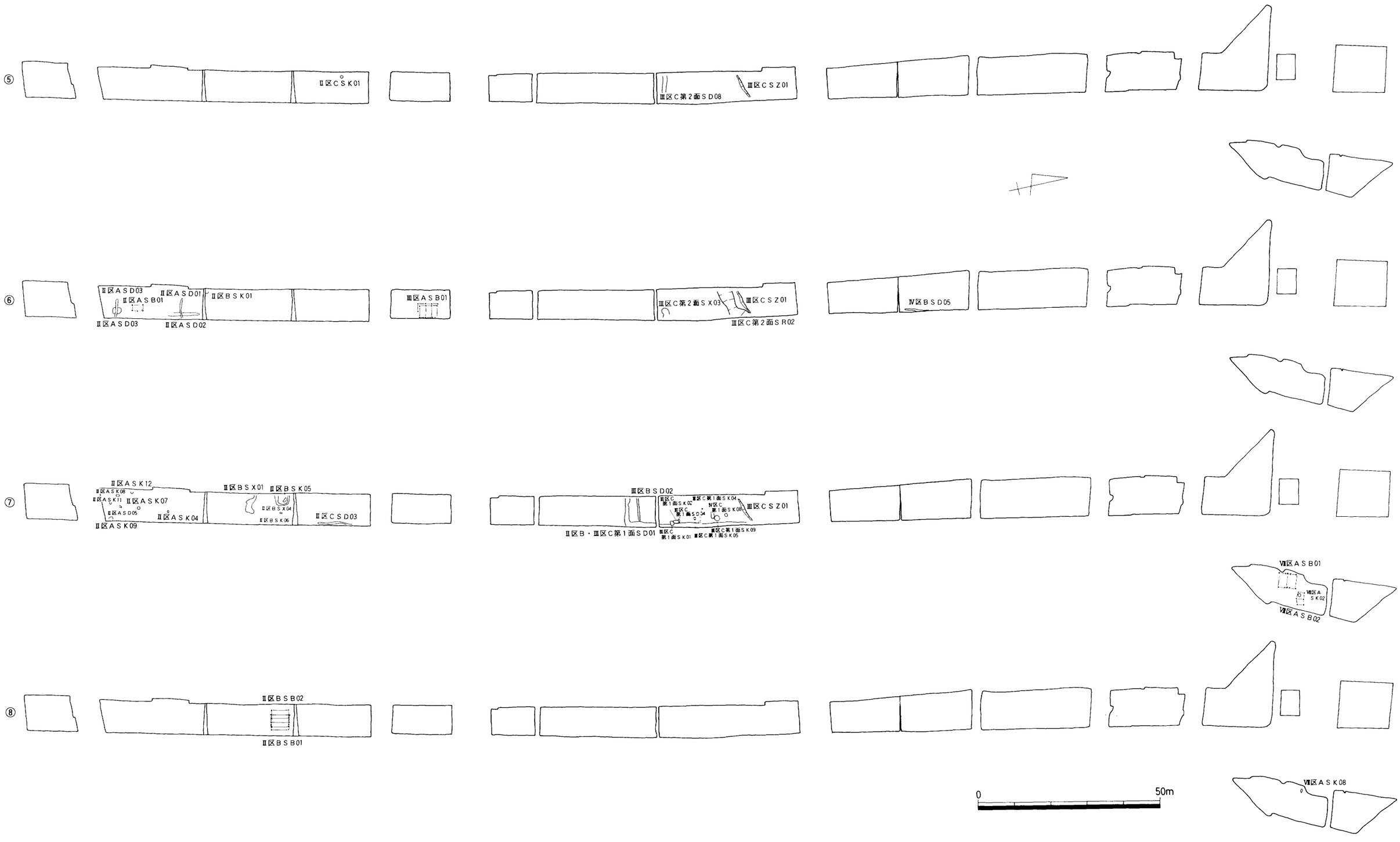
竪穴住居に関しては，第５章第３節で触れるが，平面規模・主柱穴・中央土坑（炉跡）等の居住施設としての諸要素を兼ね備えたⅣ区ＤＳＨ01，Ⅳ区ＤＳＸ02，Ⅴ区ＳＨ01の他に，２ｍ前後の小規模な方形プラン，無主柱穴，中央土坑（炉跡）の一部欠落といった竪穴住居と言及するには問題が残る遺構が存在する。これらは常時の使用は行われていないが，ある目的のために使用された施設と思われ，居住施設に類する施設と考えたい。

また，松並・中所遺跡の背後に位置する峰山の頂部から緩斜面に立地する摺鉢谷遺跡は，弥生時代中期後葉～末に位置付けられ，当遺跡とは同時期の集落である。公表されている採集品には石庖丁も認められるが，扁平片刃・柱状片刃石斧も多く出土しており，丸亀平野における月信遺跡・矢ノ塚遺跡・西碑殿遺跡にみられる関連し合って存続する集落の在り方と共通したものである。摺鉢谷遺跡は標高160ｍ前後を測る高所に立地しており，集落の一側面には中期後半～末にかけて瀬戸内海沿岸地域で確認される高地性集落としての機能も含まれると理解できる。

なお，Ⅲ区Ｃ～Ⅳ区Ｃにかけて検出したＳＲ01は，その遺存状況が最も良好であったⅣ区ＣＳＲ01最上層において，稲作跡を推定する際の基準値である5,000個／ｇを上回る，5,800個／ｇのプラント・オ



第98図　松並・中所遺跡遺構変遷図１（Ｓ＝１／1,000）



第99図　松並・中所遺跡遺構変遷図２（Ｓ＝１／1,000）

パールが検出されており，層序関係から当該期に属すると考えられ，湿地状を呈した自然河川上面において，稲作を行っていたことが立証できる。

弥生Ⅳ期（弥生時代中期末，第98図④）

弥生Ⅳ期は弥生時代中期末の時期である。検出した遺構はⅦ区ＢＳＲ01のみである。

中世Ⅰ期（12世紀後半，第99図⑤）

中世Ⅰ期は12世紀後半で，片桐Ⅱ－⑥期（片桐1992），佐藤Ⅱ－１期新相（佐藤2000）におおむね併行し，瓦器椀では尾上編年Ⅲ－１期（尾上1983）に位置付けられる。検出した遺構はⅡ区ＣＳＫ01，Ⅲ区Ｃ第２面ＳＤ08がある。Ⅲ区Ｃ第２面は12世紀後半～末の遺構が確認されており，当該期に該当する。当該期の遺構数は少なく，Ⅲ区Ｃ第２面を中心とした範囲にやや集中する。

Ⅲ区Ｃでは弥生Ⅲ期に埋没したＳＲ01を一部削り出して，生活面を確保し，その痕跡は段状遺構（Ⅲ区ＣＳＺ01）となって遺存している。

中世Ⅱ期（12世紀末～13世紀初頭，第99図⑥）

中世Ⅱ期は12世紀末～13世紀初頭で，片桐Ⅱ－⑦期，佐藤Ⅱ－１期新相～Ⅱ－２期，尾上Ⅲ－２期に併行する。検出した遺構はⅡ区ＡＳＢ01，Ⅲ区ＡＳＢ01，Ⅱ区ＢＳＫ01，Ⅱ区ＡＳＤ01～03，Ⅳ区ＢＳＤ05，Ⅱ区ＡＳＸ01，Ⅲ区Ｃ第２面ＳＸ03・ＳＲ02がある。その分布はⅣ区Ｃ以南において広範に認められ，Ⅲ区Ａでは庇を持つ掘立柱建物跡も確認できる。

また，Ⅱ区ＢＳＫ01では土師質土器小皿が数点出土し，当遺跡では唯一底部切り離し手法が回転糸切りのものが，回転ヘラ切りの底部と共伴している。

中世Ⅲ期（13世紀前葉，第99図⑦）

中世Ⅲ期は13世紀前葉で，片桐Ⅱ－⑦期，佐藤Ⅱ－２期，尾上Ⅲ－２期と併行する。検出した遺構はⅦ区ＡＳＢ01・02，Ⅱ区ＡＳＫ04・07～09・11・12，Ⅱ区ＢＳＫ05・06，Ⅲ区Ｃ第１面ＳＫ01・02・04・05・08・09・11，Ⅶ区ＡＳＫ02，Ⅱ区ＡＳＤ05，Ⅱ区ＣＳＤ03，Ⅲ区ＢＳＤ02，Ⅲ区Ｂ・Ｃ第１面ＳＤ01，Ⅲ区Ｃ第１面ＳＤ04，Ⅱ区ＢＳＸ01・04がある。

当遺跡の中世前半段階おいて，最も遺構密度が高くなる時期が中世Ⅲ期である。Ⅱ・Ⅲ区において集中し，Ⅲ区Ｂ・Ｃでは屋敷地を区画する溝も確認できる。区画北端はⅢ区ＣＳＺ01により区切られ，区画内に限り整地が行われている。当該箇所で掘立柱建物跡は確認できないが，調査区外西側において存在すると思われる。

中世Ⅳ期（13世紀中葉，第99図⑧）

中世Ⅳ期は13世紀中葉で，片桐Ⅱ－⑧期，佐藤Ⅱ－３期，尾上Ⅲ－３期と併行する。検出した遺構はⅡ区ＢＳＢ01・02，Ⅶ区ＡＳＫ08がある。土坑・溝状遺構は稀薄であるが，埋土類型Ⅲ類が当該期のピットと考えられ，Ⅲ区ＣＳＲ01上面を中心に散在的に認められる。

近世（18世紀）

近世は18世紀を中心とした時期である。検出した遺構はⅡ区ＢＳＫ02・09，Ⅳ・Ⅴ区ＳＤ01があり，Ⅱ区Ｂに集中する傾向がある。また，Ⅳ・Ⅴ区において検出したＳＤ01ほかは周辺の方格地割に合致する溝状遺構で，Ⅲ・Ⅳ区間でクランク状に屈曲するという特異な状況を呈する。今回は触れられなかったが，条理地割を検討する上で興味深い資料を提供するものと考える。

第3節　松並・中所遺跡竪穴住居について

松並・中所遺跡では，3棟の竪穴住居（Ⅳ区ＤＳＨ01・ＳＸ02, Ⅴ区ＳＨ01）とそれに類する可能性が高い施設（Ⅳ区ＤＳＸ01, Ⅴ区ＳＸ01・02）を検出している。それぞれの所属時期は，Ⅴ区ＳＨ01のみ弥生時代中期中葉前半に属し，それ以外は弥生時代中期後葉を中心とした時期に位置付けられる。

以下，当遺跡で検出した竪穴住居の位置付けを明確にするために，讃岐地方における弥生時代中期の竪穴住居を集成し，検討を加えたい。また，Ⅳ区ＤＳＨ01の中央土坑は播磨地域を中心に分布している「10型中央土坑」の可能性を指摘でき，それに関しても検討する。

讃岐地域の弥生時代中期の竪穴住居

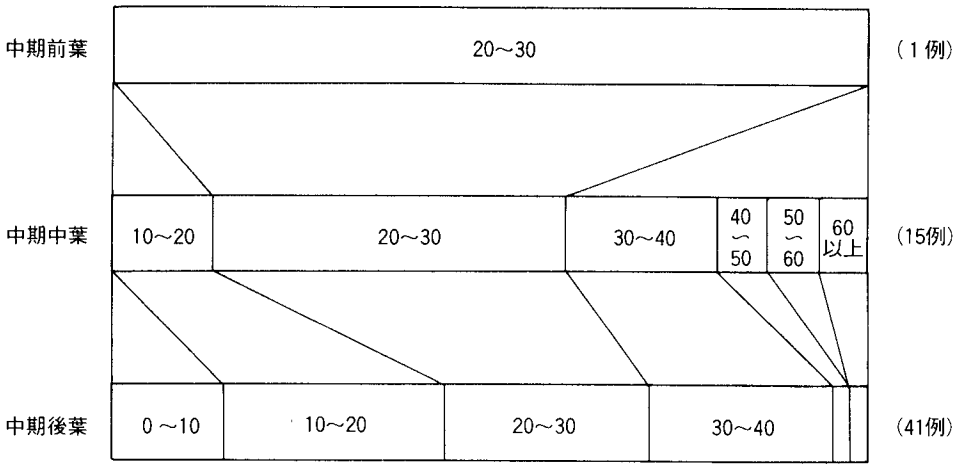
第9・10表に讃岐地方の弥生時代中期段階の竪穴住居を集成した（四国横断自動車道建設津田～引田間は含まない）。表記載内容は各報告書に掲載された平・断面図を元に検討したため，報告書内容とは異なる場合もある。各項目中の形態分類は，床面積20㎡以下，径5ｍ以下が小型，20～40㎡，径5～7ｍが中型，40㎡以上を大型とし，平面形（円・方形）の差異から，Ⅰ類を小型方形，Ⅱ類を中型方形，Ⅲ類を大型方形，Ⅳ類を小型円形，Ⅴ類を中型円形，Ⅵ類を大型円形，Ⅶ類を円形柱穴列（平地式住居か否かは不明）とした。床面積は掘方が完存しない例が多く，壁溝が確認できる資料はそこからの復元値を求め，掘方が削平により失われているか平地式住居の識別が困難であるⅦ類を評価するために，主柱穴内面積を表中床面積の（　）に記載した。方形住居に関しては，短辺長を長辺長で除した値が0.9以上のものをａ類，以下のものをｂ類とした（形態分類に関しては，蔵本1999Ａを参考にした）。主柱穴配置は四柱穴＝Ａ類，多角形配置＝Ｂ類，多角形配置＋二柱穴＝Ｃ類，二柱穴＝Ｄ類，無柱穴＝Ｅ類にぞれぞれ分類し，必要に応じて各分類を組み合わせた。表中の①・②という記載は，建て替え順序が判明したものに関して，それぞれの値を掲載したものである。

以下，集成表を基に検討を加える。検討に際した地域設定として，三豊地域，丸亀平野中・西部（善通寺市周辺），丸亀平野東部（下川津遺跡周辺），高松平野中部（空港跡地周辺と上天神遺跡周辺），高松平野東部（前田東・中村遺跡周辺）の4地域を設定した。各水系単位での地域設定が可能であれば，より細かい地域性の抽出が行えるが，資料数の制約から4地域にまとめ，特に高松平野と丸亀平野の対比を中心に，床面積，床面積と主柱穴配置の関係，床面積と主柱穴本数の関係について検討する。なお，弥生時代中期前葉の竪穴住居は確認数が極端に低いため，弥生時代中期の変遷については中葉から後葉に関してのみ取り扱う。

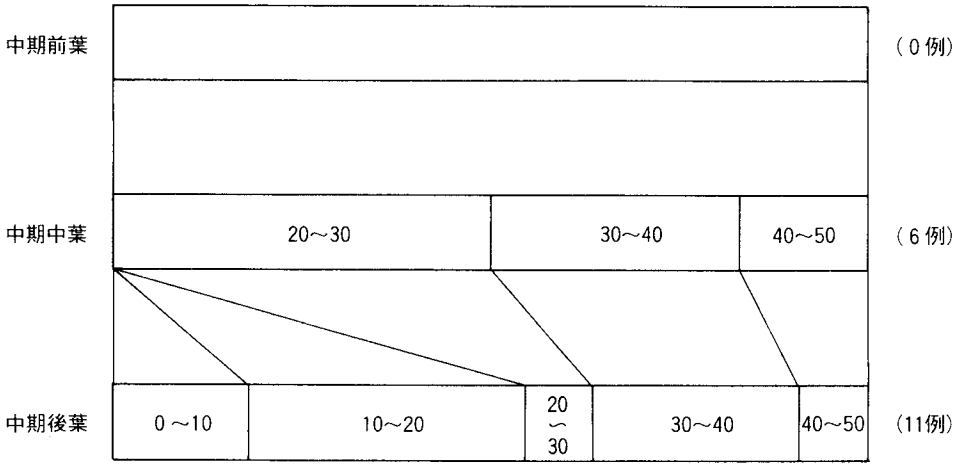
床面積

第100図に弥生時代中期における各段階の床面積変遷図を提示した。まず，讃岐地方全域における中葉の竪穴住居は20～40㎡の中型住居の割合が大半を占め，40㎡以上の大型住居も一定量確認できる。後葉には小型住居の比率が上がり，大型住居が少なくなる傾向が窺え，10～20, 20～30, 30～40㎡のそれぞれの規模の竪穴住居がほぼ同じ割合で存在している。

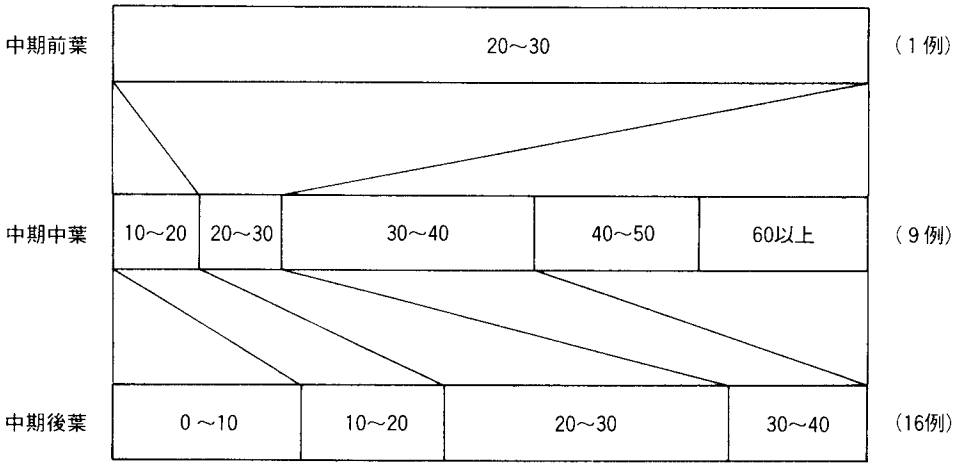
地域別に見ると，丸亀平野では中葉段階には20㎡以下の竪穴住居は確認できず，後葉段階において5割を越える比率で認められ，中葉にほぼ5割の比率を占めていた20～30㎡規模のものは後葉になると激減する。一方，高松平野は中葉段階には，各規模の住居が一定量の割合で確認でき，60㎡を越える超大型住居も高い比率で認められるが，後葉には0～10㎡の小型住居が出現し，40㎡以上の大型住居は確認できないという変化が生じ，中葉において1割の比率であった20～30㎡の中型住居の割合が後葉では4



讃岐地方全域（㎡）



丸亀平野（㎡）



高松平野（㎡）

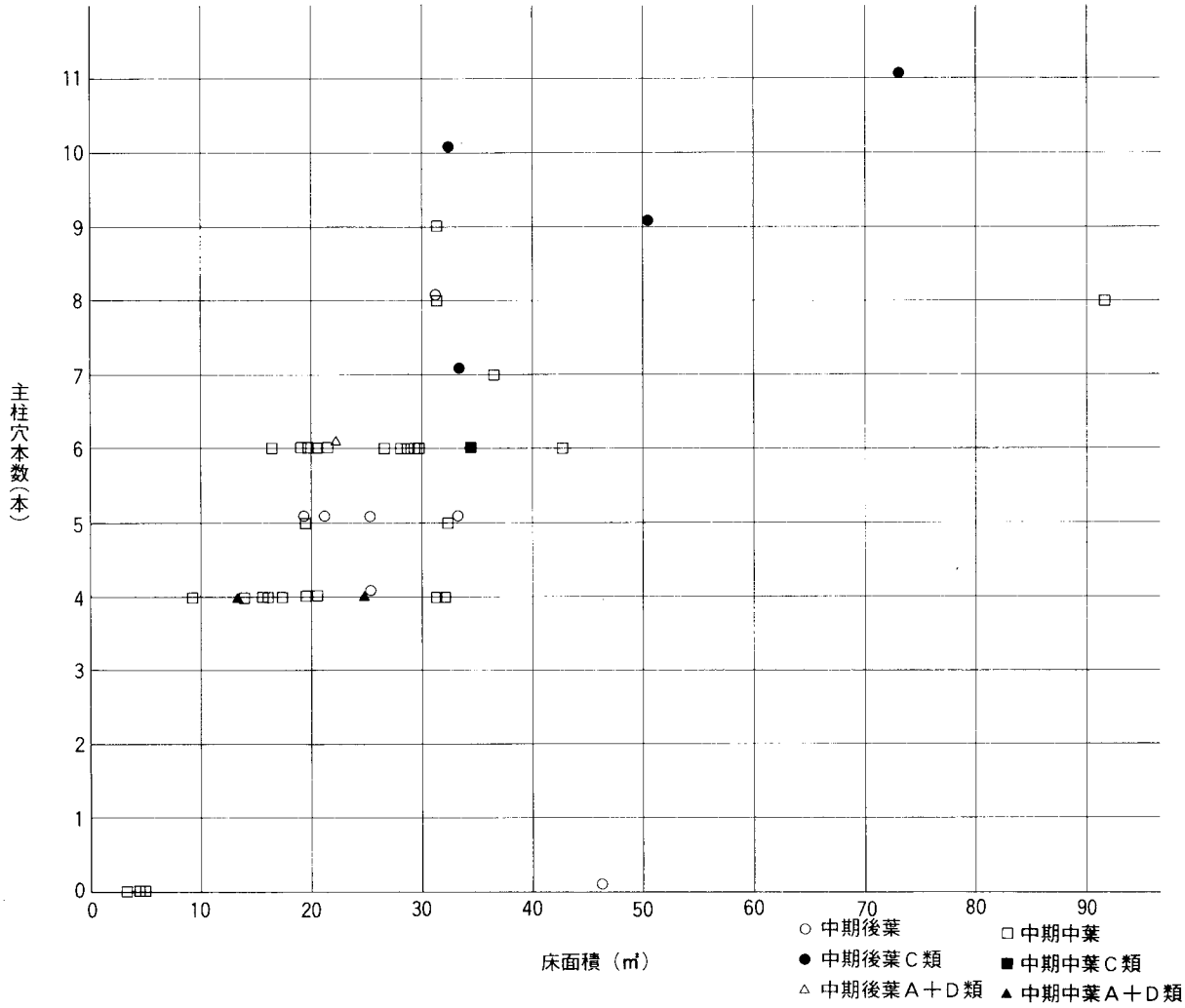
第100図　床面積変遷図

割近くを占めるようになる。

以上をまとめると，共通点として，後葉において10㎡以下の小型住居が出現することにある。いずれも主柱穴を持たず，宮本氏の類型における伏屋A式竪穴住居の延長上のものか（宮本1998），土蔵的な壁建式住居と考えられる。相違点としては，20～30㎡と40㎡以上の規模の竪穴住居の在り方である。前者は丸亀平野では後葉になると激減し，高松平野では逆に増加する。後者は丸亀平野では減少しながらも一定量確認できるが，高松平野では未確認である。今後資料数が増加してもこの傾向は大きくは変動しないと考えられる。この背景には掘立柱建物の居住施設への利用が想定できるが，検討するまでには至っていない。なお，中期中葉から後葉のかけて床面積が顕著に増大するという現象は認められない。

床面積と主柱穴配置の関係

第101図に床面積と主柱穴本数の相関図を示した。これによると，中期中葉段階には主柱穴本数を増やすことにより，床面積を増大させていることが窺える。多角形の主柱穴配置に加え，二柱穴を有するいわゆる「松菊里型住居」（中間1987）の系譜が想定されている主柱穴配置C類の住居は中型～大型住居で採用されており，二柱穴を除く主柱穴本数は7～11本と多い。これらの住居はいずれも各主柱穴本数のなかで，最大規模の床面積を有し，加えて柱穴の重複関係や中央土坑との関係から，建て替えにより床面積を拡大した際に，新たに導入された可能性が高いと想定できる。



第101図　床面積と主柱穴本数の相関図

一方，後葉には四本と六本主柱穴が大半を占め，それに伴う床面積も固定化する。C類の主柱穴配置の可能性が高い竪穴住居は当該期にも１例確認でき，その床面積は６本柱穴のなかでは最大規模に属し，中葉段階のものと同様の傾向が認められる。また，後葉から出現する10㎡以下の住居は明確な主柱穴配置を持たないE類に該当する。

平面形態分類と主柱穴配置の関係

平面形態分類と主柱穴配置分類の相関図を弥生時代中期中葉と後葉に分け，第６・７表に示した。表中の（　）内の数値は各時期の総数に占める割合である。以下その変遷と地域性について考えたい。

中期中葉においては，平面形態分類のV類が４割，Ⅶ類が５割を占め，ほぼこの二者に限定される。Ⅶ類は平地式住居の可能性も否定できないが，削平による竪穴住居掘方の消失と考えられ，後葉段階と比較すると，中期中葉段階における掘方深度は浅いものであったと想定できる。Ⅶ類の床面積は不明であるが，主柱穴内面積から比較すると大半はV類に該当し，浴・長池Ⅱ遺跡ＳＨ02・04に限りⅥ類に位置付けることが可能である。一方，主柱穴配置はB類が半数以上を占め，C類が25％と高い比率を示し，一部ではあるが，四柱穴配置の住居も認められる。

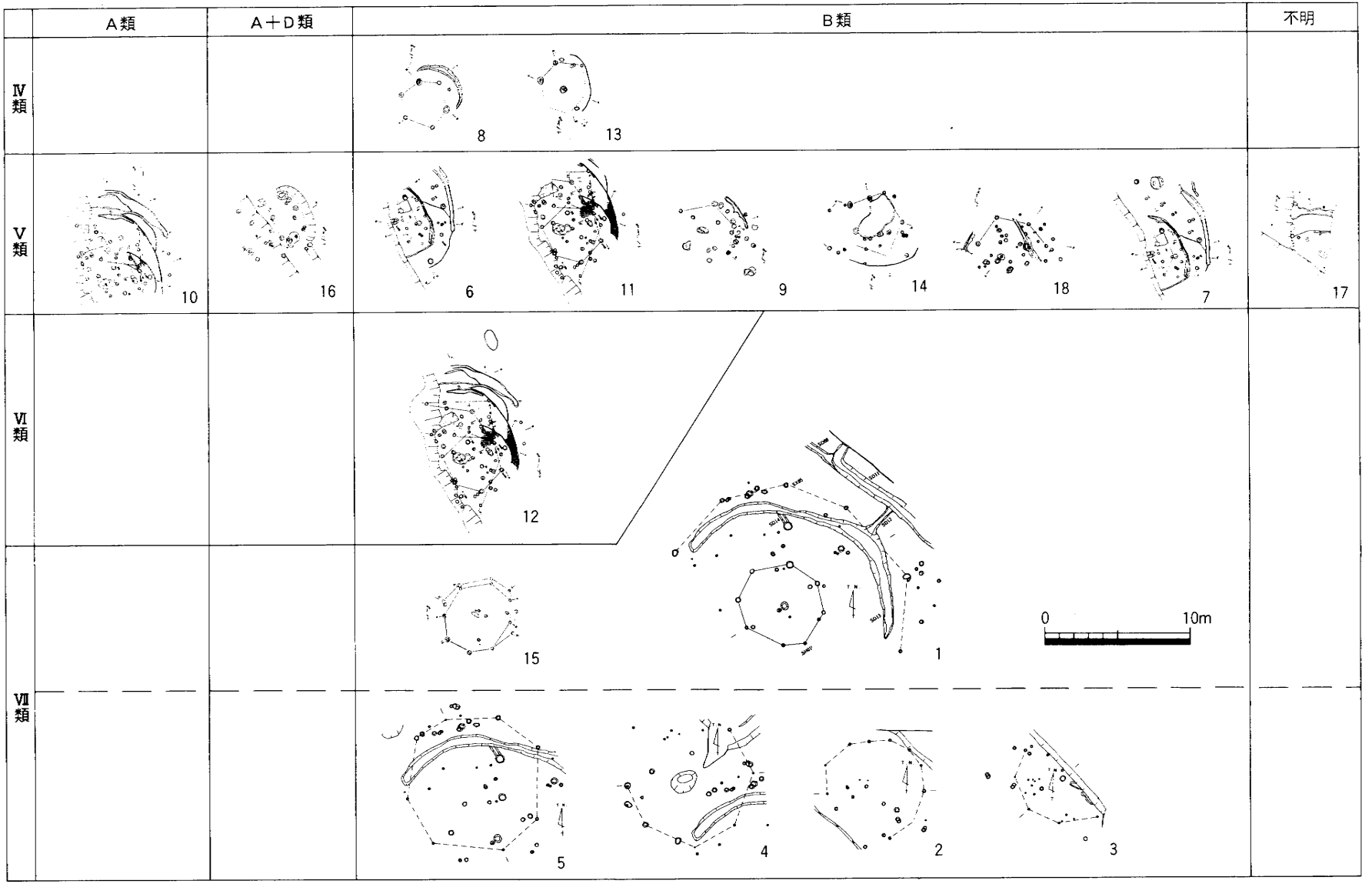
平面形分類と主柱穴配置を組み合わせた分類によると，中期中葉段階には中型円形の平面形に多角形の主柱穴配置を有するV－B類と，「松菊里型住居」との関連を想起させるV－C類を軸に竪穴住居は展開していることが窺える。

主柱穴配置 / 形態分類	A　類	A＋D類	B　類	C　類	E　類	不　明	計
Ⅰ　類	0	0	0	0	0	1(3.6)	1(3.6)
Ⅱ　類	0	0	0	0	0	0	0
Ⅲ　類	0	0	0	0	1(3.6)	0	1(3.6)
Ⅳ　類	0	0	0	0	0	0	0
Ⅴ　類	1(3.6)	1(3.6)	5(17.8)	2(7.1)	0	2(7.1)	11(39.2)
Ⅵ　類	0	0	0	1(3.6)	0	0	1(3.6)
Ⅶ　類	0	0	10(35.7)	4(14.3)	0	0	14(50.0)
計	1(3.6)	1(3.6)	15(53.5)	7(25.0)	1(3.6)	3(10.7)	28(100.0)

第６表　弥生時代中期中葉における竪穴住居平面形態分類と主柱穴配置相関表

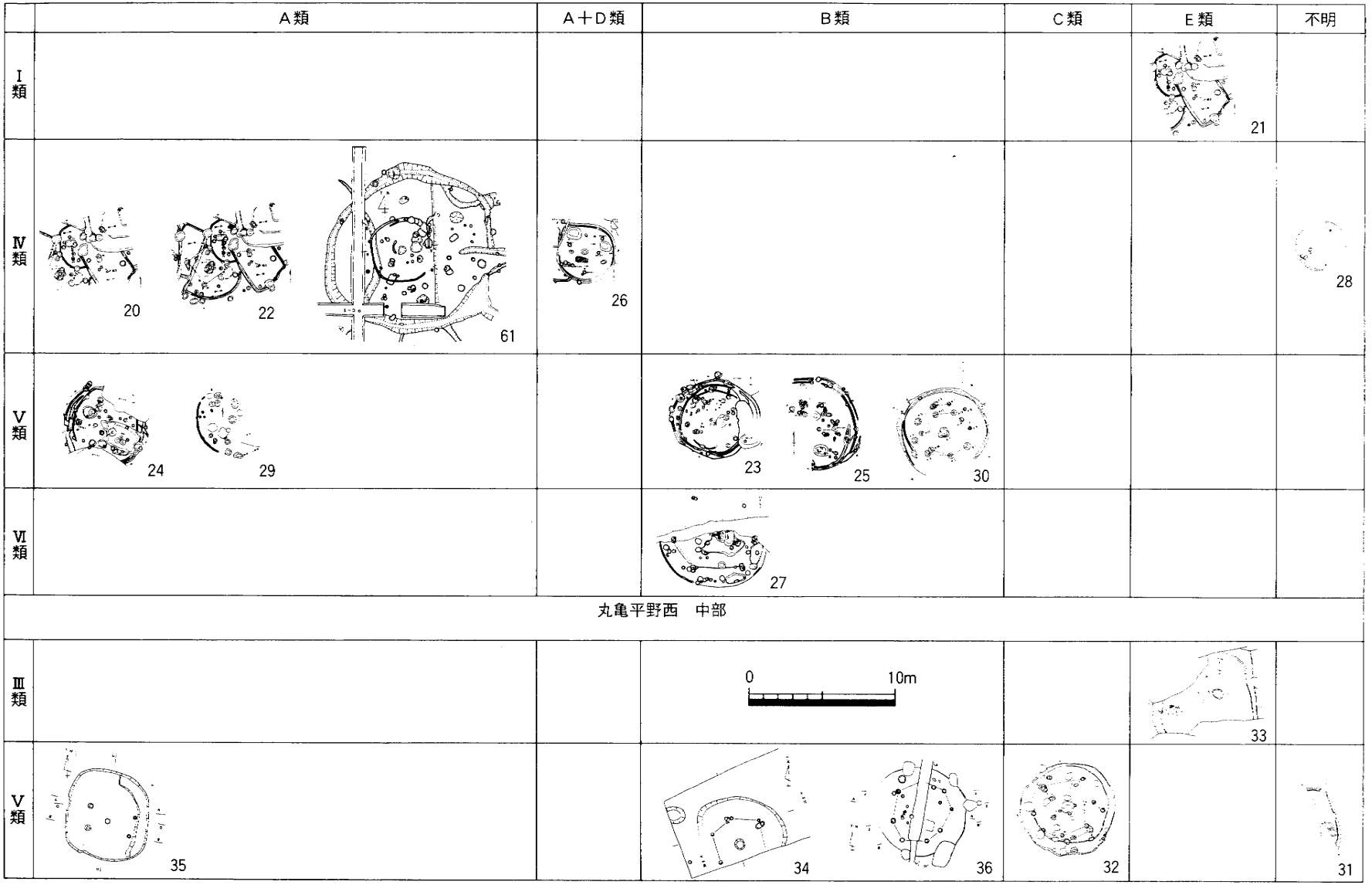
主柱穴配置 / 形態分類	A　類	A＋D類	B　類	C　類	E　類	不　明	計
Ⅰ　類	1(2.0)	0	0	0	4(8.2)	0	5(10.2)
Ⅱ　類	1(2.0)	0	0	0	0	0	1(2.0)
Ⅲ　類	0	0	0	0	0	0	0
Ⅳ　類	6(12.3)	1(2.0)	2(4.1)	0	0	1(2.0)	10(20.4)
Ⅴ　類	6(12.3)	1(2.0)	16(32.7)	1(2.0)	0	1(2.0)	25(51.0)
Ⅵ　類	0	0	2(4.1)	0	0	0	2(4.1)
Ⅶ　類	0	0	6(12.3)	0	0	0	6(12.3)
計	14(28.6)	2(4.0)	26(53.2)	1(2.0)	4(8.2)	2(4.0)	49(100.0)

第７表　弥生時代中期後葉における竪穴住居平面形態分類と主柱穴配置相関表

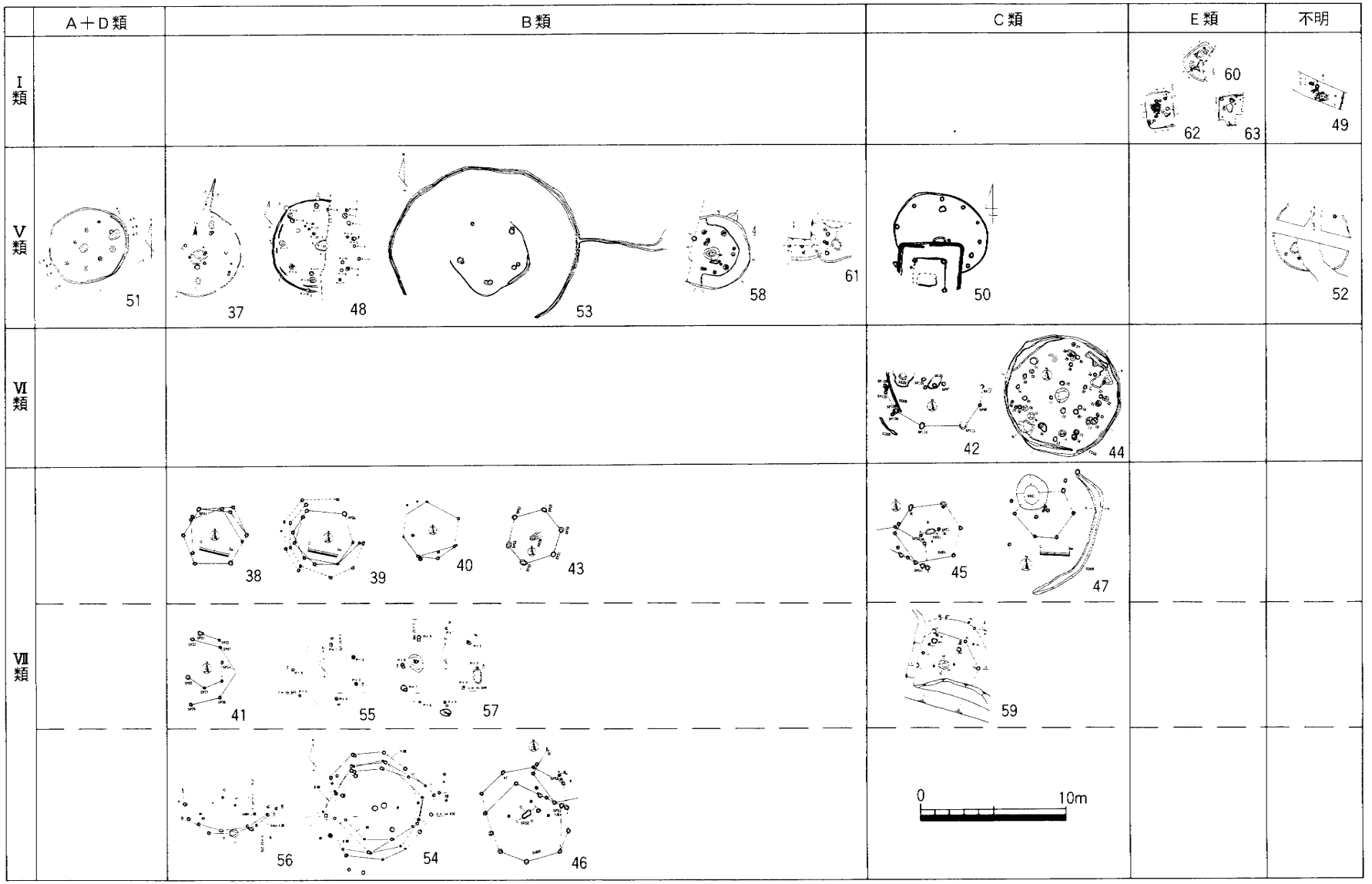


三豊

第102図　竪穴住居分類図１（Ｓ＝１／400,番号は第９・10表に対応）

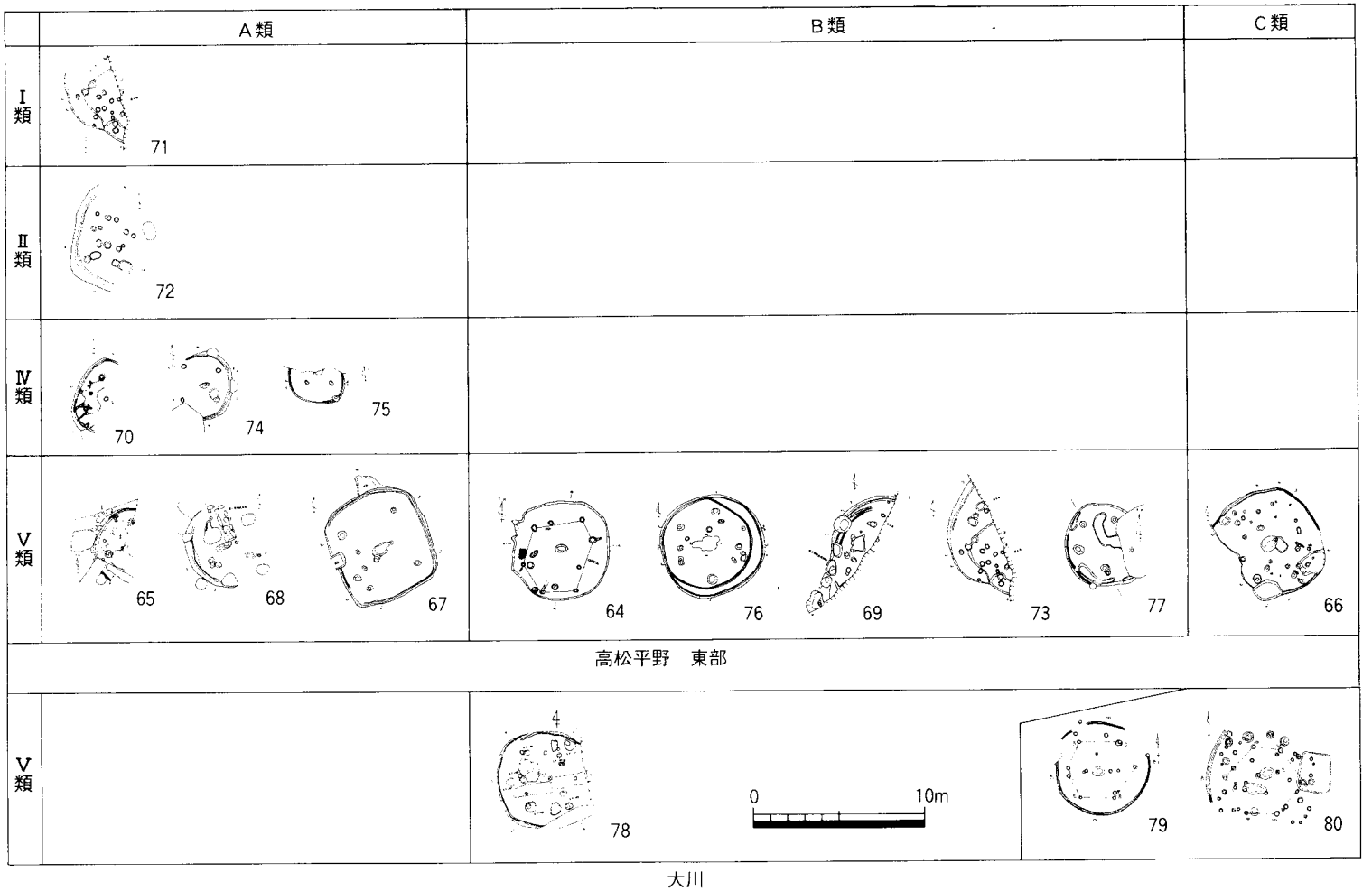


第103図　竪穴住居分類図２（Ｓ＝１／400，番号は第９・10表に対応）



高松平野　中部

第104図　竪穴住居分類図３（Ｓ＝１／400，番号は第９・10表に対応）



第105図　竪穴住居分類図４（Ｓ＝１／400，番号は第９・10表に対応）

中期後葉にはⅤ類は5割を越え，中葉同様に主体を占め，Ⅳ類が2割，Ⅰ類が1割の比率で認められる。Ⅶ類に分類した6例のなかで，長佐古遺跡の5例はⅥ類に該当するため，Ⅵ類は15%まで割合を上げることになる。主柱穴配置はB類が主体を占め，A類が3割程度確認できる。

形態分類と主柱穴配置の相関関係では，Ⅴ－B類が32%を測り，Ⅵ－B・Ⅳ－A・Ⅴ－Aが10%を上回る数値となる。

以上の結果から中期中葉から後葉への変遷をまとめると，平面形態分類は共にⅤ類を軸に展開しているが，後葉にはⅠ・Ⅳ類の比率が上がり，逆にⅥ類が減少する。主柱穴配置は両時期とも弥生時代前期からの伝統である多角形配置（B類）が5割以上を占めるが，中葉のC類は後葉には激減し，後葉には四柱穴（A類）が増加する。C類の主柱穴配置は「松菊里型住居」（北牟田住居(2)，石野1990）との関連が指摘できるが，二柱穴を有する竪穴住居は古墳時代にも確認でき，方形小型住居で用いられことが多く，二柱穴で屋根を支えることが可能であることを示している。讃岐地方のC類配置の竪穴住居が柱穴や中央土坑の重複関係から建て替えによる住居拡張時に新たに二柱穴を用い，C類配置にしたことが窺える。つまり，「松菊里型住居」という範疇で捉えられるものではなく，拡張時に屋根組を支えるために用いられた可能性が考えられるのである。推測の域をでないことであるが，今後検証していく必要がある。また，A類の主柱穴配置の中期後葉における増加は，弥生時代後期的な住居の一部導入が測られたと理解できる。

次に地域別，なかでも丸亀平野と高松平野に主眼をおいて検討する。丸亀平野は平面形態分類ではⅤ類が半数，Ⅳ類が1／4程度を占め，Ⅰ・Ⅲ・Ⅵ類が1例確認できる。主柱穴配置ではA・B類が1／3前後の比率を測り，無柱穴（E類）も1割程度認められる。中期中葉から後葉への変遷を見ると，平面形は後葉段階にⅤ類の相対的比率が下がり，Ⅳ類が大きく増加する傾向が窺え，主柱穴配置に関しては，B類の減少とA類の主体的な採用が行われている。資料数が少なく，実態を正確に反映しているとは言い難いが，その傾向に大きな変動はないと考えられる。一方，高松平野は平面形態分類ではⅦ類の大半がⅤ類に分類できることにより，その比率はかなり高くなる。主柱穴配置はB類が半数を占めるが，A・C類も20%前後認められる。中期中葉から後葉への変化としては，平面形ではⅥ類の消滅とⅠ類の増加，主柱穴配置ではA類の増加とB・C類の減少が窺える。

両地域の弥生時代中期竪穴住居の特徴を上記のように想定したが，次にその共通性と差異を考えたい。まず共通性であるが，平面形態分類ではⅤ類が半数以上を占める点が容易に考えられるが，この現象は当該期や両地域に限ったことではなく，普遍的に認められるものであり，比較の対象にはならないと考える。主柱穴配置では，B類が主体を占めることが窺える。讃岐地方における弥生時代前期の住居を見ると，龍川五条遺跡，鴨部・川田遺跡などで円形柱穴列が確認されており，凸帯文期の林・坊城遺跡でも同様に検出できることから，当地方の伝統的な主柱穴配置と理解できる。また，A類の主柱穴配置の増加が中期後葉段階に両地域で共通して認められる点も重要である。方形平面形態のA類主柱穴配置は久米池南遺跡第6・7号竪穴住居で確認でき，中期後葉～末における導入が考えられる。

一方，差異を見ると，平面形態分類Ⅳ類が丸亀平野の中期後葉において4割に達するのに対し，高松平野では16%に留まる点に注目できる。また，床面積で示したように，高松平野では大型住居が後葉では消滅する。床面積が何を反映するかは明らかでないが，居住人員，「階層」，主柱穴配置との因果関係，建築技術等が想定できる。こうした背景には掘立柱建物との関係を考慮に入れ，集落内における位置関係や出土遺物から検討すべきであるが，今後の課題にしたい。

「10型中央土坑」について

Ⅳ区ＤＳＨ01は中央土坑に隣接して細長い形状で深度の浅い不明遺構を有する。埋土中に多量の炭化物を包含しており，中央土坑から炭化物や灰を掻き出した際に生じたものと理解していた。しかし，当地域において少数ではあるが類例が認められ，各報告書において炉跡と炭化物保管箇所，２基の炉跡といった評価がなされている。今回その集成・分類を行い，若干の検討を加えたい。

第106図にその分類を示した。土坑の形状や深度，埋土，互いの位置関係から大きく５分類し，それぞれ１～５類とした。１類は円形の深い土坑の南側に長楕円形の浅い土坑が位置するもので，両者に炭化物を包含する。２類はピット状の円形土坑の東側に長方形の土坑が位置し，前者の深度が後者を上回る。埋土は炭化物・焼土を両者に含み，前者には強い比熱が認められる。３類は円形の深い土坑の南側に長方形の浅い土坑が位置するもので，円形土坑は２類よりは大型である。埋土は共に炭化物・焼土を含む。４類は焼土化した埋土がほぼ円形を呈する浅い土坑の南側に方形の深い土坑が位置し，後者には炭化物が包含される。５類は円形土坑の南側に方形土坑が位置し，両者の深度は等しく，埋土中に焼土・炭化物が含まれる。

以上の分類を基に，第８表にその集成を行い，平面形との関係を重視し，竪穴住居全体の平面図を第107図にまとめた。集成では13遺跡・21例が確認され，未報告を含めると今後増加すると考えられるが，次に現時点におけるそれぞれの性格と他地域との関係を考えたい。

１類は中期後葉にのみ確認でき，後期初頭に一部確認できる。彼ノ宗遺跡ＳＴ19は焼土の広がりから，長惰円形土坑の想定を行ったため，積極的に評価することは難しい。この中央土坑を他地域に類例を求めると，播磨地方で広範に認められる「10型中央土坑」が挙げられる（多賀1996）。この集成を行った山下史郎氏によると，「10型中央土坑」は弥生時代中期後葉に出現し，中期段階にはほぼ播磨地方全域から三田盆地，丹波地域で確認でき，後期には北播磨から西播磨へ同地域内で分布範囲を狭めるが，一方で吉備（百間川兼基遺跡）にまで波及しているとされている（山下史1999）。１類を「10型中央土坑」と想定すると，松並・中所遺跡Ⅳ区ＤＳＨ01は時期的な問題はないが，分布範囲が播磨地方からは逸脱することになる。両地域の関係は弥生時代後期の土器が示すように強い繋がりが認められ，その関係は中期後葉にも遡ることは可能である。また，阿波では，中期後半段階において，「10型中央土坑」が確認されており（勝浦1993，近藤1998），瀬戸内海南側と北側での波及の差がみられる。こうした背景から，１類とした中央土坑は「10型中央土坑」の影響を考えることが可能である。なお，ここでは彼ノ宗遺跡ＳＴ19を１類と判断したが，播磨地域における弥生時代中期後葉の主柱穴配置にＡ＋Ｄ類が多く認められる点を重視し，１類と判断した。その性格は円形の深い土坑が調理に伴う燃焼施設，楕円形の浅い土坑が暖房に伴う施設と想定されている（多賀1996）。

２類は時期的には中期後葉と弥生時代終末に確認でき，現時点では亀平野西部以西で認められるものである。西側に位置する土坑をピット状の円形土坑と定義したが，この定義は弥生時代終末の２例には該当するが，中期後葉～後期前葉の２例をみると，ほぼ同規模の土坑が東西に位置しており，前述した定義には当てはまらない。ここでは２類を細分し，前者を２ａ類，後者を２ｂ類とする。２ａ類は西側の土坑が深く，竪穴住居のほぼ中央に位置している。弘田川西岸遺跡ＳＨ27，一の谷遺跡群ＳＢ306共にベット状遺構を有し，主柱穴配置もＢ類となり，共通性が認められる。２類の性格であるが，建て替えによるそれぞれの中央土坑という可能性も否定できないが，西側土坑を炉跡（灰穴炉，都出1989），東側土坑を炭化物ないし置き火の保管場所と想定したい。一方，２ｂ類の竪穴住居は一の谷遺跡群ＳＢ305

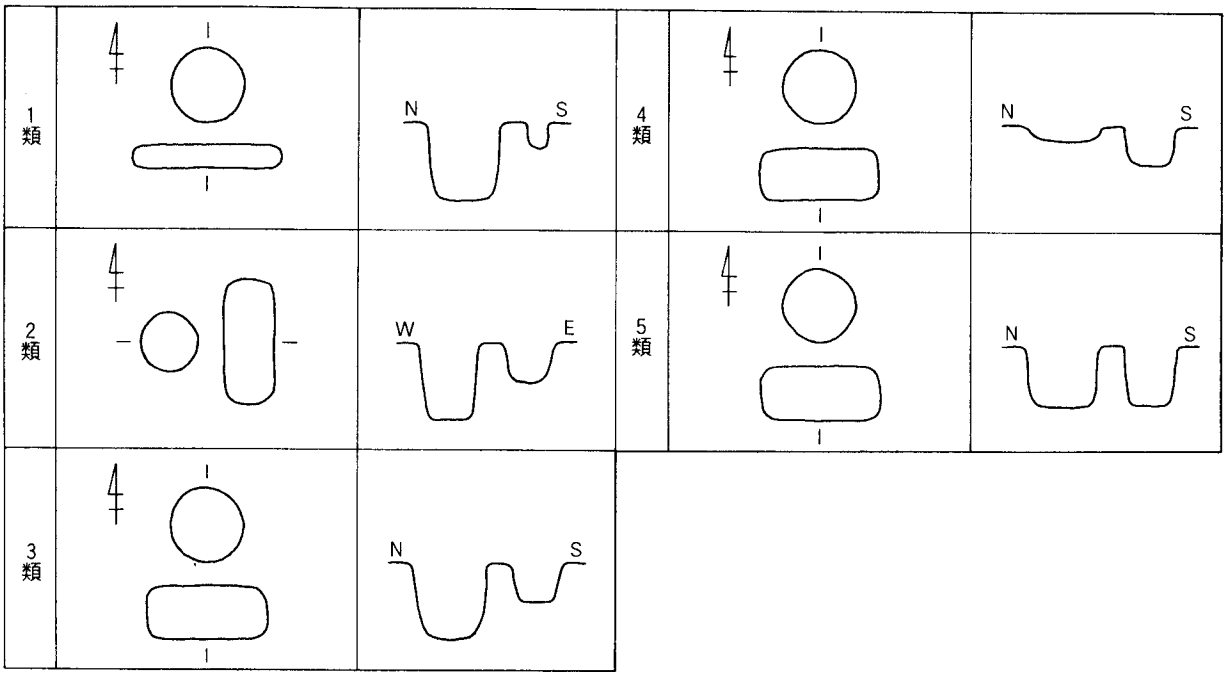
・309で確認でき，北側を中心に幅広の壁溝が弧状に掘削されるという共通性は認められるが，ＳＢ309はベット状遺構と主柱穴配置が示すように平面形は方形になる可能性が極めて高く，その共通性に関しては問題が残る。中央土坑は西側の円形土坑がほぼ中央に位置し，東側方形土坑に後出した重複関係を呈する。建て替えが行われ，東側土坑を構築時，西側円形土坑を建て替え時の炉跡と想定されている(西岡ほか1990)。２ｂ類とした中央土坑に関しては，東側中央土坑がピット状を呈する等不明な点が多く，現時点ではその性格は不明と言わざるを得ない。

３類は後期中葉と終末期，古墳時代初頭に認められ，ほぼ讃岐地方全域で確認されている。北側円形土坑がほぼ中心に位置し，灰穴炉と考えられる。南側に隣接する方形土坑は浅く，炭化物ないし置き火の保管場所であったと想定できる。なお，川津一ノ又遺跡ⅡＳＨ29は住居平面形や主柱穴配置から，４類になる可能性も否定できない。

４類は後期末～終末期にかけて確認でき，現時点では平面形は方形，主柱穴配置は四柱穴（Ａ類），ベット状遺構を有し，原中村遺跡ではすべて北側に張り出し部を有する等，住居を構成する各属性が共通しており，極めて斉一性の高い竪穴住居である。その分布を見ると，丸亀平野東部～高松平野を除く範囲で現状では確認できる。円形土坑は明確な掘方がなく，床面が焼土化しているものもあり，地床炉と考えられる。方形土坑は炭化物を有し，炉跡としての機能も想定可能であるが，地床炉との関係から炭化物・置き火の保管場所であったと考えられる。他地域に類例を求めると，大分県大分市周辺に地床炉と方形土坑がセットになる例が多く確認できる。(3) 小柳和宏氏によると，床面が焼土化し硬くなっているものと皿状の土坑に炭化物が層状，またある時は層をなさずに堆積している二通りの様相の炉が大野川上流域の弥生時代後期では一般的であるとされ，前者を焼土炉，後者を炭化物炉と仮称している(小柳1987)。一方，玉永光洋氏は「大分地域の竪穴中央に焼土炉を設け，その南側に炭化物が堆積する土壙を伴うのが基本型である。このような，竪穴の分布は，現在のところ大分市域（大分川や大野川下流域）と愛媛県の松山地方に見られ，田中祐介は松山地方の竪穴については，別府湾地域からの波及ではないかと想定している」とされている（玉永1992)。大分市域のこれらの竪穴住居と４類の中央土坑を有する竪穴住居を比較すると，ベット状遺構の存否や主柱穴配置に差異を見出せるが，中央土坑の様相は極めて酷似したものである。原中村遺跡の画一的な住居形態は，在地の竪穴住居系譜の延長上にあるとは考えられず，他地域からの影響が想定できる。同遺跡では漆付着土器が56点出土しており，報告者により，漆工に関連する用具として評価されており（木下2000)，遺跡の性格を含め検証していく必要がある。

５類は土坑深度の差異により３類と分けたが，３類と格差は認められない。北側に位置する円形土坑は灰穴炉，南側方形土坑は炭化物ないし置き火の保管場所と考えられる。いずれも弥生時代終末期に確認されるが，住居の平面形，主柱穴配置に共通性は認められない。現状では丸亀平野東部～高松平野中央部にかけて分布している。

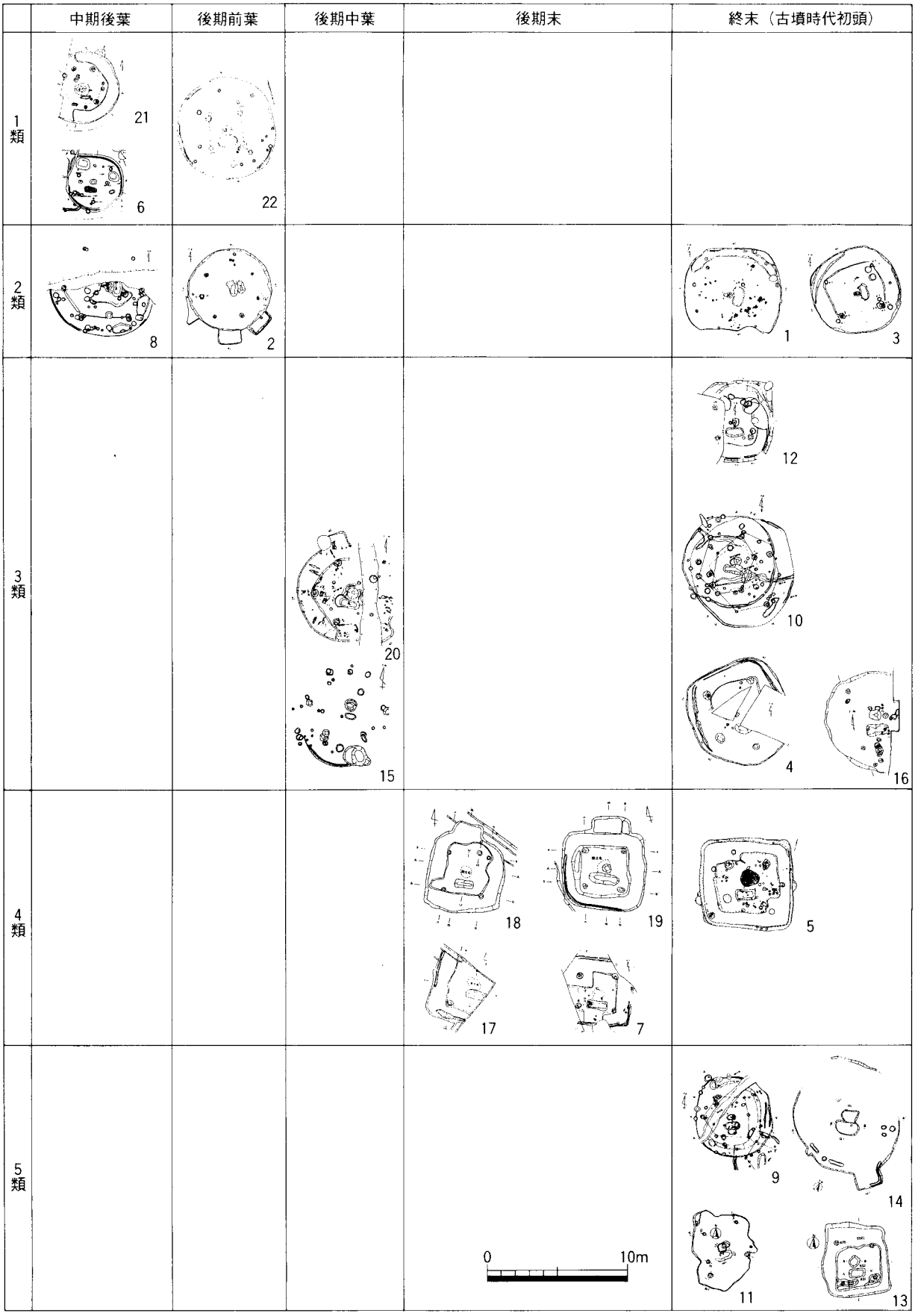
以上，２基の中央土坑を有する遺構を類型化し，それぞれに関して検討を加えた。１類は弥生時代中期後葉段階に播磨地方でみられる「10型中央土坑」，４類は弥生時代後期末～終末期段階に大分市域からの影響が考えられる。今回，その他の事象を用いた論の補強を行うことはできず，今後の課題であり，責務となった。



第106図　中央土坑分類模式図

	遺　跡　名	遺構名	所属時期	中央土坑	主柱穴配置	文　献
1	一の谷遺跡群	ＳＢ305	弥・終末？	2類	Ｂ類	西岡ほか1990
2		ＳＢ306	弥・後期前葉	2類	Ｂ類	
3		ＳＢ309	弥・終末	2類	Ａ類	
4		ＳＢ312	弥・終末～古･初	3類	Ｂ類	
5	南草木遺跡	住居跡	弥・終末	4類	Ａ類	松本ほか1980
6	彼ノ宗遺跡	ＳＴ19	弥・中期後葉	1類	Ａ＋Ｄ類	笹川1985
7	弘田川西岸遺跡	ＳＨ03	弥・後期終末	4類	Ａ類	片桐1996
8		ＳＨ27	弥・中期後葉？	2類	Ｂ類	
9	下川津遺跡	ＳＨⅡ20	弥・終末	5類	Ｂ類	藤好ほか1990
10		ＳＨⅡ25	弥・終末	3類	Ｂ類	
11	川津一ノ又遺跡Ⅰ	ＳＨ10	弥・終末？	5類	Ａ類	山下1997
12	川津一ノ又遺跡Ⅱ	ＳＨ29	弥・終末	3類	Ａ類	古野1998
13	多肥松林遺跡	ⅩⅡ区ＳＸ02	弥・後期～終末	5類	Ａ類	山下1999
14	空港跡地遺跡Ⅰ	ＳＨｃ04	弥・終末	5類	？	西岡ほか1996
15	小山・南谷遺跡	ＳＨ19	弥・後期中葉	3類	Ｂ類	片桐ほか1994
16	寺田・産宮通遺跡	ＳＨ04	古・前期初頭	3類	？	西村ほか1996
17	原中村遺跡	ＳＨ01	弥・後期終末	4類	Ａ類	木下2000
18		ＳＨ05	弥・後期終末	4類	Ａ類	
19		ＳＨ06	弥・後期終末	4類	Ａ類	
20	原間遺跡	ＳＨ06	弥・後期中葉	3類	Ｂ類	片桐ほか1998
21	松並・中所遺跡	Ⅳ区ＤＳＨ01	弥・中期後葉	1類	Ｂ類	本書

第８表　讃岐地方における２基の中央土坑（炉跡）を有する竪穴住居



第107図　中央土坑分類図（S＝1／400，番号は第8表に対応）

松並・中所遺跡で検出した竪穴住居の位置付け

前項までで弥生時代中期段階における高松平野と丸亀平野の地域性を中心とした讃岐地方の様相を検討し，さらに松並・中所遺跡Ⅳ区ＤＳＨ01で検出した２基の中央土坑を理解するために，当地方の２基の中央土坑を有する竪穴住居の集成を行い，検討を加えた。ここでは以上の検討を踏まえ，松並・中所遺跡で検出した竪穴住居他についてその位置付けを明らかにしたい。

竪穴住居は弥生時代中期中葉前半（前期前半末まで遡る可能性も否定できない）に属するＶ区ＳＨ01と中期後葉に属するⅣ区ＤＳＨ01，ＳＸ02がある。Ｖ区ＳＨ01は主柱穴配置からの床面積規模を想定すると，30㎡前後に推定でき，平面形態分類Ｖ類に該当する。主柱穴配置は多角形に配置されるが，中央土坑の両脇に二柱穴を有し，Ｃ類の配置になる。周辺の主柱穴本数は７本に復元できる点から，同時期に属する川津一ノ又遺跡ⅡＳＨ21とほぼ同一規模・プランであることが窺える。前述したように「松菊里型住居」として捉えるより，住居の拡張に伴う屋根組を支えるための施設であると想定した。一方で，同住居を検出したＶ区は，第５章第１節で検討した弥生時代前期前半末に開削された環濠の内側に位置し，ほぼ同時期の環濠集落である鴨部・川田遺跡（森1997）で検出された平地式「松菊里型住居」のＡ区ＳＨ01との関係が問題となる。現時点では出土遺物から中期中葉前半の所産と考えたい。

Ⅳ区ＤＳＨ01とＳＸ02は床面積は20㎡前後を測り，ほぼ同規模の竪穴住居である。高松平野では一般的な床面積を有し，多角形の主柱穴配置とともに同時期では主体的なものといえる。しかし，Ⅳ区ＤＳＨ01は多くの問題を提供する。中央土坑は前項で触れたように１類に分類でき，播磨地方で認められる「10型中央土坑」との関連が指摘できる。讃岐地方において，「10型中央土坑」の可能性が想定できる中央土坑は弥生時代中期後葉に位置付けられる彼ノ宗遺跡ＳＴ19のみであり，確認数は極めて少なく，今後資料数が増大しても大差はないと考えられる。また，松並・中所遺跡Ⅳ区ＤＳＨ01はベット状遺構を有するという大きな特徴がある。同時期の例を見ると，住居拡張に伴い生じたベット状遺構は数基確認できるが，確実な確認例はない。弥生時代後期前葉において，一部確認できるが，普遍化するのは終末期を待たなければならない。中期後葉における松並・中所遺跡Ⅳ区ＤＳＨ01は現時点では讃岐地方においては初現例と言え，今後資料の増加を待って再検討す余地が残る。

松並・中所遺跡では３基の10㎡以下の小型方形住居を検出し，柱穴の規則的な配置が認められない点から，無柱穴（Ｅ類）と判断した。上屋構造は推測の域を出ないが，前項で伏屋Ａ式竪穴住居の系譜を引くものか，壁立式住居を想定した。高松平野における弥生時代中期後葉の10㎡以下の比率を見ると，25％を測り，中期中葉から飛躍的な増加が認められる。その性格は不明であるが，Ⅳ区ＤＳＸ01では炭化物の包含が認められる長方形の中央土坑とその埋没後に開削された幅0.2m の長楕円形土坑を検出しており，中央土坑と冠することはできないが，「暖」を取ることを目的とした炉の可能性が指摘でき，貯蔵施設とは考えられない。その検出位置はＳＨ01に隣接し，Ｖ区ＳＸ01・02も同様に近い位置関係にあり，中型住居とともに集落を構成していたと考えられる。(4) 小型住居の分析を行った合田幸美氏は，その機能を貯蔵施設，竈屋，工房である明確な事例は少なく，多くは住居の可能性が高いと想定されている（合田1998)。松並・中所遺跡Ⅳ区ＤＳＸ01の中央土坑に炭化物を包含する点を重視すると，当遺跡で検出したⅣ区ＤＳＸ01，Ｖ区ＳＸ01・02は小型方形住居であったと考えられる。

以上，松並・中所遺跡で検出した竪穴住居，小型住居の位置付けを試みたが，明確な結論を導き出すことはできなかった。しかし，検討を通して多くの課題が明確になり，今後も継続的に検討していく必要がある。

	遺跡名	遺構名	形態分類	床面積	主柱穴配置	柱数	時期	文献	備考
1	長佐古遺跡	SH01	Ⅶ類	(25.5)	B類	8	中期後葉	磯崎他1988	周溝を有する，削平顕著
2		SX01	Ⅶ類	(38.46)	B類	10？	？		削平顕著
3		SX02	Ⅶ類	(33.16)	B類	？	？		削平顕著
4		SX03	Ⅶ類	(59.41)	B類	8？	？		削平顕著，SH01と重複関係
5		SX04	Ⅶ類	(70.84)	B類	8	？		削平顕著
6	平岡遺跡	SH01	Ⅴ類	19.62 (10.74)	B類	6？	中期後葉	片桐節1992A	
7		SH02	Ⅴ類	21.23 (10.74)	B類	6	中期後葉		周溝，垂木尻ピット列，焼失家屋
8		SH03	Ⅳ類	18.08 (8.03)	B類	6	中期後葉？		顕著な削平，鉄製刀子？
9		SH04	Ⅴ類	28.26 (15.19)	B類	6	中期後葉？		顕著な削平
10		SH05	Ⅴ類	19.63 (6.25)	A類	4	中期後葉		
11		SH06	Ⅴ類	21.23 (11.93)	B類	6	中期後葉		
12		SH07	Ⅵ類	91.56 (50.2)	B類	8	中期後葉		超大型住居，周溝を有する
13		SH08	Ⅳ類	16.61 (10.17)	B類	6？	中期後葉？		顕著な削平
14		SH09	Ⅴ類	32.15 (15.19)	B類	5	中期後葉？		大型中央土坑は攪乱坑
15		SH10	Ⅶ類	(20.41)	B類	8・9	中期後葉		顕著な削平，建て替え
16		SH11	Ⅴ類	24.61	A＋D類	4＋2	中期後葉		
17		SH12	Ⅴ類	32.15	？	？	中期後葉		大半は消失，周溝を有する
18	吉田遺跡	SH01(仮称)	Ⅴ類？	36.29 (22.89)	B類	7？	中期末	片桐節1992B	削平顕著，半分は消失
19	矢ノ塚遺跡	SB85000	Ⅳ類	15.89 (3.6)	A類	4	中期後葉～末	鷹田他1987	径12m前後の周溝を有する。周溝の内側にも柱穴列
20	旧練兵場遺跡（看護学校教場棟）	SH04	Ⅳ類	9.08 (2.7)	A類	4	中期後葉	森下1994	SH05・06と重複関係を有する
21		SH05	Ⅰb類	10.64	E類	0	中期後葉		
22		SH06	Ⅳ類	15.89 (4.0)	A類	4	中期後葉		中央土坑に炭層は含まれない
23	彼ノ宗遺跡	ST04	Ⅴ類	25.33 (17.34)	B類	5・6？	中期中葉	笹川1985	滑石製模造品
24		ST05	Ⅴ類	25.5 (6.24)	A類？	4？	中期中葉前半		重複関係ではST04に先行
25		ST08	Ⅴ類	33.17 (9.07)	B類	5？	中期中葉後半ないし中期後葉		扁平・柱状片刃石斧
26		ST19	Ⅳ類	13.19 (3.3)	A＋D類	4＋2	中期後葉		中央土坑は「10型中央土坑」の可能性を残す
27	弘田川西岸遺跡	SH27	Ⅵ類	42.99 (34.19)	B類	6	中期後葉？	片桐1996	後期後半まで下る可能性あり
28	仲村廃寺	SH22	Ⅳ類	9.07	？	？	中期後半	笹川1989	床面に顕著な削平
29		SH23	Ⅴ類	19.63 (6.72？)	A類？	4？	中期後半		削平顕著
30	北原遺跡	SH01	Ⅴ類	①23.74 (8.03) ②31.16 (11.93)	B類	①7②9	中期末～後期初	森下1995B	①→②への建て替え
31	川津一ノ又遺跡（大東川改修事業）	SH01	Ⅴ類？	推定23	？	？	中期中葉前半	片桐1997	全体の1　4程度検出
32	川津一ノ又遺跡（横断道）	SH21	Ⅴ類	①22.05 (8.03) ②33.17 (17.34)	①B類 ②C類	①6 ②7＋2	中期中葉前半	古野1998	①→②への建て替え
33		SH31	Ⅲb類	46.08	E類	0	中期中葉前半		床面の遺存状況は良好
34	陶畑遺跡	SH01	Ⅴ類	28.26 (11.33)	B類	6	中期後葉	片桐節1999	床面は砂層
35		SH02	Ⅴ類	32.15	A類	4	中期後葉		
36		SH03	Ⅴ類	31.16 (13.19)	B類	8	中期後葉		炭化米
37	正箱遺跡	SH01	Ⅴ類	27.32 (13.84)	B類	5	中期前葉	廣瀬他1994	排水溝を有する，焼失家屋
38	多肥松林遺跡	Ⅴ区SH01	Ⅶ類	(12.56)	B類	6・7	中期	山下1999	顕著な削平
39		Ⅴ区SH02	Ⅶ類	(12.56)	B類	7	中期		顕著な削平，主柱穴を円形柱穴列が取り巻く
40		Ⅴ区SH03	Ⅶ類	(12.56)	B類	6・7	中期		顕著な削平

第9表　讃岐地方弥生時代中期竪穴住居一覧1

	遺跡名	遺構名	形態分類	床面積	主柱穴配置	柱数	時期	文献	備考
41	多肥松林遺跡	V区SH05	Ⅶ類	(16.61)	B類	6・7	中期	山下1999	半径2.3mと1.3mの円周上に円形柱穴列が巡る
42		Ⅷ区SH01	Ⅵ類	73.86 (36.29)	C類	11?	中期		顕著な削平
43		Ⅷ区SH02	Ⅶ類	(12.56)	B類	6	中期		顕著な削平
44		Ⅸ区SH01	Ⅵ類	①47.76 (26.4) ②50.24 (28.26)	①B類 ②C類	①6 ②9+2	中期中葉後半		①→②への建て替え
45		X区SH01	Ⅶ類	(12.56)	C類	6+2	中期		削平顕著
46		X区SH02	Ⅶ類	(33.16)	B類	11	中期		削平顕著，内側にも柱穴列
47	Ⅻ区	Ⅻ区SH01	Ⅶ類	(12.56)	C類	6+2	中期?		東側のみ周溝を確認
48	日暮・松林遺跡	SH10	V類	31.15 (19.62)	B類	8	中期	山本他1997	顕著な削平
49	松林遺跡	SH204	I類?	10.89?	?	2?	中期中葉前半	大嶋他1996	一部の確認に留まる
50	凹原遺跡	SH01 (仮称)	V類	32.15 (24.61)	C類	10+2?	中期中葉	高松市教育委員会1992	焼失家屋，石器製作
51	谷・長池遺跡	SH01	V類	22.89 (6.2)	Ab類+D類	6+2	中期中葉	山元他1993	焼失家屋
52		SH02	V類	21.22	?	?	中期中葉		
53		SH04	V類	21.22	B類	5	中期中葉		平面形は隅丸方形気味周溝とそれに連続する排水溝
54	谷・長池Ⅱ遺跡	SH02	Ⅶ類	①(20.41) ②(30.17) ③(32.15) ④(40.69)	B類	①9 ②8 ③9 ④12	中期中葉頃	山元他1994	4回以上の建て替え，削平顕著
55		SH03	Ⅶ類	(13.84)	B類	8	中期中葉頃		削平顕著
56		SH04	Ⅶ類	(38.46)	B類	16?	中期中葉頃		建て替え，削平顕著
57		SH05	Ⅶ類	(19.62)	B類	9	中期中葉頃		建て替え，削平顕著
58	松並・中所遺跡	Ⅳ区DSH01	V類	20.41 (6.6)	B類	6	中期後葉	本書	「10型中央土坑」ベット状遺構を有する
59		V区SH01	Ⅶ類	(18.08)	C類	7+2	中期中葉前半?		前期まで遡る可能性が残る。半径3.2mの円周上に柱穴列
60		Ⅳ区DSX01	Ib類	4.8	E類	0	中期後葉		
61		Ⅳ区DSX02	V類	19.62 (8.03?)	B類?	?	中期後葉		1　5程度の検出に留まる
62		V区SX01	Ib類	5.0	E類	0	中期後葉		V区SX02と同時併存
63		V区SX02	Ib類	3.57	E類	0	中期後葉		
64	前田東・中村遺跡	F区SH01	V類	26.4 (15.19)	B類	6?	中期末～後期初	森他1995	焼失家屋
65	西浦谷遺跡 (三木町)	SH01	V類	20.41 (5.29?)	A類	4	中期後葉	石井1998	1　2のみ検出
66	久米池南遺跡	第1号 竪穴住居	V類	①(4.41) ②34.19 (14.51)	①A ②C類	①4 ②6+2	中期後葉～末	藤井他1989	①→②への建て替え
67		第2号	V類	31.19 (11.55)	Aa類	4	中期後葉～末		平面形は隅丸方形を呈する。外接双ピットの可能性が高い。
68		第3号	V類	20.41 (4.4?)	Aa類	4	中期後葉～末		外離双ピットの可能性が高い
69		第4号	V類	38.46 (24.61)	B類?	?	中期後葉		数度の建て替えが想定できる
70		第5号	Ⅳ類	17.34 (4.41?)	A類?	4?	中期後葉～末		主柱穴配置はA類+D類も想定可能
71		第6号	I類?	?	A類?	4?	中期後葉～末		1　3程度の検出
72		第7号	Ⅱ類?	?	A類?	4?	中期後葉～末		1　2程度の検出
73		第8号	V類	37.37 (16.61)	B類?	?	中期後葉～末		1　3程度の検出第6号に先行
74		第9号	Ⅳ類	13.19 (3.8)	Aa類	4	中期後葉～末		
75		第10号	Ⅳ類	9.61	Aa類	4	中期後葉～末		1　2程度の検出
76		第11号	V類	①23.74 (6.4) ②29.20 (12.56)	①Ab類 ②B類	①4 ②6	中期後葉～末		①→②への建て替え
77	鹿伏・中所遺跡	SH08	V類	19.62 (7.06)	B類	5	中期中葉前半	西村他1995	
78	極楽寺墳墓群	SH01	V類	29.2 (11.33)	B類	6	中期末	片桐節1998	焼失家屋，鉄製品（刀子?）

第10表　讃岐地方弥生時代中期竪穴住居一覧2

第４節　Ⅲ区Ｂ・ＣＳＤ01出土遺物組成について

Ⅲ区Ｂ・Ｃで検出したＳＤ01は直角に屈曲する屋敷地の区画溝で，12世紀末～13世紀前葉を中心とした時期に位置付けられる。検出面からの深度は0.2m以下と浅いが，比較的まとまった遺物量が出土しており，今回はその遺物組成を中心にまとめたい。

その方法は破片数計測を採り，各器種同定の差異を考慮して，口縁部と底部の破片数も合わせて計測した（個体識別法や口縁部計測法は行っていない）。組成に関しては全器種と供膳具の算出をそれぞれ行った。なお，表中の土師質土器不明は土師質土器小皿・坏・椀のいずれかに該当するものであり，煮沸具は含まない。瓦器椀・皿は瓦器皿の出土数が極めて少ないため，同項にまとめた。

第11表は出土した全器種における各器種の割合を算出したものである。全破片数計測では，供膳具が８割近くを占め，逆に煮沸具，貯蔵具が極端に少ない。土師質土器甕・鍋といった法量に比例した破片数の増大を差し引くための，口縁部破片数計測では煮沸具，貯蔵具の割合はさらに低くなる。こうした在り方は遺構の性格を反映していると考えられ，日常生活で使用した土器を投棄した状況とはやや異なる可能性が高い。

一方，供膳具のそれぞれの比率を求めたのが，第12表である。これによると，土師質土器の供膳具の割合が60％を測り，大多数を占めている。それを補完するように，瓦器椀・皿が25％，黒色土器が12％の割合で含まれ，瓦器椀比率の高さが目立つ。須恵器椀は２％前後と低く，黒色土器椀の優位性が認められる。また，吉備系土師器椀と輸入陶磁器は互いに１％以下であり，わずかな搬入といえる。

以上，遺物組成をまとめたが，他地域・他集落との比較・検討を行うことはできなかったが，遺物組成の検討は，集落や遺構の性格を考える上で有効な手段であり，今後も継続していく必要がある。

（補記）

校正中に長尾町陵遺跡において，弥生時代中期前半の竪穴住居２棟を確認した（阿河1999）。ＳＨ07は床面積22.89㎡，主柱穴内面積11.34㎡を測り，Ｃ類の主柱穴配置をとる。ＳＨ08は床面積・主柱穴内面積の算定し難いが，Ｃ類主柱穴配置による建て替えが想定できる。また，後期前半に属するＳＨ05の中央土坑は，第106図の分類の１類に該当し，いわゆる「10型中央土坑」である。

ＳＨ07・08は第９・10表の通し番号の最後である79・80，ＳＨ05は第８表の22を番号を与え，第105・107図に貼付した。

		全破片数計測		口縁部破片数計測		底部片数計測	
		破片数(点)	比率(%)	破片数(点)	比率(%)	破片数(点)	比率(%)
土師質土器	小Ⅲ	132	8.4	51	15.3	86	28.3
	坏	147	9.3	31	9.3	79	26.0
	椀	174	11.0	80	24.0	44	14.5
	甕	78	5.0	5	1.5	0	0
	鍋	220	14.0	23	6.9	0	0
土師質土器不明		289	18.3	39	11.7	17	5.6
吉備系土師器椀		7	0.4	0	0	5	1.6
黒色土器（A類）椀		149	9.5	27	8.1	29	9.5
須恵器	椀	18	1.1	5	1.5	7	2.3
	小Ⅲ	2	0.1	1	0.3	2	0.7
	甕・壷	34	2.2	4	1.2	1	0.3
	鉢	13	0.8	3	0.9	4	1.3
瓦器椀・Ⅲ		299	19.0	57	17.1	28	9.2
白磁	碗	6	0.4	3	0.9	1	0.3
	Ⅲ	1	0.1	1	0.3	0	0
青磁碗		2	0.1	1	0.3	0	0
東播系捏鉢		4	0.3	3	0.9	1	0.3
		1,575	100	334	100	304	100

第11表　松並・中所遺跡Ⅲ区Ｂ・ＣＳＤ01出土遺物組成表１

		供膳具全破片数計測		供膳具口縁部破片数計		供膳具底部破片数計測	
		破片数(点)	比率(%)	破片数(点)測	比率(%)	破片数(点)	比率(%)
土師質土器	小Ⅲ	132	10.8	51	17.2	86	28.9
	坏	147	11.9	31	10.5	79	26.5
	椀	174	14.2	80	27.0	44	14.8
土師質土器不明		289	23.6	39	13.2	17	5.7
吉備系土師器椀		7	0.6	0	0	5	1.7
黒色土器（A類）椀		149	12.2	27	9.1	29	9.7
須恵器	椀	18	1.5	5	1.7	7	2.3
	小Ⅲ	2	0.2	1	0.3	2	0.7
瓦器椀・Ⅲ		299	24.4	57	19.3	28	9.4
白磁	碗	6	0.5	3	1.0	1	0.3
	Ⅲ	1	0.1	1	0.3	0	0
青磁碗		2	0.2	1	0.3	0	0
計		1,226	100	296	100	298	100

第12表　松並・中所遺跡Ⅲ区Ｂ・ＣＳＤ01出土遺物組成表２

註釈

(1) 片桐孝浩氏のご教示による。

片桐孝浩1997「讃岐の土師器」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要Ⅴ　特集7世紀の讃岐』㈶香川県埋蔵文化財調査センター

(2) 同書補記にて，「松菊里型」と改称したとされている。

(3) 藤好史郎氏のご教示による。

(4) 40㎡を越える大型住居は高松平野では中期後葉段階には確認できず，掘立柱建物がそれに代わる大型居住施設であったと考えられ，松並・中所遺跡では未確認であるが，掘立柱建物と中型住居，小型住居により集落を構成していたと推測できる。

主要参考・引用文献

阿河鋭二1999『陵遺跡』長尾町教育委員会

石井健一1998『三木町内遺跡発掘調査報告書　平成9年度国庫補助事業報告書　西浦谷遺跡』三木町教育委員会

石野博信1990「西日本における弥生中期の2つの住居型」『日本原始・古代住居の研究』吉川弘文館

磯崎寛ほか1988『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第5冊　長佐古遺跡』香川県教育委員会ほか

大久保徹也ほか1995『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第6冊　上天神遺跡』㈶香川県埋蔵文化財調査センターほか

大久保徹也1996『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第25冊　中間西井坪遺跡Ⅰ』㈶香川県埋蔵文化財調査センターほか

大嶋和則ほか1996『香川県立高松市桜井高校周辺通学路整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　松林遺跡』高松市教育委員会

岡田博ほか1988「亀山遺跡」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査　3』岡山県教育委員会ほか

尾上　実1983「南河内の瓦器椀」『藤澤一夫先生古稀記念論集　古文化論叢』

金田章裕1989「条理と村落生活」『香川県史1　原始・古代』香川県

片桐節子1992A『平岡遺跡群発掘調査報告書』大野原町教育委員会

片桐節子1992B『吉田古墳発掘調査報告書』財田町教育委員会

片桐節子1998『極楽寺墳墓群　－寒川町上水道浄水場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』寒川町教育委員会

片桐節子1999『陶畑遺跡発掘調査報告書』綾南町教育委員会

片桐孝浩1990「古代から中世にかけての土器様相－香川県における予察－」『中近世土器の基礎研究Ⅵ』日本中世土器研究会

片桐孝浩1992「古代から中世にけけての土器様相」『中小河川大束川改修工事（津の郷橋～弘光橋間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　川津元結木遺跡』㈶香川県埋蔵文化財調査センターほか

片桐孝浩ほか1994『県道高松志度線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　小山・南谷遺跡　平成5年度』香川県教育委員会ほか

片桐孝浩1996『弘田川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　弘田川西岸遺跡　平成7年度』香川県教育

委員会ほか
片桐孝浩1997『中小河川大束川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　川津一ノ又遺跡』香川県教育委員会ほか
勝浦康守1993「各東遺跡発掘調査概要－マンション建設工事に伴う発掘調査－」『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要３』徳島市教育委員会
川野正雄・武田明監修1989「坂田郷」『香川県の地名』日本歴史地名体系38
北野隆亮1999「和歌山平野における火打石の流通」『紀伊考古学研究第２号』　紀伊考古学研究会
木戸雅寿1993「石鍋の生産と流通について」『中近世土器の基礎研究Ⅸ』日本中近世土器研究会
木下晴一2000『県道高松志度線緊急整備工事および県立医療短期大学建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　原中村遺跡』香川県教育委員会ほか
蔵本晋司1994「香川県における古墳時代中期群小墳小考」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要Ⅱ』財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
蔵本晋司1997『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第２冊　空港跡地遺跡Ⅱ』㈶香川県埋蔵文化財調査センターほか
蔵本晋司1999Ａ『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第32冊　中間西井坪遺跡Ⅱ』㈶香川県埋蔵文化財調査センターほか
蔵本晋司1999Ｂ『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第33冊　川津川西遺跡・飯野一本松遺跡』香川県教育委員会ほか
合田幸美1998「小形住居について」『網干善教古稀記念　考古学論集』
小林行雄・佐原眞1964『紫雲出』詫間町文化財保護委員会
薦田耕作ほか1987『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第３冊　矢ノ塚遺跡』㈶香川県埋蔵文化財調査センターほか
小柳和宏1987「竪穴」『菅生台地と周辺の遺跡ＸⅡ　大分県竹田地区遺跡群発掘調査報告　内河野遺跡板井尾遺跡』竹田市教育委員会
近藤　玲1998「矢野遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報』Vol.9　1997年度　徳島県埋蔵文化財センター
笹川龍一1985『彼ノ宗遺跡　～弘田川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告～』善通寺市教育委員会
笹川龍一1989『仲村廃寺　～旧練兵場遺跡における埋蔵文化財確認調査報告書～』善通寺市教育委員会
佐藤竜馬1993「香川県十瓶山窯跡群における須恵器編年」『関西大学考古学研究室開設40周年記念　考古学論叢』
佐藤竜馬1996『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第19冊　綾南奥下池南遺跡』㈶香川県埋蔵文化財調査センターほか
佐藤竜馬1998「十瓶山窯と亀山窯」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要Ⅵ』㈶香川県埋蔵文化財調査センター
佐藤竜馬2000『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第４冊　空港跡地遺跡Ⅳ』㈶香川県埋蔵文化財調査センターほか
白神典之1992「堺擂鉢考」『東洋陶磁　第19号』

多賀茂治1996「玉津田中遺跡の竪穴住居について」『玉津田中遺跡　第6分冊』兵庫県教育委員会
高橋　学1992「高松平野の地形環境」『讃岐国弘福寺領の調査』高松市教育委員会
高松市教育委員会1973『石清尾山塊古墳群調査報告書』
高松市教育委員会1983『鶴尾神社4号墳調査報告書』
高松市教育委員会1985『南山浦古墳群調査報告書』
高松市教育委員会1992『讃岐国弘福寺領の調査』
高松市歴史資料館1994『高松平野の考古学のあけぼの　～小竹一郎旧蔵資料展～』
高松市教育委員会　1999　『讃岐国弘福寺領の調査Ⅱ』
玉永光洋1992「遺構・集落について」『菅生台地と周辺の遺跡ＸＶ　大分県竹田地区遺跡群発掘調査報告　石井入口遺跡　石井入口北遺跡』竹田市教育委員会
都出比呂志1989「竪穴式住居の平面形」『日本農耕社会の成立過程』岩波書店
中間研志1987「松菊里型住居－我国稲作農耕受容期における竪穴住居の研究－」『東アジアの考古と歴史（中）岡崎敬先生退官記念論集』同朋社出版
西岡達哉ほか1990『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第7冊　一の谷遺跡群』香川県教育委員会ほか
西岡達哉ほか1996『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第1冊　空港跡地遺跡Ⅰ』香川県教育委員会ほか
西村尋文ほか1995『高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　鹿伏・中所遺跡　平成6年度』香川県教育委員会ほか
西村尋文ほか1996「寺田・産宮通遺跡」『県道関係埋蔵文化財発掘調査概報　平成7年度』香川県教育委員会ほか
信里芳紀2000「北四国における弥生文化の成立」『第47回　埋蔵文化財研究集会　弥生文化の成立－各地域における弥生文化成立期の具体像－』
乗岡　実1999「近世備前焼の擂鉢」『関西近世考古学研究　Ⅶ』関西近世考古学研究会
橋本久和1980「中世土器研究予察」『高槻市文化財調査報告書　第13冊　上牧遺跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会
平井　勝1994『弥生時代の石器』考古学ライブラリー
廣瀬常雄ほか1994『県道山崎御厩線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　正箱・薬王寺遺跡』香川県教育委員会ほか
藤井雄三ほか1989『久米池南遺跡発掘調査報告書』高松市教育委員会
藤好史郎ほか1990『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ下川津遺跡』香川県教育委員会ほか
古野徳久1998『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第30冊　川津一ノ又遺跡Ⅱ』香川県教育委員会ほか
松本豊胤ほか1980『仁尾町・南草木遺跡調査報告』香川県教育委員会
宮本長二朗1998「日本の竪穴住居」『浅川滋男編　先史日本の住居とその周辺』同成社
森　格也ほか1995『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第3冊　前田東・中村遺跡』香川県教育委員会ほか
森　格也1997『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第7冊　鴨部・川田遺跡Ⅰ』㈶香川県

埋蔵文化財調査センターほか
森下英治・信里芳紀1998「讃岐地方における弥生土器の基準資料Ⅰ－下川津遺跡出土弥生土器を中心に－」『財団法人香川県埋蔵文化財研究紀要Ⅵ』㈶香川県埋蔵文化財調査センター
森下英治1994『旧練兵場遺跡－平成５年度国立善通寺病院内発掘調査報告－』香川県教育委員会
森下英治1995Ａ「瀬戸内の大陸系磨製石器」『月刊考古学ジャーナル　No391』ニュー・サイエンス社
森下英治1995Ｂ『北原３号墳　北原遺跡』香川県教育委員会
森下英治1997「丸亀平野の条理型地割の考古学的検討」『財団法人香川県埋蔵文化財研究紀要Ⅴ』㈶香川県埋蔵文化財調査センター
森下英治1998『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第29冊　龍川五条遺跡・飯野東分山崎南遺跡』㈶香川県埋蔵文化財調査センターほか
森下英治1999「讃岐地方における弥生時代中期集落の機能と構造について」『古代学協会四国支部第13回大会資料　瀬戸内の弥生中期集落－その機能と構造の研究－』
森下友子1998『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第３冊　空港跡地遺跡Ⅲ』㈶香川県埋蔵文化財調査センターほか
森島康雄1992「畿内産瓦器椀の併行関係と歴年代」『大和古中近研究会研究資料Ⅱ　大和の中世土器Ⅱ－大和型瓦器椀とその周辺－』大和古中近研究会
山下史郎ほか1999『龍野市清水遺跡』兵庫県教育委員会
山下平重1997『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第26冊　川津一ノ又遺跡Ⅰ』香川県教育委員会ほか
山下平重1999『高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第１冊　多肥松林遺跡』㈶香川県埋蔵文化財調査センターほか
山仲　進1989「東播系中世須恵器の分類と編年試案」『神出』妙見山麓遺跡調査会
山本悦代1993「吉備系土師器椀の成立と展開」『岡山大学校内遺跡発掘調査報告書　第６冊　鹿田遺跡３』岡山大学埋蔵文化財研究センター
山本悦代1997「岡山南部における土師器鍋の変遷」『岡山大学校内遺跡発掘調査報告書　第11冊　鹿田遺跡４』岡山大学埋蔵文化財研究センター
山元敏裕ほか1993『一般国道11号線高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第１冊　浴・長池遺跡』高松市教育委員会
山元敏裕ほか1994『一般国道11号線高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第３冊　浴・長池Ⅱ遺跡』高松市教育委員会
山元敏裕ほか1995『一般国道11号線高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第５冊　井手東Ⅰ遺跡』高松市教育委員会
山元敏裕ほか1995『一般国道11号線高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第６冊　井手東Ⅱ遺跡』高松市教育委員会
山本英之1997『都市計画道路福岡多肥上町線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　日暮・松林遺跡』高松市教育委員会
横田賢次朗・森田勉1978「太宰府出土の貿易陶磁」『九州歴史資料館研究論集４』

松並・中所遺跡柱穴一覧表

出土遺構	出土遺物	時期	埋土類型
Ⅱ区ＡＳＰ01	なし	－	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 02	土・小，土・椀，土質，瓦・椀	12Ｃ末～13Ｃ初	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 03	瓦・椀	13Ｃ前葉	ⅡＡ
Ⅱ区Ａ 04	土・小，土・坏，瓦・椀	13Ｃ前葉	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 05	なし	－	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 06	なし	－	ⅡＡ
Ⅱ区Ａ 07	なし	－	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 08	土質，瓦・椀	13Ｃ前葉	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 09	なし	－	ⅡＡ
Ⅱ区Ａ 10	土・小，土・坏，土質，瓦・椀	13Ｃ前葉	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 11	土質，瓦・椀，黒・椀	13Ｃ前葉	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 12	土・小，土質，須・椀	?	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 13	なし	－	ⅡＡ
Ⅱ区Ａ 14	なし	－	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 15	土質，瓦・椀	?	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 16	土・小，土質，瓦・椀	13Ｃ前葉	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 17	土・小，土質	?	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 18	土・小，土質，須・椀	13Ｃ前葉	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 19	なし	－	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 20	なし	－	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 21	土質，瓦・椀	13Ｃ前葉	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 22	なし	－	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 23	土・小，土・坏	?	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 24	なし	－	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 25	なし・	－	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 26	土・小	?	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 27	土・小，土・鍋，土質	13Ｃ前葉	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 28	土・小，土質，須・椀，瓦・椀	12Ｃ末～13Ｃ初	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 29	土・小，土質	?	ⅡＡ
Ⅱ区Ａ 30	土質，瓦・椀	13Ｃ前葉	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 31	なし	－	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 32	なし	－	ⅡＡ
Ⅱ区Ａ 33	土・鍋	?	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 34	土・鍋，土質	13Ｃ前葉	ⅡＡ
Ⅱ区Ａ 35	なし	－	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 36	なし	－	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 37	なし	－	ⅡＡ
Ⅱ区Ａ 38	土・鍋	?	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 39	なし	－	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 40	土・坏，土・鍋，瓦・椀	12Ｃ末～13Ｃ初	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 41	土質	?	ⅡＡ
Ⅱ区Ａ 42	土・小	13Ｃ前葉	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 43	土・小，土質，瓦・椀，黒・椀	13Ｃ前葉	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 44	瓦・椀	12Ｃ末～13Ｃ初	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 45	土・小，土・鍋，土質	?	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 46	なし	－	ⅡＡ
Ⅱ区Ａ 47	なし	－	ⅡＡ
Ⅱ区Ａ 48	なし	－	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 49	土・小	?	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 50	なし	－	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 51	土・小，土質，瓦・椀	?	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 52	土・椀	?	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 53	土・坏	－	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 54	土・小，土・鍋，土質	?	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 55	土・小，土・坏，土・鍋，瓦・椀	13Ｃ前葉	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 56	土質，瓦・椀	13Ｃ前葉	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 57	土質，瓦・椀，亀山？	12Ｃ末～13Ｃ初	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 58	なし	－	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 59	土・小，土・鍋，土質	?	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 60	土質	－	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 61	土質	?	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 62	土質	?	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 63	なし	－	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 64	なし	－	
Ⅱ区Ａ 65	土・小，土・坏	?	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 66	なし	－	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 67	なし	－	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 68	なし	－	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 69	土・小，土・坏，土・鍋	12Ｃ末～13Ｃ初	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 70	土・小，土質，須・椀，瓦・椀	13Ｃ前葉	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 71	土・小，土・鍋，瓦・椀	13Ｃ前葉	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 72	なし	－	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 73	土質，瓦・椀	12Ｃ末～13Ｃ初	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 74	瓦・椀	13Ｃ前葉	ⅡＢ
Ⅱ区Ａ 75	弥生？	?	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 76	土・小，土・鍋	?	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 77	なし	－	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 78	土・小・坏，土・鍋，須・椀，瓦・椀	12Ｃ末～13Ｃ初	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 79	瓦・椀	?	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 80	瓦・椀	13Ｃ前葉	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 81	土・小，土質，瓦・椀	13Ｃ前葉	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 82	土・小，須・椀	13Ｃ前葉	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 83	土質，須・椀，瓦・椀	13Ｃ前葉	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 84	瓦・椀	?	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 85	なし	－	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 86	土質，瓦・椀	?	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 87	土・小，瓦・椀	13Ｃ前葉	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 88	土質	?	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 89	土・甕，須・椀	12Ｃ末～13Ｃ初	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 90	なし	－	ⅡＡ
Ⅱ区Ａ 91	なし	－	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 92	なし	－	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 93	なし	－	ⅡＡ
Ⅱ区Ａ 94	土・鍋，須・椀，瓦・椀	13Ｃ前葉	ⅡＡ
Ⅱ区Ａ 95	なし	－	ⅡＡ
Ⅱ区Ａ 96	なし	－	ⅡＡ
Ⅱ区Ａ 97	土・小，土・鍋	?	ⅡＡ
Ⅱ区Ａ 98	なし	－	ⅡＣ
Ⅱ区Ａ 99	土・鍋，土質，瓦・椀	13Ｃ前葉	ⅡＢ
Ⅱ区Ａ 101	なし	－	ⅡＡ
Ⅱ区Ａ 102	土・小，瓦・椀	13Ｃ前葉	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 103	なし	－	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 104	なし	－	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 105	土・坏，吉備	?	ⅡＡ
Ⅱ区Ａ 106	土・小，土・坏，土・鍋，土質	?	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 107	土・小，土・坏	?	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 108	なし	－	ⅡＢ
Ⅱ区Ａ 109	なし	－	ⅡＢ
Ⅱ区Ａ 110	なし	－	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 111	なし	－	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 112	なし	－	ⅡＡ
Ⅱ区Ａ 113	土・鍋	?	ⅡＡ
Ⅱ区Ａ 114	なし	－	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 115	なし	－	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 116	瓦・椀	?	ⅡＡ
Ⅱ区Ａ 117	なし	－	ⅡＡ
Ⅱ区Ａ 118	なし	－	ⅡＡ
Ⅱ区Ａ 119	なし	－	ⅡＡ
Ⅱ区Ａ 120	なし	－	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 121	なし	－	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 122	なし	－	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 123	なし	－	ⅡＡ
Ⅱ区Ａ 124	なし	－	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 125	なし	－	ⅡＡ
Ⅱ区Ａ 126	なし	－	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 127	なし	－	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 128	須・鉢	?	ⅡＡ
Ⅱ区Ａ 129	土・椀，須・椀，瓦・椀	?	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 130	なし	－	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 131	土・小	?	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 132	瓦・椀	13Ｃ前葉	Ⅰ
Ⅱ区Ａ 133	なし	－	Ⅰ
Ⅱ区Ｂ 01	なし	－	Ⅰ
Ⅱ区Ｂ 02	なし	－	Ⅰ
Ⅱ区Ｂ 03	土質	?	Ⅰ
Ⅱ区Ｂ 04	土質，須・椀，瓦・椀	?	Ⅰ
Ⅱ区Ｂ 05	土・小，土・坏，土質	?	Ⅰ
Ⅱ区Ｂ 06	土・坏，土質，瓦・椀	13Ｃ前葉	Ⅰ
Ⅱ区Ｂ 07	土質	?	Ⅰ
Ⅱ区Ｂ 08	土・小，土・鍋，土質，瓦・椀	?	Ⅰ
Ⅱ区Ｂ 09	なし	－	Ⅰ
Ⅱ区Ｂ 10	土・小，須・椀，瓦・椀	12Ｃ末～13Ｃ初	Ⅰ
Ⅱ区Ｂ 11	土質	?	Ⅰ
Ⅱ区Ｂ 12	瓦・椀	?	Ⅰ
Ⅱ区Ｂ 13	土・甕	?	Ⅰ
Ⅱ区Ｂ 14	土・小，土質	?	Ⅰ
Ⅱ区Ｂ 15	なし	－	ⅡＡ
Ⅱ区Ｂ 16	なし	－	ⅡＡ
Ⅱ区Ｂ 17	土質，須・椀	12Ｃ末～13Ｃ初	Ⅰ
Ⅱ区Ｂ 18	なし	－	Ⅰ
Ⅱ区Ｂ 19	土・小，土質	?	Ⅰ
Ⅱ区Ｂ 20	土・小，土質，瓦・椀，青磁	?	Ⅰ
Ⅱ区Ｂ 21	土・小・坏，土・鍋，須・椀，瓦・椀	13Ｃ前葉	Ⅰ
Ⅱ区Ｂ 22	土・小，土質，瓦・椀	12Ｃ末～13Ｃ初	Ⅰ
Ⅱ区Ｂ 23	土・小，土質，須・椀	?	Ⅰ
Ⅱ区Ｂ 24	土・小，土質	12Ｃ末～13Ｃ初	Ⅰ

第13表　柱穴一覧１

出土遺構	出土遺物	時期	埋土類型
Ⅱ区B 25	土質，須・甕	?	Ⅰ
Ⅱ区B 26	土・小，土・鍋，土質	?	Ⅰ
Ⅱ区B 27	土質，瓦・椀	?	Ⅰ
Ⅱ区B 28	土・小	?	Ⅰ
Ⅱ区B 29	瓦・椀	?	Ⅰ
Ⅱ区B 30	なし	−	Ⅰ
Ⅱ区B 31	土・小・鍋，須・椀，吉備，亀山	13C前葉	Ⅰ
Ⅱ区B 32	なし	?	Ⅰ
Ⅱ区B 33	甕質	?	Ⅰ
Ⅱ区B 34	土・小，土質	?	Ⅰ
Ⅱ区B 35	土質	?	Ⅰ
Ⅱ区B 36	土・小	?	Ⅰ
Ⅱ区B 37	土・小	?	Ⅰ
Ⅱ区B 38	なし	−	Ⅰ
Ⅱ区B 39	土質	?	Ⅰ
Ⅱ区B 40	土・小，土・坏，土質，須・椀	13C前葉	Ⅰ
Ⅱ区B 41	土・小，土質	?	Ⅰ
Ⅱ区B 42	土・小，土・坏，土質，瓦・椀	?	Ⅰ
Ⅱ区B 43	土・小，土・坏，土質，須・椀	13C前葉	Ⅰ
Ⅱ区B 44	土・椀，土・鍋	?	Ⅰ
Ⅱ区B 45	土・小，土・鍋，瓦・椀	12C末〜13C初	Ⅰ
Ⅱ区B 46	なし	−	Ⅰ
Ⅱ区B 47	土・小	?	Ⅰ
Ⅱ区B 48	なし	−	Ⅰ
Ⅱ区B 49	土・坏，土質，吉備	13C前葉	Ⅰ
Ⅱ区B 50	なし	−	Ⅰ
Ⅱ区B 51	土・小	?	Ⅰ
Ⅱ区B 52	土・小	?	Ⅰ
Ⅱ区B 53	土・坏，須・甕	?	Ⅰ
Ⅱ区B 54			Ⅰ
Ⅱ区B 55	土質，瓦・椀	?	Ⅰ
Ⅱ区B 56	土質	?	Ⅰ
Ⅱ区B 57	なし	−	Ⅰ
Ⅱ区B 58	なし	−	Ⅰ
Ⅱ区B 59	土・小，土・坏，土質	?	Ⅰ
Ⅱ区B 60	なし	−	Ⅰ
Ⅱ区B 61	なし	−	Ⅰ
Ⅱ区B 62	なし	−	ⅡA
Ⅱ区B 63	なし	−	Ⅰ
Ⅱ区B 64	なし	−	Ⅰ
Ⅱ区B 65	土・坏，土質	12C末〜13C初	Ⅰ
Ⅱ区B 66	土・小	12C末〜13C初	Ⅰ
Ⅱ区B 67	なし	−	Ⅰ
Ⅱ区B 68	土質	?	Ⅰ
Ⅱ区B 69	土質	?	ⅡA
Ⅱ区B 70	なし	−	Ⅰ
Ⅱ区B 71	土・小，須・甕	?	Ⅰ
Ⅱ区B 72	なし	−	Ⅰ
Ⅱ区B 73	土・小，土・坏，須・椀，瓦・椀	12C末〜13C初	Ⅰ
Ⅱ区B 74	土・小，土質	?	Ⅰ
Ⅱ区B 75	土質	13C前葉	Ⅰ
Ⅱ区B 76	なし	−	Ⅰ
Ⅱ区B 77	なし	−	Ⅰ
Ⅱ区B 78	土・小，土・鍋	13C前葉	Ⅰ
Ⅱ区B 79	土・小，土質，須・鉢	12C末〜13C前葉	Ⅰ
Ⅱ区B 80	土・鍋	?	Ⅰ
Ⅱ区B 81	なし	−	Ⅰ
Ⅱ区B 82	土質	?	Ⅰ
Ⅱ区B 83	土・椀	?	Ⅰ
Ⅱ区B 84	なし	−	Ⅰ
Ⅱ区B 85	なし	−	Ⅰ
Ⅱ区B 86	土・坏	?	Ⅰ
Ⅱ区B 87	土質	?	Ⅰ
Ⅱ区B 88	土質	?	Ⅰ
Ⅱ区B 89	なし	−	Ⅰ
Ⅱ区B 90	須・椀	?	Ⅰ
Ⅱ区B 91	土・坏	?	Ⅰ
Ⅱ区B 92	なし	−	Ⅰ
Ⅱ区B 93	土・小，須・甕	12C末〜13C初	Ⅰ
Ⅱ区B 94	土質	?	Ⅰ
Ⅱ区B 95	なし	−	Ⅰ
Ⅱ区B 96	なし	−	Ⅰ
Ⅱ区B 97	土質，瓦・椀	?	Ⅰ
Ⅱ区B 98	なし	−	Ⅰ
Ⅱ区B 99	なし	−	ⅡA
Ⅱ区B 100	土・小，土・鍋	?	Ⅰ
Ⅱ区B 101	土・坏	?	Ⅰ
Ⅱ区B 102	なし	−	
Ⅱ区B 103	土・小，土質，瓦・椀	13C前葉	Ⅰ
Ⅱ区B 104	土・小，土質，瓦・椀	13C前葉	Ⅰ
Ⅱ区B 105	なし	−	Ⅰ
Ⅱ区B 106	土・小，土・坏，土・鍋，瓦・椀	12C末〜13C初	Ⅰ
Ⅱ区B 107	土・小，土・鍋，土質，須・椀	?	ⅡA
Ⅱ区B 108	なし	−	Ⅰ
Ⅱ区B 109	土・小，黒・椀	?	Ⅰ
Ⅱ区B 110	なし	−	Ⅰ
Ⅱ区B 111	なし	−	Ⅰ
Ⅱ区B 112	土・鍋，瓦・椀	?	Ⅰ
Ⅱ区B 113	なし	−	ⅡA
Ⅱ区B 114	土・鍋，土質，瓦・椀	?	Ⅰ
Ⅱ区B 115	土・鍋	?	Ⅰ
Ⅱ区B 116	なし	−	Ⅰ
Ⅱ区B 117	土・小，土・鍋，土質，瓦・椀	?	Ⅰ
Ⅱ区B 118	なし	−	Ⅰ
Ⅱ区B 119	土・小	?	Ⅰ
Ⅱ区B 120	土・小	?	Ⅰ
Ⅱ区B 121	なし	−	Ⅰ
Ⅱ区B 122	土・坏	?	ⅡA
Ⅱ区B 123	土・鍋，土・坏	?	Ⅰ
Ⅱ区B 124	なし	−	Ⅰ
Ⅱ区B 125	土・椀	?	Ⅰ
Ⅱ区B 126	土・鍋，土質，瓦・椀	?	Ⅰ
Ⅱ区B 127	なし	−	Ⅰ
Ⅱ区B 128	なし	−	Ⅰ
Ⅱ区B 129	土・小，土質，土・甕	?	Ⅰ
Ⅱ区B 130	土・坏	?	Ⅰ
Ⅱ区B 131	土・鍋，土質，瓦・椀，黒・椀	12C末〜13C初	Ⅰ
Ⅱ区B 132	土・坏，瓦・椀	13C前葉	Ⅰ
Ⅱ区B 133	なし	−	Ⅰ
Ⅱ区B 134	なし	−	Ⅰ
Ⅱ区B 135	瓦・椀	?	Ⅰ
Ⅱ区B 136	土・小	?	Ⅰ
Ⅱ区B 137	土質，瓦・椀	13C前葉	Ⅰ
Ⅱ区B 138	土・小	?	Ⅰ
Ⅱ区B 139	土・小，土・椀，土質	13C前葉	Ⅰ
Ⅱ区B 140	なし	−	Ⅰ
Ⅱ区B 141	なし	−	Ⅰ
Ⅱ区B 142	土・甕	?	Ⅰ
Ⅱ区B 143	なし	−	Ⅰ
Ⅱ区B 144	土・小，土質，不明	?	ⅡA
Ⅱ区B 145	土・小，土・甕，瓦	?	Ⅰ
Ⅱ区B 146	土・小	?	Ⅰ
Ⅱ区B 147	なし	−	Ⅰ
Ⅱ区B 148	土・小	?	ⅡA
Ⅱ区B 149	なし	−	Ⅰ
Ⅱ区B 150	土・小	?	Ⅰ
Ⅱ区B 151	土・鍋	?	Ⅰ
Ⅱ区B 152	土・小，瓦・椀	?	Ⅰ
Ⅱ区B 153	土質，瓦・椀	?	Ⅰ
Ⅱ区B 154	土・小，土質	?	ⅡA
Ⅱ区B 155	土・椀，土質	?	Ⅰ
Ⅱ区B 156	土質	?	Ⅰ
Ⅱ区B 157	土質	?	Ⅰ
Ⅱ区B 158	土・坏，瓦・椀，須・甕	13C前葉	Ⅰ
Ⅱ区B 159	なし	−	ⅡA
Ⅱ区B 160	瓦・椀	13C前葉	Ⅰ
Ⅱ区B 161	土・小・鍋，瓦・椀，須・甕，吉備	12C末〜13C初	Ⅰ
Ⅱ区B 162	土・甕，須・甕	?	Ⅰ
Ⅱ区B 163	土・鍋	?	ⅡA
Ⅱ区B 164	なし	−	Ⅰ
Ⅱ区B 165	なし	−	Ⅰ
Ⅱ区B 166	なし	−	ⅡA
Ⅱ区B 167	なし	−	Ⅰ
Ⅱ区B 168	なし	−	Ⅰ
Ⅱ区B 169	なし	−	Ⅰ
Ⅱ区B 170	土・小，土・甕	?	Ⅰ
Ⅱ区B 171	なし	−	Ⅰ
Ⅱ区B 172	土・小，土質	?	Ⅰ
Ⅱ区B 173	なし	−	Ⅰ
Ⅱ区B 174	土・鍋	?	Ⅰ
Ⅱ区B 176	なし	−	Ⅰ
Ⅱ区B 177	なし	−	ⅡA
Ⅱ区B 178	土・小	?	ⅡA
Ⅱ区B 179	なし	−	Ⅰ
Ⅱ区B 180	土質，瓦・椀	13C前葉	Ⅰ
Ⅱ区B 181	土・小	?	Ⅰ

第14表　柱穴一覧 2

出土遺構	出土遺物	時期	埋土類型
Ⅱ区B 182	土・小，土質	?	Ⅰ
Ⅱ区B 183	なし	−	ⅡA
Ⅱ区B 184	土・小，須・甕	?	Ⅰ
Ⅱ区B 185	なし	−	ⅡA
Ⅱ区B 186	土・鍋	?	Ⅰ
Ⅱ区B 187	なし	−	Ⅰ
Ⅱ区B 188	なし	−	Ⅰ
Ⅱ区B 189	なし	−	Ⅰ
Ⅱ区B 190	須・椀	?	Ⅰ
Ⅱ区B 191	土・小	?	Ⅰ
Ⅱ区B 192	土質，不明陶器	近世	ⅡA
Ⅱ区B 193	土質，須・椀	13C前葉	Ⅰ
Ⅱ区B 194	土質	?	Ⅰ
Ⅱ区B 195	須・椀	?	Ⅰ
Ⅱ区B 196	なし	−	Ⅰ
Ⅱ区B 197	土・小，土・鍋	?	ⅡA
Ⅱ区B 198	土・小	?	ⅡA
Ⅱ区B 199	なし	−	Ⅰ
Ⅱ区B 200	なし	−	Ⅰ
Ⅱ区B 201	なし	−	Ⅰ
Ⅱ区B 202	なし	−	ⅡA
Ⅱ区B 203	土・小	?	Ⅰ
Ⅱ区C 01	なし	−	ⅡC
Ⅱ区C 02	なし	−	ⅡC
Ⅱ区C 03	なし・	−	ⅡC
Ⅱ区C 04	なし	−	ⅡC
Ⅱ区C 05	なし	−	ⅡC
Ⅱ区C 06	なし	−	ⅡC
Ⅱ区C 08	なし	−	ⅡC
Ⅱ区C 09	なし	−	ⅡC
Ⅱ区C 10	なし	−	ⅡC
Ⅱ区C 12	なし	−	ⅡC
Ⅱ区C 14	なし	−	ⅡC
Ⅱ区C 15	なし	−	Ⅰ
Ⅱ区C 18	なし	−	ⅡC
Ⅱ区C 19	なし	−	ⅡC
Ⅱ区C 20	なし	−	ⅡC
Ⅱ区C 21	なし	−	ⅡC
Ⅱ区C 22	なし	−	ⅡC
Ⅲ区A 01	なし	−	ⅡC
Ⅲ区A 02	なし	−	ⅡC
Ⅲ区A 03	なし	−	ⅡC
Ⅲ区A 04	なし	−	Ⅰ
Ⅲ区A 05	なし	−	Ⅰ
Ⅲ区A 06	瓦・椀	?	Ⅰ
Ⅲ区A 07	なし	−	Ⅰ
Ⅲ区A 08	なし	−	Ⅰ
Ⅲ区A 09	土・甕	?	Ⅰ
Ⅲ区A 10	なし	−	Ⅰ
Ⅲ区A 11	土・小	−	Ⅰ
Ⅲ区A 12	瓦・椀，黒・椀	12C末〜13C初	Ⅰ
Ⅲ区A 13	なし	−	Ⅰ
Ⅲ区A 14	なし	−	ⅡC
Ⅲ区A 15	なし	−	Ⅰ
Ⅲ区A 16	なし	−	Ⅰ
Ⅲ区A 17	土・鍋	?	Ⅰ
Ⅲ区A 18	なし	−	ⅡC
Ⅲ区A 19	なし	−	Ⅰ
Ⅲ区A 20	なし	−	Ⅰ
Ⅲ区A 21	土質，瓦・椀	?	ⅡC
Ⅲ区A 22	なし	−	ⅡC
Ⅲ区A 23	なし	−	ⅡC
Ⅲ区A 24	なし	−	ⅡC
Ⅲ区B 01	なし	−	Ⅰ
Ⅲ区B 02	なし	−	ⅡC
Ⅲ区B 03	なし	−	ⅡA
Ⅲ区B 05	鉄釘	?	Ⅲ
Ⅲ区B 06	なし	−	ⅡB
Ⅲ区B 07	なし	−	ⅡB
Ⅲ区B 08	なし	−	Ⅲ
Ⅲ区B 09	なし	−	ⅡB
Ⅲ区B 10	なし	−	ⅡB
Ⅲ区B 11	なし	−	ⅡB
Ⅲ区B 12	土・鍋，瓦・椀	?	ⅡB
Ⅲ区B 13		−	ⅡB
Ⅲ区B 14	土・小，土質，須・椀	13C前葉	ⅡB
Ⅲ区B 15	土質，黒・椀	?	ⅡB
Ⅲ区B 16	なし	−	ⅡB
Ⅲ区B 17	土・小	?	ⅡB
Ⅲ区B 18	なし	−	ⅡB
Ⅲ区B 19	なし	−	ⅡB
Ⅲ区B 20	土・小，土質，瓦・椀	13C前葉	ⅡB
Ⅲ区B 21	なし	−	ⅡB
Ⅲ区B 22	なし	−	ⅡB
Ⅲ区B 23	瓦・椀	13C前葉	ⅡB
Ⅲ区B 24	なし	−	ⅡB
Ⅲ区B 25	なし	−	ⅡB
Ⅲ区B 26	なし	−	ⅡB
Ⅲ区B 27	なし	−	ⅡB
Ⅲ区B 28	瓦・椀	13C前葉	ⅡB
Ⅲ区B 29	土・小	?	ⅡB
Ⅲ区B 30	土・椀，土質，瓦・椀	13C前葉	ⅡB
Ⅲ区B 31	なし	−	ⅡB
Ⅲ区B 32	土・甕	?	Ⅰ
Ⅲ区B 33	なし	−	ⅡB
Ⅲ区B 34	土・小	?	ⅡB
Ⅲ区B 35	土・小，土・鍋，瓦・椀	13C前葉	ⅡB
Ⅲ区B 36	なし	−	ⅡB
Ⅲ区B 37	黒・椀	13C前葉	ⅡB
Ⅲ区B 38	なし	−	ⅡB
Ⅲ区B 39	なし	−	ⅡA
Ⅲ区B 40	須・椀	?	ⅡB
Ⅲ区B 41	土・小，土・坏，須・椀，瓦・椀	13C前葉	ⅡB
Ⅲ区B 42	土・鍋，土質，黒・椀	?	ⅡB
Ⅲ区B 45	土・甕	?	ⅡB
Ⅲ区B 46	なし	−	ⅡB
Ⅲ区B 47	なし	−	ⅡB
Ⅲ区B 48	なし	−	ⅡB
Ⅲ区B 49	なし	−	ⅡB
Ⅲ区B 50	土・小	?	ⅡB
Ⅲ区B 51	土・小，土・甕	?	ⅡB
Ⅲ区B 52	土質，須・甕	?	ⅡB
Ⅲ区C 01	土・鍋	?	Ⅰ
Ⅲ区C 02	土・椀，須・椀・甕，瓦・椀，黒・椀	13C前葉	Ⅰ
Ⅲ区C 03	土・鍋，瓦・椀	13C前葉	Ⅰ
Ⅲ区C 04	土・鍋	?	Ⅰ
Ⅲ区C 05	なし	−	Ⅰ
Ⅲ区C 06	土質，瓦・椀，瓦・皿，黒・椀，青磁	13C前葉	Ⅰ
Ⅲ区C 07	土・椀，土・鍋，土質，須・椀	12C末〜13C前葉	Ⅰ
Ⅲ区C 08	土・鍋	?	Ⅰ
Ⅲ区C 09	土・鍋，土質，須・椀，黒・椀，石鍋	12C末〜13C初	Ⅰ
Ⅲ区C 10	土・鍋，土・甕，黒・椀	13C前葉	Ⅲ
Ⅲ区C 11	土質，瓦・椀，白磁，不明陶器，瓦	?	Ⅲ
Ⅲ区C 12	瓦・椀	12C末〜13C初	Ⅰ
Ⅲ区C 13	土質，瓦・椀，須・壷	12C末〜13C前葉	Ⅰ
Ⅲ区C 14	土・坏，土質，瓦・椀，黒・椀	12C末〜13C前葉	Ⅰ
Ⅲ区C 15	土・小，須・椀，瓦・椀，黒・椀	13C前葉	Ⅰ
Ⅲ区C 16	土・小，土・坏，須・椀，瓦・椀	13C前葉	Ⅰ
Ⅲ区C 17	土・小，土質，瓦・椀，黒・椀	13C前葉	Ⅰ
Ⅲ区C 18	土・小，土・鍋，土質，瓦・椀	13C前葉	Ⅰ
Ⅲ区C 19	土・小，土・坏，土質，須・椀	13C前葉	Ⅰ
Ⅲ区C 20	土質，黒・椀	?	Ⅰ
Ⅲ区C 21	陶器甕	近世	Ⅰ
Ⅲ区C 22	土質，瓦・椀，黒・椀	12C末〜13C前葉	Ⅰ
Ⅲ区C 23	土・鍋，土質，瓦・椀	12C末〜13C前葉	Ⅰ
Ⅲ区C 24	土質，須・椀	13C前葉	Ⅰ
Ⅲ区C 25	なし	−	Ⅰ
Ⅲ区C 26	土・小，土質（壁土？）	?	Ⅰ
Ⅲ区C 27	土・小・椀，土・鍋，須・椀，瓦・椀	13C前葉	Ⅰ
Ⅲ区C 28	土・小・椀，土・鍋，須・椀，黒・椀	?	Ⅰ
Ⅲ区C 29	土・小，土・鍋，土質，瓦・椀	13C前葉	Ⅰ
Ⅲ区C 30	土・鍋，瓦・椀	13C前葉	Ⅲ
Ⅲ区C 31	土・小，須・椀，瓦・椀，黒・椀	13C前葉	Ⅰ
Ⅲ区C 32	瓦・椀	13C前葉	Ⅰ
Ⅲ区C 33	土質，白磁	?	Ⅰ
Ⅲ区C 34	土・坏，土・鍋，瓦・椀，黒・椀	13C前葉	Ⅰ
Ⅲ区C 35	瓦・椀	?	Ⅰ
Ⅲ区C 36	土・坏，土質，瓦・椀	12C末〜13C前葉	Ⅰ
Ⅲ区C 37	土・小，土質，黒・椀	?	Ⅰ
Ⅲ区C 38	土質，須・椀，瓦・椀	13C前葉	Ⅰ
Ⅲ区C 39	土・小，土質，須・椀，瓦・椀	12C末〜13C前葉	Ⅰ
Ⅲ区C 40	土・鍋	?	Ⅰ
Ⅲ区C 41	土・小，土・鍋，土質	?	Ⅰ
Ⅲ区C 42	土・小・鍋，須・椀，須・甕，黒・椀	13C前葉	Ⅰ
Ⅲ区C 43	土・鍋，土質，須・椀，黒・椀	?	Ⅰ
Ⅲ区C 44	土質，黒・椀，瓦	13C前葉	Ⅰ

第15表　柱穴一覧 3

出土遺構	出土遺物	時期	埋土類型	出土遺構	出土遺物	時期	埋土類型
Ⅲ区C 45	土・鍋	?	Ⅰ	Ⅲ区C 125	なし	−	Ⅰ
Ⅲ区C 46	土質，瓦・椀，黒・椀	13C前葉	Ⅰ	Ⅲ区C 126	土質，黒・椀	?	Ⅰ
Ⅲ区C 47	土・甕	?	Ⅰ	Ⅲ区C 127	なし	−	Ⅰ
Ⅲ区C 48	土質，瓦・椀	12C末〜13C前葉	ⅡB	Ⅲ区C 128	なし	−	Ⅰ
Ⅲ区C 49	なし	−	Ⅰ	Ⅲ区C 130	土・小，土・坏，瓦・椀，黒・椀	−	Ⅰ
Ⅲ区C 50	土質	?	Ⅰ	Ⅲ区C 131	なし	−	Ⅰ
Ⅲ区C 51	土・小，土・鍋，土質	13C前葉	Ⅰ	Ⅲ区C 132	土質，須・椀，瓦・椀	13C前葉	Ⅰ
Ⅲ区C 52	なし	−	Ⅰ	Ⅲ区C 133	土・鍋，黒・椀	?	Ⅰ
Ⅲ区C 53	土・鍋，須・椀，瓦・椀	12C末〜13C前葉	Ⅰ	Ⅲ区C 134	なし	−	Ⅰ
Ⅲ区C 54	土・小，土・鍋，須・椀，瓦・椀	13C前葉	Ⅰ	Ⅲ区C 135	なし	−	Ⅰ
Ⅲ区C 55	土・坏，土・鍋	?	Ⅰ	Ⅲ区C 136	なし	−	Ⅰ
Ⅲ区C 56	なし	−	Ⅰ	Ⅲ区C 137	なし	−	Ⅰ
Ⅲ区C 57	なし	−	Ⅰ	Ⅲ区C 148	なし	−	ⅡA
Ⅲ区C 58	土・小，土・坏	?	Ⅰ	Ⅲ区C 152	土・坏	?	ⅡA
Ⅲ区C 59	土・坏，土質，瓦・椀	13C前葉	Ⅰ	Ⅲ区C 153	土・坏	?	ⅡA
Ⅲ区C 60	なし	−	Ⅰ	Ⅲ区C 154	なし	−	ⅡA
Ⅲ区C 61	土質，須・椀，瓦・椀	13C前葉	Ⅲ	Ⅲ区C 155	土・椀，土質，弥生	?	ⅡA
Ⅲ区C 62	なし	−	Ⅰ	Ⅲ区C 156	なし	−	Ⅰ
Ⅲ区C 63	土質，須・椀	13C前葉	Ⅲ	Ⅲ区C 157	土・小，瓦・椀	?	Ⅰ
Ⅲ区C 64	土質，須・椀	?	Ⅰ	Ⅲ区C 159	なし	−	
Ⅲ区C 65	土・坏，土質，須・椀	?	Ⅰ	Ⅲ区C 160	土・鍋，土質	?	ⅡA
Ⅲ区C 66	土・鍋，須・椀	13C前葉	Ⅰ	Ⅲ区C 161	なし	−	ⅡA
Ⅲ区C 67	なし	−	Ⅰ	Ⅲ区C 162	土・小，土・鍋，瓦・椀	?	ⅡA
Ⅲ区C 68	瓦・椀	?	Ⅲ	Ⅳ区A 02	なし	−	ⅡA
Ⅲ区C 69	なし	−	Ⅰ	Ⅳ区A 04	なし	−	ⅡA
Ⅲ区C 70	土・坏	?	Ⅲ	Ⅳ区A 05	なし	−	ⅡA
Ⅲ区C 71	土・坏，土質，瓦・椀	?	Ⅲ	Ⅳ区A 06	なし	−	ⅡA
Ⅲ区C 72	土・小，土・鍋，土質	?	Ⅲ	Ⅳ区A 07	なし	−	ⅡA
Ⅲ区C 73	土・小，土質，須・鉢，須・甕	13C前葉	Ⅲ	Ⅳ区A 08	なし	−	ⅡB
Ⅲ区C 74	なし	−	Ⅲ	Ⅳ区B 01	なし	−	ⅡB
Ⅲ区C 75	土・小，須・甕	?	Ⅲ	Ⅳ区B 02	なし	−	ⅡB
Ⅲ区C 76	土・坏，土質	?	Ⅲ	Ⅳ区B 03	なし	−	ⅡB
Ⅲ区C 77	土質，須・椀，須・甕	13C前葉	Ⅲ	Ⅳ区B 04	土・小	?	Ⅳ
Ⅲ区C 78	土・坏	?	Ⅲ	Ⅳ区B 05	なし	−	Ⅲ
Ⅲ区C 79	土・小，土質，須・椀	13C前葉	Ⅲ	Ⅳ区B 06	なし	−	ⅡB
Ⅲ区C 80	なし	−	Ⅲ	Ⅳ区B 07	なし	−	ⅡB
Ⅲ区C 81	土・椀，土・鍋	?	ⅡA	Ⅳ区B 08	なし	−	Ⅲ
Ⅲ区C 82	土・椀，土質，瓦・椀	?	Ⅰ	Ⅳ区B 09	なし	−	Ⅲ
Ⅲ区C 83	土・鍋，土質，須・椀，須・鉢	?	Ⅰ	Ⅳ区B 10	なし	−	Ⅲ
Ⅲ区C 84	土・鍋	?	Ⅰ	Ⅳ区B 11	なし	−	ⅡB
Ⅲ区C 85	土・坏，土質	?	Ⅰ	Ⅳ区C 01	土質	?	ⅡB
Ⅲ区C 86	土質，須・椀，瓦・椀，黒・椀	13C前葉	Ⅰ	Ⅳ区C 02	土質	近世	ⅡB
Ⅲ区C 87	なし	−	Ⅲ	Ⅳ区C 04	なし	−	ⅣA
Ⅲ区C 88	土質，須・鉢，須・甕	13C前葉	Ⅰ	Ⅳ区C 05	なし	−	ⅣA
Ⅲ区C 89	土・坏，須・椀	?	Ⅲ	Ⅳ区C 06	なし	−	ⅣA
Ⅲ区C 90	土・小，土質，瓦・椀	?	Ⅲ	Ⅳ区C 07	なし	−	ⅣA
Ⅲ区C 91	土・坏	?	Ⅰ	Ⅳ区D 01	弥生	弥生	ⅣA
Ⅲ区C 92	なし	−	Ⅲ	Ⅳ区D 02	なし	−	ⅣA
Ⅲ区C 93	土・鍋	?	Ⅰ	Ⅳ区D 03	なし	−	ⅣA
Ⅲ区C 94	なし	−	ⅡA	Ⅳ区D 04	弥生	弥生	ⅣA
Ⅲ区C 95	土・鍋	?	Ⅰ	Ⅳ区D 05	弥生	弥生	ⅣA
Ⅲ区C 96	なし	−	Ⅰ	Ⅳ区D 06	弥生	弥生	ⅣA
Ⅲ区C 97	なし	−	ⅡB	Ⅳ区D 07	なし	−	ⅣA
Ⅲ区C 98	土・鍋，瓦・椀	?	Ⅰ	Ⅳ区D 08	なし	−	ⅡA
Ⅲ区C 99	なし	−	Ⅰ	Ⅳ区D 09	なし	−	ⅣA
Ⅲ区C 100	土・小，土質，瓦・椀，黒・椀	12C末〜13C初	Ⅰ	Ⅳ区D 10	土・鍋，須・甕，弥生	13C中葉？	ⅣA
Ⅲ区C 101	なし	−	Ⅰ	Ⅳ区D 11	なし	−	ⅣA
Ⅲ区C 102	なし	−	Ⅰ	Ⅳ区D 12	なし	−	ⅣA
Ⅲ区C 103	なし	−	Ⅰ	Ⅳ区D 13	なし	−	ⅣA
Ⅲ区C 104	なし	−	Ⅰ	Ⅳ区D 14	土質，弥生	?	ⅣA
Ⅲ区C 105	なし	−	Ⅰ	Ⅳ区D 15	なし	−	ⅣA
Ⅲ区C 106	土質，瓦・椀	?	Ⅰ	Ⅳ区D 16	弥生	−	ⅣA
Ⅲ区C 107	土質，瓦・椀	12C末〜13C初	Ⅰ	Ⅳ区D 17	弥生	弥生	ⅣA
Ⅲ区C 108	土・椀，土質，須・椀	12C末〜13C初	Ⅰ	Ⅳ区D 18	弥生	?	ⅣA
Ⅲ区C 110	土・椀，須・椀	?	Ⅰ	Ⅳ区D 19	なし	−	ⅣA
Ⅲ区C 112	土質，須・椀	?	Ⅰ	Ⅳ区D 20	なし	−	ⅣA
Ⅲ区C 113	土質，須・椀，瓦・椀	13C前葉	Ⅰ	Ⅳ区D 21	弥生	?	ⅣA
Ⅲ区C 114	土質，瓦・椀	12C末〜13C初	Ⅰ	Ⅳ区D 22	弥生	弥生中期	ⅣA
Ⅲ区C 115	なし	−	Ⅰ	Ⅳ区D 23	なし	−	ⅣA
Ⅲ区C 116	土・小，土・坏	?	Ⅰ	Ⅳ区D 24	弥生	弥生前期	ⅣA
Ⅲ区C 117	土・小，黒・椀	?	Ⅰ	Ⅳ区D 25	弥生	?	ⅣA
Ⅲ区C 118	須・甕	?	Ⅰ	Ⅳ区D 26	弥生	弥生	ⅣA
Ⅲ区C 119	土・小，土質，須・甕，黒・椀	?	Ⅰ	Ⅳ区D 27	弥生	弥生	ⅣA
Ⅲ区C 120	土質，瓦・椀	?	Ⅰ	Ⅳ区D 28	なし	−	ⅣA
Ⅲ区C 121	なし	−	Ⅰ	Ⅳ区D 29	なし	−	ⅣA
Ⅲ区C 122	土・小，土・坏，土質，瓦・椀	?	Ⅰ	Ⅳ区D 30	なし	−	ⅣA
Ⅲ区C 123	土・椀	?	Ⅰ	Ⅳ区D 31	弥生	弥生中期	ⅣA
Ⅲ区C 124	土質，瓦・椀	12C末〜13C初	Ⅰ	Ⅳ区D 32	なし	−	ⅣA

第16表　柱穴一覧 4

出土遺構	出土遺物	時期	埋土類型	出土遺構	出土遺物	時期	埋土類型
Ⅳ区D 33	なし	−	ⅣA	Ⅴ区 40	なし	−	ⅣB
Ⅳ区D 34	弥生	弥生前期	ⅣA	Ⅶ区A 01	なし	−	ⅣB
Ⅳ区D 35	なし	−	ⅣA	Ⅶ区A 02	なし	−	ⅣB
Ⅳ区D 36	なし	−	ⅣA	Ⅶ区A 03	なし	−	ⅣB
Ⅳ区D 37	なし	−	ⅣA	Ⅶ区A 04	なし	−	ⅣB
Ⅳ区D 38	なし	−	ⅣA	Ⅶ区A 05	なし	−	ⅣA
Ⅳ区D 39	なし	−	ⅣA	Ⅶ区A 06	黒・椀	13C前葉	ⅣA
Ⅳ区D 40	弥生	弥生中期？	ⅣA	Ⅶ区A 07	なし	−	ⅡA
Ⅳ区D 41	なし	−	ⅣA	Ⅶ区A 08	なし	−	ⅡA
Ⅳ区D 42	弥生	弥生	ⅣA	Ⅶ区A 09	なし	−	ⅡA
Ⅳ区D 43	弥生	弥生前期？	ⅣA	Ⅶ区A 10	なし	−	ⅣA
Ⅳ区D 44	弥生	弥生中期	ⅣA	Ⅶ区A 11	なし	−	ⅣA
Ⅳ区D 45	なし	−	ⅡA	Ⅶ区A 12	なし	−	ⅣA
Ⅳ区D 46	弥生	?	ⅣA	Ⅶ区A 13	須・椀，弥生	?	ⅣA
Ⅳ区D 47	土質	?	ⅣA	Ⅶ区A 14	なし	−	ⅣA
Ⅳ区D 48	なし	−	ⅣA	Ⅶ区A 15	なし	−	ⅣA
Ⅳ区D 49	弥生	弥生	ⅣA	Ⅶ区A 16	なし	−	ⅡA
Ⅳ区D 50	なし	弥生中期	ⅣB	Ⅶ区A 17	なし	−	ⅡA
Ⅴ区 01	なし	−	ⅣA	Ⅶ区A 18	なし	−	ⅡA
Ⅴ区 02	なし	−	ⅣA	Ⅶ区A 19	土・坏	?	ⅣA
Ⅴ区 03	なし	−	ⅡA	Ⅶ区A 20	なし	−	ⅣA
Ⅴ区 04	弥生，土質	?	ⅣA	Ⅶ区A 21	なし	−	ⅣA
Ⅴ区 05	なし	−	ⅣA	Ⅶ区A 22	なし	−	ⅡA
Ⅴ区 06	なし	−	ⅣA	Ⅶ区A 23	土・小，瓦・椀	?	ⅣA
Ⅴ区 07	なし	−	ⅡA	Ⅶ区A 24	土・小，土質	?	ⅣA
Ⅴ区 08	なし	−	ⅣB	Ⅶ区A 25	須・椀	?	ⅣA
Ⅴ区 09	なし	−	ⅣB	Ⅶ区A 26	須・甕	13C前葉	ⅣA
Ⅴ区 10	なし	−	ⅣA	Ⅶ区A 27	土・鍋	?	ⅣA
Ⅴ区 11	なし	−	ⅣA	Ⅶ区A 28	瓦・椀	?	ⅣA
Ⅴ区 12	弥生	?	ⅣA	Ⅶ区A 29	弥生	?	ⅣA
Ⅴ区 13	なし	−	ⅣA	Ⅶ区A 30	なし	−	ⅣA
Ⅴ区 14	なし	−	ⅣA	Ⅶ区A 31	なし	−	ⅣA
Ⅴ区 15	なし	−	ⅣA	Ⅶ区A 32	なし	−	ⅣA
Ⅴ区 16	なし	−	ⅣB	Ⅶ区A 33	弥生	?	ⅡA
Ⅴ区 17	なし	−	ⅣA	Ⅶ区A 34	なし	−	ⅡA
Ⅴ区 18	なし	−	ⅣA	Ⅶ区A 35	なし	−	ⅡA
Ⅴ区 19	なし	−	ⅣA	Ⅶ区A 36	土・坏，土・鍋，土質，黒・椀	?	ⅣA
Ⅴ区 20	なし	−	ⅣA	Ⅶ区A 37	土・椀	13C前葉	ⅡA
Ⅴ区 21	なし	−	ⅣA	Ⅶ区A 38	須・甕，黒・椀	?	ⅣA
Ⅴ区 22	なし	−	ⅣA	Ⅶ区A 39	なし	−	ⅣA
Ⅴ区 23	弥生	弥生前期？	ⅣA	Ⅶ区A 40	土・小，土・坏，瓦・椀	?	ⅣA
Ⅴ区 24	弥生	弥生前期？	ⅣB	Ⅶ区A 41	なし	−	ⅣA
Ⅴ区 25	なし	−	ⅣA	Ⅶ区A 42	なし	−	ⅣA
Ⅴ区 26	なし	−	ⅣA	Ⅶ区A 43	なし	−	ⅣB
Ⅴ区 27	なし	−	ⅣA	Ⅶ区A 44	須・椀，弥生	13C前葉	ⅡA
Ⅴ区 28	弥生	?	ⅣA	Ⅶ区A 45	東播，弥生	?	ⅡA
Ⅴ区 29	なし	−	ⅣA	Ⅶ区A 46	土・小，土・椀，瓦・椀	?	ⅡA
Ⅴ区 30	なし	−	ⅣA	Ⅶ区A 47	なし	−	ⅣA
Ⅴ区 31	弥生	?	ⅣA	Ⅶ区A 48	なし	−	ⅡA
Ⅴ区 32	なし	−	ⅣA	Ⅶ区A 49	土・小	?	ⅡA
Ⅴ区 33	なし	−	ⅣB	Ⅶ区A 50	弥生，土・小，黒・椀	?	ⅣA
Ⅴ区 34	なし	−	ⅣA	Ⅶ区A 51	なし	−	ⅣB
Ⅴ区 35	なし	−	ⅣA	Ⅶ区B 01	須・椀	13C前葉	ⅣB
Ⅴ区 36	なし	−	ⅣB	Ⅶ区B 02	なし	−	ⅣB
Ⅴ区 37	なし	−	ⅣA	Ⅶ区B 03	弥生	?	ⅣB
Ⅴ区 38	なし	−	ⅣB	Ⅶ区B 04	なし	−	ⅣB
Ⅴ区 39	弥生	弥生中期？	ⅣB	Ⅶ区B 05	なし	−	ⅣB

第17表　柱穴一覧5

土・小；土師質土器小皿，土・坏；土師質土器坏，土・椀；土師質土器椀，土・鍋；土師質土器鍋，土・甕；土師質土器甕，土質；土師質土器，須・椀；須恵器椀，須・小；須恵器小皿，須・甕；須恵器甕，須・壷；須恵器壺，須・鉢；須恵器鉢，瓦・椀；瓦器椀，瓦・皿；瓦器皿，黒・椀；黒色土器椀，吉備；吉備系土師器椀，東播；東播系捏鉢，白・碗；白磁碗，白・皿；白磁皿，青・碗；青磁椀，青・皿；青磁皿，弥生；弥生土器

松並・中所遺跡出土遺物監察表

凡　　例

1．器種は弥生土器が「弥生」，土師質土器が「土質」，須恵器が「須恵」，十瓶山窯産須恵器が「十瓶山」，黒色土器が「黒色」，東播系須恵器が「東播」，亀山産須恵器が「亀山」，吉備系土師器が「吉備」とそれぞれ略して記載した。

2．胎土は全体の砂粒密度を「粗」・「やや粗」・「中」・「細」・「微」の５段階に分け，それぞれの含有鉱物における粒径を「大」(1.1㎜以上)，「中」(0.6～1.0㎜)，「小」(0.5㎜以下)，多寡を「多」，「普」，「少」の３段階に区分して表記した。つまり，「粗石英・長石大多，赤色粒小少」とあれば，素地の砂粒密度は粗く，含有鉱物として粒径が1.1㎜以上の石英・長石が多く含まれ，0.5㎜以下の赤色粒が少量含まれるということになる。

3．焼成は全体を「硬」，「やや硬」，「良」，「やや軟」，「軟」の５段階に区分した。

4．色調は，農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖1992年度版』を参照した。

5．残存率は完形品に対する実物の割合を示している。

松並・中所遺跡土器監察表

報文番号	遺構名	器種名	法量	胎土	色調	残存率	外面調整	内面調整	焼成	備考
1	SH01①中層	弥生・壷	口；11.0	中；石英・長石小少，赤色粒小少，雲母中少	外面；にぶい赤褐色(5YR5/4) 内面；にぶい赤褐色(5YR4/4)	口1/8	口縁端部；凹線文(2条) 口縁部；指押さえ→ヨコナデ 頸部；タテハケ	ヨコナデ	良	
2	Ⅳ区DSH01D区中層	弥生・甕	不明	中；石英・長石小普，赤色粒中少，雲母小少	外面；黒褐色(10YR3/2) 内面；暗褐色(10YR3/4)	小片	口縁端部；凹線文(3条)	マメツ	やや硬	
3	Ⅳ区DSH01D区上層	弥生・甕	不明	中；石英・長石中少，赤色粒小少	外面；橙色(7.5YR6/6) 内面；にぶい黄橙色(10YR7/4)	口小片	口縁端部；凹線文(1条) 口縁部；指押さえ→ヨコナデ	ヨコナデ	やや軟	口縁端部及び内面に赤色顔料の痕跡
4	Ⅳ区DSH01B区中層	弥生・甕	不明	中；石英・長石小少，赤色粒中少，角閃石小ごく少	外面；明褐色(7.5YR5/6) 内面；明褐色(7.5YR5/6)	小片	口縁部；ヨコナデ，マメツ	口縁部；ヨコナデ 体部；指押さえ→タテハケ	良	
5	Ⅳ区DSH01B区中層	弥生・壷ないし甕底部	底；8.4	中；石英・長石中～小少，黒色石粒小少	外面；橙色(2.5YR6/8) 内面；にぶい黄褐色(10YR5/3)	口1/8	マメツ	指押さえ→ヘラケズリ	良	外面に顕著な二次焼成痕
6	Ⅳ区DSH01ベルト4，2層	弥生・底部	底；7.0	やや粗；石英・長石中普，赤色粒小普	外面；にぶい黄橙色(10YR6/4) 内面；にぶい黄橙色(10YR7/3)	口1/2	指押さえ→ヘラミガキ	指押さえ→マメツ	良	
7	Ⅳ区DSH01A区中層	弥生・底部	底；4.8	中；石英・長石中普，赤色粒小少	外面；にぶい橙色(7.5YR7/4) 内面；黄灰色(2.5Y6/1)	口1/2	指押さえ	指押さえ	やや軟	平底
8	Ⅳ区DSH01A区中層	弥生・鉢	口；21.2	細；石英・長石小少，赤色粒中普，雲母小少	外面；明赤褐色(5YR5/6) 内面；にぶい橙色(7.5YR6/4)	口1/8	口縁部；板ナデ 体部；ヘラミガキ（ヨコ）	口縁部；板ナデ 体部；指押さえ→ヘラミガキ（マメツ）	やや軟	ボール状の鉢
9	Ⅳ区DSH01ベルト①1層	弥生・高坏ないし鉢	不明	やや粗；石英・長石中普，赤色粒小ごく少	外面；灰黄褐色(10YR5/2) 内面；黒褐色(10YR3/2)	口小片	口縁部；凹線文(2条)	ヨコナデ，マメツ	やや軟	
10	Ⅳ区DSH04－Tr2上層	弥生・高坏・脚部	底；13.6	中；石英・長石小普，角閃石小少，黒色粒小少	外面；赤褐色(5YR4/8) 内面；明褐色(7.5YR5/6)	底1/8	脚端部；ヨコナデ 脚部；斜格子と刺突文	指押さえ，マメツ	やや軟	胎土がやや異質
11	Ⅳ区DSH01遺物1	弥生・壷	口；12.1	中；石英・長石中普，黒色石粒小ごく少	外面；橙色(5YR6/6) 内面；橙色(5YR6/6)	口1/8	口縁端部；凹線文(1条) マメツ	頸部；指押さえ，マメツ	良	
12	Ⅳ区DSH01A区下層	弥生・壷	口；24.0	中；石英・長石中普，赤色粒中少	外面；灰黄褐色(10YR4/2) 内面；にぶい褐色(7.5YR5/4)	口1/8	口縁端部；凹線文(3条) 口縁部；ヨコナデ	口縁部；平行沈線による斜格子文	良	
13	Ⅳ区DSH01遺物16	弥生・甕	口；19.0	中；石英・長石中普	外面；橙色(5YR6/8) 内面；オリーブ黒色(5Y3/1)	小片	口縁端部；凹線文(1条) マメツ	マメツ	良	
14	Ⅳ区DSH01遺物2	弥生・甕	口；18.3	中；石英・長石中少，赤色粒小少	外面；灰褐色(7.5YR4/2) 内面；にぶい褐色(7.5YR5/4)	口2/8	口縁部；ヨコナデ→ヘラミガキ（ヨコ） 体部；ヘラミガキ（タテ）	口縁部；ヨコナデ 体部；指押さえ（マメツ）	良	搬入品か？
15	Ⅳ区DSH01遺物1	弥生・甕・底部	底；9.7	やや粗；石英・長石小～大多，赤色粒中少	外面；褐色(7.5YR4/3)～赤色(10R5/6) 内面；にぶい橙色(7.5YR6/4)	底ほぼ完存	体部；板ナデ状ミガキ	底部；指押さえ 体部；ヘラケズリ	良	二次焼成を被る
16	Ⅳ区DSH01遺物17	弥生・甕	底；6.4	やや粗；石英・長石小多，赤色粒中少	外面；にぶい赤褐色(5YR4/3) 内面；灰褐色(7.5YR4/2)	底2/8	ヘラミガキ（タテ）	底部；指押さえ 体部下半；ヘラケズリ	良	
17	Ⅳ区DSH01－SK01上層（1－2層）	弥生・甕	口；14.6	中；石英・長石小普，赤色粒小少，角閃石小少	外面；にぶい褐色(7.5YR5/4) 内面；橙色(7.5YR6/6)	口1/8	口縁端部；凹線文(1条) 口縁部；ヨコナデ 体部；タテハケ	口縁部；ヨコナデ 体部；ヘラケズリ	良	
18	Ⅳ区DSH01－SK01－B区	弥生・甕・底部	底；5.4	中；石英・長石中普，赤色粒小少	外面；灰黄褐色(10YR4/2) 内面；にぶい褐色(7.5YR5/4)	口3/8	底部；指押さえ 体部；下半ヘラミガキ（タテ）	底部；指押さえ→ナデ 体部下半；ヘラケズリ	やや硬	底部は円盤充填法による
19	Ⅳ区DSH01－SK01上層（1－2層）	弥生・高坏	不明	やや粗；石英・長石中多，赤色粒中少，円礫小少	外面；黒褐色(2.5Y3/2) 内面；明赤褐色(5YR5/6)	小片	口縁端部；凹線文(2条) 口縁部；凹線文(2条)	ヨコナデ	良	
20	Ⅳ区DSH01－SP10	弥生・底部	底；6.4	中；石英・長石小少，角閃石小少	外面；にぶい赤褐色(5YR5/4) 内面；褐灰色(7.5YR4/1)	底1/4	指押さえ→ヘラミガキ（タテ）	底部；指押さえ 体部下半；ヘラケズリ	－	
21	Ⅳ区DSH01A区ベット状遺構中	弥生・甕・底部	不明	中；石英・長石中普	外面；にぶい黄褐色(10YR5/4) 内面；にぶい褐色(7.5YR5/3)	体部1/8	列点文，体部下半；ヘラミガキ（タテ）	体部下半；ヘラケズリ	良	胴部に列点文
22	Ⅳ区DSH01D区ベット状遺構中	弥生・底部	底；7.6	やや粗；石英・長石中普，赤色粒小普，円礫小ごく少	外面；にぶい黄色(2.5Y6/3) 内面；明黄褐色(10YR7/6)	底2/8	指押さえ，マメツ	指押さえ，マメツ	やや軟	
37	Ⅳ区DSX01遺物1	弥生・壷	口；25.2	中；石英・長石中普，赤色粒中少，雲母中少	外面；明褐色(7.5YR5/6) 内面；にぶい褐色(7.5YR5/4)	不明	口縁部；凹線文(4条) 頸部；ヨコナデ	口縁部；ヨコナデ 頸部；ヨコナデ	やや硬	頸部に幅広で薄い突帯を貼付した後，長めの刻目を施し，その中央に軽いヨコナデを施す
38	Ⅳ区DSX01遺物4	弥生・壷・底部	底；9.6	中；石英・長石中普，赤色粒小少	外面；橙色(5YR6/6) 内面；にぶい黄褐色(10YR5/3)	底2/8	指押さえ→ヘラミガキ	マメツ	良	
39	Ⅳ区DSX01（切り合いベルト中）	弥生・壷・口縁部	不明	中；石英・長石小少，赤色粒小少，角閃石小少	外面；暗褐色(7.5YR3/3) 内面；褐色(7.5YR4/3)	口小片	口縁端部；凹線文(2条) 口縁部；指押さえ→ヨコナデ	ヨコナデ（マメツ）	良	
41	Ⅳ区DSX02上層・中層精査中，SX02P1・P2・SP1，SX02P3・P4・P5・P6，西壁際（北半）側溝掘住居跡埋土	弥生・甕	不明	中；石英・長石中普，赤（黒）色粒小ごく少，角閃石小普	外面；赤色(10YR4/8) 内面；赤褐色(2.5YR4/6)～灰黄褐色(10YR4/2)	口3/8	マメツ	体部下半；ヘラケズリ 体部中位；指押さえ，マメツ	良	二次焼成を被る
42	Ⅳ区D西壁際（北半）側溝掘住居跡埋土	弥生・壷	不明	中；石英・長石小普，赤色粒小少，角閃石小少，雲母小少	外面；にぶい黄橙色(10YR6/4) 内面；暗灰黄色(2.5YR4/2)	口2/8	口縁端部；凹線文(1条) 頸部；ヘラミガキ	頸部；指押さえ→板ナデ	－	口縁部内面に平行沈線による歪な格子文 デサリ腹縁による刻目

報文番号	遺構名	器種名	法量	胎土	色調	残存率	外面調整	内面調整	焼成	備考
43	Ⅳ区ＤＳＸ03ベルト３	弥生・甕・底部	底；5.8	中；石英・長石中少～普，赤色粒小少，角閃石小ごく少	外面；褐色(7.5Ｙ R4/3) 内面；黒褐色(10Ｙ R3/1)	底1/8	ヘラミガキ（タテ）	底部；指押さえ 体部；ヘラケズリ	やや硬	
44	Ⅳ区ＤＳＸ03切り合いベルト中	弥生・壷・口縁部	不明	中；石英・長石中普，赤色粒小ごく少	外面；橙色(7.5Ｙ R7/6) 内面；明黄褐色(10Ｙ R6/6)	口小片	口縁端部；凹線文？(2条？) マメツ	マメツ	やや軟	
47	Ⅴ区ＳＫ06（ＳＨ01）	弥生・壷・体部	不明	中；石英・長石小ごく少，角閃石小少	外面；にぶい褐色(7.5Ｙ R5/4) 内面；暗灰黄色(2.5Ｙ5/2)	体部小片	櫛描波状文	ナデ	良	
48	Ⅴ区ＳＸ01Ｐ２床面直上，ＳＸ01Ａ区，ＳＸ01Ｃ区	弥生・甕	口；23.2	やや粗；石英・長石中普～多，赤色粒小少，角閃石小少	外面；にぶい褐色(7.5Ｙ R5/4) 内面；橙色(7.5Ｙ R6/6)	口2/8	口縁端部；凹線文(3条) 体部；ヘラミガキ	口縁部；ヨコナデ 体部；ヘラケズリ→ヘラミガキ（ヨコ）	良	二次焼成を被る
49	Ⅴ区ＳＸ01－Ｐ３床面直上，ＳＸ01Ｃ区	弥生・甕	口；17.4	中；石英・長石小～中普，赤色粒中少	外面；明赤褐色(5Ｙ R5/8) 内面；灰褐色(5Ｙ R4/4)	口1/8	口縁端部；凹線文(3条？)，マメツ	体部；ヘラケズリ	良	
50	Ⅴ区ＳＸ01床面直上，Ｂ区	弥生・甕	口；14.2	中；石英・長石中普，赤色粒小少，角閃石小少	外面；暗灰黄色(2.5Ｙ4/2) 内面；黒褐色(10Ｙ R3/2)	口1/8	口縁端部；凹線文(3条) 体部；ヘラミガキ？，ヨコナデ	口縁部；ヨコナデ 体部；ヘラケズリ	良	
51	Ⅴ区ＳＸ01Ａ区	弥生・甕	不明	中；石英・長石中，赤色粒小ごく少，角閃石小少	外面；明赤褐色(5Ｙ R5/6) 内面；灰黄褐色(10Ｙ R5/2)	小片	口縁端部；凹線文(3条) 口縁部；ヨコナデ	ヨコナデ	良	
52	Ⅴ区ＳＸ01床面直上，Ｂ区	弥生・甕	不明	中；石英・長石小普，赤色粒中普，円礫中ごく少	外面；灰色(5Ｙ5/1) 内面；にぶい黄褐色(10Ｙ R4/3)	口小片	マメツ	口縁部；マメツ 体部；ヘラケズリ	良	
53	Ⅴ区ＳＸ01Ｃ区	弥生・甕	不明	やや粗；石英・長石中多，赤色粒小少，角閃石小少	外面；黒褐色(7.5Ｙ R3/1) 内面；黒褐色(7.5Ｙ R3/1)	小片	マメツ	マメツ	良	二次焼成を被る
54	Ⅴ区ＳＸ01－Ｐ１床面直上	弥生・台付鉢	底；5.6	やや粗；石英・長石中多，赤色粒中少，雲母中少	外面；橙色(7.5Ｙ R6/6) 内面；にぶい褐色(7.5Ｙ R4/3)	底完存	指押さえ，マメツ	指押さえ，マメツ	良	顕著な上げ底
55	Ⅴ区ＳＸ01－ＳＰ１	弥生・紡錘車	口；厚さ0.5 底；24.0	中；石英・長石中普，赤色粒小ごく少	外面；にぶい黄橙色(10Ｙ R6/3) 内面；にぶい黄褐色(10Ｙ R5/4)	6/8	ヘラケズリ	マメツ	良	甕を転用
56	Ⅴ区ＳＫ07	弥生・壷ないし甕底部	底；7.0	やや粗；石英・長石小～大普	外面；にぶい黄橙色(10Ｙ R6/3) 内面；にぶい褐色(7.5Ｙ R5/4)	底1/8	ヘラミガキ	マメツ	良	
57	Ⅴ区ＳＫ10	弥生・底部	底；8.0	やや粗；石英・長石中多，赤色粒中普，円礫中少	外面；浅黄色(2.5Ｙ7/3) 内面；灰黄色(2.5Ｙ7/2)	底1/4	指押さえ，マメツ	指押さえ，マメツ	良	
60	Ⅳ区ＤＳＰ16	弥生・甕	不明	中；石英・長石中普，赤色粒小少，円礫小少	外面；にぶい褐色(7.5Ｙ R5/4) 内面；明赤褐色(5Ｙ R5/6)	小片	口縁端部；刻目 口縁部；指押さえ→ヨコナデ	ヨコナデ	良	
61	Ⅳ区ＤＳＰ26	弥生・甕	不明	粗；石英・長石中多，赤色粒小少	外面；明褐色(7.5Ｙ R5/6) 内面；明褐色(7.5Ｙ R5/6)	小片	端部；刻目 頸部；指押さえ	マメツ	やや軟	
62	Ⅳ区ＤＳＰ44	弥生・壷ないし甕底部	底；10.8	やや粗；石英・長石中多，赤色粒小少	外面；明褐色(7.5Ｙ R5/6) 内面；にぶい橙色(7.5Ｙ R7/4)	底1/8	指押さえ	マメツ	やや軟	
63	Ⅳ区ＤＳＸ05	弥生・壷	口；25.2	中；石英・長石中普，赤色粒中少，雲母中少	外面；明赤褐色(5Ｙ R5/6) 内面；にぶい橙色(5Ｙ R6/4)	小片	口縁端部；凹線文(4条) 頸部；ヨコナデ	頸部；ヨコナデ 体部；指押さえ	やや軟	37と同一個体
64	Ⅳ区ＤＳＸ05(切り合いベルト中)	弥生・甕	不明	やや粗；石英・長石中普，赤色粒小少	外面；橙色(5Ｙ R6/6) 内面；にぶい橙色(7.5Ｙ R7/4)	小片	ヨコナデ	ヨコナデ	やや軟	
65	Ⅳ区ＤＳＸ05Ｂ区	弥生・高坏ないし台付鉢	口；5.6	中；石英・長石小普，赤色粒小少	外面；灰黄褐色(10Ｙ R4/2) 内面；明赤褐色(5Ｙ R5/6)	口1/8	指押さえ→ヘラミガキ	指押さえ	不明	
66	Ⅳ区ＤＳＤ02Ｔｒ3	弥生・壷	口；13.1	やや粗石英・長石中～小普，赤色粒中少	外面；にぶい黄色(10Ｙ R7/4) 内面；にぶい黄色(10Ｙ R7/4)	口1/8	頸部；沈線，指押さえ	指押さえ	やや軟	
67	Ⅳ区ＤＳＤ02Ｂ区	弥生・壷	不明	やや粗；石英・長石中普	外面；明黄褐色(10Ｙ R6/6) 内面；にぶい橙色(7.5Ｙ R7/4)	頸部小片	頸部；多条化した櫛描文	指押さえ，マメツ	良	
68	Ⅳ区ＤＳＤ02Ｃ区	弥生・壷	不明	粗；石英・長石中多，円礫中少	外面；橙色(7.5Ｙ R6/6) 内面；橙色(5Ｙ R6/6)	体部小片	沈線，木葉文（有軸），縦区画線	マメツ	やや軟	
69	Ⅳ区ＤＳＤ02Ｄ区	弥生・壷	不明	中；石英・長石中少	外面；明黄褐色(10Ｙ R7/6) 内面；黄灰色(2.5Ｙ6/1)	体部小片	二条の平行沈線，斜格子文	マメツ	良	壷頸胴部境
70	Ⅳ区ＤＳＤ02Ｂ区	弥生・壷	不明	やや粗；石英・長石中普	外面；にぶい黄色(10Ｙ R7/4) 内面；暗灰黄色(2.5Ｙ5/2)	体部小片	頸胴部境に二条の沈線	マメツ	良	
71	Ⅳ区ＤＳＤ02Ｃ・Ｄ区	弥生・壷	不明	中；石英・長石中普	外面；灰白色(10Ｙ R8/2) 内面；黒色(5Ｙ2/1)	頸部小片	半截竹管文，ヘラミガキ	ヘラミガキ	良	
72	Ⅳ区ＤＳＤ02遺物４	弥生・壷	不明	中；石英・長石小～大普	外面；にぶい黄橙色(10Ｙ R6/3) 内面；にぶい橙色(7.5Ｙ R6/4)	体部小片	ヘラミガキ	ナデ	良	ボール状の鉢の可能性も残る
73	Ⅳ区ＤＳＤ02Ｂ区上層	弥生・壷ないし甕底部	底；6.6	粗；石英・長石小～大多，円礫中小	外面；にぶい黄橙色(10Ｙ R7/4) 内面；にぶい黄橙色(10Ｙ R7/4)	底2/8	ヘラミガキ，ヘラがき沈線	指押さえ	良	
74	Ⅳ区ＤＳＤ02Ｔｒ4上層	弥生・甕・底部	底；7.4	やや粗；石英・長石中普，赤色粒小少	外面；にぶい黄橙色(10Ｙ R6/3) 内面；にぶい黄橙色(10Ｙ R7/4)	底1/8	指押さえ，マメツ	指押さえ，マメツ	良	
75	Ⅳ区ＤＳＤ02遺物２	弥生・壷ないし甕	底；8.0	粗；石英・長石中多，円礫中少	外面；にぶい橙色(7.5Ｙ R7/3) 内面；灰白色(2.5Ｙ7/1)	2/8存	指押さえ，ナデ	マメツ	良	
76	Ⅳ区ＤＳＤ02Ｃ区ベルトはずし	弥生・甕・底部	底；5.0	中；石英・長石小～中普	外面；にぶい黄橙色(10Ｙ R6/4) 内面；橙色(7.5Ｙ R6/6)	底2/8	マメツ	ヘラケズリ	良	
77	Ⅳ区ＤＳＤ02遺物14	弥生・底部	不明	やや粗石英・長石中普，円礫中少	外面；灰黄褐色(10Ｙ R5/2) 内面；灰白色(10Ｙ R8/2)	小片	指押さえ，マメツ	指押さえ，マメツ	やや軟	

報文番号	遺構名	器種名	法量	胎土	色調	残存率	外面調整	内面調整	焼成	備考
78	Ⅳ区ＤＳＤ02遺物５	弥生・蓋・底部	つまみ径7.0	粗；石英・長石中多，赤色粒小少，円礫中少	外面；浅黄橙色(10Ｙ R8/4) 内面；にぶい黄橙色(10Ｙ R7/4)	つまみ径1/8	指押さえ，マメツ	ナデ	良	
79	Ⅳ区ＤＳＤ02遺物21	弥生・甕	不明	やや粗；石英・長石中普	外面；にぶい褐色(7.5Ｙ R5/3) 内面；にぶい赤褐色(5Ｙ R5/4)	口小片	端部刻目	マメツ	良	
80	Ⅳ区ＤＳＤ02Ｔｒ３	弥生・甕	不明	粗；石英・長石小多，赤色粒中普	外面；にぶい黄橙色(10Ｙ R7/3) 内面；にぶい黄橙色(10Ｙ R7/4)	口小片	指押さえ	マメツ	やや軟	
81	Ⅳ区ＤＳＤ02遺物15	弥生・甕	不明	粗；石英・長石中多	外面；にぶい黄橙色(10Ｙ R7/4) 内面；黄灰色(2.5Ｙ R4/1)	体部小片	沈線１条 ヘラミガキ	マメツ	良	
82	Ⅳ区ＤＳＤ02－Ｂ区	弥生・甕	不明	粗；石英・長石中多	外面；にぶい黄褐色(10Ｙ R5/3) 内面；にぶい黄褐色(10Ｙ R5/3)	口小片	マメツ	マメツ	やや軟	逆Ｌ字形口縁
83	Ⅳ区ＤＳＤ02→Ｃ・Ｄ区最下層	弥生・壺	不明	やや粗；石英・長石中普	外面；黄灰色(2.5Ｙ R5/1) 内面；にぶい黄橙色(10Ｙ R6/3)	小片	頸部下半に沈線重弧文(3条)	指押さえ	良	
84	Ⅳ区ＤＳＤ02最下層，Ｃ・Ｄ区	弥生・壺	不明	やや粗；石英・長石中普，赤色粒中少	外面；にぶい黄橙色(10Ｙ R6/3) 内面；にぶい黄橙色(10Ｙ R7/2)	体部小片	底部外線；指押さえ 体部下位；ヘラ描き沈線	マメツ	良	
85	Ⅳ区ＤＳＤ02Ｂ区→最下層	弥生・甕	不明	中；石英・長石中普	外面；にぶい黄橙色(10Ｙ R7/2) 内面；にぶい黄橙色(10Ｙ R7/3)	口小片	端部刻目	不明	良	如意状口縁
87	Ⅳ区ＣＳＲ01上層	弥生・壺・口縁部	不明	細；石英・長石小少，角閃石小ごく少	外面；にぶい黄橙色(10Ｙ R6/3) 内面；にぶい黄橙色(10Ｙ R7/2)	口小片	口縁端部；凹線文(2条) 口縁部；ヨコナデ	ヨコナデ→斜線文	良	
88	Ⅲ区ＣＳＲ01上層・黒色粘質土	弥生・壺・口縁部	口；11.5	やや粗；石英・長石中多，赤色粒小ごく少，雲母小ごく少	外面；にぶい褐色(7.5Ｙ R5/4) 内面；にぶい黄色(2.5Ｙ6/3)	口2/8	マメツ 口縁端部；凹線文の有無不明	マメツ	良	口縁部に穿孔
89	Ⅲ区ＣＳＲ01上層・黒色粘質土	弥生・壺	口；9.6	中；石英・長石大普，赤色粒小少	外面；にぶい黄橙色(10Ｙ R7/2) 内面；灰黄褐色(10Ｙ R6/2)	口完存	口縁端部；内側に刻目 口縁部；指押さえ，ヨコナデ→ヘラミガキ	ヨコナデ	良	口縁部と体部境に２条以上の沈線
90	Ⅳ区ＡＳＲ01埋土最上層，弥生包含層粘質土	弥生・壺	不明	中；石英・長石中普，赤色粒小少，雲母小少，円礫小少	外面；にぶい黄橙色(10Ｙ R7/2) 内面；にぶい黄色(2.5Ｙ6/3)	小片	体部；ハケメ？ マメツ	体部；指押さえ→ヨコナデ	やや軟	
91	Ⅳ区ＣＳＲ01上層	弥生・甕	口；14.8	中；石英・長石小少，赤色粒小少，雲母小少	外面；にぶい橙色(7.5Ｙ R6/4) 内面；にぶい橙色(7.5Ｙ R6/4)	頸部1/8	口縁端部；凹線文(1条) 頸部；ヨコナデ 体部；マメツ	口縁部；ヘラミガキ 体部；指押さえ→ナデ	やや軟	
92	Ⅲ区ＣＳＲ01上層・黒色粘上質	弥生・甕	口；17.0	やや粗；石英・長石小多，赤色粒小ごく少，雲母小少	外面；にぶい褐色(7.5Ｙ R5/4) 内面；にぶい褐色(7.5Ｙ R5/4)	頸部1/4	口縁部；ヨコナデ，マメツ	体部；指押さえ，マメツ	良	
93	Ⅳ区ＣＳＲ01上層	弥生・甕	口；18.8	細；石英・長石小少，赤色粒小少	外面；明褐色(7.5Ｙ R5/6) 内面；明褐色(7.5Ｙ R5/6)	小片	マメツ	ヨコナデ→ヘラミガキ（ヨコ）	良	
94	Ⅳ区ＣＳＲ01上層	弥生・甕	不明	中；石英・長石小普，赤色粒小普	外面；にぶい黄橙色(10Ｙ R6/3) 内面；にぶい黄橙色(10Ｙ R7/3)	小片	口縁端部；下端に刻目 頸部；指押さえ→ヘラミガキ（ヨコ）	マメツ	良	
95	Ⅶ区ＡＳＲ01上部	弥生・壺ないし甕	底；7.0	中；石英・長石中普	外面；にぶい黄橙色(10Ｙ R6/4) 内面；にぶい黄橙色(10Ｙ R6/3)	底1/8	マメツ	指押さえ→ヘラケズリ	良	
96	Ⅲ区ＣＳＲ01上層・黒色粘質土	弥生・甕・底部	底；5.7	やや粗；石英・長石中普，赤色粒小少，円礫小少	外面；にぶい黄褐色(10Ｙ R5/4) 内面；にぶい黄褐色(10Ｙ R5/3)	底完存	ヘラミガキ（タテ）	指押さえ（マメツ）	良	
97	Ⅳ区ＡＳＲ01埋土最上層，弥生包含層・粘質土	弥生・高坏ないし鉢	不明	細；石英・長石小少，赤色粒小少，雲母小少	外面；にぶい橙色(7.5Ｙ R6/4) 内面；灰褐色(7.5Ｙ R4/2)	小片	口縁端部；凹線文(3条) 口縁部；凹線文(3条)	ヨコナデ→ヘラミガキ	良	
98	Ⅳ区ＣＳＲ01上層	弥生・高坏ないし鉢	不明	中；石英・長石小少，赤色粒小少，角閃石小少	外面；にぶい褐色(7.5Ｙ R5/3) 内面；灰黄褐色(10Ｙ R4/2)	口小片	口縁部；凹線文(2条)	ヨコナデ	やや軟	
100	Ⅳ区ＣＳＲ01中層	弥生・壺	不明	やや粗；石英・長石中普，赤色粒小少	外面；浅黄橙色(10Ｙ R8/3) 内面；にぶい黄橙色(10Ｙ R7/2)	小片	マメツ	指押さえ，マメツ	－	上半１条（以上），下半２条の平行沈線間に斜線文
101	Ⅳ区ＣＳＲ01ベルト１中層	弥生・壺	口；10.0	中；石英・長石小普，赤色粒小少，雲母小少	外面；灰褐色(7.5Ｙ R4/2) 内面；にぶい褐色(7.5Ｙ R5/4)	小片	口縁端部；凹線文(3条) 口縁部；ヨコナデ	ヨコナデ，板ナデ	良	頸部に刻目突帯
102	Ⅳ区ＣＳＲ01ベルト１中層	弥生・甕	口；14.0	中；石英・長石中普，赤色粒小少，雲母小少	外面；にぶい黄橙色(10Ｙ R6/3) 内面；にぶい黄橙色(10Ｙ R6/3)	口2/8	口縁端部；凹線文(2条) 頸部；ヨコナデ 体部；タテハケ	口縁部；ヨコナデ 体部；ヘラミガキ（タテ・ヨコ）	良	口縁端部に赤色顔料付着
103	Ⅳ区ＣＳＲ01中層	弥生・甕	不明	中；石英・長石中普，雲母小ごく少	外面；にぶい黄橙色(10Ｙ R6/3) 内面；暗灰黄色(2.5Ｙ5/2)	口小片	口縁端部；凹線文(2条) 頸部；ヨコナデ	マメツ	－	
104	Ⅳ区ＣＳＲ01ベルト１中層	弥生・甕	不明	中；石英・長石小普，赤色粒中ごく少	外面；にぶい黄橙色(10Ｙ R7/3) 内面；黄灰色(2.5Ｙ4/1)	小片	マメツ	指押さえ，マメツ	やや軟	
105	Ⅳ区ＣＳＲ01中層	不明	口；16.0	粗；石英・長石中多，赤色粒小少，円礫小少	外面；にぶい黄橙色(10Ｙ R7/4) 内面；にぶい黄橙色(10Ｙ R6/4)	小片	マメツ	マメツ	軟	如意状口縁
106	Ⅳ区ＣＳＲ01中層	弥生・甕	不明	やや粗；石英・長石大普，赤色粒中少	外面；にぶい橙色(7.5Ｙ R7/4) 内面；にぶい黄橙色(10Ｙ R7/4)	小片	マメツ	マメツ	やや軟	口縁部下に突帯（刻目の有無は不明瞭）
107	Ⅳ区ＣＳＲ01ベルト中層	弥生・高坏ないし鉢	口；26.0	細；石英・長石中少，雲母小少	外面；にぶい橙色(7.5Ｙ R6/4) 内面；明褐色(7.5Ｙ R5/6)	小片	口縁部；凹線文(4条)，ヨコナデ	不明	良	
108	Ⅳ区ＣＳＲ01ベルト１中層	弥生・鉢ないし高坏	不明	中；石英・長石中普，赤色粒小少，雲母小ごく少	外面；にぶい褐色(7/5Ｙ R5/4) 内面；にぶい褐色(7/5Ｙ R5/4)	小片	口縁部；凹線文２条	ヨコナデ	良	
109	Ⅳ区ＣＳＲ01中層	弥生・高坏・口縁部	不明	細；石英・長石小少，赤色粒小少，角閃石小少	外面；にぶい橙色(7.5Ｙ R6/4) 内面；にぶい橙色(7.5Ｙ R6/4)	口小片	指押さえ→ヨコナデ（マメツ）	指押さえ→ヨコナデ（マメツ）	良	

報文番号	遺構名	器種名	法量	胎土	色調	残存率	外面調整	内面調整	焼成	備考
110	Ⅳ区ＣＳＲ01ベルト中層	弥生・高坏・脚部	底；12.0	やや粗；石英・長石小～大普，赤色粒中少	外面；灰黄色(2.5Y7/2) 内面；灰黄色(2.5Y7/2)	底3/8	指押さえ，ナデ→斜格子文，平行文，山形文（ヘラミガキ），刺突文	ヘラケズリ，脚端部のみ回転ナデ	良	
111	Ⅳ区ＣＳＲ01ベルト１中層	弥生・高坏・脚	底；11.2	中；石英・長石小多，赤色粒中少，角閃石小少	外面；にぶい橙色(7.5YR6/4) 内面；褐灰色(7.5YR4/1)	底2/8	指押さえ→ヘラミガキ（下半はヨコ，上半タテ） 脚端はヨコナデ（凹線文１条）	下半ヘラケズリ 上半指押さえ，絞り目	良	脚端付近に刺突文
112	Ⅳ区ＣＳＲ01中層	弥生・蓋	口；つまみ径6.7	細；石英・長石中少，円礫小少	外面；にぶい黄橙色(10YR7/2) 内面；にぶい黄橙色(10YR7/2)	つまみ径1/4	ヘラミガキ，端部に沈線(1条)	マメツ	良	
113	Ⅳ区ＣＳＲ01ベルト１中層	弥生・蓋	口；5.4	中；石英・長石中普，赤色粒小少	外面；灰黄褐色(10YR6/2) 内面；にぶい黄橙色(10YR6/3)	口1/2	指押さえ	指押さえ	良	底部の可能性も残る
116	Ⅳ区ＣＳＲ01南下層	弥生・壷	口；15.4	中；石英・長石中小，雲母小ごく少，円礫中少	外面；にぶい黄橙色(10YR7/2) 内面；にぶい黄橙色(10YR6/3)	口2/8 体部1/5	口縁部；指押さえ→ヘラミガキ（ヨコ） 頸部；指押さえ→ヘラミガキ（ヨコ）	口縁部；指押さえ→ヘラミガキ（ヨコ） 頸部；指押さえ→ヘラミガキ（ヨコ）	良	頸胴部境に１条の沈線，口頸部に段 頸部に４条沈線のタテ区画１線
117	Ⅳ区ＣＳＲ01南下層	弥生・壷	口；15.4	116と同	外面；にぶい黄橙色(10YR7/2) 内面；灰黄褐色(10YR6/2)	口1/8	指押さえ→ヘラミガキ（ヨコ）	指押さえ→ヘラミガキ（ヨコ）	良	116と同一個体 口頸部に段
118	Ⅳ区ＣＳＲ01南下層	弥生・壷・体部	不明	116と同	外面；灰黄褐色(10YR6/2) 内面；にぶい黄橙色(10YR7/2)	体部1/8	指押さえ→ヘラミガキ（ヨコ）	指押さえ→ヘラミガキ（ヨコ）	良	116と同一個体 頸部に４条１単位からまるタテ方向平行文
119	Ⅳ区ＣＳＲ01下層	弥生・甕	口；19.0	中；石英・長石中普，赤色粒小ごく少，角閃石小ごく少	外面；灰白色(10YR4/2) 内面；灰白色(10YR3/2)	頸部1/8	口縁部；ヨコナデ 体部；タテハケ	口縁部；ヨコナデ 体部；上半ヨコナデ，下半ヘラケズリ	やや硬	
120	Ⅳ区ＣＳＲ01下層	弥生・甕	口；20.0	やや粗；石英・長石中多，赤（黒）色粒小少，円礫中少	外面；明赤褐色(5YR5/6) 内面；橙色(7.5YR6/6)	口2/8	口縁端部；刻目 頸部；半截竹管文，ヘラミガキ	指押さえ→（ヨコ）ナデ	良	121と同一個体
121	Ⅳ区ＣＳＲ01下層	弥生・甕	不明	やや粗；石英・長石中多，赤（黒）色粒小少，円礫中少	外面；明赤褐色(2.5YR5/8) 内面；にぶい黄橙色(10YR6/4)	底完存	ヘラミガキ（タテ）	底部；指押さえ 体部；マメツ	良	外；被熱痕 内；煤付着
122	Ⅳ区ＣＳＲ01南下層	弥生・壷ないし甕底部	底；7.5	やや粗；石英・長石大普，赤色粒小少，円礫小少	外面；にぶい黄橙色(10YR7/2) 内面；にぶい黄橙色(10YR7/3)	底2/8	指押さえ（マメツ）	指押さえ（マメツ）	良	底部円盤充填法
123	Ⅳ区ＣＳＲ01南下層	弥生・甕・底部	底；7.7	やや粗；石英・長石中普	外面；灰白色(10YR8/2) 内面；灰白色(10YR8/2)	底1/8	底部外縁；指押さえ	マメツ	やや軟	
128	Ⅳ区ＣＳＲ01埋土掘削中	弥生・壷・口縁部	不明	やや粗；石英・長石中普，赤色粒小少，黒色石粒小ごく少	外面；橙色(5YR6/8) 内面；にぶい黄橙色(10YR7/3)	口小片	口縁端部；削り目（マメツ）	マメツ	良	口縁端部に凹線文なし
129	Ⅳ区ＣＳＲ01東側断割	弥生・壷ないし甕	不明	中；石英・長石中普，雲母中少	外面；にぶい褐色(7.5YR5/4) 内面；にぶい褐色(7.5YR5/4)	小片	不明	不明	不明	
130	Ⅳ区ＣＳＲ01埋土掘削中	弥生・甕	口；18.2	中；石英・長石中少，赤色粒小少，雲母小ごく少	外面；橙色(7.5YR6/6) 内面；明褐色(7.5YR5/6)	口1/8	口縁端部；凹線文(2条) 口縁部；ヨコナデ	口縁部；ヨコナデ→ヘラミガキ	良	
131	Ⅳ区ＣＳＲ01埋土掘削中	弥生・甕	不明	やや粗；石英・長石中多，赤色粒小少	外面；灰白色(10YR8/2) 内面；浅黄橙色(10YR8/3)	口小片	口縁端部；刻目 口縁部；指押さえ 体部；（マメツ）	マメツ	やや軟	甕で図化したが，傾きを変化させると鉢の可能性も残る
132	Ⅳ区ＣＳＲ01埋土掘削中	弥生・甕・底部	底；7.0	中；石英・長石中普，赤色粒中少	外面；にぶい褐色(7.5YR5/4) 内面；にぶい黄橙色(10YR7/4)	底3/8	マメツ	指押さえ	やや軟	
133	Ⅳ区ＣＳＲ01東側断割	弥生・甕・底部	底；3.8	やや粗；石英・長石大普	外面；にぶい黄橙色(10YR6/3) 内面；にぶい黄橙色(10YR6/3)	底1/2	指押さえ（マメツ）	指押さえ（マメツ）	良	
134	Ⅳ区ＣＳＲ01埋土掘削中	弥生・鉢ないし高坏	不明	やや粗；石英・長石小普，雲母小少	外面；にぶい褐色(7.5YR5/4) 内面；にぶい褐色(7.5YR5/4)	口小片	口縁端部；刻目， 口縁部；ヘラミガキ（ヨコ） 体部；ヘラミガキ（タテ）	ヨコナデ（マメツ）	やや硬	
136	Ⅶ区ＡＳＲ01上層	弥生・底部	底；8.2	粗；石英・長石中多，赤色粒小少	外面；灰黄褐色(10YR6/2) 内面；灰黄褐色(10YR6/2)	底2/8	指押さえ（マメツ）	マメツ	良	底部円盤充填
137	Ⅶ区ＡＳＲ01上部	弥生・底部	底；8.2	粗；石英・長石中多，赤色粒小普	外面；浅黄橙色(10YR8/3) 内面；浅黄橙色(10YR8/3)	底2/8	指押さえ（マメツ）	マメツ	やや軟	
138	Ⅶ区ＡＳＲ01上部	弥生・底部	底；7.4	やや粗；石英・長石中普，赤色粒小ごく少，円礫中少	外面；灰白色(10YR8/1) 内面；灰白色(10YR8/1)	底5/8	指押さえ（マメツ）	指押さえ（マメツ）	やや軟	底部円盤充填
139	Ⅶ区ＡＳＲ01上部	弥生・甕ないし壷底部	底；7.8	粗；石英・長石中多，赤色粒中普	外面；にぶい橙色(7.5YR6/4) 内面；にぶい橙色(7.5YR7/4)	底7.1	指押さえ（マメツ）	指押さえ（マメツ）	やや軟	
140	Ⅶ区ＡＳＲ01上層	弥生・壷	不明	粗；石英・長石小～中多	外面；にぶい赤褐色(5YR5/4) 内面；明赤褐色(5YR5/6)	口小片	マメツ	マメツ	やや軟	
141	Ⅶ区ＡＳＲ01上部	弥生・甕	不明	やや粗；石英・長石中普	外面；にぶい黄橙色(10YR6/3) 内面；にぶい黄橙色(10YR7/4)	口小片	マメツ	マメツ	やや軟	
142	Ⅶ区ＡＳＲ01上層	弥生・高坏ないし鉢	不明	細；石英・長石小普	外面；黒色(5Y2/1) 内面；黒色(5Y2/1)	口小片	指押さえ，ヨコナデ→ヘラミガキ	ヨコナデ	良	
143	Ⅶ区ＡＳＲ01上部	弥生・高坏・脚部	底；10.5	中；石英・長石中普，赤（黒）色粒中少，雲母中ごく少	外面；にぶい褐色(7.5YR5/4) 内面；にぶい褐色(7.5YR5/4)	底1/8	指押さえ→ヨコナデ 刺突文，擬直線文	指押さえ→ヘラケズリ（ヨコ）	良	脚部下半外面に粘土を貼付
147	Ⅶ区ＢＳＲ03Ｂ区	弥生・甕・底部	底；6.8	中；石英・長石中普，赤色粒中少	外面；明赤褐色(2.5YR5/6) 内面；にぶい黄橙色(10YR6/4)	底1/8	指押さえ（マメツ）	指押さえ（マメツ）	良	二次焼成を被る

報文番号	遺構名	器種名	法量	胎土	色調	残存率	外面調整	内面調整	焼成	備考
148	Ⅶ区BSR03B区	弥生・甕・底部	底；6.7	粗；石英・長石中多，赤色粒中少，円礫中ごく少	外面；にぶい黄橙色(10YR6/3) 内面；橙色(5YR6/6)	底2/8	指押さえ	指押さえ	良	
149	Ⅶ区BSR03－Tr1	弥生・鉢	不明	中；石英・長石小～中普，赤色粒小少，角閃石小少，雲母小少	外面；明褐色(7.5YR5/6) 内面；灰黄褐色(10YR4/2)	小片	マメツ	体部；ヘラケズリ	良	
150	Ⅶ区BSR03C区	弥生・高坏	不明	中；石英・長石小～中普，赤色粒小少，角閃石小少	外面；にぶい黄褐色(10YR5/3) 内面；橙色(7.5YR6/6)	小片	マメツ	マメツ	良	
151	Ⅳ区D西壁包含層遺物1(5層中)	弥生・甕	口；15.4	中；石英・長石小普，赤色粒小ごく少，角閃石小ごく少	外面；褐色(10YR4/4) 内面；にぶい黄褐色(10YR5/4)	口1/8	口縁部；ヨコナデ 体部；マメツ	口縁部；ヨコナデ 体部；ヘラケズリ	やや軟	
152	Ⅳ区D西壁包含層遺物1(5層中)	弥生・壺・底部	底；7.3	中；石英・長石中普，赤色粒中少，雲母中ごく少	外面；褐色(7.5YR4/6) 内面；にぶい褐色(7.5YR5/4)	底7.4	ヘラミガキ（タテ）	指押さえ→ヘラケズリ	良	底部あげ底
156	Ⅱ区ASP53（SB01）	土質・坏	口；12.6 器；(3.4) 底；(7.8)	細；石英・長石小普	外面；浅黄橙色(10YR8/3) 内面；浅黄橙色(10YR8/3)	2/8存	口縁部；回転ナデ	回転ナデ	良	
157	Ⅲ区A南SP11（SB01）	土質・坏	不明	細；石英・長石小少	外面；橙色(7.5YR7/6) 内面；にぶい橙色(5YR6/4)	小片	回転ナデ	回転ナデ	良	
158	Ⅲ区A南SP12（SB01）	黒色・椀	不明	細；石英・長石小少	外面；浅黄色(2.5Y8/3) 内面；黒色(5Y2/1)	小片	指押さえ，回転ナデ	ヘラミガキ	良	A類
159	Ⅲ区A南SP17（SB01）	土質・甕	不明	やや粗；石英・長石中普，赤色粒中普，雲母；小ごく少	外面；にぶい黄橙色(10YR6/3) 内面；にぶい黄橙色(10YR6/4)	小片	指押さえ→ヨコナデ	ヨコナデ	良	
160	Ⅶ区ASP26（SB01）	土瓶・甕	不明	細；石英・長石小少	外面；灰黄色(2.5Y7/2) 内面；灰白色(5Y7/1)	小片	正格子叩き	あて具痕→指押さえ，ナデ，ヨコナデ	やや軟	
161	Ⅶ区ASP26（SB01）第1遺構面上面精査中	土瓶・甕	不明	細；石英・長石小～中少	外面；灰色(7.5Y4/1) 内面；灰黄褐色(10YR6/2)	体小片	正格子叩き	指押さえ，ナデ，ヨコナデ	やや軟	体部～底部
162	Ⅶ区ASP36（SB01）	土質・坏	口；14.4	細；石英・長石小～中少	外面；にぶい橙色(5YR7/4) 内面；にぶい橙色(7.5YR7/4)	2/8存	回転ナデ	回転ナデ	やや軟	
163	Ⅱ区ASK04	土質・小皿	底；5.6	細；石英・長石中少	外面；にぶい橙色(7.5YR7/4) 内面；にぶい黄橙色(10YR7/3)	底3/8	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラキリ（R）	回転ナデ，ナデ	良	
164	Ⅱ区ASK04	土質・坏	口；14.0 器；1.7 底；11.0	中；石英・長石中普，赤色粒小ごく少，角閃石ごく小少	外面；にぶい黄橙色(10YR6/4) 内面；にぶい灰黄色(2.5Y6/2)	1/8	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラキリ（R？）	回転ナデ	良	
165	Ⅱ区ASK07	土質・小皿	口；8.0 器；1.7 底；3.0	細；石英・長石大ごく少	外面；にぶい橙色(7.5YR7/4) 内面；にぶい橙色(5YR7/4)	1/8	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラキリ（L）	回転ナデ	良	二次焼成
166	Ⅱ区ASK07	黒色・椀	底；5.8	細；石英・長石小ごく少，赤色粒小少	外面；浅黄橙色(10YR8/3) 内面；オリーブ黒色(5Y3/1)	4/8	高台貼付	ヘラミガキ	良	A類
167	Ⅱ区ASK07	土質・鍋	不明	中；石英・長石中普	外面；灰黄褐色(10YR6/2) 内面；にぶい黄橙色(10YR7/3)	小片	叩き→指押さえ，ヨコナデ	ハケ目	良	
168	Ⅱ区ASK07	土質・鍋	口；26.0	中；石英・長石大～小普，赤色粒中少，黒色石粒小少	外面；にぶい褐色(7.5YR5/3) 内面；明赤褐色(2.5YR5/6)	2/8存	体部上半；指押さえ→ナデ 体部下半；格子叩き	体部上半；板ナデ 体部下半；ハケ目	やや硬	
169	Ⅱ区ASK08	瓦器・椀	底；4.8	細；石英・長石小少，赤色粒小ごく少	外面；浅黄色(2.5Y7/4) 内面；黄灰色(2.5Y6/1)	底2/8	指押さえ，ヘラミガキの有無は不明	マメツ	やや軟	
170	Ⅱ区ASK08	土質・甕	不明	中；石英・長石中普，赤色粒小少	外面；にぶい黄褐色(10YR5/3) 内面；にぶい黄橙色(10YR7/4)	小片	指押さえ→ヨコナデ 体部；タテハケ	ヨコナデ	良	
171	Ⅱ区ASK09	須恵・椀	底；4.4	細；石英・長石小少	外面；灰白色(2.5Y8/1) 内面；灰白色(2.5Y8/1)	底3/8存	指押さえ，回転ナデ，ヘラミガキ	板ナデ，ヘラミガキ不明	やや軟	西村型土器椀
172	Ⅱ区ASK11	瓦器・椀	口；15.6	細；石英・長石小少	外面；灰黄色(2.5Y7/2) 内面；灰白色(2.5Y7/1)	4/8存	指押さえ，口縁部のみ回転ナデ	ヘラミガキ	やや軟	吸着した炭素は消失
173	Ⅱ区ASK12	須恵・椀	不明	細；石英・長石小少	外面；灰黄色(2.5Y7/2) 内面；灰黄色(2.5Y7/2)	小片	回転ナデ	回転ヘラミガキ	良	
174	Ⅱ区ASK12	瓦器・椀	口；15.6 器；4.8 底；4.8	細；石英・長石小少	外面；灰色(N4/0) 内面；灰色(N4/0)	1/8存	口縁部；ヨコナデ 体部；指押さえ	ヘラミガキ(見込み部平行線文)	良	和泉型，尾上編年Ⅲ－1期
175	Ⅱ区ASK12	須恵・鉢	不明	細；石英・長石小ごく少	外面；灰色(7.5Y5/1) 内面；灰色(7.5Y5/1)	小片	板ナデ，ヨコナデ	板ナデ	硬	
176	Ⅱ区BSK01	土質・小皿	口；8.0 器；1.25 底；6.0	細；石英・長石小ごく少	外面；にぶい黄橙色(10YR7/3) 内面；にぶい黄橙色(10YR7/3)	3/8存	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り（R）	回転ナデ，ナデ	良	
177	Ⅱ区BSK01	土質・小皿	口；9.0 器；1.7 底；6.8	細；石英・長石小少	外面；にぶい橙色(7.5YR7/4) 内面；にぶい橙色(7.5YR6/4)	1/8存	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り（R？）	回転ナデ	良	口縁部下位に回転ヘラ切り時の工具痕が入る
178	Ⅱ区BSK01	土質・小皿	器；(1.3)	細；石英・長石小少，赤色粒小少	外面；にぶい橙色(7.5YR7/4) 内面；にぶい橙色(7.5YR6/4)	1/8存	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り	回転ナデ	良	
179	Ⅱ区BSK01	土質・小皿	口；9.0 器；(1.6) 底；7.3	細；石英・長石中少	外面；浅黄色(2.5Y7/3) 内面；灰黄色(2.5Y7/2)	7/8存	底部；回転糸切り	回転ナデ，ナデ	良	

報文番号	遺構名	器種名	法量	胎土	色調	残存率	外面調整	内面調整	焼成	備考
180	Ⅱ区BSK01	土質・坏	口；15.0 器；(3.0) 底；7.4)	細；石英・長石中普，赤色粒小少	外面；にぶい橙色(7.5YR6/4) 内面；にぶい橙色(5YR6/4)	1/8存	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り	回転ナデ，ナデ	良	
181	Ⅱ区BSK01	瓦器・皿	口；9.6 器；1.6 底；7.8	細；石英・長石小ごく少	外面；灰色(5Y4/1) 内面；灰色(5Y5/1)	1/8存	口縁部；回転ナデ 底部；指押さえ	ナデ	良	
182	Ⅱ区BSK01	瓦器・甕	不明	やや粗；石英・長石小普，角閃石小ごく少	外面；にぶい橙色(7.5YR6/4) 内面；にぶい褐色(7.5YR5/4)	小片	指押さえ→板ナデ	マメツ	良	
183	Ⅱ区BSK01	瓦器・鍋	不明	細；石英・長石小ごく少，角閃石小普	外面；暗灰黄色(2.5Y5/2) 内面；にぶい黄橙色(10YR6/3)	小片	指押さえ→タテハケ	ヨコナデ	良	
184	Ⅱ区BSK03	瓦器・小皿	口；7.6 器；1.2 底；5.4	細；石英・長石中少，赤色粒小ごく少	外面；にぶい黄橙色(10YR7/3) 内面；浅黄色(2.5Y7/3)	5/8存	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り（L？）	回転ナデ，ナデ	良	
185	Ⅱ区BSK05	須恵・鉢	不明	細；石英・長石小少	外面；灰白色(5Y7/2) 内面；灰白色(5Y7/2)	1/8存	マメツ	マメツ	やや軟	
186	Ⅱ区BSK06	瓦器・小皿	口；9.2 器；(1.2) 底；8.0	細；石英・長石小少，赤色粒小少	外面；にぶい橙色(7.5YR6/4) 内面；にぶい橙色(7.5YR6/4)	小片	口縁端部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り（L）	回転ナデ	良	
187	Ⅱ区BSK06	瓦器・小皿	底；4.6	中；石英・長石中普，赤色粒中少	外面；灰白色(10YR8/2) 内面；にぶい黄橙色(10YR7/2)	6/8存	底部；ナデ	ナデ	良	
188	Ⅱ区BSK06	瓦器・椀	底；5.0	細；石英・長石小少	外面；灰色(N4/0) 内面；灰色(N4/0)	底1/8存	指押さえ	ヘラミガキ	良	尾上編年Ⅲ－3期か
189	Ⅱ区BSX01遺構面精査中	青磁・碗	口；16.0	微	外面；オリーブ黄色(5Y6/3) 内面；オリーブ黄色(5Y6/3)	1/8存	口縁端部下に1条の沈線	内面中位から上位に飛雲文を片掘り	良	横田・森田分類Ⅰ－4類
190	Ⅲ区CSK01	瓦器・椀	不明	細；石英・長石小少	外面；灰色(5Y6/1) 内面；灰色(N5/0)	小片	ヘラミガキ	ヘラミガキ	やや硬	外面のヘラミガキ密度が高い
191	Ⅲ区CSK01	須恵・小皿	不明	細；石英・長石小少	外面；灰色(N5/0) 内面；灰色(N5/0)	底1/8存	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り（L）	回転ナデ	硬	
192	Ⅲ区CSK01	土師・甕	不明	細；石英・長石小少	外面；灰色(N5/0) 内面；灰色(N6/0)	小片	底部；長格子叩き→ナデ 体部；長格子叩き→ナデ	指押さえ，ナデ	硬	
193	Ⅲ区CSK02第1遺構面	瓦器・小皿	口；7.2 器；1.5 底；4.8	細；石英・長石小少	外面；灰白色(10YR8/2) 内面；灰白色(10YR8/2)	1/8存	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り	回転ナデ	良	
194	Ⅲ区CSK02第1遺構面	黒色・椀	底；6.4	細；石英・長石ごく小ごく少	外面；灰白色(10YR8/2) 内面；オリーブ黒色(5Y3/1)	底1/8存	高台貼付	マメツ	良	A類
195	Ⅲ区CSK02第1遺構面	黒色・椀	底；5.6	細；石英・長石中～小少	外面；灰白色(10YR8/2) 内面；黄灰色(2.5Y4/1)	底2/8存		マメツ	良	A類
196	Ⅲ区CSK04第1遺構面	瓦器・小皿	口；9.0 器；1.5 底；6.7	細；石英・長石小少，赤色粒小少	外面；浅黄橙色(10YR8/4) 内面；浅黄橙色(10YR8/3)	1/8存	回転ナデ	回転ナデ	良	
197	Ⅲ区CSK05第1遺構面	瓦器・椀	底；6.0	中；石英・長石中～小普	外面；にぶい黄橙色(10YR7/1) 内面；褐灰色(10YR6/1)	底1/8	高台貼付	マメツ	良	
198	Ⅲ区CSK08第1遺構面（断面ベルト中）	瓦器・小皿	口；6.8 器；1.3 底；4.8	細；石英・長石小少	外面；灰黄色(2.5Y7/2) 内面；灰黄色(2.5Y7/2)	1/8存	回転ナデ	回転ナデ	良	
199	Ⅲ区CSK08	瓦器・椀	不明	細；石英・長石ごく小ごく少	外面；灰白色(2.5Y8/2) 内面；灰白色(2.5Y8/1)	小片	マメツ	マメツ	良	吉備系土師器椀か見込みに二次焼成痕
200	Ⅲ区CSK08第1遺構面（断面ベルト中）	須恵・鉢	不明	細；石英・長石小少	外面；灰色(5Y4/1) 内面；灰色(5Y4/1)	小片	強い板ナデ→ヨコナデ	板ナデ→ヨコナデ	良	
201	Ⅲ区CSK08	瓦器・甕	不明	やや粗；石英・長石中多	外面；にぶい黄褐色(10YR5/3) 内面；にぶい黄橙色(10YR6/3)	小片	指押さえ→ヨコナデ	板ナデ？	良	
202	Ⅲ区CSK09	瓦器・小皿	口；9.6 器；1.2 底；5.6	細；石英・長石小少	外面；灰白色(10YR8/2) 内面；灰白色(2.5Y8/2)	1/8	口縁部；回転ナデ 底部；マメツ	回転ナデ	良	
203	Ⅲ区CSK09第1遺構面	瓦器・椀	不明	細；石英・長石小少	外面；灰白色(2.5Y8/1) 内面；灰白色(2.5Y8/1)	1/8	回転ナデ	マメツ	やや軟	和泉型
204	Ⅲ区CSK11	黒色・椀	底；7.6	細；石英・長石ごく小ごく少	外面；オリーブ黒色(5Y3/1) 内面；灰白色(10YR8/2)	1/8	高台貼付	マメツ	良	A類
205	Ⅲ区CSK11	瓦器・椀	不明	細；石英・長石小少	外面；灰色(N4/0) 内面；灰色(N4/0)	口小片	指押さえ→ヨコナデ	回転ヘラミガキ	やや軟	
206	Ⅶ区ASK02	瓦器・小皿	口；8.8 器；1.3 底；6.2	細；石英・長石小ごく少	外面；にぶい橙色(7.5YR7/4) 内面；浅黄橙色(10YR8/3)	1/8存	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り	回転ナデ	良	
207	Ⅶ区ASK02	土質・小皿	不明	細；石英・長石小少	外面；にぶい黄橙色(10YR7/2) 内面；にぶい黄橙色(10YR7/2)	小片	底部；回転ヘラ切り（R）	回転ナデ	良	
208	Ⅶ区ASK02	土質・椀	底；5.8	中；石英・長石中普	外面；灰白色(2.5Y8/1) 内面；灰白色(2.5Y8/1)	底1/8	高台貼付	マメツ	やや軟	焼成不良の須恵器椀の可能性が残る
209	Ⅶ区ASK08	須恵・椀	口；15.6	細；石英・長石小少	外面；灰白色(5Y8/1) 内面；灰白色(5Y8/1)	1/8存	指押さえ→回転ナデ	マメツ	やや軟	
210	Ⅱ区ASD01	須恵・坏	不明	細；石英・長石小少	外面；灰色(N6/1) 内面；灰色(7.5Y6/1)	小片	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り	回転ナデ	やや硬	皿の可能性も残る

報文番号	遺構名	器種名	法量	胎土	色調	残存率	外面調整	内面調整	焼成	備考
211	Ⅱ区ＡＳＤ01	東播・捏鉢	不明	やや粗；石英・長石中普	外面；灰色(5Ｙ6/1) 内面；灰色(5Ｙ6/1)	小片	回転ナデ	回転ナデ	良	山伸Ｃ２類
212	Ⅱ区ＡＳＤ02	瓦器・椀	口；12.2	細；石英・長石中少	外面；浅黄橙色(10Ｙ R8/3) 内面；浅黄橙色(10Ｙ R8/3)	小片	指押さえ 口縁部のみヨコナデ	ヘラミガキ	良	吸着した炭素消失
213	Ⅱ区ＡＳＤ03	土質・小皿	口；8.0 器；1.5 底；4.8	細；石英・長石小少	外面；にぶい橙色(7.5Ｙ R7/4) 内面；にぶい橙色(7.5Ｙ R7/4)	4/8	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り（Ｌ）	回転ナデ	良	
214	Ⅱ区ＡＳＤ03	土質・坏	口；10.3	細；石英・長石中～小少	外面；にぶい黄橙色(10Ｙ R7/2) 内面；灰白色(10Ｙ R8/2)	1/8	回転ナデ	回転ナデ	良	
215	Ⅱ区ＡＳＤ03	東播・捏鉢	不明	やや粗；石英・長石中普	外面；黄灰色(2.5Ｙ6/1) 内面；灰白色(10Ｙ R7/1)	小片	底部；糸切り	ナデ	やや硬	
216	Ⅱ区ＡＳＤ03	青磁・碗	不明	微	外面；灰オリーブ色(5Ｙ6/2) 内面；灰オリーブ色(5Ｙ6/2)	小片	蓮弁文（櫛目なし）	不明	－	
217	Ⅱ区ＡＳＤ05（ＳＤ03の北に接する溝状遺構）	須恵・椀	底；5.1	細；石英・長石小ごく少	外面；灰白色(2.5Ｙ8/1) 内面；灰白色(2.5Ｙ8/1)	底2/8	指押さえ→回転ナデ	板ナデ（→ヘラミガキ）	やや軟	
218	Ⅱ区ＢＳＤ01	土瓶・鉢	不明	中；石英・長石中少	外面；灰色(Ｎ4/1) 内面；灰色(Ｎ6/1)	小片	指押さえ→板ナデ？	板ナデ	良	片口部がわずかにみられる佐藤分類鉢Ｅ－４
219	Ⅱ区ＣＳＤ03	瓦器・椀	口；13.9	細；石英・長石中少	外面；黄褐色(2.5Ｙ5/4) 内面；灰黄色(2.5Ｙ7/2)	4/8	口縁部；ヨコナデ 体部；指押さえ	マメツ	やや軟	和泉型
220	Ⅱ区ＣＳＤ03	白磁・皿	底；3.7	微	外面；灰白色(7.5Ｙ7/1) 内面；灰白色(7.5Ｙ7/1)	底6/8	化粧土有	見込みに段を有する	不明	横田・森田分類白磁Ⅲ Ⅵ－１ｂ類
221	Ⅲ区ＢＳＤ02	土質・小皿	口；8.0 器；1.3 底；6.0	細；石英・長石小少，赤色粒小少	外面；灰黄褐色(10Ｙ R6/2) 内面；黄灰色(2.5Ｙ6/1)	1/8	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り（Ｒ）	回転ナデ	良	二次焼成を被る
222	Ⅲ区ＢＳＤ02	瓦器・椀	口；15.6	中；石英・長石小普	外面；オリーブ黒色(5Ｙ3/1) 内面；オリーブ黒色(5Ｙ3/1)	1/8存	指押さえ，口縁部のみヨコナデ	ヘラミガキ	やや軟	尾上編年Ⅲ－２ないしⅢ期
223	Ⅲ区ＢＳＤ02	瓦器・椀？	口；15.6	細；石英・長石小少	外面；灰白色(7.5Ｙ R8/2) 内面；浅黄橙色(7.5Ｙ R8/3)	小片	体部；指押さえ 口縁部；ヨコナデ	マメツ	やや硬	表面炭素が消失
224	Ⅲ区ＢＳＤ02	瓦器・椀	底；4.4	細；石英・長石小ごく少	外面；灰白色(5Ｙ8/1) 内面；灰白色(5Ｙ8/1)	底2/8	指押さえ，高台貼付	見込み平行線のヘラミガキ	良	
225	Ⅲ区ＢＳＤ02	常滑・壺	不明	細；石英・長石小ごく少，黒色石粒小少	外面；灰白色(2.5Ｙ7/1) 内面；明紫灰色(5Ｐ7/1)	小片	平行叩き→ヨコナデ，沈線(2条)	あて具痕ナデ消し→ヨコナデ	硬	
226	Ⅲ区ＢＳＤ02	土瓶・甕	不明	中；石英・長石中少～普	外面；暗灰色(Ｎ3/0) 内面；灰白色(10Ｙ R8/1)	小片1/8	下位平行叩き→上位平行叩き	指押さえ，ナデ	良	大型品によるためか「一連叩き技法」ではない
227	Ⅲ区ＢＳＤ02ベルト１	須恵・甕	不明	細；石英・長石小少	外面；灰白色(2.5Ｙ7/1) 内面；灰白色(5Ｙ7/1)	小片	格子叩き	同心円文あて具痕	やや硬	表面摩耗が著しい
228	Ⅲ区ＢＳＤ01（東西）	土質・小皿	口；8.1 器；1.6 底；5.2	細；石英・長石小ごく少	外面；にぶい黄橙色(10Ｙ R7/3) 内面；灰黄色(2.5Ｙ7/2)	6/8存	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り→ナデ	回転ナデ	良	
229	Ⅲ区ＣＳＤ01Ｂ第１遺構面	土質・小皿	口；7.9 器；1.3 底；5.1	細；石英・長石小少，赤色粒中ごく少	外面；浅黄橙色(10Ｙ R8/3) 内面；灰白色(10Ｙ R8/2)	ほぼ完存	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り（Ｒ）	回転ナデ	良	口縁部外面の一部に煤付着
230	Ⅲ区ＢＳＤ01ＳＤ01ベルト１	土質・小皿	口；8.1 器；1.4 底；6.2	細；石英・長石小少，赤色粒小少	外面；にぶい黄橙色(10Ｙ R7/2) 内面；にぶい黄橙色(10Ｙ R7/3)	7/8存	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り（Ｒ）	回転ナデ，ナデ	良	
231	Ⅲ区ＢＳＤ01ベルト２	土質・小皿	口；8.4 器；1.3 底；6.0	中；石英・長石小普，赤色粒小普	外面；浅黄橙色(10Ｙ R8/4) 内面；にぶい黄橙色(10Ｙ R7/4)	3/8存	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り（Ｌ？）	回転ナデ，ナデ	良	
232	Ⅲ区ＢＳＤ01ベルト１	土質・小皿	口；8.8 器；1.5 底；6.6	細；石英・長石ごく小ごく少，赤色粒小少	外面；橙色(2.5Ｙ R6/6) 内面；にぶい橙色(5Ｙ R7/4)	2/8存	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り（Ｒ？）	回転ナデ	良	二次焼成を被る
233	Ⅲ区ＣＳＤ01Ｃ第１遺構面	土質・小皿	器；1.25	細；石英・長石小ごく少	外面；にぶい黄橙色(10Ｙ R7/2) 内面；灰黄色(2.5Ｙ7/2)	1/8存	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り（Ｒ？）	回転ナデ	良	
234	Ⅲ区ＢＳＤ01	土質・小皿	口；7.3 器；1.05 底；5.9	微；石英・長石小ごく少，赤色粒小少	外面；灰白色(10Ｙ R8/2) 内面；灰白色(10Ｙ R8/2)	1/8存	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り	回転ナデ	良	
235	Ⅲ区ＢＳＤ01（東西）	土質・小皿	口；7.6 器；1.2 底；5.8	微；石英・長石小ごく少，赤色粒小ごく少	外面；にぶい赤褐色(2.5Ｙ R5/4) 内面；にぶい褐色(7.5Ｙ R6/3)	2/8存	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り（Ｒ）	回転ナデ	良	二次焼成を被る
236	Ⅲ区ＢＳＤ01（東西）	土質・小皿	口；7.6 器；1.2 底；6.1	細；石英・長石ごく小ごく少，赤色粒ごく小少	外面；灰白色(10Ｙ R8/2) 内面；灰白色(10Ｙ R8/2)	1/8存	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り	回転ナデ	良	
237	Ⅲ区ＢＳＤ01	土質・小皿	口；8.0 器；9.5 底；6.2	細；石英・長石小少，赤色粒小少	外面；浅黄橙色(7.5Ｙ R8/3) 内面；にぶい黄橙色(10Ｙ R7/2)	1/8	口縁部；回転ナデ 底部；不明	回転ナデ	良	
238	Ⅲ区ＣＳＤ01Ｂ第１遺構面	土質・小皿	口；8.1 器；1.5 底；6.1	細；石英・長石中少	外面；灰白色(10Ｙ R8/1) 内面；灰白色(10Ｙ R8/2)	8/8	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り？	回転ナデ，ナデ	良	
239	Ⅲ区ＢＳＤ01（東西）	土質・小皿	口；8.4 器；1.2 底；6.0	中；石英・長石小普	外面；灰白色(10Ｙ R8/2) 内面；浅黄橙色(10Ｙ R8/3)	2/8存	口縁部；回転ナデ 底部；ヘラ切り（Ｒ？）	回転ナデ	良	口縁部　見込みに煤付着

報文番号	遺構名	器種名	法量	胎土	色調	残存率	外面調整	内面調整	焼成	備考
240	Ⅲ区CSD01C第1遺構面	土質・小皿	口；8.8 器；1.2 底；7.2	細；石英・長石小少，赤色粒小ごく少	外面；灰黄色(2.5Y7/2) 内面；灰黄色(2.5Y7/2)	1/8存	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り	回転ナデ	良	二次焼成を被る
241	Ⅲ区CSD01C第1遺構面	土質・小皿	器；1.2	細；石英・長石小ごく少，赤色粒中普	外面；灰白色(10YR8/2) 内面；にぶい黄橙色(10YR7/4)	小片	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り	回転ナデ	良	
242	Ⅲ区BSD01（南北）	土質・小皿	口；8.4 底；6.0	中；石英・長石中少，赤色粒中少	外面；褐灰色(10YR4/1) 内面；にぶい黄橙色(10YR7/2)	3/8	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り（L）→ナデ	回転ナデ，ナデ	良	
243	Ⅲ区BSD01（東西）	土質・小皿	口；8.6 器；1.2 底；7.0	細；石英・長石小少	外面；にぶい黄色(10YR6/3) 内面；にぶい黄色(10YR6/3)	2/8	口縁部；回転ナデ 底部；板状圧痕	口縁部；回転ナデ 底部；ナデ	良	口縁部に煤付着
244	Ⅲ区CSD01A第1遺構面	須恵・小皿	口；9.6 器；1.3 底；8.0	細；石英・長石ごく小少	外面；灰白色(N7/0) 内面；灰白色(N7/0)	小破片	口縁部；回転ナデ 底部；マメツ	回転ナデ	良	表面の摩耗が激しい
245	Ⅲ区CSD01B第1遺構面	土質・坏	底；10.2	細；石英・長石小少	外面；灰白色(2.5Y8/2) 内面；灰白色(2.5Y7/1)	2/8	底部；回転ヘラ切り（R？） 口縁部；回転ナデ	回転ナデ	良	
246	Ⅲ区CSD01C第1遺構面	土質・坏	口；11.9 器；3.0 底；7.2	中；石英・長石中少，赤色粒中普	外面；灰白色(10YR8/1) 内面；灰白色(10YR8/1)	底7/8	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り（L）	回転ナデ	やや軟	
247	Ⅲ区CSD01A第1遺構面	土質・坏	不明	中；石英・長石中普，赤色粒小少	外面；灰白色(10YR8/1) 内面；灰白色(10YR7/1)	1/8	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り？	回転ナデ	やや軟	
248	Ⅲ区CSD01B第1遺構面	土質・椀	口；15.3 器；4.5 底；5.8	細；石英・長石中少，赤色粒小ごく少	外面；灰白色(10YR8/2) 内面；灰白色(10YR8/2)	4/8	指押さえ→回転ナデ ヘラミガキの有無不明	回転ナデ，ナデ ヘラミガキの有無不明	やや軟	全体に煤付着
249	Ⅲ区BSD01（東西）SD01ベルト③中	須恵・椀	底；6.1	細；石英・長石中少，赤色粒小少	外面；灰黄褐色(10YR6/2) 内面；灰黄褐色(10YR7/2)	底5/8	指押さえ→回転ナデ	マメツ	良	二次焼成を被る 西村型土器椀
250	Ⅲ区BSD01ベルト④	土質・椀	底；6.4	細；石英・長石小少，赤色粒ごく小ごく少	外面；にぶい黄橙色(10YR7/3) 内面；にぶい黄橙色(10YR7/2)	底1/8存	指押さえ→回転ナデ	板ナデ ヘラミガキの有無不明	軟	焼成不良の須恵器椀の可能性も残る
251	Ⅲ区CSD01A第1遺構面	須恵・椀	底；6.6	中；石英・長石中少，赤色粒少中	外面；灰白色(10YR8/1) 内面；灰白色(10YR8/1)	高台部2/8	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り？→板状圧痕→高台貼付	板ナデ？（マメツ）	やや軟	杯に高台を貼付した器形 焼成不良
252	Ⅲ区BSD01（東西）	土質・椀	底；6.2	細；石英・長石ごく小少，赤色粒小少	外面；淺黄橙色(10YR8/3) 内面；淺黄橙色(10YR8/3)	底1/8存	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り	回転ナデ？	良	坏に高台を貼付した椀
253	Ⅲ区CSD01C第1遺構面	土質・椀	底；5.3	細；石英・長石小普，赤色粒小ごく少	外面；灰黄褐色(10YR6/2) 内面；灰黄褐色(10YR5/2)	底2/8存	指押さえ→回転ナデ	マメツ	良	在地的なタイプ
254	Ⅲ区CSD01C第1遺構面	吉備・椀	底；6.8	細；石英・長石小少	外面；にぶい黄橙色(10YR7/3) 内面；にぶい黄橙色(10YR7/3)	1/8	マメツ	マメツ	良	
255	Ⅲ区BSD01（東西）	土質・椀	底；5.8	細；石英・長石ごく小ごく少，赤色粒小ごく少	外面；にぶい黄橙色(10YR7/4) 内面；にぶい黄橙色(10YR7/2)	底7/8	底部；ナデ，高台貼付	回転ナデ，ナデ	良	吉備系土師器椀
256	Ⅲ区CSD01B第1遺構面	須恵・椀	底；5.3	細；石英・長石小ごく少	外面；灰白色(5Y8/1) 内面；灰白色(2.5Y7/1)	底2/8	高台貼付	マメツ，ヘラミガキの有無不明	やや良	
257	Ⅲ区CSD01A第1遺構面	吉備・椀	底；6.4	細；石英・長石小ごく少，赤色粒小少	外面；淺黄橙色(10YR8/3) 内面；灰白色(10YR8/2)	底2/8存	マメツ	マメツ	やや軟	
258	Ⅲ区CSD01D第1遺構面	吉備・椀	不明	細；石英・長石中少	外面；灰白色(7.5YR8/2) 内面；灰色(10YR8/1)	小片	不明	不明	やや軟	
259	Ⅲ区CSD01B第1遺構面	黒色・椀	口；16.0 器；5.5 底；5.8	細；石英・長石小少	外面；灰白色(10YR8/2) 内面；黒色(5Y2/1)	2/8存	指押さえ，回転ナデ→ヘラミガキ，マメツ	ヘラミガキ，見込み螺旋状	良	A類
260	Ⅲ区BSD01（東西）	黒色・椀	底；5.6	細；石英・長石小ごく少，赤色粒小少	外面；灰白色(10YR8/2) 内面；黒色(7.5Y2/1)	底1/8存	指押さえ	ヘラミガキ（見込み部平行文）	良	A類（口縁部炭素吸着）
261	Ⅲ区BSD01（東西）	黒色・椀	底；5.6	細；石英・長石小ごく少，赤色粒小少	外面；灰白色(2.5Y8/2) 内面；黒色(5Y2/1)	底1/8存	指押さえ	見込み部，ヘラミガキ	良	A類
262	Ⅲ区BSD01（東西）	黒色・椀	底；4.4	細；石英・長石小少	外面；にぶい黄橙色(10YR7/2) 内面；黒褐色(2.5Y3/1)	底1/8存	体部；指押さえ	ヘラミガキ	良	A類
263	Ⅲ区CSD01第1遺構面	黒色・椀	底；6.2	細；石英・長石小少	外面；灰白色(10YR8/2) 内面；黒色(7.5Y2/1)	底4/8	指押さえ→回転ナデ	板ナデ，ヘラミガキ	良	A類
264	Ⅲ区CSD01B第1遺構面	黒色・椀	不明	細；石英・長石小少	外面；灰白色(10YR8/2) 内面；黒色(7.5Y2/1)	小片	回転ナデ→ヘラミガキ	板ナデ→ヘラミガキ	良	A類
265	Ⅲ区BSD01ベルト④	黒色・椀	不明	細；石英・長石小少	外面；淺黄橙色(10YR8/3) 内面；黄灰色(2.5Y4/1)	小片	回転ナデ	マメツ	良	A類
266	Ⅲ区CSD01C第1遺構面	黒色・椀	不明	細；石英・長石ごく小ごく少	外面；灰白色(2.5Y8/2) 内面；暗灰色(N3/0)	底1/8存	高台貼付	ヘラミガキ（マメツ）	良	A類
267	Ⅲ区BSD01（南北）	瓦器・椀	口；14.8	微；石英・長石小少	外面；灰色(5Y5/1) 内面；灰色(5Y6/1)	2/8存	口縁部；ヨコナデ 体部；指押さえ→ヘラミガキ	ヘラミガキ	良	尾上編年Ⅲ－2期
268	Ⅲ区CSD01C第1遺構面	瓦器・椀	口；14.8	細；石英・長石ごく小ごく少	外面；灰白色(5Y7/1) 内面；灰色(N4/0)	1/8	口縁部；回転ナデ 体部；指押さえ→ヘラミガキ	ヘラミガキ	硬	尾上編年Ⅲ－2期
269	Ⅲ区CSD01A第1遺構面	瓦器・椀	口；15.4	細；石英・長石小少	外面；灰色(N4/0) 内面；灰色(N4/0)	1/8	指押さえ，口縁部ヨコナデ，ヘラミガキ	ヘラミガキ	硬	和泉型
270	Ⅲ区CSD01A第1遺構面	瓦器・椀	底；4.5	細；石英・長石小ごく少	外面；灰色(N4/0) 内面；灰色(N4/0)	底1/8	指押さえ→ヘラミガキ	回転ヘラミガキ，見込み連続輪状ヘラミガキ	硬	尾上編年Ⅲ－2期

報文番号	遺構名	器種名	法量	胎土	色調	残存率	外面調整	内面調整	焼成	備考
271	Ⅲ区BSD01（東西）SD01ベルト①	瓦器・椀	底；4.4	細；石英・長石小少	外面；灰白色（10YR8/1） 内面；灰白色（10YR8/1）	底1/8	体部；指押さえ	ヘラミガキ	軟	
272	Ⅲ区CSD01A第1遺構面	瓦器・椀	口；15.2	細；石英・長石小少	外面；灰白色（2.5YR8/1） 内面；灰白色（2.5YR7/1）	1/8存	指押さえ，口縁部ヨコナデ ヘラミガキの有無不明	ヘラミガキ	やや軟	和泉型
273	Ⅲ区BSD01（東西）	瓦器・椀	底；5.5	微；石英・長石小ごく少	外面；灰白色（2.5Y7/1） 内面；灰色（5Y5/1）	底6/8	体部；指押さえ	ヘラミガキ（見込み部平行）	やや軟	尾上編年Ⅲ－3期
274	Ⅲ区BSD01（東西）	瓦器・椀	底；4.4	細；石英・長石小～中少	外面；灰色（N5/0） 内面；灰白色（2.5Y7/1）	高台部8/8	体部；指押さえ	ヘラミガキ	－	
275	Ⅲ区CSD01D第1遺構面	瓦器・椀	底；4.8	細；石英・長石小ごく少	外面；灰色（N5/0） 内面；灰色（N4/0）	1/8	体部；指押さえ 高台貼付	マメツ	良	
276	Ⅲ区BSD01（東西）	白磁・碗	口；17.0	微；黒色粒ごく小ごく少	外面；灰白色（7.5Y7/1） 内面；灰白色（7.5Y7/1）	小片	不明	不明	－	横田・森田分類Ⅳ－2類
277	Ⅲ区CSD01ベルトC	白磁・碗	底；6.0	微；黒色細粒	外面；灰白色（2.5Y7/1） 内面；灰白色（5Y7/1）	1/8	不明	不明	－	横田・森田分類白磁碗Ⅳ－1a類
278	Ⅲ区CSD01ベルトC	白磁・皿	口；10.8	微	外面；灰白色（7.5Y7/1） 内面；灰白色（7.5Y7/1）	1/8	不明	不明	－	横田・森田分類白磁皿Ⅳ－1b類か？
279	Ⅲ区CSD01A第1遺構面	青磁・合子	不明	微	外面；灰白色（2.5GY8/1） 内面；明緑灰色（5G7/1）	小片	型押しの蓮文	天井部には釉がかからない	－	
280	Ⅲ区BSD01（東西）	土瓶・捏鉢	口；32.2	中；石英・長石中普	外面；灰白色（N7/0） 内面；灰白色（2.5Y7/1）	1/8存	口縁部；指押さえ→叩きヨコナデ 体部；板ナデ	口縁部；ヨコナデ 体部；板ナデ	やや軟	佐藤分類鉢E－1
281	Ⅲ区BSD01（東西）	土瓶・捏鉢（瓦質）	不明	細；石英・長石小少	外面；にぶい黄橙色（10YR7/2） 内面；灰色（5Y5/1）	小片	口縁部；ヨコナデ 体部；板ナデ	口縁部；ヨコナデ 体部；板ナデ	やや軟	
282	Ⅲ区BSD01（東西）	瓦質・捏鉢	底；16.4	中；石英・長石中少，赤（黒）色粒小少	外面；灰白色（5Y7/1） 内面；灰白色（5Y7/1）	2/8	平行叩き→底部付近のみ回転ナデ 底部；マメツ	マメツ	やや軟	土瓶産か？
283	Ⅲ区BSD01（東西）	土瓶・鉢	底；13.4	細；石英・長石小少，赤色粒小少	外面；灰白色（2.5Y8/1） 内面；灰白色（2.5Y8/1）	小片	底部外縁；ナデ 体部；平行叩き 体部外縁；ナデ	マメツ	軟	
284	Ⅲ区CSD01A第1遺構面	須恵・捏鉢	底；12.8	中；石英・長石中少	外面；灰黄褐色（10YR6/2） 内面；暗灰黄色（2.5Y5/2）	小片	指押さえ→板ナデ 底部；ナデ？	底部；指押さえ→ヨコナデ 体部；板ナデ	良	二次焼成
285	Ⅲ区CSD01A第1遺構面	土瓶・甕	口；20.0	細；石英・長石中少	外面；灰色（N6/0） 内面；灰色（7.5Y6/1）	3/8存	右上がり叩き→ヨコナデ	ヨコナデ	硬	
286	Ⅲ区CSD01A第1遺構面	須恵・甕	不明	細；石英・長石小少	外面；灰色（7.5Y6/1） 内面；灰白色（5Y7/1）	小片	左上がり格子叩き→ヨコナデ	指押さえ，ヨコナデ	硬	土瓶
287	Ⅲ区CSD01A第1遺構面	土瓶・壺	不明	細；石英・長石小ごく少，黒色粒小少	外面；灰色（7.5Y6/1） 内面；灰色（7.5Y6/1）	小破片	右上がり叩き→ヨコナデ沈線2条	ヨコナデ	硬	大型壺の口縁
288	Ⅲ区CSD01D第1遺構面	須恵・捏鉢	不明	細；石英・長石中少	外面；灰白色（2.5Y7/1） 内面；灰白色（2.5Y8/1）	1/8	マメツ 底部外縁；ヨコナデ	マメツ	軟	二次焼成
289	Ⅲ区CSD01A第1遺構面	須恵・壺	底；7.8	中；石英・長石小少	外面；灰白色（10YR8/2） 内面；灰白色（10YR8/2）	底2/8	体部；ヨコナデ→タテハケ 底部；回転ヘラ切り→ナデ	回転ナデ，ナデ	やや硬	二次焼成を被る
290	Ⅲ区CSD01A第1遺構面	土瓶・甕	不明	細；石英・長石中少	外面；灰色（N4/0） 内面；灰白色（10YR8/1）	小片	格子叩き	指押さえ→回転ナデ	やや硬	
291	Ⅲ区CSD01B第1遺構面	須恵・甕	不明	細；石英・長石小少	外面；褐灰色（10YR6/1） 内面；灰白色（10YR7/1）	小破片	格子叩き→指押さえ	ヨコナデ→縦方向のナデ	やや硬	土瓶産か
292	Ⅲ区CSD01A第1遺構面	須恵・甕	不明	細；石英・長石小少	外面；灰白色（N7/0） 内面；灰色（N6/0）	小破片	平行叩き	あて具痕ナデ消し→ヨコナデ	硬	土瓶
293	Ⅲ区CSD01A第1遺構面	須恵・甕	不明	細；石英・長石小少	外面；灰色（N5/0） 内面；灰色（N6/0）	小破片	格子叩き	あて具痕ナデ消し→ヨコナデ	硬	土瓶
294	Ⅲ区CSD01D第1遺構面	土質・甕	口；36.0	やや粗；石英・長石小～中普	外面；灰黄褐色（10YR5/2） 内面；灰黄色（2.5Y7/2）	1/8	指押さえ→ヨコナデ	板ナデ？	良	
295	Ⅲ区CSD01（東西）SD01遺構面	土質・鍋	口；30.0	中；石英・長石小普，角閃石小多	外面；黒褐色（10YR3/2） 内面；にぶい黄橙色（10YR6/3）	小破片	口縁部；指押さえ→ヨコナデ 体部；指押さえ→タテハケ	ヨコハケ	良	外面に煤付着
296	Ⅲ区CSD01C第1遺構面	東播・捏鉢	不明	細；石英・長石中少，黒色粒中少	外面；灰色（N6/0） 内面；灰色（N6/0）	小片	回転ナデ	回転ナデ	硬	山仲編年C1類
297	Ⅲ区BSD01ベルト⑤	東播・捏鉢	不明	やや粗；石英・長石小普	外面；オリーブ灰色（2.5GY6/1） 内面；青灰色（5GB6/1）	小破片	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
298	Ⅲ区CSD01B第1遺構面	東播・捏鉢・底部	不明	中；石英・長石中普	外面；灰白色（5Y8/1） 内面；灰白色（5Y8/1）	小片	底部；回転ヘラ切り	回転ナデ	やや軟	
299	Ⅲ区BSD01（東西）遺構面上層包含層	平瓦	不明	中；石英・長石中少，赤色粒中普	外面；にぶい橙色（7.5YR7/4） 内面；にぶい橙色（7.5YR6/4）	小片	マメツ	布目	軟	二次焼成を被る？
300	Ⅲ区BSD01	須恵・壺	底；4.4	細；石英・長石小少	外面；灰色（N5/0） 内面；灰色（N6/0）	底1/8	回転ナデ	回転ナデ	硬	混入か
301	Ⅲ区CSD01C第1遺構面	須恵・体部？	不明	細；石英・長石小少	外面；灰色（5Y6/1） 内面；灰色（N7/0）	小片1/8	回転ナデ	回転ナデ	硬	二条の平行沈線に挟まれた文様帯に刻目文
303	Ⅲ区CSD04第1遺構面	土質・小皿	器；1.2	細；石英・長石中少	外面；灰白色（10YR8/2） 内面；灰白色（10YR8/2）	1/8存	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り	回転ナデ	良	
304	Ⅲ区CSD04第1遺構面	土質・坏	不明	細；石英・長石小少	外面；にぶい黄橙色（10YR7/2） 内面；灰黄褐色（10YR6/2）	底1/8存	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り？	回転ナデ	良	内面に煤付着

報文番号	遺構名	器種名	法量	胎土	色調	残存率	外面調整	内面調整	焼成	備考
305	Ⅲ区ＣＳＤ04第１遺構面	土質・椀	口；13.8	細；石英・長石小少	外面；灰白色(10Ｙ R8/2) 内面；褐灰色(10Ｙ R6/1)	1/8存	マメツ	マメツ	良	二次焼成
306	Ⅲ区ＣＳＤ04第１遺構面	土質・坏ないし椀	口；12.4	細；石英・長石中少	外面；灰白色(2.5Ｙ8/2) 内面；灰白色(2.5Ｙ8/2)	1/8存	回転ナデ	回転ナデ→不明工具痕	良	
307	Ⅲ区ＣＳＤ04第１遺構面	黒色・椀	底；6.4	細；石英・長石小少	外面；灰白色(10Ｙ R8/2) 内面；オリーブ黒色(5Ｙ3/1)	底1/8存	高台貼付	板ナデ，マメツ	良	Ａ類
308	Ⅲ区ＣＳＤ04第１遺構面	瓦器・椀	口；15.0	細；石英・長石小少	外面；オリーブ黒色(5Ｙ3/1) 内面；灰白色(5Ｙ7/1)	1/8存	指押さえ→口縁部ヨコナデ	マメツ	やや軟	和泉型
309	Ⅲ区ＣＳＤ04第１遺構面	瓦器・椀	不明	細；石英・長石小少	外面；灰色(Ｎ4/0) 内面；灰色(Ｎ5/0)	1/8	体部；指押さえ 口縁部；ヨコナデ	回転ヘラミガキ	硬	尾上編年Ⅲ２～３期
310	Ⅲ区ＣＳＤ04第１遺構面	瓦器・椀	口；12.2	細；石英・長石小少	外面；灰色(Ｎ4/0) 内面；灰色(10Ｙ R7/1)	1/8	体部；指押さえ，ヘラミガキ 口縁部；ヨコナデ	回転ヘラミガキ	硬	尾上編年Ⅲ－２期
311	Ⅲ区ＣＳＤ04第１遺構面	土瓶・甕	不明	細；石英・長石中少	外面；灰色(Ｎ5/0) 内面；灰白色(5Ｙ7/1)	1/8	格子叩き	あて具痕→ナデ消し→ヨコナデ →タテナデ	硬	
312	Ⅲ区ＣＳＤ08第２遺構面	土質・小皿	口；7.8 器；1.1 底；5.6	細；石英・長石中小	外面；淺黄橙色(7.5Ｙ R8/4) 内面；灰白色(10Ｙ R8/2)	2/8存	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り（Ｒ）	回転ナデ	良	
313	Ⅲ区ＣＳＤ08第２遺構面	土質・椀	底；6.6	細；石英・長石中小	外面；にぶい橙色(7.5Ｙ R7/4) 内面；灰白色(10Ｙ R8/1)	底1/8存	マメツ	マメツ	良	二次焼成
314	Ⅲ区ＣＳＤ08第２遺構面	瓦器・椀	不明	細；石英・長石中少	外面；灰色(Ｎ5/0) 内面；灰色(Ｎ5/0)	1/8	体部；指押さえ 口縁部；ヨコナデ→ヘラミガキ	体部；螺旋？状ヘラミガキ	硬	尾上編年Ⅲ－２期
315	Ⅲ区ＣＳＤ08第２遺構面	瓦器・椀	底；4.4	細；石英・長石小少	外面；灰白色(2.5Ｙ7/1) 内面；オリーブ黒色(7.5Ｙ3/1)	2/8存	マメツ	マメツ	やや軟	
316	Ⅲ区ＣＳＤ08第２遺構面	須恵・鉢	不明	細；石英・長石中少	外面；黄灰色(2.5Ｙ4/1) 内面；黄灰色(2.5Ｙ4/1)	小片	ヨコナデ	ヨコナデ	やや軟	
317	Ⅲ区ＣＳＤ08第２遺構面	土瓶・甕ないし壺	不明	細；石英・長石中少	外面；灰色(5Ｙ6/1) 内面；灰色(5Ｙ4/1)	1/8	格子叩き 底部；外縁のみナデ	ヨコナデ	やや軟	
318	Ⅳ区ＢＳＤ05	土質・小皿	口；7.8 器；1.0 底；6.0	細；石英・長石ごく小 ごく少	外面；灰白色(2.5Ｙ8/2) 内面；灰黄色(2.5Ｙ7/2)	底2/8	口縁部；回転ナデ 底部；マメツ	回転ナデ	やや軟	
319	Ⅳ区ＢＳＤ05	須恵・椀	口；15.4 器；5.6 底；6.3	細；石英・長石小少	外面；灰白色(2.5Ｙ8/1) 内面；灰白色(10Ｙ R8/1)	6/8	回転ナデ，ヘラミガキ	回転ヘラミガキ	やや軟	
320	Ⅳ区ＢＳＤ05（取り上げNo2）	須恵・椀	口；15.0 器；5.2 底；5.8	細；石英・長石小少	外面；灰白色(10Ｙ R8/1) 内面；灰白色(10Ｙ R8/2)	7/8	回転ナデ→ヘラミガキ	回転ヘラミガキ	やや軟	西村型
321	Ⅳ区ＢＳＤ05	瓦器・椀	底；5.0	細；石英・長石小～中少	外面；灰白色(5Ｙ7/1) 内面；灰白色(Ｎ7/0)	底2/8	高台貼付	見込み平行線状ヘラミガキ	やや軟	
322	Ⅳ区ＢＳＤ05	土質・甕	不明	やや粗 石英・長石中～小多	外面；淺黄色(2.5Ｙ7/3) 内面；暗灰黄色(2.5Ｙ5/2)	口小片	指押さえ→ヨコナデ	マメツ	良	
323	Ⅱ区ＡＳＸ01（Ｓ）	土質・小皿	不明	細；赤色粒小少	外面；淺黄橙色(7.5Ｙ R8/3) 内面；淺黄橙色(7.5Ｙ R8/3)	小片	口縁部；回転ナデ 底部；マメツ	回転ナデ	良	
324	Ⅱ区ＡＳＸ01（Ｓ）	土質・坏	底；7.4	細；石英・長石中～大少，赤色粒小少	外面；淺黄橙色(7.5Ｙ R8/4) 内面；淺黄橙色(7.5Ｙ R8/4)	底2/8	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り（Ｌ？）→ 板状圧痕	口縁部；回転ナデ 見込み板ナデ	良	
325	Ⅱ区ＡＳＸ01（Ｓ）	土質・椀	口；10.8	細；石英・長石小ごく少，赤色粒小少	外面；淺黄橙色(10Ｙ R8/3) 内面；淺黄橙色(10Ｙ R8/4)	2/8存	回転ナデ	回転ナデ	良	
326	Ⅱ区ＡＳＸ01（Ｓ）	吉備・椀	底；5.5	細；石英・長石中少，赤色粒小普	外面；淺黄橙色(10Ｙ R8/3) 内面；淺黄橙色(10Ｙ R8/3)	底3/8	マメツ	マメツ（指押さえ）	良	
327	Ⅱ区ＡＳＸ01（Ｓ）	土質・甕	不明	中；石英・長石小普，雲母小普	外面；にぶい黄褐色(10Ｙ R4/3) 内面；にぶい橙色(7.5Ｙ R6/4)	小片	口縁部；ヨコナデ	口縁部；ヨコナデ 体部；板ナデ	良	外面に煤付着
328	Ⅱ区ＢＳＸ01	瓦器・椀	不明	細；石英・長石小ごく少	外面；灰白色(2.5Ｙ8/2) 内面；淺黄色(2.5Ｙ7/3)	小片	指押さえ，口縁部のみ回転ナデ	マメツ	良	和泉型 吸着した炭素消沈
329	Ⅱ区ＢＳＸ01	須恵・捏鉢	不明	細；石英・長石中少	外面；灰白色(2.5Ｙ8/2) 内面；淺黄橙色(10Ｙ R8/4)	底小片	マメツ	マメツ	やや軟	
330	Ⅱ区ＢＳＸ04№１・2，ＳＸ04№３・4，ＳＸ04№７・８・９	土質・鍋	口；42.4	やや粗 石英・長石中多	外面；暗褐色(10Ｙ R3/3) 内面；にぶい黄橙色(10Ｙ R6/3)	口14/8	口縁部；指押さえ→タテナデ， ヨコナデ 体部；指押さえ→ヨコナデ	口縁部；板ナデ→ヨコナデ 体部；上半板ナデ，下半指押さ え→ヨコナデ	良	叩きなし
331	Ⅱ区ＢＳＸ04（取り上げ№2）	土質・足釜	不明	中；石英・長石中普，赤色粒小ごく少	外面；灰黄褐色(10Ｙ R4/2) 内面；にぶい黄橙色(10Ｙ R6/3)	小片	格子叩き→板ナデ	板ナデ，脚貼付時の指押さえ	良	外面下半に煤付着
332	Ⅱ区ＢＳＸ04ベルト③中	土質・甕	口；27.6	中；石英・長石中普，赤色粒小少，角閃石小ごく少	外面；にぶい黄褐色(10Ｙ R5/3) 内面；にぶい黄橙色(10Ｙ R6/3)	1/8存	指押さえ→タテハケ	口縁部；板ナデ 体部；板ナデ→指押さえ	良	
333	Ⅲ区ＣＳＸ03第２遺構面	土質・小皿	口；8.8 器；1.5 底；6.4	細；石英・長石中少	外面；灰黄色(2.5Ｙ7/2) 内面；黄灰色(2.5Ｙ6/1)	1/8存	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り（Ｌ？）	回転ナデ，ナデ	良	端部に煤付着
334	Ⅲ区ＣＳＸ03第２遺構面	瓦器・皿	口；9.0 器；2.0 底；5.4	細；石英・長石小少	外面；灰色(Ｎ4/0) 内面；暗灰色(Ｎ3/0)	1/8存	口縁部；回転ナデ 底部；指押さえ	縁部；回転ヘラミガキ 見込み平行線状ヘラミガキ	－	
335	Ⅲ区ＣＳＸ03第２遺構面	土質・坏	底；7.4	中；石英・長石中～小普	外面；灰白色(2.5Ｙ8/2) 内面；淺黄橙色(10Ｙ R8/3)	底2/8	口縁部；回転ナデ 底部；マメツ	回転ナデ	やや軟	

報文番号	遺構名	器種名	法量	胎土	色調	残存率	外面調整	内面調整	焼成	備考
336	Ⅲ区ＣＳＸ03第２遺構面	土質・椀	底；6.4	中；石英・長石中少，赤色粒中少	外面；灰白色(10Ｙ R8/2) 内面；灰白色(10Ｙ R8/2)	底2/8存	指押さえ，高台貼付	マメツ	やや軟	
337	Ⅲ区ＣＳＸ03第２遺構面	吉備・椀	底；6.2	細；石英・長石中ごく少，赤色粒小少	外面；灰白色(10Ｙ R8/2) 内面；灰白色(10Ｙ R8/2)	4/8	不明	マメツ	良	
338	Ⅲ区ＣＳＸ03第２遺構面	瓦器・椀	口；14.4	細；石英・長石小少	外面；灰色(Ｎ4/0) 内面；灰色(Ｎ4/0)	小破片	体部；指押さえ→ヘラミガキ 口縁部；ヨコナデ	回転ヘラミガキ	硬	尾上編年Ⅲ～２期
339	Ⅲ区ＣＳＸ03第２遺構面	瓦器・椀	不明	細；石英・長石小少	外面；灰白色(5Ｙ7/1) 内面；灰白色(5Ｙ7/1)	1/8	指押さえ	回転ヘラミガキ 平行線状ヘラミガキ	硬	
340	Ⅲ区ＣＳＸ03第２遺構面	瓦器・椀	底；4.8	細；石英・長石ごく小ごく少	外面；灰色(Ｎ4/0) 内面；浅黄色(2.5Ｙ8/3)	底1/8	指押さえ	マメツ	やや軟	
341	Ⅲ区ＣＳＸ03第２遺構面	瓦器・椀	底；4.6	細；石英・長石小少	外面；灰白色(5Ｙ8/1) 内面；灰白色(5Ｙ8/1)	底2/8	高台貼付	ヘラミガキ	良	
342	Ⅲ区ＣＳＸ03第２遺構面	白磁・碗	底；7.6	微；黒色細粒	外面；灰白色(5Ｙ8/1) 内面；灰白色(7.5Ｙ7/1)	底1/8存	不明	見込みに沈線	－	横田・森田分類白磁碗Ⅳ－１ａ類
343	Ⅲ区ＣＳＸ03第２遺構面	須恵・甕	不明	細；石英・長石小少	外面；灰色(Ｎ4/0) 内面；灰白色(10Ｙ R8/1)	1/8	マメツ	ヨコナデ	やや軟	
344	Ⅲ区ＣＳＸ03第２遺構面	土質・甕	不明	粗；石英・長石中多	外面；にぶい橙色(7.5Ｙ R6/4) 内面；にぶい黄橙色(10Ｙ R7/3)	1/8	指押さえ→ヨコナデ	マメツ	良	
345	Ⅲ区ＣＳＸ03第２遺構面	土質・甕	不明	やや粗；石英・長石中多	外面；にぶい黄橙色(10Ｙ R6/3) 内面；橙色(7.5Ｙ R6/6)	1/8	指押さえ→ヨコナデ	マメツ	良	
346	Ⅲ区ＣＳＫ08 ＳＲ02上層・上面精査中ＳＲ02	吉備・椀	底；6.8	細；石英・長石中少	外面；灰白色(10Ｙ R8/1) 内面；灰白色(10Ｙ R8/1)	高台部3/8存	指押さえ	マメツ	やや軟	
347	Ⅲ区ＣＳＲ02	土質・甕	不明	粗；石英・長石中多	外面；灰黄褐色(10Ｙ R5/2) 内面；にぶい橙色(7.5Ｙ R7/4)	1/8	指押さえ→ヨコナデ	板ナデ，ヨコナデ	良	
348	Ⅱ区ＡＳＰ08	瓦器・椀	底；6.0	細；石英・長石小少，赤色粒中ごく少	外面；灰色(5Ｙ6/1) 内面；灰色(5Ｙ6/1)	底1/8存	指押さえ，高台貼付ナデ	見込み；平行線文状ヘラミガキ	やや軟	尾上編年Ⅲ－２期？
349	Ⅱ区ＡＳＰ42	土質・小皿	口；7.8 器；(1.6) 底；6.8	細；石英・長石小少	外面；褐灰色(10Ｙ R4/1) 内面；褐灰色(10Ｙ R4/1)	3/8存	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り（Ｒ）	回転ナデ，ナデ	良	二次焼成
350	Ⅱ区ＡＳＰ43	須恵・椀	底；5.6	細；石英・長石小少	外面；灰黄色(2.5Ｙ7/2) 内面；灰白色(2.5Ｙ8/1)	高台部8/8	指押さえ→回転ナデ	回転ヘラミガキ	やや硬	西村型土器
351	Ⅱ区ＡＳＰ45	土質・小皿	口；8.6 器；(2.0) 底；5.2	細；石英・長石小ごく少，赤色粒小ごく少，角閃石ごく小ごく少	外面；灰黄色(2.5Ｙ7/2) 内面；灰黄色(2.5Ｙ7/2)	2/8存	口縁部；回転ナデ 底部；指押さえ	回転ナデ，ナデ	良	瓦器皿模倣
352	Ⅱ区ＡＳＰ55	土質・坏	口；12.4 器；(3.2) 底；7.6	細；石英・長石小少，赤色粒小ごく少	外面；灰白色(10Ｙ R8/2) 内面；浅黄橙色(10Ｙ R8/3)	2/8	口縁部；回転ナデ 底部；マメツ	回転ナデ	やや軟	
353	Ⅱ区ＡＳＰ99	瓦器・椀	不明	細；石英・長石小少	外面；灰色(Ｎ4/0) 内面；灰色(Ｎ4/0)	小片	口縁部；ヨコナデ 体部；指押さえ	ヘラミガキ	やや硬	和泉型
354	Ⅱ区ＢＳＰ13	土質・鍋	不明	やや粗；石英・長石中～大礫	外面；明褐色(7.5Ｙ R5/6) 内面；明褐色(7.5Ｙ R5/6)	小片	指押さえ，ナデ	指押さえ，板ナデ	良	
355	Ⅱ区ＢＳＰ20	土質・小皿	口；8.4 器；1.0 底；6.8	細；石英・長石小少，黒色石粒小ごく少	外面；灰黄褐色(2.5Ｙ5/2) 内面；灰白色(2.5Ｙ8/2)	6/8存	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り（Ｒ）	回転ナデ	良	内外面に煤付着
356	Ⅱ区ＢＳＰ25	須恵・甕	底；18.0	細；石英・長石小少	外面；灰色(5Ｙ5/1) 内面；灰色(5Ｙ6/1)	底2/8	体部；格子叩き→ナデ 底部；ナデ	ナデ	硬	十瓶山産
357	Ⅱ区ＢＳＰ31	亀山・甕	不明	中；石英・長石小礫，赤色粒中少	外面；黒色(5Ｙ2/1) 内面；黄灰色(2.5Ｙ4/1)	小片	体部；平行叩き 頸部；平行叩き→ナデ	同心円文あて具痕→板ナデ	良	
358	Ⅱ区ＢＳＰ43	須恵・椀	底；5.4	細；石英・長石小少	外面；にぶい黄色(2.5Ｙ6/3) 内面；灰黄褐色(10Ｙ R5/2)	底5/8存	指押さえ→回転ナデ	板ナデ	良	西村型土器椀 二次焼成を被る
359	Ⅱ区ＢＳＰ79	十瓶・捏鉢	不明	中；石英・長石中礫	外面；灰色(5Ｙ4/1) 内面；灰色(5Ｙ4/1)	小片	板ナデ	マメツ（板ナデ？）	やや軟	
360	Ⅱ区ＢＳＰ104，ＳＰ105	土質・鍋	口；50	不明	外面；灰褐色(7.5Ｙ R4/2) 内面；橙色(7.5Ｙ R6/6)	1/8	不明	不明	－	
361	Ⅱ区ＢＳＰ129	土質・鍋	不明	やや粗；石英・長石中～大礫，赤色粒中ごく少，雲母中礫	外面；橙色(7.5Ｙ R6/6) 内面；にぶい褐色(7.5Ｙ R5/4)	小片	指押さえ→ヨコナデ	板ナデ→ヨコナデ	良	内面に煤付着
362	Ⅱ区ＢＳＰ132	土質・坏	口；11.6 器；3.4 底；6.2	中；石英・長石中礫，赤色粒中少	外面；にぶい黄橙色(10Ｙ R7/4) 内面；にぶい黄橙色(10Ｙ R7/4)	完存8/8	口縁部；回転ナデ 底部；ヘラ切り（Ｌ）→板状圧痕	回転ナデ，ナデ	やや硬	口縁端部に煤痕跡
363	Ⅱ区ＢＳＰ193	須恵・椀	口；15.4 器；4.8 底；高台径4.4	細；石英・長石小少，赤色粒小少	外面；灰白色(5Ｙ7/1) 内面；灰白色(5Ｙ7/1)	高台部3/8存	指押さえ→回転ナデ ヘラミガキ不明	板ナデ	やや軟	西村型土器椀 外面口縁部付近のみ帯状に炭素吸着
364	Ⅲ区ＢＳＰ14	土質・小皿	口；9.6 器；1.2 底；7.0	細；石英・長石小少	外面；にぶい黄橙色(10Ｙ R7/4) 内面；橙色(2.5Ｙ R6/6)	3/8	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り（Ｒ）	口縁部；回転ナデ 底部；ナデ	良	二次焼成を被る
365	Ⅲ区ＢＳＰ14	土質・皿	不明	細；石英・長石小ごく少，赤色粒小ごく少	外面；灰白色(10Ｙ R8/2) 内面；灰白色(10Ｙ R8/2)	小片	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り	不明	良	
366	Ⅲ区ＢＳＰ40	黒色・椀	口；16.0 器；5.3 底；7.0	細；石英・長石小ごく少，赤色粒小ごく少	外面；灰白色(10Ｙ R8/2) 内面；黒色(10Ｙ R2/1)	1/8	指押さえ→回転ナデ，ヘラミガキ	ヘラミガキ，マメツ	良	Ａ類但し，口縁部のみ外面も炭素吸着（重ね焼き）

報文番号	遺構名	器種名	法量	胎土	色調	残存率	外面調整	内面調整	焼成	備考
367	Ⅲ区ＢＳＰ41	瓦器・椀	底；5.6	微；石英・長石小ごく少	外面；灰黄色(2.5Y7/2) 内面；灰黄色(2.5Y7/2)	底1/4	体部；指押さえ 底部；回転ナデ，マメツ	ヘラミガキ	良	尾上編年Ⅲ－２期か？
368	Ⅲ区ＢＳＰ42	土質・鍋	不明	やや粗；石英・長石小少，赤色粒小少，角閃石小砕	外面；灰黄褐色(10Ｙ Ｒ4/2) 内面；にぶい黄褐色(10Ｙ Ｒ5/3)	小片	タテハケ→口縁部のみヨコナデ	口縁部；ヨコハケ 体部；ヨコハケ→左上がりハケ目	良	
369	Ⅲ区ＣＳＰ02第１遺構面	土質・椀	不明	細；石英・長石小少	外面；灰黄褐色(10Ｙ Ｒ5/2) 内面；灰黄褐色(10Ｙ Ｒ6/2)	1/8	回転ナデ 竹管文状圧痕	マメツ	良	体部外面に不明圧痕 二次焼成を被る
370	Ⅲ区ＣＳＰ03第１遺構面	瓦器・椀	口；13.4	細；石英・長石小少	外面；灰色(Ｎ4/0) 内面；灰白色(5Ｙ7/1)	1/8	指押さえ→回転ナデ	ヘラミガキ（マメツ）	硬	
372	Ⅲ区ＣＳＰ06第１遺構面	瓦器・椀	不明	細；石英・長石小少	外面；灰白色(2.5Ｙ8/1) 内面；灰色(Ｎ4/0)	口小片	指押さえ，口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ	回転ヘラミガキ	良	
373	Ⅲ区ＣＳＰ06第１遺構面	瓦器・椀	口；4.4	細；石英・長石中少	外面；灰色(7.5Ｙ4/1) 内面；灰色(7.5Ｙ4/1)	1/8	高台貼付	マメツ	良	和泉型であれば、尾上編年Ⅲ－２期
374	Ⅲ区ＣＳＰ06第１遺構面	瓦器・皿	口；8.8 器；2.0	細；石英・長石ごく小ごく少	外面；灰色(5Ｙ5/1) 内面；灰色(Ｎ5/0)	2/8	口縁部；回転ナデ 底部；指押さえ	見込みに平行線のヘラミガキ	硬	
375	Ⅲ区ＣＳＰ06第１遺構面	瓦器・皿	不明	細；石英・長石ごく少	外面；灰色(Ｎ4/0) 内面；灰色(Ｎ5/0)	1/8	口縁部；回転ナデ 底部；指押さえ	ヘラミガキ	硬	
376	Ⅲ区ＣＳＰ06第１遺構面	白磁・碗	不明	微	外面；灰白色(7.5Ｙ7/1) 内面；灰白色(7.5Ｙ7/1)	1/8	玉縁状口縁下に沈線	不明	－	白磁Ⅳ類の口縁部
377	Ⅲ区ＣＳＰ07第１遺構面	須恵・椀	底；5.6	細；石英・長石小少	外面；灰褐色(7.5Ｙ Ｒ5/2) 内面；黄灰色(2.5Ｙ5/1)	8/8	指押さえ→回転ナデ，ヘラミガキの有無不明	板ナデ，マメツ	良	二次焼成を被る
378	Ⅲ区ＣＳＰ07第１遺構面	土質・甕	不明	中；石英・長石中砕，赤色粒小少，赤色石粒小多	外面；にぶい黄橙色(10Ｙ Ｒ7/2) 内面；灰黄色(2.5Ｙ7/2)	1/8	口縁部；タテハケ→ヨコハケ（板ナデ）	板ナデ	良	
379	Ⅲ区ＣＳＰ12第１遺構面	瓦器・椀	口；15.7	細；石英・長石中少	外面；灰色(Ｎ4/0) 内面；灰白色(5Ｙ7/1)	1/8存	体部；指押さえ 口縁部；ヨコナデ	回転ヘラミガキ	硬	尾上編年Ⅲ－２期
380	Ⅲ区ＣＳＰ09第１遺構面	黒色・椀	口；15.7 器；4.7 底；6.0	細；石英・長石中～大ごく少	外面；灰白色(2.5Ｙ8/2) 内面；黒褐色(2.5Ｙ3/1)	4/8	回転ナデ，ヘラミガキ	４分割ヘラミガキ	良	Ａ類
381	Ⅲ区ＣＳＰ09第１遺構面	土質・甕	口；43.0	やや粗；石英・長石中多	外面；にぶい黄褐色(10Ｙ Ｒ4/3) 内面；灰黄色(2.5Ｙ7/2)	1/8	体部；指押さえ→タテハケ 口縁部；指押さえ→ヨコハケ→ヨコナデ	板ナデ	良	
382	Ⅲ区ＣＳＰ09第１遺構面	石鍋	不明	滑石痕	外面；黒色(5Ｙ2/1) 内面；灰白色(5Ｙ7/1)	1/8	不明	不明	－	木戸分類Ⅱ類ａ 外面に煤付着
383	Ⅲ区ＣＳＰ13第１遺構面	須恵・坏	底；11.4	細；石英・長石小少	外面；灰色(Ｎ6/0) 内面；灰色(Ｎ6/0)	底1/8	高台貼付	回転ナデ	硬	混入か
384	Ⅲ区ＣＳＰ13第１遺構面	瓦器・椀	口；15.8	細；石英・長石中～小ごく少	外面；灰色(5Ｙ4/1) 内面；灰色(5Ｙ4/1)	1/8	体部；指押さえ，ヘラミガキ 口縁部；板ナデ	体部；回転ヘラミガキ 見込み；螺旋状ヘラミガキ	良	尾上編年Ⅲ－２期
385	Ⅲ区ＣＳＰ14第１遺構面	土質・坏	口；14.8 器；2.8 底；9.1	細；石英・長石中少	外面；にぶい黄色(2.5Ｙ6/3) 内面；黄灰色(2.5Ｙ6/1)	底2/8存	口縁部；回転ナデ 底部；マメツ	口縁部；回転ナデ	やや軟	二次焼成
386	Ⅲ区ＣＳＰ14第１遺構面	瓦器・椀	底；5.2	細；石英・長石小少	外面；灰白色(2.5Ｙ7/1) 内面；黄灰色(2.5Ｙ4/1)	底8/8	指押さえ	マメツ	やや軟	尾上編年Ⅲ－１期の所産か？
387	Ⅲ区ＣＳＰ15第１遺構面	土質・小皿	口；8.4 器；1.4 底；6.4	細；石英・長石小ごく少	外面；灰黄色(2.5Ｙ7/2) 内面；灰黄色(2.5Ｙ7/2)	2/8	口縁部；回転ナデ 底部；マメツ	回転ナデ	良	
388	Ⅲ区ＣＳＰ15第１遺構面	瓦器・椀	底；3.9	細；石英・長石小少	外面；灰黄色(2.5Ｙ7/2) 内面；灰色(Ｎ5/0)	2/8	高台貼付	見込み平行線状ヘラミガキ	やや軟	
389	Ⅲ区ＣＳＰ22第１遺構面	瓦器・椀	口；16.0	細；石英・長石中少	外面；灰白色(2.5Ｙ7/1) 内面；灰白色(2.5Ｙ7/1)	小破片	指押さえ，口縁部；ヨコナデ ヘラミガキ	回転ヘラミガキ	良	
390	Ⅲ区ＣＳＰ22第１遺構面	瓦器・椀	底；5.4	細；石英・長石小ごく少	外面；灰色(Ｎ4/0) 内面；灰色(Ｎ4/0)	底1/8存	指押さえ	回転ヘラミガキ 見込み平行線状ヘラミガキ	硬	
391	Ⅲ区ＣＳＰ27第１遺構面	瓦器・椀	不明	細；石英・長石小ごく少	外面；灰色(Ｎ5/0) 内面；灰色(Ｎ5/0)	口小片	指押さえ，口縁部；ヨコナデ ヘラミガキ	回転ヘラミガキ	硬	
392	Ⅲ区ＣＳＰ31第１遺構面	土質・皿	口；8.8	細；石英・長石小少	外面；灰白色(2.5Ｙ8/2) 内面；浅黄橙色(10Ｙ Ｒ8/3)	1/8	回転ナデ	回転ナデ	良	
393	Ⅲ区ＣＳＰ31第１遺構面	黒色・椀	底；3.6	細；石英・長石小少	外面；浅黄橙色(10Ｙ Ｒ8/3) 内面；黒色(5Ｙ2/1)	1/8	回転ナデ，ミガキの有無不明	回転ヘラミガキ	良	Ａ類
394	Ⅲ区ＣＳＰ33第１遺構面	白磁・碗	不明	微	外面；灰白色(5Ｙ7/1) 内面；灰白色(5Ｙ7/1)	1/8	不明	不明	－	
395	Ⅲ区ＣＳＰ36第１遺構面	土質・坏	不明	細；石英・長石小砕	外面；灰白色(10Ｙ Ｒ8/2) 内面；灰白色(10Ｙ Ｒ8/2)	1/8	口縁部；回転ナデ 底部；マメツ	回転ナデ	良	
396	Ⅲ区ＣＳＰ36第１遺構面	瓦器・椀	不明	微	外面；オリーブ黒色(7.5Ｙ3/1) 内面；オリーブ黒色(7.5Ｙ3/1)	小片	指押さえ→ヘラミガキ	体部；回転ヘラミガキ 見込み；ジグザグ状ヘラミガキ	硬	楠葉型の可能性が高い
397	Ⅲ区ＣＳＰ41第１遺構面	土質・小皿	不明	細；石英・長石小少	外面；にぶい黄橙色(10Ｙ Ｒ7/2) 内面；灰黄褐色(10Ｙ Ｒ6/2)	小片	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り（Ｒ）	回転ナデ	良	口縁部に煤付着
398	Ⅲ区ＣＳＰ44第１遺構面	黒色・椀	口；15.2	細；石英・長石小少	外面；灰白色(10Ｙ Ｒ8/2) 内面；オリーブ黒色(5Ｙ3/1)	小片	マメツ，ヘラミガキの有無不明	回転ヘラミガキ	良	Ａ類
399	Ⅲ区ＣＳＰ54第１遺構面	瓦器・椀	口；15.2	細；石英・長石小少	外面；灰色(5Ｙ5/1) 内面；灰色(5Ｙ5/1)	1/8存	体部；指押さえ 口縁部；ヨコナデ	回転ヘラミガキ	やや硬	尾上編年Ⅲ－３期

報文番号	遺構名	器種名	法量	胎土	色調	残存率	外面調整	内面調整	焼成	備考
400	Ⅲ区ＣＳＰ54第１遺構面	土質・坏	口；13.8 器；(3.9) 底；(6.5)	細；石英・長石小少	外面；灰白色(2.5Y8/1) 内面；灰白色(2.5Y8/1)	3/8存	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り（R）	回転ナデ	やや硬	
401	Ⅲ区ＣＳＰ77第１遺構面	土質・椀	底；4.6	細；石英・長石中少	外面；灰色(5Y5/1) 内面；灰色(5Y4/1)	1/8	マメツ，回転ナデ	板ナデ	やや軟	
402	Ⅲ区ＣＳＰ77第１遺構面	須恵・甕	不明	中；石英・長石中～小普	外面；灰色(N5/0) 内面；灰白色(5Y7/1)	小片	正格子叩き	当て具痕，ナデ，ヨコナデ	やや軟	
403	Ⅲ区ＣＳＰ65第１遺構面	土質・坏	口；13.6 器；3.4 底；6.8	中；石英・長石中～小少，赤色粒中少	外面；にぶい黄褐色(10YR5/3) 内面；にぶい黄褐色(10YR5/3)	3/8存	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り（L？），板状圧痕	回転ナデ，ナデ	良	二次焼成
404	Ⅲ区ＣＳＰ73第１遺構面	須恵・鉢	不明	中；石英・長石中～大少	外面；灰色(N6/0) 内面；灰色(N5/0)	小片	ヨコナデ，指押さえ	ヨコナデ，指押さえ	硬	片口縁部
405	Ⅲ区ＣＳＰ79第１遺構面	土質・小皿	口；7.8 器；0.8 底；5.4	細；石英・長石小少，赤色粒中少	外面；にぶい黄橙色(10YR7/3) 内面；にぶい黄橙色(10YR7/3)	完存	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り（R），板状圧痕	回転ナデ，ナデ	やや硬	
406	Ⅲ区ＣＳＰ79第１遺構面	須恵・椀	底；4.8	中；石英・長石中～小普	外面；灰白色(2.5Y8/1) 内面；灰白色(2.5Y8/1)	底完存	回転ナデ	マメツ	やや軟	西村型須恵器椀
407	Ⅲ区ＣＳＰ88第１遺構面	須恵・鉢	不明	細；石英・長石小ごく少	外面；灰白色(5Y7/1) 内面；灰白色(5Y8/1)	1/8	板ナデないし平行タタキ	マメツ	やや軟	
408	Ⅲ区ＣＳＰ98第２遺構面	土質・小皿	口；7.8 器；1.5 底；5.7	細；石英・長石中少，赤色粒小少	外面；灰白色(10YR8/1) 内面；灰白色(10YR8/1)	1/8存	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り（R？）	回転ナデ	やや軟	
409	Ⅲ区ＣＳＰ119第２遺構面	土質・小皿	器；1.2	細；石英・長石ごく小ごく少，赤色粒小ごく少	外面；灰白色(2.5Y8/1) 内面；灰白色(2.5Y8/1)	1/8	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り	回転ナデ	良	
410	Ⅲ区ＣＳＰ119第２遺構面	土瓶・甕	不明	細；石英・長石小少	外面；灰色(N4/0) 内面；灰色(N6/0)	小片	格子叩き	当て具痕→ナデ→タテナデ	硬	
411	Ⅲ区ＣＳＰ130第２遺構面	土質・小皿	器；1.45	中；石英・長石中～小普	外面；橙色(5YR7/6) 内面；橙色(5YR6/8)	1/8	回転ナデ	回転ナデ	良	顕著な二次焼成
412	Ⅲ区ＣＳＰ139第２遺構面	土質・坏	底；7.0	中；石英・長石大～中普	外面；灰白色(2.5Y8/1) 内面；灰白色(10YR8/2)	2/8存	マメツ	マメツ	軟	
413	Ⅶ区ＡＳＰ06	黒色・椀	不明	細；石英・長石小ごく少	外面；灰白色(10YR8/2) 内面；黒色(5Y2/1)	底2/8	指押さえ，回転ナデ 高台貼付位置カキ目	ヘラミガキ	良	A類
414	Ⅶ区ＡＳＰ06	黒色・椀	底；6.7	細；石英・長石小ごく少	外面；灰白色(2.5Y8/2) 内面；黒色(5Y2/1)	底1/8	底部；板状圧痕 高台貼付位置カキ目	ヘラミガキ，マメツ	良	A類
415	Ⅶ区ＡＳＰ44，（ＳＰ44）	須恵・椀	口；14.6 器；4.2 底；5.0	細；石英・長石小ごく少	外面；灰白色(2.5Y7/1) 内面；にぶい黄橙色(10YR7/2)	底部ほぼ完存	指押さえ，回転ナデ（マメツによるヘラミガキの有無不明）	板ナデ，ヘラミガキ	やや軟	
416	Ⅶ区ＡＳＰ45	土質・坏	不明	細；石英・長石小～中少，赤色粒小少	外面；淺黄橙色(10YR8/3) 内面；淺黄橙色(10YR8/3)	小片	回転ナデ	回転ナデ	やや軟	
417	Ⅶ区ＡＳＰ45	東播・捏鉢	底；10.0	細；石英・長石小少	外面；灰色(N6/0) 内面；灰色(N6/0)	底2/8	底部；回転糸切り→周縁のみナデ	回転ナデ，ナデ	やや軟	
418	Ⅶ区ＡＳＰ37	瓦器・椀	底；4.4	細；石英・長石小少	外面；灰色(N3/0) 内面；灰色(N3/0)	底4/8	マメツ	マメツ	良	
419	Ⅲ区Ｃ遺構面上層	土質・小皿	口；6.8 器；0.9 底；5.6	細；石英・長石小ごく少	外面；灰白色(10YR8/2) 内面；灰白色(10YR8/2)	5/8存	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り（R）	回転ナデ	良	
420	Ⅲ区Ｃ遺構面上層包含層	土質・小皿	口；7.8 器；1.45 底；6.3	細；石英・長石小少	外面；灰白色(2.5Y8/2) 内面；灰白色(2.5Y8/2)	口3/8	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り（R）	回転ナデ	良	
421	Ⅲ区Ｂ遺構面上層包含層	土質・小皿	口；8.0 器；1.5 底；5.0	細；石英・長石中少，赤色粒小少	外面；淺黄橙色(10YR8/3) 内面；淺黄橙色(10YR8/3)	2/8	口縁部；指押さえ→回転ナデ 底部；マメツ	指押さえ→回転ナデ	良	
422	Ⅲ区Ｂ遺構面上層包含層	土質・小皿	口；8.8 器；1.3 底；5.8	細；石英・長石小少，赤色粒小ごく少	外面；淺黄橙色(10YR8/3) 内面；灰白色(10YR8/2)	1/8	口縁部；回転ナデ 底部；マメツ	回転ナデ	良	
423	Ⅲ区Ｂ遺構面上層	土質・小皿	口；9.0 器；1.1 底；6.8	細；石英・長石小ごく少	外面；淺黄橙色(10YR8/4) 内面；灰黄色(2.5Y7/2)	1/8	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り（R）	回転ナデ	良	
424	Ⅲ区Ｃ遺構面上層	土質・小皿	口；8.6 器；1.25 底；6.6	細；石英・長石小少	外面；灰黄色(2.5Y7/2) 内面；灰黄色(2.5Y6/2)	2/8存	口縁部；回転ナデ 底部；板状圧痕	口縁部；回転ナデ見込み；ナデ	良	内外面に二次焼成痕
425	Ⅲ区Ｃ遺構面上層包含層	土質・小皿	口；8.0 器；1.5 底；6.0	細；石英・長石小少	外面；灰白色(10YR8/2) 内面；灰白色(10YR8/2)	1/8	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り（R）	回転ナデ	良	
426	Ⅲ区Ｃ遺構面上層包含層	土質・小皿	口；8.2 器；1.2	細；石英・長石小少	外面；淺黄橙色(10YR8/3) 内面；灰白色(2.5Y8/2)	1/8	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り（R）	回転ナデ	良	
427	Ⅲ区Ｃ遺構面上層	土質・坏	口；13.6 器；(3.0) 底；8.1	細；石英・長石小少	外面；灰白色(10YR8/2) 内面；灰白色(10YR8/2)	1/8存	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り	回転ナデ	やや軟	

報文番号	遺構名	器種名	法量	胎土	色調	残存率	外面調整	内面調整	焼成	備考
428	Ⅲ区C遺構面上層	土質・坏	口；14.2 器；3.4 底；9.0	普；石英・長石小～中普	外面；浅黄橙色(7.5Y R8/3) 内面；浅黄橙色(10Y R8/3)	2/8存	口縁部；回転ナデ 底部；マメツ	回転ナデ	やや軟	
429	Ⅲ区B遺構面上層包含層	土質・坏	口；15.4 器；3.3	中；石英・長石小～中少、赤色粒小少	外面；にぶい橙色(7.5Y R7/3) 内面；にぶい橙色(7.5Y R7/4)	2/8	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り	回転ナデ	良	
430	Ⅲ区B遺構面上層	土質・坏	底；7.6	中；石英・長石小少、赤色粒小普	外面；浅黄橙色(7.5Y R8/3) 内面；浅黄橙色(10Y R8/3)	底2/8	底部；ヘラ切り	回転ナデ、ナデ	やや軟	
431	Ⅲ区B遺構面上層	土質・坏	底；8.6	細；石英・長石小少、赤色粒小少	外面；灰白色(2.5Y R8/2) 内面；灰白色(10Y R8/2)	底3/8	底部；回転ヘラ切り（R？）	回転ナデ、ナデ	良	
432	Ⅲ区B遺構面上層	土質・椀	底；4.7	細；石英・長石小ごく少	外面；にぶい橙色(7.5Y R7/4) 内面；にぶい黄橙色(10Y R6/4)	底2/8	指押さえ	板ナデ	良	二次焼成を被る
433	Ⅲ区C遺構面上層包含層	土質・椀	底；5.0	細；石英・長石小ごく少	外面；灰白色(2.5Y8/2) 内面；灰黄色(2.5Y7/2)	底1/8	口縁部；指押さえ→回転ナデ 底部；回転ヘラ切り→ヨコナデ	回転ナデ、ナデ	良	
434	Ⅲ区B遺構面上層	土質・椀	底；6.2	細；石英・長石小少、赤色粒小少	外面；にぶい橙色(7.5Y R7/4) 内面；灰白色(10Y R8/2)	底1/8	底部；回転ヘラ切り→高台貼付	マメツ	良	坏に高台を貼付したかの器形
435	Ⅲ区C遺構面上層	土質・椀	底；5.6	細；石英・長石小～中少	外面；灰白色(5Y8/2) 内面；浅黄橙色(10Y R8/3)	小片	口縁部；回転ナデ 底部；マメツ	回転ナデ	良	
436	Ⅲ区C遺構面上層包含層	土質・椀	底；(6.4)	細；石英・長石小少	外面；灰色(5Y5/1) 内面；灰白色(5Y7/1)	体6/8	指押さえ→回転ナデ	マメツ	良	
437	Ⅲ区B遺構面上層	黒色・椀	底；6.0	細；石英・長石小少	外面；にぶい黄橙色(10Y R7/3) 内面；灰色(5Y4/1)	底1/8	指押さえ→回転ナデ	マメツ（ヘラミガキ）	良	A類
438	Ⅲ区B遺構面上層包含層	須恵・椀	底；5.9	細；石英・長石小少、赤色粒小少	外面；にぶい黄橙色(10Y R7/3) 内面；灰黄褐色(10Y R6/2)	底7/8	マメツ	回転ナデ、ナデミガキの有無不明	やや軟	焼成不良
439	Ⅲ区C遺構面上層包含層	青備・椀	底；6.4	細；石英・長石小ごく少	外面；浅黄橙色(10Y R8/3) 内面；浅黄橙色(10Y R8/3)	底2/8存	マメツ	指押さえ	やや軟	山本編年Ⅲ－1期
440	Ⅲ区C遺構面上層	瓦器・椀	口；14.8	細；石英・長石小少	外面；オリーブ黒色(7.5Y3/1) 内面；灰白色(5Y7/1)	小片	指押さえ、口縁部のみヨコナデ ヘラミガキ	回転ヘラミガキ	良	尾上編年Ⅲ－2期
441	Ⅲ区B遺構面上層包含層	瓦器・椀	底；5.2	細；石英・長石小少	外面；灰白色(5Y8/1) 内面；灰白色(5Y7/1)	底1/8	高台貼付	見込み部；ヘラミガキ（平行文）	良	尾上編年Ⅲ2～3期
442	Ⅲ区B遺構面上層包含層	瓦器・椀	底；4.0	細；石英・長石中ごく少	外面；灰白色(2.5Y8/1) 内面；黄灰色(2.5Y4/1)	底1/8	指押さえ	マメツ	軟	
443	Ⅲ区C遺構面上層包含層	瓦器・皿	口；10.4 器；(1.8) 底；6.8	中；石英・長石中普	外面；灰色(7.5Y4/1) 内面；灰色(7.5Y4/1)	1/8存	口縁部；回転ナデ 底部；指押さえ	マメツ	やや軟	
444	Ⅲ区C遺構面上層包含層	白磁・碗	口；16.0	微；黒色細粒	外面；灰白色(7.5Y7/2) 内面；灰白色(7.5Y7/2)	小片	不明	不明	－	横田・森田分類Ⅳ類
445	Ⅲ区C遺構面上層包含層	白磁・碗	口；16.5	微；黒色細粒	外面；灰白色(5Y7/2) 内面；灰白色(5Y7/2)	1/8	不明	不明	－	横田・森田分類白磁碗Ⅳ類
446	Ⅲ区C遺構面上層包含層	白磁・碗	不明	微；黒色細粒	外面；灰白色(5Y7/2) 内面；灰白色(5Y7/2)	口小片	不明	不明	－	横田・森田分類白磁碗Ⅳ類
447	Ⅲ区C遺構面上層包含層	白磁・碗	不明	微；黒色細粒	外面；灰白色(7.5Y7/1) 内面；灰白色(7.5Y7/1)	口小片	不明	不明	－	横田・森田分類白磁碗Ⅳ類
448	Ⅲ区B遺構面上層包含層	白磁・碗	口；17.4	微	外面；灰白色(2.5Y7/1) 内面；灰白色(2.5Y7/1)	1/8	口縁部下に凹線状の沈線(2条)	不明	－	横田・森田分類Ⅴ－2a類か
449	Ⅲ区C遺構面上層包含層	白磁・碗	体；9.5	細；黒色細粒少	外面；灰白色(5Y7/2) 内面；灰白色(5Y7/2)	小片	不明	見込みに段	－	
450	Ⅲ区C遺構面上層包含層	白磁・碗	体；9.6	微	外面；灰白色(7.5Y7/1) 内面；灰白色(7.5Y7/1)	小片	不明	見込みの釉をカキ取る	－	横田・森田分類白磁碗Ⅷ類
451	Ⅲ区C遺構面上層包含層	白磁・碗	底；8.0	微；黒色細粒	外面；灰白色(5Y7/1) 内面；灰白色(5Y7/1)	2/8	不明	見込みに段	－	横田・森田分類白磁碗Ⅳ－1類
452	Ⅲ区C遺構面上層包含層	白磁・碗	底；6.2	微；黒色細粒	外面；灰白色(5Y7/1) 内面；灰白色(5Y7/2)	底4/8	不明	見込みに段	－	横田・森田分類白磁碗Ⅳ－1類
453	Ⅲ区C遺構面上層包含層	白磁・碗	底；4.6	微；黒色細粒	外面；灰白色(10Y8/1) 内面；灰白色(10Y8/1)	底1/8	不明	見込みに段	－	
454	Ⅲ区B遺構面上層	青磁・碗	口；12.0	微	外面；灰オリーブ色(5Y6/2) 内面；灰オリーブ色(5Y6/2)	1/8	不明	不明	－	越州窯系か
455	Ⅲ区B遺構面上層包含層	青磁・合子	底；5.6	微	外面；灰白色(7.5Y7/1) 内面；灰白色(10Y R8/2)	体1/8	型押しの蓮弁文	天井部に釉がかかる	－	
456	Ⅲ区C遺構面上層	須恵・鉢	口；23.6	細；石英・長石中少	外面；灰白色(5Y8/1) 内面；灰白色(5Y8/1)	小片	指押さえ→板ナデ？	マメツ	やや軟	十瓶窯産か 瓦質焼成
457	Ⅲ区B遺構面上層	須恵・鉢	不明	細；石英・長石小少	外面；灰色(N6/0) 内面；灰色(7.5Y6/1)	小片	口縁部；ヨコナデ 外面；板ナデ	ヨコナデ	良	
458	Ⅲ区B遺構面上層	須恵・鉢	不明	細；石英・長石小ごく少	外面；灰色(N5/0) 内面；灰色(N4/0)	小片	口縁部；ヨコナデ 体部；板ナデ？	口縁部；ヨコナデ 体部；板ナデ	やや軟	十瓶山産か？
459	Ⅲ区C遺構面上層	十瓶・鉢	底；15.6	細；石英・長石小ごく少	外面；灰色(5Y5/1) 内面；灰白色(2.5Y7/1)	底1/8存	底部；マメツ 底部外縁；ナデ	ヨコナデ、マメツ	やや軟	
460	Ⅲ区B遺構面上層	須恵・鉢	底；26.0	中；石英・長石中普、片岩？中少	外面；灰白色(2.5Y8/1) 内面；灰白色(2.5Y8/1)	底1/8存	体部；板ナデ	マメツ	やや軟	
461	Ⅲ区B遺構面上層	十瓶・甕	不明	細；石英・長石小少	外面；灰色(N4/0) 内面；灰色(N5/0)	小片	長格子叩き→ヨコナデ	ヨコナデ	硬	

報文番号	遺構名	器種名	法量	胎土	色調	残存率	外面調整	内面調整	焼成	備考
462	Ⅲ区C遺構面上層	須恵・甕	口；16.2	細；石英・長石小少	外面；灰色(5Y5/1) 内面；灰色(5Y5/1)	小片	ヨコナデ	ヨコナデ	良	十瓶窯産か
463	Ⅲ区C遺構面上層	須恵・壺ないし甕	底；10.0	普；石英・長石中普	外面；灰色(7.5Y6/1) 内面；灰色(7.5Y5/1)	底2/8存	回転ナデ	指押さえ→回転ナデ	良	
464	Ⅲ区C遺構面上層包含層	土質・甕	口；36.7	やや粗；石英・長石小～中多	外面；にぶい黄橙色(10YR6/3) 内面；にぶい黄橙色(10YR7/4)	小片	指押さえ→板ナデ	板ナデ	良	
465	Ⅲ区B遺構面上層包含層	土質・甕	口；42.0	中；石英・長石小普	外面；明黄褐色(2.5Y7/6) 内面；灰黄色(2.5Y7/2)	1/8	口縁部；ナデ 頸部；指押さえ	板ナデ（マメツ）	良	
466	Ⅲ区B遺構面上層包含層	土質・竈	不明	やや粗；石英・長石小～中普，雲母中少	外面；橙色(7.5YR6/6) 内面；明赤褐色(5YR5/6)	小片	マメツ	指押さえ→板ナデ	良	
467	Ⅲ区C第1遺構面ベース（包含層）	土質・皿	口；8.4 器；1.5 底；5.8	中；石英・長石中普	外面；灰白色(10YR8/2) 内面；灰白色(10YR8/2)	2/8	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り（R）	回転ナデ，ナデ	やや軟	
468	Ⅲ区C第1遺構面ベース（包含層）	土質・小皿	口；8.4 器；1.6 底；6.2	中；石英・長石中普	外面；灰白色(10YR8/2) 内面；灰白色(10YR8/2)	2/8存	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り（R）	回転ナデ，ナデ	良	
469	Ⅲ区C第1遺構面ベース（包含層）	土質・小皿	口；9.0 器；1.3 底；7.0	細；石英・長石小少	外面；灰白色(2.5Y8/2) 内面；灰白色(2.5Y8/2)	3/8	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り（R）	回転ナデ，ナデ	良	
470	Ⅲ区C第1遺構面ベース（包含層）	土質・小皿	口；8.8 器；1.25 底；6.8	細；石英・長石小少，赤色粒小少	外面；灰白色(10YR8/2) 内面；灰白色(2.5Y8/1)	1/8存	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り（R）	回転ナデ	良	
471	Ⅲ区C第1遺構面ベース（包含層）	土質・小皿	口；8.8 器；1.4 底；7.0	細；石英・長石小少，赤色粒小少	外面；灰白色(10YR8/2) 内面；灰白色(10YR8/2)	1/8	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り	回転ナデ，ナデ	良	
472	Ⅲ区C第1遺構面ベース（包含層）	土質・小皿	口；9.9 器；1.1 底；7.2	細；石英・長石小少，赤色粒中少	外面；灰白色(10YR8/2) 内面；灰白色(2.5Y8/1)	1/8存	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り（R）	回転ナデ，ナデ	良	口縁端部外縁に煤付着
473	Ⅲ区C第1遺構面ベース（包含層）	土質・小皿	底；7.0	細；石英・長石小少	外面；灰黄色(2.5Y7/2) 内面；灰黄色(2.5Y7/2)	2/8	底部；回転ヘラ切り（L）	回転ナデ	良	
474	Ⅲ区C第1遺構面ベース（包含層）	土質・椀	底；6.0	細；石英・長石中少，赤色粒小少	外面；淺黄橙色(7.5YR8/4) 内面；灰白色(2.5Y8/2)	1/8	口縁部；回転ナデ 底部；指押さえ→高台貼付	マメツ	やや軟	
475	Ⅲ区C第1遺構面ベース（包含層）	土質・椀	底；5.6	細；石英・長石小少，赤色粒小少	外面；灰白色(10YR8/2) 内面；淺黄橙色(7.5YR8/4)	1/8	高台貼付	マメツ	良	
476	Ⅲ区C第1遺構面ベース（包含層）	黒色・椀	底；5.8	細；石英・長石小少	外面；淺黄橙色(10YR8/3) 内面；オリーブ黒色(5Y3/1)	底1/8存	指押さえ，回転ナデ	板ナデ，回転ヘラミガキ	良	A類
477	Ⅲ区C第1遺構面ベース（包含層）	黒色・椀	底；4.8	細；石英・長石中少	外面；灰白色(10YR8/2) 内面；オリーブ黒色(5Y3/1)	底1/8存	指押さえ→回転ナデ	板ナデ，回転ヘラミガキ	良	A類
478	Ⅲ区C第1遺構面ベース（包含層）	須恵・椀	底；3.8	細；石英・長石小少	外面；灰白色(5Y8/1) 内面；灰白色(5Y7/1)	1/8	指押さえ，回転ナデ	板ナデ，回転ヘラミガキ	やや硬	
479	Ⅲ区C第1遺構面ベース（包含層）	須恵・椀	不明	細；石英・長石ごく小ごく少，黒色細粒少	外面；灰白色(5Y7/1) 内面；灰白色(5Y7/1)	1/8	不明	不明	硬	
480	Ⅲ区C第1遺構面ベース（包含層）	須恵・椀	底；5.7	細；石英・長石大少	外面；灰白色（N7/0） 内面；灰色（N6/0）	底8/8	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り	回転ナデ	硬	東播系椀か（山仲分類A1類）
481	Ⅲ区C第1遺構面ベース（包含層）	瓦器・椀	口；17.0 器；4.8 底；6.3	細；石英・長石小少	外面；灰色（N5/0） 内面；灰色（N4/0）	1/8存	口縁部；ヨコナデ 体部；指押さえ→ヘラミガキ	回転ヘラミガキ 連結輪状ヘラミガキ	良	
482	Ⅲ区C第1遺構面ベース（包含層）	瓦器・椀	口；15.0	細；石英・長石小ごく少	外面；灰色(5Y6/1) 内面；灰色(5Y6/1)	1/8存	口縁部；ヨコナデ 体部；指押さえ	マメツ	やや軟	尾上編年Ⅲ－3期の所産か
483	Ⅲ区C第1遺構面ベース（包含層）	瓦器・椀	底；5.4	細；石英・長石ごく小ごく少	外面；灰色(5Y6/1) 内面；灰色（N4/0）	1/8	指押さえ→ヘラミガキ	口縁部；回転ヘラミガキ 見込み；連結輪状ヘラミガキ	良	
484	Ⅲ区C第1遺構面ベース（包含層）	瓦器・椀	口；15.6	細；石英・長石中～小少	外面；黒色(5Y2/1) 内面；灰白色(2.5Y7/1)	1/8存	口縁部；ヨコナデ 体部；指押さえ	回転ヘラミガキ	やや軟	尾上編年Ⅲ－2期
485	Ⅲ区C第1遺構面ベース（包含層）	瓦器・皿	口；9.2 器；1.9 底；7.6	細；石英・長石ごく小ごく少	外面；灰色（N5/0） 内面；灰色（N5/0）	2/8	口縁部；回転ナデ 底部；（回転？）ナデ	口縁部；回転ヘラミガキ 見込み；平行線状ヘラミガキ	良	
486	Ⅲ区C第1遺構面ベース（包含層）	瓦器・皿	不明	中；石英・長石小～中普	外面；灰白色(10YR8/1) 内面；灰色（N4/0）	小片	口縁部；回転ナデ 底部；指押さえ	マメツ	やや軟	
487	Ⅲ区C第1遺構面ベース（包含層）	白磁・碗	口；17.1	微；黒色細粒	外面；灰白色(5Y7/2) 内面；灰白色(5Y7/2)	1/8	不明	不明	—	横田・森田分類白磁碗Ⅳ類
488	Ⅲ区C第1遺構面ベース（包含層）	白磁・碗	底；7.2	微；黒色細粒	外面；灰白色(2.5Y8/2) 内面；灰白色(2.5Y7/1)	底1/8	底体部；施釉しない	見込み；底部境に深い段 見込み中央；指押さえ	—	横田・森田分類白磁碗Ⅳ－1類
489	Ⅲ区C第1遺構面ベース（包含層）	白磁・碗	不明	微	外面；灰白色(5Y7/1) 内面；灰白色(5Y7/1)	1/8	口縁部下に1条の沈線状の凹線	口縁部下に1条の沈線	—	横田・森田分類Ⅴ類か
490	Ⅲ区C第1遺構面ベース（包含層）	白磁・碗	不明	微；黒色細粒	外面；灰白色(5Y7/1) 内面；灰白色(5Y7/1)	1/8	不明	口縁部下に1条の沈線	—	
491	Ⅲ区C第1遺構面ベース（包含層）	白磁・皿	口；12.0	微；黒色細粒を少量含む	外面；灰白色(7.5Y7/1) 内面；灰白色(7.5Y7/1)	1/8	不明	見込み底体部境に沈線をもつ	—	横田・森田分類白磁皿Ⅳ類
492	Ⅲ区C第1遺構面断割（斜め）	青磁・皿	底；3.0	不明	外面；灰白色(2.5Y8/2) 内面；オリーブ黄色(5Y6/4)	底1/8存	不明	不明	—	横田・森田分類 龍泉窯系青磁皿Ⅰ類

報文番号	遺構名	器種名	法量	胎土	色調	残存率	外面調整	内面調整	焼成	備考
493	Ⅲ区C第1遺構面掘削中	土瓶・鉢	口；27.4	細；石英・長石小少	外面；灰色（N6/0） 内面；灰色（N6/0）	小片	長格子叩き→ヨコナデ	ヨコナデ	硬	
494	Ⅲ区C第1遺構面ベース包含層	須恵・鉢	不明	細；石英・長石小少	外面；灰色（N6/0） 内面；灰白色（2.5Y7/1）	1/8	指押さえ，ヨコナデ 片口創出時指押さえ	板ナデ，指押さえ	良	土瓶窯産か
495	Ⅲ区Cベース土包含層	土瓶・甕	口；27.8	細；石英・長石小少	外面；灰色（N4/0） 内面；灰色（N4/0）	口2/8	口縁部；右上がり格子叩き→ヨコナデ 体部；格子叩き→ヨコナデ	口縁部；ヨコナデ 体部；あて具痕→ナデ	良	
496	Ⅲ区Cベース土包含層 Ⅲ区C遺構面精査中	土瓶・甕	不明	細；石英・長石小少	外面；灰色（N4/0） 内面；灰白色（N7/0）	1/8	長格子叩き	あて具痕，ナデ，ヨコナデ	良	
497	Ⅲ区C第1遺構面ベース包含層	須恵・甕底	底；13.4	細；石英・長石ごく小ごく少，黒色石粒小少	外面；灰白色（N7/0） 内面；灰白色（2.5Y8/1）	底1/8存	板ナデ，底部外縁のみヨコナデ 底部内縁；ナデ	指押さえ→板ナデ？→ヨコナデ	硬	
498	Ⅲ区C第1遺構面ベース包含層	須恵・甕	不明	細；石英・長石ごく小ごく少	外面；灰オリーブ色（5Y5/2） 内面；灰白色（5Y7/1）	小片	ヨコナデ	ヨコナデ	硬	外面；自然釉降灰 内面；わずかに自然釉降灰
499	Ⅲ区Cベース土包含層	須恵・甕	不明	細；石英・長石中少	外面；灰色（N6/0） 内面；灰白色（N8/0）	小片	長格子叩き	あて具痕，ナデ，ヨコナデ	良	土瓶窯産か
500	Ⅲ区C第1遺構面ベース包含層	土質・甕	口；38.0	やや粗；石英・長石中普	外面；にぶい黄褐色（10YR5/3） 内面；にぶい黄橙色（10YR7/2）	口1/8	指押さえ→板ナデ	口縁部；指押さえ，ナデ→板ナデ 端部；ヨコナデ	良	
501	Ⅲ区C第1遺構面ベース包含層	土質・羽釜	不明	やや粗；石英・長石小多	外面；灰黄色（2.5Y6/2） 内面；黄灰色（2.5Y5/1）	鍔部1/8	鍔貼付時の指押さえ，ヨコナデ	マメツ	良	
502	Ⅲ区C第1遺構面ベース包含層	土質・鍋	不明	細；石英・長石小少	外面；にぶい褐色（7.5Y6/3） 内面；浅黄橙色（7.5YR8/4）	小片	口縁部；ヨコナデ 体部；指押さえ→板ナデ	口縁部；ヨコハケ 体部；板ナデ	良	
503	Ⅲ区C第1遺構面ベース包含層	土質・甕	不明	やや粗；石英・長石小多	外面；にぶい黄橙色（10YR7/3） 内面；灰黄褐色（10YR5/2）	口小片	指押さえ→ハケ目	指押さえ→ナデ	良	内面及び外面下半に煤付着
504	Ⅲ区C第1遺構面掘削中	土質・竈	不明	やや粗；石英・長石中普，雲母中普	外面；にぶい黄褐色（10YR5/4） 内面；にぶい黄褐色（10YR4/3）	小片	指押さえ，ナデ	指押さえ，ナデ	良	
505	Ⅲ区C第1遺構面ベース包含層	石鍋	底；16.4	滑石製	外面；黒色（7.5Y2/1） 内面；オリーブ灰色（2.5GY5/1）	底2/8	ノミ痕，擦痕	ノミ痕，擦痕	－	
506	Ⅱ区A遺構面精査中	土質・坏	口；13.4 器；3.7 底；8.8	中；石英・長石中普，赤色粒中少	外面；にぶい橙色（7.5YR7/3） 内面；にぶい黄橙色（10YR6/3）	3/8	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り→板状圧痕	回転ナデ，ナデ	良	二次焼成を被る
507	Ⅱ区B遺構面精査中	土質・坏	口；14.0 器；3.5 底；9.8	細；石英・長石小少，赤色粒小少	外面；浅黄橙色（7.5YR8/4） 内面；灰白色（10YR8/2）	6/8	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ削り→板状圧痕	回転ナデ	やや軟	佐藤分類坏DⅡ－2
508	Ⅱ区B遺構面精査中	白磁・碗	口；15.8	微	外面；灰白色（5Y7/2） 内面；灰白色（5Y7/2）	1/8	不明	不明	－	横田・森田分類Ⅳ－2類
509	Ⅲ区B精査中	土質・椀	底；7.0	細；石英・長石小少，赤色粒小ごく少	外面；灰白色（10YR8/2） 内面；灰白色（10YR8/2）	体2/8	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り，高台回転ナデ	回転ナデ	良	坏に厚手の高台を貼付した特異な器形
510	Ⅲ区C遺構面ガリかけ精査中	土質・皿	口；9.2 器；1.1 底；6.2	細；石英・長石小少，赤色粒小ごく少	外面；灰白色（10YR8/2） 内面；灰白色（10YR8/2）	1/8	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り（R）	回転ナデ	良	
511	Ⅲ区C遺構面ガリかけ精査中	土質・皿	口；9.2 器；1.7 底；6.5	細；石英・長石小ごく少	外面；灰白色（10YR8/2） 内面；浅黄橙色（10YR8/3）	1/8	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り（R？）→板状圧痕	回転ナデ，ナデ	良	
512	Ⅲ区C遺構面精査	土質・小皿	口；8.0 器；1.2 底；4.2	細；石英・長石中少	外面；灰白色（10YR8/1） 内面；灰白色（10YR8/2）	2/8	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り（R）	回転ナデ	良	
513	Ⅲ区C遺構面ガリかけ精査中	土質・小皿	口；7.75 器；1.4 底；5.6	細；石英・長石小少	外面；褐灰色（10YR6/1） 内面；灰黄褐色（10YR6/2）	3/8	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り（R）	回転ナデ，ナデ	良	
514	Ⅲ区C遺構面ガリかけ精査中	土質・小皿	口；7.7 器；1.1 底；6.0	細；石英・長石ごく小ごく少	外面；灰白色（2.5Y8/2） 内面；灰白色（2.5Y8/2）	2/4	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り（R）	回転ナデ，ナデ	良	
515	Ⅲ区C遺構面ガリかけ精査中	土質・小皿	口；8.4 器；1.3 底；6.2	細；石英・長石ごく小ごく少	外面；浅黄橙色（7.5YR8/3） 内面；にぶい黄橙色（10YR7/4）	1/8	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り（R）	回転ナデ	良	
516	Ⅲ区C遺構面精査中	土質・小皿	口；7.4 器；1.2 底；5.6	細；石英・長石小ごく少	外面；にぶい黄橙色（10YR7/4） 内面；灰白色（10YR8/2）	3/8存	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り（R）→板状圧痕	回転ナデ，ナデ	良	
517	Ⅲ区C遺構面ガリかけ精査中	土質・椀	不明	中；石英・長石中小～普，黒色石粒中ごく少	外面；灰白色（2.5Y7/1） 内面；灰白色（2.5Y7/1）	1/8	指押さえ 口縁部；ヨコナデ	ヨコナデ	やや硬	
518	Ⅲ区C遺構面精査中	土質・椀	底；6.4	細；石英・長石中少，赤色粒中少	外面；浅黄色（2.5Y7/3） 内面；浅黄色（2.5Y7/3）	底2/8	口縁部；回転ナデ 底部；不明	マメツ	良	
519	Ⅲ区C遺構面精査中	土質・長脚椀	底；8.6	細；石英・長石小ごく少	外面；浅黄橙色（7.5YR8/3） 内面；灰白色（7.5YR8/2）	脚1/8存	回転ナデ	ナデ	良	
520	Ⅲ区C遺構面精査中	土質・椀	底；7.1	細；石英・長石中少	外面；灰白色（10YR8/1） 内面；灰白色（10YR8/1）	底3/8	高台貼付	マメツ	良	吉備系土師器椀か
521	Ⅲ区C遺構面精査中	吉備・椀	底；6.2	細；石英・長石小ごく少	外面；灰白色（2.5Y8/1） 内面；灰白色（2.5Y8/1）	高台完存	マメツ	指押さえ	良	山本編年Ⅲ－1期か

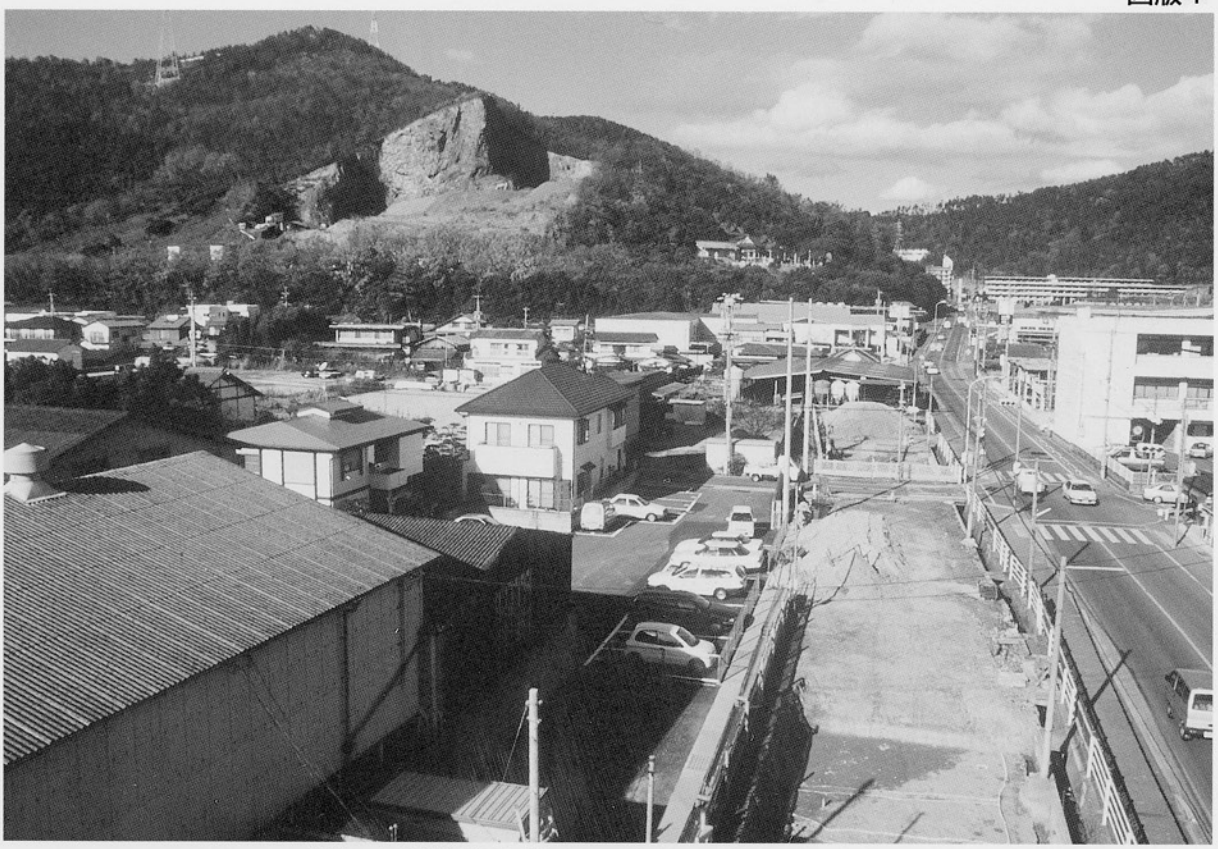
報文番号	遺構名	器種名	法量	胎土	色調	残存率	外面調整	内面調整	焼成	備考
522	Ⅲ区C遺構面ガリかけ精査中	黒色・椀	口；14.6	細；石英・長石小少	外面；灰白色(10YR8/2) 内面；黒色(5Y2/1)	小片	口縁部；回転ナデ，ヘラミガキ 底部；回転ヘラ削り	口縁部；回転ヘラミガキ 見込み；ヘラミガキ	良	A類
523	Ⅲ区C遺構面精査中	須恵・椀	底；6.2	中；石英・長石小～中普	外面；灰白色(5Y8/1) 内面；灰白色(5Y8/1)	底2/8存	回転ナデ	回転ヘラミガキ	硬	
524	Ⅲ区C遺構面精査	須恵・椀	底；2.2	細；石英・長石小普，黒色細粒小少	外面；灰白色(N8/0) 内面；灰白色(N7/0)	1/8	体部；回転ヘラケズリ 底部；高台貼付	回転ナデ，ナデ	硬	
525	Ⅲ区C上面精査中	瓦器・椀	口；16.8 器；5.75 底；6.8	中；石英・長石中～小少	外面；オリーブ黒色(7.5Y3/1) 内面；オリーブ黒色(7.5Y3/1)	3/8	指押さえ→ヨコナデ，ヘラミガキ	回転ヘラミガキ	やや軟	尾上編年Ⅱ－3期
526	Ⅲ区C第1遺構面精査中	瓦器・椀	口；15.0	細；石英・長石小少	外面；灰色(N4/0) 内面；灰色(N4/0)	1/8	指押さえ 口縁部；ヨコナデ→ヘラミガキ	回転ヘラミガキ	硬	尾上編年Ⅱ－3期
527	Ⅲ区C第1遺構面精査中	瓦器・皿	口；8.8 器；1.8	細；石英・長石小少	外面；灰色(N4/0) 内面；灰色(N4/0)	2/8存	口縁部；ヨコナデ 体部；指押さえ→ヘラミガキ	口縁部；回転ヘラミガキ 見込み；平行線状ヘラミガキ	良	
528	Ⅲ区C遺構面ガリかけ精査中	瓦器・皿	口；9.2	細；石英・長石小ごく少	外面；灰色(N4/0) 内面；灰色(N4/0)	1/8	口縁部；ヨコナデ 底部；指押さえ	ヘラミガキ	良	
529	Ⅲ区C遺構面精査中	白磁・碗	口；15.0	微	外面；灰白色(5Y7/2) 内面；灰白色(5Y7/2)	小片	不明	不明	－	横田・森田分類白磁碗Ⅱないし Ⅲ類
530	Ⅲ区C遺構面ガリかけ精査中	白磁・碗	口；16.0	微；黒色細粒	外面；灰白色(7.5Y7/1) 内面；灰白色(5Y7/2)	1/8存	端部下に沈線	不明	－	横田・森田分類白磁碗Ⅳ類
531	Ⅲ区C遺構精査中	白磁・碗	不明	微；黒色細粒	外面；灰白色(5Y7/2) 内面；灰白色(5Y7/2)	小片	不明	不明	－	横田・森田分類白磁碗Ⅳ－1類
532	Ⅲ区C遺構面精査中	白磁・碗	不明	微；黒色細粒	外面；灰白色(5Y7/2) 内面；灰白色(5Y7/2)	小片	不明	不明	－	横田・森田分類白磁碗Ⅳ類
533	Ⅲ区C遺構面精査	白磁・碗	底；6.0	微	外面；灰白色(2.5Y8/2) 内面；灰白色(7.5Y7/2)	1/8	施釉されない	見込みの釉をかき取る	－	横田・森田分類白磁碗Ⅷ類
534	Ⅲ区C遺構面精査中	青磁・碗	不明	微	外面；灰オリーブ色(5Y6/2) 内面；灰オリーブ色(5Y6/2)	小片	不明	見込みに段	－	
535	Ⅲ区C遺構面ガリかけ精査中	須恵・鉢	不明	細；石英・長石小ごく少	外面；灰色(N5/0) 内面；灰色(N4/0)	小片	板ナデ，ヨコナデ	板ナデ，マメツ	良	
536	Ⅲ区C遺構面ガリかけ精査中	須恵・鉢	不明	細；石英・長石小少	外面；灰色(5Y5/1) 内面；灰色(5Y6/1)	1/8	ヨコナデ	ヨコナデ	硬	
537	Ⅲ区C遺構面精査	東播・捏鉢	底；9.6	やや粗；石英・長石小～中多	外面；灰白色(N7/0) 内面；灰白色(5Y7/1)	底2/8存	体部；回転ナデ 底部；回転糸切り	マメツ	良	
538	Ⅲ区C遺構面ガリかけ精査中	土瓶・甕	不明	細；石英・長石中少	外面；灰色(5Y5/1) 内面；灰色(N6/0)	1/8	右上がり叩き→ヨコナデ	指押さえ，ヨコナデ	硬	
539	Ⅲ区C上面精査中	土質・甕	口；44.6	粗；石英・長石中多，雲母中少	外面；灰黄褐色(10YR6/2) 内面；にぶい黄橙色(10YR6/3)	1/8	指押さえ→ヨコナデ	マメツ	良	外面に煤付着
540	Ⅲ区C上面精査中	土質・竈	不明	やや粗；石英・長石中普，雲母中普	外面；にぶい黄褐色(10YR4/3) 内面；にぶい黄褐色(10YR4/3)	1/8	指押さえ→ナデ	指押さえ	良	胎土中に多量の雲母を含む
542	Ⅲ区C第2遺構面精査中	土質・小皿	口；8.2 器；1.0 底；6.8	細；石英・長石小～中少	外面；灰黄褐色(10YR5/2) 内面；灰黄褐色(10YR5/2)	2/8	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り（R）	回転ナデ	良	
543	Ⅲ区C第2遺構面精査中	土質・坏	口；11.0 器；2.5 底；6.6	細；石英・長石小少，赤色粒中少	外面；淺黄橙色(10YR8/4) 内面；灰白色(10YR8/2)	1/8存	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り（R？）	回転ナデ	良	
544	Ⅲ区C第2遺構面精査中	須恵・椀	底；6.6	細；石英・長石小少	外面；灰色(N6/0) 内面；灰色(N6/0)	底5/8	高台貼付	ナデ，マメツ	良	瓦器椀と似た焼成
545	Ⅲ区C第2遺構面精査中	白磁・皿	口；8.8	細	外面；灰白色(7.5Y8/1) 内面；灰白色(7.5Y8/1)	小片	不明	不明	－	横田・森田分類白磁皿Ⅸ－1類
546	Ⅲ区C第2遺構面精査中	土瓶・鉢	不明	細；石英・長石小少	外面；灰色(N5/0) 内面；灰色(5Y5/1)	小片	叩き→板ナデ，ヨコナデ	板ナデ？	やや軟	瓦質焼成
547	Ⅲ区C南側溝中	土質・小皿	口；9.4 器；1.9 底；6.8	細；石英・長石小ごく少	外面；灰白色(10YR8/2) 内面；灰白色(2.5Y8/2)	1/8存	口縁部；回転ナデ 底部；回転ヘラ切り（R？）	回転ナデ	良	
548	Ⅲ区C側溝中	瓦器・皿	口；9.0	細；石英・長石小ごく少	外面；灰色(7.5Y4/1) 内面；オリーブ黒色(7.5Y3/1)	1/8存	口縁部；ヨコナデ 底部；指押さえ	マメツ	良	
549	Ⅲ区C側溝中	土質・椀	底6.2	細；石英・長石小ごく少	外面；灰白色(10YR8/2) 内面；灰白色(10YR8/2)	底5/8存	高台貼付	回転ナデ	良	
550	Ⅲ区C側溝中	黒色・椀	口；15.6	細；石英・長石小少	外面；灰白色(10YR8/1) 内面；黒色(5Y2/1)	1/8存	回転ナデ，マメツ	回転ヘラミガキ	良	A類
551	Ⅲ区C側溝中	黒色・椀	底；7.8	細；石英・長石小少	外面；灰白色(2.5Y8/2) 内面；暗灰色(N3/0)	底2/8存	高台貼付	マメツ	良	A類
552	Ⅲ区C側溝中	瓦器・椀	口；15.6 器；5.1 底；5.0	細；石英・長石小ごく少	外面；灰色(5Y5/1) 内面；灰白色(5Y7/1)	5/8存	指押さえ 口縁部；ヨコナデ 分割ヘラミガキ	分割ヘラミガキ	硬	
553	Ⅲ区C側溝中	瓦器・椀	底；4.5	細；石英・長石小ごく少	外面；灰色(N5/0) 内面；灰色(N6/0)	底5/8存	ヘラミガキ	高台貼付	硬	底部を下から押し出し気味にする
554	Ⅲ区C側溝中	白磁・碗	底；7.0	微；黒色細粒	外面；灰白色(5Y8/1) 内面；灰白色(7.5Y7/2)	底3/8存	不明	見込みに段	－	横田・森田分類白磁碗Ⅳ類
555	Ⅲ区B側溝中	土瓶・壺	底；12.0	中；石英・長石中普	外面；褐灰色(10YR6/1) 内面；灰白色(N7/0)	底1/8	板ナデ 底部外縁；回転ナデ	指押さえ	硬	内面に粘土紐継目痕が明瞭に残る 底面に下駄印

報文番号	遺構名	器種名	法量	胎土	色調	残存率	外面調整	内面調整	焼成	備考
556	Ⅲ区B側溝中	土質・甕	口；21.0	中；石英・長石小普	外面；にぶい黄褐色(10YR5/3) 内面；にぶい黄褐色(10YR5/3)	2/8	指押さえ→ナデ、板ナデ	マメツ	良	
557	Ⅱ区BSK02ベルト中、SK02、遺構面精査中	土質・焙烙	口；34.8	微；石英・長石小ごく少、角閃石小ごく少	外面；暗灰黄色(2.5Y4/2) 内面；黄灰色(2.5Y4/1)	1/8存	口縁部；指押さえ→ヨコナデ 体部；指押さえ	口縁部；指押さえ→ナデ 体部；板ナデ	良	外面に煤付着 森下友分類焙烙Ⅰ型式
558	Ⅱ区BSK02	備前・すり鉢	口；27.0	中；石英・長石中少	外面；橙色(2.5YR6/6) 内面；橙色(2.5YR6/6)	小片	回転ナデ	回転ナデ スリメ(5本/cm)	硬	乗岡近世2期後半か
560	Ⅱ区BSK09	肥前陶器・染付椀	不明	微	外面；灰色(10Y6/1) 内面；灰色(10Y6/1)	小片	染付	不明	－	
561	Ⅱ区BSK09下層	瓦質・浅鉢	不明	細；石英・長石小少	外面；オリーブ黒色(7.5Y3/1) 内面；にぶい黄橙色(10YR7/4)	小片	ミガキ→波文、施文	板ナデ	－	内側に舌状の突起あり
562	Ⅳ区BSD01.02.03	備前・すり鉢	口；29.6	細；石英・長石小少、黒色細粒小普	外面；にぶい赤褐色(2.5YR4/3) 内面；にぶい赤褐色(2.5YR4/3)	1/8存	体部；ヨコナデ	スリメ	硬	
563	Ⅳ区BSD01.02.03	堺産・すり鉢	口；27.6	細；石英・長石小少	外面；にぶい赤褐色(2.5YR4/4) 内面；にぶい赤褐色(2.5YR4/4)	2/8存	体部；ヘラケズリ	スリメ、ヨコナデ	硬	
564	Ⅳ区DSD01	堺産・すり鉢	口；32.1	中；石英・長石小多	外面；灰赤色(2.5YR4/2) 内面；灰赤色(2.5YR4/2)	口小片	体部；ヘラケズリ？	スリメ、ヨコナデ	硬	
565	Ⅳ区CSD01	土質・焙烙	不明	細；石英・長石ごく小ごく少	外面；灰色(5Y4/1) 内面；暗灰黄色(2.5Y5/2)	小片	ヨコナデ	ハケ目→ヨコナデ	良	内耳に穿孔
566	Ⅳ区CSD01	瓦質・焙烙	不明	細；石英・長石ごく小ごく少	外面；黒色(7.5Y2/1) 内面；オリーブ黒色(5Y3/1)	小片	ヨコナデ	ヨコナデ	良	端部および外面に煤付着
567	Ⅳ区DSD01	土質・焙烙	口；29.8	細；石英・長石中少、赤色粒中少	外面；灰黄色(2.5Y7/2) 内面；灰黄褐色(10YR5/2)	口1/8	指押さえ、ヨコナデ	指押さえ、ヨコナデ内耳の穿孔は貫通しない	良	
568	Ⅳ区BSD01.02.03	土質・焙烙	口；32.0	細；石英・長石小少	外面；灰白色(2.5Y8/2) 内面；灰黄色(2.5Y7/2)	小片	指押さえ、ヨコナデ	ヨコナデ	良	内耳の穿孔は貫通しない
569	Ⅳ区CSD01	瓦質・羽釜	鍔；28.4	細；石英・長石中ごく少	外面；灰色(5Y4/1) 内面；灰色(5Y4/1)	鍔部2/8存	口縁部；ヨコナデ、2条の沈線	板ナデ	硬	鍔下面～体部に煤付着
570	Ⅳ区ASD01	瓦質・羽釜	不明	細；石英・長石小少	外面；灰色(N4/0) 内面；灰白色(5Y7/1)	1/8	体部；指押さえ	指押さえ、板ナデ→ナデ	良	
571	Ⅳ区CSD01	陶器・壺ないし鉢	底；13.8	中；石英・長石中普	外面；暗赤灰色(7.5R4/1) 内面；暗オリーブ色(5Y4/4)	底1/8	ヨコナデ	ヨコナデ	硬	
572	Ⅳ区DSD01	不明陶器	不明	中；石英・長石中普	外面；灰オリーブ色(5Y5/2) 内面；灰黄褐色(10YR5/2)	底3/8	回転ヘラケズリ	回転ナデ→施釉	硬	
573	Ⅴ区壁切り中SD01相当部分	銅銭（寛永通宝）	不明	不明	外面；灰色(7.5Y4/1) 内面；オリーブ黒色(7.5Y3/1)	完存	不明	不明		

松並・中所遺跡石器観察表

報文番号	器種名	遺構名	層位	重量(g)	材質	備考
23	石鏃	Ⅳ区ＤＳＨ01Ｄ	上層	2.48	サヌカイト	凸基式
24	石鏃・未製品	Ⅳ区ＤＳＨ01Ｃ	中層	4.06	サヌカイト	凸基式？
25	石鏃・未製品	Ⅳ区ＤＳＨ01Ｃ	上層	3.44	サヌカイト	
26	石錐	Ⅳ区ＤＳＨ01ベルト①		1.56	サヌカイト	
27	石鏃	Ⅳ区ＤＳＨ01遺物11		3.29	サヌカイト	
28	石鏃	Ⅳ区ＤＳＨ01遺物22		2.92	サヌカイト	凸基式
29	石鏃	Ⅳ区ＤＳＨ01遺物21		1.9	サヌカイト	凸基式
30	石鏃	Ⅳ区ＤＳＨ01Ｃ	床面直上	0.77	サヌカイト	基部欠損
31	石鏃	Ⅳ区ＤＳＨ01Ｃ	床直上	0.65	サヌカイト	基部欠損
32	スクレイパー	Ⅳ区ＤＳＨ01Ａ区	床直上	17.48	サヌカイト	
33	石錐・先端部	Ⅳ区ＤＳＨ01トレンチ④	下層	0.33	サヌカイト	
34	石鏃	Ⅳ区ＤＳＨ01ＳＰ５		4.1	サヌカイト	凸基式
35	石鏃	Ⅳ区ＤＳＨ01ＳＰ04		0.71	サヌカイト	基部を欠く
36	石匙？	Ⅳ区ＤＳＨ01Ａ区	貼床中	11.32	サヌカイト	
40	叩き石	Ⅳ区ＤＳＸ01遺物７		306.05	砂岩	
45	石鏃	Ⅳ区ＤＳＸ03Ａ区	床直取り上げ№１	2.32	サヌカイト	凸基式
46	楔形石器	Ⅳ区ＤＳＸ03，ＳＫ01	直上Ｂ区取り上げ№２	20.82	サヌカイト	
58	台石	Ⅳ区ＤＳＰ50			砂岩	
59	叩き石	Ⅳ区ＤＳＰ49		343.36	砂岩	
86	石鏃	Ⅳ区ＤＳＤ02Ｃ区		0.88	サヌカイト	平基式
99	楔形石器・未製品	Ⅳ区ＣＳＲ01	上層	10.17	サヌカイト	
114	石鏃	Ⅳ区ＣＳＲ01	中層	4.18	サヌカイト	有基式と凸基式の中間形態
115	楔形石器	Ⅳ区ＣＳＲ01	中層	15.87	サヌカイト	
124	石錐	Ⅳ区ＣＳＲ01	下層	9.01	サヌカイト	
125	スクレイパー	Ⅳ区ＣＳＲ01	下層	41.78	サヌカイト	
126	楔形石器	Ⅳ区ＣＳＲ01	下層	12.45	サヌカイト	
127	素材剥片	Ⅳ区ＣＳＲ01	下層	114.13	サヌカイト	
135	磨製石斧（剥離）	Ⅳ区ＢＳＲ01	側溝中	49.62	結晶片岩	
144	楔形石器	Ⅳ区ＣＳＲ01	西断面	17.02	サヌカイト	
145	打製石包丁	Ⅶ区ＡＳＲ01	上部	13.97	サヌカイト	
146	スクレイパー	Ⅶ区ＡＳＲ01	上部	108.82	サヌカイト	
153	楔形石器	Ⅳ区Ｄ	包含層	10.62	サヌカイト	
154	大形蛤刃石斧	Ⅴ区	上面精査中	573.12	結晶片岩	
155	石鏃	Ⅲ区Ｃ	遺構面精査中	2.01	サヌカイト	平基式
302	火打ち石	Ⅲ区ＣＳＤ01Ｃ第１遺構面		1.82	チャート	
541	勾玉	Ⅲ区Ｃ	遺構面精査中	3.05	瑪瑙	
559	砥石	Ⅱ区ＢＳＫ02		58.47	流紋岩	

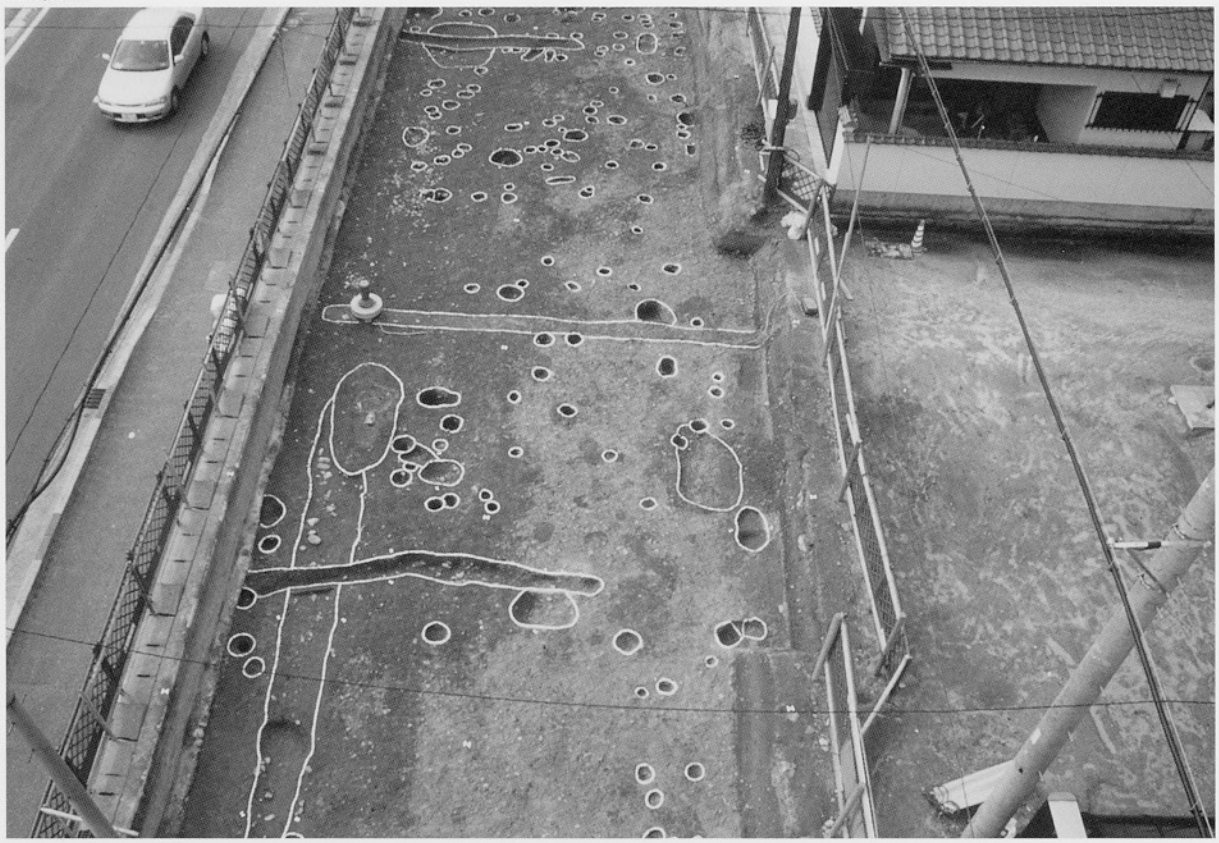
図　　版



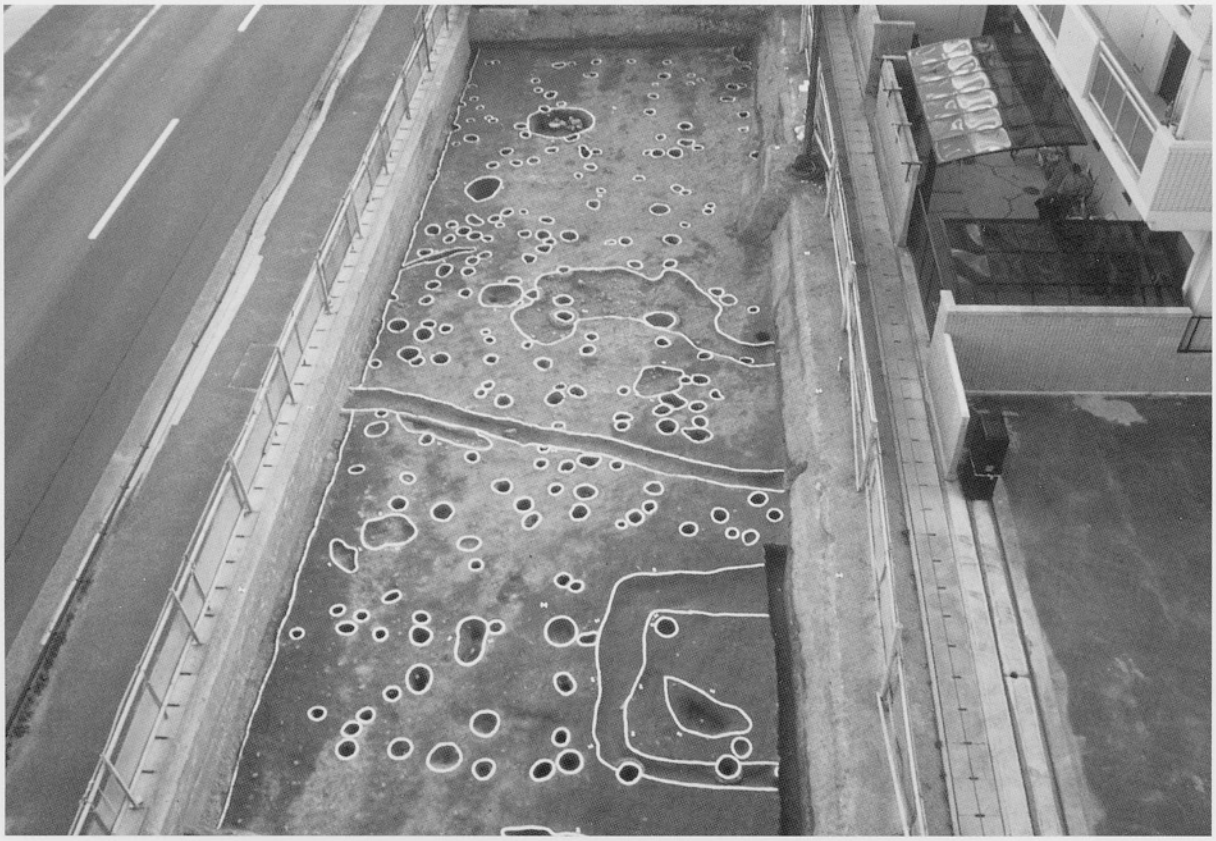
松並・中所遺跡遠景（南より、背後に石清尾山山塊を望む）

松並・中所遺跡遠景（東より）

図版２



Ⅱ区Ａ全景（北より）



Ⅱ区Ｂ全景（北より）

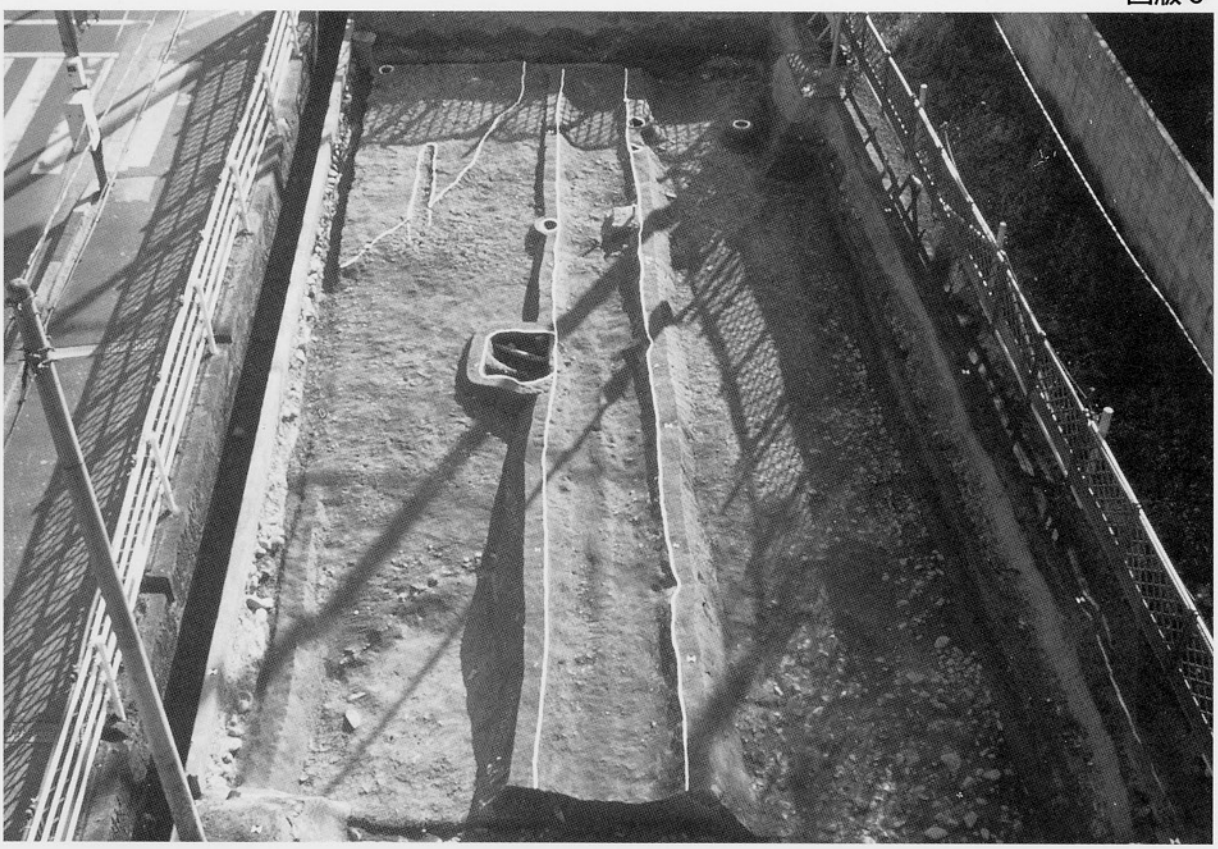
Ⅲ区Ｂ全景（北より、ＳＤ01屈曲部分）

Ⅲ区Ｃ第１面全景（南より）

図版４

Ⅲ区Ｃ第１面全景（西より）

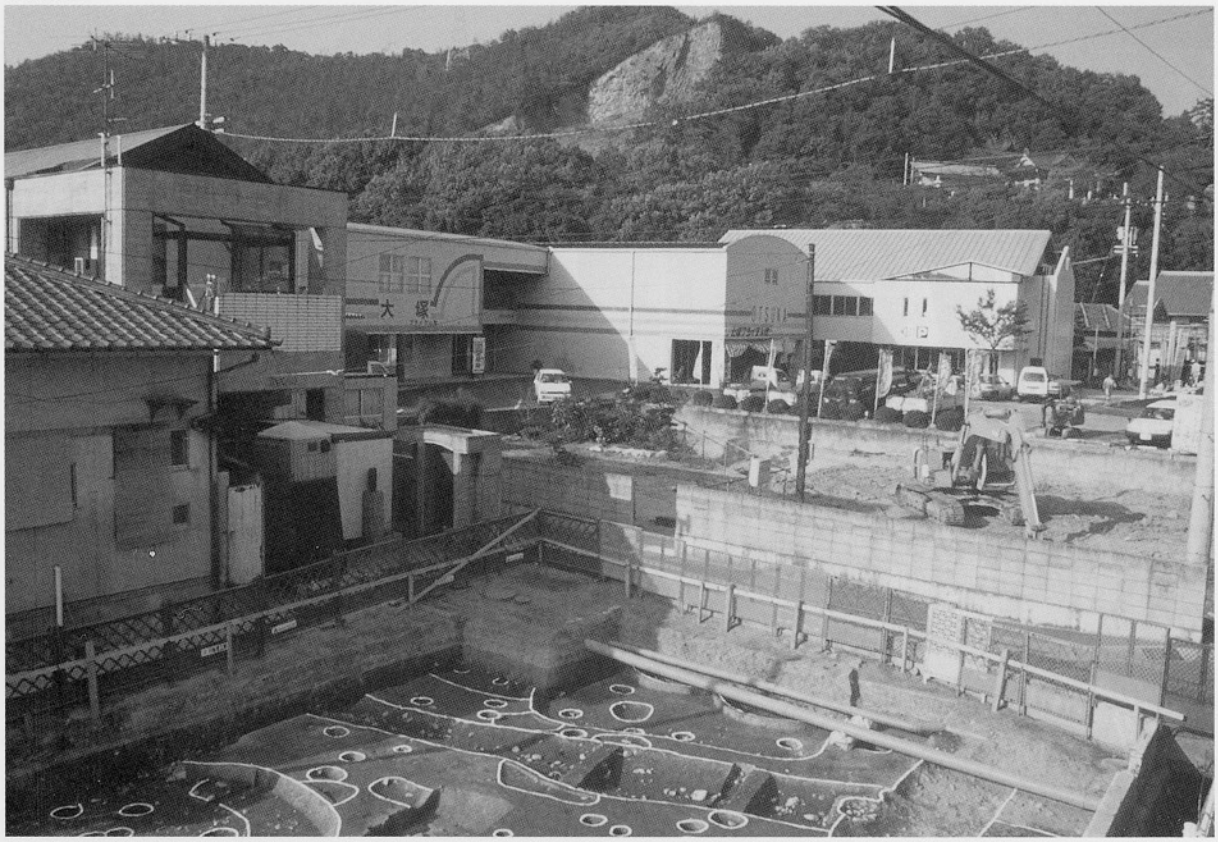
Ⅲ区Ｃ全景（南より、ＳＺ01の北遺構面）



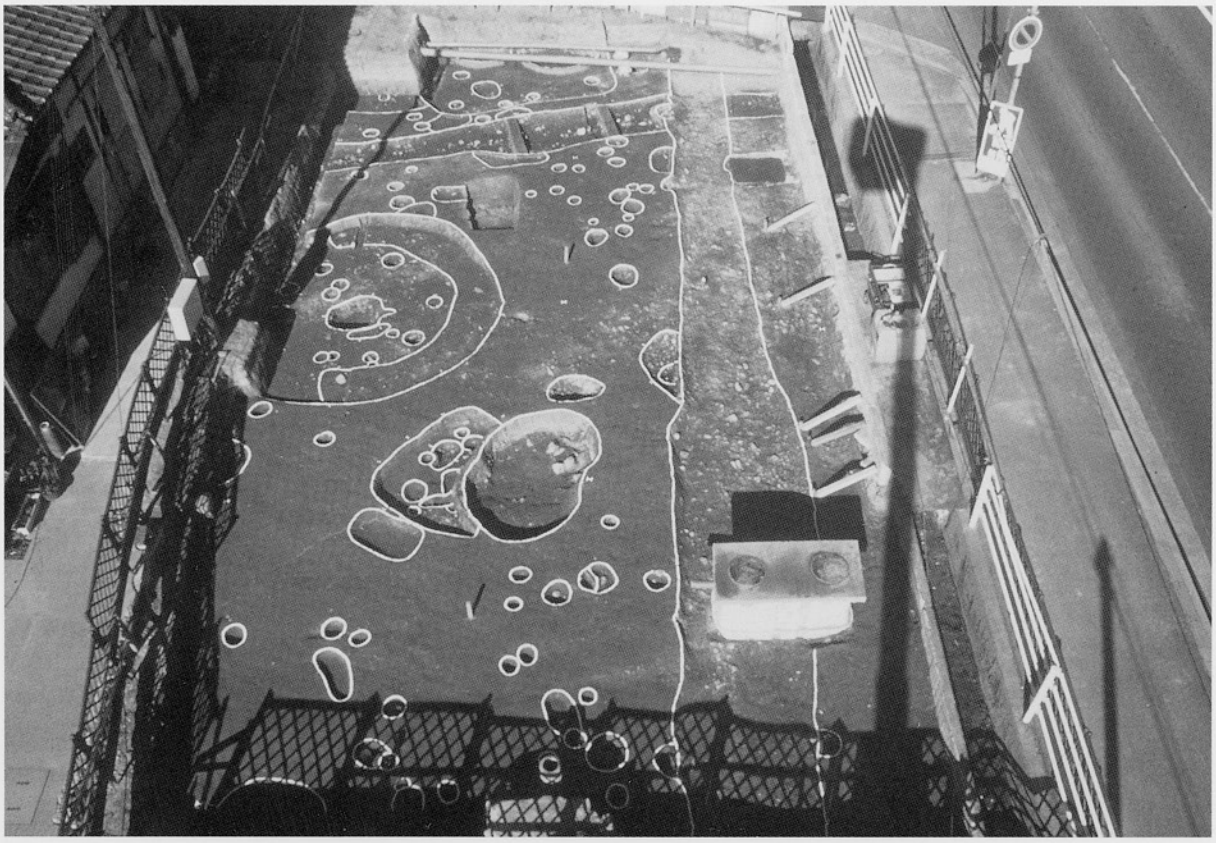
Ⅳ区Ａ全景（北より）

Ⅳ区Ｃ・Ｄ全景（南より、手前ＳＲ01）

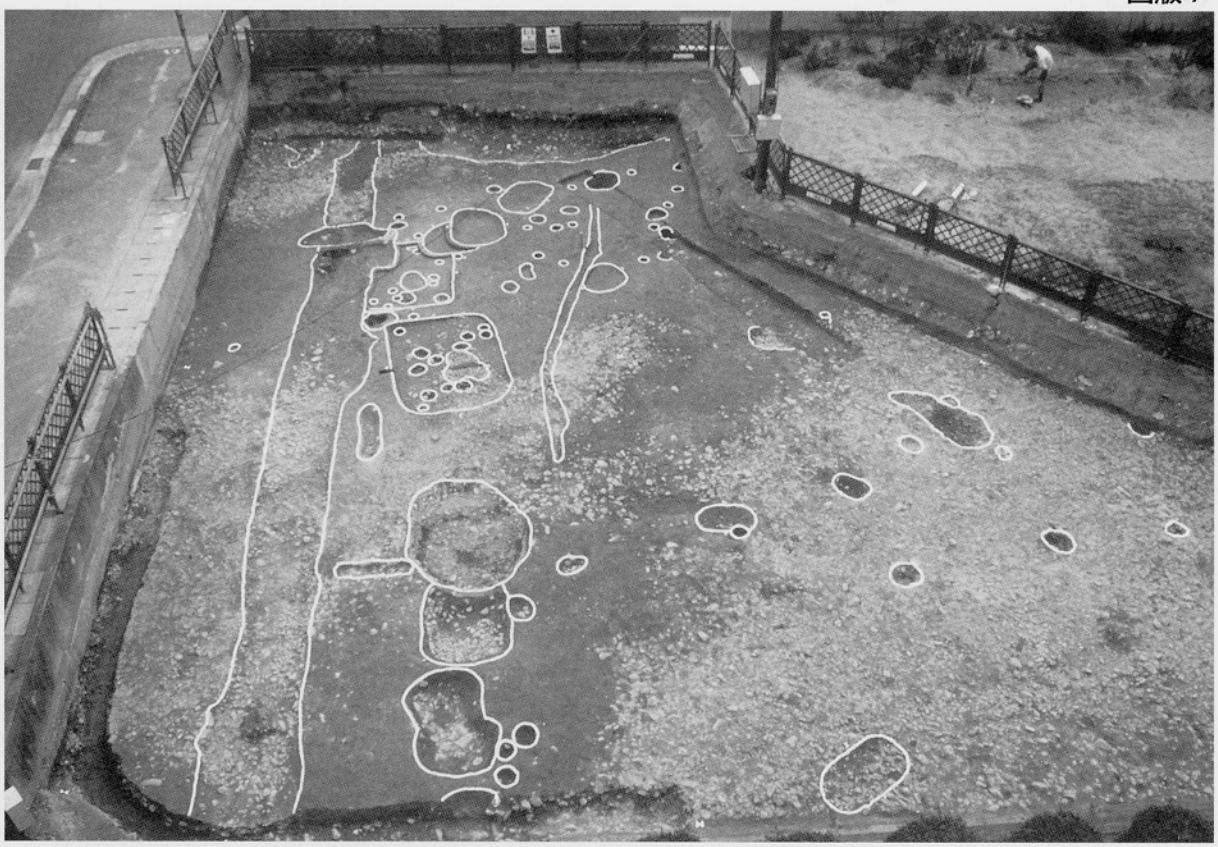
図版 6



Ⅳ区Ｄと鶴尾神社４号墳（南東より）



Ⅳ区Ｄ全景（南より）

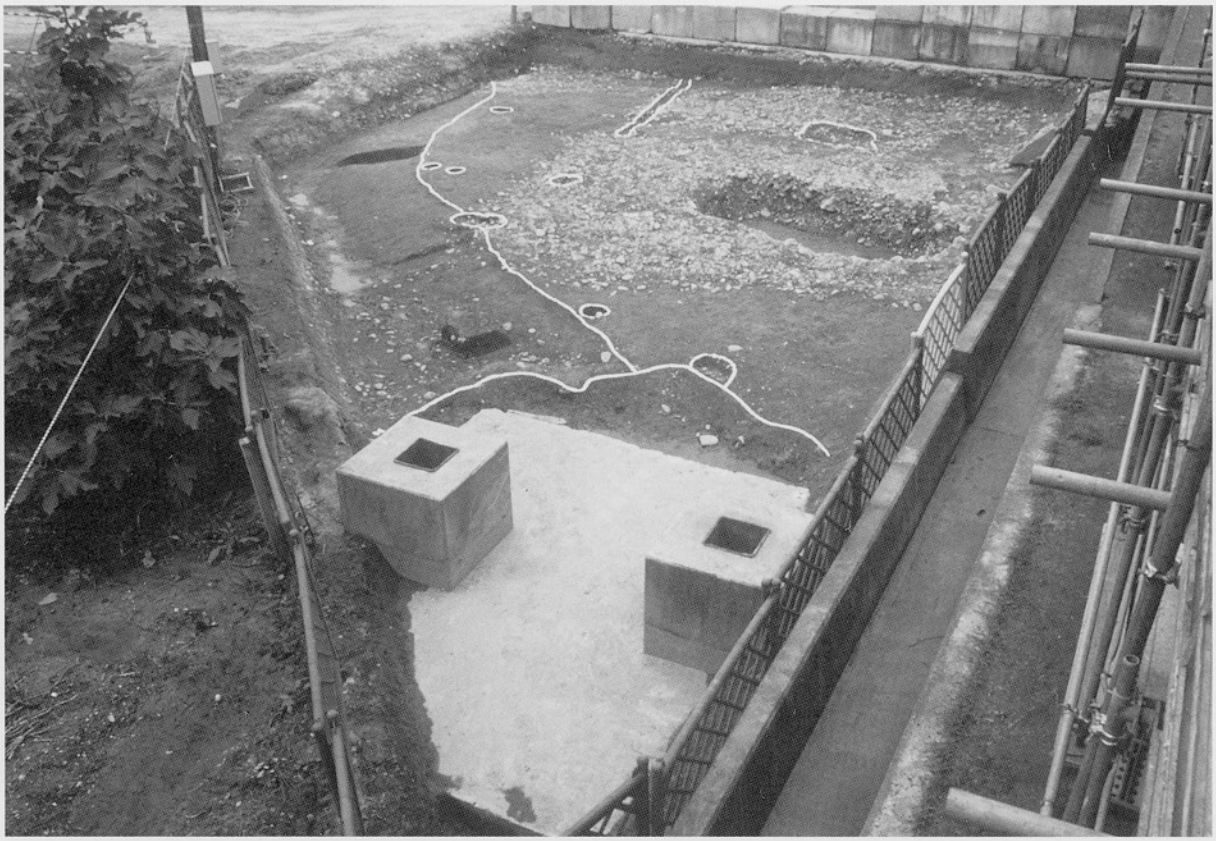


Ⅴ区全景（北より）

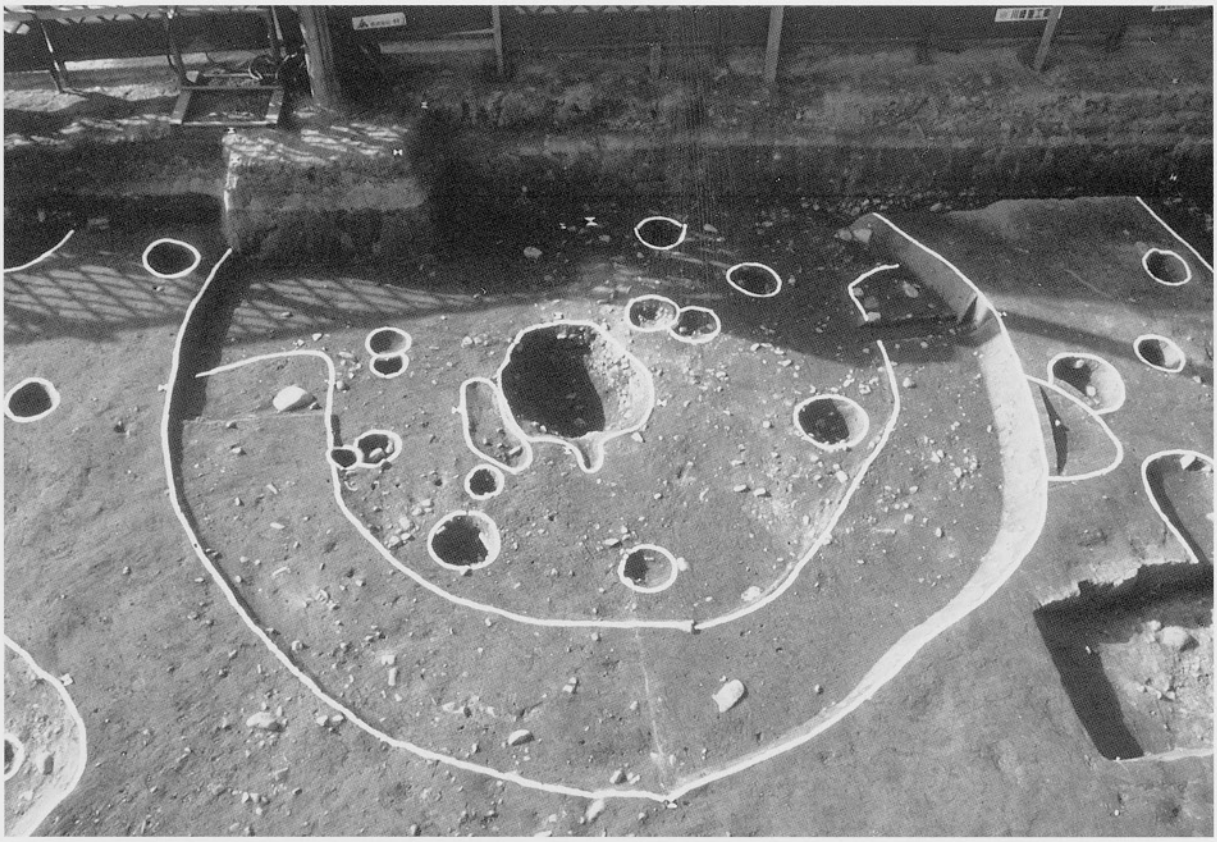
Ⅵ区Ａ全景（北西より）

図版８

Ⅶ区Ａ・ＳＲ01全景（北東より）



Ⅶ区Ｂ・ＳＲ03全景（北西より）

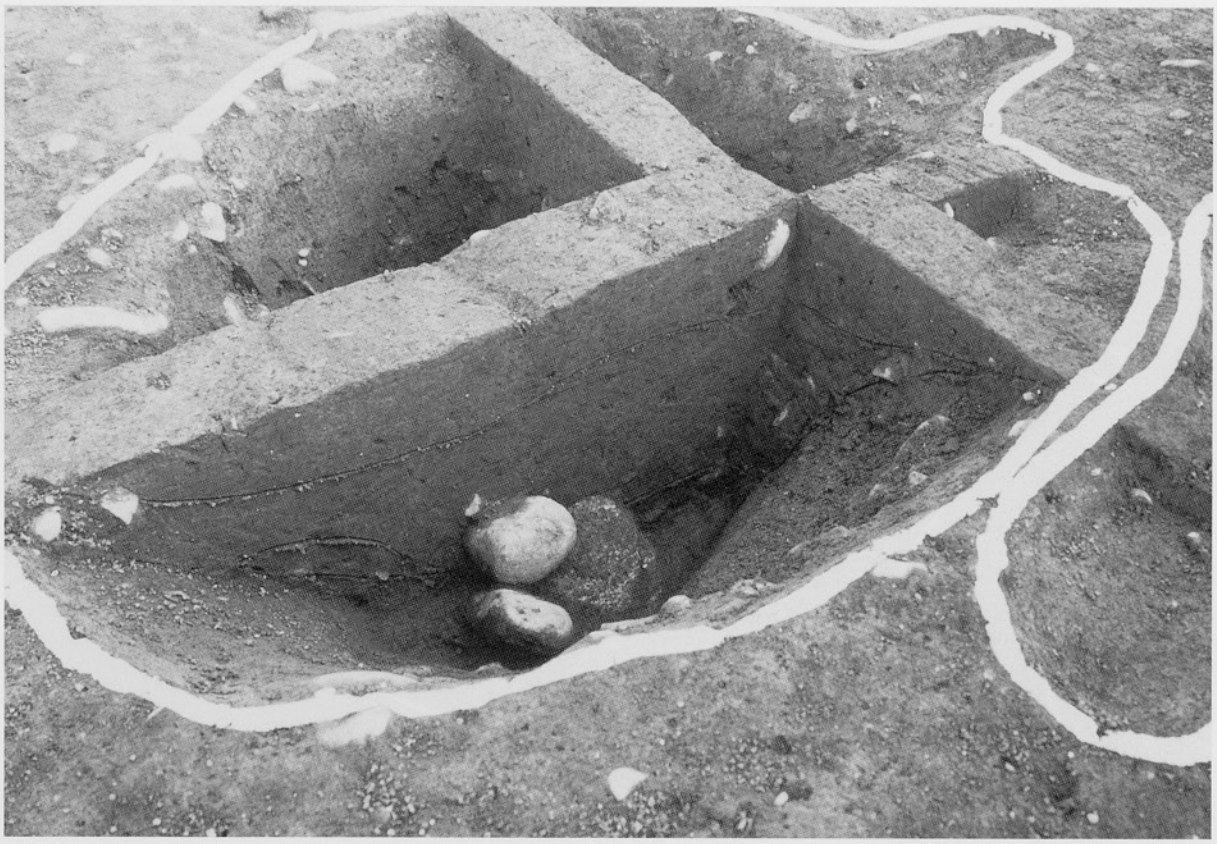


Ⅳ区ＤＳＨ01完掘全景（東より）

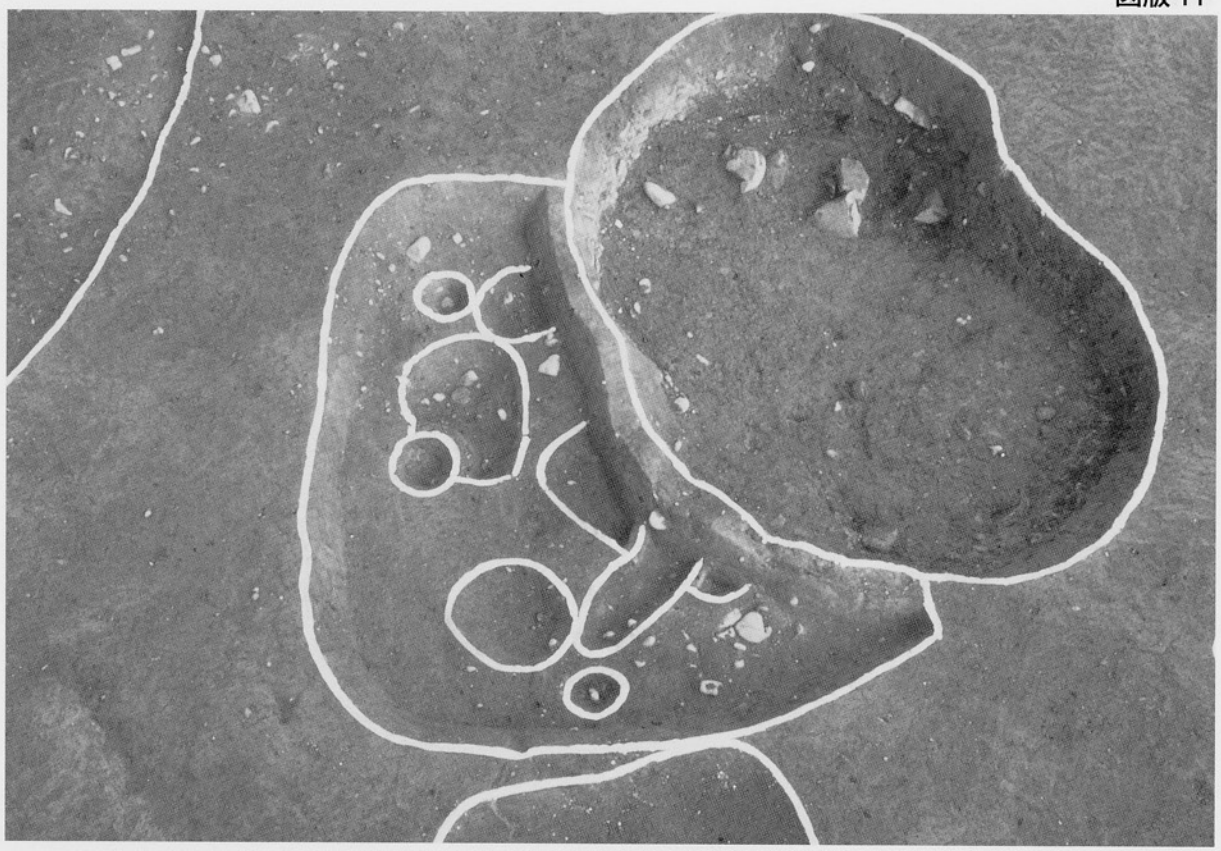
Ⅳ区ＤＳＨ01貼床除去後（東より）

図版 10

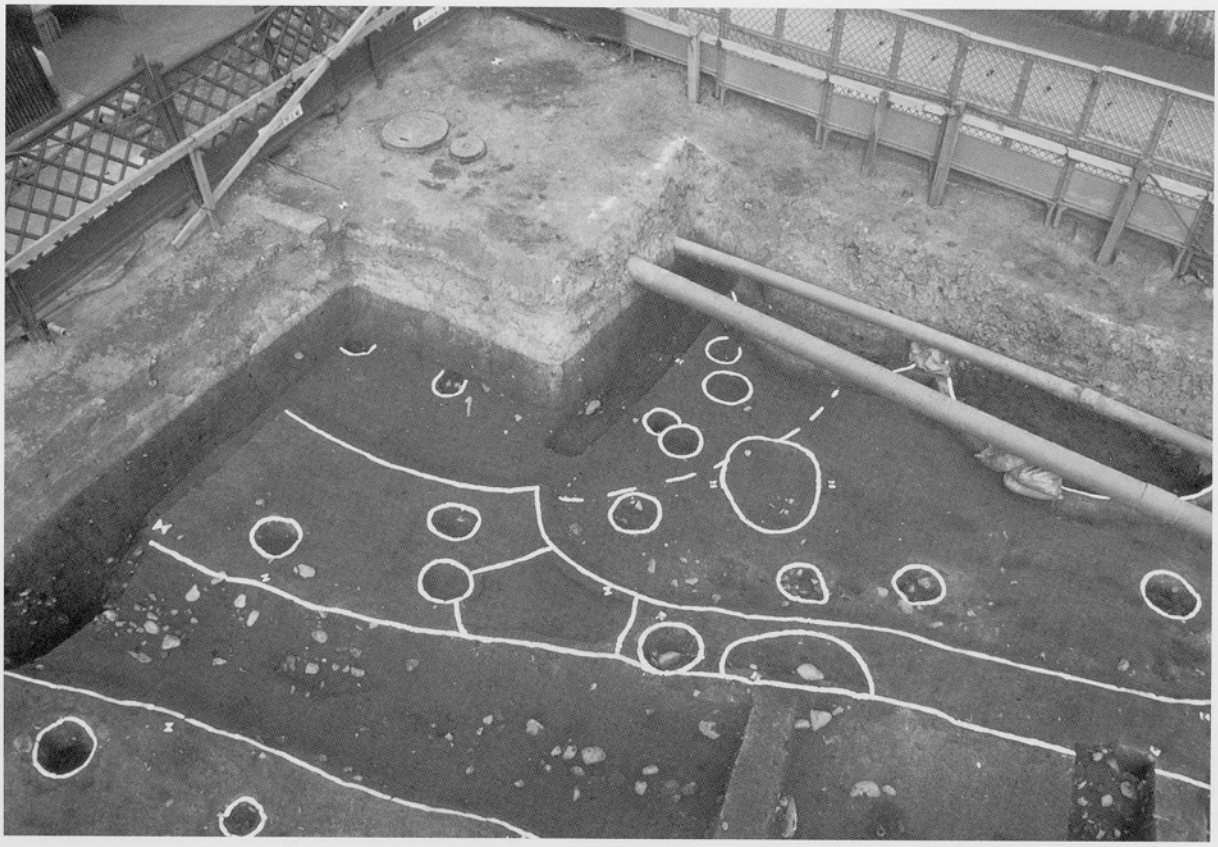
Ⅳ区ＤＳＨ01遺物出土状況（北東より、報文番号15）



Ⅳ区ＤＳＨ01－ＳＫ01断面（南西より）

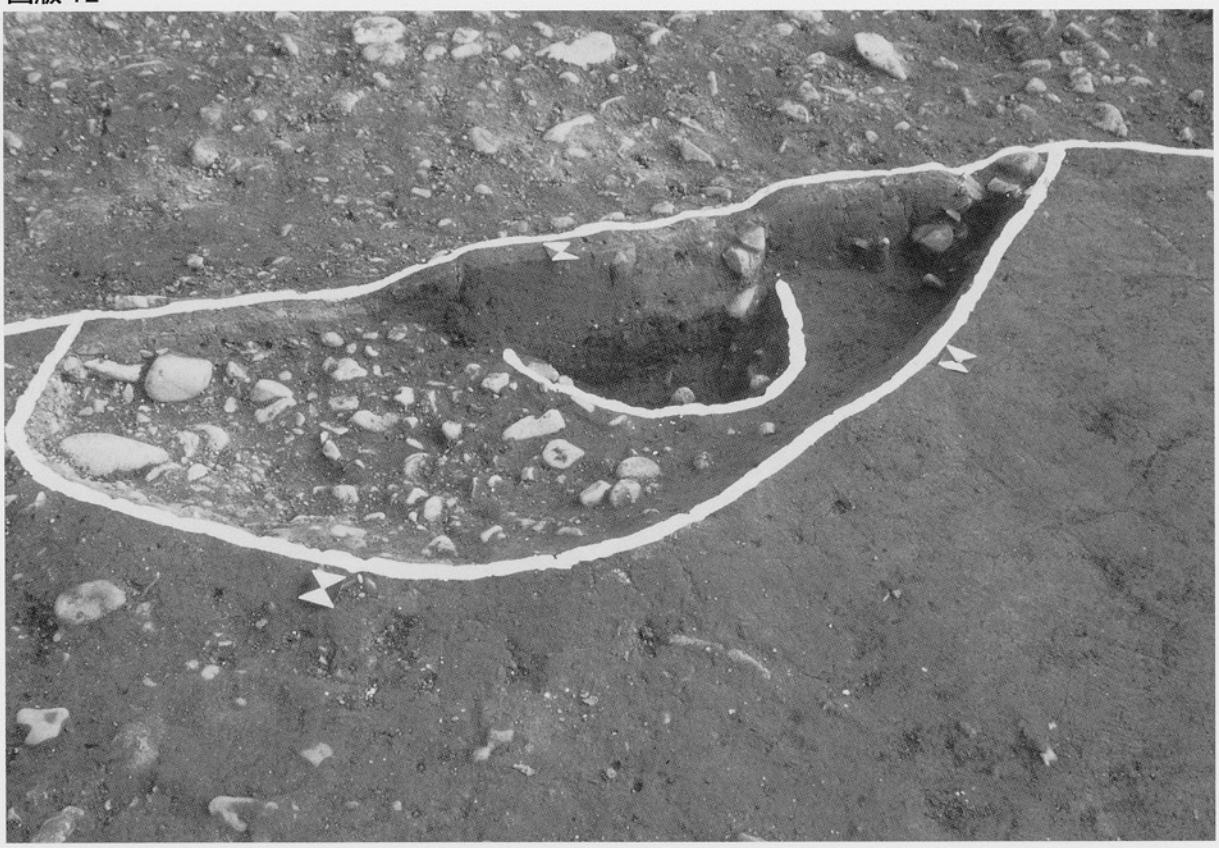


Ⅳ区ＤＳＸ01完掘全景（南西より）

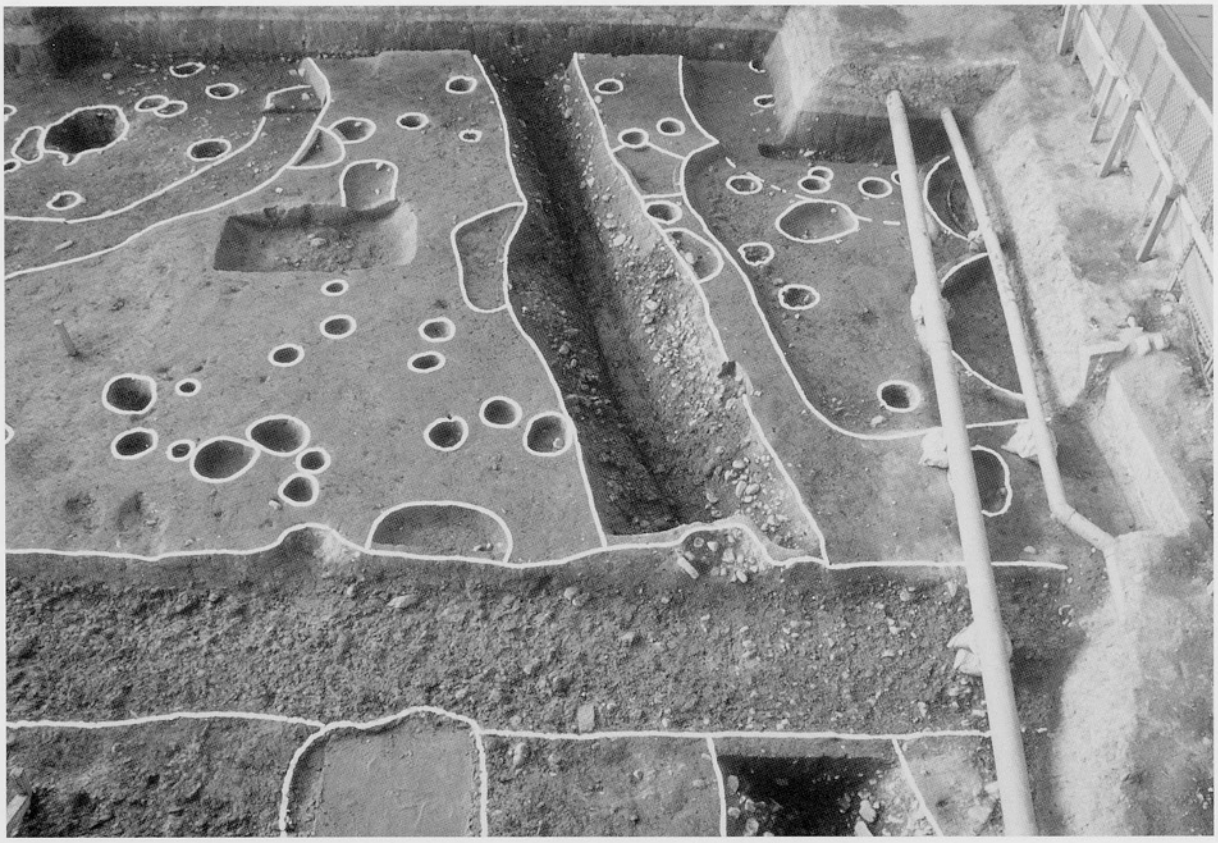


Ⅳ区ＤＳＸ02・03完掘全景（南より）

図版 12



Ⅳ区ＤＳＸ05完掘全景（西より）

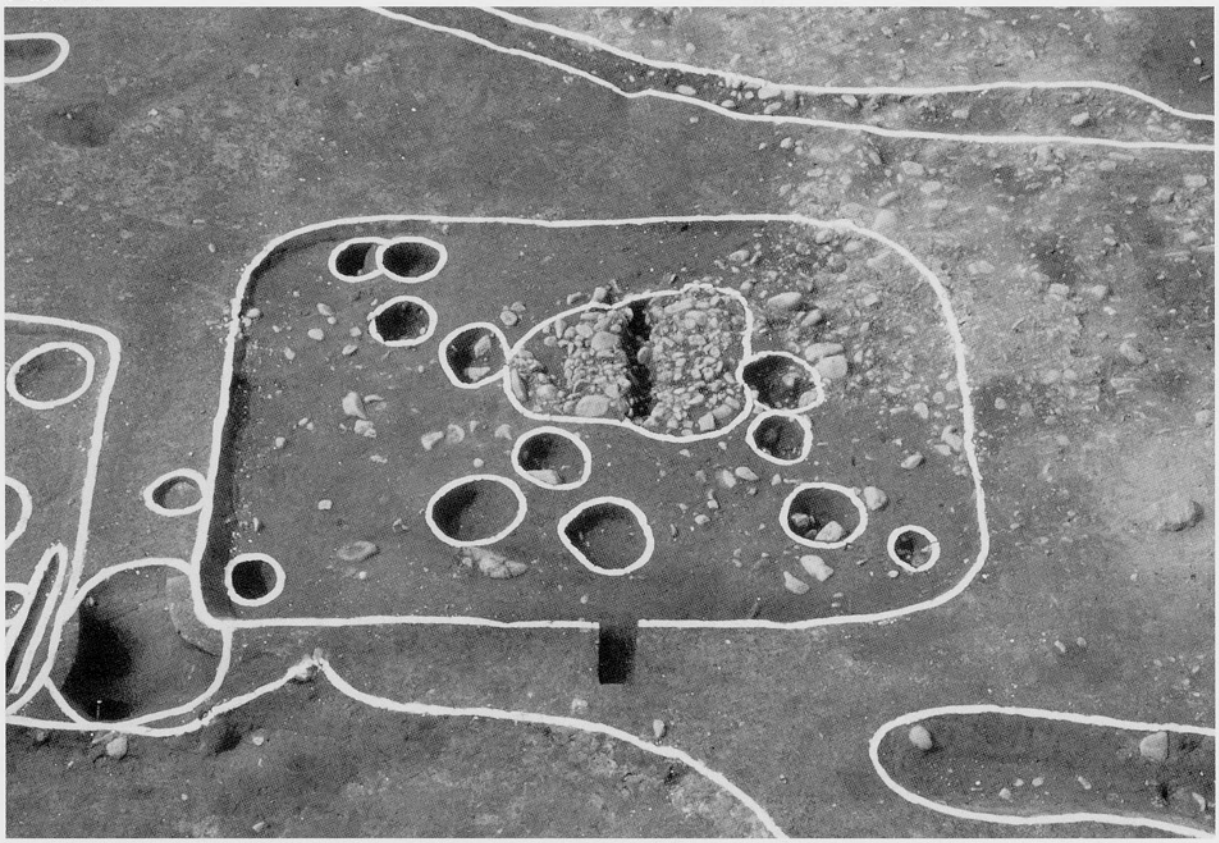


Ⅳ区ＤＳＤ02完掘全景（東より）

Ⅳ区ＤＳＤ02上層遺物出土状況（西より）

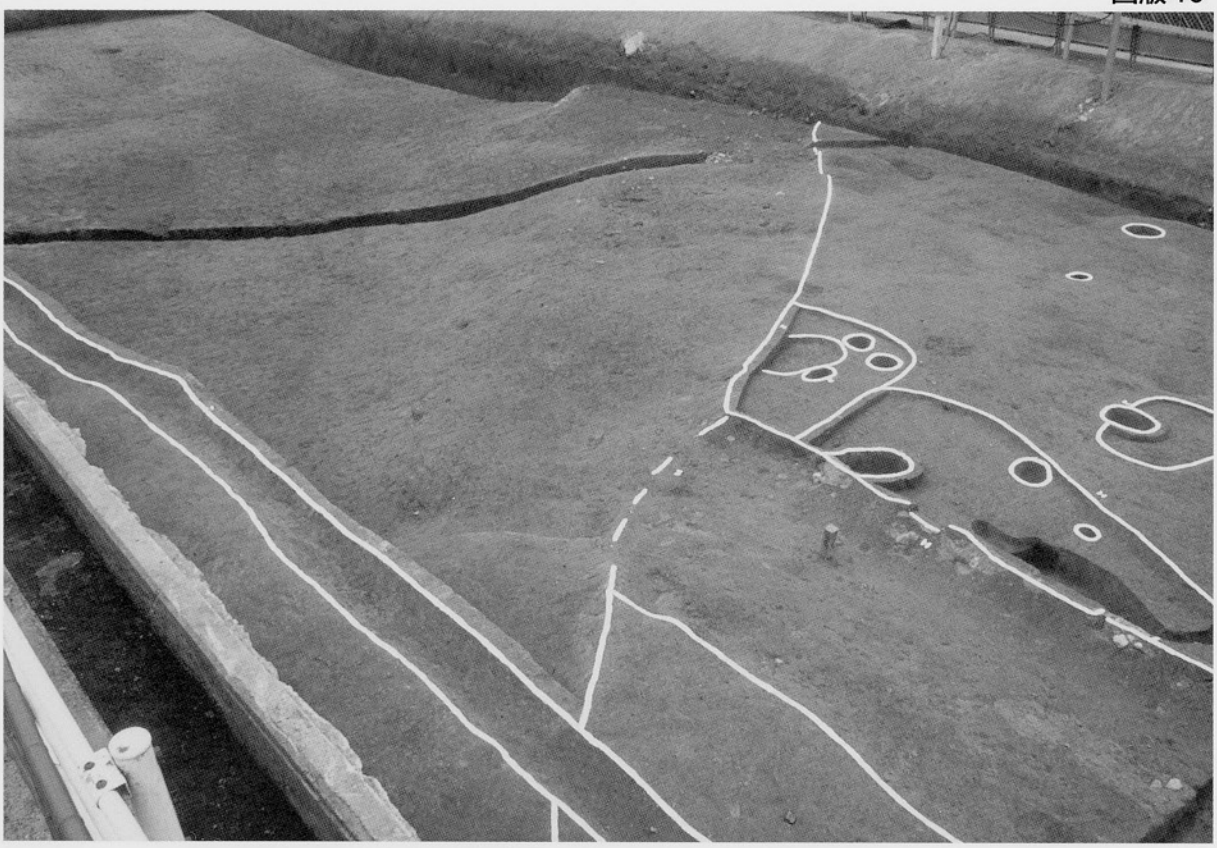
Ⅳ区ＤＳＤ02Ｂ－Ｂ’断面（西より）

図版 14



V区ＳＸ01完掘全景（東より）

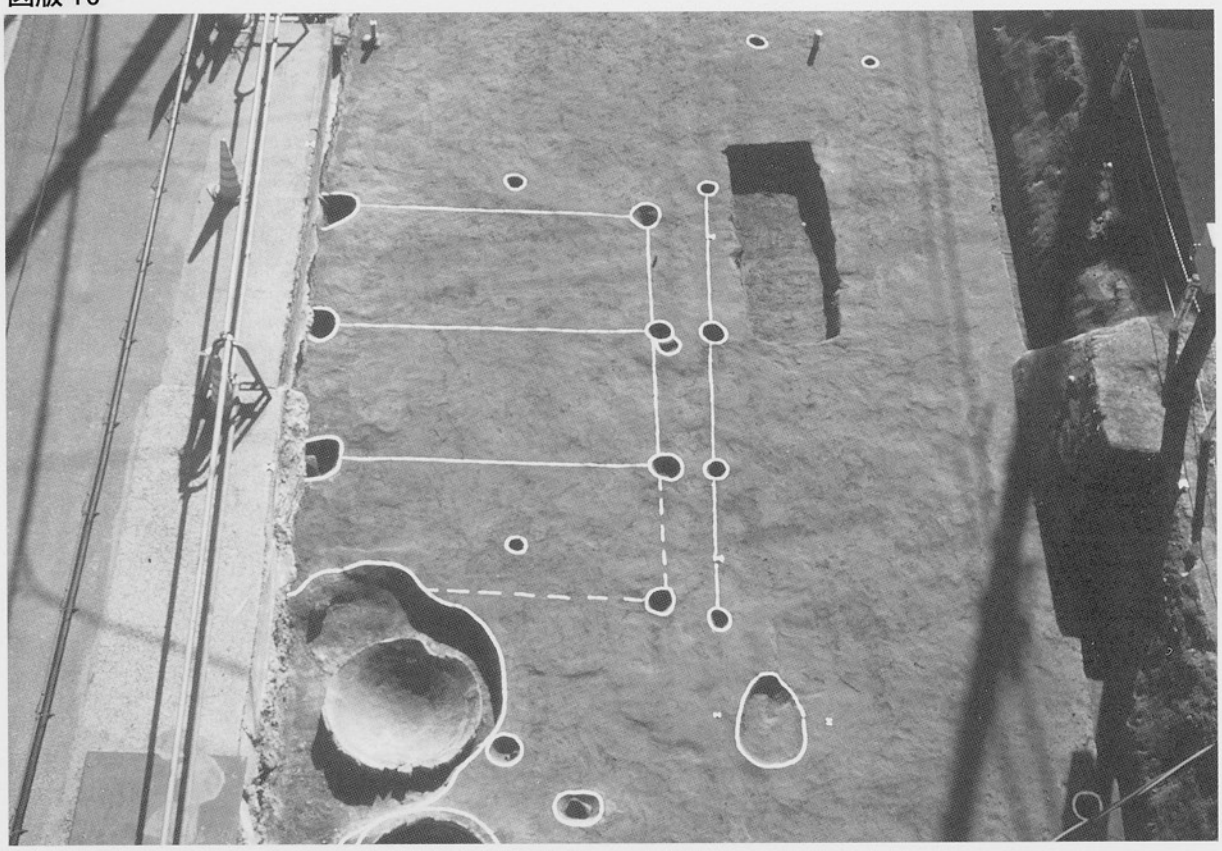
Ⅶ区ＳＲ01完掘全景（北東より）



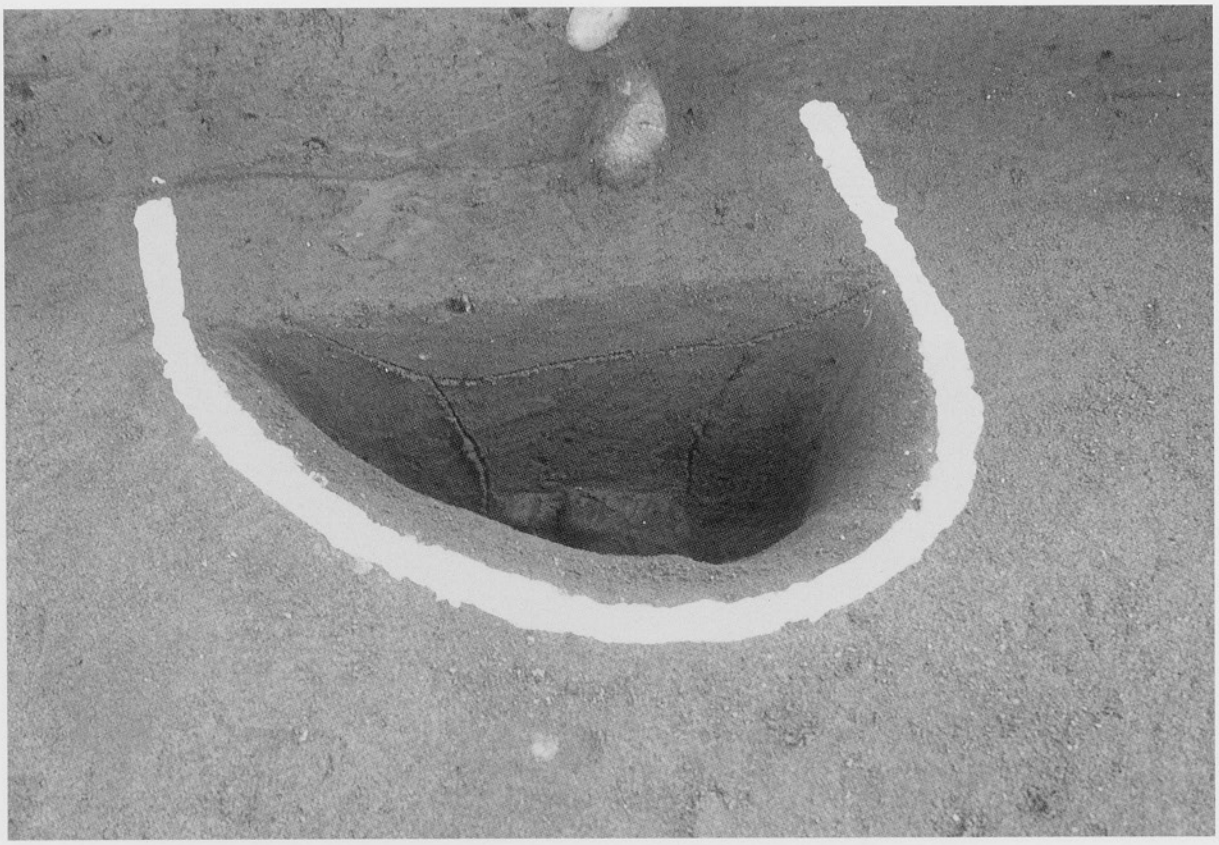
Ⅳ区ＣＳＲ01完掘全景（東より、手前Ⅳ区ＣＳＸ05・06）

Ⅳ区ＣＳＲ01断面（南より）

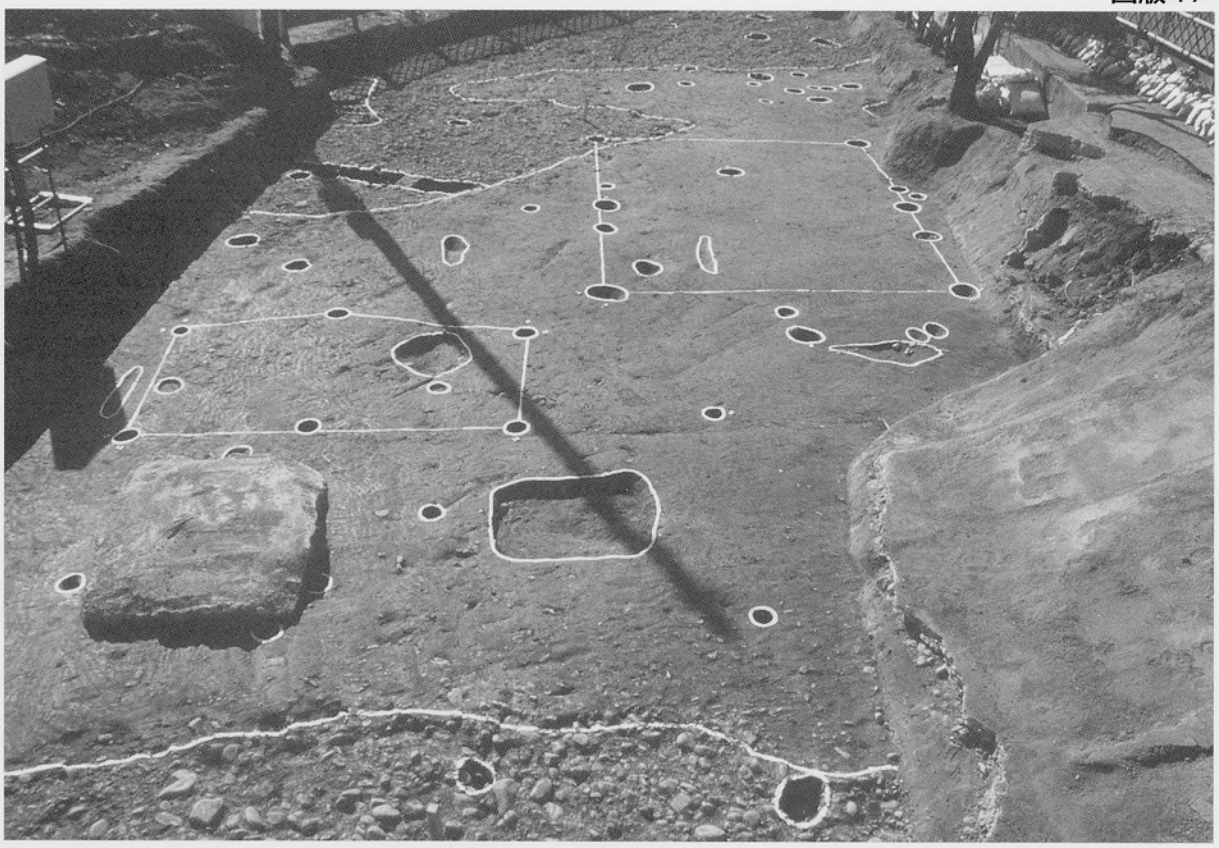
図版 16



Ⅲ区ＡＳＢ01全景（北より）



Ⅲ区ＡＳＢ01－ＳＰ15断面（西より）

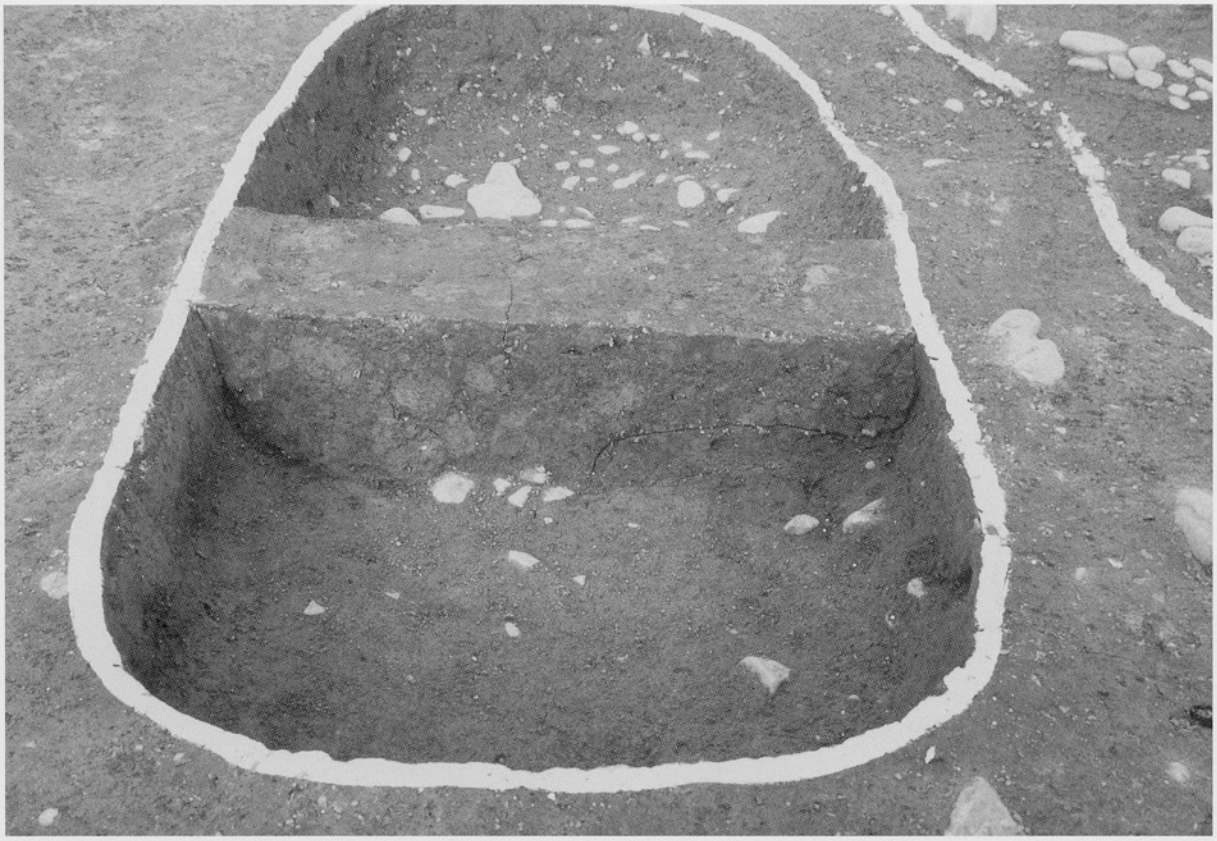


Ⅶ区ＡＳＢ01・02完掘全景（北より）

Ⅶ区ＡＳＢ01－ＳＰ26遺物出土状況（北東より）

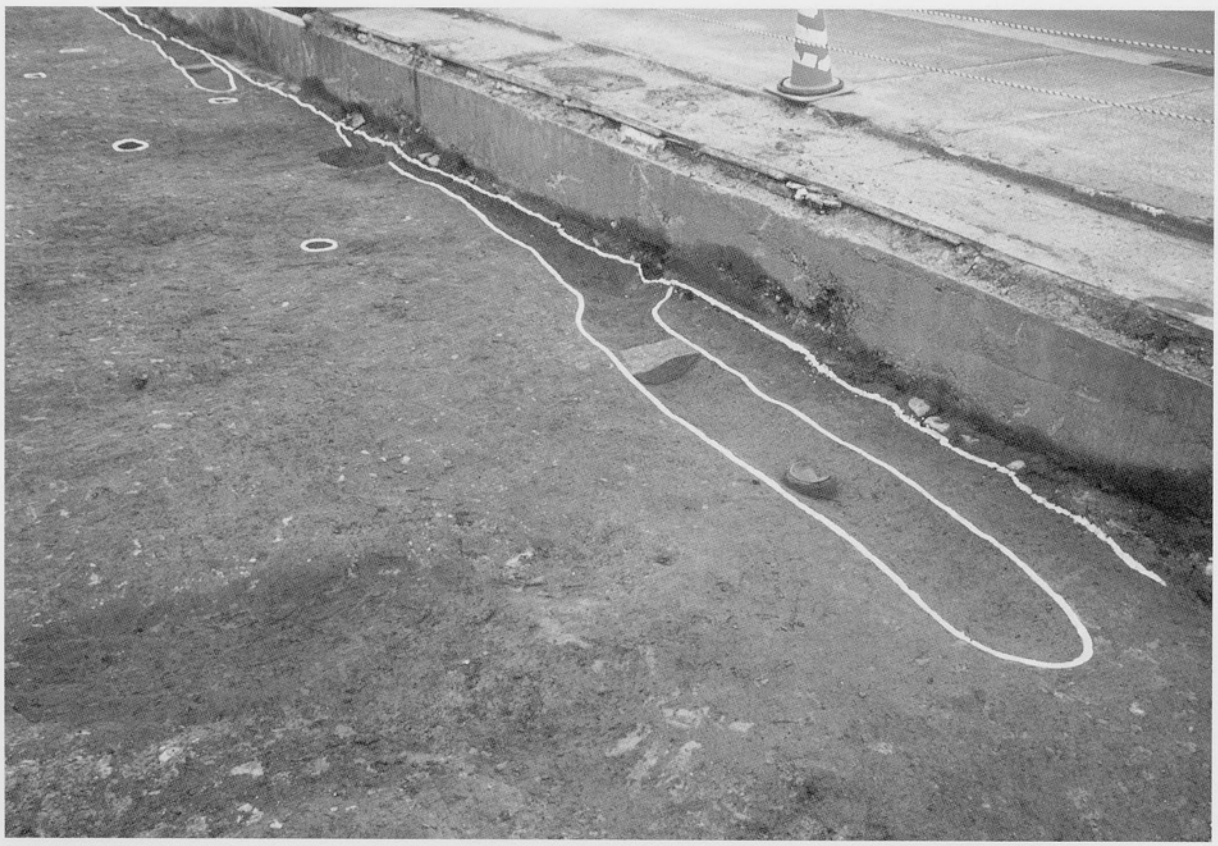
図版18

Ⅱ区ＢＳＫ01断面（東より）



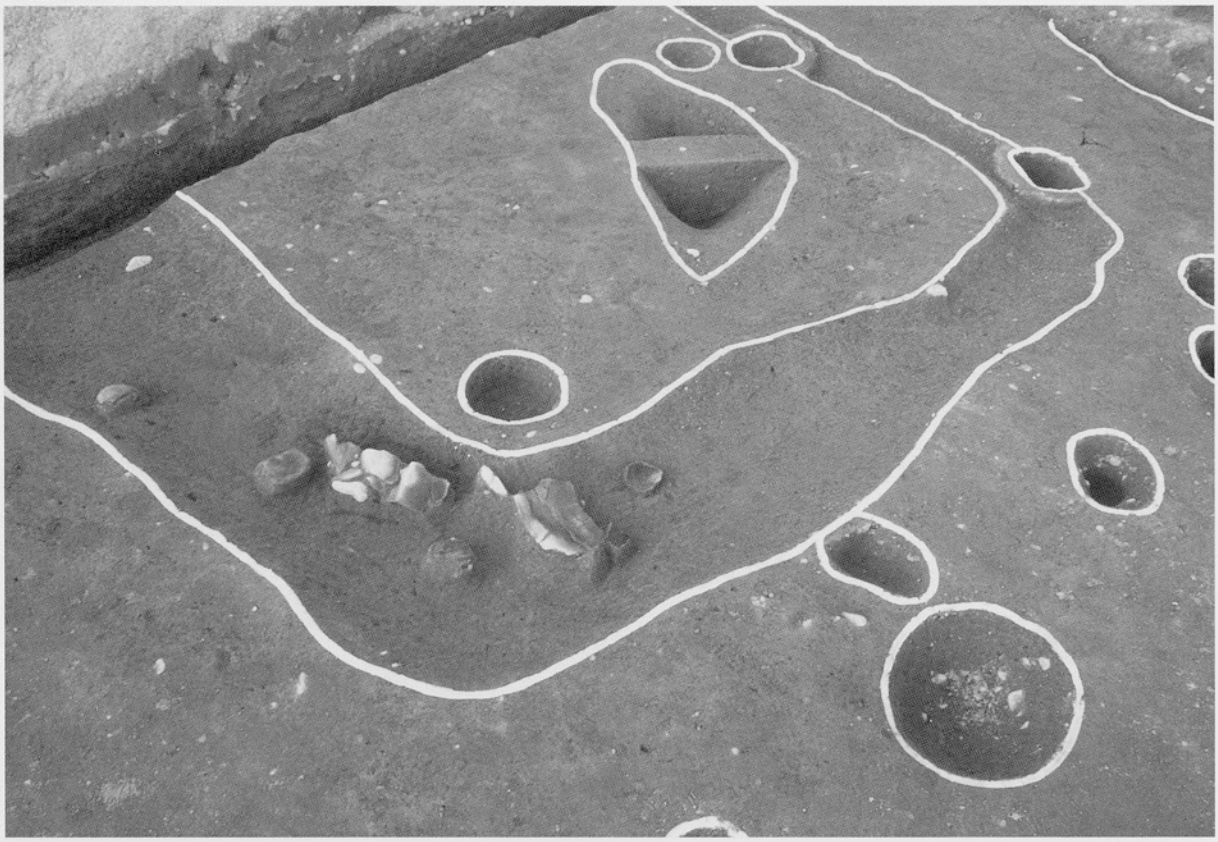
Ⅲ区Ｃ第１面ＳＫ08断面（東より）

Ⅲ区ＢＳＤ01Ａ－Ａ’断面（東より）

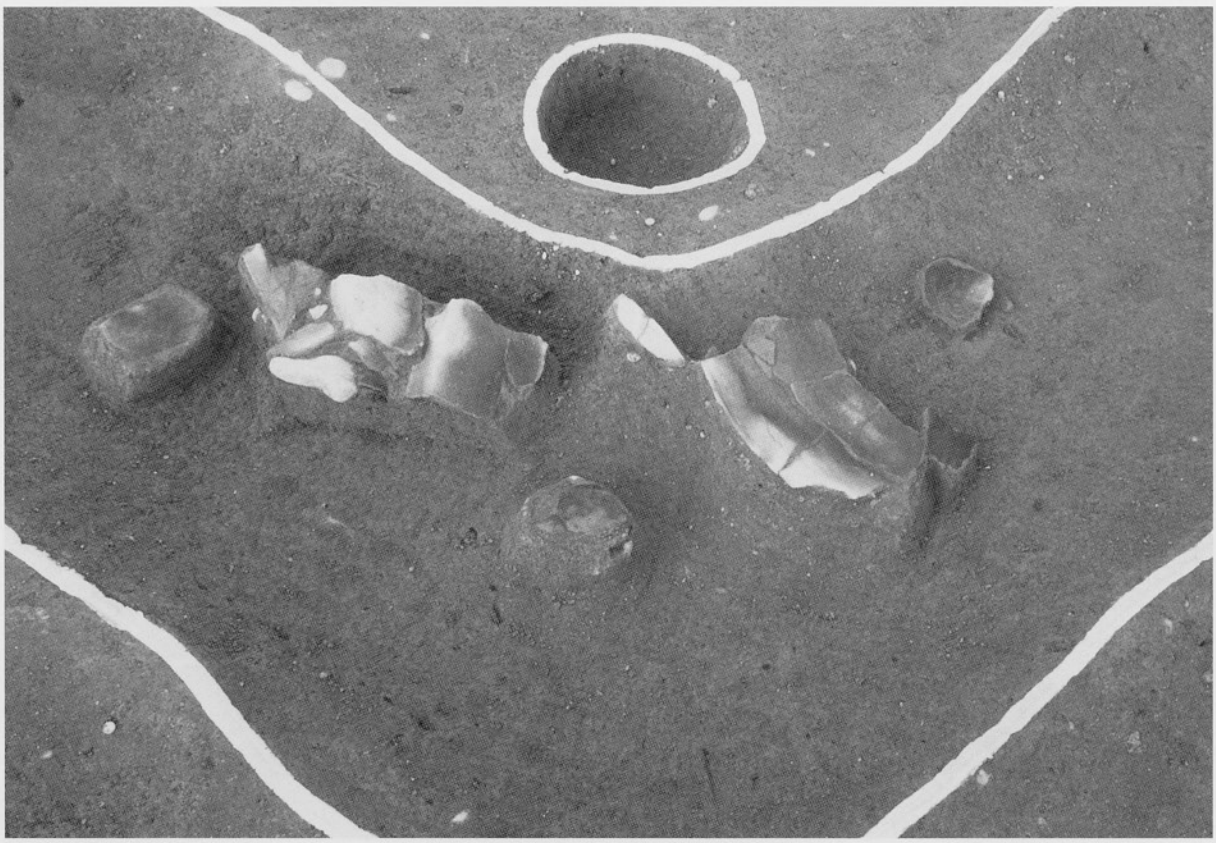


Ⅳ区ＢＳＤ05全景（南西より）

図版 20



Ⅱ区ＢＳＸ04全景（南東より）

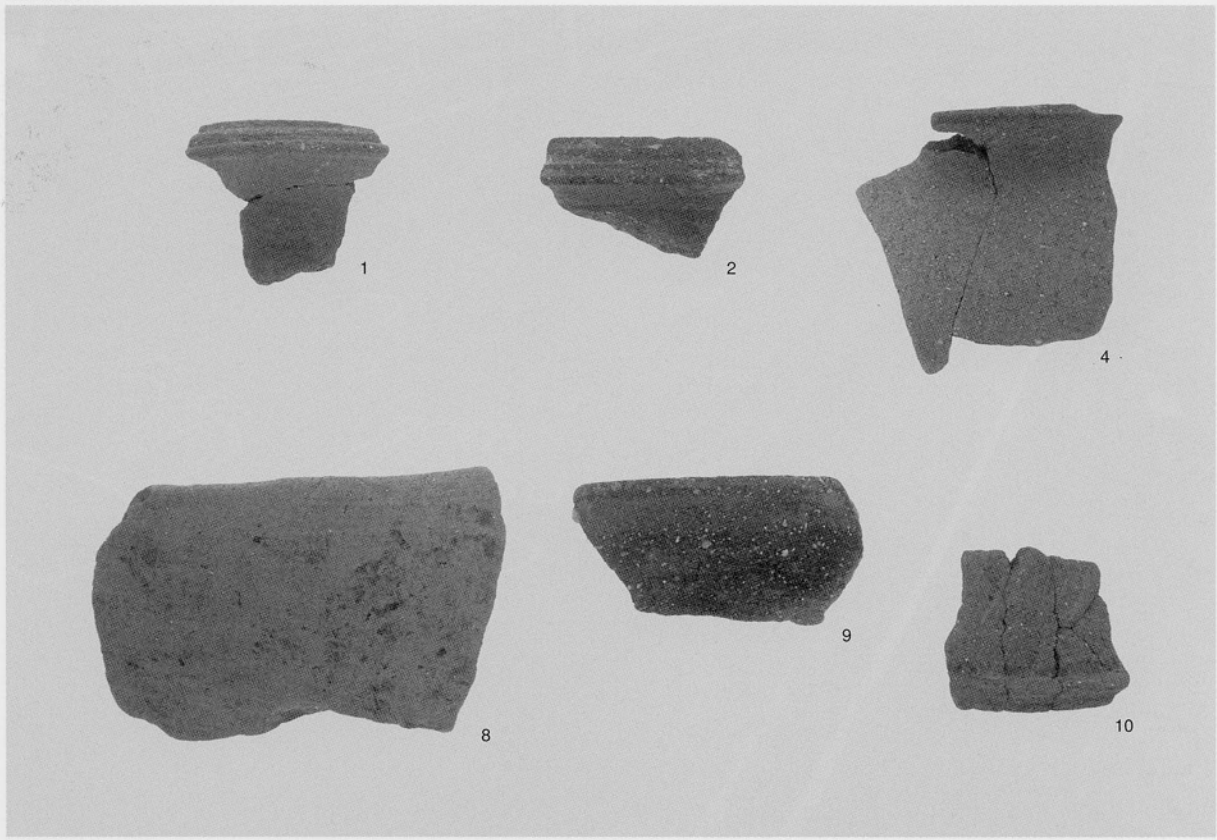


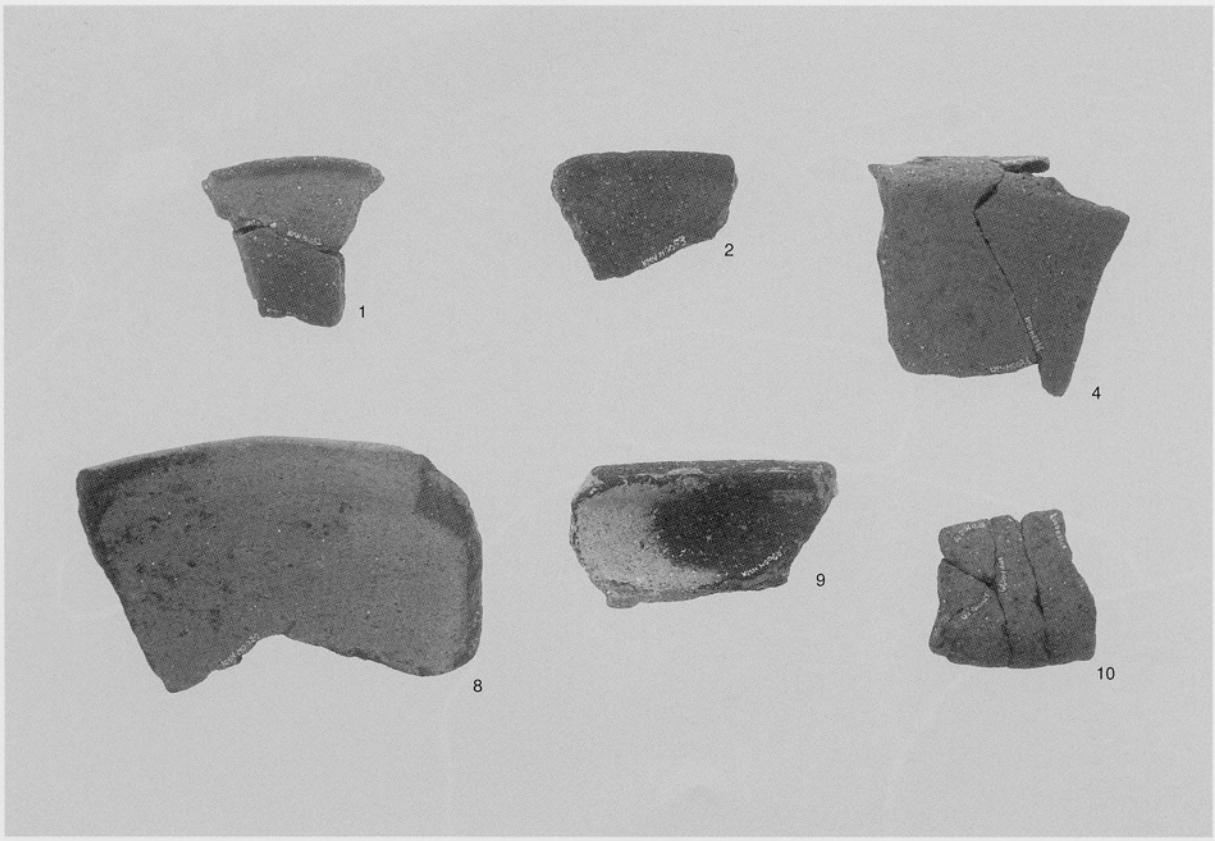
Ⅱ区ＢＳＸ04遺物出土状況（南東より）

Ⅲ区ＣＳＺ01全景（南西より）

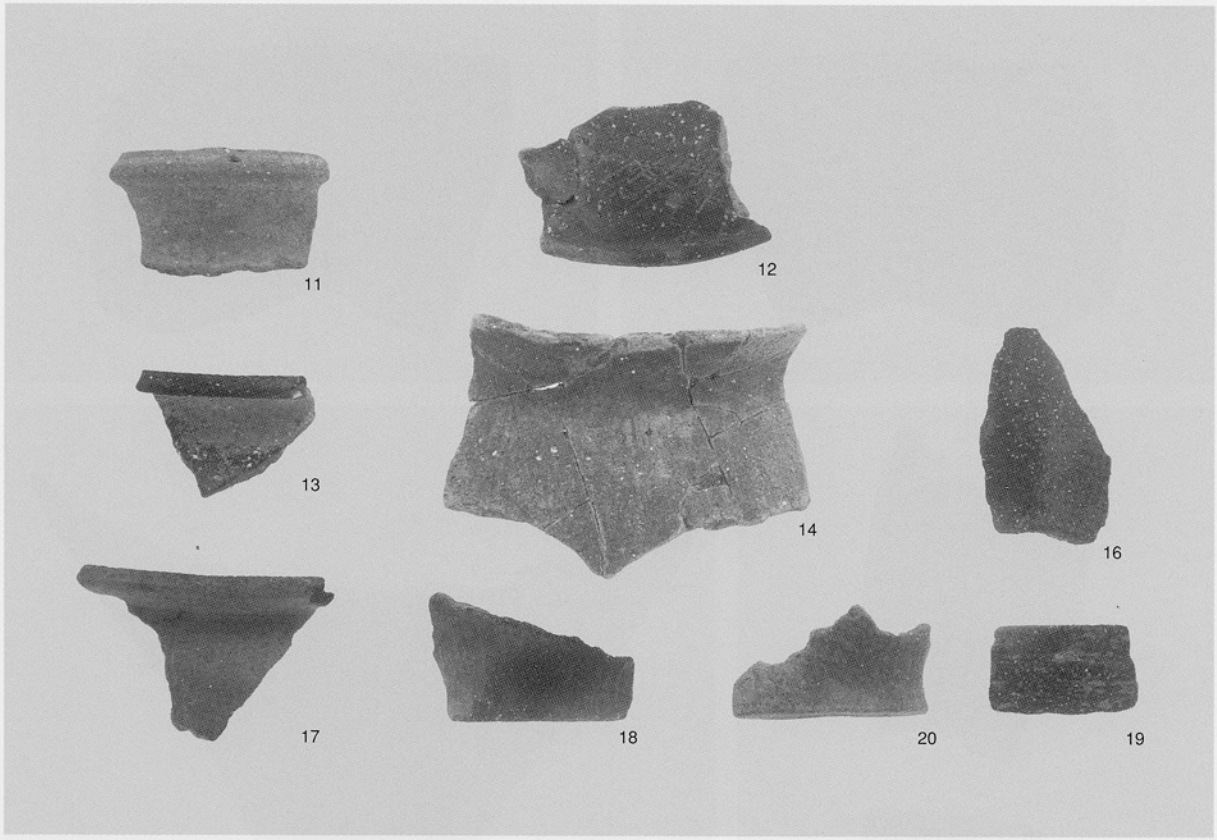
Ⅳ区Ｄ液状化現象（東より、手前Ⅳ区ＤＳＸ01）

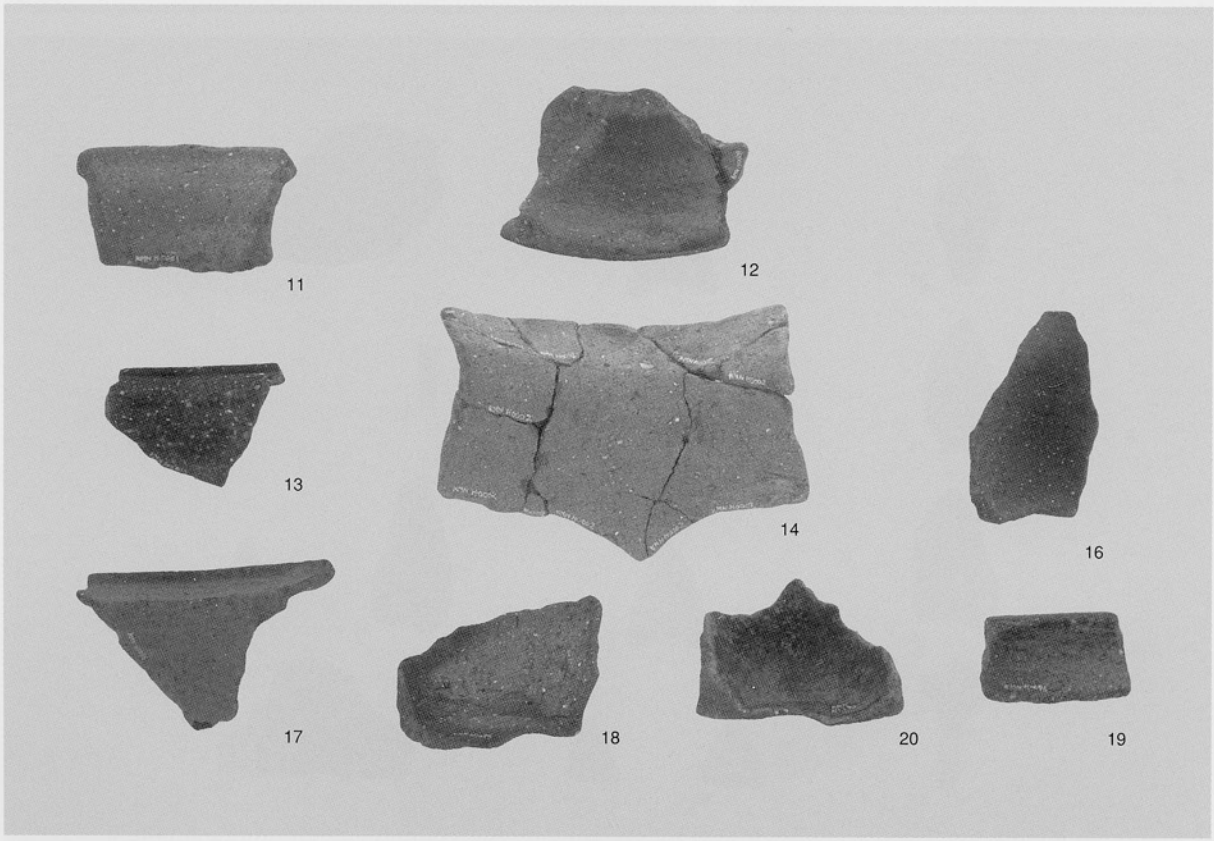
図版 22



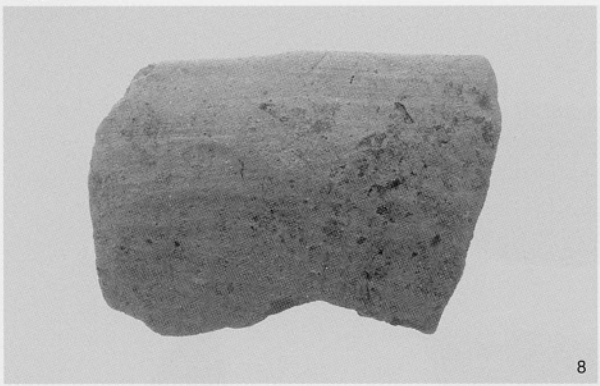


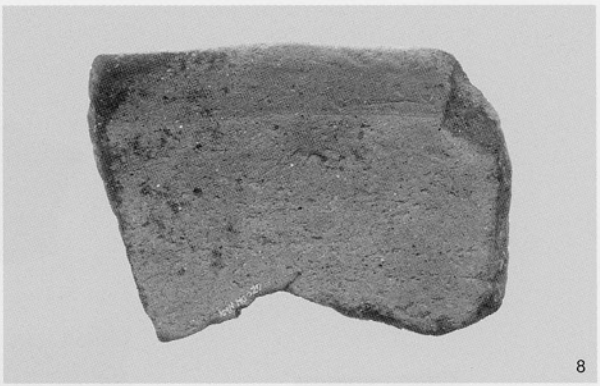
出土遺物 1

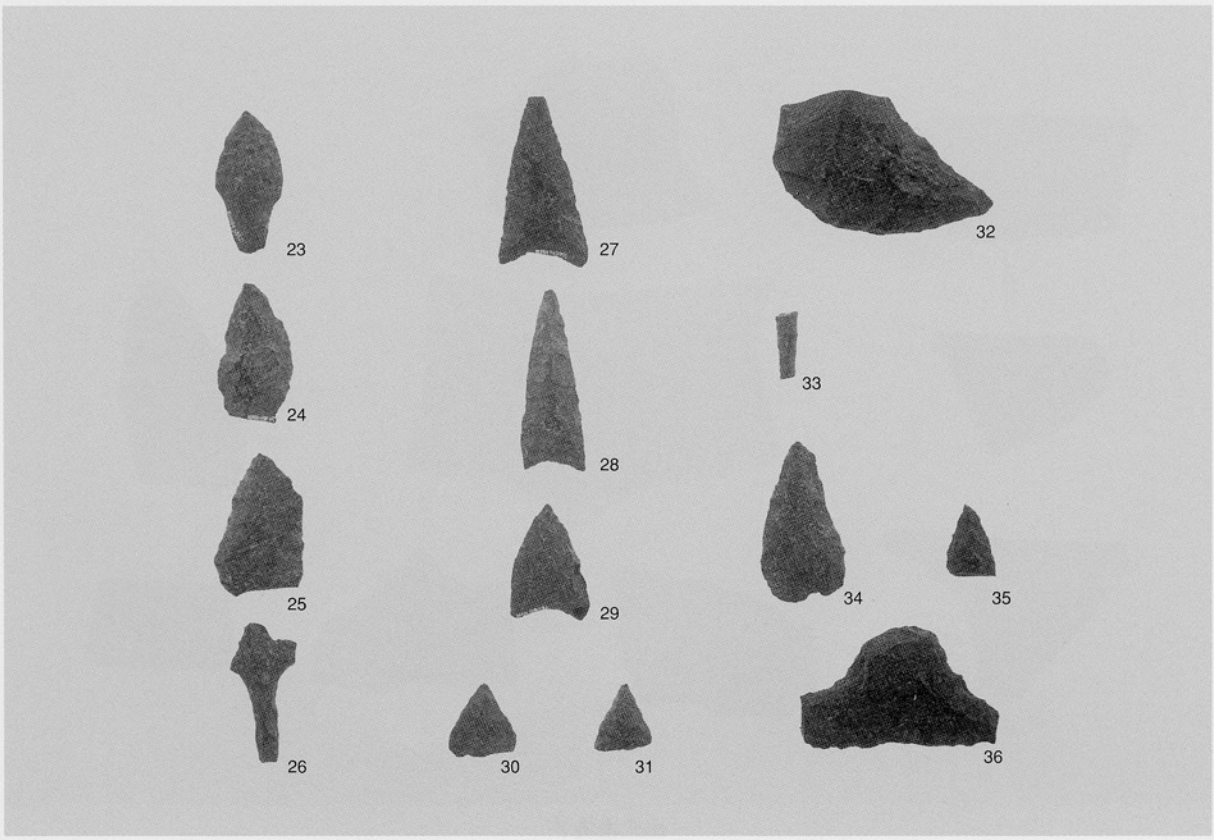




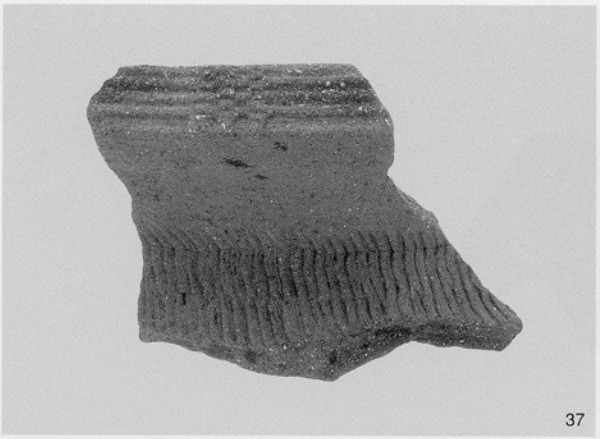
出土遺物 2

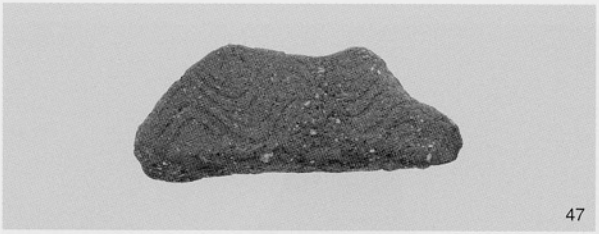


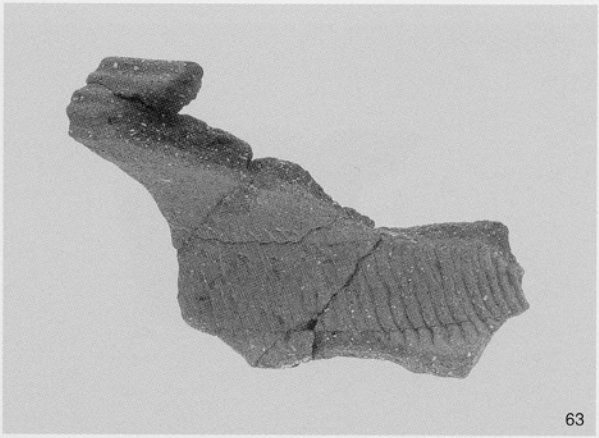


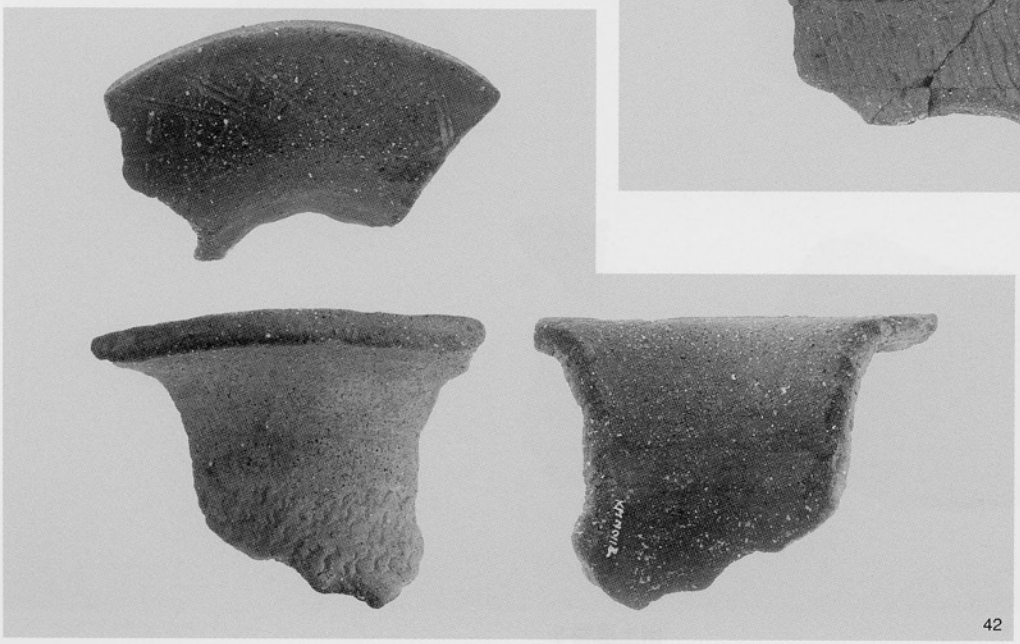


出土遺物 3

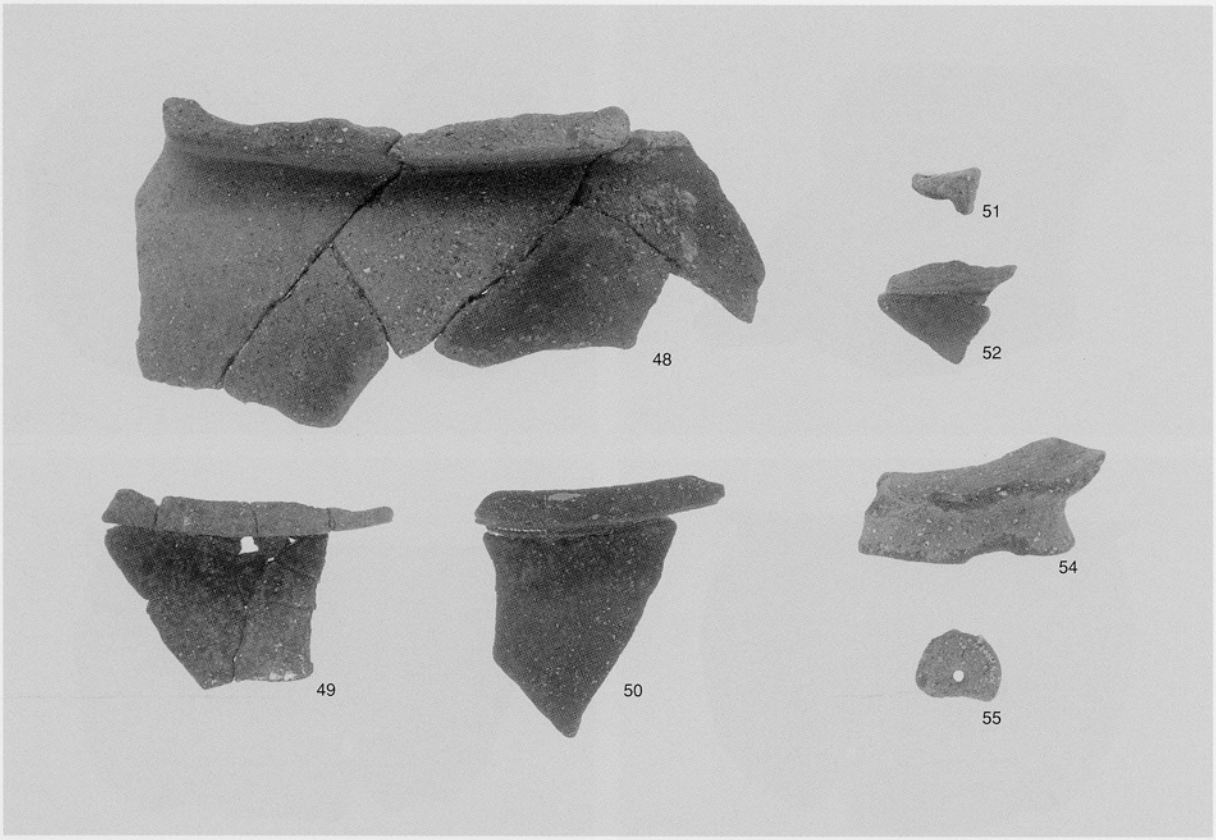


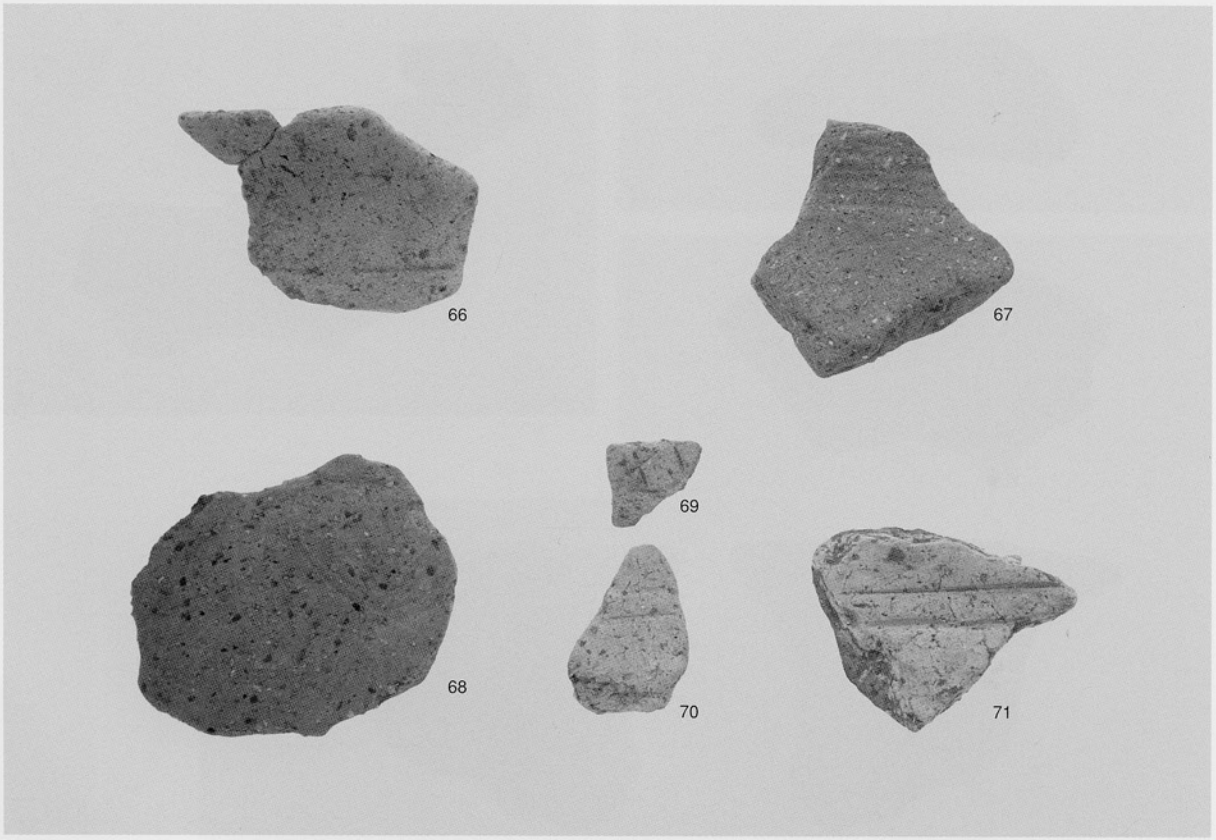




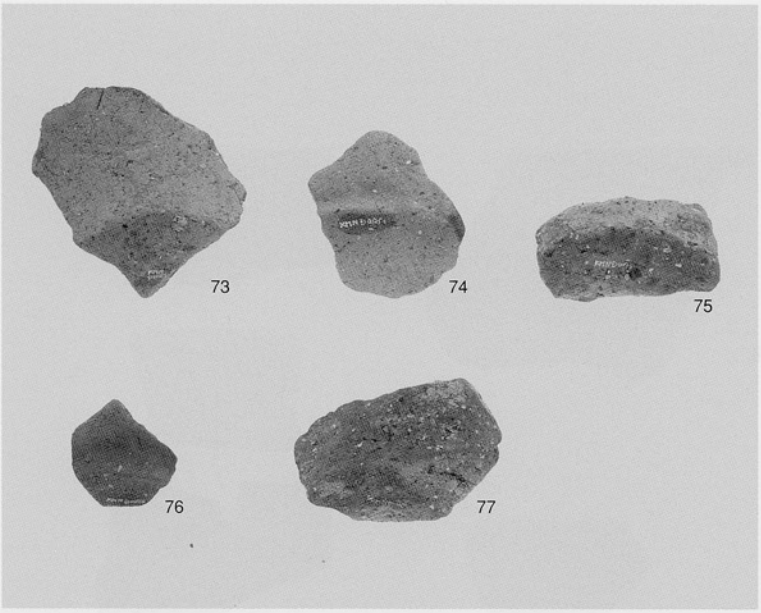


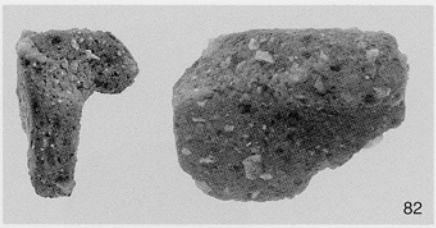
出土遺物 4

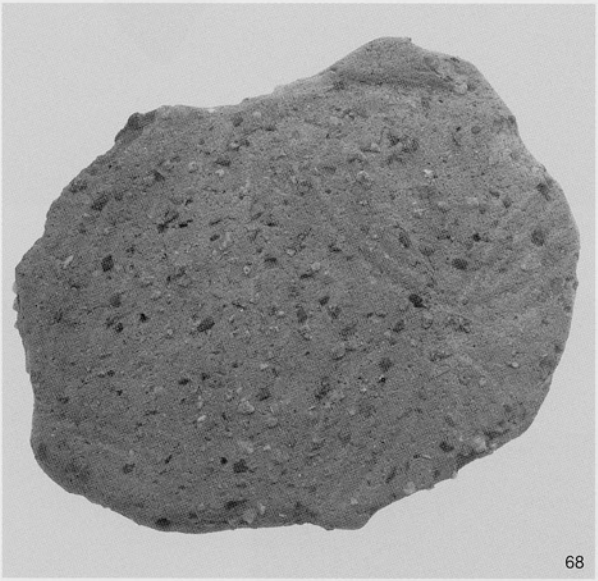


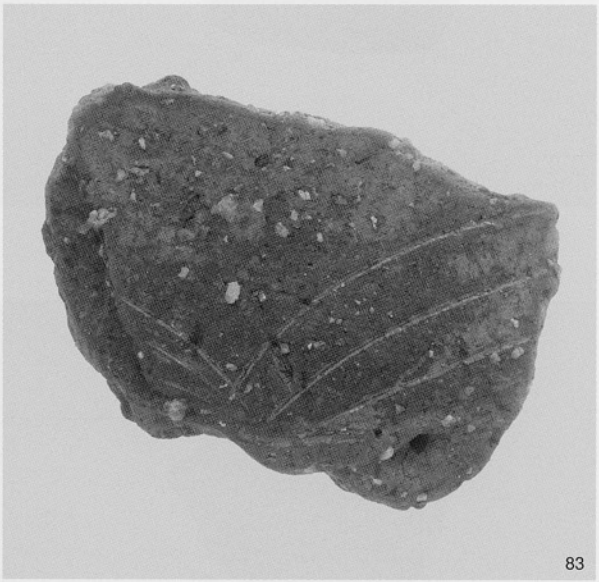


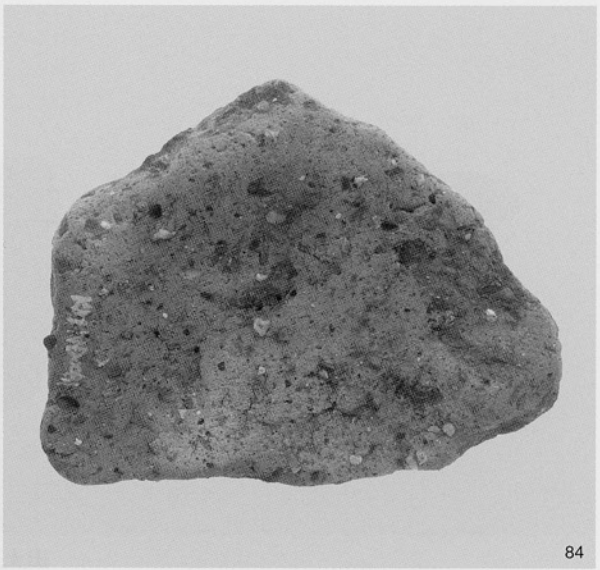
出土遺物 5



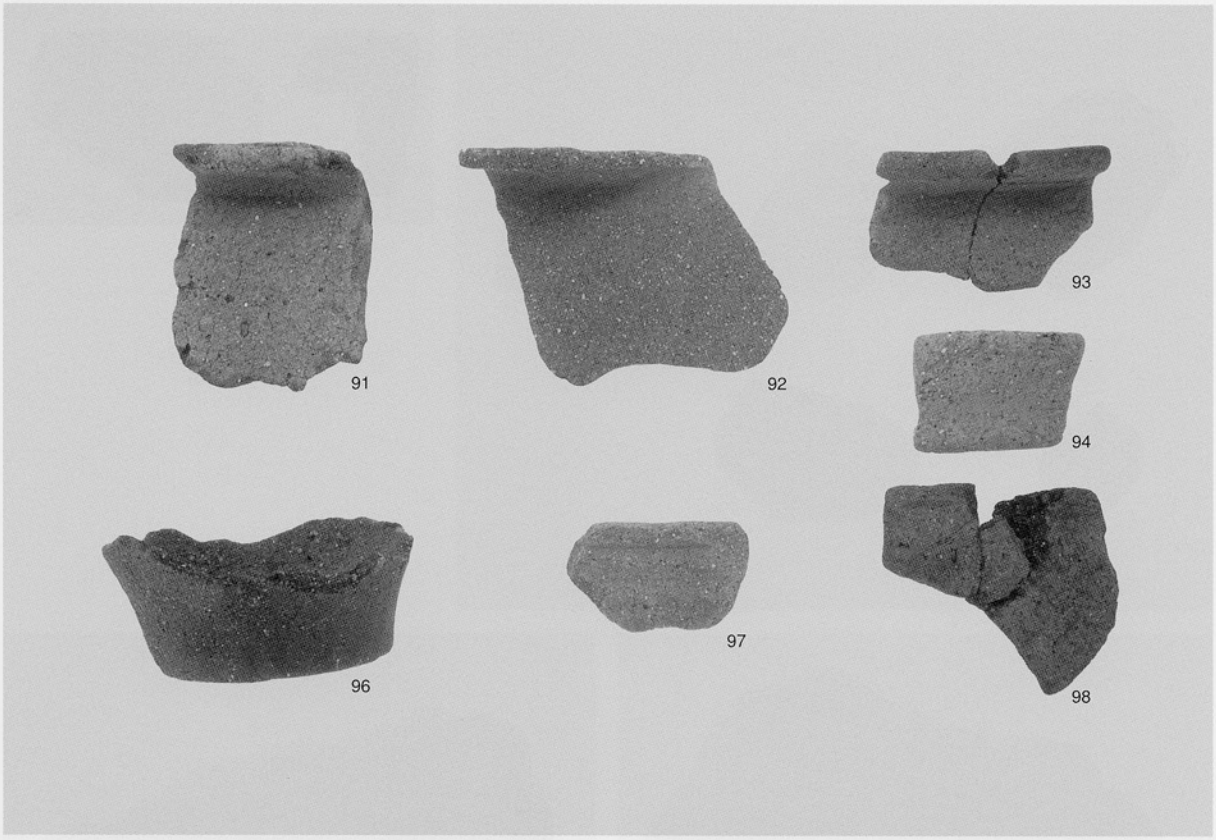




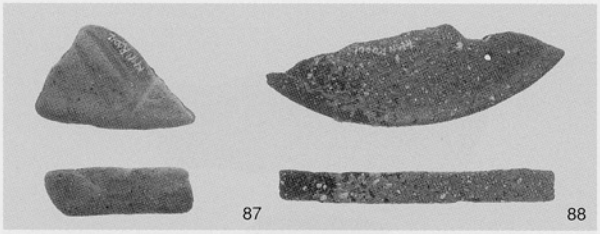


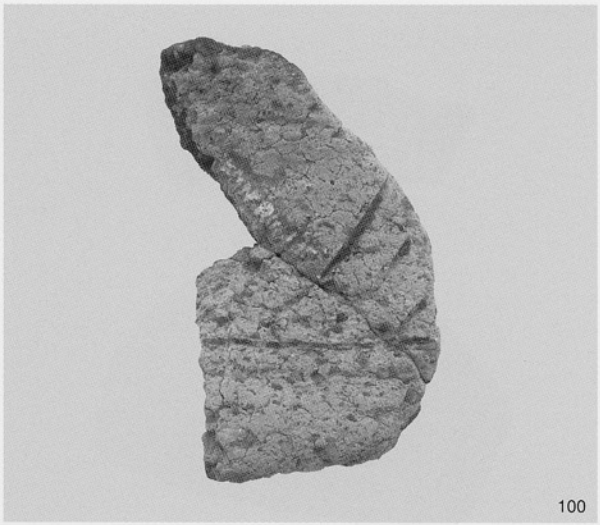


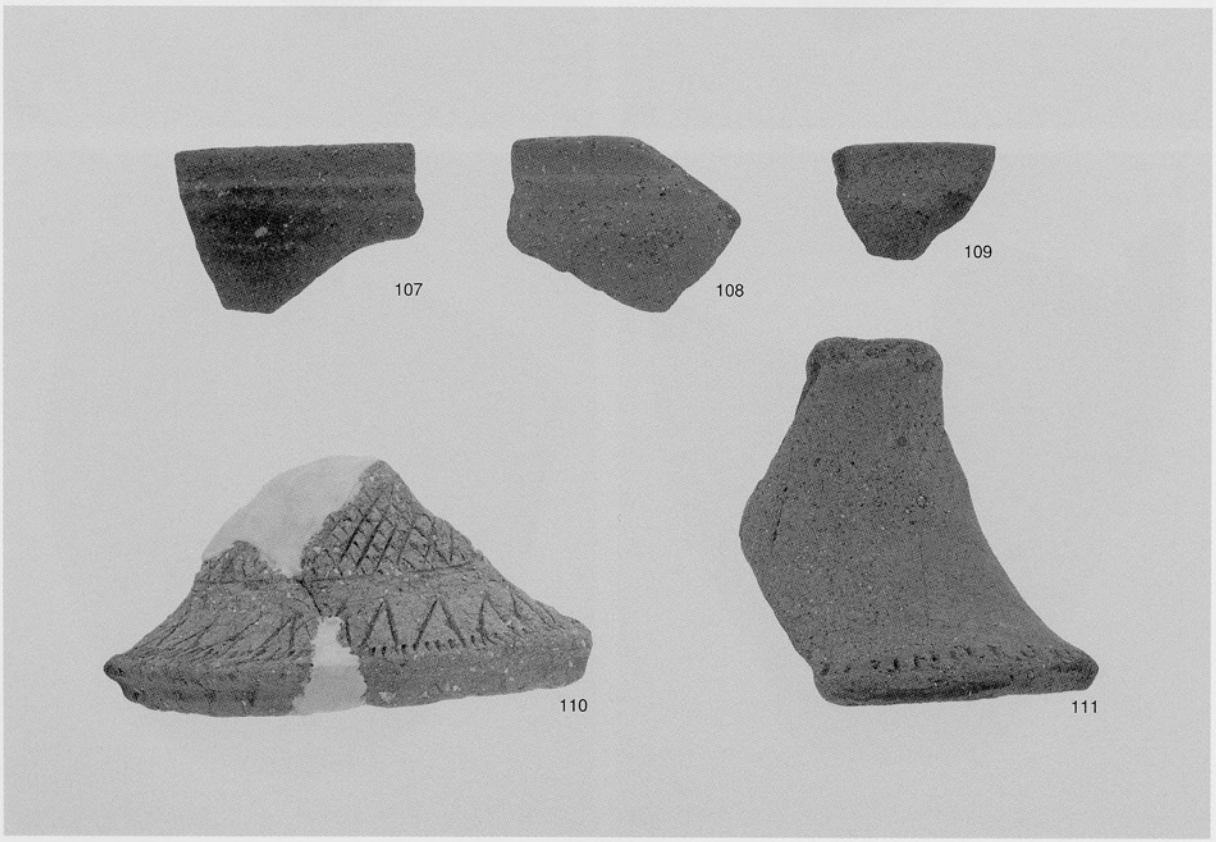
出土遺物 6



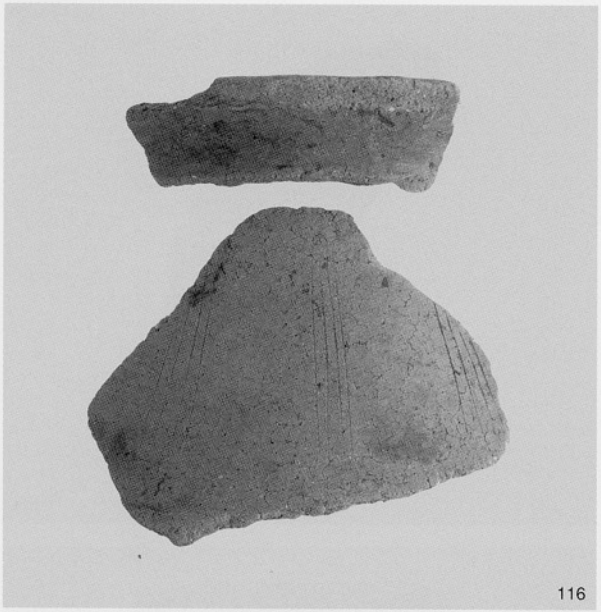
出土遺物 7

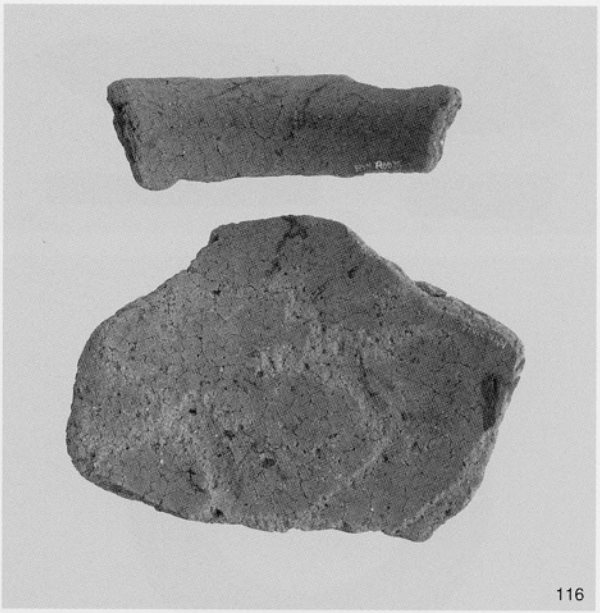


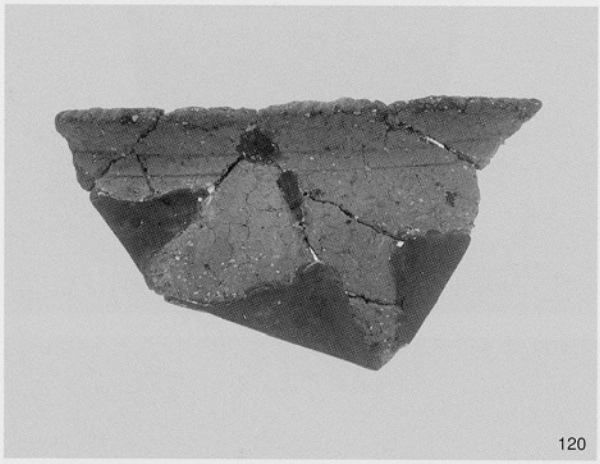


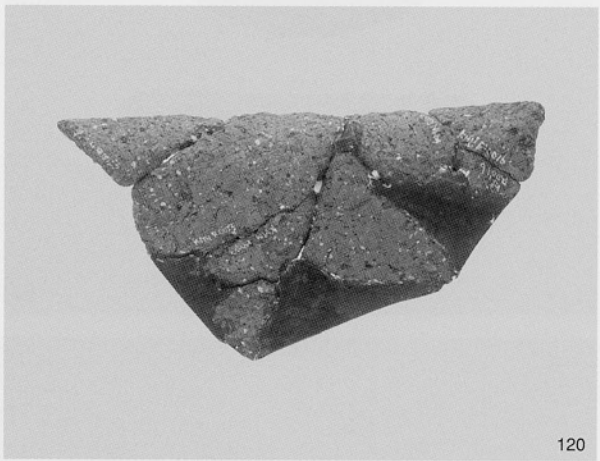


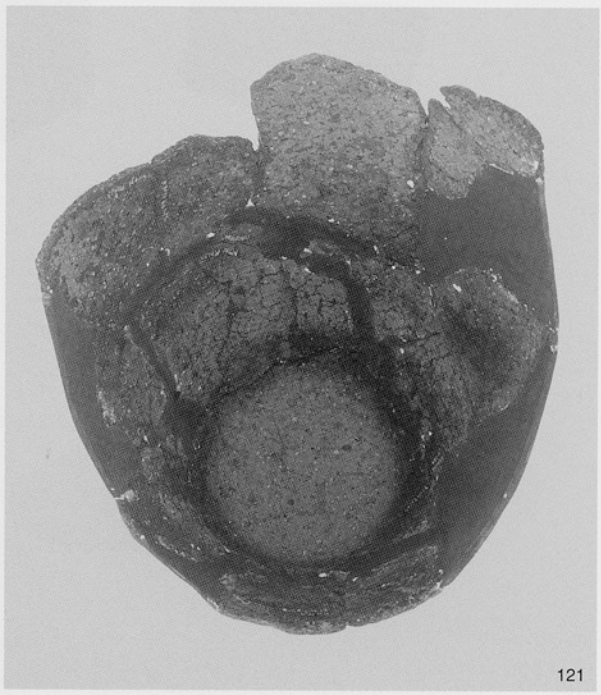
出土遺物 8



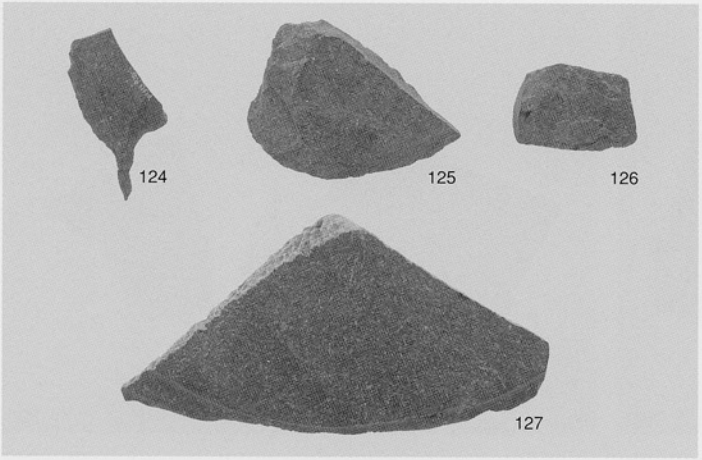


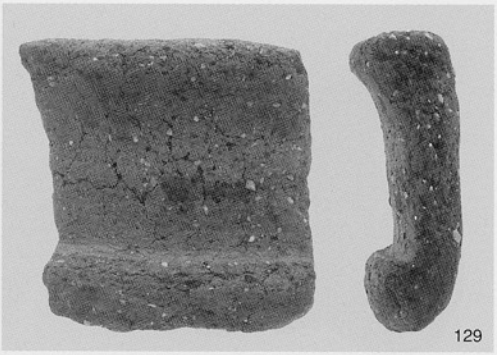


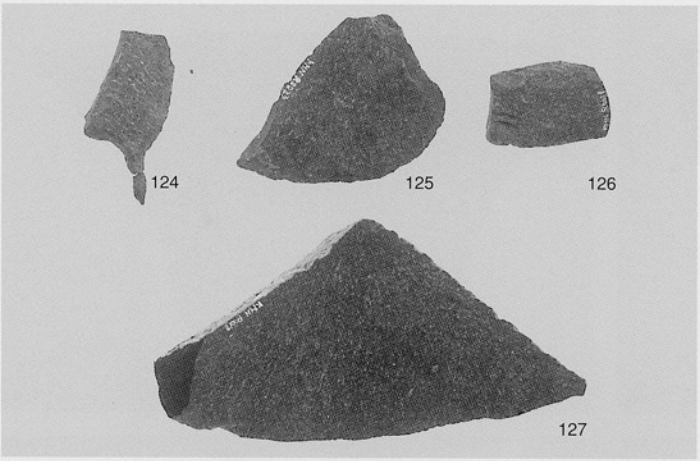




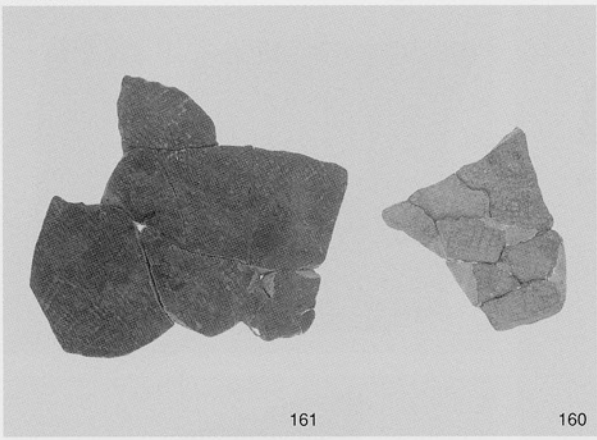
出土遺物 9

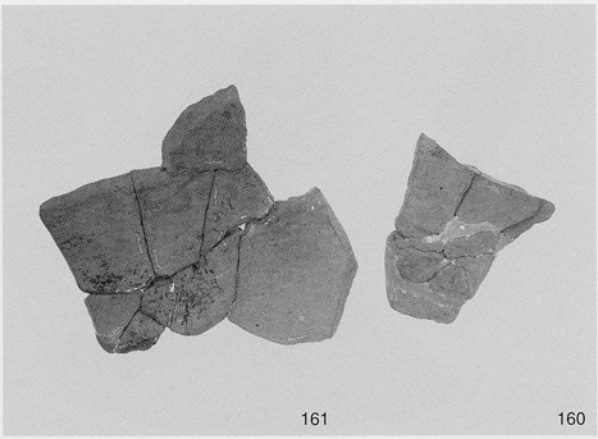






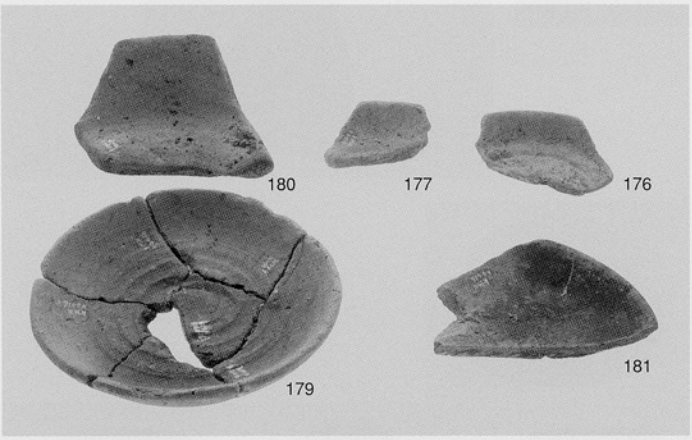
出土遺物 10

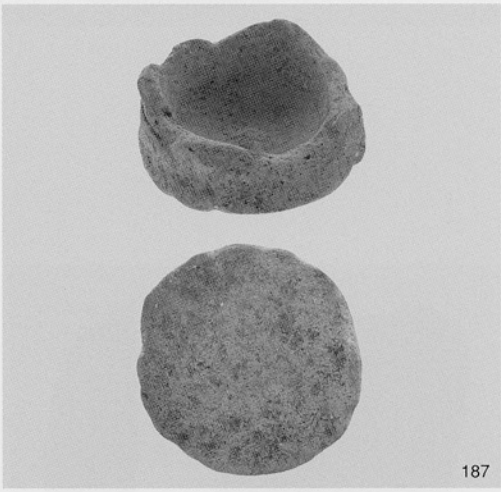

161
160

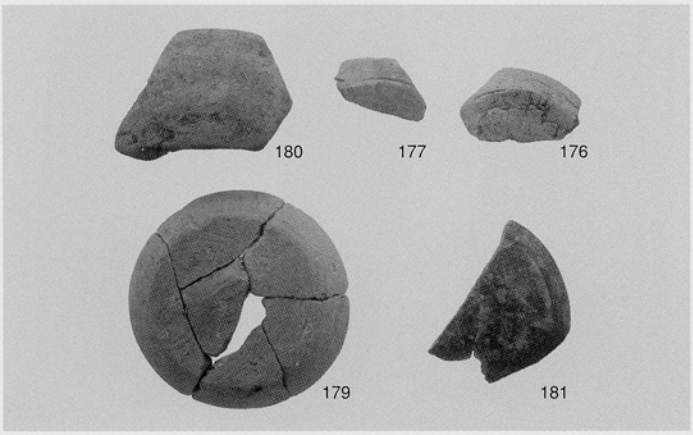

161
160

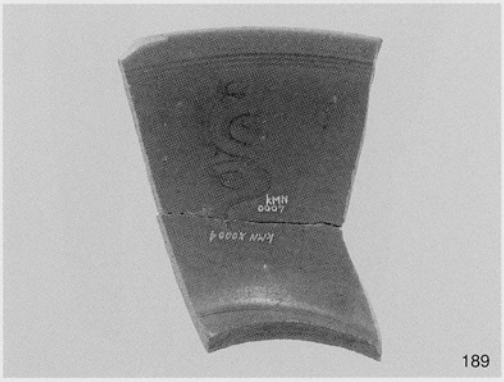
168

168

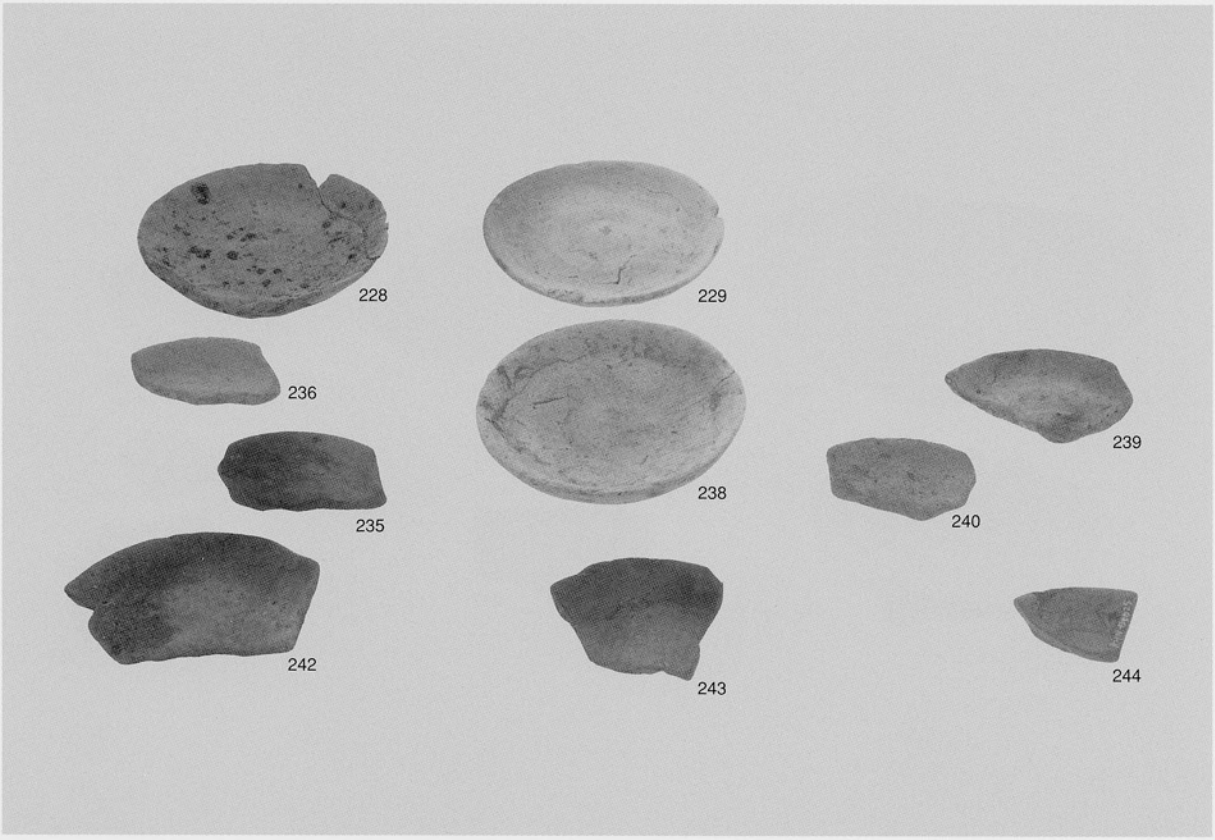

180
177
176
179
181

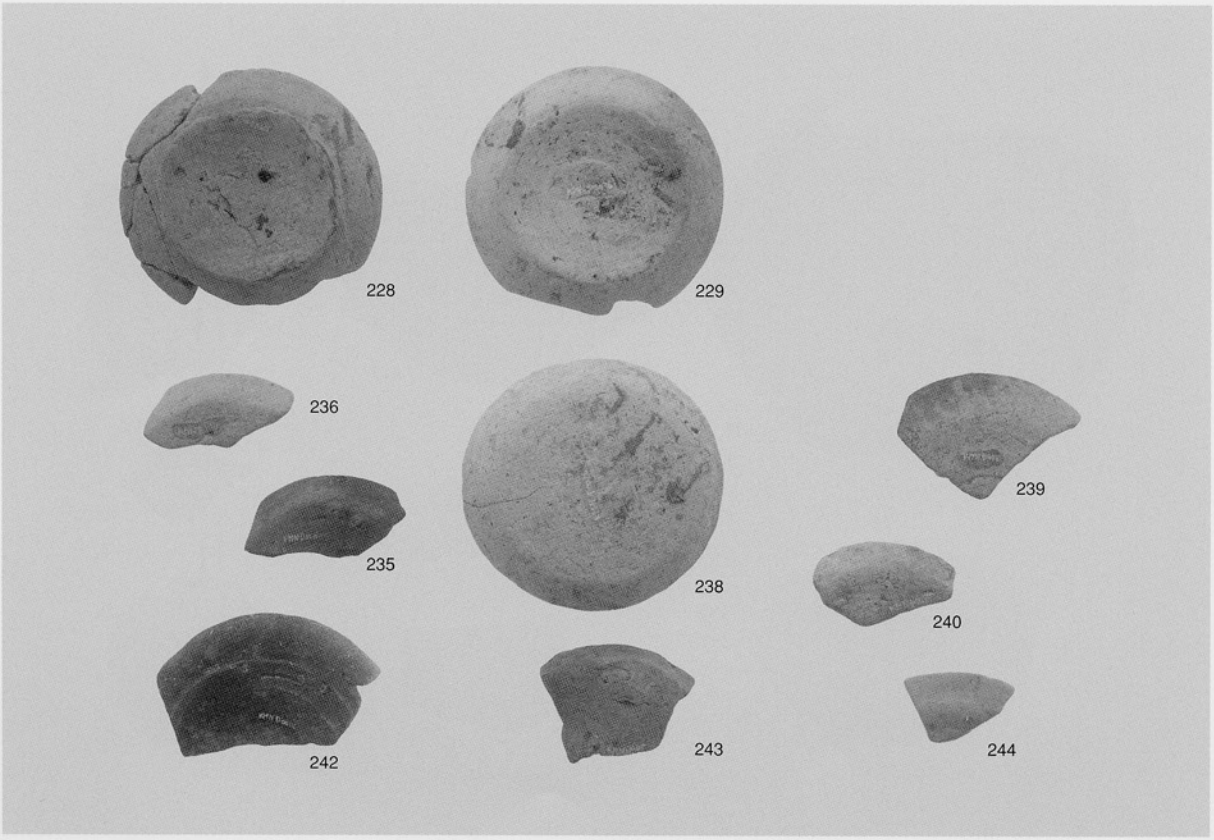

187


180
177
176
179
181

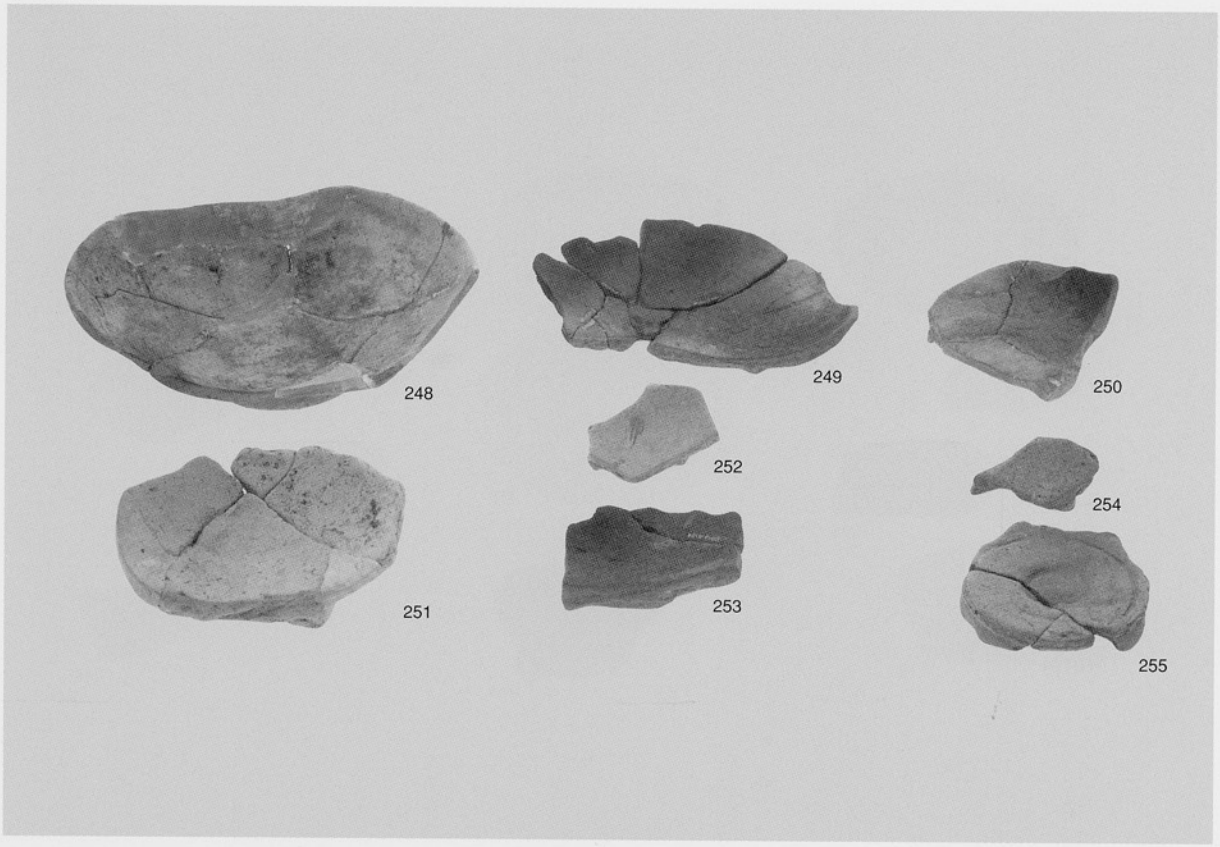

189

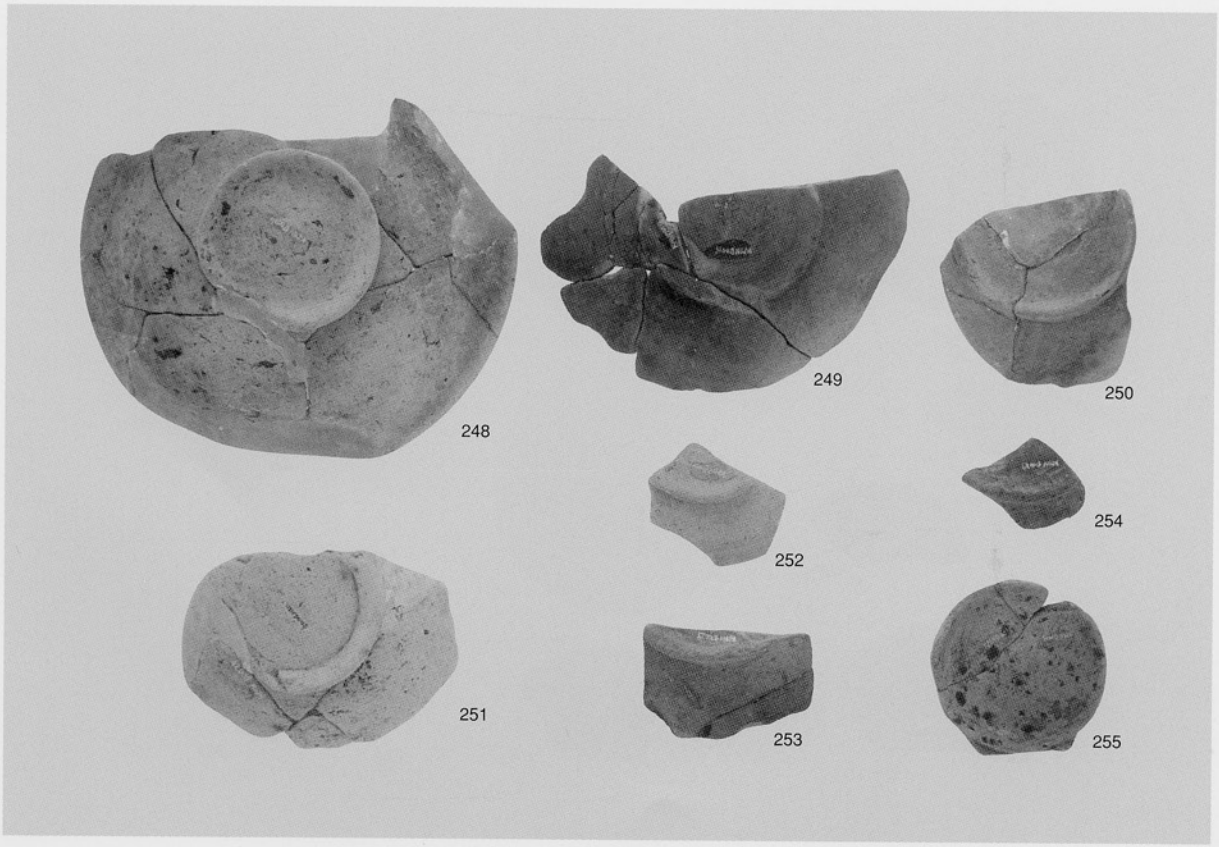
出土遺物 12


228
229
236
238
239
235
240
242
243
244

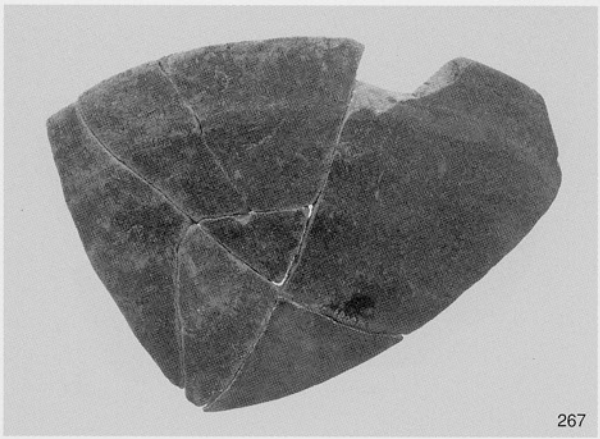

228
229
236
239
235
238
240
242
243
244

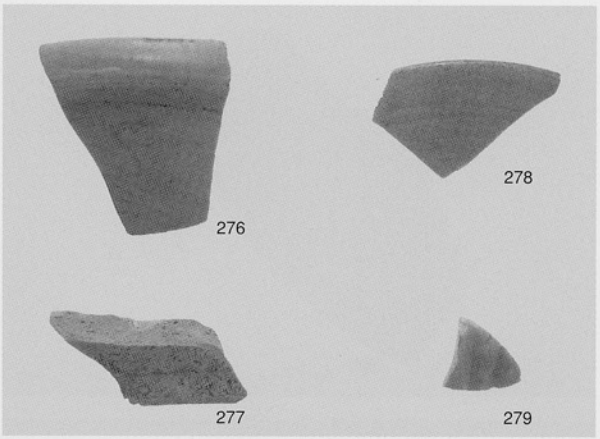
出土遺物 13

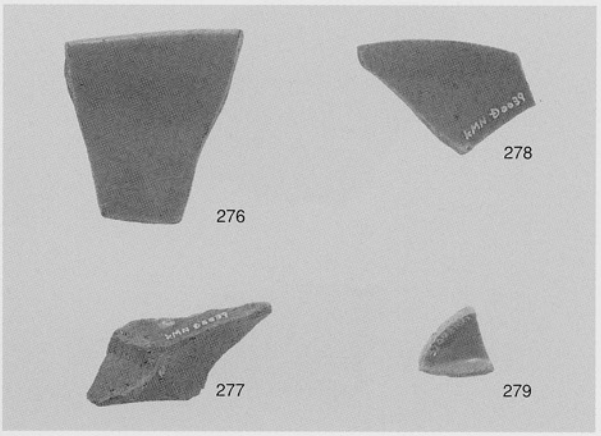




出土遺物 14

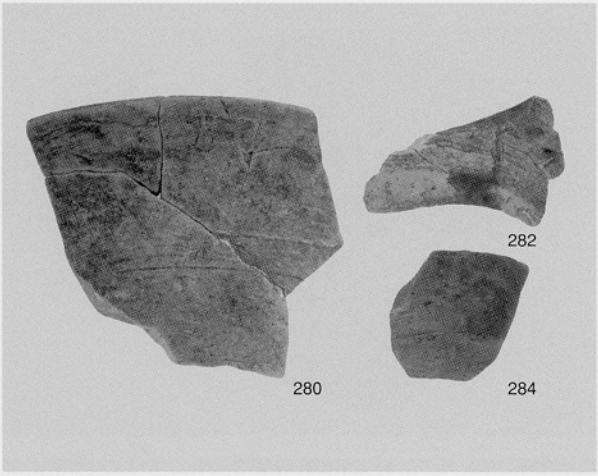


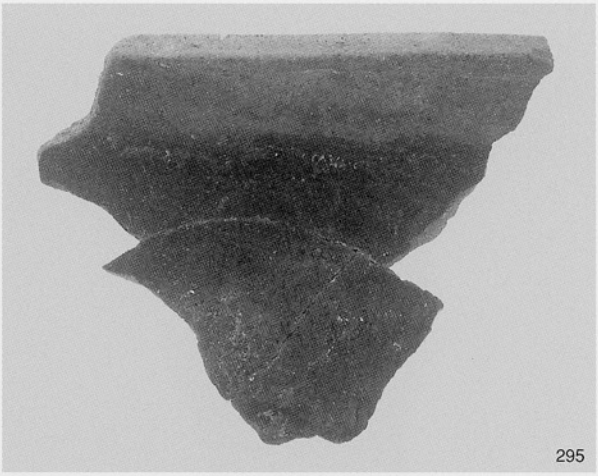


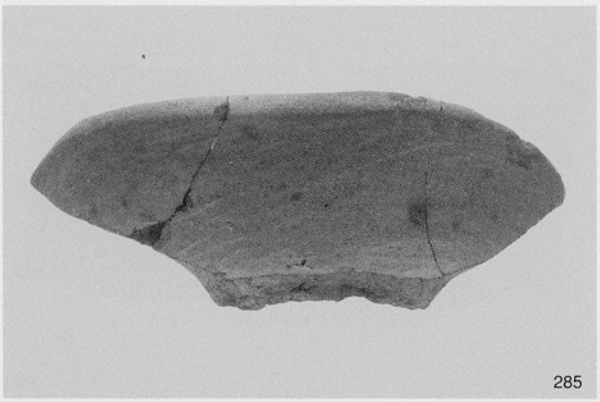


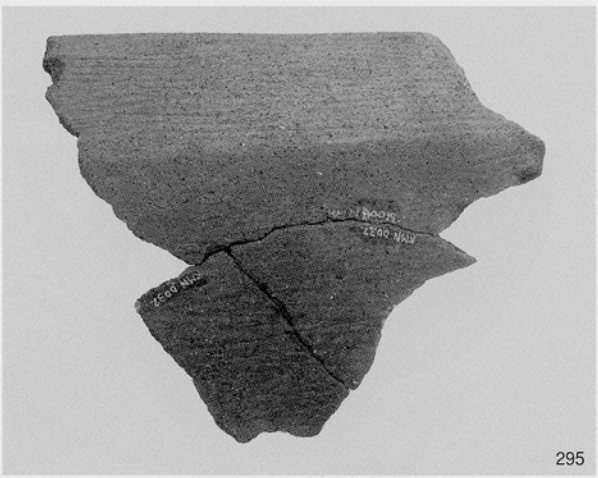
出土遺物 15

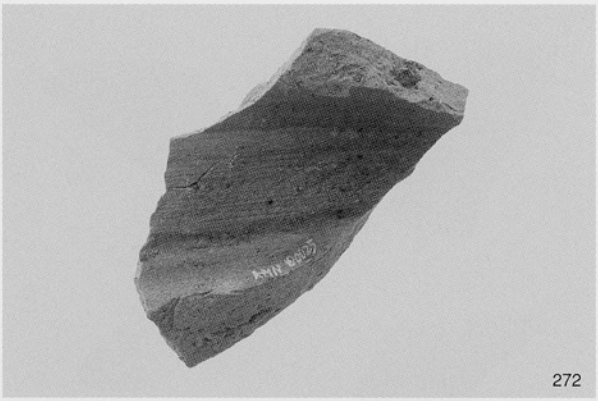
図版 36

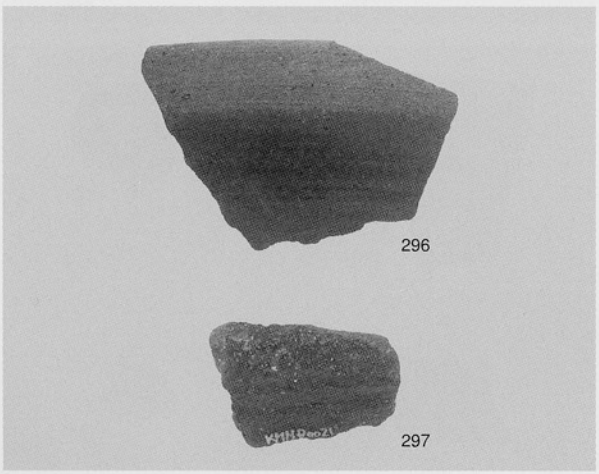




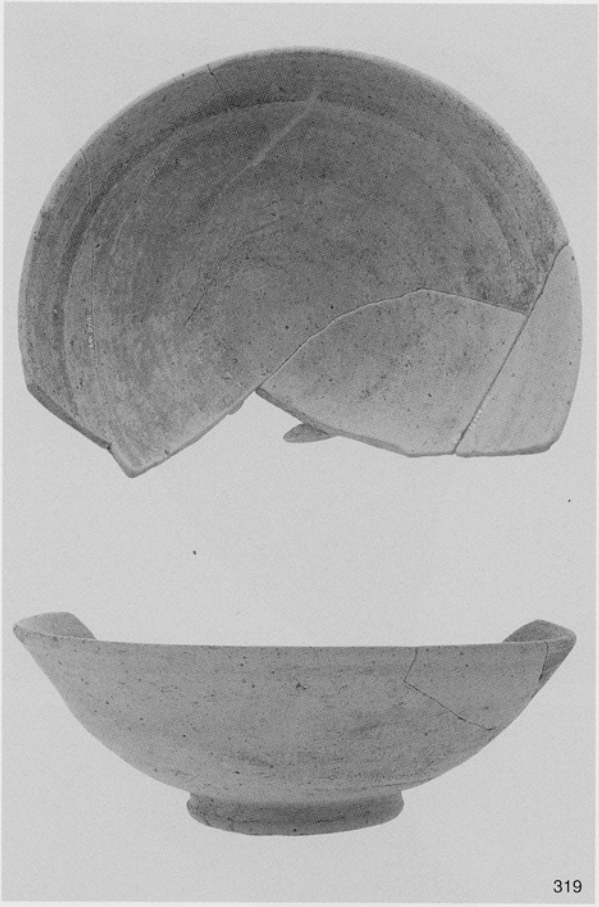


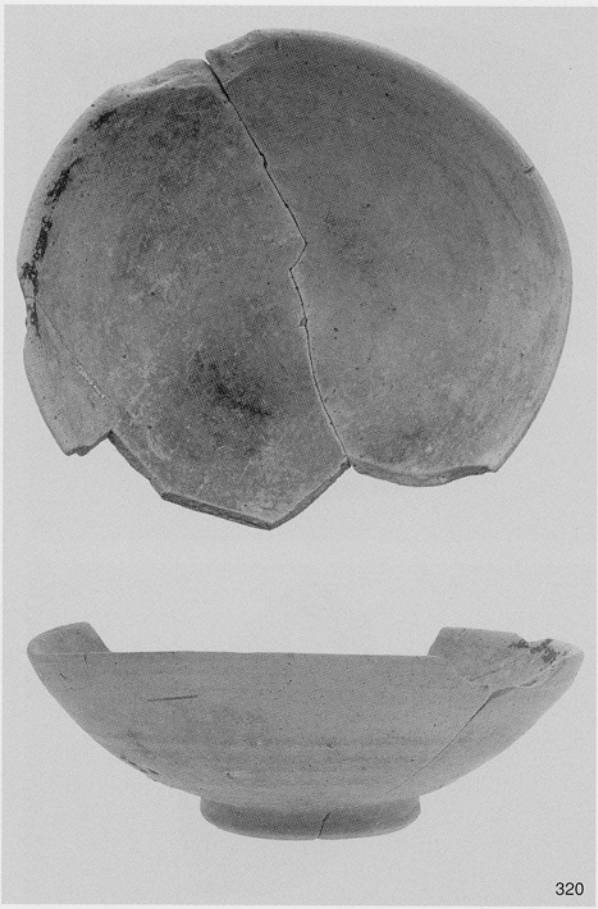






出土遺物 16


319


320

330

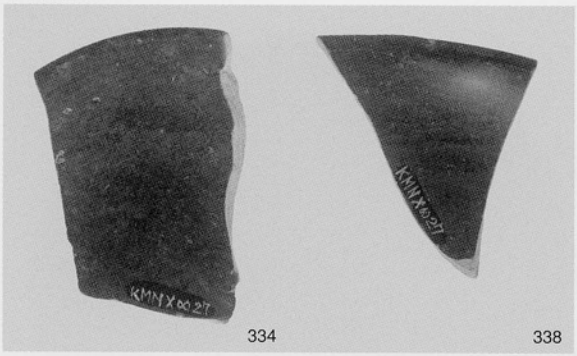
330

332

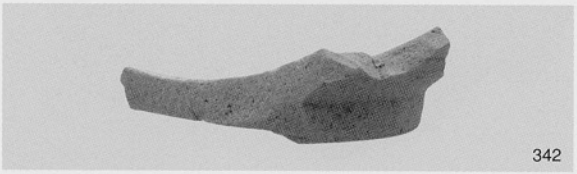
332

出土遺物 17

図版 38

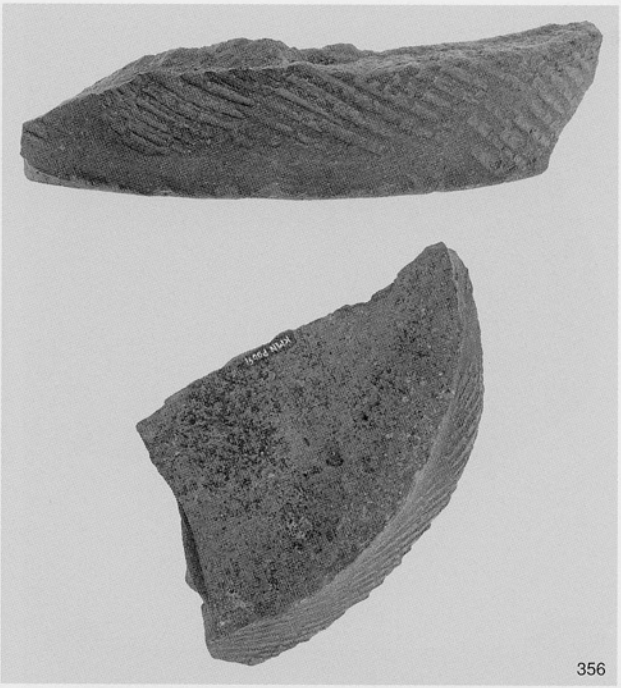


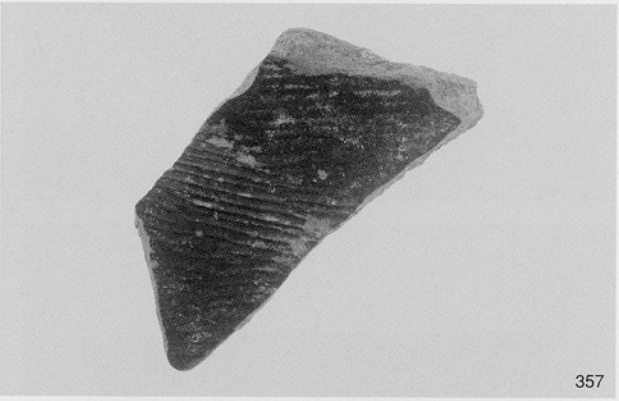
334 338


342

351

230


356


357

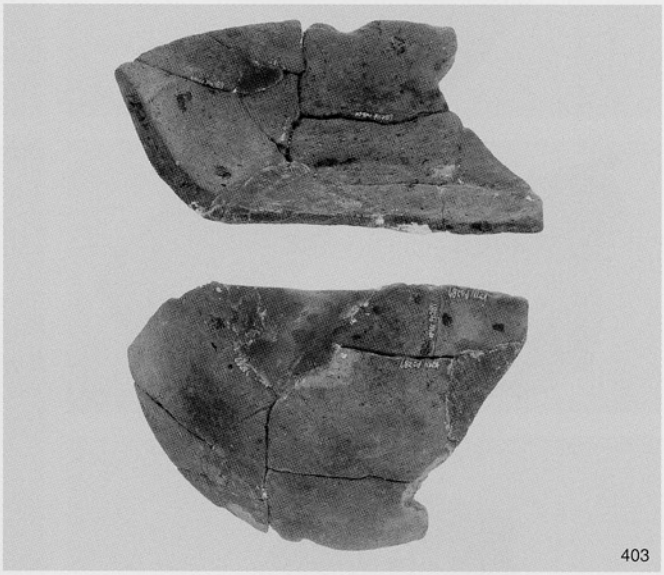
362

出土遺物 18

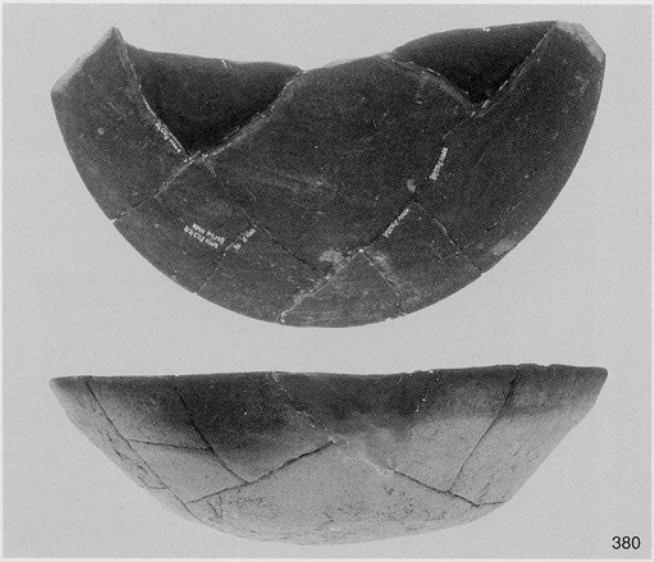
364

382

369


403

371


380

405

出土遺物 19